

ISの世界に舞い降りた 一人の男

メシキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある転生モノの一つです。強化人間となった主人公がISの世界に変化をもたらす。個人的に束さんが好きなので束さん中心のオリ主ハーレムにしようと思つてます。戦闘描写などがいまいち苦手なので飛ばしたりすることもありますが寛大な心で見守ってくださいm()m

アンチ・ヘイトタグは念のためです。できる限りみんな仲良くしてるほんわかなSSを目指しています。うp主の心はガラスのハートなので過度な批判はご遠慮願います。ですが誤字や熟語の間違いへの指摘、「面白かった」などの感想やメッセージは次への励みになるのでうれしいです。ランダム投稿ですがご容赦を…。

PS 作者の頭の中はISとACとアニメで一杯なので時々ですがアイディアを生み出す事そつちのけで脳みそを使うことがあります。なのでメツセージで読者の意見が聞けたらいいなあ…なんて思っています。そして読者の求める作品になつたらとも思っています（露骨なゴマすり）。しかし上記しているように私のハートは脆く崩れやすいので悪戯なんかはなさらないようお願いします m () m

9 / 26 タイトルを付けてみました。

10 / 12 R - 18 作品を別で投稿するとそつちの方の時系列が分かり辛いと思つたので一緒に投稿することにしました。R - 18 跡地は外伝を投稿しようと思いません。

2017 11 / 11 ほとんどの感想に返信をいたします。誹謗中傷には返信し辛いですが私の小説を読んで何か感じたのであつたのであるならば感想を書いていただくとう幸いです。次への励みにもなります。

2018 2 / 12 性転換とガールズラブの必須タグを追加しました。今後の展開によってはそのようなお話を書くことがあるかもしれません。いつになるかは分かりませんがね…。

2018 2 / 19 諸事情により59話を削除しました。数日後に改変版をアップしようと思っています。理由は…まあ、お察しください

6 2
8 0
6 1
6 8
7 / 0
↑ 9
新 作 /
1
4

h
t
t
p
s
:
/
/
s
y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
n
o
v
e
l
/
1

目次

1 話	終わりの始まり	1
始まった(非) 日常	—	16
3 話	ファーストミッション	Part
1	—	24
4 話	ファーストミッション	Part
2	—	32
5 話	ファーストミッション	Part
3	—	42
6 話	嵐の前の静けさ	—
7 話	祝!! 入学!!	—
8 話	登場!! 謎の金髪美女!?	—
9 話	日常…回?	—
83	—	83
72	—	72
61	—	61
50	—	50
42	—	42

1 0 話	俊葵VSセシリア	—
1 1 話	俊葵VS一夏 からの兄貴	—
106	—	106
1 2 話	クラス代表決定!!	—
1 3 話	前半：日常 後半：ぱーちー	—
133	—	133
1 4 話	—	—
1 5 話	俊葵…中国へ	—
1 6 話	誰が為に俊葵は戦ふ	—
1 7 話	力と対価	—
1 8 話	知らない天井	—
223	—	223
1 9 話	臆病な男と強気な黒ウサギ	—
207	—	207
195	—	195
177	—	177
161	—	161
149	—	149

20話	説得：からの即落ち	234	30話	R-18 非公式戦 後半	
21話	クラス代表戦開幕!!	244	31話	クラス内タッグマッチ	430
22話	クラス代表戦終結!!	256	32話	クラス内タッグマッチ	442
23話	日常回	268	続 30話	R-18	422
24話	海の見える丘公園にて	284	33話	R-18 のほんさんに添い	
25話	妹好きの姉に悪い人はいない。	294	寝してもらえるならなんでもできる		
26話	金の貴公子と銀の子兔	320	452		
27話	R-18 この中に変態が4人	343	34話		461
いる!!			35話	試合開始	480
28話	ご飯は大事、ハッキリ分かん	368	36話		494
ね			37話		503
29話	非公式戦 前半	379	38話	試合終了	520

4 3 話	4 2 話	クロエ	4 1 話	クロエ	4 1 話	4 0 話	んと：	3 9 話	んと：	3 9 話	んと：	3 9 話
決着		中篇	R 1 8	前篇	R 1 8		後篇	R 1 8	中篇	R 1 8	前篇	R 1 8
			わがまま束と謙虚な		わがまま束と謙虚な			俺と本音とクーちゃ		俺と本音とクーちゃ		俺と本音とクーちゃ
612	601	593	583	572	566	551						

5 8 話	5 7 話	5 6 話	5 5 話	5 3 話	5 2 話	5 1 話	5 0 話	4 9 話	4 8 話	4 6 話	4 5 話	4 4 話
				R 1 8	R 1 8	R 1 8						
719	710	704	695	688	676	670	660	652	642	634	627	619

69話	68話	67話	を する 準備 はOK?	り は? 部屋 の隅 でガ タガ タ震 えて 命乞 い	66話	65話	64話	63話	62話	61話	60話	59話
				小 便は 済ま せた か? 神様 へお 祈								R-18 (本番 無し)
831	827	818	810	800	788	782	771	762	752	730		

80話	79話	78話	77話	76話	75話	74話	73話	72話	71話	70話	
			R-18	R-18	R-18		俊 葵と クロ エの 初デ ート		71 ・5 話		
966	956	942	930	922	911	900	892	880	867	854	839

前篇

9 2 話	9 1 話	9 0 話	8 9 話	8 8 話	番外 バレン タイン	8 7 話	8 6 話	8 5 話	8 4 話	8 3 話	8 2 話	8 1 話
	熱波 戦線	夏祭 り2	夏祭 り1	R 1 8				俊 葵、 死 す				

11631150113211111087106810591049104210241015 998 978

9 8 話	9 7 話	9 6 話	9 5 話	9 4 話	9 3 話
	R 1 8	R 1 8	R 1 8		

125812341224120611891174

1話 終わりの始まり

白い世界：目の前に広がる白一色の世界。例えるなら雲の上といったところか。誰もいないみたいだしここは天国かな、もしそうだとしたらつまらないな。せめて美しい天女の一人や二人くらいいてくれたって…

「客人とは珍しいの」
いた

「ここにいるということとは生前に徳の高い行いをしたか理不尽な死を迎えたということじゃな」

おっさんが…

「おっさんとは失礼じゃのう。こう見えても若手じゃぞ？」

おっさんというよりおじいさんと言った方が正しい気がする目の前にいる人(?)は
どうやら若手らしい。ひげを蓄えて魔法使いみたいな風貌を醸し出しているのに若手
とな？

「神様界限ではまだまだ若手じゃよ。だからできて間もない地球のような未熟な星を任されているのじゃ。そもそも宇宙は13個ある。その宇宙一つ一つに最高神がいて次に銀河を統括する銀河神、知的生命体がいる星を収める神、平社員と言ったところかのお。最後に小間使いの天使が少しいるばかりじゃよ。お前たち人間が想像しているような唯一絶対神なんておらぬよ」

神を信仰してる人が聞いたら泣きそうだな…それに神様っぽい格好してるからなおさら神って感じがする。

「神にとって姿も口調も関係ないのじゃ。お前の神様象が今のわしを作っておる」

へえ…俺の中で神様は白髭を蓄えてローブをひつかぶってる某指輪物語の白の魔法使いなのか。

「話が脱線してしまつたな。ええと…そうじゃ。おぬしを生き返らせてやろう。」

は？…生き返らせる？俺を？訳が分からん。

「正確には転生じゃけど新しい生を与えるというわけじゃ。嫌か？嫌なら天国へ案内しよう。あそこは良いところじゃぞ。美味しいものは食い放題、美人な天女は抱き放題、そして遊び放題ときたもんじゃ。大概は天国へ行くのじゃがどうするかのう？」

転生か…転生する世界は選べるのか？

「勿論じゃよ。わしをだれと思つておる？下つ端とはいえ神じゃぞ？おぬしの望む世界

の一つくらい簡単に作れるわ。転生するのか？」

ああ、俺は転生したい。転生する世界も目星がついてる。俺の一番好きな小説で何度も読み返した。あの世界に俺は行きたい。

「そうか、では転生させよう。他に要望はあるか？」

要望？

「例えば身体能力が人並み以上とか天才的な頭脳をもっているとかいろいろあるぞ」

じゃあ…生身でもかなり戦える程度の肉体、つまり強化人間にしてくれ。あと兵器の設計図が欲しい、これに関しては小型端末にでも持たせてくれたらうれしい。最後に……とある十人の能力が欲しい。

「ふむ…受け賜わった。では目を閉じて深呼吸をするのじゃ。意識がだんだん遠くなつて眠くなる。寝たらおぬしは新しい世界じゃ」

その言葉を最後に俺の意識は深いところへ落ちていった。

……

…

目が覚めたらまた白に囲まれていた。目の前に広がる訳の分からないガラクタや何かのパーツ。ここは研究所か？

近くのドアを開けて外に出ると薄暗い廊下が奥まで続いている。壁はポロポロで俺

が居た部屋以外は廃墟同然だ。

「……h…hel…p」

「ひい!!」

うめき声がした方を見ると軍人らしき人が倒れていた。マガジンや手榴弾を装備したチヨツキが挟られており内臓が飛び出ている。誰が見ても助かりそうにない。

「あ、えつと、日本語…だからその」

「オレ、ニホンゴ……デキル」

俺が日本人なのを察しておぼつかない日本語で状況を説明してくれた。

彼曰く、この研究所を国籍不明のISが襲撃して施設を破壊したらしい。それで迎撃に駆り出された彼らが応戦。しかし生身の人間でISを相手にできる訳もなく全滅した。

「アソコ…ジユウ…please shoot me……タスケテ」

「………」

指さした方に落ちてる銃を手に取り彼の頭に照準を合わせる。すると彼は小さく笑い俺に撃たれた。

「うっ…おえ…おえ!!」

人を撃った嫌悪感と罪悪感から胃液が逆流した。兵士には悪いと思ったがこの気持

ち悪さは我慢できない。

「水…：食料を探さなきゃ」

嘔吐して少し冷静になった俺は、今自分が置かれている状況を確認するために歩き出し

た。まだいるかもしれない襲撃者に怯えながら…。

…

…

彼と別れてから慎重に行動している。適当なドアを見つけては中に敵が居ないかしっかりと確認してから開ける。昔やっていたメタルギアのスニーキングスキルがこんなところで役に立つなんて。

英語圏の施設じゃないのか扉の上を書いてある部屋の説明は英語ではない。だから手当たり次第に開けている。

「ここは…：武器庫だな。使えそうなのは残ってるかな…」

倒れた棚をひっくり返し使えそうな武器を漁る。AK—47、FA—MAS、Izh mash—Saigal2、M1911、PPsh、などなど…：国籍も銃の種類もばらばらん。取り敢えず使い勝手の良いM4 patriot、M1911、Ithaca—M37、手榴弾を持てるだけ持って部屋を出た。

ミニガンやロケットランチャーもあつたが食料も持たなきやいけないから仕方ないね。

……

…

しばらく散策してみたが生き残りは俺しかいなかった。それとこの研究所が海に浮かぶ孤島にあるということが分かった。

食料や水はたっぷりあるしサバイバルの知識も人一倍持っているので数日は何とかなると思うがそれ以降はどうしよう。考えるだけでお先真つ暗…神様…：…どうしてこんな島に俺を転生したんですか。

……

…

四日も無人島にいらるとこの島の全容が見えてくる。施設内にあつた地図からこの島は某海洋に浮かぶ無人島であることが分かった。有人島も数十キロ圏内にあるので日用品の補充には困っていないかつたろう。

施設の管理人が異変に気付いて人を送ってくれたら一発で脱出できるんだらうけどそんな望みはない。研究施設を調べて分かったのだが人体実験をしていたようだ。機密保持の為にミサイルが振って来るならともかく救援なんて来ない。

超能力もようやく手に馴染んできたところなので長距離を飛んで脱出なんて出来ない。やっぱりあと数週間はこの無人島で修行しなきゃだな。

……

幸いなことにここへは本当に誰も来なかった。漁船くらい通りかかるかと思っただけ。そんな事も無かった。だからこそ修行に専念できたのは嬉しい。

いつものように海岸で超能力の修行をしていると水平線から黒い影が飛んできた。ISだつて事は分かるけど遠いので誰のISかまでは判別できない。

隠れようか迷っていると接近してくるISがいきなり武装を展開してミサイルを撃ってきた。それなりに距離もあつたし強化された俺の動体視力だと十分に避けきれたが、近接信管の可能性もあるし全身に防御用の護符で守りを固める。

防御しておいて正解だった。

「ふう……やっぱ攻撃されないとどの程度で防御したら良いか分からないんだよね。これはこれで幸い……いや、IS相手に戦えるかなあ」

「どうやったか分からないけど次はないからね」

目の前まで来たISは左手に魔法少女ステッキ（？）のような物を持っている。そのステッキに合わせたカスタマイズがしてあるのか細身のフォルムにフリル付きのス

カートを穿いていた。

機械のISにスカートつてのはなかなかどうして…これはこれで…。

「死ね♪」

ステッキを俺に向けて何かスイッチを押す。念のために胸の前で腕をクロスさせガードするが吹っ飛ばされてしまった。

「なんで死なないのさ!!」

もう一度ステッキを振ってきたので今度はコチラから衝撃波をぶつけて相殺する。そして相手が怯んでいる隙に組み付いて衝撃波で吹っ飛ばす。

そして畳みかけるように指パッチン斬撃を飛ばすが避けられてしまった。なるほど、勘が鋭い。

「避けた…私が!?しかし避けていなければやられていた」

「まだまだ!!」

「こいつ…調子に乗るな!!」

近接用のナイフで攻撃してきたので腕を硬化させ受け止める。そして空いた手で空気を圧縮させ思い切り顔面へブチ当てた。

「ぐう…」

よろめいた瞬間を見逃さず顎に掌底を当て気絶させた。絶対防御があっても衝撃波

は通るんだよね。

メカニカルな鎧が光の粒子に変化しパイロットが現れた。

「篠ノ之…束」

世界一の天才科学者が…。

…

…

「お姫様の御目覚めだ。キスは必要なかったみたいだね」

目が覚めると岩肌がむき出しの洞窟に寝ていた。厚手のマットが引いてあるが寝心地はあまりよろしくない。

起き上がろうとしたが手に力が入らないしフラフラする。

「まだ起き上がっちゃダメだよ。少し強めに殴っちゃったからね」

「くっ…私をどうするつもり」

「どうもしないよ。折角の客人だし持て成そうかなって」

「お前は誰だ」

「俺は松崎俊葵（まつさきとしき）、そういうあなたは篠ノ之束博士」

「お前なんか私の名前を呼ばれたく…あう」

まだ頭がフラフラして気分が悪い。手を地面に付きながら立ち上がろうとするが無

理やり布団に寝かされた。

「こんな事を言うのはアレですけど俺はあなたの敵じゃありません。むしろ貴方の味方です」

「気絶させといて?」

「それは篠ノ之博士がミサイルを撃ってくるからです。普通の人なら死んでいましたよ」

「君は普通じゃないみたいだね。……どこから来たの?」

少し迷った様子だけど話してくれた。異世界から来た、神様に蘇らせてもらった、超能力者ですごく強い、等々…。彼は真剣に話してくれたので私も真剣に聞いた。私が他人の話をおんなに真剣に聞くのは初めてだ。

最後まで話し終わると恐る恐る、再度口を開いた。

「あの…信じてもらえました?」

「君…ううん、俊くん……」

「と、俊くん!」

「俊くんは素晴らしいよ!!ねえ、もっと超能力を見せて!!」

凄い、本物の超能力者、異世界人に会えるなんて。漫画や小説の産物に会えるなんて事はまずない。東さんは幸運だなあ。

「じゃあこんなのかどうですか」

砂を持ち上げて空中で色々な形を作る。球体から立方体、立方体から正八面体、最後に私の形にして地面に戻した。

「すつゝゝゝゝい」

「(こ)うい(う)の(も)あ(り)ま(す)よ」

口笛を吹いて近くにいる動物を呼び寄せる。

「これは催眠術……と言うより心変わりと言った方が正しいですね。動植物に関わりなく生きている物なら操れます。ふふ、また凄いつて思ってますね」

「え?どうして分かったの?」

「読心術です。私にできない事はありません!!…多分」

「……よし、じゃあ俊くんには私のボディガード兼助手をしてもらおう。どうせ行くところがないんだし良いでしょ?」

こんな面白い人材をこんな無人島で腐らせるなんて人類にとっての大きな損失だよ。

……

…

「手荷物はそれだけでいいの?」

俺は洋服と拾った武器を大きい目の旅行鞆に詰め込んで準備完了。あまり手荷物が多

いいのは好きじゃないので気に入った物しか入っていない。

「はい、洋服とかもそのうち自分で買いそろえます」

「敬語は禁止〜♪ 俊くんはもう私のボディガードなんだから」

「はい…」

「緊張しなくて良いのに〜♪」

「お、おう」

緊張するなど言われても布地の面積が少ないISスーツに収まり切れない爆乳を前に緊張してしまう。

「もう〜俊くんのえっち」

「まあ…エッチですけど。それよりどうやって博士の研究所まで行くんですか？」

「私のISに掴まって」

ISを展開すると背中にあるちよつとした出っ張りを指さした。

え？あそこに掴まるの？

「あの…船とか潜水艦とかは…」

「俊くんは強いから大丈夫だよ」

「一応、俺は人間なんだけど…」

「俊くんは強いから大丈夫だよ」

仕様がなかったのでおんぶの要領で背中に引つ付く。すると何も言わずいきなり急上昇した。悲鳴を上げる暇すら与えてもらえずに篠ノ之博士の研究所まで行くことになった。

……

…

「ハア…ハア……し、死ぬかと思った」

上空数千メートルを生身の人間がマツハいくらつてスピードで飛んだら死ぬぞ普通。

「おおくくやっぱり生きてたね。ま、私のボディガードならこれくらいは軽くこなしてもらわないと」

「へへ…」

乾いた笑いしか出てこない。これから大変そうだ…。

「まずは研究所の中を案内したげる」

荷物の整理もままならないまま俺は篠ノ之博士に付いて行く。

……

…

「まずはここ。ここは私の第一ラボ。第一ラボって名前だけどここしか使っていないから他のラボは空き部屋になってるよ」

部屋の中は訳の分からない機械で埋め尽くされており必要最低限の面積しか床が見えていない。部屋の中央に位置する作業スペース以外は大抵散れている。

「散れてますね」

「私掃除嫌いだからね。いつつも掃除ロボットに任せてるんだけど何処に何かがあるか分からなくなるから三か月は掃除してない」

篠ノ之博士とは仲良くなれそうだ。

……

…

「ここがキツチン。ほとんど使っていないから綺麗でしょう」

「それじゃあ食事はどうしているんですか？」

「これをご覧あれ」

大きな扉を開けるとその中は冷凍庫になっていた。

「さぶつ!!」

「ふっふっふっこれは私が開発した冷凍庫なのだ。この中に冷凍食品を買いだめしてるんだ。お腹すいたら好きなのを食べて良いからね」

冷凍庫に入り中を確認すると本当に冷凍食品しか入っていない。パスタ、フライドポテト、からあげ、お好み焼き、エトセトラ。こればかり食べてあのスタイルなのだから

原作準拠の超人なんだな。

……

…

「まだまだ紹介しきれしていないけど、とりあえずここが俊くんの部屋。何も無いから欲しい物があれば言っつてね」

ひえー広い。そして本当に何も無い!!

「マジで何も無いですネ」

「マジで何も無いのだよ。買い物に行く?」

「片道数時間の道のりをまた掴まり続けるんですよね?」

「うん」

「……………」

父さん…母さん…もしかしたらすぐに会いに行く事になりそうです。

始まった（非）日常

俺が東博士の研究所に居候してからすでに3週間が経過していた。研究所の所在は太平洋上に浮かぶ自然豊かな無人島。近くに人のいる島もないので洋服を買いに行つたときなんて大変の一言に尽きた。なんせ熱光学迷彩を利用して不法入国して買ってきたのだから…東博士曰くバレなきやいいそうだ。

ここでの生活はとても快適で楽しい。俺の意見で野菜を水稻栽培し始めてからというものの俺がこの島での食事係となった。元々、料理は俺の趣味だったし珍しい野菜も栽培してくれるので料理のやり甲斐がある。肉も山の中に入れば鹿やイノシシがいるので困らない。卵も海鳥からたまに手に入る。そんな島をたつた二人で独占できるのだからとても贅沢だ。

しかしそれらの食材は東博士の手によつて凶器へと生まれ変わった。ゆで卵をつくれば鍋が爆発し、野菜と肉を焼いたらスライムもどきになる…まさか博士がここまで料理が超弩級でド下手だったとは…曰く俺が来るまでは冷凍食品やお料理ロボットに作

らせていたのだが俺に手料理をふるまおうとして失敗したらしい。失敗つてレベルじゃねえぞコレ。だから研究所の家事はほとんど俺とお手伝いロボがやっている。前世では一人暮らしだったので料理はうまい方だと自負している。現に東博士も俺の料理をうまいと言つて食べてくれる。

「俊くくん。ついに完成したよお〜」

ラボの方から東博士の声が聞こえてくる。随分と心を開いてくれているようで、今では新しい開発について話し合うくらいに仲良くなった。おっと、早く行かないとな。

あけっぴろげられたラボへと入った

「お待ちせしました。ついにできましたんですね!?俺専用のISが!!」

「うんうん、できたんだよお。俊くんには操ることのできないオーバースペックの塊!!まさにロマン!!なによりこのISの魅力は無制限に武装が積めるってところにあるんだよ。俊くんがくれた設計図にあった4次元ポケットをなんとか完成させたんだあ」

信じられなかった…まさかあのポケットまで再現するなんて。まあポケットがついているのではなくて無限に積んでおいて呼び出すといった形になると思うのだが…まじでばねえつす東博士、頭上がらないつす。

「でも問題があつてGNドライブの再現だけは無理だったんだよ。ごめんね(・ω・)

、」

申し訳ないといった顔で謝ってくる。謝らなくてもいいのに…むしろ俺が感謝の言葉を言わなければいけないといった場面だろう。

「謝らないで下さいよ。むしろ俺がお礼を言うべきでしょう。ありがとうございます」
「えへへ、お礼を言われて悪い気はしないな。ホントはGNドライブも再現しようと思っただけだよ、どうもGN粒子が再現できなかったんだよ。代わりと言ったらただけど縮退炉を積んでるから出力はとんでもないよ」

え!? しゅ、縮退炉!? そんなもん積んでるのかよこのISは…。まさに敵なしだな。武装もまだまだ完成してないものもあるしこれからどう進化するのか楽しみだよ。

「あの…いちおう訊きますが縮退炉はいくつ搭載したんですか?」

「設計図にあったように二つ搭載したよ。まあ、二つ同時に使う事なんてそうそうないと思うけどあるに越したことは無いでしょ」

「ソウデスネ」

「武装もいくつか作っただ。見て見て、俊くんの資料から使いやすそうなのを優先して5種類作ったよ。」

目の前にディスプレイが表れて5つの武器のスペックとビジュアルが表示される。

IS用タクティカルナイフ

全長 80センチ

刃渡り 55センチ

二本装備しているので連続しての攻撃が可能。自衛用だが威力は折り紙付き、連続で切り付けられるとそれなりのダメージになる。

対物アサルトライフル

射程 2000メートル

装填弾数 56発

連射性に重きを置いたアサルトライフル、反動はIS用の武器と言うこともあって少々強めだがあくまで人が使ったときに強いというものでIS戦闘においては問題なし。焼夷榴弾や徹甲弾など特殊な弾も発射できるので汎用性は高い。

フルオートショットガン

射程 200メートル

装填弾数 30発

フルオートというのもあって装填弾数を多くすることが第一であった。それ故かドラムマガジンを使用している。射程はライフルと比べると短いがそれは当たり前で面で制圧するためによく拡散するような弾になっている。

みんな大好きパイファー・ツェリスカ

射程 150メートル

装填弾数 6発

IS用なので射程も装填弾数も元ネタとは違う。リボルバーは弾数の管理がしやすいので初心者でも扱いやすい（白目）。リロードもスピードリローダーを使うことで早くできる。とんでもない弾を発射するので一発でもあたると相手は確実に動きを止める。その隙に攻撃ができるようにもう片方の手にはなにか別な武器を持っておこう。

グラインド・ブレード《対IS規格外六連超振動突撃剣》

射程 ブースターを使って移動するので射程は半無限

6基のチェンソーを右腕部の軸に円形に並べ、ドリルのように回転させつつ炎を撒き散らして突撃。ね？簡単でしょう？消費エネルギーは凄いが専用バッテリーがあるので60秒はシールドエネルギーを消費せずに使える使用後は原作と違ってしまうことが可能。当たった相手はバクハツシサン!!サヨナラ!!どんな相手も木っ端みじん。俳句を詠ませることができらるだろう。

「あの…東博士…これって」

おかしいな…IS用の武装のはずなのに一つだけおかしいものが混じってるような気がする。あれれ〜？おかしいぞ〜？（棒）

「この程度の武器なら朝飯前だよ。構造も結構簡単だったし既存の技術で何とかな

よ。威力は使えばわかるよ」

「使えばわかるって…グラインド・ブレードなんて使ったら相手がISでも死ぬでしょ？」

「まあね、死ぬよ。でもさあ私たちの敵にしか使わないし問題ないでしょ？」

問題大ありじゃ!!でも東博士を守るためなら人を殺さなきゃいけないくなる場面も出てくるだろう…その時俺は決断しなきゃいけない、そのための手段か。

「ところで、このIS、名前はないのか？」

「ん？今のところないかな。俊くんが名付けると思っていたからまだ付けていないよ。候補とかある？」

うゝむ、名前はまだなしか。黒いし「黒棺」なんてどうかなあ…厨二臭い。じゃあ「夕闇」…違う。それにISは元々宇宙開発のための…宇宙…。宇宙って黒いよな…は!!

「宇宙（ソラ）…宇宙（ソラ）なんてどうかな？」

「空？…このIS黒いよ？」

「いや、そつちの空じゃなくて宇宙って書いてソラって読むんだよ」

「宇宙か…いいね!!無限に広がる境界線って感じがしていいよ!!やつぱりISはこうでなきゃね。よし!!そのISは宇宙（ソラ）だよ!!むふふ…他はどんな名前にしつよっうっかなあゝ。」

嬉々とした笑顔でそう宣言する東博士。東博士が笑顔だと俺も嬉しいよ。それにしてもこんなに喜ぶなんて思ってたなかった。きつと自分の数少ない理解者ができて嬉し
いんだろう。これで一件落着：ん？今、他はつて言わなかったか!?一応聞いてみるか。

「東博士、質問を一ついいですか？」

「一つと言わずいくらでも何でも聞いてよ（*・艸・）」

「まさかと思いますが俺専用のISって他にも作る気ですか？」

「勿の論だよ。確かにこの宇宙は万能型のISだけど逆に言えば器用貧乏なんだよね。だから宇宙のほかにも近接戦闘型、遠距離狙撃型、高機動戦闘型、高火力殲滅型の4つを造ろうと思うんだ!!東さんのボデイガードならそれ相応の装備を揃えないとね!!」

まずい：やる気だ。しかも満面の笑みだ。そんなことされてはこの世界でのパワーバランスが：ま、いっか。使わなければいいだけだし。それにカッコいい機体はいくらあっても邪魔にならないしね。

「あ、それといくつか言っておきたいことがあるんだ。」

思い立ったように東博士が言い出した。なんだろ?いたずらとか注意されるようなことはしてないけどな。

「二つ目はその口調について。敬語なんて使わないでよ、私のことは東でいいからさ。二つ目は毎日常事をこなしてくれてることに対する感謝、ありがとうね。で、最後は

ちよつと任務をお願いしたいんだ」

なんだ、そんなことか：敬語は年上だからと思って使ってたけど必要ないみたいだな。前世の歳も合わせると俺の方が上なんだけどね（苦笑）。

「任務？悪の秘密基地でも潰してほしいのかな？」

茶化したように言ってみるが束の表情は芳しくない

「うん、悪の組織の秘密基地。私のISを穢したゴミ共の掃き溜め：反吐が出るよ」

「これアカンやつや。めっちゃキレとる。」

「任せろ。束の夢を穢す奴は殺す。相手が誰でもだ。だから教えてくれ、その基地がどこにあるのか」

「こうして俺の初めての任務が始まるのだった。」

3話 ファーストミッション Part 1

『宇宙の調子はどう？モニターしてる限りでは良好のようだけど』

「全身装甲のせいかちよいと息苦しいかな、圧迫感が否めない。それ以外は良好だよ」

『ははは、それは仕方ないよ。慣れるしかないね、俊くんならすぐに慣れるよ』

「そうだといいんだけどな。それよりもうすぐで施設に着くけど破壊方法の要望とかある？」

『完膚なきまでに叩きのめして…それだけ』

「了解した。通信終了」

通信を切るとステルスを起動させ目標へと急いでいた。現在地はフランス山岳地帯の某所。東の情報でこのあたりに秘密裏に研究を行ってる場所がある。秘密裏に行くような研究だから中身は大体想像できる。非人道的なものに決まってる…でも研究員たちを殺していいのか？東の島を出てからずっと考えていた。きつと答えを出すのは難しい。だけど東の夢を穢したんだ…それ相応の罰は受けてもらおう。そうして俺はブーストをさらに吹かした。

遡ること数時間前

「行先はフランスの山岳地帯。この辺りはゴルフ場やホテルが観光目的でいくつか建てられていたんだけど首都圏から外れているし観光と言っても自然しかないから廃れていったんだよね。その廃墟に目を付けた企業がホテルの地下に研究施設を造ったってわけ。この辺りにしてはお金や物資の動きが不自然だったからすぐに分かったよ」

「成る程な。こいつらも運がねえな：俺たちに目を付けられるなんて」

目の前の立体映像を見ながらつぶやく。山のみもとに数軒建っているホテルの地下の一つに研究施設があるわけか。

「で、俺はそこに行つて破壊の限りを尽くせばいいわけだな」

「その通り：：つて言いたいところだけど今回は違うかな。施設の破壊のほかにも情報を抜き取ってきてほしいんだ。私の役には立たないだろうけど研究次第ではフランスをおちよくくれるからね」

「了解した。でも俺はハッキングなんてできないぞ？それに逆探知とかされたりしたら：：」

東博士ならお茶の子さいさいだろうけどPCに疎い俺にはできない。適材適所つてことで俺は破壊工作には向くけどハッキングなんて無理だ。

「大丈夫、大丈夫。この端末を施設のPCにつなげたら勝手にハッキングしてくれるから。それにこの場所の逆探知なんてスパコン一台じゃ到底できないよ。だから安心し

て作戦に集中して」

「それを聞いて安心したよ。敵さんの武装はどんな感じか分かる？」

「勿論調べてあるよ。ISの無人機が4機、有人機が1機だね。他には対人用のガードロボットが多数、これはISなら簡単に壊せるし物の数じゃないよ。でも厄介なのはISの方だね。この施設に入ってる兵器を見る限りじや今の宇宙の装備じや苦戦しそうだよ。」

「問題ない。束が作ってくれた兵器のほかにも既存の兵器があるだろう。弾切れになったらそつちも使って制圧するよ。それに束は俺が負けると思っているのか？」

「そんなこと思ってないよ。それに帰ってきたときに私が作った料理を食べてもらわなきゃいけないしね。」

「ならば必ず帰ってこないとな…いつてきます」

そう言ってガレージへ足を向けた

Side out

そろそろだな…急降下して一気にホテルまで入りますか。

カウント

10

9

0 1 2 3 4 5 6 7 8

ドゴーーーーーン!!

轟音と土煙を上げホテルへと一気に突撃する。しかし…

「誰もいねえ…つて当たり前か。さあて、秘密の入り口はどこじやらはい」

センサー起動…奥にあるな。ん？歩兵までいるのか。

俺は両手にシヨットガンを構えて奥へと進んでいく。すると隠れていた三人が出てきてマシンガンを乱射してくる。無駄なことを…。

「クソ!!なんでISが!!」

「知るかよ!!とりあえず進ませるな!!」

悪態をつきながら銃口を敵に向ける…撃てば死ぬ。

一瞬俺の中に躊躇と罪悪感が生まれたが束の為という大義の前に消え去った。

俺はマシンボイスに切り替え言い放った。

「愚か者め…」

二つの銃口が火を噴くと同時に目の前は真つ赤に染まって人だった肉塊が転がっている。人間って潰すと結構血が出るんだな…。内臓も骨も何もかもが混ざり合って気持ちわりい。

この後も何人か歩兵に出会ったがみんな等しく銃弾をプレゼントしてやった。ここで何が研究されてるかも知らない雇われの傭兵だろうが関係ない。ガードロボットも所詮は通常兵器、ISに勝てるはずもなく鉄くずと成り果てる。

さて入り口についたな…無理やり開けるか。ヒートパイルでいいな。

「リボビング!!ステエーーク!!」

ふう…空いたか。叫ぶ必要はなかったのだがあそこで叫ばないのは男じゃねえよ。

中に入るとガードロボットが盛大に持て成してくれた。チツ、めんどくさい。アサルトライフル、コール

両手にアサルトライフルを構えると徹甲弾を装填して乱射した。

ズガガガガガガガガガ!!

「終わったか。生体反応？でも反応が小さいな。念のために見ておくか」

固いな…IS用の武装だと中の人を確認する前に死ぬしエレガントに行くか。神様からもらった「素晴らしき」能力の一つを使うか…パチン!!

指ばつちんを一つ。すると扉は真つ二つになり開いた。銃を構えつつ中に入ると…

「…I…S?」

ボロ布にも等しい白いワンピースを着た白銀の髪をした少女が一人いた。他には誰もおらず部屋にも家具はベッド以外には見受けられない。こんなところに少女を押し込んで何が目的だ!!だが、まずは情報収集…落ち着こう。マシンボイスに切り替え話しかける。

「生存者は?」

「私だけ…ほかのみんなは死んだ…と思う。もう何日も一人…誰も戻ってこなかった」
「そう…ここから地上までにいる敵は殲滅した。逃げたければ逃げるといい。でも付いてくるといふなら安全は保障できない」

生きる意志があるなら一人でも何とかできるはずだ。子供の足ではつらいがここから歩いて10時間ほどのところに村がある。何とかなるだろう。

そう言う俺は奥へ足を進めた。

今のところは無人機も有人機も出てきていない。ならさつきと終わらせるか。俺は

端末を呼び出し施設の大型PCにつなぐ。

『早いねえ。もつと時間がかかると思ってたのに。』

東から通信が入る。さっきの少女の事は念のために報告しておくか。

「今さっき実験体であろう少女に出会った。一応助けたが保護はしていない」

『ふくん。お、段々分かってきたぞお。その女の子は多分だけクロエ・クロニクルって

名前の遺伝子操作をされた子だよ。一人だけ生存報告がされてる』

「そうか…なら一人でも大丈夫だな。それより無人機も有人機もまだ出てきていないだ」

『あと78%だし出てこないことを祈るよ』

それはフラグって奴だろう…ほら、やつこさんがおいでなすった。

「お客さんだ…切るぞ」

後ろでした音の方を向くと無機質な全身装甲の黒いISが4体いた。ようやくお出ましか…同じ黒でもこんなにも違うんだな。ぶっ壊してやるよ!!ナイフ、コール!!

両手にナイフを持ち、瞬間加速で一気に距離を詰める。

構造上脆弱そうな腰の接続部と腕部にナイフを突き立て一気に引き抜くように切つてバラバラにする。所詮は無人機…こんなものか。残り三機…余裕だな。

クロエサイド

私は急いでいた：私専用のIS「黒鍵」のところへ。あの人の言う通りガードロボツトは壊滅状態、研究員もみんな死んでいる。可哀想なんて微塵も思わない、死んで当然の連中だ。私たちを実験動物程度にしか考えていない屑ども：死んでいったみんなの為にも私は生きなきゃ。

ドゴーーーン!!

爆発!?もしかしてあの人、無人機と戦ってるのかな?だったら好都合だ。倉庫にはいないことになる。：あの人は私を保護してくれるかな。行く当ても帰る当てもない私を助けてくれるかな…。

ISスーツを着た少女は年相応の不安を抱えながら倉庫へと急いだ。

4話 ファーストミッション Part 2

目の前に転がる無人機の残骸……これで最後か。

「碎け散れ!!」

胸にヒートパイルを打ち込んで固定してから胸にショットガンを撃ち込みバラバラにする。ふう……弱かったが疲れた。こいつらバラバラにしねえと動くしな。あとは無人機だけか……探すのも骨だしここで待つか。もうすぐでダウンロードも終わるし。

「束、進捗状況はどんな感じだ?」

『順調に進んでるよ。足も残らないようにしたし完璧。そっちはもう終わったの?』

「無人機は全滅させたよ。有人機の方はまだ出てきてない。わざわざ探しに行く必要もないし、見つけたら倒す程度でいいと思う。それにこんなところに有るようなISなら国の方も目を付けるだろうし外には逃げないはずだよ」

『それもそーだね。よし、終わったあ。それじゃあもう帰ってきていいよ』

「了解した。じゃあ今からそちらに帰島する。」

「待って……」

!?

俺は振り向きざまにアサルトライフルとショットガンを声のした方へ向ける。

「私も連れて行ってほしい……もちろん私の事を信じられないと思う。でも私の居場所はもうどこにもない……だから……助けてくれたあなたに命を懸けて仕えさせて」

有人機つてクロエの機体の事だったのか……クロエを信じるのは簡単だがなあ……とりあえず話を聞いてみよう。事はそれからだ、東の許可も必要だし、マシンボイスに切り替えてつと。

「何故だ？こちらにメリットのある話とは思えない。そもそもあなたがこちらを裏切らないという保証はあるのか？」

「これが私の武装のすべてです」

そういうと彼女は2本のショートブレードとライフル、マシンガンを手放した。そしてIISを待機状態にしてそのブレスレットを俺に差し出してきた。

「私は元々この場所で死ぬ予定だった。だから死ぬのは怖くない……でも生きていたいと思う。矛盾しているかもしれないけどあなたの為になら生きていたいと思うの」

ムムム……東、聞いているか？

《もちろん聞いているよ。彼女可愛いし連れてきてもいいよ。役に立ちそうだし》

マジで言ってるのか!?

《マジだよ。だって着せ替え人形ができるんだよ？それに私に会えば裏切ることな

んで不可能だつてことが理解できるよ》

分かった、クロエにはついて来てもいいと伝える。ちゃんとお世話しろよ？

《おーけー。クーちゃんは私が責任をもつて育てるよ》

信じられねえけどな（苦笑）

「ついて来てもいい…ただし裏切りは許さない。それだけだ。あと、このI Sはあなた
のものだ。好きに使うといい。」

そう言つて俺は彼女にブレスレットを返した。

「信じてもらえて嬉しいです!!では早速行きましょう!!」

まったく…現金な奴め。でも…笑うと可愛いじゃねえか。

場所は変わつて無人機を使つてモニターしていた場所

「やはり篠ノ之博士に研究所の事はバレていたようすな」

円卓を囲っている一人の老人がつぶやく

「ええ、そのようですね。ですが収穫はありましたよ。」

若い男性の明るい声が響く

「その通りですわ。篠ノ之博士は今、強力な用心棒を持っている…それだけでも収穫だ
わ」

妖艶な雰囲気女性の声

この三人がああの実権を握っていたのは明らかだった。

「しかしのう…あのI Sをそのまま帰すのも癪じやのう」

「でしたらあの施設は自爆させましょう。そうすればフランス軍が出動してきます。そうしたらいくら篠ノ之博士特製のI Sといえど自爆のダメージとI Sとの戦闘で無事ではすみません。ぼろぼろになったI Sを衛星で追尾してやれば済むだけの話」

「黒鍵はどうするつもり？まさか彼女ごと消す…なんてことはないわよね？」

明らかに怒気を含んだ物言いをする

「仕方あるまいよ。クロエと言ったか…彼女は君のお気に入りの人だったね。いいじゃないか、いくらでも変わりはいるんだから」

「これ、口を慎まんか。こんなところで挑発するでない。おぬしもそんなに怒るでない、篠ノ之博士特製I Sの危険性を考えると妥当な判断じゃ。人形一人の為に我々が危険にさらされる必要もない」

「ちつ…分かったわ。クロエの事は諦める…早く自爆させて頂戴。早くしないと逃げちゃうわよ？」

「それもそうだな。じゃあ古き良きスイッチを押そうか。ポテイツとな」

「私は軍の方に情報をリークしてくるわ。あとさあ、あんたのそのこだわりどうにかならないの？」

そう言うのと返事を聞くことなく彼女は部屋を出る。

「まったく…おぬしらは仲良くできないのか。はあ」

老人のため息とともに会議はお開きとなった

トシキサイド

「それでは先にこの島へ行っている。私はここでやることがまだ残っている。あとこいつを持って行け、衛星に探知されては困る。」

そう言うて俺は熱光学迷彩マント《透明マント》を手渡した。

「あ、ありがとうございます。何から何まで本当にお世話になります」

直角に腰を曲げてお辞儀をするクロエ。これからの事を考えると束におもちゃにされるから大変なんだが…まあいいか。クロエが飛び出していった方角を眺めつつ束に連絡を入れる。

「俺だ…ここより下に研究員たちが隠れてるシエルターを見つけた。ちよつくら行って殺してくる」

《俊くんがしたいならそうするといいよ。ガードロボットを使えば簡単だけどそれじゃ俊くんの気が収まらないでしょ?》

「よく分かっているじゃないか。じゃあ切るぞ」

通信を切つて左手にショットガン、右手にヒートパイルを持ってシエルターに急ぐ。

なんだってあんなに幼い子供を…まだ中学高学年程度の幼い子供を…許せねえ。ん？この部屋にはまだ入っていないかったな。生体反応はないが入ってみるか。

扉を壊しては行つた先には人のものと思われる脳や内臓がビンに入つて保存されていた。

「まさか…無人機のAIは…ゲス共…!!」

しかし、こんなところで道草を食っている場合ではないな。急ごう。

シエルター内

「ここにいれば安全なのですか!? 外の無人機はすべて破壊されあの娘もどこかへ行つた!! もう我々は!!」

研究員と思しき人物たちは口々に文句を垂れていた。

「ええい!! 黙らんか!! ここは腐つてもシエルターだ。自爆しないかぎりここは安全だ」
しかし研究員たちの望みは全て絶たれるのであった。

「おい、あの人から連絡だ。静かにしている。はい、私です。はい、はい、何人か殺されましたが研究を続けるには十分と言えるほどの人数は無事です」

『そうか…しかし君たちには悪いがその施設は破棄することにした』

「え? いや、な、何を言つておられるのですか…我々がいなくてはISの研究は…」

『君たちには知らせていなかったのだが国外にも似たような研究施設がたくさんあつて

ね。ここがなくなつたからと言って困る話ではないのだよ」

「くつ、こ、この裏切者め!! 貴様には人情というものが無いのか!? これまでどれだけの労力を貴様に捧げてきたと思つてる!!」

『はっはっはっは。裏切り? 人情? 生易しいことを言うじゃないか。じゃあ聞き返すがお前たちは優しい心をもつてあの可愛らしい少女たちを殺したか? ええ? 君たちは報いを受けるのだよ。もちろん私も報いは受けるさ…だがそれはもう少し後でだ。アディオス』

シエルター内は絶望に満ちていた…それは仕方のないことかもしれない。そう思い自分のこれからを正当化してる研究員もいれば死にたくないと思つて頭を抱えるやつもいる。しかし全員死ぬのだ、奇跡なんて都合のいいものなんて起きはしない。

トシキサイド

着いた。ここが入り口か。ヒートパイルじゃ無理そうだし「アレ」を使うか…

「グラインドブレード接続…バッテリー良好、グラインドブレード起動」

不明なユニットが接続されました

システムに深刻な障害が発生しています

直ちに使用を停止してください

センサーは一部使用不可になり反動がすごい。けたたましい音とともに火花が散り、

ブレードは回転速度を上げていく。そろそろ撃てそうだな…右腕を振りかぶり前へと突き出し、そして

「くたばれえええええええええ!!」

「ごしやあああああん!!」

空いたか…中の人間は生きているみたいだな。

俺はすぐにシヨットガンに武装を切り替えて撃つ。

「死ねええええ!!お前たちが!!お前たちさえいなければこんな事にはならなかったんだ!!修正してやる!!」

今まで以上に乱射を繰り返す。肉塊になった「ソレ」にまで発射をやめない。憎い…憎いのだ。そしてあたり一面に肉塊というにはあまりにも小さく成り果てた「モノ」踏みつけ一瞥した。

さて、帰るか…。

『自爆シークエンスを開始します。あと1分で自爆します。研究所に残っている職員は今すぐ退避してください。繰り返しします。ry』

自爆だ?!?くそ…ここから外まで最短で2分かかるから絶対に間に合わない。退避しろと言ってるからシエルターは無意味だろう。入り口も俺が壊したしな。

『俊くん!!今すぐそこから逃げて!!自爆が始まる!!』

束から連絡が入る。とても焦っているようだ。珍しく束が焦っていると自嘲気味に笑ってみる。

「ああ、分かっている、がここから外までは2分かかる。間に合わないよ…でも大丈夫。何とかする」

『な、なんとかって?』

「大丈夫、心配するな。俺は束を置いて絶対に死なない。信じろ」

優しい声色で何とか束を落ち着かせる。それに焦る必要もない。いざとなればいくらでも助かる手段はある。

『…分かった。信じるよ。でもね…でも、帰ってきたら絶対に私のカレーを食べさせるんだから』

「束お手製のカレーか…家主のお願いは聞かなきゃいけないし絶対に戻る」

そう言っただけ俺は通信を切った。

ふう…「素晴らしき」能力の次は「衝撃」的な能力か…大盤振る舞いもいいところだな。あと20秒だし準備するか。まずは腕の装甲を外して…と。よし、出力は良好。あとは自分を囲うように放てば防壁替わりにはなるか。多少のダメージは残るだろうが死なないはずだ。よし…やるか!!

2

「俺を…」

1

「舐めるなあああああああああああ!!」

0

大声で叫びながら衝撃波を放つ。しかし…爆発の威力がこれほどのものとは思って
もいなかった。持つてくれよ…おれのIS…俺の体…俺はまだ死にたくないんだ!!

5話 ファーストミッション Part 3

俊葵が自爆に巻き込まれる十数分前、フランス軍に匿名で情報提供がありラファールが三機、俊葵の元へ向かっていた。情報の中身が相当なものだったので重装備のラファールが三機という普通ならあり得ない部隊を展開しているのだ。

「いきなりスクランブルがかかったと思ったら山奥に遊覧飛行かよ」

一機のラファールが面倒くさそうにつぶやく。

「文句言わないの。あなたも篠ノ之博士特製のISの重要性が分かるでしょ？」

「そりやあ分かかってるけどよお。信憑性が薄くねえか？そもそもうちの国に非合法な研究所があるなんて思えねえよ」

愛国心がない人でも自分の国に臭いものがあるなんてのは思いたくないものだ。しかも情報元がたかが一企業のお偉いさんならなおさら信じられない；しかし映像証拠もある。フランスとしては穏便にすませて他国には知られたくないというもの。だから3機もISを投入したのだ。

「上も穏便に済ませたいんでしょ。それにいくら特製のISでも代表クラス3人なら何とかなるわ」

「自分で代表クラスとか言うのかよ…まああなたが間違つてないけどな」

ヒヒヒと女性がするとは到底思えない笑い声をあげて武器を構える。

「もうすぐで目標だけ構えとけよ。獲物を横取りされたくなかつたらな」

「そんなんだから貴女は彼氏にも逃げられるのよ」

「なんだとお!!」

「本当にあなたたちは落ち着きがないわねえ…隊長を務めてる私の身にもn」

激しい光と音が目の前の山のふもとで起きる。研究所が自爆をしたのだ。それを彼女たちも察したのか…

「おいおい、これじゃあISの方も壊れたんじゃねえの?」

「規格外のISなら耐えられるかもしれないわ。念のために戦闘態勢は解かないでね」

「了解!!」

トシキサイド

くそつたれ!! 外部装甲とスラストの一部が壊れたか…チツ。もつと能力の制御と威力の向上をさせないと。ん? あれは…フランスのラファールか。今の戦力じゃ勝てるか分からんな…能力を使えば余裕で勝てるが手の内を晒すのも嫌だし適当に戦闘不能にして逃げるか。

「さて…やるか。」

残ったスラスターを何とか制御しつつ空へ行く。すると通信が入った

「そのIS、武装解除して止まりなさい」

「おとなしく従った方が良いぜ?」

「従ってくれたらそれなりの対応はしますわよ?」

口々によくある脅しをしてくる…ふん、そんな脅しに屈するようじゃ東のボディガードは務まらねえよな。マシンボイスに切り替えて…つと

「失せろ…あなたたちじゃ私には勝てない。無様な負けを晒したくなければ帰ることね」

安い挑発だがプライドが無駄に高いこいつらには効果的だろう。

「ほおおく、篠ノ之博士特製のISを持っていらつしやるあなたからしたらあたしらのISは低性能だろうさ。でもね…こっちは三人、あんたは一人で手負い。負ける気がしないよ!!」

「不本意ながら同意しますわ。代表ではないにしろ実力は軍でも折り紙付き」

「油断はしてはいけませんよ。手負い相手でもかなりの使い手だと思えます。では行きますよ!!」

そう言うのと好戦的な…A1とするか、A1がマシンガンでけん制をしながら近づいてくる。後ろでは落ち着いた感じの…そうだなこれをA2、隊長をA3とするか。おつと

避けなきやな。バックステップをしながらショットガンを両手に持ち撃つ。

「くそっ!! 当たれよお!!」

「落ち着いて!! 焦れば相手の思うつぽよ!!」

「分かつてる!! 分かつてるけど!!」

分かりやすい攻撃だな。きつと焦ってるんだな…まあ普通はそうだよな。目の前にいるのは真つ黒な不気味なフルフェイスだし。不確定要素を多分に含まれた俺は怖いよな。とりあえず反撃はするか。

両手に構えたショットガンを乱れ撃つ…当たらなくてもいい。後ろの二人にも十分に届く距離だし威嚇にはなるか。

「こんな弾幕は屁でもねえよ!!」

まだ足りないみたいだな…じゃあ（ニヤリ）。片手を既存の盾殺しに変える。ヒートパイルだとパイロットまでダメージを与えかねないしな。瞬間加速して正面からぶつかる。相手も加速していたこともあって避けられなかった。

「ぐっ…てめ…え!?! そりゃ!?!」

今頃気づいてもおせえよ…眠ってな!!

ズガン!!

「くう!!」

まずは腹に一発…エネルギーはあと30%と言ったところか…追い打ちに散弾を浴びせてワンキル。あと二人かこの調子なら無事に切り抜けそうだな。だが今の瞬間加速は傷に響くぜ…。

「仲間がやられたのに随分と落ち着いてるな…薄情者なのか？」

「どうかしらね…でもあなたもなかなか優しいじゃない。敵に後ろを取らせるなんて
「さ」

なに!?!まさか今ので倒し切れていなかったのか!?

急いで振り向くがそこには落ちていくラファールしかない

「正直者なのね…倒しやすくてうれしいわ」

「しまっせ」

俺の声はここで途切れてグレネードとライフルの轟音にかき消され森の中へ落ちていった。

「本部へ、目標を撃破、今から回収に向かうわ」

『了解した。気を付けろよ、まだ動けるかもしれない』

「肝に銘じておくわ。オーバー」

「それにしてもあっけなかったですわね。見た目に反して中身は未熟だった…つまらないですわ」

「あの加速と武器、防御力を持ったベテランが相手とは戦いたくはないな。もしそうだとしたら負けていた」

「それもそうね。早く回収しましょ」

トシキサイド

うう…右腕と左足をやられた…。とりあえず適当な廃品をばら撒いてつと…ステルスは…何とか生きてる、ステルス起動。あとはマントをかぶって…これで破壊したものと勘違いするはずだ。逃げねば…な。飛行ユニットは生きてるしいけるか？縮退炉に火を入れて出力を上げれば何とかなるか。くっ…あいつらも俺を探しているな…。だが、何とか逃げ切れそうだ。

クロエサイド

あの人大丈夫かな？後ろの方で爆発があったみたいだけど…やつぱり戻ろう。恩人を置いては帰れない。それに国も動いている…多分、ISと戦闘になってる。助けに帰らないと。

私は黒鍵を全力で彼女の元へ急がせた。

注※この時点でクロエは宇宙のパイロットが女だと思ってます。

「この反応は…あの人のISだ。急いで助けないと」

そう言う私は機体の高度を下げて彼女に近づいた。

「クロエか…助かったよ。さあ急いで島に帰ろうか…」

「な!?!お、男の声!?!」

「あなたはもしかして!?!」

「ああ男だよ。マシンボイスにするのを忘れてた…でもまあそんなに驚くなよ。俺は篠ノ之博士のボディガードだ。名前は俊葵、よろしくな。つていきなりそんなこと言われでも混乱するよな」

「いや、まったく問題ありません。さあ私に捕まってください。一気に加速しますから衝撃に気を付けてください」

「彼の手を首に回してしつかり私の体に固定する。」

「では、行きます!!」

「長距離移動用のスラストターが火を噴いて後ろの方で私たちを探しているラファールから離れる。そして私は篠ノ之博士のいる研究所へ向かった。」

東サイド

「俊くんたちも、もうすぐでここに着くし準備しとかないとね。俊くんを入れる医療カプセルとかクーちゃんに着る洋服とか。むふふ、クーちゃん可愛いなあ、ま、箒ちゃん

ほどじゃないけどね。それにしても機動力と攻撃力を高めたせいで防御力が低くなつたか。素材を変えるかIC（イナーシャルキャンセラー）を使うとかして防御力を上げないとなあ。ちょうど高火力殲滅型にガンバスターの技術を流用してるからICも追加しよう、うん。

さて、医療カプセルを運びますかな。

すると東博士は大の大人が5人がかりで持つような大きなカプセルを一人で持つて機材に接続する。天災殿は脳みそだけでなく身体能力も細胞レベルで天災級だった。鼻歌交じりに怪力を発揮する彼女は異様な存在だった。

「俊くんの為にカレーを作ろうと思っただけど怪我してるからお粥の方がいいかな？それとも栄養ドリンクとかゼリーがいいかな？うくん…俊くんが食べたい方でいいか」

東の人となりを知る者からしたら彼女の発言は驚くべきことだろう。家事の一つもできなかった東が男の為に料理を作るというのだから…

6話 嵐の前の静けさ

やっと東の島が見えてきた…それにしても、もし生命維持装置が無かったら…もしクロエが助けに戻ってきてくれなかったらきつと俺は死んでいただろうな。

「大丈夫ですか、トシキ様？」

クロエが心配そうにこちらの顔を覗き込んでくる。顔面蒼白で血だらけなのだから心配の一つや二つくらいされるだろうな。

「ああ、大丈夫だ…と言いたいが厳しいな島に着いたらすぐに医療カプセルに入らないと」

「島にはもうすぐで着きます。それまでの辛抱です」

「分かった…」

俺はクロエにしがみ付き加速した。傷に響くがあと少し…耐えられる。

東サイド

俊くんもすぐそこまで来てるね。そろそろハッチを開けないと、ぼちつとな。

森の中に隠されたハッチがゆっくりと開いていく。

そしてポロポロの俊くんとクーちゃんが入ってくる。

「お帰りなさい俊くん、クーちゃん。早速だけどISを解除してくれる？俊くんを急いで医療カプセルにいれないといけないから」

「は、はい!!」

「わりい…負けちゃった。束のボデイガードがこれじゃ情けねえよな…」

俊くんはとても悪びれた様子で謝ってきた。そんなことないのに、私のお願ひしたことを忠実に果たしてくれたただけなのに…。

「謝らないでよ…それより医療カプセルに入れるからちよつと抱っこするよ」

そう言つて私は俊くんをお姫様抱っこした。普通は逆なんだろうけど私はそれでもよかつた。だつて俊くんをこんなにも近くに感じられるのだから。こんなに血まみれになつて…こんなに体をポロポロにしてまで自分に尽くしてくれる男を好きになるなつていう方が無理だよ／＼／

「この中にいれば一日で傷も癒えるよ。それまでは退屈だと思ふけど我慢してね」

「分かつた…その間にクロエを頼んだぞ？」

「任せてよ。俊くんを助けてくれた彼女を邪険になんてしないから安心して」

そして私は部屋を出た。

「東博士、トシキ様は無事でしようか？」

不安そうな顔でクーちゃんが訪ねてくる。

「大丈夫だよ、俊くんは丈夫なんだ。あのくらいは怪我じゃ死なないよ」

「それはよかった…ありがとうございませう、東博士」

「いやいや、お礼を言うのはこっちの方だよ。宇宙の動向をモニターしていたけどクーちゃんが俊くんを助けてくれたのは知ってるから。そこで提案なんだけどさ、そのお礼も兼ねてここで私の助手にならない？ どうせ行く当ても帰る当てもないでしょ？」

「い、いいんですか!？」

「勿論だよ。だって私の好きな人の恩人だよ？ 無下にはしない、それにクーちゃんのことを気に入ったんだ。だから今日から私の助手ね」

「は、はい!! 分かりました!! これからよろしくお願いします!!」

「うん、よろしくね」

私とクーちゃんとのファーストコンタクトがこれにて終了した。

研究所内

「これからここに住むんだし案内するね。この施設内には様々な設備があつてどれもここで暮らしていくには欠かせない物なんだ。例えばここは水稻栽培する部屋。温度と

光はコンピューター管理でいつでも最適。おいしい野菜が年中食べ放題、新鮮だよ」

「凄い…」

「驚くのはまだ早いよ？もつともつと面白い施設があるんだ!!」

私はクーちゃんの手を取ってほかの施設も見せて回る。

「ここは発電施設。太陽光を利用してるんだけど少ないパネルでここの電力を全部賄えてるんだ。前は水力と風力も最大に稼働させていたんだけど俊くんの設計図のおかげで太陽光のエネルギーだけで賄えるようになったんだ」

「凄い…」

「さつきからそればかりだよ？まあ私も設計図を見たときは本当に驚いたよ。だってエネルギー変換効率が50%を超えていたんだもん。しかもこれは完成形じゃない。あくまで試作機なんだ」

「トシキ様は本当にすごいんですね」

「えへへ、俊くんを褒められると自分の事のように嬉しいなあ」

好きな人が褒められるのは嬉しいなあ。あ、そうだ忘れてた。

「最後にクーちゃん部屋の部屋に案内するよ。空き部屋だったから家具とかはまだ無いけどね。ベッドくらいはすぐに用意するけど」

「わ、私の部屋ですか？よろしいのですか東博士？」

「助手の部屋の一つくらい用意してあげるよお。あと私の事はお母さまと呼びなさい。その方が絶対がいいよ!!うん!!絶対にいいよ!!」

「部屋を用意していただくことについては感謝の念は隠せませんがお母さまと呼ぶのはいささか抵抗が…」

緊張と恥ずかしいと言った表情を見せるクーちゃん。ちえ、でも諦めないんだから。こうしてクーちゃんに施設の案内と自室の手配をして一日が終わった。

俊葵サイド

俺は随分と長いこと寝ていたみたいだな。傷も癒えたし出るか…?つかこれからどうやって出ればいいんだ?「衝撃」や「素晴らしき」能力を使うと壊れそうだしなあ…よし、ここは「激動たる」念動力でゆっくり開けるか…ぐぬぬぬ、よいしよつと。ふう…開いたか、でも力の加減がまだまだ難しいな。もつと修行して出力を簡単に制御できるようにならないとな。

ぐううううううう

そういうや出撃前に軽く食べただけだから腹が減ったな。今は…18時か。東もクロエも丁度晩御飯を食べているだろう。一緒に何か食べよう。

俺はキッチンへ足を運んだ。そこがある意味地獄になってるとは知らずに…
キッチンに着いた俺は驚愕した。

「おい、これはどういうことだ、束？クロエ？」

目の前にいるのは肌色の面積の方が広いエプロンを着た束とクロエ。つまり裸エプロン…グレートですよ、こいつぁ。

「私たちの精いっぱいのお礼だよ。さ、性の付く物をたっぷり食べて私たちまで食べるんだよ!!」

巨大な双丘をだぶんと揺らし胸を反らす。頭が痛くなりそうだ…。

「え、ええとですね。私も…その…トシキ様に拾われた身ですのでそういったこともやぶさかではないと言いますか…その…」

顔を真っ赤にしてうつむきモジモジするクロエ。え？これって二人ともいただきますして良いパティーンですかい？おじさん、食べちゃうよ？

「はあ…まったくお前らときたら…」

「あれ？男の人ってこういうのに憧れてるんじゃないの？どうしよクーちゃん、はずれ引いたかも」

「問題ありません、束様。日本のウゝス異本によるとこれが男を喜ばす方法で間違いありません。ネットに書いてありました」

その格好のソースはネットかよ……てか馴染みすぎだろ、クロエのやつ。うくむ、しかし据え膳食わぬは何とやら……。よし、決めた!!

「まずはごはんだ。そのあとにお前ら二人とも食べてやる。覚悟しとけよ（ニヤリ）」

「ありや?どつちにしろはずれ引いたような希ガス」

「も、問題ありません。私たちにはネットという最強の味方がいます（震え声）」

その後、夕食を済ませた三人がどうなったかを知っているのは当事者である三人とたまたま掃除の為に部屋に入ったお掃除ロボットだけであった。

翌朝

どうしてこうなった。いや、確かに昨晚はお楽しみだったのだが……なんで二人とも俺の腕に絡みついていたんだよ。くそ、抜けねえ。ちよいと無理やり……

「んう……」

はいけないよな、うん。二度寝するか、まだ6時だし。

そう思い目を閉じて現実から意識を遠ざけた……。

「……キ……ま。トシキ様、朝ですよ。起きてください」

身体をクロエに揺すられて目が覚める。二度寝した甲斐もあつてすつきりとした朝を迎えられた。

「おはようクロエ。今何時だ？」

「九時でございます。朝食の用意も済ませておきました。東様もお待ちですよ」

「分かった、先に行つていてくれ。着替えてシャワーを浴びたらすぐに行く」

そう言つて俺は浴室に入った

リビングにて

「これクロエが作ったのか？」

「いえ、東様が腕を振りました」

「は!？」

東がまともなものを…なん、だと!？」

「そんなあからさまに驚かなくてもいいと思ふなあ」

「す、すまない。とても美味しいよ」

丁度いい焼き加減で半熟の目玉焼き、肉汁溢れる分厚いベーコン、酸味が効いてるレモンドレッシングのサラダ。どれも美味しい。成長したなあ…父さん嬉しいよ。なんて小芝居は置いといて本題に入ろう。

「東、頼みたいことがあるんだがいいかな？」

「俊くんのお願いなら何でも聞いてちょうよおう。なにかな？」

「俺とクロエをＩＳ学園に入学させてほしい。そして束にもついて来てほしい」

「うくん、別に入学させること自体は反対じゃないんだけど理由を聞きたいかな」

理由か…もつともらしい理由はあることにはあるんだが…本音を言っておくか

「理由は簡単だよ、まずは束と一緒に青春してみたいから、次に束の所属について、どの国からも独立した立場にあるＩＳ学園は丁度いい盾になるから、最後にクロエ、クロエは今まで若い女の子らしいことを全くしてこなかったからせめて高校生活だけでも謳歌させてあげたい。理由はこの三つかな」

「いいよ!!」

元氣よくＯＫが出された。もつと渋ると思っていたけどあっさりＯＫが出たな。

「早速、ちーちゃんに電話するね。出てくれるかなあ」

携帯端末を取り出しちーちゃん、もとい千冬さんに連絡を取る。

「あ、ちーちゃん、もすもすひねもすう。あ!!待って、ごめんごめん!!謝るから切らないでえ〜!!」

《いったい何の用だ、束。お前からでなければ授業中に電話に出たりせんぞ》

授業中なのに出るのかよ…ていうか束エ…今のあいさつはどうよ。

「いつくん以外にもＩＳを動かせる男の子がいるからＩＳ学園に入学させたいなあっ

て。あと私もIS学園に身を置くことにしたからよろしくねえ〜」

《は?!いきなり電話をしてきたと思っただら何と言っているのだ?!それに自分の立場というのをきちんとして理解しているのか!?!》

電話の向こうから怒鳴り声が聞こえてくる。

「理解してるよお。だからIS学園に行くんじゃないか。あそこならどこの国からも邪魔されずに研究できそうだし」

《むう…確かにそうだが》

「それに俊くんとクーちゃんに青春させてあげたいんだよお。ね?お願い」

《その俊くんとやらが男のパイロットか、まさかお前が他人を気遣うなんてな…いいだろう。私が何とかする。しかしその二人はちゃんと私に紹介してもらおうぞ?》

「うん、分かった。ありがとおちーちゃん。今度何かしらの形でお礼するね」

《ふん、お前からの礼なんて怖くて受け取れんわ、ふふ》

悪態をつきながらも嬉しそうだ。

「そつちに来る日程とかが決まったらまた連絡するね。じゃ、また今度」

《ああ、じゃあな》

そう言っただけで通信を切る。

「やったよ俊くん、クーちゃん。これで二人ともIS学園に入学できるね!!」

眩しいくらい笑顔をこちらに向ける。俺たちの為に…まあ半分近くは自分の都合もあるんだろうけど。

「わ、私も入学ですか!？」

「勿論だよお。一緒に青春しよ」

あまりの嬉しさにクロエは両目に大粒の涙を浮かべている。

「私なんかの為に…ありがとうございます」

深々とお辞儀をするクロエ、そしてクロエを慈愛に満ちた目でみる東。平和だなあ、なんて思っているがこれからの事を考えるとそうも言えないなあ。

7話 祝!!入学!!

東が俺とクロエの I S 学園への入学を許可して数日がたった。ずっと世間から隠れていた東はこれを機に姿を現し I S 学園へ行く、と公表しようとしたのだが俺は猛反対した。なぜならテロリストや国家の脅威に I S 学園の生徒をさらすようなことはできない……と東を止めるように千冬さんから釘を刺されていたからだ。

確かにこれは原作にはないイレギュラーな事態なので俺も千冬さんの意見に賛同している。東やクロエだけを守るなら訳ないが、他の生徒全員ともなると手が回らない。千冬さんや楯無さんもいるだろうがただでさえ忙しそうなのに仕事を増やすようなことはしたくない。

なので東が I S 学園にいる間は整備士に変装してもらおうことにした。幸い東の顔はあまり公表されていないので身内以外にはバレにくいだろう。住む場所も I S 学園内の地下区画を借りることになった。もとより関係者以外立ち入り禁止区域なのでセキュリティも万全。東の作ったファイアウォールもあるので物理、システムの両方において鉄壁の守りと言えるだろう。いざとなれば俺が直接守ればいいしな。

そんなこんなで入試も入学式も終わり、あつと言う間に最初のHRの時間がやってきた。原作で一夏は客寄せパンダの様だと言っていたがマジでそうだな。クラスメイトはもちろん廊下には大きな人だかりができて俺たちに注目している。リボンの色が違う生徒もいるので上級生も何人か混ざっているようだ。

(こいつは予想以上にキツイなあ…ISを読んだときは一夏が羨ましいなんて思っていたが、まさかこれ程キツイものとは…)

俺の席は真ん中の列のど真ん中。教室の中心に当たる位置にいる。一夏は俺のいる列の一番前で机に突っ伏していた。まいつてるなあ…

男二人が気疲れしていることなど知っているはずもない女子たちは…

「ねえねえ、あなた声かけて来なさいよ」

「ええく恥ずかしいよお。あなたが自分で行けばいいじゃない」

「どっちが好み？」

「私は一夏君かな。だって優しく包み込んでくれそうだし」

「私は断然、俊葵さんかなあ。あの大人な雰囲気は最高よ」

「大人な雰囲気っていうか20歳でしょ、俊葵さん」

「え!? 20歳なの!? よく入学できたわね」

「なんでも秘匿されてきた実験施設の生き残りで子供のころから監禁されていたそうなの。だから20歳からでも青春を謳歌させてあげたいんだって」

「誰がそんなこと決めたの?」

「そんなの国の上層部に決まっているじゃない。男のIS操縦者よ? 優遇されて当たり前だわ」

「俊葵×一夏…イケる!!でゆふふ」

「いやいや、ここは逆もまた然りでござるよ、でゆふふ」

女子が三人集まれば姦しいとは言うがこれだけ集まると姦しいってレベルじゃねえぞ、しかも変な憶測まで飛び回ってるしよお…てか腐女子が混ざってたぞ!?!? くう…畜生、クロエのやつは知らん顔で本を読んでるしよお。誰でもいいからこの針の筵から俺を助け出してくれえ〜

「ねえねえマツチー、お菓子持ってる?」

マ、マツチーって…だぼだぼの制服に身を包んだおっとりオーラ全開の女の子が話し

かけてきた。てかのほほんさんが話しかけてきた。お菓子かあ…あるにはあるが「すまないが最近の若者が好きな洒落たもんなんて持つてないぞ? せいぜい駄菓子がいいところだ」

悪いが俺は駄菓子好きなんでね。のほほんさんの要望には応えられそうにない。

「最近の若者つてマツチーも若者だよお。それに私は駄菓子も好きだから大丈夫。ねえ、少しでいいから分けてえ」

眠くなるような声だなあ。きつとあのおっぱいに包まれながらこの声を聞いたら一瞬で安眠できる(確信)

そう思いながら俺はカバンの中を漁る。

「ほい、ビンラムネとヤングドーナツ、あと桜大根。こんなだがいいのか?」

桜大根つて…:我ながらおじいちゃん臭いなあ

「やった。マツチーのカバンは魔法のカバンだね。ビンラムネと桜大根なんて実際に見たのは初めてだよお。ありがとおくマツチー」

「喜んでもらえたなら俺も嬉しいよ」

のほほんさんは自分の席へとととと戻りヤングドーナツにかぶりついていた。平和だなあ…。

特にすることもないのでボケーっとしていたら山田先生が息を切らせながら入って

きた。

「はあ…はあ…すみません。遅くなつて…しまいました。はあ…はあ…とりあえず自分の席に座つてください」

山田先生が指示を出すとみんな自分の席へと戻つていった。のほほんさんはヤングドーナツを食べ終わつたようで手に付いた砂糖を舐め取つていた。

「全員揃つていますね。それではHRを始めます。私は副担任の山田摩耶です。これから三年間よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

みんなが黙り込んでいる中、二人だけしつかりと挨拶を返した。きつとそいつらはお人好しなんだなあ…俺と一夏だけじゃねえか。みんなあいさつくらいしろよ…。

「はい、よろしくお願いします。それじゃあ自己紹介をしましょう。出席番号順にしてください」

自己紹介を促すと出席番号一番から自己紹介が始まった。ここら辺は原作通りだな、そろそろ一夏の番なのだが相変わらずぼーっとしている。すると山田先生が呼びかける

「織斑くん…織斑くん!!」

「は、はい!!」

一夏も今気づいたといった感じだった。

「叫んじやつてごめんね。でも今、あ、から始まって、お、なんだよね。自己紹介してくるかな?ダメかな?」

「あ、はい。すみません」

一夏はおずおずと立ち上がりクラスを見まわして一言

「ええと、織斑一夏です。趣味は特にありませんが料理やお菓子作りが得意です。これから三年間よろしくお願いします」

自己紹介を終えて座る一夏。てつきりみんながずっこけるようなことを言うかと思っていたが案外しつかりしてるな。みんなも満足しているようだ。

自己紹介は順調に進んで行き、俺の番がやってきた。

「松崎俊葵、趣味は読書(ウスIIイ本)と音楽(アニソン)鑑賞です。好きな食べ物はラーメンですが甘党です。これから三年間よろしくお願いします」

ペこりと一礼をして席に着く。ふう、無事に自己紹介できたな。クロエもしつかりできていたし問題はないな。なあんて思いつつ最後の人の自己紹介を聞いていたら終わったと同時に教室の扉が開かれた。

「すまない山田君、新入生へのあいさつを押し付けてしまって。諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが私の仕事だ。と言つても16歳の青春真っ盛り、

楽しみたいという気持ちもあると思うがそれは学生の義務を果たしてからだ。私に逆らってもいいが学生としての本分を忘れずに行動しろ」

教室内が静まり返る。あれ、原作ではみんな発狂しなかったk

「キヤーーーー!!千冬様よ!!本物の千冬様だわ!!」

「千冬お姉さまご指導を受けるためにここに来ました!!北九州から!!」

「ずっとファンでした!!」

「お姉さまの為なら死ねます!!」

「はあ…毎年毎年よくもまあこんな馬鹿が入学してくるものだ。私のクラスに集中させているのか?」

うっとおしいといった感じだなあ。沢山の人に慕われることはいいことだと思っただけど…

「もつと叱って!!罵って!!」

「そしてつけあがらないように調教して!!」

ダメだこいつら早く何とかしないと…。

「ええい!!黙らんか!!自己紹介が済んだのならそれでいい!!」

クラス全体が黙る。千冬さんばねえ

「よし、ホームルームはこれで終わりだ。次の授業まで休むといい」

そう言うのと千冬さんは教室を出て行った

休み時間かあ…知り合いといってもクロエしかいないし暇だなあ

「俊葵さん…でいいのかわ？」

ボケーとしていたら一夏が話かけてきた。

「俺のこたあ俊葵でいいよ。俺もお前のことは一夏って呼ばせてもらうから」

「でも年上だし…」

なんだ、そんなことか。別に一度死んだ身だし歳なんて気にしてないんだよなあ

「気にすんなよ一夏。同級生に敬語使われちゃむず痒い」

「分かった、これからよろしくな俊葵」

そう言っつて右手を差し出してくる。

「こちらこそよろしくな」

俺はその右手を握った。

「キヤー…!!男と男の友情よお!!薄い本が熱くなるわ!!」

「夏までには…夏までには」

「俊葵氏と一夏氏の握手でご飯三杯余裕ですた」

やっぱりの学校はどこかおかしいと思う。

「なあ俊葵、なんであそこの女子たちはこっち見て喜んでるんだろうな」

「世の中には知らなくてもいいことが沢山あるんだ…」

「ふうん、そんなもんか」

キーンコーンカーンコーン

「じゃあまた後でな」

そう言つて一夏は自分の席へ戻つた

IS学園に入学して初めての授業が始まつた。ISの基礎知識から入ると思つたのだが普通教科の授業だった。高校なんだしこういつた授業があるのも当たり前か。一夏は頭を抱えているようだが一通り学び終わっている俺からしたら復習みたいなもんだし簡単だな。

キーンコーンカーンコーン

ふう…分かつてる内容の授業がこれ程までつまらないものだとは…。

「ちよつとよろしくくて?」

「んあ? ああ、いいぞ」

金髪縦ロールの美人が話しかけてきた。へえセシリアつてこんな感じなんだな。…マジで美人だ。

「まあ!! なんですそのお返事は、わたくしに話しかけられるだけでも光栄だというのに。それ相応の対応があつてもよろしいのではないですか?」

相変わらずキツツイ性格だなあ…ま、この後すぐにデレるんですけどね

「すまない、これまで女性と触れ合うことなんてほとんど無かったものだから緊張している。礼儀もあまり知らないのだ。だが君の事は知っているぞ。確かイギリスの代表候補生だろう?」

「まああなたのこれまでの人生を考えると仕方ないですわね。ですが、わたくしは有名ですから知っていて当り前ですわ」

「おいおい、どんだけ自分に自信があるんだよ…そんなに自信满满だとその鼻っ柱をへし折りたくなるぜ(ニヤリ)」

「なあ俊葵、代表候補生ってなんだ?」

すると一夏が何をかぎつけたのか俺のそばに来ていた。

「読んで字の如く、国の代表の候補生だよ。字面から察しろよ…」

「へえ、じゃあ凄いエリート」

「そう!!エリートなのですわ!!ですからIS学園の試験官を一年生でただ一人、私だけが倒せたのです」

本気じゃない試験官を倒したくらいで誇るなよお…

「それなら俺も倒したぞ」

「な!?!わたくしだけと言われましたが!?!」

「女子ではって落ちだろう」

あくあ、言っちゃった。俺しくらね…とはいかないよな。セシリアはこっちを睨め付け叫ぶように質問をしてきた。

「あなたはどうでしたの!?!」

「俺は筆記も実技も試験はなかった。その代わりにいろんな書類に署名することが多かった」

「んな!?!あなたはわたくしを馬鹿にしていますの!?!」

「そんなことはない。試験がない理由は俺にも分からない」

キーンコーンカーンコーン

「また来ますわ!!」

そう言い残して自分の席へ帰って行った。…嫌な予感しかしねえ。

8話 登場!!謎の金髪美女!?

「これから再来週行われるクラス代表戦に出る代表者を決める。クラス代表とはそのままの意だ、対抗戦だけでなく役員会などにも参加する、いわゆるクラス長と思つて貰つて構わない。自薦他薦は問わないが推薦されたからには責務を果たせ、以上だ」

教壇に立つて千冬さんが言い放つ。面倒だし原作通り一夏に頑張つてもらおうか。

「はい、私は織斑くんを推薦します」

「私もそれが良いと思います」

「いいぞいいぞ。一夏は「はあ!」と言つた顔をしているが俺には関係ない、せいぜい頑張つてくれたまえ。」

「私は俊葵くんを推薦します」

え？

「年長者だしそれが良いと思います」

おいおい

「他に立候補や推薦はいないな?それなら二人に…」

「ちよ、ちよつと待つてくれ。俺は代表なんてしたくh」

「自薦他薦は問わないと言った。文句は受け付けない、やれ」

畜生…鬼、悪魔、千冬。血も涙もねえのかよう…。

「それでは二人のどちらかに…」

「待つてください!!そんな選出認められませんわ!!」

おお、セシリアか。いいぞおもつと言つてやれ。これなら俺も代表しなくて済みそう
だ。

「クラス代表が男だなんていい恥さらしですわ!!わたくしに、このセシリア・オルコット
に三年間もこのような屈辱を味わえと言いますの!!それにクラス代表は新入生主席の
わたくしがなるのは必然!!ただ物珍しいという理由で極東の猿が代表では締まるとこ
ろも締まりません!!」

言いつぎじゃねえか?クラスにいる日本人の顔を見て見ろよ…特に千冬さんとかさ、
青筋立ててるぜ。東から秘匿通信?なんだろう?

《あの金髪消すね》

おい、馬鹿止めろ。後々面倒くさいことになる。それにセシリアには興味がある。だ
からやめてくれ

《むむむ……分かった。俊くんがそこまで言うのならなにか理由があるんだね。でも俊くんを馬鹿にしたことについては許せない》

《それに関しては私も許せませんね。お仕置きしたいです》
東もクロエも落ち着けて、俺が何とかするからさ。じゃあ切るぞ

言いたいことを言っているがエンジンに火をつけたセシリアは止まらない

「大体、文化も後進的な極東の島国で過ごすこと自体がわたくしには耐えがたい苦痛であって……」

「ここまで言われて言い返せないようでは男じゃねえ……でも一夏に言わせないと未来が変わりそうだしな。黙っとくか。」

「イギリスだって島国じゃねえかよ。それに文化的に後進的って言ったけどさ、世界一まずい料理で何年間覇者だよ」

「んな!?わたくしの祖国を馬鹿にしますの!!」

人の国を馬鹿にしとして自分の事となるとこんなにも怒るのかよ。

「俊葵もなんか言ってるやれ。このままじゃ悔しいだろ」

「いや、俺は別に……」

「こんなにも言われてあなたは平気のようですね!?自分の意見も言えないようじゃ……そ

れでも男ですの?」

むう…言いたい放題言いやがって…。

「俊葵、ここで言わねえと男が廢るぞ」

はあ、じゃあ言うか。

「そうだな、ここで黙ってたら男が廢るつてもんだな、一夏の言う通りだ。まあ、いくつか言いたいことがあるが、まずは俺たち日本人を極東の猿と言ったことについてだ。それはつまりISを開発した束…博士や初代ブリュンヒルデの千冬さんも猿って事だろ?ええ?」

何かに気付いたように顔を青くするセシリア。赤くなったり青くなったり忙しいやつだな。

だが俺は喋るのを止めない

「次は文化的に後進的と言っていたが、ISを開発した猿のいる国が後進的だって?ふざけんのも大概にしろよ。じゃあ、その猿に教えを乞いにわざわざ海を渡ってきたお前は一体何者なんだ?まさか猿以上の存在ってことはないよな?」

厭味つたらしくセシリアに言葉をぶつける。まだまだ終わらねえぞ。とどめを刺してやる

「これで最後だがセシリア…お前は国家の代表候補生、つまりは後々国家代表になる可

能性があると言うことだ。それを踏まえて質問だ、国の代表が公共の場で他国の人民を猿呼ばわりしたらどうなるか：猿の俺にはわからないんだ。だから教えてくれ、エリート様なら分かるだろう？」

ふん、ここまで言えばおとなし k

「だ、黙っていれば好き勝手言いますのね？ええいいですわ：そこまで言うのなら決闘ですわ!!」

え？決闘だつて?!まじかよ：こんな場面でメンチ切るなんてこのお嬢様ばねえ。てか一夏とじゃなくて俺とかよ。一夏もどうにかして巻き込まないと

「ああ良いぜ。ただし2つ条件がある」

「ハンデですの？」

「いや、違うよ。一つ目は日時、一週間後にしてほしい。これは学校にも慣れてからじゃないと色々と不便だと思うからだ。二つ目は一夏も含めて三つ巴の決闘にしたい」

「はあ!?!なんで俺まで」

「お前も推薦されていたら？だったら三人でそれぞれ戦って強いやつが代表、シンプルでいいじゃないか」

「わたくしも賛成ですわ」

「うむ、それはいい案だな。おい、織斑、お前も参加しろ。命令だ」

千冬さんのお墨付きもいただき、一夏は諦める。

「松崎さん、織斑さん、首を洗って待っていることね」

「では一週間後に試合を行う。よし、この話はこれで終いだ。授業をするぞ」

千冬さんの一言で決闘云々の話はこれでお開きとなった。はあ…先が思いやられるぜ

昼休み

一夏が箒を連れてこつちに来た

「俊葵、一緒に学食行かないか？」

「俺がいちや箒さんにも迷惑だろう。俺はいいよ、一人で食うから」

丁重にお断りする…だって一夏の後ろで箒さんが睨んでくるんだもん

「そんなことねえよ。てか箒のこと知ってるのか？」

「まあな束とはそこそこ面識あるし、仲もいいからな。あ、これオフレコな。みんなには見たら色々と厄介だし」

一夏と箒さんには束との関係を言っても大丈夫か。

「ああ誰にも言わねえよ。箒もそれでいいよな？」

「私とあの人は関係ない…だから気にも留めない。さ、学食に行こう、この時間帯は生徒が多い」

「そうだな…行こうか」

分かっていたことだが箒さんは束の事を恨んでいるようだな…どうにかして仲直りしてほしいが…。

食堂

「箒は何食べるんだ?」

「私は日替わりの魚定食にしよう」

「俊葵は何にするんだ?」

「そうだなあ…じゃあステーキ定食とチャーシュー麺と照りマヨ丼、あとカツカレーと大盛のシーザーサラダにしよう」

「すげえ食うな…というかお金は足りるのか?」

「俺は消費カロリーの人が人よりも多いんだよ。あと、金の事なら問題ない、束から腐らせるほど貰ってる。こういうところで贅沢しとかなないと使いきれないよ」

俺は様々な能力と引き換えに消費カロリーの人がとんでもないことになっている。もし普通の成人男性と同じ計算で食事をしたら2、3日で倒れるだろう。

「じゃあ俺たちは先に席を取ってるよ」

そう言つて一夏と箒さんは奥の方へ行つた。運ぶの面倒くさいから大き目のトレーでも借りるか。

料理の量も多いし時間がかかった。急いで食わなきゃ間に合わないかもしれない。一夏が上級生に絡まれてるな。会話の内容から察するにどうやら一夏にISの手ほどこぎをしたい様だ。

「私は篠ノ之博士の妹ですので結構です」

そう箒さんが言うのと上級生は渋々と言つた形で引いた。

「なあ箒、俺にISの事を教えてくれるのか？」

「今のを見て察しろ。私に任せておけば鬼に金棒だ」

都合のいいように他人と妹の顔を使い分けるか……束の妹だしちゃんと話をしとかないな。

そう思いながら急いで食事を済ませた。

昼からの授業も終わり放課後。俺は話をするために箒さんの元へ行く

「箒さん、話がある。ここじゃ話せない内容だから屋上へ行こう」

束に関する話だしみんながいなくてここで話した方が良いよな。箒さんからしたら話したくない内容だろうけど俺は束と箒さんには仲良くなつてほしい。というのは建前で束を利用した箒さんを許せない。

「こんなところで何の話だ?」

「昼休みの事さ、箒さん…ふざけるなよ?」

「いきなり呼び出して何かと思えば…悪いが私は姉さんとは本当にk」

バシン!!

俺は箒さんの左頬を思い切りぶった。

「いきなり何をする!?!」

「何をするんだあ?それは俺のセリフだ。お前は束の事を恨んでいるだろう…何故だ?」

「ふんつ、そんなの簡単だ。私たちの家族は『あの人』のせいでバラバラになったのだ。

それ以外に何がある」

「そんな下らねえ理由で束を悲しませるなよ。大体お前は何様のつもりだ?家族を奪われた悲劇のヒロインか?悪いが俺はお前の事を可哀想だとか同情はしない。むしろ俺はお前が羨ましい。今は会えないが家族は生きている、お前を愛してくれる姉もいる、同い年の幼馴染もいる。贅沢すぎて嫉妬するぜ」

「わ、私はあの子のせいで一夏と別れる羽目になったんだぞ!!」

バシン!!

今度は右頬をぶつ

「お前に分かるのかよ…束の気持ちがいや、知ろうともしないお前には分からないか。あの人はなあ…束はなあ!!家族のそばにいたら迷惑をかけると思つて今まで一人で生きてきたんだぞ!!ずっと会いたいけど会えない家族を思つて一人で暮らしてきたんだぞ!!その孤独を…その愛情を…お前が分かるのかよ!!」

俺は泣いていた…大粒の涙を流して、鼻水を垂らして…泣いていた。なんで…なんでこんなに悲しいんだよ。

「私は…愛されていたのか…あの人…いや、姉さんに」

「束はお前の事を誰よりも愛している。会いたいか?」

「…多分、会いたいと思う。でも怖い…姉さんを前に何を話していいかわからない」

「ならまずは電話だ。ほら束だぞ」

束とつながっている携帯を箒さんに手渡す

「な、私はまだ姉さんと話すなど」

《も、もしもし、箒ノ之箒さんでしょうか?》

ぶふっ。緊張していやがる。おかげで涙も引つ込んだぜ。

「ひゃ、ひゃい。箒ノ之箒…です?」

二人とも緊張していて噛み噛みの会話でとても家族の会話とは思えない。でもそれは微笑ましく、温かい会話だった。その会話は十数分の短いものだったが充実してい

た。

箒が携帯を返してくる

「すつきりした、ありがとう。これを機に姉さんと仲良くなれたらいいと思う。姉さんの気持ちもよく分かった。それを踏まえたうえであなたにお願いがある…その…今度、姉さんのところに行く用事があつたら私も連れて行ってほしい」

「分かった、色々と落ち着いたら一緒に行くか。それと俺の事は俊葵でいい。同級生なんだし遠慮するな」

「ならば私の事も箒でいい。これからよろしくな俊葵」

「こちらこそ、箒」

真つ赤に燃える夕日をバックに握手をする一組の男女がそこにはいた。

9話 日常…回？

学園内某所束宅

俺は今日の放課後にあったことを報告するために束のところに来ていた。別に束のところに来なくても束は監視カメラで何があつたか知っている。しかし箒関係の事だしちゃんと面と向かつて話をしたい。だから俺は束のところに来たのだが…どうしてこうなつた？

「俊くくん、えへへ。ありがとう、箒ちゃんと仲直りできそうだよお」

俺は束に抱きしめられていて、俺の体の上で束の双丘が形を変えている。

「おいおい、俺は箒を引つ叩いたんだぞ？怒られこそすれ、感謝なんてされる筋合いはない」

箒大好き束さんからしたら俺は箒を叩いた大罪人だろう。しかし束の反応は俺の想像と全く違って、笑顔で俺に感謝を表している。

「俊くんは箒ちゃんを私の妹としてじゃなくて篠ノ之箒個人として接してくれた。形はどうであれ箒ちゃんの事をしっかり見てくれたんだ。私はそれが嬉しかったんだよ…

まあ、ぶった時はちよつとムツとしたけどね」

俺も束を抱きしめ束の体温と匂いを感じる。

「俺は束を自分勝手な都合で使ったことが許せなかつたんだ。束がいなけりや俺はきつとこの世界で荒んだ生活をしていたと思う。例えば…そうだな、亡国機業に入りテロリストでもしていただろう。それに束の前に転生できたのは今でも運命だとも思ってる。だから俺は束を守り、抱きしめ、そして愛する。誰にも束を渡したくない、ずっと…ずっと俺だけのモノにしたい」

「もう…苦しいよ」

それでも抱きしめる強さは緩めない

「ごめん…離したくないんだ。自分でも独占欲の強い女々しい男だと思うよ。でも束から離れることが…嫌われることがすごく怖いんだ。箒をぶった時は絶望したよ…束に嫌われたと思ったからね」

「私は何があつても俊くんの味方で…誰でもない松崎俊葵の女だよ。私は箒ちゃんの姉でちーちゃんの友達、いっくんのお姉さんの存在だよ…でもね、でもどの私も女じゃないんだよ？私が女でいられるのは俊くんの女であるときだけ。愛してるよ、俊くん」

目頭が熱くなる…

「泣いてるの？」

「泣いてる…」

「悲しいの？」

「嬉しいんだ…俺の東に対する気持ちは本気だし、東の俺に対する気持ちも本気だったから」

涙が流れ落ちて口の中がしょっぱくなる。胸の奥が熱くなり東に対する気持ちがあふれ出す。俺自身、どうすることもできなかつた。ただただ、東を愛していた。

「抱きたい…」

「もう…寮の門限はどうするの？」

「そんな無粋なこと気にすんな」

そう言う俺は東の口を自分の唇でふさいだ。舌は入れない軽いキス…でも今の俺たちにとつて情欲の爆弾に火を付けるのには十分だった。

「今更、寮に戻るって言っても帰さないんだから」

「帰れって言われたって帰りたくないよ」

東の手がゆっくりと俺の制服のボタンを外していく。俺も東のドレスの紐を緩める。

「あ、風呂入ってねえや。なあ先にシャワーだけでも」

「ダメ…俊くんの匂いが落ちちやうもん」

「そっか」

俺も束の匂いが落ちるのは嫌だしシャワーは全部終わってからもいいか。

俺たちは二人で寝るにはあまりにも大きすぎる天蓋付きのキングサイズベッドに入り互いの愛を深く、深く確かめ合った。

翌朝

俺は目覚ましのアラームで起きた。束は先に起きていたようで俺の寝顔を見ていたようだ。

「おはよう、俊くん」

「ああ、おはよう。俺の寝顔はどうだった？」

「凄くカッコよかったよ／＼」

「そうか、束の寝顔を見たかったんだが…それは今度になりそうだな。よし、早めに着替えて学校に行かないと、悪いがシャワー借りるぞ」

時計の針は6時半を刺しているが食べるご飯の量が多い俺は早めに出ないと間に合わない。もっと束と触れ合っていたいが時間がそれを許さない…幽波紋でも使えるように神様をお願いすればよかったなあ。あ、でも時止めは自分しか動けないから意味ないや。

そうこうしているうちに準備を済ませる。

「せいじや、行つてくる」

「うん、行つてらつしやい。次はいつ頃こつちに帰つて来るの？学内の寮に帰らなきやいけないのは分かるけど寂しいな」

「少なくとも束が俺の感触を忘れないうちに帰るよ」

「もう／＼／」

顔を真つ赤にして照れる束。俺の頬も熱いし、きつと真つ赤になっているだろう。恥ずかしいからさつさと部屋を出て食堂へ向かう。その途中で一夏と箒に会った。

「昨日はすまなかつたな箒」

「いや、こちらこそすまなかつた。姉さんに対する見方が変わったよ。いままで恨んでいた分、これからはたくさん姉さんと楽しいことをしたいんだ」

「その意気だ。仲直りできたようでよかつたよ。あ、そういや俺と一夏は同じ部屋だったよな？」

「そうだぜ、全く…昨日はどこに行つてたんだよ。心配したんだぜ？それに千冬姉に俊葵の居場所を訊かれてとりあえず風呂に浸かつて言つて誤魔化したけどさ」

「ありがとな、昨日の夜は束のところに行つてたんだ。朝まで帰らなかつたんだからナニがあつたかは分かるだろう？」

すると二人とも顔を真っ赤にする。初心だなあ。

「ね、姉さんは学校にいるのか!？」

「まあな、会いたい時は何時でも言ってくれ。あそこのパスは俺と東とクロエしか持っていないんだ。千冬さんにもパスを渡そうとしたんだがパスは知ってる人が少ないほど安全だと言われて受け取ってもらえなかったよ。あ、この事はもち他言無用な。一夏も誰にも言うなよ?」

「分かった。誰かに言ったら問題になりそうだしな」

他愛もない会話をしていたらすぐに食堂に着いた。

そして一夏と箒は日替わりの和食定食を、俺は大盛のうな重二つと野菜味噌ラーメンを頼んだ。朝食なので軽めにした。

「朝からうな重とラーメンかよ…」

「昨日もそうだったが俊葵は凄く食べるな」

「一夏も箒も慣れれば驚かなくなるさ」

一夏と箒は昔話に花を咲かせながら食事を楽しんでいる。過去があるってのはいいなあ…。

なんて思っていると三人組が近づいてきた。

「マツチー(こ)いいい?」

「別に構わんぞ」

「やったー」

そう言つてのほほんさん率いるいつもの三人組が俺を囲むように座る。

「松崎くん、朝から凄く食べるね」

「俺からしたらサラダだけとかパンだけとかで昼まで動ける君たちの方がすごいと思うよ」

「女の子には色々あるんだよ、マツチー」

「痩せていたいって気持ちちは分かるが痩せすぎはダメだぞ。朝は一日の始まり、しっかりと食べないと動けないぞ？それにちつとくらい肥えてる方がよか」

本心なのだがセクハラ発言になつたりしないだろうか…心配だ。ほぼ初対面の女子生徒に肥えてる方がよか、なんて危ないよな。

「寝起きは…ほら、食欲があまりないと言うか」

「うんうん、朝は食欲が…ね」

ふくん、言い訳っぽいけど納得。俺みたいにかくさん食べれる方がおかしいんだから。

「それに朝からうなぎなんて贅沢はできないよ」

「マツチーおつかねっもちっ♪」

のほほんさんが変な歌を歌ってる。まあ、そこら辺の富豪よりは金持ちだろうけどさ……こう、面と向かって言われると照れるなあ。

「まあな、それなりに金は持つてるよ。どうせろくに買い物にも行けないんだ。食に使う以外に有効な使い道なんてないよ」

箸を進めながら適当に返す。はあ……外出許可が出ればアキバに買い物に行つて俺の寮部屋を俺色にカスタムしたのになあ。IS学園は特性上、通販で買ったものを確認するし同人誌やブルーレイボックスもおちおち買えないよ。IS学園つて以前に女子高つてのもあるんだろうけどさ。

教室

「ふう……ちよつと朝から食いすぎたかも」

「当たり前だ。なんで追加注文でトリプル海老天肉うどん大盛卵乗せを頼んだんだよ……」

一夏が呆れながら俺に質問する。

「仕方ねえだろ。だって海老天がトリプルで肉まで乗つかつてるんだぜ？頼むしかないだろう」

昆布とカツオの出汁が効いてとても優しい味なのだ。海老と牛の時雨煮が味の薄さを感じさせない程のインパクトがあった。IS学園の料理はどれももうまいと思う。世界中から生徒が来ているので種類もそこら辺の私立よりも格段に多い。しかも学食なので値段もリーズナブルで頼みやすい。学生の懐事情に優しい学食の鑑だな。おっと山田先生だ、もう授業開始か…席に戻らないとな。

「んじゃ、またあとで」

「ああ、あとでな」

束からISについて色々教えてもらっていたから何とか授業にはついていけるが予備知識のない一夏は大丈夫かな？

「ここまでで分からないことがある人はいますか？」

山田先生がクラスを見まわす。すると一人だけ手を上げていた。

「はい、織斑くん。どこが分からないんですか？」

「ほとんど全部分かりません!!」

自信満々に一夏は答える…ってアホか!!入学前にぶ厚い参考書を貰わなかったのか？

「おい、織斑。入学前に渡したあの参考書はどうした？」

「ああ、あのぶ厚いやつですか？電話帳と間違えて捨てました!!」

スパアン!!

「景気のいい音が教室に響き渡る。あの出席簿って絶対に強化セラミックとかチタン合金製だろ…あれ固すぎだ。」

「馬鹿者!!必読と書いてあっただろう!!まったく…再発行するから一週間で覚えろ。命令だ」

「え、いや、あのぶ厚さを一週間じゃ」

「やれ」

「はい…」

「どうやら日本の高校は絶対王政を取り入れたようだ。一夏カワイソス、南無。」

「そんな一夏を置いていかないように山田先生は初歩の初歩から授業を進めてくれる。山田先生は…ね、千冬さんの授業？H A H A H A、俺も付いていくので精いっぱいだよ」

(…w…)

放課後

「やつと今日も授業が終わった…これからセシリア対策しなきゃいけないしだるいなあ。」

「なあ俊葵、放課後空いてるか？」

「一応、空いてるな」

「じゃあ一緒に特訓しようぜ？ 箒も一緒にしてくれて言ってくれてるし」

特訓って言ってもどうせ剣道だろ？ I S 関係の特訓ならいざ知らずどうして剣道に参加せにやいけんのだ。

「俊葵も一緒にしないか？ 私は別に構わないぞ。俊葵の実力も見ておきたいしな」
箒もこう言ってるし少しくらいなら参加してもいいかな。

「分かった。参加しよう」

「そうか、では早速道場に行くとしよう」

道場

「本気でやっていいんだな？」

「手加減無用…本気の俊葵が見たい」

俺は今、防具を付けて箒と相対してる。

一夏が右腕を上げて合図をする

「いざ尋常に…勝負、開始!!」

俺は試合開始と同時に無拍子で箒に近づき面を打つ。虚を突かれて箒も反応ができ
ない

「ぐ…これが俊葵の本気か。防御も反撃もできなかった…」

「悪いが手加減はできなかった。束を守る役目を担ってるからな、公式非公式問わず負けるわけにはいかないよ」

「まいった…でも一泡吹かせられるくらいには強くなる。私はまだ自分の身も守れないくらい未熟だ。だから頼む!!私を弟子にしてくれ!!」

両手と額を床につけ土下座をする箒。プライド捨てすぎだろう。だが箒にここまでさせたのだから弟子にするのもやぶさかではないがどうやって鍛えればいいのか分からない。特に俺の場合は強化人間であるからできることもある。

「お、俺も弟子にしてくれ!!俺も強くなりたい!!」

一夏も箒の隣で土下座をする。

「何故強くなりたい?覚悟なき力はただの暴力だ。使い方次第では自分の身はおろか周りの大切な人まで傷つける。厳しい道になるぞ?覚悟はいいか?俺はできてる」

「私は強くなつて俊葵と一夏の隣に立つて戦いたいんだ。私は専用機を持っていないから自分自身を鍛えたい。そして守られるだけの存在から守る存在になりたい!!」

「俺もそうだ!!千冬姉に守られているだけじゃいやなんだ!!」

「分かった…お前たちの覚悟は受け取ったよ。」

こうして俺は生まれて初めて弟子を取るようになった…あれ?俺は剣道の試合をし

に来ただけだよな？セシリア戦に間に合うかな…

10話 俊葵VSセシリア

一週間という時間はあっと言う間に過ぎていった。そして今日は俺と一夏とセシリアが試合をする日だ。試合の順番は

俊葵VSセシリア

俊葵VS一夏

一夏VSセシリア

という感じになっている。

俺はセシリアとの勝負開始をピットで待っている。なんでも東が俺の為に新しいISを持って来てくれるそうなのだがまだ来ていなかった。

「東、遅いですね」

「あいつは必ず来る、あいつの恋人なら信じて待て」

んな?!なんでバレてんだ?!俺は一夏と箒にしか言っていないし…あいつらが誰かに話すなんてことはない…まさか

「東本人から惚気話を聞かされたよ。お前はフェチが色々あるそうだな(ニヤニヤ)」

「試合前から精神攻撃はやめてくださいよ…マジ恥ずかしいです」

束のやつ…あとでお仕置きしないとイケないな。

俺は今、千冬さんと二人で束を待っていた。一夏は試合内容を見ないためにアリーナの更衣室で待機、山田先生はセシリアのいるピットでセシリアの機体の整備をしている。なのでここにいるのは俺と千冬さんの二人だけ。

こうして二人で語り合うことがなかったから新鮮だ。もつと厳格な人だと思っただけど意外とフランクで会話が弾む。内容は俺の暴露話だけど…

ピットの扉が開き束（変装済み）が入ってくる。

ピン底メガネにぼさぼさの髪の毛、所々に焦げ跡のある白衣。初めて見た時は不覚にも萌えてしまつて押し倒したのはいい思い出だ。

「完成したよ!! 俊くん専用の新しいISが」

「ありがとう、束。いったいどんなISなんだ?」

「あの金髪のISが射撃型だったから同じように射撃に重きを置いた機体にしておいたよ。名前は嵐。俊くんなら使い方わかるでしょう?」

「勿の論だ。任せろ」

目の前にある深緑色のISを見る。ふつ…おつと、嬉しすぎてニヤニヤしてしまつた。よし、俺はその全身装甲を身にまとい空へ行く。

束は笑ってた。安心して待ってる。絶対に勝ってくる!!

アリーナ内

「待たせてしまったかな?」

俺よりも上空に陣取るセシリアに軽い挨拶をする。

「いえ、そんなに待っていませんわ。それに余計な挨拶は必要ありません。さあ始めましょう、覚悟はいいですか?」

覚悟だと?それこそ無粋な挨拶だな

「当方に迎撃の用意あり!!覚悟、完了!!」

俺の叫びと共に試合開始のブザーが鳴った

セシリアはすぐに射撃をしてきた。予想通りだな、強化人間の俺からしたらセシリアがどう動かないって手に取るようにわかる。体を少しだけ反らして最小限の動きで避ける。

「流石ですわね。ではこれはどうでしょう?」

ビットを最初から4基使ってきた。これは俺も少しは本気で戦った方がよさそうだな。両手にGNライフルビットIIを構えセシリアに向け速射する。

「悪いがお前の間合いで勝負する気はない。」

瞬時加速で一気に距離を詰めながら近づくがセシリアはライフルで威嚇しながら後ろに下がる。流石は代表候補生だな遠距離での戦いはお手の物か：だがそれで諦める俺ではない。ハイパーセンサーで360度の視界だからこそできる芸当なのだがライフルの片方をビット、もう片方をセシリアに向けながら発射する。セシリアは自分が回避するのに精いっぱいなのでビット操作が追い付かない。ふっ、一基とつたぞ。残り3基か：まだまだエネルギーはあるんだ：気長にやるさ。

そのころ、千冬はこの試合を見ながら不思議に思っていた。

「なあ束。俊葵は本気を出していないだろ？」

「うん、本気のほの字どころか弱気のよの字も出してないよ。だってあの機体、初期化も最適化もしてないんだ。もう少ししたら俊くんもそれに気づくはずだよ」

なん：だと？初期化も最適化もせずにあの性能か。束のやつ惚れた男に渡すISだからってこんな高性能な奴をプレゼントしたのか!?

「ちーちゃんの考えは少し違うなあ。確かに私の恋人が乗るISだから最高のISに仕上げた。でもあのISは俊くん以外には絶対に乗れない。だって私が俊くんにプレゼントしたISは高性能すぎて搭乗者の生命を度外視したISだもん。強化人間の俊く

んだからこそ乗れるんだよ。必然的に俊くんの専用機、色んな組織から同じもの作られて言われても搭乗者が死ぬんじゃない意味がないしね」

「お前は本当に身内には甘いな」

私は少しずつでもお前が世間に対して前向きになってくれてうれしいよ。きつと俊葵のおかげなのだろうな。だがどうしてだろう…東が俊葵を見るたびに私は何とも言えない感情になる。くつ…余計なことを考えるな。私は教師で東の友人だ、ただそれだけだ。

千冬は東を取られた自分への悔しさと俊葵への嫉妬、自分よりも強いのではないかという俊葵へのあこがれで心中穏やかではなかった、しかし今はこの感情に気付いてはいなかったのだ。

にしてもこの初期化と最適化って結構時間かかるんだな。一夏のやつよく原作で戦いながらできたよな。セシリアの弾幕もビットを3基を破壊したこともあってある程度は薄くなってきたよ。残るビットはミサイルも含めると3基か…ミサイルは懐に入られたとき用だろうからまだ使わないはずだ。あとはライフルとビットの連携に気を付けていければ何とかかなる。

「さっきから逃げ回ってばかりで…おちよくっていますの!?!」

セシリアもしびれを切らしているようだ。ビットを3基破壊してからはずっと逃げながら初期化と最適化をしてるしな。怒って当然か…だがそのおかげで射線が荒くなってきたいて避けやすい。

「安心しろ。今からが本気だ。覚悟しておけよ？」

俺はそう言うど初期化と最適化を終わらせ一次移行すると嵐の装甲（GNミサイルポッド）が追加されてよりごつくなる。そして腰回りにはGNホルスタービットが追加された。

「GNビット、前面に展開!!」

俺はセシリアの周りに合計14基のビットを展開した。

「今までは初期設定もしていない機体で戦っていたといひますの!?!それにこれだけの数のビットを!？」

セシリアも驚きを隠せていないようだ。

「フアイヤ!!」

そしてセシリアは光に包まれ試合終了のブザーが鳴った。

「ね、俊くんは序盤、本気を出してひなかつたでしょ？」

「ふん、どうせ一次移行しても本気じゃないんだろ？」

冗談っぽく束に返す。しかし束からの返答に私は驚いた。

「よく分かったね、あれでも本気じゃない、少なくともあの状態での稼働限界の3倍の性能を出せるモードがあるよ。1分間だけだね。疑似GN粒子の開発ができたからトランザムも可能になったんだよ。それにほかにも色々あつてねry」

何を言ってるの私にはさっぱりだがとりあえず束は今の研究が楽しいらしい。束のこんな笑顔を見るのは本当に久しぶりだ。なのにやっぱり胸の奥がチクチクするな：はあ。

ため息を吐く千冬は色っぽかったのだが束以外に誰も見ている人はいなかった。

アリーナ内シャワー室

わたくし、セシリア・オルコットは泣いていた。とても悔しかった、今まで下に見ていた男に負けたのだ。決して油断していたわけでも、手を抜いて戦っていたわけでもない。それなのに負けたのだ。

わたくしの父はISの登場以前から母の顔色を窺っていた。そんな父をうつとおしいとすら思っていた。男なんて情けない生き物：そう思っていたのにあの人は：俊葵さんは違った。代表候補生であるわたくしにも臆せず立ち向かってきた。まっすぐな目でわたくしを見ていた。よくよく思い返せばあの目は父の目と同じだ。なにかを

覚悟した目、誰かを愛している眼、誰かを守ろうとする眼。しかし父はそんな目をほとんどわたくしには見せてくれなかった。いや、きつと見てくれたのでしよう。でもわたくしは固定概念にとらわれて父の優しさに…父の愛情に気付いていなかったのです。

そう思うとさらに涙があふれた…わたくしを鍛えてくれた母、わたくしに愛を与えてくれた父、でも両親はもういない。わたくしは一人で貴族社会を生きなくてはいけないのだ。きつとわたくしが男性に求めていたのは単純な強さではなく慈愛に満ちた強さだったのですね…。どうやらわたくしは慈愛に満ちている俊葵さんに惹かれたようですね。

「松崎…俊葵…」

あの人の名前を口にするだけで胸の奥が締め付けられるような感覚に陥る。頬が赤くなり心拍数が上がる。やはりわたくしは俊葵さんの事が好きになったのですね。自然と口角が上がっていくのが分かりますわ。

「俊葵さん…愛していますわ」

そのシャワーの音にかき消されそんな言葉はセシリアの心にしっかりと届いたのであった。

「ああ、疲れたあ。やっぱ代表候補生相手だと疲れるわ」

セシリアとの一戦を終えて千冬さんに挨拶をしてからシャワーを浴びていた。ふう
：疲れた体に熱いシャワーが気持ちいいぜ。一夏との対戦まであと25分、クローラーの
効いた待機室でゲームでもして時間をつぶすか。

ガララ

む？誰が入ってきたな。まあどうせ束だろう。

「とくしくん、全身を洗いに来たよ」

知ってた、予定調和、いつもの、またお前か

俺の脳内で赤の大文字でコメントが流れる。

「終わってからにしろ」

裸で抱き着いてくる束を引きはがす。

「それにいいのか？もう汗を流しちまったぜ？」

「それってどういう…はっ!？」

どうやら理解してくれたようだな、話が早くて助かる。

「束さ、俺の汗の匂い好きだろ？だったら我慢の一つくらいしてくれ。どうせ一夏戦の
後は暇なんだから」

そう言っつて俺はシャワー室を出てISスーツに着替えた。

ふう、やっぱクローラーの効いた部屋でのゲームは最高だぜ。束と楽しんでおけば…なんて後悔は少ししかしていない、だって程よく疲れているときに裸の束だぞ。興奮しないわけがないじゃん。これ以上に疲れてしまったら抑え効くかなあ…。

「むぎゅ〜〜〜」

束が後ろから抱き着いてくる。お、おっぱいががが。

「いっくんには宇宙と嵐のどっちを使うの？束さん的には宇宙を使ってほしいかなあ。いっくんがボロボロになるのを見たくないし。ねえ、ちよつとくらい弱気で戦つてよ」

「俺は宇宙を使うよ。でも弱気でやらない、じゃないと一夏の覚悟に無礼だ。束には悪いけど一夏の今後の為に本気で戦う」

束は少し残念そうな顔をするが納得してくれたようだ

「いっくんの為なら仕方ないなあ…我慢する。でも我慢するのは俊くんの為なんだからね」

「分かってる。じゃあ俺は機体の整備でもしてくるよ。新装備も使ってみたいしな。んじゃ、行ってくる」

待機室を出てピットへ向かう。ふふふ…新装備を使うのが楽しみだぜ（ニヤリ）

11話 俊葵VS一夏 からの兄貴

「お前との出撃はあのフランスでのミッシヨン以来だな。あの後は色々忙しくて構ってやれなくてごめん。だからこの勝負、本気でやろう。新装備もあるんだ、きつとお前も気に入るよ」

俺は今、宇宙と喋っている。喋っていると言っても宇宙は何も返してはくれない、ただのISの様だ、なので俺が一方的に話しているだけなのだが、なんとなく宇宙が何を思っているのかわかる。

「じゃあ新装備を拡張領域に入れるな。大丈夫、グラインド・ブレードの時みたいは無茶はさせないよ。それにあれも改良されてお前への負担が格段に無くなったんだぞ？」

今回俺が束に頼んでいた新装備はパツと見ただの刀、よく見ても刀、使ってみても刀、そう!!刀なのだ!!…いや、だってね、一夏くんは雪片一本じゃないですか。だから師匠としては同じ土俵で戦いたいわけですよ。手加減なんてするつもりはない。本気で一夏とぶつかり、そして勝利する。一夏にはまだまだ上を目指してほしいな。

「それじゃあ行くこうか、宇宙」

宇宙に乗り込み一夏のいる空へ向かった。

「よお、遅かったじゃねえか。トイレでも行つてたのか?」

「お前こそ一次移行済ませたばかりで機体に慣れていないんじゃないか?」

お互いに軽口をかますが目は本気だ。この勝負、強化人間である俺が有利なのは明らかだが、一夏の爆発力は侮れない。勝つ、絶対に。

試合開始の合図が鳴る

「一気に決めるぜ!!」

一夏は瞬時加速で距離を詰めながら雪片を中段に構えて突撃してくる。俺は今、獲物を持つていないから一撃必殺を叩き込むのが常套手段。それに加えて一夏のISの武装は雪片のみ、短期決戦に持ち込むのは当たり前。ふっ、そのくらい予想しているさ!!俺には瞬時加速中でも一夏の動きははつきりと見える。だからこそこんな芸当ができる。高速戦闘を行うISではナンセンスな代物だが…一夏の手首を掴み一夏自身の力も利用して関節をキメ、拘束する。

「イデデデデ!!お、おい!!関節技なんて卑怯だろ!!」

「うるせえ!!油断したお前が悪い!!」

このまま肩を外して剣を握れなくする!!

ガキョ!!

嫌な音とともに一夏の右腕がだらんと力なく垂れる。手から滑り落ちた雪片は粒子に変わり拡張領域へ戻る。

「師匠としてお前に言わせてもらう。お前は近距離戦しか出来ない、故にそこを磨くしかない。だから俺は近接でお前を倒した。こつちこい、関節入れてやる。」

両選手ともに獲物は剣一本。自分の経験上だが勝負は一瞬…千冬はそう思っていた。その予想通り試合自体はすぐに終わった。しかしまさかIS戦闘において関節技を見ることがなるなんて思ってもいなかった。

「まさかあんな技が見られるとはな」

「俊くんも本気だよ…手加減はしないって言ってたけどなかなかどうして斬新な技を使うねえ」

俊葵の本気、予想外の戦術はブリュンヒルデと天災を驚かせていた。そして一番驚いていたのは戦いの場にいた一夏自身だった。

「関節技をキメられるなんてな…だけどエネルギーはまだ残ってる。俺はまだまだイケ

るぜ、俊葵」

「俺だつてまだ使つてない新兵器があるんだ。イクぜ？」

そう言つて俺は新兵器である刀を取り出す

「なあ、もしかして新兵器つてその刀か？」

不思議そうに一夏が訪ねてくる。ま、そうだろうな。新兵器がこんな人間用（・・・）の刀なんだから。

「ただの刀でも肌が露出している部分に当てればシールドエネルギーだつて削れる。問題は無い、あるとすれば折れやすいつてことくらいだ。早くやろうぜ？ 楽しみすぎてニヤつきが止まらねえ!!」

ここから先は小細工はいらない。思考もいらぬ、直感だけを信じて本能で戦う!!

「あんなに楽しそうな俊くんはなかなか見れないよ。多分ベッドの上でも見れない。ちよつといつくんに嫉妬しちゃうなあ」

「お前らの事情はどうでも良い…という分けではないがそんな報告はいらない」

「えへへ。ちーちゃんが妬いてるう」

「う、うるさい／＼!!私はまだお前と俊葵の事情など聞きたくないだけだ!!」

この間から俊葵の事が気になりだしている千冬…否定はしているが顔を真っ赤にし

ているので説得力はない。

「む、なんだその顔は？」

「もしも、もしもだよ？ちーちゃんが俊くんの事を好きになつたら俊くんハーレムの王様になるなあって思つて」

「んな？！ばば馬鹿なことを言うな！！私が生徒を好きになることが」

「あるわけない？私にはそうは見えないけど…まあ、ちーちゃんがそういうならそういう事にしといてあげる」

千冬は不満そうな顔、束はニヤついた顔でまるで長年連れ添った熟年の夫婦のような痴話げんかを繰り広げていた。

試合を見ながら痴話げんかを繰り広げる余裕のある二人とは違って一夏は焦っていた。いくら切り付けても上手くいなされる、躲される、カウンターを当てられる。決して罅迫り合いにはならない。それは一夏も理解していた。

刀が折れるから罅迫り合いは避けているな…しかも俺より格段に強い。でも、俊葵に追いつかないといけないんだ！！もつと強くなるためには！！シールドエネルギーはあと少し…だから仕掛けるなら…今だ！！

俺は俊葵に向かって瞬時加速をかける。俺が千冬姉から教わった唯一の技、居合で勝

負に出る!!雪片を軽く握り全身の力を抜き集中する。勝負は一瞬…絶対に勝つ!!

一夏のやつ勝負に出たな…居合か。下段からの打ち上げの一撃…零落白夜まで使ってきたやがる…だが負けないな。

俺も居合の構えで左手に刀を持ち、下からくる斬撃を防ぐ、一撃くらいなら折れないはずだ。そして右手に持った鞘で一夏の顔面を思い切り叩く。そして怯んだ隙に左手の刀を返して斬撃を加える。

試合終了のブザーが鳴り一夏と俊葵が同じピットに戻る。結果は俺の勝利。

「くっそお、負けちまったあ。マジで悔しいぜ」

一夏が真つ先に俺の方へやってくる。超悔しそうだなあ。

「その悔しさをバネに頑張れ。それができなければお前は…いや、お前はこんな負けで諦める奴じゃねえ。剣道の試合でも何度も諦めずに挑んでくるもんな、一夏」

そう言つて俺が差し出した右手を一夏は掴む。

「ああ、諦めない。いつかお前にも勝つてやるからな」

「いつでもどこでも挑んでこい。真つ向から叩き潰してやるよ」

「油断して負けたりすんなよ?あ、そういやあの技凄いな。まさか鞘で殴られるなんて思つてなかったよ」

「まあ剣道の試合では鞘は無いから驚いただろ？かなり実戦向けの技だから強いし、居合技の後に隙を作りにくい…だが剣道でも勝てないお前には早いよ」

俺もあの技を使うなんてなあ…ちよつと大人げなかつた。本気とは言ったけど卑怯だったかもしれない、不意打ちみたいなものだし…

「俺の雪片には鞘がないからできない技だよ、それに俺は居合を極める事にする。手数が多いいことはいいいことだけど俺はそんなに器用じゃないから一つの事に集中するよ」

「お前のしたいようにすると良い、戦闘スタイルは人それぞれだ。一夏に合つたスタイルがあるはずだ、それを見つければいい。それよりも千冬さんのところに行つた方が良いぜ？向こうでイライラしてるぞ、試合前にどうせ余計なことでも言つたんだろ？じゃあな」

そして俺は部屋を出て束のいる整備室へ向かう。今日の戦いで宇宙にはちよつと無茶させたし労つてやらないと。

「たぐねさくん、いくまぐすくか？」

「はいはい。こつちこつち、一番奥のハンガーにいるから来て」

俺は手招きされハンガーに入る。ふむ…見た感じの損傷は見られないが束の持つているタブレットを見ると関節部が酷い有り様になっていた。さっきの試合はIS用の

武装を使っていなかったし仕方ないよな。

「計算上ではあの程度の戦闘では破損は無いはずなんだけど、俊くんには机上の空論だったみたいだね。早く別の型のＩＳも作ってあげないといけない、じゃないと俊くんのＩＳ戦闘のパターンが限られるし」

「そうだな、急いでくれ。あとのくらいでできる？」

「うーん、そうだねえ…夏の臨海学校には間に合わせるよ」

「それは助かるな、キャノンボールファストには最強最速のＩＳで参加してみんなの度肝を抜きたい」

臨海学校では銀の福音も暴走するだろうし、ある程度の戦力と戦術が欲しい。いや、待てよ…あの事件は確か東さんが黒幕じゃなかったか？だとしたら銀の福音は暴走しないはず…ま、今考えてもしようがないことだしこの事はしばらくは忘れよう。だって心配事しながら女を抱くなんてできないだろ。

「もう…ここでするの？」

「こんな時間じゃ生徒も先生も来やしないよ」誰かそこにいるの？」

来たよ…ちえ、良いとこだったのに

「すまない、ここは君の特等席だったかな？それなら出ていくよ、一番端っこつてのは居心地が良いもんでな」

「ううん、別に構わない。それよりもそのISは？」

「俺のISだよ、ちと特別製なんだが今回の戦闘ではIS用の武装を使わなくてな。武器を壊さないように戦ってたら関節部がボロボロになってしまっただよ。」

「お前は？」

「私はISを作りに来た。私のIS…未完成だから」

「お？よくみたら簪じゃないか。原作の絵だけでは分からなかったよ。セシリアみたいに目立ってなかったし…いや、簪が地味ってわけじゃない。ただ前髪を伸ばして目元が見えないし、頭にヘッドパーツを付けてないから気付かなかったよ。」

「一人でISを造ろうとするなんてすごいじゃないか。でも無理はいけないぞ。おい、お前も一緒になって…束のやつどこ行きやがった（ボソ）」

「面倒くさそうだからって逃げたなあ」

「あの人なら今さっき出て行った。あなたも帰るといい、もう遅いから」

「それは俺のセリフだ。お前は帰らないのか？根を詰めすぎても良いものは生まれないぞ」

「簪に必要なのは十分な休養と手助けだろう。でも原作でも一人で作ろうとしていたし…どうにかして手伝いたいなあ。」

「だから今日は帰れ、明日になったら俺も手伝うから」

「あなたには手伝って貰わなくても平気…一人でできる、お姉ちゃんがそうしたように」
強情だなあ…。

「ならＩＳだけでも見せてくれないか？意外なアイディアが浮かぶかもしれないぞ。それにお前はお前だろ、お姉ちゃんがすごいからと言ってそれに準ずる必要はない。お前なりに強くなりやいいんだよ。俺からしたらお前は凄いいよ、だって俺はＩＳを作るなんてことできないもん」

「あなたには私のことは分からない…でもそこまで言うなら見せてあげる…どうせすぐに諦めると思うけど。だって私のＩＳは普通じゃないから」

そう言つて簪は立体映像に打鉄式式を出す。原作通りのコンセプトだな。

「ミサイルによる飽和攻撃か…いい案だと思うが制御が難しすぎる上に隙がデカいな、ミサイルの展開中に狙撃されたらどうする？それに俺ならミサイルの雨を撃っている間にショットガンで迎撃、爆発を煙幕代わりに利用して瞬時加速で近付き重い一撃を加える。例えば逃げようとミサイルのない高速機なんてその辺の戦闘機と一緒さ。近接用の薙刀を持っているな、獲物のリーチはそのまま戦いにおいて優位に立てると思つたんだろう？しかし防御面が心許なさすぎるし、罅迫り合いになればスラスターで対応できないこともないが相手が捨て身になつてお前の攻撃を防がずに攻撃して来たら無意味だ。お前が近接戦闘に相当の自信があるなら別だけどね。まだあるが言つた方が良い

かな?」

「ううん…もういい」

ありや? 言いすぎちまったかな? 見るからに落ち込んでるし

「もう言わなくていい…」

「そうか、すまなかつたな。言い過ぎたよ」

「謝らなくてもいい…だつて本当の事だから。私も色々反省しないといけないみたい…もしよかつたら昔話をしてもいいかな?」

「門限までは時間がある。構わないよ」

ちつたあ俺に心を開いてくれたかな? 簪が自分の事を自主的に話すなんてな…嬉しいぜ。

私の名前は更織簪、日本…いや世界の暗部で動く更織家の跡取り娘。でも私は跡取りじゃない、正式に更織の名前を継いだのは私のお姉ちゃん、更織楯無。とても尊敬していた、敬愛していた、憧れていた、いつまでも私の前に立って明るい世界を見せてくれると信じていた。でもそれは中学生になるまでだった…私はお姉ちゃんみたいに社交的でも明るくもなかつた。だから正式な跡取りにはなれなかつたの…でも別に良かった、お姉ちゃんが輝かしい世界に羽ばたいて行けるなら私はいくらでも応援する。

そのつもりだったのに…あの日は今日みたいな快晴じゃなくてすごく雨の降っている日だった。「簪ちゃん、貴女はずっと無能のままでないさい。貴女はなにもしなくていいの」更織の名を継いだお姉ちゃんの最初の言葉。絶望した…お姉ちゃんにとつて私の応援が邪魔なのだったら私が離ればいいだけの話だった。でも違ったの、お姉ちゃんにとつて私は邪魔にすらならないどうでもいい存在だった…いなくて当然の存在だった。明るい世界から一気に暗闇に落とされた…でもお姉ちゃんはロシアの代表になり、一人でISを組み上げて、IS学園の生徒会長にまでなった。以前の私ならお姉ちゃんの成長を手放しに喜んでいた…でも今は憎いの…凄く憎い。なんで!!なんで私じゃいけなかったの!?!ピットクルーやお付きのメイドはよくてなんで私は!!いつもお姉ちゃんの周りには誰かがいる…そして私の周りには誰もいない…小さいころは友達もいたけどお姉ちゃんのほうが面白い話をできるし、スポーツもできる。だからみんなお姉ちゃんの周りに行つた…私の明るい世界だけじゃなくて友達まで奪つたの、「あの人」は。

今よりはお姉ちゃんに対して追い付こうと思つていた時期に薙刀を始めた…全国区で戦えるくらいの実力になった。でもいくら頑張つても追い付けなかった。メカに關しては人一倍知識があつたからISだけでも一人で組み上げようと思つたけどダメだった…分かっているの、一人では限界がある。馬鹿みたいだよね…人一倍の知識程度

じゃ人の二倍も三倍もすごいお姉ちゃんには敵わないって事くらい分かっていたはずなのに…。

「なんだよそれ…無能でいろ、だと。ふざけるのも大概にしろよ…それが実の妹に掛ける言葉かよ!!何もしなくていいだど?!自分の妹がお前の事を一番に考えていたのに!!一番そばで応援してくれていたのに!!」

簪の話聞いて無性に腹が立った。原作での関係は知っていたけどこんな話を直に聞かされて怒らないという選択は不可能だった。

「怒ってるの?」

「おずおずと言った感じに簪が訊いてくる

「当たり前まえだ!!よし、決めた!!簪のIS作りを手伝って最高のISに仕上げる。そして簪、お前がお姉ちゃんを打ち負かさんだ!!」

そうすれば簪も自信がつくだろうし楯無さんも簪との関係を回復させる切っ掛けが作れるはずだ。

「私がお姉ちゃんを倒す…できるかな?」

「できる、絶対にできる。俺を信じろ、お前が信じるお前でもない、俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺を信じろ」

ふっ…ついカッコつけちまったぜ

「それってグレンラガンの…」

お、気付いたか分かってくれなきゃただの痛い人で終わるところだったぜ。

「分かるか？」

「分かる!!だって…アニメ大好きだから／＼／」

「そうかい、仲良くやっていけそうだ。俺は松崎俊葵、よろしくな簪」

「よろしく、俊葵」

握手を交わしチームを組んだ俺たち。…あれ?なんか一夏と箒の師匠になったり簪のサポートしたりとやるが増えている希ガス。おれはもっと楽しんでたいんだけどなあ。でもまあ…漢松崎、一度決めたことだし頑張るか!!

い
努力と頑張るが嫌いな男が珍しく頑張ろうとする姿がそこにはあった…かもしれない

12話 クラス代表決定!!

「ねえねえ俊くん、また面倒ごとをしょい込むの？もう止めなよ〜」

「何の話かさっぱり分からんな」

俺は今、束の膝の上で試合の疲れを癒している。ここからだ束の顔は見えずつおげふんげふん!! 巨大な双丘が目の前にある。

「さっきの蒼髪の娘の事だよ、ISを作るの手伝うなんて面倒くさいよ。それに箒ちゃんやいつくんの特訓もあるのにそんなのことに時間を割いている余裕あるの?」

いかにも俺との時間が取れずに不機嫌だといった雰囲気だ。顔が見えなくても声色で察しが付く。

「別にいいだろ?俺の勝手だ、それに可愛い子を見捨てたりできないだろ」

「そういつてハーレム作ろうとしてるでしょ(ジトー)私は別に俊くんがハーレムを作っても構わないよ?だって俊くんに愛されているだけですごく幸せだし色んな人の中の一人じゃなくて篠ノ之束として俊くんは見てくれるもん。まあそれは置いて:最近箒ちゃんも俊くんの話題ばかりだよ。今日の修行はどうだったとかISの授業

で同じ班だったとかって、嬉しそうな声で話すんだよ?」

「え!? マジで?」

「箒が? 俺の話をも? マジでかあ…」

「マジだよお。箒ちゃんはいつくくん一筋だと思っただけだよ。でも箒ちゃんが俊くんのこと好きでも私は問題ないよ? だって妹と同じ人を好きになれるなんて素敵じゃない」

「そうだな…お前はそういうやつだったな」

起き上がり束を抱きしめる。でも束は抱き返してこない。

「嫌だったか?」

「好きな人に抱かれて嫌なわけないよ…でもちよつと不機嫌かも」

「そっか…ではお姫様のご機嫌はどうやったら良くなりますか?」

「このまま…ね?」

今夜、俺は一夏の部屋は帰らなかった…そして次の日の朝、寮の前に立つ鬼から逃げ回り朝食を食べられなかった。俺にとって食事は死活問題なのに…。

クラス代表決定戦は無事に終了した。俺が二勝、セシリアが一勝、そして一夏が全敗

という結果になった。セシリアは俺にピットを破壊された後、何とか勝利をもぎ取ったという訳か。流石は代表候補生だな。

そして今は試合翌日のホームルーム。クラス代表は一夏に決定した。ん？俺がやらないのかって？H A H A H A!!俺は面倒くさいことが嫌いなんだ（キリツ）一夏を成長させる為という建前は千冬さんに見事に効果抜群、大成功して俺はクラスの副代表…どうしてこうなった。

「なんで全敗した俺がクラス代表なんだよ!?!全勝した俊葵か代表候補生のセシリアの役目だろ!」

一夏は文句を言っているがそんな文句が千冬さんに届くはずもない。

「それはわたくしが辞退したからですわ。代表候補生のわたくしが勝利するのは当然…ですからここは寛大な心で一夏さんにクラス代表を譲ったのですわ」

クラスメイトは口々にセシリアを褒める

「セシリア分かってるう〜」

「やっぱり男子がいるんだし有効活用しないとね」

「でもセツシー、マッチャーに負けたよね?」

おい、最後のは余計だぞ

「うっ…確かにわたくしは俊葵さんに負けましたわ。ですからクラス副代表は俊葵さん

に務めてもらうことにしたのです」

セシリアと千冬さんに頼まれたらやらないわけにはいかないよな…千冬さんはほとんど脅迫みたいな形で迫ってきたけど…。

「この話はこれで終わりだ。さっさと授業を再開するぞ」

こうして俺の日常はいつも通りの慌ただしくもない普通に戻ったのであった（希望的観測）

放課後の道場

「くっそお〜また負けた!!」

一夏は防具を付けたまま道場の床に転がる。

「あたりまえだ、俺を負かしたければ千冬さんでも連れてくるんだな」

「千冬姉じゃないと勝てないお前は人間じゃねえよ。箒は全国の覇者だぜ？なのに2、3回打ち合えば良い方って…俊葵どんだけだよ」

強化人間だつて教えたら話は早いんだろうけど、こればかりは人には言えないな。束にも一部しか話してないし。

「確かに俊葵は強い…素人のような動きだが一撃一撃はとても鋭く重い、太刀筋が全く

読めないから反撃も防ぐこともできない」

「素人なのは当たり前だ。なんてつたつて俺の初めての剣道は箒との試合した時だったんだから」

「!?そうか…私は素人に負けたのか。きつと私の心に隙があつたんだろうな。だから素人の俊葵に負けた…でも不思議と悔しくない。寧ろ嬉しかったのを覚えている」

箒なりに色々と考えた結果なんだろうな。良い意味で負けを経験して前に進もうともがいている。一夏も諦めず俺に挑み続けて戦闘のセンスを日に日に磨いている。この調子だと夏までに半人前程度には成長するな。師匠冥利に尽きるよ…まったく（*、ω、*）

おっと、そろそろ簪のところへ行く時間だな。

「今日はここまでだ。俺も行かなきゃいけないところがある。しつかりと身体を回復させておけよ?」

「分かった、でも俊葵は今からどこに行くんだ?」

「ちよつと用事があつてな。なあに、人助けの一環だよ、じゃあまた明日な」

そう言つて整備室へ足を延ばした

「かくんざくしきさん、いゝまゝすゝか〜？」

大きな声で簪の名前を呼ぶ。すると奥のハンガーの入り口から小さい手が手招きするのが見えた。

「大きい声で呼ばないで…恥ずかしい…から」

ヘッドパーツをピコピコ揺らしながら顔を真つ赤にする

ああ〜簪が照れているんじや〜

「それより打鉄式式の改造案…良いの考えてきてくれた？」

「勿の論よ。こんな感じだけどころかな？」

立体映像を簪に見せる

「全身装甲？ゴツゴツだね…」

「よく見ろって、この辺りとか。これ追加の高出力スラスターになってきページもできるんだ。それに追加装甲だつて自爆機能付きで不用意に近づいた相手を巻き込める。こつちには爆破が及ばないように設計してみたんだけど…どうかな？」

「設計は悪くないと思う…でもデザインが微妙…私はもつと…」

「もつとっ？」

もしかして痩せ型の機体が良かったのかな？それなら悪いことしたなあ…でもミサイルを沢山積んだ機体なんてゴツイ方がかっこいいし…。

「もつとごっつくしよう!!追加装甲がパージできるなら中の機体をもつと大きくしてミサイルを積もう。自動ロックシステムを応用すれば一度に何十発ってミサイルも制御できるし、それにそれにry」

楽しそうだなあ。まるで新しいおもちゃを手に入れた幼子：いや数千というパーツを厳選して機体を組み上げるACパイロットと言った感じだ。原作では暗いイメージが強かったけど実際は明るくて元気な子だなあ。

「だからこの装備も追加して：あ、ごめん：一人で舞い上がっちゃって」

「気にすんなって、提案しといてなんだけど全身装甲はやっぱりやめにしないか？ミサイルや荷電粒子砲を追加すると機体が重くなりすぎる。だから外部装甲をパージ可能な奴にして、それにミサイルを仕込むんだ。どうかな？」

「たしかに重くなるね。スラスターが多いと言ってもこれだけの重量だと高速戦闘はできない：防御力だけじゃ補えない。でも荷電粒子砲なんてどこに仕込むの？拡張領域はミサイルと追加スラスターでいっぱいだし、ミサイルの操作もするから手には持てないよ？」

ふっふっふ：そんなことも考えないで俺が案を出したりする訳じゃないだろう

「ココだよ、ココココ」

俺は簪のおでこを人差し指で軽くつつく。

「お、おでこ？おでこから荷電粒子砲を撃つの？」

「その通り、おでこからぶつといビームを撃つの。カッコいいだろ？見た目もヘッドパーツみたいにしたから不意打ちもできるよ」

そう言つて一角獣のようなヘッドパーツの立体映像を見せた。

「凄い…これを一晩で設計したの？」

「設計図なら沢山持つているんだ。でもそれを実現できる機会が少なかつたつてだけ。だから簪が使つてくれるなら俺は嬉しい」

これは俺の本心だ。使われずに埃を被るくらいなら簪に使つてほしい。

「ありがとう…大事に使う。ところで俊葵はアニメが好きなんだよね？どんなアニメが好きなの？」

「そうだなあ…基本的に何でも見るよ。特に最近では古いアニメにハマつていて勇者ロボットシリーズをよく見ているかな」

「私も勇者ロボット大好き。どの作品が一番好き!？」

「勿論、勇者王ガオガイガーだよ。あれに勝る勇者はいないと思う、反論は認めるけどね」

あれは良いものだ…今度、東にガオガイガーみたいに合体するISを作ってもらおう、うんそれがいい。

「私は勇者特急マイトガインが好き…グレートダツシユはいい曲だと思うし参上文句が凄くカッコイイ!!」

「銀の翼に!!」

簪 「望みを乗せて!!」

「灯せ平和の青信号!!勇者特急マイトガイン!!定刻通りに只今到着!!」

ガシツ!!

俺と簪は手を取り合い満面の笑みで向かい合った。まさか乗ってくれるとは…将来的に簪とは絶対に美味しい酒が飲めそうだ。

「急に始めたのによく乗ってくれたな。列車だけに」

「体が勝手に動いちゃって…でもすごく気持ちよかった!!それより…れ、列車だけに…ぶふ!!」

笑うとやっぱり可愛いなあ／／

「そいつは良かった。よっしゃ!!テンションも上がってきたことだしISを作ろうか!!」

「うん!!」

俺たち以外に誰もいない整備室に先生が見回りに来るまで俺たちは改造を止めなかった。テンションに任せて行動すると痛い目に合うってことが立証された…俺…夕

飯食つてないのに…。

自室

「あ、あゝ疲れたあゝ」

ボフンツ!!と俺はベッドに倒れこんで一息つく。

「一夏、冷蔵庫の中に入ってる梅チューハイ呑むからおつまみを適当に作ってえ〜」

「じゃあベッドから出る。ベッドの上で食うと汚れる、あとシャワー浴びて来いよ。特訓の後に浴びてなかったろ?」

「うゝす。あ、おつまみは肉系がいい」

服を脱ぎ捨てタオルを持って風呂へ行こうとすると一夏が見ていることに気付く。
「おおい、一夏君…私はノンケだよ?原作でも君はノンケじゃないか。」

「ホモ?」

「ちげえよ、俊葵って鍛えてないのに力あるよなあつて思つて。パツと見、筋肉ムキムキつてわけでもないのに」

「言えねえ…重いものを持つときに偶にだけ念動力や衝撃波を使っているなんて。この力のおかげで日常生活はかなり楽になるけど墮落した体型になる…ふ、太つてない…よ?」

「人間を見た目で判断するなって事だよ。覚えとかねえと痛い目にあうぞ? んじゃ、俺は風呂入ってくるからおつまみよろしくな」

シャワー浴びながら俺は色々と考えた。簪のISの完成はどう足掻いてもイレギュラーだよなあ…それに一夏や箒が強くなりすぎて世間に注目されたら学園も狙われるだろうし…ああ面倒くせえ。IS学園で学校生活を楽しめたらなあ…なんて適当な考えでこの世界に来ちまったけどこんな事になるなんて。次のイベントは鈴か…今の一夏なら鈴にも負けず劣らずのいい試合ができると思う。でも問題はあの乱入してくる黒い無人機…アリーナの外で出張ってるのが一番確実な方法なんだが先生や楯無さんに奇襲の事を知っていたと思われて敵視されるのもなあ…でも箒はきつと身を挺して一夏を叱咤するだろうし…そうだ、一夏のピットなら怪しまれることなくアリーナ内に入れるな。うん、それが良いな。考えもまとまったしそろそろ上がるか。

風呂から上がった俺を待っていたのはテーブルを埋め尽くす料理の数々であった…てか俺も30分くらい風呂に浸かっていたけどさ、長風呂だったけどさ、作るの早くね?

「おい…(っ)いつあいつたい…」

「いつものお礼だよ。どうせ夕飯もまだなんだろう？だから俺が作っておいたよ。俊葵って沢山食べるからこれじゃ足りないかもしれないけどな」

「いや、気持ちだけでも嬉しいよ。明日の朝に食べれなかった分を取り戻すから大丈夫」
肉野菜炒めを口へ運ぶ…美味い!! (テーレツテレー!!)

箸が止まらねえ。この肉野菜炒めもアスパラのペーコン巻きも麻婆豆腐もどれも美味い。こいつの手料理が美味しいのは知っていたがこれほどまで美味いとは…

「どうだ、美味いか？」

俺が無言でむしゃむしゃ食べるので一夏の方から美味しいかどうか訊いてきた。

「ああ、マジで美味しい。俺も料理はする方だけどこんなに美味しいものは作れないよ」

そのあとも晚餐は続き、就寝時間を過ぎても酒盛りをしているのが千冬さんにバレて晩酌に付き合わされ次の日、二日酔いになって頭がガンガンした…なんで千冬さんは二日酔いにならないんだよ…俺より飲んでいた量が少なかったからかな？さすちふ…うっ授業中だがもう限界だ…。

「千冬さん…すみません。頭が痛くて吐き気が酷いので保健室に行ってきます。クロエ、付き添い頼む」

「織斑先生だ…まったく。クロニクル、この阿呆を保健室に連れて行って介抱しろ。こ

の授業は休むことを許可する」

「はい!!では行きましようトシキ様」

俺はクロエの肩を借りて保健室へ向かう。そして介抱以外にナニをしたかは二人しか分からない…。

13話 前半：日常 後半：ぱーちー

一夏がクラス代表になってから一週間以上が過ぎていった。一夏と箒との特訓はメニユーを変えて、より実戦的な訓練をしている。まあセシリアの参加もあってメニユーを変えざるを得なかっただけだね…。接近戦が苦手なセシリアは箒とペアを組んで基礎的な事から教わっていて、一夏は俺と組んで距離の取り方と瞬時加速、立体的な戦闘の特訓をしている。箒は専用機を持っていないので俺の宇宙を貸している。最初は拒んでいたが結局折れて借りている。

「足を踏ん張り!!腰を入れんか!!」

「こ、こ、こうですの?」

「違う!!見ていろ!!こ、こ、こうだ!!」

箒の素振りは芯が通っていて綺麗だなあ。それに比べてセシリアの素振りはどうもフラフラしていて頼りない。刀の重さに振り回されているといった感じだ。

「そもそもわたくしのインターセプターは短剣ですのに…」

「ぐちぐち文句を垂れている暇があったら一回でも多く素振りをしろ!!近接戦闘の基本

ができていないのに応用ができるもんか!!」

「くう…何も言い返せませんわ…」

「なら早くやれ。射撃の訓練で扱ってくれた仕返しだ」

「ええ!! やってやりましょう!! やってやりますと!!」

箒もセシリアも仲良くなったなあ。知り合った当初は犬猿の仲だったけど何かをきっかけに仲良くなったようだ。何があつたのだろう? こればかりは俺にもさっぱりで二人に訊いてもそれとなくお茶を濁される。仲が良いんならそれに越したことは無いけどな。それにしても箒の発達したおっぱい…セシリアの柔らかく大きなお尻…うゝん、マンダム

「向こうばかり見てる余裕はあるのかよ?」

一夏はよそ見している俺に対して瞬時加速で距離を詰める

「まだまだひよつこの一夏に負ける要素なんてどこにもねえよ」

GNライフルビットを一夏にぶつけてスピードを無理やり落としGNスナイパーライフルで露出している頭に一撃。ブザーが鳴り試合終了の合図。

「お前の動きは直線的で平面的すぎる。ISでの戦闘は三次元的になるからそれに合わせて動かないと」

俺の言う通り一夏の戦闘は以前までやっていた剣道の試合のような戦闘スタイルだ。

避けるときは決まって右か左で上下に避けたりしない。攻撃も同じで前後左右からの攻めで上下の攻めが全くとっていいほどない。

「I Sに乗り始めてからそんなに時間たつてないんだぜ?…なんて言い訳だよ。よし、もう一本頼む!!」

「だつたらさつさとピットに戻ってエネルギーを回復して来い」

「おう、ありがとうな!!」

そう言つて一夏はピットへ戻つた。セシリアと箒は特訓が終わつたらしく仲良く談笑しながらピットで機体を解除している。やっぱりI Sを解除しているときの方がむっちりとしたボディラインが

《ふうん…:俊くんつてI Sスーツ姿の女の子が好きなんだあ?》

うおつ!!びっくりした!!束か…:話しかけるなら普通の回線で繋げてくれ。着信音が鳴らなかつたからびっくりしたぞ。

《だつて俊くんが浮気してるんだもん…:まあいいけど》

いや、浮気じゃあないだろ。ただ発育の良い女の子を凝視してただけだ(キリツ

《それ只の変態だよ…:あのさ、私がI Sスーツを着たら興奮する?》

襲う

《興奮つて過程をすつ飛ばしたね。でも束さんそういうの嫌いじゃないよ。今夜暇

なら用意して待ってる」

おk把握、簪のI Sの整備をして夕飯食ったらすぐに行くよ

《簪ちゃんかあ…いい趣味してるよね。実は私あの娘のこと気に入ってるんだよ。今度連れてきてよI Sの装備を作ってあげるから。》

東も丸くなったよなあ…昔は他人なんてどうでもいいって言ってたのに

《俊くんのおかげだよ。俊くんは私のモノクロに色褪せてしまった夢に色彩を取り戻してくれたんだ。もう昔の私とは違う…世界に目を向けていけないとね。あ、でも他人といきなり話せるほどコミュ力は高くないかな》

東が世界に対して前向きでいてくれてうれしいよ。簪はまた今度連れてくるから今夜は二人つきりで…な

「待たせたな、さあやろうぜ」

わりい、一夏が来たから切るわ。また後でな

《うん、また後で》

東との会話を終えて一夏と向き合う。

「今日はお前の気が済むまで付き合うつもりだったけど無理そうだ」

「別に構わねえよ。俺も体力的にこれが今日最後の本気の勝負になりそうだ」

「じゃあ行くぞ…いざ尋常に…」

「勝負!!」

更衣室

「今日も負けたあ!!」

疲れ果ててベンチに寝っ転がっている一夏が悪態をつく。

「そう簡単に負けられるかってんだ。大体なあ負けはいい経験なんだぞ。負け方を知っている人間は勝ち方を知っている。次に活かせばいいさ」

「じゃあさ、そう言う俊葵は負けたことあるのかよ?」

一夏にそう言われてフランスでの戦闘を思い出す。あの頃は今よりもっと未熟で機体性能をフルに発揮できていなかったし油断もしていた。クロエがいなければ死んでいたかもしれない、フランス軍に鹵獲されていたかもしれない…。

「あるよ…しかも実戦でだ。その時は運が良かったから生きていられた」

「そうか…お前みたいな強い奴でも負けるんだなあ」

「最近だと千冬さんとの組み手で負け越してるな。4勝10敗で」

千冬さんとの組み手はとても有意義なものだ。千冬さんの動きを見てると近接戦闘に活かせる動きが沢山ある。

「千冬姉に勝てる時点で人間じゃねえよ…射撃主体の機体に乗ってるのに格闘を振りに

「行ける理由が分かった気がするぜ」

「分かったんなら明日からはもつと厳しくいくぞ？んじゃ、俺は整備室に行くからまた明日な」

「なあいつも思うんだけど整備室で何してるんだ？俊葵のISなら束さんが直してくれるだろう？」

「とある女の子のISの作成を手伝ってるんだ…それだけだよ」

「どんな女の子なんだ？専用機持ちなら国の代表候補生か？」

「やっぱり気になるかあ…うん、ここで教えても問題ないかな」

「日本の代表候補生でな、その娘のISは倉持技研で造られていたんだ。お前の白式も倉持技研だろう？男子パイロットのお前のISが優先されるのは当たり前だよ」

「そんな…そんなことあっていいのかよ。確かに男子パイロットのデータが欲しいのは分かるけどよお」

「世の中つてのは理不尽なんだよ。あ、それと謝りに行こうなんて思うなよ？多分、ピント飛んでくるぞ。かなりおこだから」

「一夏はちよつとしよんぼりとするが納得してくれたようだ。」

「ISが完成したらお前に紹介するから落ち込むな。んじゃ、行ってくる」

簪の待っている整備室へ急ぐ。打鉄式はもうほとんど完成していて稼働データも取り終わり塗装を残すだけになっていた。簪は生き生きとトリコロールカラーに塗ろうとしていたので俺はそれを必死で止めて、灰色と水色を基調に細部は金のラインをあしらうカラーリングにしようという案を頑張つて飲ませた。ミサイルをばら撒きながらおでこから極太のビームを放つトリコロールカラーの機体なんてどう足掻いてもアレを想像してしまう。しかもパージする装甲…どこからどう見てもFAZZです、本当にありがとうございました。

整備室に入ると簪がふくれっ面で待っていた。ヘッドパーツもいつもみたいにダラシンとしておらずピンと立っている。

「遅い…待った…」

「わりいわりい。訓練に熱が入ってな」

簪はスンスンと俺の制服の匂いを嗅ぐ

「急いでもんだからシャワーは浴びなかつたんだ。すまない、汗臭かつたか？」
「他の女の匂いがする」

「お前は勘の鋭い妻か!!」

「つ、妻だなんて…／／／」

『相も変わらず俊葵様はジゴロですね』

打鉄式式に搭載されたAIが口を挟む。簪一人でミサイルの制御は負担が大きすぎたので束と俺で開発したPilot Support Education Interface、通称。パスイ

そこ!!名前が安直だなんて言わないの!!ちかたないじゃない:チエインバーって名前にするとどうしてもあの人の声が頭に響くんだもの。それにパスイはチエインバーとは違って一般教養がある(偏見)ネットに接続することで流行を知ったり日本文化に精通することもできる。故に開発して一週間もたたないのに立派なオタクとなつてしまった:どうしてこうなつた。

「そんなに褒めるなよお」

『褒めていません。それより俊葵様と簪様はいつになつたらお付き合いするのですか?』

「おいおい、俺みたいな女垂らしが彼氏だったら簪も嫌だろう。言葉には気を付けろ」
『いえ、傍から見れば簪様はどう足掻いても俊葵様の事を好いておられますよ』

「パスイ!!よ、余計なこと言わないで!!」

珍しく簪が大きな声を上げる。簪もこんなに大きな声を出すんだな:。ん?待て、簪が俺のこと好き?いやいや、あり得ないだろう。だって引つ込み思案の簪が俺みたいなへらへらした男を好きになるはずがないじゃない。好いてくれてるんだつたら、それは

それで嬉しいけど

『俊葵様って変なところで謙虚になりますよね…それも俊葵様の魅力の一つですが』

簪（別に謙虚にならなくたっていいのに…。はあ…私がもつとお姉ちゃんみたいに積極的だったら俊葵に告白できるんだろうなあ…。）

『お二人を見ていますと塩辛いものが食べたくなりますね』

「お前に味覚なんてないだろ」

『……………。簪様、これが俊葵様のトレジャーでございます』

「む、胸の大きい人ばかり…／＼／＼」

「パシイこの野郎!!何てことしやがる!!簪、見るな!!」

簪のディスプレイに表示されているエッチな画集を手で覆い隠す。

『ちよつと頭に來たので悪戯してみました。後悔も反省もしていません』

反省はしろよ…

「だいたい何でお前が俺のPCへのアクセスコードを持つてるんだよ?」

『束様からいただきました。男の人の趣味を理解するための資料が欲しいと言ったら快く譲っていただけました』

束え〜〜アウトオ〜〜!!ケツバットの刑に処さなければな

「俊葵って巨乳の方が好きなんだね…私みたいな貧乳はどうでもいいんだね…はあ」
 い、いかん。簪がネガティブモードに入ってしまった。

「簪、俺は巨乳が好きなんじゃない…俺はおっぱいが好きなんだ!!女性の胸に神々しく君臨するそのおっぱいが好きなんだ!!大ききなんて関係ない!!母性の象徴たるおっぱいに癒されたい!!そして女性を癒してあげたい!!ただそれだけだ!!」

『お、おう…』

「……………(。D。)ポカーン」

「やっちゃまったー!!簪もパシイも引いてるじゃあねえか!!／＼(。o。)/」

「すまない、興奮しすぎた」

「ううん、大丈夫。それよりも私みたいな小さな胸も好きなの?」

「言っただろう、大ききは関係ない。俺はおっぱいが好きなんだ。だから簪のおっぱいも好きだ」

「そっか…(やったー!!俊葵が私の胸を好きって言うてくれた!!)」

(もしかして俺、セクハラオヤジ?簪に訴えられたらおしまいだな)

『(いい加減に付き合っ頂かないと糖尿病になってしまいそうです…AIなのに)』

この後、ISの着色に勤しんだのだがどうも簪の顔を見れなかった…ああ絶対顔赤い

よこれ。

「大丈夫？」

俺は今、東宅へ戻り東の膝枕で休んでいる。

「精神的に疲れた…ついでに身体も…」

「そのようだね。面白かったから私も止めずに見てたよ」

はあ…見てたんなら助け船の一隻くらい出してくれよ…ああ疲れていて声も出ねえ。せめて一言…

「今日は東に癒してほしいな」

「じゃあそこに寝っ転がって…って疲れて動けないか。よいしょっと」

東は俺をお姫様抱っこして浴室まで運んで行った…ああ、癒すってお風呂に入れてくれるって事か。

「じゃあマツサージするから脱がすね」

え？マツサージ？ちよ、ちよっと東さん!?

「俊くんの大好きなISスーツだよ？胸がきつかったからちよっと改造しているけど似合ってるでしょ。ほらほら、今日は好きにしていいいんだよ？」

好きにできねえよお!!動けねえもん!!

両手をグーパーさせながら満面の笑みで近付いてくる

ちよ、ちよつと待て!! ストップ、ストップだつて!! おい、このソープマットは何だ!! そのローションは何だ!! ま、待て!! 話せば分かる!! っつて俺、疲れすぎて声が出ねえええええ!! あああああいやああああああ!!

ポトリ：

今夜、IS学園の何処かで椿の花が静かに落ちた

翌日は腰が抜けて授業には参加できなかった…てか俺はよく授業休んだりしてるけど単位は大丈夫かな? いつもは気にしていなかったけどやっぱりサボらずに授業には出た方が良いよな。千冬さんも怒るし…でも今回は千冬さんがあんまり怒っていないかったのが意外だったのでそれとなく理由を聞いてみたら顔を真っ赤にしながら「べ、別に貴様らのプレイが羨ましいという訳ではなくてだな…そのおなんだ。ちゃんと寮で寝ろ…もし希望するなら一人部屋だつて用意してやらんこともないぞ／／?」と言っていた。

あれ? 千冬さんってこんなキャラだったっけ? もつと厳しかったと思うんだけどなあ…ま、今は一夏のクラス代表おめでとうぱーちーだし余計なことは考えずに楽しむか。クラスのみんなんも楽しんでるし。一夏はたくさんの女の子に囲まれて良いなあ…。

「俊葵さん、またいやらしいことを考えていますね？」

「俊葵、どうせ女に囲まれた一夏が羨ましいんだろう？」

「マツチーえつちいよお〜」

「わたくし共ではご不満ですか、トシキ様？」

バレテラ

俺は今、箒、セシリア、のほほんさん、クロエの四人に囲まれている。どこの心がピュアな人しか通えないクラブだよココ…。

「美女を囲んで美味しいもん食って美味しい酒を飲む、男の夢だから覚えとけよ。かつつかか、てか箒は一夏のところに行かなくて良いのか？一夏のこと好きだろ」

「この間までな、今は違う。私はどうやら一夏の強さに、心に恋をしていたようだ…まっすぐに強さを追い求め続ける一夏のまっすぐな心に憧れていたんだ。だからもういい…一夏の隣で足並みそろえて戦えたらそれでいい…今はそう思える。（それに新しい恋も始まったしな／＼／＼）」

「ふう〜ん」

「俊葵さんは相変わらず変なところで鈍感ですわね…でも優しくカッコイイですわ（ボソ）」

ん？今、何か言ったか？酔っぱらっちゃまって聞き取れなかったな。

「マツチーに抱き着くとすぐくいい匂いがするう。なんていうか男の人のにおいがするよお」

「トシキ様の匂いはとても落ち着きます。すうくくくくはあ／＼／＼」

のほほんさんとクロエが俺の脇腹に鼻を擦り付けて匂いを嗅いでくる。ぬう…お前たちはぶれないなあ

「がっはっはっは。美人にこんなこと言われて酌までして貰えるなんて男冥利に尽きるよ」

ああ…こりや本格的に酔っぱらったな、俺。テンションが上がってきたわ。

「はい、は〜い。新聞部です。話題の新入生、松崎俊葵くんにインタビューです」

俺が大口を開けて高笑いしていると二年生らしき人が近づいてきた。新聞部か…確か黛薫子さんだったかな。

「二夏の方にインタビュー行ったらどうです？俺は代表じゃないし」

「二夏くんの方にはもう行つたよ。だから副代表のキミのところに来たんだよ。あ、これ名刺ね。私は二年生の黛薫子、よろしくね」

「よろしくお願ひします」

「じゃあ簡単に質問するから答えてねえ。まずはIS学園に入学して一言」

「目のやり場に困りますね、特にIS実習の授業のとき」

「あ、やっぱり目が胸やお尻に行っちゃってしまっう?」

「当たり前ですよ…だって可愛い女のたちがほとんど水着で授業してるんですよ?しかも俺の事が物珍しいのか近くに寄ってくるしさあ…俺は檻に入ってるおとなしい客寄せパンダじゃなくて野生の獣なのに」

ISスーツ好きの俺には授業がっらい…だって勃っちゃったらセクハラですよ?何とか無心を貫いているけどいつもキツイんだよ。

「あははは、聞いた通り面白い人だね。じゃあこの調子でどんどん答えていってね。次は師匠としてIS学園のみんなに一言。知ってるよお、俊葵くんが一夏くと箒ちゃん、とセシリアちゃんの三人を鍛えていてあのブリュンヒルデとほとんど対等に戦えるって。それも踏まえてIS学園のみんなの向上心を煽るような一言をお願いします」

「んくそうだなあ。適当にやれ…かな。頑張りすぎると気が滅入る、だから適当にがんばれ。授業をサボって屋上で寝たり宿題もせずにゲームしたり…適当が一番なんだよ」

「ねえ箒ちゃん、セシリアちゃん、俊葵くんっていつもこんな調子なの?」

「いえ、特訓中は真面目に取り組んでいます」

「俊葵さんの射撃訓練はとて有意義なもので適当ではありません」

あるえく？俺は適當つて言つても適切に事に当たる意味なのに…説明しないとな。

「適切に事に当たると書いて適當です。勘違いしないでほしいです」

「あ、そう言うことね、分かった分かった。でも授業サボったりするのは適切じゃ…まあいいけど。じゃあ最後に付き合っている人はいますか？」

「やっぱりそう言つた事は気になるよな、女子高だし。取り敢えず束のことは内緒にするか。」

「1組のクロエとお付き合ひさせてもらつてます。あ、彼女募集中です。松崎ハーレム実現の為に頑張つてます」

「ひゅ〜モチるねえ。羨ましいよ。じゃあ彼女はクロエちゃんてまだまだ募集中つて事で記事にするね〜」

箒（ぐぬぬ…クロエに一步、いや三步くらい先を越された）

セシリア（わたくしもクロエさんのように俊葵さんへ積極的になれたなら…）

のほほんさん（なんで胸の奥がチクチクするんだろ…むう）

波乱の予感を孕んだままクラス代表戦へ時計の針を進めることとなつた…波乱を孕む…プツ

束（それはないつて思うな…）

14話

I S操作の授業にて

「I Sにおける簡単な飛行を見てもらう。織斑、オルコツト、松崎、I Sを展開しろ」

騒がしかった日常はどこかへ過ぎ去り平穏な日常が戻ってきた。今はI Sの授業でグラウンドへ出てきている。勿論、俺も含めてみんながI Sスーツなので興奮しないように俺は何も考えないようにしていた…というか考えたらアウトだった、色んな意味で…。

千冬さんが専用機持ちに手本となるように促す…ちえつI Sスーツじゃなくて白のジャージかよ…I Sスーツの方が絶対に似合うのに…。

「松崎、今失礼なことを考えただろうか？」

「女性が美しくあるように考えることは失礼ではないと思いま、っ!!」

スパァン!!

「そんなことを考えている暇があったら一秒でも早く展開しろ／＼！！」

いってえ…どこから取り出したんだよその出席簿。てか一夏もセシリアも展開して
るな…俺も早く展開するか。

右手を左側に突き出して左手は腰に構える。ゆっくりと右手を右に持って行き、左手
を思い切り右に突き出すのと同時に右手を腰に構える。そして一言

「アイエス………装着!!」

両手首と両足首にブレスレットが装着され、そこからヒーローよろしくピッチリスー
ツが広がってゆく。スーツの装着が終わると飛び上がり手足を広げる、まず胴体に大き
な鉄の塊のような物体が装着され少しずつ分かれていって手足と顔を覆う。最後に鉄
のようなくすんだ灰色が真っ黒な漆色に変わる。着地してキメポーズをとってまた一
言

「銀の剣（つるぎ）で敵を切り!!黒の翼で宇宙（ソラ）駆ける!!IS勇者マツサキ!!参上
!!」

ふっ…キマツたぜ。あの千冬さんですら啞然としている。簪と三日間掛けて考えた
かいはあつたな。束にも無理言ってこんな変身システムを作らせたし、無駄にならな
くてよかつたよ。

「お前はISを装着するのにそんな面倒臭いことをする必要があるのか？」

「いえ、必要ありません。どちらかと言うとこれは俺の趣味です!!（キリツ）
「はあく、ではもう一度、普通に展開しろ。」

あ、これ呆れて怒れないってやつですわ、分かるわ。

俺は一度、解除して最初から展開しなোস。

「次からはさつきのような展開は控えろ…いいな?」

「善処します」

「…まあいい。では三人とも飛行しろ。」

「「はい!!」」

そう言われてセシリア、俺、一夏の順番に飛び立つ。

「スペックでは白式の方がブルー・ティアーズよりも上だぞ」

早速、千冬さんのありがたいお言葉が下から飛んでくる。それに対して一夏は不満そうにぶつくさ文句を言う

「そうは言っても急上昇と急降下を昨日習ったばかりなのに簡単に飛べるかよ…。どんな原理で飛んでいるのかもまだよく分かっていないのに」

「なら俺が説明しようか? 反重力力翼と流動波干涉の話になるが」

「いや、丁重にお断りするよ。俺には理解できないし、感覚で飛んでるからこれ以上頭をこんがらがせたくない。俺は翼をイメージながら飛んでいるんだが二人はどうだ?」

「わたくしは前方に円錐を思い浮かべながら飛んでますわ」

「俺は手のひらや足の裏からジェット噴射をしている感じかな」

三人で雑談をしながら飛行をしていると下にいる千冬さんに降りて来いと言われた。

「急降下と完全停止の実演をしろ。目標は地表10センチ、やれ」

「ではお先に」

まずセシリアが急降下をして代表候補生の腕前をみんなに見せる

「じゃあ次は俺だな…俊葵、下で待つてるぜ」

一夏は意気込んで急降下をするが地面に激突する。原作通りだな…うわあ痛そお。俺はあんな風にはなりたくねえな。よし、気を付けながらやろう。

地面が近づく…少し怖いが大丈夫。……………今だ!!

足と手のひらを地面に向け急ブレーキをかける。地面すれすれで何とか止まり千冬さんに褒められた。

「なかなかだ松崎。織斑、お前は二人を見習え。次は武器の展開だ。織斑、やってみろ」

一夏は目を閉じて集中する。すると右手に光の粒子が集まり雪片式型を形作る。

「遅い、0.5秒で展開できるようになれ。次はオルコットだ、ライフルを展開しろ」

右手を突き出しかつこよくライフルを展開するセシリア。一秒もかかってないしセーフティもきちんと外されている。

「セーフティも外してあるし展開速度も申し分ない。しかしそのポーズは何かしろ。お前は真横に撃つつもりなのか？」

「これは展開の際に必要なイメージでして」

「なおせ」

「はい……」

ああ無情……セシリアの抵抗もむなしく論破されてしまった

「松崎、お前は好きな武器を選んで展開しろ」

居合の構えを取り一夏と戦ったときに使った刀を呼び出す

「展開速度も構えも問題ない。他の武器でもできるように鍛錬しろ。オルコット、お前も近接用の装備を展開しろ」

そう言われてセシリアはナイフを振る構えを取り意識を右手に集中させるが思うように展開できないようだ

「ああ!!もう!!インターセプター!!」

結局、音声認識による展開を行った。音声認識は初歩の初歩なので悔しそうだ。

「相手はお前が展開するまで待つてはくれないぞ？」

「わ、わたくしの戦いは遠距離で本領が発揮されます。ですので近接戦闘なんて」

「行わない？だが織斑との戦闘で接近されて負け寸前まで追い込まれた阿呆は誰だ？それに放課後の特訓では刀一本の松崎に全敗中じやないか。文句は遠距離を極めてから言え」

「はい…」

「ISによる飛行と武装展開の実演はこれで終了だ。残りの時間でそれぞれの班に分かれ歩行訓練をするように。ちんたらしている班はPICを切ったISを装着してグラウンド10周だ。解散!!」

千冬さんの最後の一言で蜘蛛の子を散らすようにみんなはそれぞれの班長のところへ行き歩行訓練を始める。

こんな調子でいつものように授業は終了した。

授業が終わる少し前のIS学園正門

「ふう…やっと着いたわ」

肩甲骨辺りまで伸ばした髪をツインテールにしている少女が一人。本当の歳を知らなければ小学6年生くらいに見えてしまうほど慎ましやかな体型をしていた。彼女はポストンバックから一枚の紙を取り出して行き先を確かめ…

「第一校舎一階の総合受付所に行けて言われてるけど何処にあるのよ…」

良く言えば活発で行動的、悪く言えば考える前に行動の彼女には案内の紙は有って無いようなものだった。結局、地図を出したもののバックの中に押し込む。

「ま、適当に歩いてりゃ着くでしょ」

場所も分からない案内所に行く彼女の初めての校内探検が始まったのであった

食堂にて

「あゝあゝ疲れだあゝ」

俺はたくさんの料理を専用のカートに乗せてテーブルまでやってきたのは良いのだが疲れ果ててテーブルに突つ伏した。

「一人でISを格納庫まで持っていくからだ…私が手伝ってやると言ったのに。ま、まあありがとう／＼／＼」

「自分の班で使ったISくらい班長のわたくしがなoshimashitaのに…俊葵さん、ありがとう(ご)ございます」

「俺の班の分まで運んでもらってありがとうな」

箒、セシリア、一夏の順で俺に礼を言う。こんなことになるなら念動力でも使うんだったよ…。クロエはのほほんさんと仲が良いらしく別なテーブルで一緒に食事をし

ている。

「美人に重いものを持たせるなんて考えられないよ。それに一夏には色々世話になってるからな」

『い、色々と世話になってるですって!?!』

『下の世話かしら?』

『これは…燃える!!』

『ああ〜、ふたりがびよんびよん（意味深）するんじゃあ〜』

遠くで腐女子が盛り上がってるな…いつも通り無視しよう…その方が良い。早くご飯を食べよう、食べて忘れよう…それに食べる量が多いから早く食べないと昼休みが終わっちゃう。

「…夏? あんた一夏でしょ!?!」

食うのに夢中になっていて気付かなかったがポストンバックを持った女生徒が立っていた。と言うか鈴が立っていた

「鈴かあ!! 久しぶりだな!! いつこっちに帰ってきたんだ?」

「今朝よ、始発の便でこっちに来たの」

一夏と鈴は久しぶりの再会で嬉しいのか俺たちそっちのけで昔話に花を咲かせている。しびれを切らしたのか箒とセシリアが話しかける

「なあ一夏、一応紹介してほしいのだが」

「わたくしにも紹介してほしいですわ」

「ああ、すまない。箒は丁度入れ違いだったから知らなくて当然か。箒が転校してすぐに鈴が転校してきたんだよ。鳳鈴音、俺のセカンド幼馴染だ。で、こっちがファースト幼馴染の篠ノ之箒とイギリスの代表候補生のセシリア・オルコット、三人とも仲良くしてくれよ」

俺の紹介は無しかよ……ご飯食べなきゃいけないから別にいいけど

「よろしく頼む」

「よろしく願いますわ」

差し出された手を鈴は睨み付けている。あ、そうか二人が一夏のことを好きだと思ってるんだな。それを察したのか箒は鈴の耳元で何かささやいている

「安心しろ鳳さん。私もセシリアも一夏ではなくてそっちにいる俊葵の事が好きなんだ。お前は一夏の事が好きなのだろう？」

ん？何か言ってるな……ああ、疲れていて聞き取れない……。

「んな!?そ、そんなこと／＼／!!」

なにやら鈴は顔を真つ赤にして首を横に振る。元気だなあゝ

「嵐さん、あなたの恋を応援させていただきませすわ」

セシリアも鈴に耳打ちする

「あ、あんた達、見た目よりも優しいじゃない／＼／＼」

「ふっ、見た目よりは余計だ」

「まったくですわ」

どうやら原作のように喧嘩腰にならなかつたようだ。何を言ったかは分からんが言い雰囲気、三人は仲良く握手をしている。

「あたしの事は鈴でいいわ。あたしも箒とセシリアの事は下の名前で呼ぶから。そつちの二人目もよろしくね」

「よろしくな鈴」

「よろしくお願いしますわ、鈴さん」

「おう、よろしく。俺の事は俊葵で頼む」

ファーストコンタクトはバツチリだな。

「ねえ一夏、あんた代表になつたんでしょ？ だったら今度のクラス代表戦で戦うことになるわね」

「そうだな…ん？ いや、それは無理だろう。全クラス代表を決め終わってるじゃないか」

「ふっふっふ、こう見てもあたし、中国の代表候補生なのよ？専用機だって持つてるしクラス代表には代わつてもらつたの。だから問題ないわ、心置きなく戦いましょ。ま、あたしが勝つけどね」

む、そいつは聞き逃せねえな。一夏は俺との修行で着実に実力をつけてきている。きつと鈴と互角、いやそれ以上に戦うことができるだろう。

「鈴、悪いがそう簡単には一夏は倒せないぞ？なんてたつて俺が鍛えてるからな」

「ふうくん、じゃあ俊葵って強いんだ？」

「俊葵が強いのは当たり前だ。なんといつても束姉さんお手製のISに乗っているんだからな」

「それに代表候補生であるわたくしと毎日訓練してますもの」

何でお前らが誇らしげなんだよ…それに訓練を受けているのはお前たち二人の方じゃないか。ま、そんな風に言われて悪い気分ではないけどね…。

「え!?束博士お手製のISですって!?!」

「鈴になら言つても大丈夫か…束は俺の恋人なんだ。だから甘やかされてね、でもそれに甘んじないように自分を鍛えているよ」

「俊葵…あんた一体何者なの？それに箒もセシリアも俊葵の事が好きだって（ボソ）」

え？なんだって？マジで聞き取れないんだけど

「私たちは俊葵が何人恋人を作ろうが構わない……と言うか諦めている。俊葵はきつと真剣に私たちを愛してくれるだろうからな（ボソ）」

「いちいち嫉妬するのも疲れましたわ。だから松崎ハーレム（仮）の一員として仲良くしようって決めましたの（ボソ）」

あのさ、こそこそ話されると気になっちゃうんだけど。あれ？なんだか眠いや……満腹になつたし疲れすぎて眠くなってきた……ちよつとだけ……ちよつとだけなら……ZZZZ

みんなまだまだ話したいことがあつたようだが授業に遅れるわけにはいかないので……ここでお開きとなつた。

15話 俊葵…中国へ

クラス代表戦まであと二週間で切ったある日

俺と鈴は束に呼び出されて学園地下にある束邸へきていた。電話で声を聞いた限りでは、あんまり平和的な用事じゃなさそうさ。また研究施設の破壊とかかな…そうでもなくても穏便な要件じゃなければ人を殺すだろう。あの任務の後、実のところ俺は後悔していた…束の為と言いついて聞かせて殺したが本当にそれで良かったのだろうか？俺が殺した人たちにも家族がいたはずだ…人の幸せを奪って自分だけのうのうと生きている事に罪悪感と嫌悪感を抱いている。割り切りたくても割り切れないものがそこにはあった。

「待たせてごめんね。まずはこれを見てほしい」

なんてことを考えながら待っていると、束が何枚かの写真をもつて部屋へ入ってきた。

「こいつは…建造物か？それにしても妙な大きさだけだ」

「これ大きすぎない？この倍率の写真だとんでもない大きさよ？」

「そう、問題は大きすぎるって事。それは一昨日の写真でこれが今日の写真」

巨大建造物らしき長い黒い影は2本に分かれていた

「動いているのか!？」

「その通り、この黒い影は全長数百メートルの巨大兵器ってことが分かったんだ。通常兵器に変わりはないんだけど質量がそこら辺のとは比べ物にならない。前に俊くんに見せてもらった設計図の中にこんなのがあったよね」

「ああ、グレートウォールって超巨大兵器だな。スケールは同じなのか?」

もし同じならISじゃ太刀打ちできないだろう。いざとなれば衝撃波や原子分解でぶっ壊せないこともないけどISが最強を冠している世界でISよりも強い存在が現れるというのは世間的にかなり問題がある。

「あんな化物を原寸大で再現できる技術は私も持ち合わせていないよ。対人用に改造されているからかなり小さくなっていて分裂機能もほとんどオミットされている、でも脅威には変わりない…だから壊してきてくれないかな?」

「分かった。じゃあ宇宙で出るよ。嵐には長距離移動用のブースターを積めないしね。でもなんで鈴も一緒なんだ?確かに中国に出撃するわけだから世間体を気にすると連れて行った方が良くないけど危なすぎる。鈴には悪いが甲龍の武装じゃ勝てないぞ」

「俊葵の言う通りです。あたしの武装じゃ…」

「だから新装備を作ったよ。きつと鈴ちゃんも気に入ってくれる。あ、それと私に敬語は使わなくてもいいよ。だって俊くんの友達だもん」

東のやつ…成長したなあ

「あ、ありがとうございます!!」

深々と頭を下げて東に礼を言う。東もついに他人に対して優しくすると言うことを覚えたらしい。ISの武装を作つてあげるのはやりすぎだと思うけど…ハハ

「あ、でもいまさら言うのもなんだけど行きたくなければ行かなくてもいいよ。鈴ちゃんが出撃するのは中国側に花を持たせる為だから強制はしない。でも武装はそのまま持つていてもいいよ。それプレゼントだから」

「東の言う通りだ。確かに鈴と俺が一緒に出撃すれば中国も世間体を保てるし俺たちもそれなりの報酬を貰えるだろう。しかし命のやり取りをする実戦とは恐ろしいものなんだ。鈴、お前に人を殺す覚悟はあるのか？」

「あたしを舐めないでよね。こう見えても軍属よ？まだ人を殺したことはないけど想像くらいはしたことくらいはあるわ。いずれ人を殺すことになるかもってね…だから覚悟はできてる」

「分かった。ただし、敵を前に臆して引き金が引けないようならもう二度とISに乗るな。強大な力を持つというのはそういうものだ」

鈴も納得してくれた。人を殺めることができる力を持つにはそれなりの覚悟が必要なんだ。こんな若い少女が茨の道を歩む世界…今回の任務ではできるだけ俺が敵を蹴散らさらないとな。鈴にはこの世界はまだ早い…

「じゃあ早速発進してもらえるかな。このままだと人が住んでいる地域にアレが侵入しそうだし」

「それもそうだな。鈴、行くぞ」

「うん」

そう言つて俺と鈴は装備を整えるためにガレージへ向かった。すると千冬さんが待ち構えていた

「行くんだな…」

「俺達が行かなきゃいけないんだよ。アレをぶつ壊せるのは俺くらいなものだ」

「あたしだって負けないです。ですからあたし達に任せてください、千冬さん」

「織斑先生だ…と言いたいところだが今回はまあいいだろう。私は自分が情けない…安全な場所です待っている事しかできない自分がない。こんな重要な任務を生徒に任せる事しかできないなんて（ギリッ）」

千冬さんはとても悔しそうだ…それはそうだ。世界最強と呼ばれておきながら何もできない自分に腹が立っているんだろう。しかし千冬さんが悔しむ必要も落ち込む必

要もない…なぜならば!!

「ちーちゃんでも使えるように作ったI Sがあるから一緒に出撃できるよ。一緒に行きたいんでしよう?」

「わ、私用にI Sを作ってくれたのか!?!」

「本当は俊くん用だったんだけどちーちゃんにプレゼントしても良いかなって思ったんだ。ね、良いでしょ俊くん」

「勿論だよ。世界最強の戦士が一緒なら千人力だよ。で、どんな機体なんだ?」

やはりそこは気になる。元は俺の物になるI Sだから機体コンセプトが気になる。

「俊くんの設計図にあったクアンタモデルの試作機で名前は狂桜(きようおう)狂った桜って書いて狂桜。機体コンセプトは量子化による奇襲と一撃必殺…にするつもりだったんだけど量子化には無理があつて結局は極超音速下での戦闘が可能な格闘機になっちゃった。ちなみに名前の由来は奇襲を季節外れに咲く桜に例えたんだ(えっへん)」

いや、それで十分だから…でもそんなI Sは俺と束と千冬さんくらいしか搭乘できないだろ…。化物機体作りやがって(ニヤリ)

「私にぴったりの機体だな、礼を言わせてもらおうぞ束。俊葵も私が使ってしまったて悪いな」

「気にしないでください。俺は射撃戦の方が好きですから」

格闘の方が確実に敵を仕留められるので確実性はあるが射撃戦の方が広範囲に格闘じやできない火力で攻撃できるので好きだ。やっぱり俺はトリガーハッピーなんだなあ…。

「ありがとう、ではさっさと準備を済ませて出撃するぞ。急がないと…何か嫌な予感がある」

千冬さんの勘はよく当たるんだからよしてくれよ…マジで

地球上の何処か

薄暗いホールは満員…ここにいる人たちは立場は違えど同じものがあつた。それは全員が男であるという事、そしてISに勝つためにこれから紹介されるものを買おうとしているという事。防衛省のお偉いさん、戦争屋、傭兵、テロリスト、ISの登場で仕事を追われた人が多数いるだろう。

「さて皆さま、私共が今回紹介する商品はこちら!!」

司会者であろう男が大型モニターにとある兵器を映し出す。

「その名もグレートウォール!! 既存の兵器とは一線を画す兵器でございます。具体的な性能はお手元の資料をご覧ください」

「こんなにデカイものを…」

「確かに数値は良いが…」

「問題は運営に必要な金と場所だな…」

資料を目にして口々に思いを口にする

「今回のショーでは特別な I S がこのグレートウォールをお相手します。きっとあなた方の関心を引くことでしょう」

「特別な I S が相手ではこんなデカイだけの通常兵器は粗大ゴミ同然ではないのかね？」

「粗大ゴミとは失礼ですな…ですが皆様の考えももつともです。ではこうしませんか、もしもこのショーであなた方が納得のいく戦闘をグレートウォールが繰り広げたなら 10 分の 1 の値段であなた方にお譲りします。修復や改造の設備、費用はあなた方に払っていただくことになりましたが本体価格は格安です。勿論、不慮の事故などで故障した際はタダで修理いたしますよう」

「なん…だと!？」

「破格すぎやしないか？」

「むう…どうせIS相手では…」

「モニターをご覧ください。例のISが登場しましたよ。では、戦闘開始」

俺達は今、地表から50kmの高度を飛んでいる。全身装甲だから風を感じることはできないが清々しい…雲を切って飛ぶというのはこんな感じなのか。こんな任務で飛んでいなければもつと楽しめたのになあ…。

「もうすぐで目的地だから気を引き締めろよ、ひよっこ共。風、特にお前はより一層、気を引き締めろ。これから先は人を殺めることになる」

「分かってます。あたしもこの九龍（クーロン）で精いっぱい援護させていただきます
!!」

鈴の甲龍には今、九本の龍の首が描かれている。束の新しい武装らしく絵に武装データを移しているようだ。いずれはISそのものを絵に入れたいようだ…そうだったら俺は刺青を彫ることになるのかな。もしそうなら温泉に行けないな…みんなと入れないなら温泉に未練はないけど。

そんなことを考えながら飛行していたら目的地へと到着した。大型ブースターを収

納して地表に向けて急降下する。

目標はグレートウォール、目的は目標の殲滅。そのために人を…殺す。決めたんだ：後悔もする、懺悔もする、反省もする…でも絶対に後戻りはしない。そうじゃないと殺していった人たちに悪い…なんてのは詭弁に過ぎない。しかし、その詭弁がないと俺の心が壊れてしまう。やっぱり俺は自己中心的なくそ野郎だな。そろそろ無駄な事は考えないようにするか…

俺は両手にライフルで、千冬さんはGNバスターソードの斬撃飛ばしで、鈴は九龍から呼び出したジャオ・ダン・ジイでグレートウォールに対して牽制射撃をしながら接敵する。

見たところ連装砲と対空砲しか装備していないようだ。この程度の弾幕なら宇宙にかかれば避けるのは難しくない。だがアレは邪魔だなあ…連装砲から破壊させてもらうぜ!!

両手のアサルトライフルが火を噴き徹甲弾を吐き出す…しかし弾は砲台には届かずに途中で動きを止めて静かに自由落下してゆく。

ちっ、バリアーか…なら発生装置がどこかに…うごっ!!なんだ!?!どこから砲撃だ!!ハイパーセンサーには何も映っていないぞ!!くそっ!!うるさすぎて音響探知が使えねえ!!熱源探知してやる…おい…なんの冗談だよ…こいつあ

「俊葵!!これは?!」

「いったいどういう事なのよ?!」

「分かってる!!とりあえず背中合わせになるぞ!!お互いにカバーしあうんだ!!」

くそつ…東…どうやら俺たちはハメられたようだ

《どうということ?》

俺たちの周りの状況を送るから見てみる

《状況つて…衛星写真じゃグレートウォールが二つだけけど…うそ…でしょ?》

本当だよ…まさか地面の中にこんな物を隠していたなんてな

俺たちの眼下に広がる地面からパワードスーツを着た兵士たちが千数人表れた

さっきの砲撃でシールドエネルギーがISの攻撃を受けた時と同じくらい減った…

つまり攻撃力がISに匹敵する歩兵が千人と化物じみたトンデモ兵器が二つ…普通な

ら逃げ出したくなるぜ

《逃げて!!そんな戦力を相手にしていたら俊くんたち死んじゃうよ!!》

人に任務を頼んでおいてそれかよ…それにココで倒しておかないといずれ相手にす

ることになる。早いに越したことはないさ。大丈夫だから安心してよ

《嘘はつかないで…》

俺は嘘なんてついちゃ

東は俺の言葉を遮る

《生きて帰ってきて…私はそれだけで満足だから》

じゃあ黙って俺を信じろ。お前を悲しませたりはしないよ。じゃあ切るぜ

ブツ

「逃げるか？」

「誰に言っている？」

「冗談でしょ？一騎当千…その言葉の意味をあいづらに思い知らせてやるわ」

ええ…意外とやる感じじゃん…本当は怖いし帰りたいんだけどなあ…ま、愛した女の為に頑張りますか!!

ライフルを構え直して俺はグレートウォールへ突貫した。

「私共が開発したパワードスーツの出来栄えは如何でしょうか？高性能なバッテリーを使用することによってISに匹敵する火力を発揮することが可能です。素材は良質なものを使用しているのでそれなりの防御力、機動力を持っています。中隊、大隊での戦闘は圧巻です」

司会者は早速現れたパワードスーツの紹介をしている。画面の中では黒いISが弾幕を掻い潜りながらGW（グレートウォール）に攻撃している最中なのだがプロテクト

シールドに阻まれて傷一つ付けられないと言った状況だ。

「それよりもあのパワードスーツを着ているのは普通の軍人なのかね？」

「それは私も気になるな」

「遺伝子操作をされている人間が使っているなら費用がかさみそうだ」

「ご安心ください。あのスーツを着ているのはわが社の兵士です。勿論、遺伝子操作などはされていません。コンピュータ制御でほとんどの操作が自動化されているので少し訓練するだけで使いこなせる商品となっております。それからISの攻撃がGWに届いていないのは高出力のプロテクトシールドが働いているからでございます。GW内では原子力発電がおこなわれているのでプロテクトシールドがなくなることはありません」

おお!!とホール内に歓声が沸き起こる。

「スーツを500買おう!!」

「私はGWを一台だ!!」

「まあまあ皆さま、落ち着いてください。まだショーは始まったばかりです。ゆっくりとあのISがどう立ち回るのか見てみようではありませんか」

この男は黒いISのことを知っていた。フランスの基地での事は彼らに筒抜けだったのだから。分からない事と言ったらIS名とパイロットが男だという事くらいだった。

「さて…あなた方の实力を見せて頂きますよ（ニヤリ）」

くそっ…あのシールド、どこかで見たことがあると思ったらプロテクトシールドか。突破するには相当な攻撃が必要だな…オーバードウェポンなら貫通できそうだが周りの兵隊共がそれを阻む。なかなかの布陣だ…ハアハア…少しでも隙を見せたら集中砲火を受ける…困ったものだ。原作通りなら後ろの方に入り口があるはずなのだが此奴にはない。きつと入り口と言っても大型のものではなく人間が通れるくらいの小さいものなのだろう。………地下からなら入れるかもしれないな…よし!!やってみる!!

「地下から攻撃するぞ。先導するからついて来い!!」

個人的な趣味で作ったギガドリルを呼び出し地面へと潜る。

こんなところで役に立つなんてな。ネタ武器もたまには役に立つもんだ…きつと他のネタ武器も使い道はあるだろうな、フフ。地中まで追っては来ないようだな…好都合

だ!!そろそろ地上だな

ドリルをライフルに持ち替えて地表へ出て発射する。しかし俺を待っていたのは無防備なGWの底ではなくて多数の砲台の数々だった。

「下にも砲台がこんなにあるなんてな」

「でも外よりかは幾分マシね」

「まさに難攻不落の城だな。だが私の剣の前では鉄屑同然だと思いき知らしめてやる」

弾幕は大した事ないので一つ一つ潰していく。左右のキャタピラが歩兵の邪魔になっっているのでこつちまでは入ってこない。あそこなら装甲も薄そうだ…ヒートパイ
ルで一気に行く!!

ドゴオオオン!!

両手にショットガンを持ち弾をそこらかしこにばら撒く。どうやらここは整備士や砲撃手の居住区の様だな。生身の人間だらけだ…どうせ逃げたって俺が殺すんだ…だからよお

「そこに突っ立ってろお!!」

逃げようと背中を見せる奴、銃をもって立ち向かう奴…あの時と同じだ…俺に怯えている。
いる。

「怯えろ!!竦め!!全力を出し切らぬ内に死んでゆけ!!」

何事かと部屋から出てくるもの、隠れようと部屋に籠り鍵を閉める者、そんなことしたって壁ごと部屋ごと破壊するのでみんな肉片に変わる。武器を取り立ち向かうものもいるが関係ない…生身の人間なんてこんなものさ。

「あつはつはつはつはつは!!ぎまあないぜ!!一方的に殴られる痛さと怖さを教えてやる!!」

弾切れになるとライフルに切り替え弾幕を切らさないようする。だれ一人だつて助けてやるもんか!!

しばらくするとあたり一面血肉の海になる。

「俊葵、もうその辺でいいだろう。もう撃つのを止めろ、死んでいる」

死体撃ちは基本じゃないですか、千冬さん

「私たちは戦争をしに来たのではない。この化物を止めに来ただけだ」

「千冬さんの言う通りよ。やりすぎだわ、可哀想よ」

「可哀想?こいつらはお前の国に害をなす存在だぞ。それなのに可哀想って思うのか?」

「確かにそうかもしれないけど今の行為は一方的な虐殺行為じゃない!!」

「俺は俺の敵を倒しただけだ。向こうも武器を持っていたし今後の作戦に支障が出るかもしれない」

「それでも…」

「世の中は理不尽でできている。もしそんな世界が嫌なら耳と目を閉じて静かに一人で暮らせ、それも嫌なら…」

「俊葵!!」

千冬さんが俺の言葉を遮る。

「さつさと破壊しないとこいつは止まってくれないぞ。もう片方も破壊しなければいけないのだ。急ぐぞ」

パワードスーツを来た歩兵も殺さなきゃいけないし急がないとな。

「千冬さん、一応これを持って行ってください。これから必要になるかもしれません」

そう言ってリロードしたライフルを一丁とマガジンをいくつか渡す。千冬さんは拡張領域にライフルをしまうと俺達とは別方向へ向かう

「私はこれから操縦室の方へ向かう。お前たちはエンジンを頼む」

「一人で大丈夫ですか？」

「誰に訊いている？」

「それもそうですね。行くぞ、鈴」

「ええ」

「ココからは別行動…やりますか。」

16話 誰が為に俊葵は戦ふ

俊葵&鈴サイド

ここ（GW）に来てからの俊葵はどこかおかしい。俊葵と代表候補生の訓練は何度か見たことあったけどこんな暴力的な戦いはしていなかった。敵を補足しては弾丸の雨を浴びせ肉片にする。覚悟してなかった訳じゃないけど余りにも残酷でグロテスクな現実が私の中に入ってきた。俊葵が先行して虐殺行為をしているので私はほとんど戦闘を行っていないかったがそれでも私はここに来るまで何人か殺した。青竜刀で両断したり衝撃砲でバラバラにしたり、とても簡単に死んでいった。そのたびに罪悪感に襲われる…俊葵はこんな感覚がないの!?!可哀想って思わないの!?!

おかしいわよ…人を殺して何とも思わないなんて…これじゃあ只の殺人鬼よ。

「どうしてあんたはそんな簡単に人を殺せるのよ!?!あんたには人情つてもものがないの!?!」

「こいつらは束の敵だ…俺の命の恩人の敵なら誰であろうと殺す。その代わりに俺は絶

対に死なない。殺した奴の分も生きる」

「ふざけんじやないわよ!!そんな子供じみた理由で殺される奴らの気持ちを考えたことがあるの!?!理不尽な暴力で命を奪われる気持ちを考えたことがあるの!!」

「無いわけないだろう…こんなことを続けていたら続けていたらいずれ俺の周りの人間まで傷つけるのではないかって思う。でも止めない…俺は覚悟を決めたんだ。たとえ世界を敵に回しても俺は絶対に東の味方でいるって…その為なら俺は何だってする」

ブチッ!!

興奮した私は俊葵に向かって衝撃砲を放っていた。しかし俊葵に当たる前に衝撃はかき消えた。何もなかったように俊葵は話を続ける。

「お前が怒るのも分かる…だから俺は納得してくれなんて言わない。俺の言い分は子供の言い訳のそれと同じ…とても自分勝手に独善的なものだ」

「それが分かっているならなんで!!」

「まるで押し問答だな…俺は東の敵を消す。ただそれだけだ…しかしその手段が残酷すぎると言いたいんだな」

「その通りよ。殺す必要なんてないと思うわ」

「じゃあ一つだけ言わせてもらおう。鈴、お前はこのGWを一人で…それもだれ一人殺さずに攻略できたか?」

うっ…それは…難しいけど…いや、無理ね。東さんの武装があっても無理だね

「殺さずに攻略なんて無理だろう？それに世間の認識ではISが兵器で人殺しの道具だ…悲しいことにな。そんな最強の兵器であるISよりも強い兵器が今の世の中に出回ったら世界のバランスはどうなると思う？今まで虐げられてきた男たちはGWのような質を量で補う超大型兵器へ手を伸ばす。束もそれは望んじやない事だ…だから俺はISを最強足らしめる為に戦う。俺がいる限りISは負けはしない。」

「落ち着いて話してみれば単純な事だったのね。納得しきれないことも沢山あるけどあなたの言い分は理解できたわ。やり方が極端なだけだったのね」

「そのようだな…でも後戻りはできないから俺は止めない。じゃないと今までに殺してきた奴らに対しての侮辱だ」

「分からなくはないわ。確かに今更人殺しを止めるくらいなら最初からそうすれば良かった。あんた…苦勞しているわね」

「まあな…ところで鈴、お前にとってISとはなんだ？」

「なによ、藪から棒に…そうねえ」

あたしにとってのISか…光、かしら。

「光？」

そう…私は小さい頃に日本へ転校してきたの。日本語が苦手で片言の日本語だった

からイジメられていたわ：しかも両親が離婚して不幸のどん底って感じ：母さんは女手一つで私を育ててくれた。苦勞を沢山させたと思う：そんな時にISがあつて女尊男卑の世界になっていたから母さんはより良い環境の職に就けたし、私もIS適性があつて負けん気も強かつたから努力と根性で代表候補生まで上り詰めた。もしもISが無ければ私も母さんも暗い生活をしていたと思うの：だから私たちの生活を明るくしてくれたISは光なの

「光：それは良いものだな。兵器つて答えなくて俺は安心したよ。きつと束も喜ぶだろう」

「あの人が喜ぶと何をするか分からないからちよつと怖いわね」

「違うない、はっはっは!!よっしや!!仲直りもできたし、行くぞ!!」

「ええ!!」

俊葵はとても子供っぽくて自己中心的で独善的だけどすごく優しい：きつと心の中は殺人のストレスでスタボロに決まつてるわ。強がつているけどみんなには見せていないところで泣いているんだろなあ：昔のあたしみたいに。そう考えると俊葵を救つてあげたいわ：私も人を殺してしまつた訳だし一緒に乗り越えたい：今はそう思えるわ。

千冬サイド

私はこの兵器の動きを止めるために操縦室へ向かっていた。

「くそっ!!なんでI Sに潜入されてんだよ!？」

「地下から入ってきたらしいぞ!!」

「いいから攻撃を続ける!!この先へ進ませるな!!」

私を行かせたくないところを見るとどうやらこの先に操縦室があるようだ。愚か者どもめ、通常の装備しか持たずにI Sに勝てるも持っているのか。外側の攻撃力と防御力は侮れないが内側はそうでもないな。しかし物量にモノを言わせた質を量で補う超巨大兵器。私一人ではきつと倒せなかったな。それにあのシールドは厄介だ。あれのおかげで此奴の防御力は格段に跳ね上がっている。こんなものを作るとは。変態技術者共が。

私は行かせまいとする歩兵を切り捨てながら目的地へ急ぐ。すると俊葵から通信が入った。

《千冬さん、俺たちはエンジンルームに着きました。もう操縦室へ行く必要はありません》

せん。エンジンを破壊したら脱出するのでこっちに來てください」

もう目の前と言うところまでできてそれか…

「私も操縦室に着きそうだ。データを盗むから少し待て」

《分かりました。無茶だけはしないでくださいね》

「任せろ」

通信を切り操縦室へ扉を剣で切り裂いて突撃する。中にいる人間へライフルで正確にコンピュータを壊さぬよう精密射撃で撃ち沈める。

ふむ…今まで剣一本で戦ってきたから興味なかったが射撃というものも良いものだ。これからはライフルや射撃用武装も使ってみるか。さて、確かこの端末を繋げばよかつたんだつたな。

制御板と思われる席の端末に接続する。

《ちーちゃん、お疲れさまあ》

東か…まあ肉体的にはそれほど疲れていない

《久しぶりの実戦でしょ？精神的に疲れたりしないの？》

疲れるに決まっているだろう。人を手に掛けるのはいくら回数を重ねても慣れない…だから俊葵の戦闘を見ていると不安になる。あいつはお前の敵と判断した相手に全く容赦がない。

《私は別にいいと思うけどなあ》

はあ…思い出せ、俊葵は精神年齢こそ大人だが元は一般市民…そんな奴がいきなり強力な力を手に入れて戦場へ送り出されて一方的な大量虐殺をしているんだぞ？

《それは…俊くんが私の為って言って…》

まともな感性をしていたら今頃PTSDで麻薬付けになってもいってもおかしくはないぞ

《私…俊くんに無理をさせてるのかな？》

さあな、私には分からん。だが俊葵の心中は穏やかではないだろうな。

《私は自分の邪魔する人間は誰であろうと何人であろうと殺したって全く気に病まない…私はそんな感性を俊くんに押し付けてたんだね》

詳しいことは分からないが俊葵の傍に居てやればいいんじゃないか？今、俊葵に必要なのは癒しと愛情だ。普段から過剰なスキンシップは取っているようだから問題はないだろう？（ニヤニヤ）

《でも…好きな人に無茶させて自分は高みの見物なんて嫌だよ…私…俊くんのを傷つけていたんだね。どうしよう…嫌われたりしたら》

なら自分用のISでも作つたらどうだ？そしたら一緒に戦えるぞ

《さっすがちーちゃん!! ナイスアイデア!! そうと決まれば早速IS作成に勤しま

ないと!!》

お、おい今のは冗談であって真に受けなくていいんだぞ

《もう決めた!! 私専用のISを作って俊さんと一緒に戦う!! よくよくし、頑張るぞお!! じゃあデータも貰えたいし切るね、んじや!!》

そう言つて束は一方的に通信を切つた。相変わらず子供っぽい奴め…ふふ。さて私も俊葵たちのいるエンジンルームに急ぐか。

エンジンルーム

俺と鈴は作業員と歩兵を全員殺してエンジンルームを確保して千冬さんを待つていた。

「まさかGWの動力が原子力だなんて…予想してなかった訳じゃないけどびっくりだ」

「あたしも驚いたわ。やたら防護服を着た研究員みたいな人が多いと思つたらこういうことだったのね」

ISは元々宇宙での活動を前提に作られているので放射線なんてへっちゃら。真空状態でもなんでもござれ

「てか、あんたこれどうやって破壊するつもりなの? 普通に爆破とかしたらやばいん

じゃ…」

「それに関しては大丈夫だ。原子炉ごと原子分解するから」

「は!? そんなことできるのあんた!?!」

「超分子振動音波発生装置ってのがあつて分子間の自由電子を崩壊させて分子ごと分解するっていう超兵器があるんだ。元は宇宙に無数に存在するデブリを破壊するための削岩機だけだな（小並感）」

まあ、嘘だけど…そんなトンデモ兵器は持ち合わせていない。だからそれっぽいものを出して「激動たる」力を使って原子分解させて壊す。

「未来に生きてるわねえ〜」

前世の記憶がある俺からしたら今の生活は十分に未来だよ…

「まあな。それより千冬さん遅いなあ…」

「確かに遅いわね。ここに来るまでの敵や罠は全部壊したからもつと早く来れるはずなんだけどね」

「どうせトイレにでも行ってるん（ガゴン!!）だあ!!」

いてえ〜!!どこのどいつだ!?!頭を殴ったアンポンタン…は?!

「誰がどこに行っている?」

振り返ると鬼がいた…全身装甲だから顔は見えないけど絶対怒ってる

うくむ…これは最終手段だから使いたくなかったんだけどなあ…。

「超高火力のプラズマライフルがあるんだ。一気に原子炉ごと消失させることができる威力だよ。でも地形も変えてしまう恐れがあるから使わないつもりだったんだけどね。エネルギー切れちゃったし使わなきゃいけなくなっちゃた」

勿論、エネルギー切れは嘘。もう一台もまた内部に侵入して壊さないとなあ。

「さて、外に出て戦おうか。まだまだ敵は残ってる」

「GWのデータは取った。私と鈴は歩兵どもの相手をしているからお前はGWの破壊を頼む。一人でも大丈夫だろう?」

「言うまでもない」

「じゃあ、ここからはまた別行動ね」

「おい、GWの様子がおかしいぞ」

「壊れてないか?」

「どういう事だ!?!」

「どうやらISが内部に潜入して破壊活動をしているようです。GWの底にも砲台は設

置していますがシールドはありません。きっとその隙を突かれたのでしょう」

ちっ…痛いところを突いてくる。しかもどういう訳か原子炉が丸々消失している。あの黒い I S か…それとも青い I S か…どちらにせよ脅威だな。新しいアームズフォートの開発を急がなければ…この地球の市場は我ら組織が支配するために…。

「しかし、I S 三機という戦力を相手にこれほど持ちこたえているのは凄いな…」

会場にいる誰かが称賛の声を上げる

「確かにその通りだ。特別な I S が相手と言っていたが見たところ黒と青の I S は全身装甲の上に武器の威力もそこら辺の物とは桁違い…」

「破壊されたものの難攻不落の城には違いない。地中に潜ることができる I S なんてま
ずいらないからな」

「お気に召したようでとても嬉しいです」

俊葵や東は自分たちの知らないところで暗躍する黒い影に今はまだ気付いていなかった。

千冬、鈴サイド

「いくら倒しても数が全然減らない!!」

「弱音を吐くな!!まだ800体以上残ってる!!」

ジャオ・ダン・ジイを使い周りにいる歩兵を何人も倒しているが一向に数は減らない。千冬は千冬でソードビットと日本刀型のIS用サーベルで敵を薙ぎ払いながら高速戦闘を行っている。しかしISのエネルギーが無限にある訳でもなく相手も少なからず訓練を受けた兵士なので着実に鈴と千冬は追い詰められていた。

「エネルギーも残り30%を切った!!」

「くっ……このままでは帰りの分のエネルギーが……」

圧倒的な数の前にISは屈しようとしていた。この世界で起こってはいけないことが起ころうとしていた。

《ちーちゃん、鈴ちゃん、二人とも帰投して。あとは俊くんがやってくれるから》

ふざけるな!!生徒一人を置いて戦場から撤退できるか!!

そうです東さん!!私たちはまだやれます!!

そうは言っているが千冬はともかく鈴は心身ともに疲労困憊だった。初めての实战で人を殺したのだ……この程度の疲労は当たり前。

《ISについて誰よりも知っている私が撤退しろって言うてるんだよ?それに鈴

ちゃんはそのようなボロボロなISで何ができるの？ ちゃんはその刀一本で全員倒せるの？ 》

それは…

私は刀一本で世界を取った女だぞ？ 不可能ではない

《………私が心配なのはね、なにもISが負けてしまう事だけじゃないんだよ。 ちゃんんと鈴ちゃんに死んでほしくないんだ。 俊くんのことなら大丈夫、絶対に帰ってくるから》

分かった… 嵐、帰るぞ。

良いんですか!?

私に従え。 超音速で戦場を一気に抜けて帰還する… 行くぞ

…はい

《俊くんもそれでいいよね?》

《最初から一人でやるつもりだったんだ。 何も問題はない… あるとすれば腹が減つて力が出なくなることだな》

《ふふ、じゃあ帰ってくるのに合わせて料理を作るよ》

大丈夫そうね…

軽口を叩けるくらいには余裕なんだな… 嵐、掴まれ。 飛ぶぞ!!

はい!!

千冬さんと鈴は飛び立ち戦場を後にした。

「見ろ!!外で戦っていた二機の I S が逃げ出したぞ!!」

「しかしまだ一機残ってるぞ?」

I S が逃げ出したという事実には沸いて、司会者もその事実喜んでいた。

「I S を破壊できなかったのは残念ですが、皆様見てください。未確認の I S と代表候補生が逃げて行きます。G W が攻略されたのは予想外でしたが I S も数と言う武力には逃げだすと言うことが分かりました。それだけでも大きな収穫だとは思いませんか?」

ふっ：G W は欠点があったせいで投入した二基とも破壊されたか：しかし新たな A F への足掛かりにはなったか。それにパスワードスーツの方は数さえそろえれば I S と同等以上に戦えることが分かった。所詮 I S も人間が扱う兵器：油断と慢心があるからコンピュータ制御のパスワードスーツが戦闘向きなのは目に見えている。

「残り一機の I S は逃げないようなのでシヨーはまだまだ終わりません。さあ!! I S が我々の前に膝まづく瞬間を見ようではありませんか!!」

「「おお!!」」

くくく…: I Sなんて若い兵器はこの世から消し去ってやる

俊葵サイド

俺は今、もう一基のGWの内部に入って破壊活動を行っていた。出てきた人間を千切っては投げ千切っては投げ（物理）の大活躍。

「助けてくれえ!!俺はただのエンジンアだよ!!」（中国語）」

コイツ何言ってるの? 喋るんなら日本語喋れよ。I Sを作った束が、「え? I Sの概要が日本語じゃないかって? 翻訳するの面倒くさいから日本語を勉強してよ」なんて言ったものだから今の世界共通語は英語ではなく日本語に変わりつつあるんだ。で、こいつ何言ってるのかな? 翻訳ソフト使うか…:…なんだ、助けてほしいのか。自動翻訳ソフトON、マシンボイスON

「良いだろう…助けてやる（中国語）」

「ほ、本当か!」（中国語）」

「ただし…:…真つ二つだ!!」（中国語）」

パチン!!

目の前にいるエンジニアは指ばっちんの音と共に縦に裂ける。

「助けてやったぞ……これで生からの苦しみから解放された」

さて人助けもしたところだし先に進むか……使っていない能力も試したいし実験体になつてくれる人が沢山いたら嬉しいなあ。

なんて事を思いながら先へ進む。

まずは「命の鐘」を鳴らしてみよう。奪った命は俺のものにできたりするのかな？

俺はハンドベルを取り出し、命を奪うイメージをしながら鳴らしてみる。

チリン……………ドサ、ドサ、ドサ

壁の出っ張りに隠れていた兵士が倒れ込む。

あ、死んじやった。もっかい鳴らしてみるか。今度は命を与えるイメージを……

チリン……………ピクン

生き返った!? 凄いな……チートやチート!! 起き上がったら厄介だな。殺すか

チリン……………

これでよし。次は何を試そうかなあつと。ん？ 隔壁が下りてるな。ふっふっふ……「幻惑」の熱で溶かすか。でもどうやるのかな？ とりあえず手が温かくなるようなイメージでやってみるか。むんっ!! お、隔壁が真っ赤になつてる。触ったら熱いかな……えい。

ぬ。ふう…

熱く…ない!?おお!!こいつは便利だ。このまま手を置くまで突っ込んで無理やり開くか…よいしょっと!!開いた開いた、よおし進もう。この先に原子炉があるはずだ。さつさと破壊して外の兵士を蹴散らして帰らないと…外に出たらこの能力も使えないしIISのシールドエネルギーは節約しないとイケない。衛星で監視されているかもしれないのに超能力なんておちおち使えないしな。

17話 力と対価

束はコンピュータと向かい合い顔をしかめていた。そんな束を不思議に思ったのかクロエが話しかける。

「先ほどから顔をしかめておりますが何かあったのでしょうか？」

「うくん、俊くんについてちよつと調べてたんだよ。戦闘中の俊くんをモニターしてたらどうもいつもより凶暴なんだよね。だから調べてみた結果……」

「結果？」

「全く問題がなかったんだよね」

ニパーと笑顔でクロエに結果を報告する束。それを聞きクロエはあきれ顔になる

「はい？」

「だからあ全く問題がなかったの。俊くんは精神的に不安定なんかじゃない。でもその過程で面白いものが見つかったんだ。俊くんの精神に問題はなかった……でも自我を抑え込んで戦闘を行うときに考え方や性格を変えているみたいなんだ。多分ただけど私の為って大義で殺人の後悔や懺悔を忘れようとしているみたい。ちよつとこれを見

て」

そう言うって宇宙に取り付けられているヘッドカメラの映像をモニターに映す。映像は俊葵視点で研究員や戦闘員に対して虐殺行為を行っていた。頭を掴み背骨ごと引っこ抜いたり、口に手を突っ込んで内臓を引きずりだしたりいつもの俊葵からは考えられない行為をしていた。

《東の夢を壊すようなモノを作ってんじやあねえよ!!》

「うっ……これはひどいですね」

流石のクロエも口元を手で覆った。でも東は違った

「俊くんはきつと苦しんでる……いや絶対に苦しんでいる。ちーちゃんの言う通りだったんだ……私は俊くんに自分の価値観を押し付けて人殺しまでさせて!!最低だ……私……」

「きつとトシキ様は大丈夫ですよ。だって東様がいるじゃないですか。それに私も精いっぱいアシストをさせていただきます。ですのでトシキ様のメンタルケアは私たち二人で頑張りますよ!!」

「今更、愛してくれなんて虫のいい話だよ……私は俊くんの心に消えない傷を負わせちゃった……愛しているなんて言えないよお……ふえくん!!」

遂に東は泣き出してしまった。東の心中を知っているクロエも泣きたい気分だった。でもクロエまで泣いてしまったのは收拾が着かないことをクロエは理解していたので

グツツと泣くのを我慢して束を励ました。

「その様な事を言つてはトシキ様が悲しみます。トシキ様は本当に束様の事を愛しておいでです…ですから束様はトシキ様の気持ちに伝えてあげてください。きつとそれがトシキ様を癒す最善の方法でしょう」

「ぐすつ…本当に？」

「私は主人に嘘をつくほど恩知らずではありません」

「えへへ、じゃあ俊くんが帰ってきたらいっぱい癒してあげなきゃ!!」

「その意気です束様。私はきつと傷ついて帰ってくるであろうトシキ様の為に医療カプセルの用意をしておきますね」

そう言つてクロエは医療質の方へ向かい、束は自分用のISを作るために研究室へ向かった。

俊葵サイド

GWの二基目を破壊して外に出た俊葵を待っていたのはパスワードスーツの大隊だった。千冬さんと鈴が奮闘して幾分か数は減っているがそれでも700人以上残っている。GW攻略の際に調子づいて撃ちまくった俊葵に残された武装は人間用の武装一式とグラインドブレード、そしてIS用サーベルが数本、刀が沢山あるだけだった。IS

用の遠距離武器がない今、俊葵は両手にサーベルを持ち奮闘している。

数が多すぎてやになるぜ、畜生。能力が使えない以上、剣だけで対応しなきゃいけねえ…さつきから百人近く切ってるが一向に数が減ってる気配がしないぜ。ちつ…グラインドブレードで一気に数を減らすか。

《グラインドブレード接続完了…不明なユニットが接続されました…システムに深刻な障害が発生しています…直ちに使用を停止してください》

いつものアナウンスが流れて右腕に巨大な鉄の塊が装着される。兵士たちはそれを見て攻撃を右腕に集中させる。これだけの砲撃を受けたら流石のグラインドブレードもぶつ壊れちまう!!避けるの大変なんだからさあ!!

「あの黒いI Sなかなかやるな」

「見てみるよ。あの黒いI S、何か取り出したぞ」

「おいおい、あんな化物みたいな武器を使うのかよ…」

さつさと逃げればいいものを…なんで諦めずに戦うんだ。あのパワードスーツだってタダではないんだぞ。頃合いを見て後退させるか…いや、ここで下げてしまつては買手に面目が立たない…くっ、どうする。

すると司会者に一本の電話が入る

「皆様、ちよつと失礼。こんな時に一体なんだ。今はプレゼン中だと知らせたはずだぞ
!?!」

「でもそのプレゼン…上手くいってるの? GWは破壊されてパスワードスーツの部隊も半数まで減った。増援が欲しいんじゃない?」

同僚の女の声を受話器から聞こえる。

「貴様のAFが無くては大丈夫だ!! 買い手は付いた!!」

「ならいいけど…増援が欲しかったら何時でも言っただけ。AFの一つや二つすぐに出撃させてあげ…る♡」

「猫なで声を出すな!!」

ヒ!

あんのクソアマ…自分が担当しているAFが順調に建造できているからってえ…。まあ、買い手は付いたし問題はない。

「いかがでしょか、皆様?」

「想像以上だよ。IS三機を相手にして残り一機まで追い詰めるとはね」

「ここにいる者の意見はすでに一致している」

「と、言いますと?」

「購入だよ。GWもパワードスーツもな」

「お買い上げありがとうございます。ではメインディッシュをお召し上がりください、ふふ」

そう司会者が言うともニターの中で何人かの兵が大きなバズーカのようなものを担ぎ始めた。

くくく…シールドエネルギーはどれくらい残っている?ええ?黒いIS

グラインドブレードもここまでだな、バッテリー切れだ…ハアハア…残り400くらいか…。シールドエネルギーもこれ以上は…ハアハア…全身装甲でよかった、物理的に防御力が上がるからな…。

グラインドブレードをしまつて両手に刀を握り敵へ突貫する。刃こぼれした刀は捨てて新しい刀を呼び出し、手当たり次第に切り捨てていく。所詮は量産された鈍刀…何

俺は落ちた腕を拡張領域に入れ込むと敵の方へオーバーードブーストを利用して一気に距離を詰める。そして左手で剣を掴んでスナイパー部隊と思われる少人数のグループを襲う。腹に被弾して内臓が焼けるがお構いなし…突きで頭を吹き飛ばしたり、手足を切断して達磨状態にしたり、はらわたを引きずりだしたり、怒りにまかせて剣を振るう。

殺す!! だれ一人逃がしてやるもんか!!

すると俺の目の前に小さいモニターが現れる。そこにはこう書かれていた

《強く成りたいですか?》

愚問だな……Yes I do!!

俺はモニターの「はい」をタツチする。

《縮退炉二号機、縮退開始。縮退炉のリミッターを解除。ワンオフアビリティ》

Schwarz Fligel (黒き翼) を開始します》

宇宙の外装がユニコーンガンダムのNT-D発動時のように割れていき黒く光り始めた。更に拡張領域にいくつかの武装とスラスタが外れてウイングガンダム(EW版)のような翼が追加される。早速、一本の槍を飛び出す。すると赤黒くて長い槍が左手に収まる。

ヒュッ…

一振りすると周りにいた兵士たちはみんな倒れた。何が起きたかは一目瞭然。《ゲイ・ボルグ》が周りにいた奴らの心臓をエネルギー弾で打ち抜いたのだ。宝具の名を受け継ぐ武器だけあって消費エネルギーは莫大だな：でもそんな事はどうでもいい。このまま全滅させてやる!!

「何が起きたのだ？」

「黒いＩＳを追い詰めたと思ったら：まさかワンオフか!？」

「ワンオフアビリティを発現させた機体では相手が悪い：勝負は見えたな」

「買い手たちは予想外のワンオフに驚いていた。」

「しかしこんなにも強力なワンオフを有している機体を相手取る機会は少ない。この実験での問題は皆無だろう」

「そうだな。全滅しそうとはいえ兵器としては高水準の物ばかり。買わない手はない」

正直なところ司会者は安堵していた。一方的に蹂躪される兵士たちを見て買い手たちが手を引くと思っていたからだ。しかし結果は逆で兵器としての完成度の高さを使い易さをしつかりと評価していた。女尊男卑の世界で立場を追われて落ちぶれた人たちだったがその目は確かなものであった。

「では後日、商品の配送をします。お買い上げありがとうございます」

よかった…これで開発費が増える。次は絶対に破壊してやるぞ!! 黒いISS!!

だいぶ数も減ったな…これがワンオフなのか…素晴らしい力だ。これなら残りも楽勝…という訳にはいかないだろうなあ。今までの戦闘で溜まった疲労と負傷で身体は限界寸前…動け俺の身体!!

何とか体を反らして放たれた徹甲弾を避ける。しかし次弾が左目辺りに当たってしまふ。普通の徹甲弾なら衝撃だけでそれ程大きな怪我にはならなかったのだが、放たれた弾丸は焼夷榴弾…フルフェイスだったがシールドエネルギーが無くなった宇宙は防御のすべがなかった。焼夷剤が燃えて俺の顔を焼く。急いで左手で炎を払い消火するが左目が見えない…頬も爛れているのが感覚で分かる。

ぐう…熱い…痛い…。ハアハア……………許さない…。

俺は拡張領域から《カラドボルグ》を呼び出し横一文字切りで周りに残っていた奴らを全員殺す。どれだけ伸びるか分からなかったが…ハアハア…ちゃんと全員に届いたようだ。ハアハア…最初からこうすればよか…った。くそ…せめて自動操縦で…ハアハア…場所はどこでもいい…こんな姿では束やみんなに合わせる顔がない…飛べ…宇宙。俺を適当な場所へ…

そこで俺の意識はなくなった。自動操縦がONになったポロポロの機体はまた形を

変えブースターを装着してどこか遠い場所へ行く。

東は宇宙をモニターしていたから分かった。俊葵の身体は今、ボロボロになっていて、事をして。しかし分からない事が一つだけあった。それは俊葵がなんでIS学園に帰投せずに別な場所へ行つたという事だ。

なんでココに帰つてこないんだろう…もしかしてこんな任務を押し付けた私を嫌いになったとか!? そんなの絶対に嫌!! どうにかして俊くんを連れ戻さないと!!…でも私の事を嫌いになってたらどうしよう…こんな酷い事をする私を嫌わない理由はない…。「何をしよげた顔をしている?」

「ちーちゃん、それに鈴ちゃんも…お帰りなさい。俊くんが学校にまっすぐ帰つてこずどこか別な場所へ向かっているんだ。」

ボロボロになった狂桜と甲龍がガレージの入り口に立っていた。装甲は厚めに作つたはずなんだけどあれだけ大量の敵を相手にしたらこうなるよねえ…次はエネルギー量と戦闘速度の向上をさせないと。

「きつと何か理由があるんだろうけど…それより二人とも怪我とかない?」

「私も嵐も疲れはしたけど身体は一応無事だ。それと、あいつのことなら心配するな、きつと無事だ。」

「分かった……二人ともゆっくり休んでよ。中国政府へは私から話をしておくから」

俊くんの散策も大事だけどよっぼどボロボロなのか追跡の途中で反応が途切れた。だから今はできる事からやっていこう。他国の領土で勝手に戦闘行為を行ったんだ。国際問題に発展する可能性は多分にある……はあ……面倒くさいけなあ。正直なところなんで私がつて思うところもあるけど、これも俊くんの為つて思うと頑張れる。待つて俊くん、すぐに見つけ出して助けてあげるから

18話 知らない天井

目が覚めた俺の目の前にあつたのは真つ白な天井だった。知らない天井だ：しかし薬品の匂いがあるので病室だと言うことが分かる。どうやらどっかの病院にでも運び込まれたようだ。左腕には宇宙（待機状態）がしっかりとあるのを確認して安心する。状況を確認しようと辺りを見回すがパイプ椅子が窓際にいくつか立て掛けてあるだけで、テレビなどは無い殺風景な部屋だ。ベッドから降りてここがどこか散策するか：よいしょと。腕や胸に着けられている変なケーブルを全部取っ払ってベッドを降りる。身体は軽いから回復はできたようだ：腹は減っているが：。ISの方は自動修復で最低限の戦闘を行えるくらいにまでは修復されている。通信機能は完全に故障しているけど：これじゃあ束と連絡が：：しかしまあ隻眼隻腕とは厄介なものだな、服を整えにくいしISのパネル操作もしづらい。早く右腕を繋げないといけないな。回復力も高いし手術で繋げたらそのうち癒着するだろう。

誰かが来ないうちに出ようと思つて扉に手を掛けようとした、すると扉が開かれて軍服を着て眼帯を付けた女性が数人現れる。そのうちの黒髪を肩で切りそろえた美人が

俺に話しかけた

「もう動いて問題は無いのか？」

この眼帯：ブラックラビット部隊：つて事はここはドイツか、厄介なところに来ちまったな

「なんならココから逃げ出してもいいんだぜ」

冗談混じりに応える。

「その様子だと大丈夫なようだな。君のことは基地中で話題になっているよ、ISを動かせる男としてな。勿論、報道規制はされているから安心しろ。ここに居て、私たちの敵にならなければ君の人権は守られる。それでも君の行動にはある程度の制限がされるけどな。おっと、紹介が遅れたな、私はクラリッサ・ハルフォーフ、機密事項なので詳しくは言えないがとある部隊の副隊長をしている」

左手を差し出して握手を求めたので俺はその手を握りつつ嫌味を言う

「俺がどんな人間か分かっていて隊長が挨拶をしに来ないところから察するに、よほど忙しい部隊なのか：それとも常識知らずの馬鹿なのか：まあ、どっちでもいいがな」

「貴様!!隊長の悪口を!!」

「待て、こいつの言う通りだ。本来ならこのような重要な任務は隊長の仕事：すまない、私たちの隊長は人付き合いが苦手な君から情報を聞き出せないと上が思ったらしく私

に白羽の矢が立った次第だ。無礼な対応、本当にすまない」

原作通り、なかなか丁寧で紳士的な女性だ。確かにラウラに情報収集は無理だろうな
…尋問とか拷問は得意そうだけど、ハハ…。

「悪いが俺から教えられる情報はほとんどない」

「まあ、そんな嘸みつくな。ずっと寝ていたんだし腹も減っているだろう。ドイツ料理は絶品だから一緒にどうだ？ 腹が減ってはイライラしていけない」

確かに腹は減っている…この際だし腹いっぱい食わせてもらおう。何日かぶりのご飯…栄養注射だけじゃ足りるはずねえもんな。

「そうだな、腹が減った。食堂へ案内してくれ、話もそこでしよう。誰かに聞かれて困るような情報は絶対に言うつもりはないし大丈夫だ」

「それを聞き出すのが我々の仕事さ。ついて来い、ちよつと遠いから歩くぞ」

そう言つてクラリツサさんは歩き出し、俺はその後ろをついて歩く。そして俺の両脇と後ろを残りの女性が固める。別に逃げ出したりしねえのに…。

食堂に着いた俺たちは各々食べたい料理を注文していく。

「私たちは注文を済ませた。これがメニューだ、好きな料理を注文するといい」

ふむ…やはりドイツ料理が多いな。

「じゃあニユルンベルクソーセージの盛り合わせを5人前、アイスバイン3皿、フラムクーヘン2枚、あとは…シユパンヘルケル？これはどんな料理だ？」

「あ、ああそれは子豚を焼いてソースをかけたものだ。皮がパリパリとしておいし
いぞ。だが…」

俺の注文の量が多すぎるからか、何と云うか不思議がつている

「大丈夫、このくらい朝飯前ですよ。昼飯時ですが」

「「プツ…」」

今のギャグで何人か笑ってくれた。おお!!理解者がこんなところに!!

「じゃあ、そのシユパンヘルケルを3皿、最後に黒ビールを大ジョッキで下さい、以上です。」

こんだけ食べばとりあえずは落ち着くだろう。料理を受け取って大き目のトレーをわざわざ用意してもらって席まで運ぶ。うくん、肉汁のいい香りがする。

「では食べながらで良いので質問に答えてくれないか」

「あむ…むぐむぐ…わはっは（わかった）。んむ…んぐ、これうめえな。これも塩味が効いてて俺の好みだ」

ちよつと行儀悪いが食べながら話す。すげえ美味いから仕方ない。

「では君の名前と所属を教えてください。なに、軽い自己紹介程度でいい。ラフにいいこう」

「トシキ・マツサキ。所属は…」

ここでIS学園と言うべきか束と言うべきかで迷った。俺の存在は世間には認知されていいない。それはIS学園を様々な組織から守るという意味合いが強いからだ。しかし束と言ってしまつては俺と束に接点があることがばれる。そうなつた場合きつと俺と束は軍にいいように利用されるだろう。いくら束と俺が凄かろうと数と言う暴力には苦戦を強いられる（負けるとは言つてない）。まあドイツが敵になつたとしても滅ぼせばいいだけなんだけど世間体がなあ…。

「この尋問はあなたが我々に敵意がないかを確かめるためのものだ。答えたくない質問には答えなくても良いぞ。ただし今後の行動にいくつかの制約が付くかもしれないがな」

「分かった、所属は伏せさせてもらう。だが俺は誰彼構わず噛みつくような狂犬ではない。俺が行動を起こすのは主人が命じた時がほとんどだ。そちらが俺に敵対しない限り俺は敵にはならない」

「すまないがまだ信用できない。それに主人とは誰だ？」

束なのだが…そんな事、言えないよなあ。所属不明と答えた手前、言い辛い…。今は隠しておいても問題ないかな。宇宙もあるし何時でも逃げられる。

「答えることはできない…が、今のところ多分機嫌が良い。敵にはならないだろう」

「気紛れな主人に仕えるのは大変だろうな。次の質問はお前の持つてゐるISについてだ。どんなことをしても外れなかつたし解析も不可能だった。最後は手首ごと切り外そうという案も出たのだが倫理的に没になった。だからそのISの詳細データを渡してほしい」

「それを本気で言つてゐるなら愚か者だな。お前は自分のISのデータをくれるつてののか？」

「この…無礼者!!」

クラリツサの後ろに構えていた兵士が俺に噛みつく。ちつ…割つて入るんじゃねえよ。

「尋問しているのは私だ。口を挟むな。すまない、我々はISを平和利用の為に使うつもりだ。」

詭弁だな。そんな薄っぺらな嘘を信じられる訳ないだろう。悪いが心を読ませてもらうぞ。

『きつと上は兵器に利用するだろう。しかしここは平和利用と言つておこう。詭弁だが兵器利用と言うよりは幾分マシだ。こいつはきつと中国で暴れまわつたISのパイロットに違いない。敵にだけはしないようにしないと…』

「ああ、そうだよ。主人の命令で中国へ進軍していた巨大兵器と機動部隊を全滅させた

のは俺だよ。公式ではどうなっているかは知らないけどな。実際問題どうなってるんだ？」

「んな!?今…私の心を!？」

「お、当たってたか。適当に言っただけなんだがな…まあ偶々だよ、偶々。で、教えてくれないか？」

このくらいは話してもいいか。

「あ、ああ。公式では代表候補生の凰鈴音と第四世代試作機に搭乗した織斑千冬が中国政府の依頼でテロ組織の進行を阻止したという事になっている。敵の規模は一個大隊程度と報道されているが実際は違うのだろうか？一個大隊程度の戦力で左目と右腕を失うほどの戦闘が起これると思えない…一体どれほどの敵を相手にしたのだ？参考までに教えてほしい」

「ふざけやがって…俺の頑張りは報道されてねえのかよ。まあ立場上、本当の情報は世間に報道はできないよな。教えるが驚くなよ？全長数百メートルの巨大兵器二基を筆頭に攻撃力だけならISクラスの1000人を超える二個大隊：鈴と千冬さんの援護が無かったら死んでたよ、はっはっは。いやあくあんときゃ本気で死ぬのを覚悟した」

あの時は衛星での監視を考えて、あえて能力は使わずにISだけで戦ったから苦戦しただけなんですけどね。ISは拘束具!!（異論は認める）

「いくら代表候補生とブリュンヒルデのコンビと言えどそれだけの大隊を相手取るのは難しいだろう…ほとんどお前がやったのか？」

「勿論だ。主人が命じれば世界を敵に回したってかまわない、それくらい力が無きやあの人の右腕は務まらんよ。今は右腕がないから右腕の代わりはできないけど」

（待て…こいつはさつき織斑教官の事を千冬さんと…そう呼んだな。つまり面識があるという事か…もしそうならこいつの所属は…確かめてみるか）

「ブリュンヒルデは元気だったか？あの方は掃除が得意なのだがワインをよく飲んで暴れるからな」

あれ？千冬さんって掃除は苦手じゃなかったっけ？それにワインより焼酎を好むし暴れてるところなんて見た事ないけどなあ

「へえ…こつちではワインを飲んでいたんだな。焼酎とか日本酒だけかと…はっ!」

（かかった。やはり織斑教官と接点がある。まだ推測だがおそらくこいつはIS学園の生徒だ。しかしそれが分かったところでIS学園とはな…手が出し辛いところに所属しているものだ）

くつ…俺と千冬さんが少なからず関係があることがバレちまった!!こんな簡単な誘導尋問に引つかかるなんて!!…いや、IS学園の生徒であることがもしバレているなら好都合じゃないのか？あくまで俺はちよつと特殊な専用機を持っている一生徒だと思

わせば束との関係を隠すちょうどいい隠れ蓑になる。ましてや千冬さんの知り合い、もつと言えば親友だと思ってもらえたら寧ろ好待遇で持て成されるんじゃないのか？
むむむ…俺はこういつた駆け引きは苦手なんだがなあ…頭痛くなりそうだぜ。

俊葵が目覚める二日前

束は移動式秘密ラボ「吾輩は猫である」名前はまだない」に中国政府のお偉いさんと信用できる国営放送局の記者を数名招いていた。普段の束を知る者からしたら明日の天気は槍か銃弾か、はたまた隕石かと思うほどの超常的現象であり、ましてや日本人であったならまだしも外国人を自分のラボに招き入れるなんて天地をひっくり返すほどの大事だった。

しかし当の本人は専門職の人が見ても分からないような難解な設計図を見ながら何かを作成していた。客人を招いておいてそっちのけで何かを作る束を誰も咎める人はまずいない。この人を除いて…

「こいつらを招待したのはお前だろう。さっさと挨拶くらいしろ」

「ええ〜めんどくさ（ガンツ!!）分かった!!分かったからそのモンキーレンチを置いて!! さすがにそんなので殴られたら痛いよ!!」

(（普通は痛いじやすみませんよ……）)

「もう……はいはくい。東さんですよお。これでいいでしょ？ちーちゃん」

「挨拶するだけマシになったか……こいつの無礼を許してくれ。本来なら招待するだけしておいてやっぱり帰れと言わなくなっただけマシだ」

えっへん、成長したでしょ。と言いたげな顔で豊富な胸をプルンと反らせる。当然、男たちの視線はその双丘へと注がれる。きつと俊葵がいたなら「俺の東に色目使つてんじやねえよ」と言つてキレて、千冬は慌てて止めに入り東は顔を赤くして照れるだろう。しかしそんな状況は生まれるはずもなく

「じゃあ早速話し合いを始めようか。まずは今回の報酬の話ね。中国は今回の事でどれだけ私たちに感謝しているのか……証明してほしいな」

ニッコリ笑顔で東は話しているが内心は「俊くんの搜索をしなきゃいけないんだからさっさと帰れよ。ちーちゃんが私に『こういつた事をするのも世間に対して味方という姿勢を見せる為の第一歩だ。頑張ってみろ』って言ってくれなかつたら無視して全部IS委員会のクソババア共に押し付けられたのに……」と心中穏やかどころか大嵐が吹き荒れていた

「そちらが我が祖国の領土で勝手に戦闘行為を繰り広げて中国人を虐殺した……中国政府はそう認知している。特にあの黒いISは酷いな……とあるルートで戦闘の記録を手

入れたのだが、あの黒い I S は残虐非道な方法で我々中国人を虐殺していた。さて……この情報が世間に漏れたらあなたの社会的地位はどうなるかな？」

「ぶ、無礼にも程があります!! その黒い I S が出撃していなかったらどれだけの被害が中国に出ていると思っっているのですか!？」

「誰が助けてくれと頼んだ? お前たちの I S は勝手に他国の領土で戦闘行為を行った。世間一般はそう思うだろうな」

束の後ろで待機していたクロエが激昂する。中国政府側のソファに座っている鈴木も眉間にしわを寄せ文句を言う。

「あたしたちが出撃していなかったらどうなっただと思ってるのよ!？」

「口を慎め、風鈴音! 貴様がここに居るのはあくまで当事者だったからだ。たかだか代表候補がこのような場に相席できるだけでもありがたいと思え」

「ぐう……(何よ……私たちが出動したのを確認してから軍を引いたくせに)」

クロエと鈴が声を上げている間、束は静かに能面のような無表情を目の前にいる物に向けていた。

「言いたいことは分かった……何が欲しいの? お金? 技術? それとも体?」

千冬、クロエ、鈴は驚きを隠せなかった。これだけの物言いをされても尚、束が冷静に話をしていたからだ。

「話が早くて助かります。私たちの研究所で働いてくれませんか？勿論、中国の為にね」
「それは無理。私は倭くんと自分の為にしか研究しないことにしてるから。それにISSを兵器として利用するような蛮人に提供する技術はないんだよ、ゴミ共。分かったら帰ってくれるかな？私は忙しいんだ」

いつも通りの束だった。

「おい、何が欲しいと言ったばかりだろう。少しくらいなら…」

「そうだよ、私は何が欲しいのか聞いただけであって提供するなんて一言も言っていない。それにこいつらムカつくから嫌だ」

私のことが馬鹿にされるならまだしも倭くんの事まで馬鹿にされるとなると許すわけにはいかないなあ…

「自分の立場を理解してないようですn」

パン！！

乾いた音が響いて額に穴が開く。クロエが喋っていた物を撃つたのだ。

「勝手な行為…お許しください。しかし東様…私はコレを許すことができませぬ。命の恩人を馬鹿にされて黙っていられるほど私は冷静ではなかつたようです…もつと心を落ち着ける練習をしなくてはいけませんね。…それにしてもあなた方の命は安く軽いものですね…誰も涙を流していませんから」

「き、きさま」

パァン!!

「五月蠅い蠅ですね…おっと、図らずもオヤジギャグっぽくなってしまいました。はっはっはっは(棒)」

「クロニクル、お前は何をやっているのか分かっていないのか!？」

千冬は目の前で起きていることにやつと口をはさんだ。しかしクロエはケロつとしている。

「ええ勿論分かっていますよ。邪魔なゴミを掃除しただけです…いえ掃除ではありませんせんね。大きな粗大ゴミが生ごみになっただけでした。トシキ様がここに居てもきつと同じことをするでしょう。あなた方に問います…あなた方中国は束様の敵ですか?それとも味方ですか?」

しばらく沈黙の後に座っていた最後の一人が口を開く

「どうやら…貴女とは仲良く成れそうですね。ふう…ゴミみたいな軍属を掃除していただけありがとう、礼を言わせてもらうよ。こいつらは中国政府内でも勝手な行動をする奴らでな、国民からの反感も強かったんだ。国民と政府を代表して礼を言おう」

そう言つて一人の役人が頭を下げた。東、千冬、クロエ、鈴の4人ともポカンとしている。そりゃそうだ、自分の同胞が殺されて礼を言っているのだから

「ここに居る記者は私の親族だ。信頼できる人だからここで起きた事は世間に出回ることはないから心配するな。そうだろう、お前ら」

「ええ、こんな奴ら死んで当然ですよ。これでやっと中国も明るい道を歩けますね」

「まったくもってその通りだ。先ほどは本当に失礼しました」

二人の記者も役人に倣って礼をする。

「もしかしてコレを掃除するために私を挑発したの？むう…戦争しないことに越したことはないけど利用されたのは嫌だなあ…ねえちーちゃん」

「私に話を振るな…しかしまあなんだ…良かったんじゃないか？戦争にならなくて」

千冬も状況をきちんと整理することができているようだ。クロエと鈴はというと相変わらずぼかんとしていた。

「実はこいつらをここへ連れてきたのはこうなる事を予想していたからなんですよ。相手が誰であるか理解もできないゴミは掃除するに限ります。鈴さんには伝えようと思っただですが敵を欺くにはまず味方から…すみませんでした。では報酬の話に入りましょう。今回の事で中国政府は本当に感謝しています。ですので相当量の報酬は覚悟しています」

「報酬ねえ…じゃあ研究費として日本円で…うんそうだなあ…500億用意してくれる？あと研究施設の譲渡。最後に俊くんのIS実験とかしたいから土地が欲しいな、砂

漠とかでいいからさ」

東の口から出たのはとんでもない報酬だった。金銭的なものなら法外と言うだけで別段問題はなかった。しかし一国家の中枢にある研究施設を自分勝手に使わせろと言うのはおかしい話だった。土地に關してもそうだ、砂漠とはいえ国が所有している土地をくれと言っているのだ。普通なら無理だというだろう。しかし今回のケースは普通ではなかったので二つ返事で了承した。

「その程度でよろしければすぐに用意いたします。しかし研究施設の譲渡には準備などがありますのでしばらくお待ちください」

「やった。研究施設は待つからいいよおへへ。あ、そうだ、今とても機嫌が良からこれあげる」

そう言つて東はとあるデータが入っているチップを渡した。

「これは一体なんでしょうか？」

「私は秘密基地で使つてた発電装置や作物栽培装置の設計図だよ。きつと役に立つからプレゼント」

「そ、それはありがとうございます!!きつと国の役に立てて見せます」

また深々とお辞儀をする

「しかしまあ…東の奴がこんなに成長するなんて…なんだか私は嬉しいぞ」

「なんだか信じられないものを見ているわ」

「奇遇ですね鈴さん、私も同意見です」

千冬、鈴、クロエの順番に束の成長を喜んで（？）いた。俊葵もこの場に居たら驚いていただろうとクロエは思ってた。

19話 臆病な男と強気な黒ウサギ

俺がドイツ軍の捕虜になってから四日が経過していた。最初の扱いとは打って変わって軍事顧問のような扱いを受けているので捕虜と言うにはいささか語弊があるし、俺に軍事の専門知識に富んでいるとも言えないので教えられる事といったら格闘訓練位なものだ：はあクラス代表戦まで約一週間：一夏達はちやんと訓練をしているだろうか？クロエは俺無しでもやっていけているだろうか？不安の種はたくさんあれど一番心配だったのは束についてだった。発狂して暴れていないといいなあ：まあ新聞やニュースにそんな記事は無いから問題はないようだけど。迎えに来ないのも宇宙の通信装置が壊れているからだろう。ドイツ軍に修理を任せようかと思っただが俺の物を知らない人に預けるのはなんだか気が引けたから自動修復機能だけで我慢している。それでも7割5分は修理できているので逃げ出すには十分：なのだが

「お兄様!!もう一本お願いします!!」

どうしてこうなつた

俺の目の前ではラウラが白のタンクトップに軍服のズボンを着て構えを取っている。

まあどうしてこうなったかは簡単な話なんだけどね。あの時はこんな事になるなんて思ってもなかった…俺があんな事をしさえしなければ…ぐぬぬ

尋問と言う名の食事会が終わってから俺はクラリツサと共に基地内を見物して回っていた。

「まさかあの織斑教官の知り合いだったとはな…先程は私や部下が失礼した」

「いやいや、身元が分からないISのパイロットなんて警戒して当たり前だし、気にしてないよ。ところでどこへ向かってるんです？」

「我々の黒ウサギ部隊の訓練場だ。君に私たちの訓練の風景を見てほしくてな」

それってつまり薄着で汗をかいていてスケスケの健康美女たちがいるところへ行くという事ですね、分かります。ぬふふ…軍人だし束や箒よりも腹筋や二の腕が良い感じに鍛えられているだろう。いやあ!!どきがムネムネですなあ!!

「ニヤニヤしているがどうかしたのか」

「俺よりも強い奴がいるかもしれないかと思つてな…なあ、その部隊の連中と試合してもいいか？」

「勿論構わない…しかし隻腕隻眼で戦えるのか？」

「舐めるなよ？俺はこう見えても五体満足の時に千冬さんに4回勝ってるんだぜ？10回は負けてるけど…」

どうして強化人間の俺とタイマンで互角以上に戦えるんだよ…おかしいやろ千冬さん。しかも段々と強くなってきているし、そのうち勝てなくなるんじゃないやね、俺

「なんだと!？」

信じられないものを見るような目で俺を見る

「ホントの事だから仕方ないだろ。それよりもここじゃないのか？」

「そ、そうだな…さあ、入ろう」

俺たちは基地内某所の体育館のような場所に着いた。中では想像通りタンクトップ姿の美女たちが格闘訓練に勤しんでいた。俺たちが入ってきたことに気付いたのか年長者らしき班長が整列させる。

「諸君はもう彼について知っているとかが改めて紹介しよう。彼はトシキ・マツサキ、ISのパイロットであの織斑教官に格闘訓練で勝利した強者だ。今日はトシキさんに君たちの相手を頼んだ。みっちり扱いてもらえ」

「織斑教官に勝つただと!？」

「副隊長、それは嘘八百です。織斑教官に勝てる人などいるはずがありません」

「そもそも男が女に勝るなど…」

「そんな固定概念を捨てなくてはトシキさんには勝てないぞ」

何やら外野がごちゃごちゃ言っているようだが関係ない。うひよお、良い具合に汗をかいているから透けブラしてはありませんか!!むふふ…ちよいと拝ませてもらおう。

手を合わせる形をとるが右腕がないので変な感じだ。それを見たクラリツサは柔道や剣道の礼か何かと勘違いしたらしく

「トシキさんは既にやる気満々の様だ。最初は誰から相手をする?」

「はい!!私から参ります!!」

威勢よく手を上げたのは年長者の班長だった。きつと班員たちにいいところを見せたいのかな。悪いが俺にはハンデがあるからちよつと本気で行かせてもらう。

「では両者は白線の前へ。……………始め!!」

彼女はまず俺の左側、つまり死角に入り込んだ。

ふむ…良い手だ。相手の死角に入り込み見えないところから奇襲をする…だがそれはどうかない!!

俺は姿勢を低くし、左足を軸に右足で相手の足を払い転ばせようとする。しかしジャ

ンブで躲され距離を取られる。

むむむ…流石は特殊部隊だな、一筋縄ではいかないうだ。

「よく躲した…ではもつと攻めさせてもらおうか…」

彼女との距離を詰めながら鳩尾、頸動脈、喉、鼻といった人体の急所ばかり手刀で狙う。それらの連撃は躲されるが一撃必殺が放たれるのはプレッシャーがかかるはずだ。カウンターを放ってくるが焦って撃ったカウンターなど強化人間の俺にとって避けるのなんて訳ない。こんな事を繰り返しているうちに勝負はついた。彼女のカウンターを躲した後には首筋に優しく掌を当てニツコリとほほ笑む。

「くっ…まいった」

首に当てている手を下に持っていきタンクトップの中に滑り込ませ胸を揉む。

ああく久しぶりだなあくこの感触。柔らかけえ

「き、貴様あ／＼／!!」

回し蹴りをされるが俺はそれをヒョイと避ける。

「がっはっは、良いものを触らせてもらった。お前たちは負けを許され無い部隊だろうか？ だったら負けた時に罰ゲームがないとつまらないじゃないか。それともなんだ？ 軍属でありながらも女を捨てきれないか？」

「調子に乗るな!! 次は私だ!!」

うおっ!!危ね!!いきなり殴りかかるなよ…まったくじゃじゃ馬なんだから。ほらよっと

突き出された腕を掴み、腕の力だけで持ち上げて投げ飛ばす。投げ飛ばされた彼女は背中を床に強く打ち付け痛そうに呻いている

「ぐう…」

「二応、手加減はしている。俺の本気を見たければ千冬さんでも連れてくるんだな。次は誰だ!!」

トキか!?ラオウか!?なんつってな、あんな人外の相手は御免被るぜ。あ、俺も十二分に人外だったでござる。

「部下が世話になったな…私が相手をしよう。織斑教官に勝ったなどと嘘をつく下郎は私が倒してやる。覚悟しろよ?お前に対して手加減できるほど優しくはないぞ」

後ろから声があったので振り返ると眼帯を外して戦闘準備を終えたラウラが立っていた。

「ならさっさと掛かってこい。俺も本気を出してやる」

「行くぞ!!」

ラウラは床を蹴り俺に接近する。ボクシングスタイルで腋を絞めながらジャブで俺を追い立てる。

「避けるだけか!? 所詮、お前程度の奴は何処にでもいるものだ。二度とデカイ口を訊けなくしてやる!!」

ジャブから蹴りにスタイルを変えて脛脛や腿を狙ってくる。痛いんだから止めろよそれ…って言ったところで止めてくれるラウラじゃねえよな…反撃開始かな

「これで決まりだ!!」

勢いをつけた回し蹴りを俺は鳩尾にキツイ一撃を加えられる…しかし当たったところで痛くも痒くも無い。俺はそのままラウラの髪の毛を掴み寄せて顔面に蹴りをぶち込み吹っ飛ばす。

「んぐう!!」

ガシャン!!

奥までふっ飛ばされたラウラは筋トレ器具を巻き込んで転がった。しかしまだ意識はあるようだ。

「ま、まだ…だ。まだ…終わって…ない」

「知ってるよ」

ヒュッ

「んな!?!」

「Sie sind schwach. Kaninchen (まだまだだね…う・さ・

ぎ・ちゃん♪)」

左目を開放しているラウラもさすがにこの距離を某十人衆のスピードで近付かれ、ほんの一瞬だけ驚き身体が硬直する。俺はその一瞬の見逃すはずもなく鳩尾につま先での蹴りを入れラウラを気絶させる。ふう…結局一人しかセクハラ出来なかつたぜ。

ラウラは薄れゆく意識の中、俊葵の放つた言葉を噛み締めていた。

「Sie sind schwach. Kaninchen (まだまだだね…う・さ・ぎ・ちゃん♪)」

クソツツ：私は黒ウサギ部隊の隊長だぞ。織斑教官に教えを乞うた最強の戦士だぞ。どうしてこんなところで負けたりするんだ!!こんな男なんか…男なんか!!私はまた出来損ないに戻るのか…嫌だ!!私は出来損ないなんかじゃない!!私を認めてくれ!!私を捨てないでくれ!!まだ私は負けていない!!私は!!私…は…。

私の意識はここで途切れた。そして目覚めた時には医務室のベッドの上に寝かされていた。

「私は弱くない…」

「いいや、弱いさ。凄く弱い、弱すぎて笑えるぜ」

!?

「そんな嫌味を言う為にここまで来たのか？」

ベッドの脇に奴はパイプ椅子を開き座っていた

「さあな、ただお前は自分の事を分かつてない。お前：一夏の事を恨んでいるだろう？」

「な、何故それを…」

「クラリツサから聞いたよ：ラウラ、お前さんは千冬さんを盲信するあまり織斑一夏を恨んでいるとな。何故そんなに恨む？一夏は何も悪いことはしていないぞ？」

知ったふうな口をきくな…

「織斑一夏が攫われなければ織斑教官はモンドグロツソで二回ともブリュンヒルデに輝けたのだ。それをあいつは：織斑一夏は邪魔したのだ」

「まるで子供だな、自分の気に入らないことがあると誰彼構わずに吠える」

「違う!!」

「いいや違わないね。じゃあなんでそんなに強さにこだわる？それは千冬さんに近づきたいからじゃないのか？」

凶星だ：私は一夏に嫉妬している。織斑教官は出来損ないだった私を部隊一の戦士にまで育て上げてくれた。力こそすべてだと教えてくれた。しかしそんな教官が弟の事を語るときだけ笑顔になっていた：私はそれが許せなかつたんだ。誰にも笑顔を見せる事のなかつた教官を笑顔にした織斑一夏に嫉妬していたんだ…。

「許せなかったんだ…織斑教官の優勝を妨げたのに教官には全く恨まれていなかった織斑一夏が…私の憧れを穢した男を。だから私は一夏を打倒するために鍛えてきた。お前は教官の弟に相応しくない、私の方が教官の隣にいるのは相応しいとな」

「そうか…なら隣に居ればいいだろう」

「それができるなら苦労はしない!!」

「はあ…お前は馬鹿か?よく考えてみる、どうして好きな人の隣にいるのに許可が必要なんだ?所詮は自己満足なんだ好き勝手やればいいさ」

んな!?そんなこと考えもしなかった。私は織斑教官に見ていてほしい、私はこんなにも強くなつたんですと見せたい!!

「俺について来い。今すぐに千冬さんに会わせてやる」

そう言つてトシキは私の手を取つて起き上がらせ抱きかかえると何処かへ行こうとする。

「俺が日本まで送つてやろう。ISで一気に日本までワープするから建物の裏に行くぞ」

「お、おい!!待て、ワープだと!」

私は抵抗するが抱きかかえられて身動きが取れない

「離せ!!こんなところ部下に見られたら面目が!!」

「ま、離してやってもいいか」

パツといきなり手を離されたので地面とキスをしてしまう。

「いきなり離すな!!」

「まあまあ、俺の I S にしがみ付け、勝手に I S を使ってるのがバレたら大変だろ？ さあ発進…だ？ ありゃ？ ワンオフを発現したはずなのにな…縮退炉にロックが掛かってる。仕方ない…ラウラ、俺の I S にしがみ付け。 P I C でお前には風が当たらないようにしてやるから」

勝手に基地を出るなんて大問題だ。でも教官には会いたい…どうしたものか。

私が無言で考えているとトシキは何かを察したのか話しかけてきた

「基地を勝手に出るのはマズイって思ってるんだろ？ だったら帰るときにお土産を用意してやるよ。それを持っていけばお偉いさんも納得するさ」

「分かった…付いて行こう。ただしおかしな真似をしたら私のシユバルツエア・レーゲンが火を噴くぞ」

「お前に負ける程俺は弱くねえよ。松崎俊葵!! 宇宙!! 発進!!」

そう言うのとトシキは教官のいる日本の空へと私を抱えながら飛び立った

20話 説得…からの即落ち

IS学園放課後

私、ラウラ・ボーデヴィツヒはIS学園へ来ていた。ここに教官がいるのか…こんなISをファッションかなにかと勘違いしているような奴らがいる場所で織斑教官が教えていると思うとむかつ腹が立つ。適材適所…やはり織斑教官はドイツで教官をしてもらった方があの人の為になる。しかし遅い…いつまで人を待たせているのだ。トシキは教官を探しに行くと言ってどっかへ行ってしまった。もう30分は待っているのに帰ってこない。喉も乾いたし自動販売機で飲み物でも買いに行くか…カードもあるし問題はないだろう

トシキサイド

千冬さんが良そうな場所を一通り回ったがどこにもいない…留守かな？今日は平日

だし学校にいますかと思っただけだなあ。てかなんでみんな俺に注目して…あ、そうか俺の右腕と左目が目立つのか。

「俊葵さん…俊葵さんです…の？」

「セシリアか。ひさしわぶっ!!」

ぎゅ~~~~~!!

「心配してましたのよ!?それにその腕!!その顔!!もう…こんなに酷いお怪我をなさつて!!」

息が!!息ができない!!おっぱいに埋まって死ぬ…良い人生であった。

「セシリア、もう離してやったらどうだ?俊葵も苦しそうだぞ」

「そ、そうですわね…でも本当に心配しましたのよ?」

ふう…離れてくれたか。ちよつと名残惜しいが俺は千冬さんを探さなければいけないので仕方ない…。

「二人とも千冬さんがどこにいるか知らないか?ちよつと会わせたい奴がいるんだ」

「多分、東姉さんのところじゃないか。地下への階段を下りていくのを見た」

「その会わせたい人と言うのはどなたですか?」

二人になら話しても大丈夫だよな

「千冬さんがドイツで教官をしていた時の教え子だよ。どうも一夏を恨んでいるみたい

だから千冬さんと話をさせて落ちて着いてもらおうと思ってね。それにしても地下室かあ…東にこの顔を見せたくないなあ」

右腕はともかく顔の左半分はやけどの跡のように醜く焼けて皮膚が変色している。こんな顔で東には会いたくない…だから行きたくない。でもいつかはこの顔を見せなきゃいけないわけだし覚悟を決めて会いに行くかい。

「じゃあ俺は行つてくるから。千冬さんとその人を会わせたらまたドイツへ帰るから本格的に帰つてくれるのは明後日あたりかな。それまで特訓を怠るなよ、んじゃ」

そう言つて俺は地下へと続く秘密の入り口へ向かつた

ラウラサイド 東邸近くのアリーナ

まだか…もう一時間…本当にこんなところにいるのか？あいつが私をだます理由はないから嘘だとは思えないが遅すぎる。あいつには礼儀というものが無いのか…まったく。

「…でよお。俊葵がいないときあ…」

「…もきつと…忙しい…」

「それも分かるけどさ…」

ぼそぼそとしか聞こえないので会話の内容は分からないがこんな時間に生徒が残っているのか。なかなかどうして向上心のある生徒もいたものだな。見上げた根性だ：がしかし所詮は一般生徒の域を出ない腕前さ。でもまあ顔くらいは見ておこうか

そして私は廊下の角から出てきた生徒を見て驚いた。

こいつは…織斑一夏!!こいつのせいで教官は!!

私は自分の身体が勝手に動くのを感じた。織斑一夏の方へ足が勝手に動いてゆく：そして右腕を振りかぶりその顔を思い切り殴った：はずだった。しかし私は気が付くと地面にたたき伏せられていた。どうやらパンチを避けた時にそのまま私の腕を掴み柔術の一本背負いを私にきめたらしい。

「あ、わりい。でもいきなり殴りかかる方も悪いんだぜ?」

「ぐう…」

背中を強く打ち付けたせいで声が出ない

「これはドイツ軍の特殊部隊、黒ウサギ部隊の制服ですね。どうしてIS学園に…：とりあえず先生を呼びましょう」

「ああ、織斑先生を呼んでくれ。その方が俺としてもこいつとしても良いだろう。おい、立てるか?」

織斑一夏の隣にいた銀髪の女生徒は織斑教官を呼びにどこかへ行ってしまった。織斑は右手を私に差し出すがその手を振り払い立ち上がり織斑一夏と雑談と言う名の一方的な文句をぶつけた。

「ははっ、それだけ元気があつたなら大丈夫だな。それよりいきなり殴るなんてびっくりしたぞ。何で殴られたかは大体は想像できるけど…お前、千冬姉の教え子だろ」

「ああそうだ。お前さえいなければ教官は大会二連覇を達成できた!!それなのにお前はその邪魔をしたんだ!!」

「それは…」

「それはお前の思い違いだ、ボーデヴィツヒ」

振り向くと教官とトシキ、さっきの銀髪の生徒、そしてボロボロで油汚れがひどい白衣を着たビン底メガネのメカニックがいた。

「きよ。教官!!」

「まったく…話は俊葵から聞いたぞ。もしもお前が一夏を恨んでいるならそれは間違いだ。あの頃の一夏はまだ幼く未熟者だった。プロの人攫いから逃げる術などなかったからあの誘拐は一夏のせいではない。それでもお前は一夏が悪いというのか?」

「私は許せないのです…本当は分かっていた。私が間違っているという事も…逆恨みだつてことも…それでも孤高で誰も寄せ付けなかった教官が笑顔で語るその男が憎い。

教官は一人だった私の傍に居てくれました：一人の寂しさを共感できる人だと思っていました。しかし教官が織斑一夏の話をして笑顔になった時に分かったのです：教官は私と同じではない：教官には帰るべき場所も家族もいると：。私は教官のように強く孤高でありたかった：でも私は弱い。そのトシキにも織斑一夏にも負けてしまつた：もう私は如何していいのか分かりません。また私に教えてください。どうやつたら強くなれるのか、如何したらいいのかを」

「知るか、そんなもん自分で考えろ。それができたならお前は半人前だ。今のお前に教えてやれることはこの程度だ。もつと教えて欲しければIS学園に來い。私は何時でもお前を待つている、歓迎するぞ」

「知るか」ですか：教官らしい答えです。でも今の私には満足過ぎる答え：。教官は私に優しい笑みを浮かべている。ああ：私はこの顔が欲しかったのだな。目から自然と涙があふれ出てきた。

「それと言い忘れたがお前は一人ではないぞ。そこにいるクロエはドイツの研究所から連れ去られフランスの施設での非合法実験に使われていた人物だ。身元ははっきりとしていないがお前と同じ遺伝子操作された人間だ。お前より早く生まれているのでお前の姉だろうな。では私は忙しいので帰るがゆつくりしていけ、ただし深夜にはドイツへ帰れよ？部隊のみんなが心配するからな：ではまた会おう」

そう言って教官は帰って行った。私の心の中にあつた黒い何かは綺麗に無くなっていて、私の心にあるのはここへ連れてきてくれた俊葵への感謝の念だった。俊葵に負け、一夏に負けて私は自分の実力を再確認させられた。特殊部隊の隊長になり国家代表候補まで上り詰めたと思っていたが井の中の蛙、大海を知らずだったようだな…これからh

「どじぐううううん!! あゝ、いゝ、たゝ、かゝ、つたゝ、よゝ、おおおおお!!」

私の思考を遮りメカニックが俊葵に飛びつく。しかしこの銀髪の生徒…クロエだったか。この人が私の姉か…私にも…試験官ベイビーの私にも家族がいたのか…こんなに嬉しいことはない。

「ラウラと…そうお呼びしても?」

「姉…さん」

「私も妹がいるなんて初めて知りましたよ。ぎゅゝつてしてあげますからラウラ、こつちへ」

クロエ姉さんは両手を広げて私を迎え入れてくれる

「姉さん…私のたつた一人の家族…姉さん」

私はずっと欲しかった教官の笑顔と家族を同時に手に入れたあまりの嬉しさに涙が止まらなかった。

「もうラウラは一人ではありません。これからは私とトシキ様、それに沢山の友人もいます。もう寂しい思いはしなくてもいいのです」

「ああ……ああ……。嬉しい……嬉しいよ……姉さん。………ん？トシキ様？」

何故、姉さんは俊葵の事を様付けで呼ぶんだ？もしかして俊葵に弱みを握られているとか!?ぐぬぬ……恩人と言えど姉さんを……いやしかし……ぬう

「トシキ様は私の命の恩人です。研究施設に売り払われた死ぬのを待つだけだった私を連れ出してくれた。だから私の人生の全てをトシキ様に捧げると決めたのです。勿論、処女も捧げました……／／」

姉さんは顔を赤く染める。むう……俊葵め……姉さんにこんな顔をさせるなんて……羨ましい奴だ。俊葵には恩を感じているが……ああ私は如何したらよいのだ!?

ラウラは今日起きた様々な出来事のせいで頭の中はてんやわんやだった。

俊葵サイド

千冬さんとラウラの話が終わったと思うと束はいきなり抱き着いてきた。

「ほんつとうに心配したんだよ!?!右腕はどうしたの!?!左目は!?!こんなにボロボロになって……うう……私が任務をお願いなんてしたから……うう」

「束のせいじゃないよ。俺は束の夢を守るために奮闘した、ただそれだけだよ。愛する

人の夢を守りたいって思うのは当たり前だろう。でもこんな顔じゃ束も俺の事を嫌いになるよな…こんな醜い顔の男が恋人だなんて嫌だよな…」

ぎゆう〜

「前にも言ったと思うけど私は俊くんのことを愛してる…絶対に裏切らない。怪我をしたなら治せばいいよ。顔の整形くらい腕のいい医者はいくらでもいる。それに目が見えなくなってもISのハイパーセンサーを埋め込んだ目を私が作ってあげるし、右腕だってISの技術を使ったスペシャルな物を作ってあげる。俊くんの為ならなんでもしてあげるよ」

「それは嬉しいがドイツに戻らなきゃいけない。向こうのお偉いさんには内緒で出てきてるから国際問題になりかねない。あとで適当に俺が持つてる古い世代の設計図をいくつか持って行ってなだめるよ」

「むう〜戻らなくていいのにい〜。それにお土産なんでもってかなくてもいいじゃん。ほつとこうよお〜」

あからさまに不貞腐れる束…可愛いな

「二応、ドイツは俺の命を救ってくれた。だから少しくらいならいいだろう？なあに、束クラスの天才が簡単に作れる程度の設計図だから問題は無いさ」

「…分かった。でも俊くんがそうしたいって言うからなんだからね。じゃないと私は納

得しないよ…」

「ありがとう、んじゃあさつきと帰るよ、またな東。行くぞ、ラウラ」

俺はラウラの手を取って屋上へ向かう。あ、ISの修理してもらえばよかった。東ならきつと十数分で直してくれるだろう。ま、いつか。いざ行かん、ドイツ基地へ!!

ドイツ基地へ着いた俺たちはすぐにお偉いさんに呼び出され説教を食らった。しかし俺が設計図を渡すとラウラは褒められて俺たちへのお咎めは無しになった。余談だがクロエと俺の関係を理解したラウラはクラリツサに俺の事を何と呼べばいいか分からなくなり助言を求めた結果

『そこはやはり兄として接するのが良いかと思われませう。お兄ちゃん、兄さん、お兄様、にいにい、兄者、兄の呼び方はたくさんあるのでその中から模索してはどうでしょうか？』

なあんて言ったもんだからラウラは俺の事をお兄ちゃんだとか兄様だとか呼んで付きまとうようになつた。やりました、さすがに気分が高揚します。

こうしてラウラと一夏の仲直り劇は終幕。そして俺とラウラの義兄弟物語の開幕。

21話 クラス代表戦開幕!!

中国、ドイツでのごたごたも無事に解決してやつとこさIS学園へ戻ってこれた。中国での事件で織斑千冬現役復帰を囁かれたが千冬さんは会見を開いてそれを否定した。

しかしいくら否定したって他国で戦闘を行った事には変わらないし、問題にならないわけではない。まったく：アンチや批判する人がいるのは分かるがむかつ腹が立つぜ。なんで人を救って文句を言われなきゃいけないんだよ。束はネットでバッシングしている奴らの身元の特定をして、俺はそいつらに天罰を加えようとしているところを千冬さんに物理的に止められた。千冬さんでなければ止められないくらい暴走していたのは確かだ：はあ、俺も大人にならないとなあ：いや、前世も含めると大人どころかおじいちゃんか。神様の奴：俺の精神年齢まで若返らせたのか？別に構わねえが時々自分が情けなくなるぜ畜生…。

クラス代表戦まで時間はなかったが学園に帰ってくる前にドイツで右手の手術をしてくっ付けてもらった。既に癒着してある程度の運動は可能で少し皮膚が突っ張る感じがするがとりあえずは完治と言ったところだ。左目は束がカッコいい義眼を

作ってくれたので、それを装着している。俺の細胞から作った義眼なのですぐに癒着してくれた。しかもハイパーセンサーなどのギミックが加えられていて視界が360度まで広がり、左目がとも使い勝手の良いものになったのは良い事なのだ。が少し目が疲れる…。なので視野角を狭めるために特注の眼帯を付けている。ラウラが使っている黒ウサギ部隊の物ではなく、これも東が俺の為に作ったものだ。全体的にメカニカルなデザインで某老兵が付けていた物にそっくりな代物に仕上がっている。切り替えでサーモスコープや望遠まで可能：眼帯で付けていたら普通は見えないんじゃない？と言

う突込みは東の科学力の前には不要なようだ（； 旦、）
顔の左半分は皮膚が爛れているが学校生活に支障はないのでそのままにしている。どうせ1〜2週間もすれば元に戻るので問題はないだろう。

身体の方は無事に完治したのだが、ドイツから帰って来てからすぐにクラス代表戦だったし、東も忙しくて宇宙の修理に手を付けられていなかった。で修理はまだ終わっていない。なので侵入者からみんなを守るのは嵐でつて事になる。一夏も強いので問題は無いと思うが念のために箒と一夏の二人をすぐに守りに行けるような場所、つまり一夏サイドのハンガーで試合が始まるのを一夏と待っている。

「勝てそうか？」

「う〜ん…正直なところ分からねえな。鈴の装備についてはハンデにならないように鈴

が教えてくれたんだけど避けるのは難しそうだぜ。射角無限の見えない砲弾なんてどうやって避けるんだよ…」

「土煙でも立てて弾丸の軌道を目視できるようにしたらどうだ？地面を滑るように走ればそのくらいはできるだろう。あと、なんだか嫌な予感がするシールドエネルギーは試合後半までしっかり残しておけ。最後に修行の成果がよく出る一戦になると思う…油断せずに全力で落ち着いて戦え。己を知り、相手を知れば百戦危うからず…俺からお前に贈る言葉だ」

「おう、じゃあ行ってくる」

白式を身に纏い、一夏は鈴の待っている空へ舞った。

「恐れずによく来たじゃない。やられる準備はできた？」

俺よりも高い位置に座する鈴が上から視線（物理）で話しかけてきた。

「残念ながらそんな準備はしてないよ。その代わりに鈴、お前を倒す準備をしてきた」

「その返事が聞けて良かったわ。やる気は十分そうね…約束覚えてる？」

「お前が勝つたら面白い物に付き合え…だろ？ちゃんと覚えているよ。そろそろ始まるから無駄話はこれくらいにしようぜ」

「そうね」

短く返事をしてお互いにスタート位置へ移動する。試合開始まであと少しか…意識している長いもんだな。

しばらくするとアリーナ中央にあるスクリーンに一夏と鈴の両名が大きく映り、実況が二人を紹介する。

『第一ピットより、織斑あ…一夏選手!!世界に二人しかいな男性パイロットの一人で、かの織斑千冬御大の弟であります!!公式戦の記録はありませんがその実力は代表候補レベルと聞いています。さて今回はどのような戦闘を繰り広げるか楽しみですよ!!』

『対する第二ピットより、凰!!鈴音選手!!近接戦闘を好む好戦的な性格で活発な元氣いっぱい少女!!戦闘も恋も体系も一直線!!この試合をどう運ぶのか見ものです!!』

「誰の体型が一直線ですってえ!」

『おっと、試合開始の時間がやってまいりました!!「ちよつと!!無視しないでよ!!」皆さん!!この時を待ちわびていたことでしょう…では行きましょう…ISファイトオ〜〜レディ〜ゴオオオオオオオ!!』

大きなブザーと共に試合が始まった。

俺の零落白夜は一撃必殺の剣…だけどそいつを当てるにはまだ俺に技術が足りない。だから俺は奇策に頼ることにするぜ!!

鈴の非固定浮遊部位《アンロック・ユニット》が稼働したのを確認してから俺は雪片式型を鈴に向かって思いっきり投げつける。

「んなっ!？」

鈴は動揺しているがアンロック・ユニットを使って雪片を撃ち落とす。雪片はそのまま地面に落ちてゆく途中で粒子に戻る。俺はその一瞬で瞬時加速を使って急接近する

「こいつは師匠の俊葵から盗んだ技だ!!」

訓練中に俺がされたように鈴の獲物を掴んで顔面に一撃を加える。俺はこの技を食らったときに武器を離してしまっただが鈴は離さない。流星は鈴だな…だけどもまだまだ攻撃は止めないぜ!!

今度は鈴の腕の関節を抑え込み、瞬時加速でアリーナの壁に叩き付ける。アリーナの壁にはISの攻撃を防ぐためにシールドが張られていて、そのシールドはISの物と同じなので普通の攻撃はまず効かない。

「ぐっ…調子に…乗ってんじゃあないわよお!!」

青龍刀を力任せに振り回して俺を引きはがす。そのまま急上昇で俺との距離を取る。俺は落ち着いて地面に降り立ち鈴を見上げていつ攻撃が来てもいいように構えをとった。

俊葵サイド

「ひゆく、一夏の奴なかなかやるじゃないか。俺がいなくてもしつかり修行していたよ
うだな」

俺は箒とセシリアの二人とピットで一夏の試合を観戦していた。本当は二人とも観
戦席にいたのだが俺がこっちにいることに気付いてこっちに來て観戦している。

「一夏はお前がいなくても私たちとしつかり訓練をしていたぞ。自分の弱点を無くすん
だつて気合を入れていたな」

「遠距離戦は私が指導して、近接戦は箒さんが担当しましたの」

「それなら俺がいなくても特訓はできそうだな。これからは二人に頼んで俺は楽しよう
かな」

正直、努力とか頑張るとか嫌いでもんどつちーしい。

「そ、それは困る（りますわ）。俊葵（さん）がいないと…そのお…何と言うか（言いま
すか）」

綺麗に重なったなあ。ふむふむ…俺がいないと寂しいかあ〜しよすがねえなあ〜
／／俺がいないと寂しいかあ〜／／それなら仕方ないなあ〜／／

「そこまで言うのなら特訓くらいやってやろう、うん。俺がやらないと誰もやらないか
らなあ、うん!!」

俊葵という男は煽てるとすぐにのぼせあがるのであった。一夏が奮闘している時も俊葵はいつも通りの平常運転だった。

一夏サイド

一夏と鈴は何度か剣を交えながらいい勝負をしていた。しかしそんな拮抗状態が続いているので鈴はしびれを切らして遂に龍咆を使用することにした。

「悪いけどあんたにはあたしの龍咆の餌食になってもらうわ!!」

来る!!

俺は俊葵から見せてもらったアニメに出てきたロボットののように地面を滑走して土煙を立てる。鈴の龍咆の弾丸は空気なので本来は目視できない、しかし土煙に当たりそこだけ透明になるのでどこに打ち込まれたか分かる。完全には避けられないが直撃よりは幾分マシだ。

「どうした?鈴。そんな小細工ばかりでお前らしくもない…龍咆なんて捨ててかかって来いよ。俺の零落白夜が怖いのか?」

龍咆が直撃しなくて苛立っている鈴をワザと挑発して俺に間合いに誘い込む。

「誰がそんな細っこい刀一本にビビるつてのよ!!今すぐにあんたを叩き切つてやるわよ!!」

瞬時加速で俺に向かって突貫する鈴、しかし突然の轟音と共に現れた5つの陰に俺た

ちは動きを止めた。突然の招かざる来訪者に会場は騒然となり警報が鳴り響いた。

『アリーナに侵入者、選手は今すぐに撤退し観戦中の生徒は焦らずに：ザザ：ザザザ：ハアーイ！！ＩＳ学園の皆さま。これより私共の新型無人ＩＳの実験を執り行います。しばらく観戦のほどを：では、スタート！！』

警報は途中で止まりとても艶やかな女性の声 flowed。千冬さんや山田先生のいるアリーナの制御室には忙しなく技術者がクラッキングした相手の特定と制御を取り戻すのに必死だった。

「山田君、生徒たちの避難状況はどうだ？」

「隔壁が下りていて誰も避難できていない状況です。それに織斑くんも風さんもあの５体のＩＳに阻まれて避難できていません。中への侵入も試みていますが並の兵器でアリーナの壁は破壊できませんので：」

千冬さんは自分の立場を呪った：ＩＳを持ちながら家族を守れない自分の立場を：。

《千冬姉、あのＩＳは俺たちが何とかするから生徒の避難を優先してくれ》

「ふざけるな！！アリーナの壁を破壊して侵入できるほどの火力を持ったＩＳが５機だぞ！？そんなこと認められない！！」

《人が動かしているＩＳが５機なら俺も止めるさ。でもアレは俺が倒した無人機の

改良型に見える。武装は豊富そうだがAIは馬鹿だし一夏と鈴でも死にはしないさ」
 「しかしあの威力…掠りでもしたら」

《大丈夫だよ千冬姉。俺だって強くなっただぜ？》

ここで千冬姉と呼ばれても怒らなかつたのは家族として、姉として一夏に接するべき時だと判断したからだ。一教師としてではなく家族として一夏を信頼しているからだ。

《どのみち逃げられないんだ。だつたら倒してやるさ》

《あたしもいるし大丈夫よ。千冬さん、ここはあたし達に任せてください》

「逃げろと言つても聞かないのだろう？だつたら送り出してやるしかあるまい…。死ぬな…これは教師としての命令じゃあない。家族としてのお願いだ…二人とも、すまない」

《謝らないでくれよ、千冬姉。行くぞ!!鈴!!》

《遅れないでよね、一夏!!》

通信は切れ、アリーナ内では二人が5機のISを相手に奮闘している。しかし奮闘しているとはいっても敵の攻撃を避けるので精いっぱい。遠距離武装のある鈴はともかくとして刀一本の一夏は何もできないでいた。

俊葵サイド

ああ、あ、1機かと思つたら5機も出てきたか……。しかも武装が追加されている……まいったなあ……。一夏と鈴が戦つてくれてるけど二人で1機を相手にするのでやつとじゃないか。さて……俺も出撃するかな。

嵐を展開して出撃の準備をする。ピットのゲートは隔壁が下りてしまっているので破壊して出撃するか。

「私もいきますわ!!」

セシリアは俺が嵐を展開したのを見て自分も出撃すると言い出した。しかしセシリアがアリーナ内に入っても乱戦状態では役に立つとは思えない。

「悪いがセシリア、アリーナ内は乱戦状態だ。そんな中でブルーティアーズが全力で戦えるとは思えない。セシリアはここで隙を見てバックアップをしてくれ」

「しかし三人で5機を相手にするのは!!」

「そう嘯みつくな。バックアップは信頼のおける奴にしかお願いできないことだ。自信をもつて狙撃してくれ。じゃあ、行ってくる!!」

俊葵は指パッチンで隔壁を破壊してからアリーナへ飛翔した。

『私にも専用機があつたなら俊葵の援護ができたのに……くつ。しかし私の腕前ではISが手に入ったところで邪魔になるだけだろうな。もつと強くなりたい……』

『俊葵さんに信頼されている、俊葵さんに信頼されている、俊葵さんにry』

箒は自身の未熟さを再確認して、セシリアは思い人に信頼されていることを喜んで
いた。

アリーナ内

「二夏、鈴、無事か!?!」

「ハア…ハア…当たり前前よ…あたしを誰だと思ってるのよ。あんたが遅いから一機落
したわよ」

「俺だって大丈夫だぜ。ハア…ハア…だけどシールドエネルギーが心許ないな」

二人のシールドエネルギーは半分以下になっていたが目立った外傷は見られないの
で本当に無事の様だ。しかしこのまま戦ったら確実にどちらかがやられるだろう。だ
から

「外に居ろ、これはお願いじゃなくて命令だ」

「はあ!?!あんた一人で倒すって言うの!?!」

「俺一人で十二分だ。シールドエネルギーの無いお前たちがいたんじゃ足手まとい…お
前たちには援軍が来ないか外で見張っておいてくれ」

嘘じゃない、二人のエネルギー残量を考えると外に居てもらった方が安全だし、俺が
本気で戦うには二人は邪魔になってしまう。二人には悪いがここは俺一人で戦わせて

もらおうか。

「分かったよ。鈴、行くぞ。ここに居たら俊葵の邪魔になってしまう。この間の出撃で俊葵の実力は知っているだろ？」

「分かったわよ…あんた、死ぬんじゃないわよ」

そう言つて二人はISがぶち破つた穴から外へ出た。さて…残つた4機をどう料理しようかね。そうだ、新兵器があるからそれで…ぶつ壊してやる!!

22話 クラス代表戦終結!!

私は東に学園のシステムに侵入した奴の特定とシステムの復旧を依頼していた。今のこの状況を打破できる最善の策だと思ったからだ。しかし復旧は思ったように言っていないようだった

《この学園のシステムを落とすなんてなかなかやるねえ。でも私の家までは侵入しきれなかったみたいだよ。むむむ…どうしてこんなに難しい？いつもなら指先一つでうまくいくのにいゝ》

「お前にしか頼めなかったんだ。すまないがやってくれ」

《お安くない御用だよ。私の家がハッキングされたならともかくどうして関係のない学園のシステムを…》

「今夜から俊英は一人部屋で私は見回りを『今夜だけ』休む」

《学園のシステムは何とかしたよ。でも相手の特定は無理だった》

《早ッ!?もう終わったのかよ》

《東さんにかかればこの程度…むふふ…今夜は俊くんと…でゆふふ》

まったく：邪な事を考えた時だけ本気になりおつて：今回はそれに助けられたがどうかと思うぞ。

「ではさつさと隔壁を上げて生徒たちを避難させてくれ。俊葵の援護にも行かねばならないから早めに頼む」

《援護はいらないです。こんな鉄くず共は俺一人で十二分：むしろ千冬さんには敵の援軍が来ないか学園周辺の警戒をお願いします》

私の援護がいらないとはな：いいだろう、今回は別行動に回らせてもらう
《怪我しないように気を付けてねえ》

俊葵サイド

ふう：久しぶりの戦闘なんだから楽しまなきや損だ。嵐には悪いけど近接戦闘をさせてもらうぜ!!

「シールドビット!!展開!!」

全面にシールドビットを展開させて守りを固めつつ瞬時加速で一気に近づく

「ギャハハハハ!!やあゝゝってやるぜ!!」

ガゴン!!ガゴン!!

金属と金属がぶつかり合う鈍い音が響き、無人ISが衝撃に揺れる。倒れようとするソレの首根っこを掴み何度も連撃を加える。後ろから攻撃を浴びせられるがシールドビットですべて防いでいるのでシールドエネルギーが減ることはない。

「ふん!!……………ぬらばあ!!」

胸の装甲を無理やり剥がし疑似コアを露出させ腕を突つ込み引き抜く。所詮は無人機なんてこんなもんだよ。さあて残りもこの調子でぶつ壊す!!

「来いよ!!来なよ!!ガハハハハハ!!」

楽しい!!もつと俺を楽しませろ!!そんなしよっぱい弾幕じゃあ俺のシールドビットは突破できねえぞお!!

しかし戦っているうちに圧倒的な火力のビームによって、一基一基と破壊されていった。自分の身を守るには問題ないが修理をするのは束なのでこれ以上は壊せないと判断していくらかしまつて突貫する。

腕についている粒子砲をチャージしているので瞬時加速で懐に入り込みその腕を掴む。そしてジャイアントスイングで空へ思い切り投げると、ある技をきめる。その技の名は…

「マツサキバスター!!」

グシャア!!

食らった I S は股が裂けて胴の部分まで真つ二つになる。これもコアが露出していたので破壊し残ったやつに向き直る。

「あつけないもんだなあ…ええ？モニターしてるんだろ？自信作の I S が無残に壊れていくさまを見るのはどんな気持ちか聞きてえよお〜」

《予想以上に好戦的なのだな。データを取るにはあまりにも相性の悪いタイプだ。データを取る前に破壊されてしまったよ》

「そいつは褒め言葉だ。残りのガラクタも破壊してやるよ」

《君なら可能だろうな…だがこの数のミサイルからあそこのピットにいる少女を守るかな？》

すると3機の I S は両肩に分裂ミサイルのポッド (S A L I N E 0 5) を展開する。

《お前の實力を見せてもらおうかな、くくく。発射だ》

合図と共に6基のミサイルポッドから8発に分裂するミサイルが合計36発発射される。おいおい…全部で…ええ〜つと…288発か…全部撃ち落とす!!

素早く新装備の大型マスケツト銃を取り出しミサイル群の中心に狙います

「俺の弾頭は有象無象の区別なく、許しはしない!!」

マスケツト銃から一発の弾丸が発射されミサイルを破壊してゆく。物理法則を無視したその動きは小型の P I C が内蔵されているからである。その弾頭の挙動はどっか

らどう見てもアレを思い浮かべてしまう。威力もそのままのだが欠点があった…それは放たれた弾丸は空気との摩擦で燃え尽きるという事…ミサイルを半数以上落としたりと燃え尽きてしまった。勿論、再装填までは時間がかかり、箒を守ることはできない。

しかし方法がないわけではなかった…超能力だ。だがみんなが見ている前で使っているものか…いや、そんな事はどうでもいい。今は箒を救う!!

「お待ちください俊葵さん…私だって…戦えますのよ!!」

セシリアか……信じることもまた愛。任せたぞ…セシリア

まるでミサイル群がスロー再生されているようにはつきりと見えますわ…ここにミサイルが届くまでにライフルとピットの両方を合わせても打てるのは5発だけ。つまりその5発だけで撃ち落とさないといけない…箒さん…私の恋のライバル…いや恋の仲間!!絶対に守りますわ!!

「ブルーティアーズ!!」

ライフルとピットから計算され尽して放たれたレーザーはミサイル群の中を通過してゆく。するとミサイルはレーザーの熱で爆発し、それが連鎖して誘爆を起こす。そのミサイルが破壊される。ISの演算能力とセシリアの狙撃技術があつて初めてで

きる芸当だ。

なかなかやるじゃないの…俺も負けてられないな!!

「やああつてやるぜえ!!」

腕部、胸部、肩部、足部のミサイルをすべて展開させて一斉発射する。まさにミサイルとビームの嵐《ストーム》すべてのミサイルとビームを掃射する。しかしシールドエネルギーが無くなったに過ぎないのでとどめを刺すために瞬時加速で3機の中心へ潜り込む。

そして両手に徹甲榴弾を装填した大型のライフルを構えて疑似コアがある胸の中心部へ二発ずつ打ち込んで内部から破壊する。流星にここまでされるとISはそれこそ鉄屑に成り果てて静かに煙を上げていた。

「The Quiet After The Storm《嵐の後の静けさ》…と言ったところだな…キリツ!! まあ…今後一切、使うことのない技名だと思っただけ…いいセンスなネーミングだ。敵の援軍も来ないしこれで終了か…やったぜ」

負傷者ゼロ

こうしてIS学園襲撃は幕を閉じた。

「なあ…あの勝負って引き分けかな?」

「何言ってるのよ、あのまま続けてたらあたしが勝つに決まってるじゃない」

「いや、俺だつて勝つてたかもしれないぜ？」

「なんですつてえ〜」

「なんだとお〜」

謎の I S の強襲によって生徒たちは寮へ、当事者の一夏たちは食堂に集められていた。千冬さんと山田先生による軽い事情聴取が先ほどまで行われていたのだが、俺たちが知ってることなんてたかが知れているのでさつき終わったところだ。

「貴様ら未熟者がいくら言おうと団栗の背比べだ。いちいちそんな事を気にするくらいなら訓練をして実力を身に着ける。今日のところはこれで終いだからさつきと部屋へ戻れ」

千冬さんに促されて一夏と鈴は食堂を出て寮の方へ帰って行った。俺は千冬さんと山田先生に話があったので二人に話しかける

「東には教えたのですが千冬さんと山田先生にはまだ言っていない事があつたんです。今回の襲撃で俺は本気を出していません。本気を出してさえいけば一夏と鈴が傷つく事も無かつたし、箒やセシリアを危険にさらすことも無かつた…でも本気を出せない理由があつたんです。それはこれなんです…」

俺は千冬さんと山田先生の飲みかけの冷めたコーヒーを持ち上げて一つの球体にま

とめる。

「これは!？」

「す、すごいです!!」

「超能力です。これの他にまだいくつか能力があり、どれもISよりも強力で危険なものばかり…なので世間にバレないようにしなければいけなかったのです。他にもいろんな能力がありますよ?例えばこんな感じで料理が楽にできるようなのも…」

俺はキッチン奥にある冷蔵庫からトマトとモッツアレラチーズと皿を取り出し指パッチンで食材を刻んで皿に盛り付ける。オリーブオイルとバジル、塩コショウで味付けをして料理は完成。

「そんな事もできるのか!？」

「トマトとモッツアレラチーズのサラダです。どうぞ」

「お、おう」

千冬さんは恐る恐るチーズをナイフで一口大に切って口に入れる

「うん…まあなんだ、美味いんじゃないのか。しかしどうも味が薄いな…やはり日本人の口には本場の料理は合わないようだ…」

「違いますよ織斑先生、それはカプラーゼっていう料理でトマトとチーズを一緒に食べるんです」

「む、そうなのか山田君…では…むぐ…ふんふん…これは!? 美味しい!! 酒のつまみにぴったりだ!!」

この話はとても重要な事なので、俺の過去を知っている千冬さんには話しておくべきだろう。でも教える能力は常識の範疇だけにとどめておくか。そうだな…「衝撃の」「素晴らしい」「激動たる」この三つでいいか。この三つの能力をかなり軽めに紹介しよう。きつとそれで納得してくれるだろう…本来はこんな能力は見せたくなかったんだけどなあ…。

一夏&鈴サイド

食堂を後にした鈴は真っ直ぐ部屋へは帰らずに俺のベッドの上でだらけている。女子が男子のベッドの上でだらけるのはどうなんだ…無防備すぎるだろ。俺だって男なんだぞ…。スカートがめくれてパンツが見えそうじゃないか。いやいや、相手は鈴だぞ!? 落ち着いて考えていることを変えよう。

「ところで鈴、あの約束どうする? 試合はおろかクラス代表戦自体が中止になったしき。俺は買い物くらいなら付き合ってもいいけどどうだ?」

「え?! いいの!？」

「ああ、いいぜ。ところで何を買いに行くんだ？」

代表戦の数日前に言われたことだったので急ぎの用事じゃないと思うけどちよつと気になった。生活必需品ならある程度はネットで買えるだろうし…もしかしてCDやBDとかかな？

「特にないわよ？ただあんたと買い物に行きたかっただけよ／＼」

「そ、そうか照れるじゃねえか／＼」

なんで顔を赤くするんだよ。いつもなら『何でもいいじゃない!!』って悪態つくはずなのに…なんだか小動物みたいで可愛いな。あれ？鈴つてこんなに可愛かったか？いやいやいやいや、だって鈴だぞ!?!弾と一緒につるんで遊んでた鈴だぞ!?!この感情は恋なのかああああ!!いったい何なんだあゝゝゝ!!教えてくれえゝ俊葵いゝゝ!!

「なに頭抱えてんのよ…まあいいけどさ。取り敢えず明日はちゃんと空けておいてよね」

「お、おう」

一夏の心の叫びは俊葵に届くことなく夜は更けていった。

俊葵サイド

俺は千冬さんの粋な計らいによつて遂に一人部屋で生活する事となった。これまでは一夏との共同生活だったので便利な事もあったがプライベートがあまりなかった。千冬さんにはお世話になりっぱなしだなあ…。ちなみに今はさつき作ったカプラーゼをおつまみにワインで一杯やつてる。ふう…自分で作つとて言うのは何だけど美味しいな。

「ねえねえ、折角据え膳を用意してるんだよ？食べてよお〜」

やつぱりオリーブオイルはドボドボ掛けるんじゃないやなくて定量だな。

「ふうふう、食べて食べてたあべえてえよお〜!!」

ワインもちよつとお高めのヤツをわざわざドイツのクラリツサから貰つて来た。ポ
ンツ!! う〜ん、いい香りだ。

「もしかしてシカト!? 束さんシカトされてる!？」

さて、ただk

「とお〜う!!」

「ぐえ!!」

今日の疲れを癒すために一杯やろうとしたら束が飛びついてきた。まだ夜の9時だ
ぜ? 早いつてえの

「まだ寝るには早いぞ? それにちよつとくらい呑んだつていいじゃないか」

「だって任務とかですつと会えなかったし学校に帰って来てからも代表戦の準備が忙しくてイチャイチャでできなかったじゃない。だから無理やりでもイチャイチャするのぉ」

むぎゅゅゅと背中に豊満な双丘を押し付けられて誘惑される。なんか俺ばかり攻められると癪だなあ……よし

「むぐ!?ん……ちゅ……ちゆる……プハッ!!いきなりキスするなんてひどいYんぐ!?ちゅ……ちゅうう……ハアハアハア……」

「俺だって我慢してたんだ。今日は俺の気が済むまで楽しむからな」
束を抱っこしてベッドへ投げて押し倒す。

「今夜は寝かさないぞ……」

「うん……」

数日ぶりに二人つきりに慣れた俺たちは熱く甘い夜を過ごした

23話 日常回

一夏サイド

クラス代表戦襲撃が起きてから最初の土曜日、つまり次の日。俺は鈴との約束で買い物に行くためにレゾナンス行きの電車で揺られていた。IS学園の付近に買い物できるようなところがないのでわざわざ電車で街の方へ皆は行く。俺もその一人で、ジーパンと軽く英語をあしらった空色のTシャツに白い長そでのシャツを合わせて着ている。元々、お洒落にはあまり関心がなかったのでこんな風な服しか持つてない。女子との買い物は過去に何回かあったけどこんなドキドキするのは初めてだ……ああ……やつぱり俺は鈴のこと好きなんだなあ。

平静を装ってはいるものの一夏の内心は波乱に満ちていた。それもそのはず、鈴は箒やセシリアの援護を得て素直になる練習をしている。そのおかげで昔の約束を無事に思い出させることに成功したのだ。一夏は酢豚を毎日作ってあげるという約束を味噌汁のアレと分かった瞬間に鈴の事を意識し始めた。ずっと自分の事を思ってくれてい

た鈴に対して好意を抱くまで時間はかからない。しかし今までに好意を抱いた女性とのお付き合い経験が全くない一夏にはどうしていいのか分からない：『こんな事になるなら俊葵にアドバイスを貰えば良かったなあ：』なんて思っていたりする。

考える時間が欲しいと思っている一夏とは裏腹に電車は時間通りに走行を続けた。

俊葵サイド

「折角の休みなのに何で俺がこんなところに…」

「黙ってついて来い。一夏と嵐が学生らしい清く正しい交際をするか監視せねばならん！！」

「そんなもん一人で勝手にやってくださいよ…（ボソツ）」

俺は千冬さんに連れられて一夏と鈴の監視に赴いている：はあ：今日はアリーナで宇宙と嵐の射撃訓練と言う名目で射的をする予定だったのに：。ぶっちゃけそこら辺のクソゲーよりもISを使って実弾演習をした方が楽しい。それなのに：どうして俺なんだよ：山田先生や東でもいいじゃないか。しかも俺には傷跡があるんですよ？
まあ：流石に一般人にこんなグロテスクな傷跡を晒すわけにはいかないので俺は顔の左半分を覆う仮面を着けている。オペラ座の怪人のようなシンプルな仮面だが目立つ

てしようがない。黒い麦藁帽を被つてある程度は誤魔化してはいるが人目を引くことに変わりはないので効果は薄いと思われる…身体への傷はともかく顔の傷は早く治ってほしいな。ほら、子連れの親子が俺の方をチラチラ見てるもん…。ちなみに俺の格好はジーパンに黒のTシャツで上からクジラの模様が沢山あしらわれた水色の長袖シャツを着ている。千冬さんは七分丈のジーパンに白のタンクトップ、上からこれまた白い長袖のシャツを着ている。長く綺麗な黒髪は俺が三つ編みにしてあげた。パツと見は何処かの令嬢の様だ…中身は令嬢っていうか冷嬢だけど…我ながら上手いな。

「一夏が電車を降りるぞ!!ついて来い!!」

千冬さんは俺の手を取って速足で歩きだす。はあ…波乱に満ちた休日になりそうだぜ…。

一夏サイド

「鈴のヤツ遅いな…待ち合わせまで時間はあるけど人を待つのは時間過ぎるのを遅く感じるな…。丁度いいし俊葵にアドバイスでも貰うか」

携帯を取り出し俊葵にコールする。するとすぐに出てくれた

『うゝす、どした?』

「今日さ、鈴と買い物に行くんだけどどうしたらいいかなあって思つて。俺、今までに女

子と買い物に行ったことはあつたけどこんなにドキドキしたのは初めてでき、どうしたらいいか分からないんだよ」

『鈴のこと好きなのか?』

「……………ああ。俺は鈴の事が好きだ。鈴と話しているとすごく楽しくてドキドキする…鈴の笑顔を見てもドキドキする。でも鈴と離れると寂しい、もつと一緒に居たい、抱きしめたいって思うんだ。心なしかいつも鈴の事を考えている気がする。なあ、これって恋なのかな?」

『さあな、俺には分からねえよ。でも俺は《その人の為に何かしたいって思うことを愛、何かして欲しいって思うことを恋》だと思ってる。お前の中で答えは出たんじやないか?』

「ありがとう。持つべきものは師匠だな」

『かつかつか、褒めても何も出ねえぞ。だが今日の俺は機嫌が良いから二つだけお前にアドバイスをしてやるよ。一つ、手を繋いでやれ。二つ、何でもいいから鈴の服装を褒めろ。以上だ、それじゃ頑張れよ、Heil 2 You!!君に幸あれ!!』

そう言って俊葵は電話を切った。デートか…鈴も俺の事を思ってくれている…でもどうして俺なんかを? うくん、分かんねえな。鈴に直接聞きたいけど話してくれないだろうしなあ…俺も恥ずかしいから訊けないし。

そんなこんな考え事をしていたら待ち合わせの時間になり、鈴がやってきた。

鈴サイド

うゝゝゝ／＼／＼どんな格好で買い物に行くか迷ってたら遅くなっちゃった。一夏に時間にルーズな女だなんて思われたらどうしよう…そんな事は考えちゃダメよ、あたし！！

鈴の服装は黄色のワンピースにホットパンツという活発な鈴らしい動きやすい服装だった。見た目はシンブルだがこの服に決めるのに小一時間かかっていたのは内緒だ。

「ごめん一夏、待ったでしょ？」

「いや、そんなに待ってないよ。俺もさっき来たばかりだし」

「そっか、じゃあ行きましょ」

「あ、ちよつと待ってくれ。逸れるといけないからな…手を繋ごうぜ。それとその服…すげえ似合ってる／＼／＼」

照れているのか一夏は顔を真っ赤にしてあたしの手を握る。あたしもきつと顔を真っ赤にしてると思う。

「あ、ありがと…／＼／＼」

短くお礼を言つて少しうつむきながら歩き出すあたしと一夏…恥ずかしくて一夏の顔見れないじゃない…。

俊葵サイド

「おい!!手を繋いだぞ!!これは一体どういうことだ!!」

俺の襟首を掴んでグワングワンと頭を揺らす。

「い、いいじゃないですか!!手を繋ぐくらい!!」

「まったく…何のためにお前を連れてきたと思つてる。もおいしい、ここからは私一人で尾行する。お前はそこらへんでお茶でもしていろ」

そう言つて一夏と鈴を追つかける千冬さん。なら最初から一人でやつてくれ…ま、来ちまったもんは仕様がな…この辺りには小説を読んだ時から来てみたかったんだ。散策開始と行きますか…束から貰つたお小遣いも少しは消費させないといけないし。億単位のお小遣いは小遣いじゃなくて大遣いだと思うんだけどね…ないな。

つまらないギャグは置いてどこ行くかなあ?この辺りにどんな店があるか知らないし適当に散策でもするか…。

こうして一夏と鈴のデート、それを尾行する千冬、適当にその辺を散策する俊葵による三者三様の休日が始まった。

一夏サイド

今、俺は窮地に立たされている…買い物に付き合うだけだと思っていたが下着を一緒に買うなんて予想外だ…なんてこつたい。鈴…お前は頭がイカレちまったのか？男の俺にランジェリーショーツは居心地が悪すぎる…言うなれば禁煙席で喫煙するようなものだ。無言の圧力つてすげえよ…。そんな俺を他所眼に下着を物色する鈴…頼むから俺に感想を求めな。俺が選んだ下着を着ていると思っただけで俺の雪片式型が…ぐぬぬ

「これなんてどうかしら？」

そう言つて鈴が差し出したのはシンプルなライトグリーンのブラとショーツのセット。悪くない…と言うか良い。

「良いと思うぜ。でも無地だとシンプル過ぎないか？もつと柄物とかも…（。）。（。）」
「ハッ?!いや、これは違うぞ!!俺は決して下着に興味があるとかそういうのじゃ」

「へえ〜。じゃああんたはあたしみたいな貧相な体系の女には興味ないんだ」

「そんな事ない!!俺は鈴の事が好きだ!!」

興奮して大きな声で鈴に告白してしまつた…ランジェリーショップで大きな声で告白…もしかして俺の人生はここが終着点?おう…

「叫ばなくてもいいじゃない…まあありがとう。あたしも好きよ、あんたの事…//」
「おう…は、早く買ひ物を終わらせてカフェにでも食ひに行こうぜ」

一夏の照れ隠しを鈴は察したのか早く買ひ物を切り上げて近くのカフェへ入つていつた。

その様子を看板の陰から見守る女性が一人

「ふっ…大きくなつたな一夏…嬉しいような寂しいような不思議な気持ちだ」

口はそう言つてゐるが二人が甘すぎる展開を繰り広げるので買つたブラックコーヒーのスティール缶が手の中でくしゃりとひしゃげていた。その様子を見た通行人たちは一様にそそくさと千冬の傍から遠のいた。

俊葵サイド

アニメグッズのショップもあるし色んな店があるんだなあ。俺の好きなブランドの店もあるしちよつと入つてみるか。

「いらつしやいませ。今日はどのようなものをお探ですか？」

俺の仮面に臆することなく営業スマイルでスーツを着こなした良い感じのお兄さんが近づいてきた。

「新しい財布を探してるんですけど良い感じのありますか？」

「どのような財布が良いですか？折り返み、長財布と二種類ありますので好きな方からお選びください」

そう言つて店員は俺を財布コーナーへ案内した。元々この店は本革を利用したバッグなどを販売しているようだ。そこらかしこに高そうなのが陳列してある。適当に手に取つて広げてみたり、一つ一つ吟味する。そんな姿をチラチラと店内にいた客や店員が見てくる。IS学園で珍しい物を見るような目で見られていたので慣れていいるから気にはしてないけど……

うくん：折り返みはお札が曲がつちやうしやつぱり長財布の方が良いな。長財布はこつちか：なかなか良い色のあるじゃん。大きさも丁度良いしカードも結構入りそうだ。ワニ革だけど値段は：ふむ：まあまあだな。でもチャックだから止めとくか：こつちの財布は馬皮か：馬は嫌いだからこれもいいや。こつちのは鹿だな：おお!!手触りが最高だな!!チャックじゃないしこれにするか。

「(イ)ちいら38000円になります。」

意外と安かったな。値段を見ずに持ってきたから不安だったけど問題はない様だ。俺は今まで使っていた財布から料金を払いお金とカードをそっちへ移して店を出た。

「良い買い物ができたな。次は何処へ行こうかなあ〜」

今のところ財布くらいしか小物は興味ないし適当にアニメショップや本屋に行ってみるか。時計や靴にお金を使うのも悪くはないけど結局、使わずに箱の底に眠ることになりそうだし、集め出したら限がない…だから今回は止めておこう。

そう思い俺はアニメのグッズや同人誌を売っている店へ足を運んだ

一夏サイド

喫茶店に入った俺たちは奥の席へ案内されて注文をしている。

「俺は抹茶オレとミルクレープのキャラメルソース掛けにしようかな」

「あたしはアイスココアとほかほかりんごパイのアイス添え」

「ご注文を繰り返させていただきます。そちらのお客様が抹茶オレとミルクレープのキャラメルソース掛け、こちらのお客様がアイスココアとほかほか焼きりんごパイのアイス添えですね。少々お待ちください」

ぺこりと一礼すると店員は店の奥の方へ消えていった。

「なあ鈴、さっきの告白の事だけどきどき…俺…本気だぞ」

「あんたが嘘であんなことを言う男じゃないって事くらい知ってるわよ。すごく嬉しかったわ…だって一夏の事ずっと好きだったから」

顔を真つ赤にしてまっすぐにこちらを見てくる鈴に俯き気味になる。恥ずかしくて顔が見れねえ…。

「いつから俺の事が好きだったんだ？」

「中学校に入ってからあんたに助けられた時に一目惚れしたわ。いつとも一人でうつむいていた私の味方をしてくれたのはあんたと弾だけだったから…最初は小さい子が憧れる白馬の王子様のような存在だと思って忘れようとしたわ。でも忘れられなかった…いつも仲良く遊んでいたけど家に帰るときには寂しくなった。両親が離婚して中国に帰国した時はもう二度とあんたに会えないと思うと胸が苦しかったわ。だから学園であんなに会えてすごくうれしかったの。約束を覚えてくれたことも嬉しかったしね…まあちよつと勘違いはしてたみたいだけど。これで分かったでしょ？あたしはあんたの事が…織斑一夏の事が大好きなの」

「お、おう…凄く嬉しい。俺も凰鈴音の事が大好きだ。俺と付き合ってください／＼／＼」
顔を真つ赤にしながら鈴に頭を下げる。

「いまさらそんな…OK以外の答えなんて出せないわよ／＼／」

二人とも顔を真つ赤にしながら俺たちは晴れてカップルになれた。何とも珍妙な告

白だったが俺たち二人にはちょうどいい告白だったのかもれない。この後は出てきた料理を食べてすぐに二人で買い物に繰り出した：今度は手を繋ぐのではなく腕を組みながら…。

「一夏…漢になったな…私は嬉しいぞ」

そう言いながらパンケーキ用のナイフとフォークを強く握って形を変える千冬の姿がカフエの中にはあった。

俊葵サイド

良い買い物できた（ホッコリ）

片や同人誌がたつぷり詰まった袋を、片やアニメのブルーレイボックスが入った袋を両手に持っている。元居た世界とアニメに誤差があまりないので欲しかった同人誌やブルーレイが沢山手に入った。いやお金があるって素晴らしい。次の休みもこの調子で今日は買えなかったのを買いに来るか。

一夏と鈴と千冬さんのことはまああの人たちだし大丈夫だろう。さて、帰るか…ん？
路地裏に人？

「ちよ、やめて…行くところあるから…」

「そんなこと言わずにさ。俺たちも一緒に連れてつてよ」

「ちよつとくらい良いだろ？」

どうやらナンパの様だ。こんなご時世でもこんなクソみたいなナンパする奴がいたんだな。一体どんな子をナンパしてるのか…なああ!!おいおい…簪じゃあねえか…あんなに困っている簪に迫るなんて…ゆる…さん。

俺の身体は自然と簪の方へ動いた。

「おい…一度しか言わないからよく聞いてくれ…彼女をこれ以上困らせないでくれるか?知り合いなんだ」

「ああ?おめえには関係ないだろ?きもい仮面なんかしやがってヒーロー気取りかよ」

「おい、こいつこんなキモイもんもってるぜwww」

一人のヤンキーが俺が手から下げているアニメキャラの絵が描かれた紙袋を指さして笑う。……ブチツ!!俺の事を馬鹿にするならまだ分かる(キレるけど)だが此奴らは俺の嫁を…俺の好きなアニメを愚弄した…ちよつとくらいはお仕置きしても罰は当たらないだろう。

「口だけか?馬鹿にしてそれで終わりか?ハハ…どうせ俺みたいなオタクが怖くて手も

出せないか？人を見かけで判断している証拠だな…雑魚め」

「っ!?てめえ…黙って帰れば無視してやつても良かったけどよお…俺たちが誰を怖がってるってえ!?!」

「このナイフが見えねえのか？刺さると痛いぞお？」

ポケットから刃渡り10センチくらいのバタフライナイフを取り出し威嚇をする。ぶくく…そんなしよっぱいナイフで俺が痛がるかよ…いや、やつぱ痛がる。でも怖がりはない。でもどうやってこいつらを引き下がらせようか…。チラツつと簪の方を見るとほんのちよっぴり涙目になっていた…よし、簪を泣かせた罰だ。暴力的に解決しよう。

裾からナイフを4本取り出して、指に挟んでナイフを持った不良に投げつけた。ワザと外したので全て壁に突き刺さるが脅すだけなら十分だった。

「ヒッ!?!」

怯えた不良は腰を抜かして失禁している。もう一人は逃げ出そうとしていたので太ももを掠らせる程度にナイフを投げて転ばせる。

「イツテエエエ!!」

足を抑えて倒れ込んでいるのでそのまま腹を踏みつける

「ぐちゃぐちゃ喚くな…次は喋れなくするぞ…」

「ひつぐ…ひつぐ…うう…」

べそかいてるヤンキーを尻目に失禁している方を見る。

「おい…詫びの一つもねえのか？ええ!？」

「す、すまなかつた!!ゆ、許してくれえ!!」

簪は…

「むう…不本意、でも誰にだって間違いはある…だから今回は許してあげる。その代わりに次は…ね？」

コクンコクンと首を力なく縦に振るもう一人、俺と簪は動けないそいつらを見下して路地裏から抜け出して大通りに出て駅の方へ向かう。

「さっきは助けてくれてありがとう…それに俺の女だつて／＼／＼」

「ん？ああ、アレは…まあ口からつい出ちまった気にしないでくれ。俺は当たり前のことをしただけだから。そういや買物物はよかつたのか？勢いでこっちに來ちやつたけど…」

あそこから立ち去ることで頭がいっぱいになっていてモールの出口まで来てしまった。

「うん、欲しい物はちゃんと買えたし大丈夫…でも少しだけ散歩して帰りたいかも」

「じゃあ海沿いにある公園に行つてみようか。あそこなら遠くないし駅に近いところにあるから帰るときもあまり歩かなくて済む」

俺は荷物を左手に二つ持つて右手を開ける。簪は何かを察したように俺の右手を握つて、二人並んで歩きだす。………監視されているとも知らずに。

水色の髪の少女「よくも私の簪ちゃんを手を……ぐぬぬ。あのヤンキー共だつてあなたが出てこなければ私が……キッソー!!」

彼女が広げた扇子には『咬牙切齒』と書かれていた

24話 海に見える丘公園にて

俺は簪と手を繋いで海沿いを歩いてた。日も傾きかけてとても綺麗な夕焼けが海の上に浮かんでいる。簪との散歩はとても楽しいが何か変な気配を感じた。それは簪も同じで不安がっている

「誰かは分からないけど俺たちを尾行しているな…簪は気付いたか?」

「うん…あのトイレの裏にいるけど…逃げる?」

「いや、迎え撃とう。いざとなればISを使えばいいさ。そういやパスイはどうした?こんな風に二人つきりだと必ず茶化すのに今日は大人しいな」

俺と簪の身元を知っていて尾行しているなら敵の可能性が高い。もし敵なら撃退するに限る…しかしパスイがいらないとなると打鉄式も持ってないって事になる。

「パスイは東さんにメンテナンスしてもらってる。新しいミサイルを作ったからそれ用にアップデートするって…」

「もしかしてあの無人ISが使っていたヤツか…簪が強力なライバルになりそうだ」

「照れる…それよりあの人はどうするの?」

「むこうが出てきたら追い返せばいい。それまではあそこのクレープ食べないか？」

小高い丘の上にクレープ屋さんとベンチがあつて俺たちはそこへ移動した。簪はストロベリーのもの、俺はジャンボサイズのチョコキャラメルバナナとブルーベリーの二つを頼んでベンチに座つて食べている。

「このクレープなかなか美味いな。いいセンスだ」

「うん…凄く美味しい（確かこのクレープ屋さんのミックスベリーを好きな人と食べると恋が成就するらしいけどミックスベリー味は無かつた…売り切れだったのかな…）」

「やっぱ甘い物は良いなあ…ホッコリするぜ。一口食うか？」

俺は簪に『ブルーベリー味』を差し出す。

「じゃあ…いただきます。ん…甘酸っぱくて美味しい。俊葵も食べる？」

簪も差し出してきたので一口だけ頂く

「これも美味しいな…うむ、この店は俺のお気に入りの一つにしよう。…どうした？」

美味しい物を食べているのに妙に俯いている簪。どうかしたのかな？

「ううん、何でもない…ただミックスベリー味を食べたかつたなあつて」

ミックスベリー？ああ、確かに店のメニューには無かつたな。もしかしてこの店はあのラウラとシャルが来る店!?おう…こんな偶然もあるもんだな。

「いや、ミックスベリーは食べられたらどう？」

「なんで…ハツ!!ストロベリーとブルーベリー!!」

「その通り。また食べたくなったら一緒に来ようぜ」

「うん!!(やったミックスベリー味を俊葵と一緒に食べられた。あ、でも俊葵はあんな噂知らないよね…はあ)」

あちゃー、ここのミックスベリーってそう言うことかあ…ん?じゃあ簪は俺の事を…いやいやいやいやそんな事ない…多分。でもパスイも簪は俺の事を好きだって言ってたし…。もし簪が本気なら俺もその気持ちに応えてやりたい。

トイレの陰

水色の髪の少女「ムキッサー!!簪ちゃんと関節キッス!?もう許せない!!正面突破よ!!」

謎の少女は丘の頂上へ続く階段を上り始めた。簪を俊葵から引き離すために…。

「美味しかったね…クレープ」

「特にミックスベリーが美味かったな。簪…俺さミックスベリーの意味知ってるんだよ

…簪…良いか？／／／

「うん…俊葵なら…良いよ／／／」

俺はゆつくりと簪の唇に俺の唇を近づける。簪は目を閉じて俺を受け入れる準備をしている…あと少し…。

「ちよおおつと待ったああああ!!私の簪ちゃんに手を出すなあああああ!!」

水色の髪をした女性がいきなり植木の陰から飛び出して俺と簪の熱いキツスの邪魔をした。簪も大きな声に驚いて目を見開いて飛び出してきた女性の方を見ている。その女性は扇子を開いており、そこには『見敵必殺』と書かれてあった。てかこの人楯無さんじゃね?いや、絶対そうだよ…だって『私の簪ちゃん』って言ってたもん。

「簪ちゃんその獣から離れなさい。それは害獣よ」

が、害獣って…獣は否定しないけど害獣あつかいは酷いなあ…

「嫌…私は俊葵の傍に居る。あなたには関係ない…」

「か、簪ちゃん…私よ?お姉ちゃんよ?昔みたいにお姉ちゃんって…」

ぷいっ

あ、そっぽ向いた簪も可愛いな。それにしても楯無さん嫌われてるなあ…名前どころかお姉ちゃんと呼ばれていないなんて…南無

「ぐぬぬ…どれもこれもそれもあなたが簪ちゃんをたぶらかしたせいよ!!」

「違う!! 俊葵は私を助けてくれた!! 一人つきりだった私の傍で一緒に笑ってくれた!! それに比べてあなたは何なの?! 私を一人にしておいて今更お姉ちゃん面!?! ふぎけないだよ!! 俊葵、帰ろう…この人と関わりたくない」

簪は俺の手を引いて駅に向かって歩き出す

「ちよつとくらい話を聞いてもいいじゃないか。話してみないと何も分からないぞ?」
「うう…でも…」

「な? 少しだけでいいからさ」

「俊葵がそこまで言うなら…何か用事?」

ふう…このままじゃ姉妹仲は悪化する一方だったし仲裁くらいはしてもいいだろう。しかし簪は俺の服の裾を掴みながら背中に隠れて楯無さんの方を睨んでいる。

「とりあえずその害獣から離れない。いつ襲われるか分かったもんじゃないわよ?」

「俊葵になら襲われても良い…寧ろ嬉しい。離れるつもりはないからそのまま話して」

楯無さんキレてるやん…持つてる扇子が握力だけで二つに折れたぞ。あの扇子の骨組みつて鉄じゃなかったか?

「簪ちゃんがそこまで言うなら一步も譲らないけど置いておくわ。私は簪ちゃんと一緒に居たいだけなの。また一緒に暮らしましょう」「やだ」う…え?」

「だからやだ…あなたと一緒に暮らすくらいなら更織の名前を捨てて俊葵と暮らした方

がマシ……ううん、名前を捨てて俊葵と暮らしたい」

「そ、そんなあ……どうして……どうしてなの？」

「私が必要ならどうしてあの時に私を捨てたの？あなたにとつて私って何なの？私はお姉ちゃんの道具なんかじゃない!!捨てたものは二度と手の中には戻らないんだよ……お姉ちゃんのせいで私がどんな世界で!!どんな生活をしてたか分かる!!凄く苦しかったんだよ？一族からも世間からもお姉ちゃんとは比べられてさ……もうお姉ちゃんなんていないよ。それなのに今更帰つて来い!!更織の名前で私をこれ以上縛らないでよ!!」

眼から大粒の涙を流しながら楯無さんに向かって吠える。俺は簪を抱き寄せて涙をふく。

「この男また……まあいいわ。簪ちゃん……聞いてほしいことがあるの。私は簪ちゃんを一度たりとも捨てた事なんてないわ。あの時に言った言葉はね……簪ちゃんには黒い世界を見せたくなかったからなの。簪ちゃんには何もして欲しくなかった、普通の生活を送つてほしかった……嫌な事は全部私がするから……意味なの……信じてくれた？」

「そんなの……都合の良い言い訳にしか聞こえないよ」

ですよね。あれだけ恨んでいたんだ……信じなくて当然。でも……

「楯無さんは嘘をついているようには見えないし信じてやってもいいんじゃないか？」

「でも……そうだ。お姉ちゃん、私と一騎打ちしてくれる？もしもお姉ちゃんが勝った

ら私はお姉ちゃんと仲良くする。私が勝つたらお姉ちゃんの権限で私を更織家から追い出して…良い?」

「……お安い御用だわ。でもいいの?お姉ちゃん強いわよ?」

「覚悟の上…月曜日の放課後に第三アリーナで俊葵と訓練する予定だったから貸し切ってる。そこで決着をつけよう」

「話は付いたな。じゃあ今日はこの辺で解散だ。帰るぞ、簪」

簪の手を引いて駅へ向かう…これから忙しいぞ

俺たちが帰った後も楯無さんは丘の上にたたずんでいた

「あの男…どうにかして消さないといけない…どんな手段を使っても!!」

この時点で俊葵と束の関係性を知らない楯無はとんでもないことを考えていた。

学園

「ああ〜面倒な事になった…」

「今回は手伝わないからね」

「トシキ様の自業自得です」

自室に戻った俺は束とクロエにマッサージをしてもらって癒されている。

「そうは言うけどよお簪をほっとけないだろ」

「でも決闘のきっかけを作ったのは俊くんでしょ？」

「うっ…」

そこを突かれると痛いぜ。確かに俺は簪に、お姉ちゃんに勝てた事を仄めかせたけどさあ…責任とるかあ。言い出したことを投げ出すなんて中途半端な事はしたくないし。明日は簪と対楯無さん用の戦術を練るから早く寝るか

「マツサージありがとう。明日は簪と作戦会議をするからもう寝るよ。千冬さんが見回りに来る前に帰った方が良いぜ」

「うん、そうする。じゃあ頑張ってるね」

「おやすみなさい、トシキ様」

さて…明日は忙しいぞ。楯無さん戦用に装備を組み替えて作戦を立てて最終調整をする…ハードスケジュールだなあ。でも簪の為だしがんばるか!!

翌日

「簪、楯無さん戦の作戦を考えてきたぜ。勿論その作戦を成功させるための装備も持ってきた」

『流石は俊葵様ですね。相変わらず惚れ惚れするような手際の良さです』

「凄い…」

「じゃあ作戦と装備の説明をするからモニターに注目してくれ」

まずはこの作戦の趣旨を説明しよう。簡単に行つてしまえば一撃必殺の高火力をゼロ距離でぶつ放すだけの作戦だ。しかしそこに至るまでは簪とパスイの腕にかかつている。まずはおとり用に用意した装甲ミサイルポッドと新兵器で勝負を決めるつもりで戦つてくれ。弾薬を使い果たしたらしばらくはIS用薙刀の夢現で戦つて弾薬がキレたと思わせる。そこで楯無さんが一気に攻めてきたら好機だ。拡張領域から追加装甲をすべて展開して同時にミサイルの飽和攻撃を行う。この時にチャフとスモークを混ぜて撃つて相手の目を奪い、その隙に楯無さんに抱き着いて最終兵器ハイ・メガ・キャノンで倒す。

作戦自体は簡単だけど実行するとなつたら難しい。今更だけど作戦を変更するか俺の嵐を使うか……どうする？

「この作戦で上手くいく。お姉ちゃんに勝つて私は自由になる……パスイも問題ないよね？」

『全く問題はありません。私が本気を出したら数百のミサイルでさえも一度に操作して見せましょう』

「そりやすげえや。じゃあ試合も大丈夫そうだな。応援してるぜ」

きっと今の簪なら一方的に負けることは無いだろう。でも相手はあの楯無さん…最初の武装でどれだけ演技ができるかが問題だな。この作戦が楯無さんにバレてしまつたら一気に勝負を着けに来るはずだ。そうなつてしまつたら装甲を追加する隙も無く負けるだろう。頑張れよ…簪!!

今の俺にはこんな事しかできないが心からお前の勝利を願つてる!!

25話 妹好きの姉に悪い人はいない。はっきり分かん
だね

簪との作戦会議を終えて俺はまた街へ出ていた。今は昨日の買い物で買えなかった物を買うために電車に揺られている。昨日の仮面ではかなり目立ったので、その反省を活かして包帯で火傷の跡を隠すことにした。チラチラ見られることはあるけど昨日程ではない。束は仮面の方がカッコいいと言っていたが俺にだって羞恥心くらいはある。

それにしても……男ばかりでむき苦しい（； 皿、）

昨日はカップルがいて少しは花があつたが今日は男しか乗っていない。しかも俺と同じ目的なオタクが若干名……女尊男卑のこのご時世にアニメのシャツって……かくいう俺もガオガイガーの服を着てるけど。

暫く電車に揺られていると目的の駅に到着した。

「さて……買い物の前に今日の一番くじで良いのが出るか占いでもしてみますか」

札を一枚だけ取り出して念写をする。

さて……何が出るかな？何が出るかな？何が出るかな？デデデデン！！

「…………塔（タワー）か。何もなければいいけど…警戒くらいはしておくか」
 何も知らない俊葵は某アニメショップへと足を運ぶ

物陰

「動いたわ…やるわよ」

「お嬢様、差し出がましいようですが簪様の思い人を手に掛けるというのは聊か気が引けます」

「ええ…そうね。でもあいつだけは…私から簪ちゃんを奪ったあいつだけは許せないわ」

更織家の力をフルに活用して俊葵を暗殺しようとする楯無他数名。

「でもどうやって消しますか？今日は日曜日でも多いし難しいですよ」

「ふふふ…なら人気のないホテルにでも連れ込んだら問題は無いわ。何のために髪の毛に染めて顔と声まで変えたと思ってるのよ。ああいった自信過剰で女つたらしの男はハニートラップに弱いよ。私のデータに間違いはない」

『どこで手に入れたデータですか…（；； 旦那）』

「動いたわ!!行くわよ!!」

路地裏では不穏な空気がうごめいていた

ふう：一番くじの結果は一等は当たり前、残りも俺が欲しい物が全部手に入った。：
い、イカサマなんかしてないぞ?! ラストワン賞も手に入ったので今の俺は超機嫌が良い。荷物になるから拡張領域に入れてるけどね。今は：5時か。門限まではまだまだ余裕があるけど明日の事を考えるともう帰らなきゃいけない：が久しぶりに飲んで帰るか。でもその前に千冬さんに連絡しなきゃな

俺は千冬さんにダイヤルするとワンコールで出た。相変わらず早いな：

「もしもし、千冬さん。ちよつちお願いg」

《朝帰りでなければ問題は無い。一生徒としては校則を守ってほしいが：私とて人のプライベートに口出しするほど野暮ではない》

「なんで俺が言おうとしたことが分かるんですか：まあいいですけど。それにしても丸くなりましたねえ。いつもなら拳骨でもとばす勢いなのに」

《：……お前は自由過ぎるからな：追いかける身にもなってくれ／／（ボソツ）》
「ん？何か言いました？」

周りが少しうるさかったので千冬さんが小声で言った事が聞こえなかった。なんか俺が：とか言ってたけど：ま、いつか

《な、何でもない：出来る限り早く帰って来いよ》

「ほお〜い」

これで怖い鬼寮監殿の許可も出たわけだし気兼ねなく飲みに行きますか。

物陰

「ターゲツトは居酒屋に入った模様。こんな時間から飲むのか…」

「追うぞ」

民間人に変装した男たちが俊葵と同じ居酒屋に入り梯子酒をする俊葵を要員を変えながら尾行を続けた。

「そろそろかしら…私も出向かないといけないわね」

そう言うときセクシーな服に着替えた楯無は俊葵へと近づいた

うう…流石に6件はキツイなあ…でもまだ9時過ぎだしもう一軒くらい行つてから帰るか。

「ねえねえお兄さん、お暇してるう?」

ん?誰だこの子。俺にもこんな美少女に絡まれるほどのモテ期が…なあんでどうせお金目的の売春だろう。

「こんなぐう時世だし男の俺としては色々心配なのよ。他を当たつてくれないか?」

「大丈夫…ね、お願い？タダで良いからさあくん。彼氏も最近はずまらないしお兄さんみたいな遅い人と寝たいのよお〜」

胸の下に手を入れて大きな双丘を強調する。彼氏さん…本当にすみません m ()

寝取りには全く興味はありませんが美人のお願いは無下にできないのです。東、クロエ…俺は罪深い人間だ。知り合ったばかりの女性と寝てしまうような男です…ですから…お酒の所為にしよう。

俊葵は責任を放り投げた▼

「明日は腰が抜けて学校に行けなくなっても知らないからな」

「お兄さん優しい〜」

腕に胸を押し付けてネオン街へと俺を連れて行く。

「あ、そーいや君の名前は？」

「赤羽翼（あかばよく）よ。赤い羽根の翼と書くわ」

「翼ちゃんかあ、良い名前だな」

「褒めてもらってうれしいわ」

この後も俺たちは暫く話しながら歩いた。この時に俺の名前を聞かれなくて助かつ

た。戸籍や保険証なんかは全て国が用意してくれたが俺と関わりを持った彼女がどこの誰に狙われるとも分からないからな。

「ここが良いわ。このホテルにはコスプレ衣装もあるのよ」

大通りから少し外れたところにあるホテルへ連れてこられた。外装も真新しいし最近できたホテルだろう。ラブホ自体ほとんど入った事が無い俺からすると料金の高さに驚いた。きつと良いホテルなんだろう。

『監視カメラの停止は完了している?』

『勿論です。他の客もホテル内にはいません。ここで何が起きようとしばらくの間は誰も関知しないでしょう』

『部屋へ向かうわ。あなたたちは隣の部屋で待機してて』

『了解しました』

「さ、行きましょ」

「ああ…(こういういった場所では)初めてだからお手柔らかに頼む」

「ま♡か♡せ♡て♡」

部屋に入ると俺はシャワーを浴びてくるように促された。まあ、さつきまで居酒屋に

いたしタバコやお酒の匂いも付いているし体を洗って歯磨きをして夜戦に備えよ……う？

服の裾から落ちた札が浴室の方へ落ちて水に濡れる。すると札の周りの水が文字のようなものを形作った。美味しい酒と料理を出す居酒屋を探すときに使った念写用の札だから水に何かを念写したらしい。

「きを……つけろ？もしかしてあの女の事かな？一応もつと詳しく念写しておくか」

濡れた床に念写をすると大きな水の塊、これは俺だな。そしてその周りに小さな水滴がいくつかと中くらいの大きさの塊が一つ。一般人なら水滴程度になるはずなのだが……これは彼女のものだな。

ガチャ

「待ちきれなくて来ちゃった」

う、裸じゃないか……凄く綺麗な身体をしてるなあ……ってそうじゃない。

「初めては風呂場じゃなくてベッドの上が良いんだ。部屋で待っているよ」

俺は浴室から出てすぐに彼女のカバンの中を調べる……が財布、スマホ、手帳、扇子だけしか見つからない。手帳の中を念のために調べたが何日に誰といくらで寝るとしか書いてない……ビッチが。風呂に入って酔いも少し醒めたので冷静な判断ができる。財布の中身は……3万円か……援助交際をしている女子高生ならこのくらい持っているもお

かしくはない…のか？

《その女は信用できるの？》

た、東!?

《ちーちゃんから連絡があつたよお。俊くんが外泊してくるって》

ご、ごめん

《謝らないで。俊くんは好きな時に好きな女を抱けばいいんだよ。でも帰ってきたら私を抱いてね♡》

…：東には負けるよ。ああ…一晩どころか二晩でも相手をしよう

《嬉しい。じゃあ楽しんでね》

いや、それは無い。彼女には悪いけど…：死んで…もらうよ

《ええ？今から抱くんじやないの？》

念写したら彼女の印が普通の人間よりもかなり大きく出たんだ。特殊な訓練を受けているラウラや鈴よりも大きい印だ。もしもこの出会いが偶然なら問題は無いけど俺がISパイロットだと知つてのハニートラップなら殺すよ。東に迷惑をかけそうだしね。

《ふふ、俊くんって優しいね》

これから殺人をする人に優しいなんて言うなよ…じゃあな

束との連絡を切って翼ちゃんが出てくるのを待つ

浴室

ふう…やつとここまで来れたわ。あの男の息の根をこの手でツ!!
固く拳を握りしめてから身体を拭いて浴室を出る。

出てきたな…こんな美人を手を手に掛けるのは気が引けるが…仕方ない。俺はすぐに
ベッドから立ち上がり彼女を抱きしめる。

「キヤツ!!もう、いきなりなのね」

「その方がさ…刺激的…だろ?」

ユックリと抱きしめた手を上げて行き髪の毛を掴む

「女性の髪はもつと優しく触らなきゃダメよ?」

俺は何も言わず思い切り髪の毛を引っ張り彼女を壁に叩き付ける

「あうツ!!」

怯んでいる隙にM500を取り出して発砲するが避けられる。かなりの訓練を積んできたという事か…いずれにせよこの様子だと俺がISパイロットだと知っているよ
うだ。

「いきなり発砲するなんて酷いじゃない。髪の毛だって何本か抜けちゃったし…許さないわよ?」

「黙れ阿婆擦れ。てめえが誰か分からないが俺がISパイロットだって知っているから仕掛けてきたんだろう。どこの所属だ?」

「答えるとおもツ!!ガア!!」

この程度の距離なら人間の反射速度以上の速さで動くことだって可能だ。彼女が答えないのは明白なので鳩尾にキツイ一撃をお見舞いする。

「どうせ答えないだろう?もういいよ…お前みたいな雑魚は殺す価値もない。命拾いしたことを幸福だと思って二度と俺に近づくな」

気絶した女を無視して俺はIS学園へと戻った。

一体彼女は誰だったんだ…く、こんな事なら心を読むんだった。はあ…俺もまだまだ甘いなあ結局殺さずじまいだったよ。俺にもまだ人間の感性が残っていたんだな…嬉しいうような悲しいうような…ハア…

次の日

俺は昨日の事は簪には伝えなかった、きつと心配するだろうしな。今は簪と一緒にハ

ンガーで試合が始まるのを待っていた。楯無さんは向かい側のハンガーでピットクルー達と談笑しながら試合を待っている。余裕綽々ってやつかよ…なんだかこつちが本気でやっている分腹立つな。

「作戦はちゃんと覚えているか？」

「うん…大丈夫。昨日の夜から何回も脳内シミュレーションをしてるから」

『私も風や重力の影響を受けた際の弾道の変化を数千パターン程検証しました。撃ち落とされないと限り絶対に当たります。間違いありません』

それなら安心だ。俺の仕事はお前たちを送り出すだけみたいだな。

「簪、緊張しないで楽しめ」

「でも…やっぱり緊張する…。格上の相手に挑むのはドキドキするし…どうしょ」

ぎゅ…

「大丈夫…簪ならできるよ。絶対にできる…俺が保証するんだから間違いないさ」

「うん…俊葵…私は俊葵の事が大好き。本当は試合に勝つてから言おうと思っただけ今言うね。私は本気で俊葵の事が好きです」

「返事は試合の後にするよ。そのくらいの楽しみがあつたほうが戦い涯があるだろう」

俺の胸板に顔を埋めている簪がふくれっ面になる。超可愛い!!（確信）

「むう…俊葵の意地悪…でも大好き」

《試合開始まで残り3分です。選手はアリーナ内で待機してください》
アナウンスが流れて簪は打鉄二式特別仕様を纏って空へ舞い上がる。

「簪ちゃん手加減はしないわよ?」

「手加減なんてされたらもう二度とお姉ちゃんを許しはしない…覚悟してね」

お姉ちゃんのISの情報は束さんからすべて貰っているからどんなタイミグ、距離、角度でどんな攻撃をしてくるかは一通りシミュレーションできている…落ち着け…私はお姉ちゃんに勝てる。絶対に勝てる!!

《選手はマーカーの出ている位置で待機してください。………選手の待機を確認しました。それでは試合を開始します》

ビー……!!

試合開始のブザーと共に簪は戦いやすい空へと急上昇した。狭いアリーナではミスイルは本領を發揮できない…勿論この動きは楯無さんも予想していた。

(分かりやすいわね簪ちゃん…その装甲の下にはミスイルが仕込んで有るのでしよう? とても分かりやすく…残念だね。この勝負はもらったも同然ね)

(よし…作戦の第一段階『お姉ちゃんを私のミスイルが本領を發揮できる空へと連れ出す』は完了。これからお姉ちゃんと大立ち回りを演じないと…コール、ライフ!!)

私は両手にライフルをもってお姉ちゃんに権勢をする。でも弾丸はお姉ちゃんに当たる前に透明な何かに阻まれて当たらない。あれがナノマシン…でも問題はない。パスイ!!あれ…やるよ!!

『かしこまりました。風神…発動します』

私は新兵器の一つ、風神を展開してお姉ちゃんに突っ込む。

「いくら装甲が厚くつても足が遅いんじゃないわよ?」

そう言つて蒼流旋の付いている4門のガトリングで私を攻撃する…でも弾はほとんど当たつてはいない

「当たつてないようね。なかなか面白い装備を使うのね簪ちゃん。磁力で曲げているのかしら?だったらこれでどうかしら」

今度は高速で発射した水弾をぶつけようとするがこれも逸れて当たらない。

「あらら、これも外れちゃったわ」

それもそのはず…この風神の前では物理的な遠距離射撃、爆発はほとんど無意味と言つてもいいから。周りの大気を拡張領域に圧縮してから高速で装甲の隙間から噴出する、そして強力な空気の流れを作り出すことによつて物理的な攻撃を反らすことができる。そしてその風を利用しての高速移動も可能!!

「パスイ…次はアレいくよ」

『かしこまりました。薄金《うすがね》…発動します』

しかもこの風神は空気の膜を作ること大気の水分を纏い光の屈曲で姿を消すこともできる。同時にチャフも高速で空気中に散布するのでISに対してはあまり効果がないのだが数秒は時間が稼げる。つまり…

「消えた!?!センサーにも!?!」

ISを相手に完全な奇襲が行えるのだ

この試合が始まって初めてお姉ちゃんが焦った…ここで油断しちやダメ。でも勝利を確信した私はお姉ちゃんを羽交い絞めにして話しかける

「もうおしまい…私の勝ち」

「獲物を前に舌舐めずり…三流のやる事よ、簪ちゃん」

ナノマシンを集結させて防御しようとするが無意味に終わった。私の風神の風がナノマシンを吹き飛ばしているからだ

「全弾発射《フルバースト》」

装甲の一部がパージされてミサイルの発射管が露わになる。私の勝ち!!

ドドドドドドド

激しい轟音と共に私とお姉ちゃんは火炎に包まれた。やった!!私はお姉ちゃんに勝ったんだ!!これで私は自由に

ヒュッ

風を切る音がして私の肩部装甲と胸部装甲がパツクリと割れてシールドエネルギーが残り2ケタになる。なんで!?!倒したはずじゃあないの!?!

「ふう…さすがに焦ったわ。でも発射する寸前にその風が止まったでしょ?その瞬間に少しだけだったけどナノマシンを散布して火炎から身を守ったのよ。気化熱のおかげでシールドエネルギーを少ししか消費しなかったからまだまだ戦えるわよ?試合を続ける?」

パスイ:装甲全パージ:強化装甲装着:一瞬でやって

《了解(ラージャ)》

パスイの演算能力を極限まで上げるために言語機能を最低限まで落とす。まだ終わってない…私はまだ戦える!!

「無駄な足掻きね…」

強化装甲を装着した私はブースターを全開でお姉ちゃんから距離を取る。そして作戦通りミサイルの雨を降らす…これが私にできる精いっぱい!!

「下手な鉄砲は数を撃つても当たらないわよ…ミサイル程度を落とすだけなら開放的な場所でも使えるのよね。清き情熱《クリアパッション》!!」

よし…引っかかった。

破壊したミサイルから大量のチャフと煙幕が出現する。しかし二度同じ手は通用しないのは分かってる：危ないけど負けるよりは良い!! 私はお姉ちゃんがいた場所の直上に移動してISを解除する。そして私の身体は自由落下でお姉ちゃんへと向かう：生身の人間をどうするの：お姉ちゃん!!

「簪ちゃんまさか!?!」

「もう離さない!!」

お姉ちゃんに抱き着いてISを展開して何かする隙すら与えずに加粒子砲を発射する。勿論私にも少し当たってしまう。でも勝てる可能性が少しでもあるなら!!

《試合終了!!ドロー!!》

同時にシールドエネルギーがゼロになったので試合結果は引き分け：勝てなかった…。あんなに頑張ったのに勝てなかった…。

「こんなに緊張した試合は久しぶりだったわ簪ちゃん。とても良い試合だったわ：ありがとう」

私の健闘を称えて右手を差し出すお姉ちゃん。でも私はその手を弾いた。

「情けのつもり!?!ふざけないで!!どうせ本気じゃ!!…!!?」

急にブースターが止まって身体が落下する。

なんで!?!なんで落ちてるの!?!

『先ほどのゼロ距離射撃の際にジェネレーターがオーバーヒートしたようです。地上750メートルです…覚悟をなされた方が良いかと…』

私、死ぬんだ…私の人生は何もできない人生だったのかな…俊葵に出会って変わったと思っていたのに…変われると思つたのに!!パスイ…もし壊れずに残つてたら俊葵にありがとうつて伝えて

『お断りします。それはご自分の口から言つてください。まだ希望を捨てるには早すぎます』

なんでそんな事が言えるの…分からないよ。私はもう助からない…誰も私を助けてくれない。俊葵も観戦席にいたからここまでは間に合わない…誰が私を…

「簪ちゃああああん!!」

眼を開くとお姉ちゃんが全速力で私を追いかけて急降下していた。どうして…どうして捨てた私を助けようとするの!?!どうして…:…:…こんなに嬉しいの!?!

「お姉ちゃん…助けて…死にたくない」

お姉ちゃんのI Sの絶対防御が働いて無い事くらい知ってる。もしも私を捕まえたとしても地面に激突してしまつて大けがを負つてしまう。下手したら死ぬかもしれない事くらい知ってる…でも言わずにはいられなかった。

「大丈夫!!私はもう絶対に簪ちゃんを一人にしない!!命に代えても守るわ!!だから…掴

んで!!」

お姉ちゃんが伸ばした手を掴んで抱き着く。

俊葵サイド

おいおいおいおいおい!!あれやべえんじやねえのか!?

「一夏あ!!」

アリーナはISと同じシールドエネルギーによって守られている：つまり零落白夜で破壊できるという事だ。俺の意図を察した一夏は白式を展開して大きな穴を空けてくれる。

「行つて来い!!俊葵!!」

「おう!!」

宇宙を展開して補助ブースターが爆発しそうになるのもお構いなしに急発進をする。間に合え!!間に合え!!間に合えええええ!!く：仕方ない：念力で無理やり機体の速度を上げてやる!!機体が壊れる?そんなの知った事か!!愛する女性を守れないで何が漢だ!!うおおおおおおお!!

簪サイド

もう地面がすぐそこまで…お姉ちゃん…最後に仲直りできて嬉しかったよ…じゃあね

「うおおおおお!! 簪いいいい!!」

!?

俊葵の声が聞こえたと思っただけなら私とお姉ちゃんは俊葵に抱き抱えられていた。助かったんだ…俊葵が助けてくれたんだ。

私の目には俊葵がヒーローのように輝いて見えた。

「もう安心していいぞ簪…俺が来た!!」

「うわああああああん!!」

自分の感情を処理しきれずに大声を上げて泣いてしまった。

「怖かったよお…ぐすつ」

「大丈夫…もう大丈夫だから」

優しく頬ずりされてますます泣いてしまう。お姉ちゃんの方を見るとお姉ちゃんも泣いていた。

「ありがとう…簪ちゃんを助けてくれてありがとう」

「気にするなって愛している女を助けるのが男の仕事さ。さあ、ピットに戻ってISを格納してシャワーでも浴びて来い。話はそれからだ」

そう言って私たちをピットまで運んでから更衣室の前で待っているとだけ言って出て行ってしまった。泣き疲れて落ち着いた私とお姉ちゃんは更衣室でシャワーを浴びてから着替えていた。

「簪ちゃん…私ね…」

「何も言わないで…全部本当の事だったんだね。私を守るためにあんなこと言ったんでしょ？お姉ちゃんの温かい気持ち…届いたよ」

ぎゅ…

「もう離さないでね…」

「勿論よ…絶対に離さないわ」

良かった…お姉ちゃんと仲直り出来て嬉しい。きつとお姉ちゃんも同じ気持ちだと思おう。でも大丈夫かな…お姉ちゃんが俊葵を見る目が今までと全然違ったからもしかすると…俊葵の事もお姉ちゃんの事も好きだったらどうしよう…。

「お姉ちゃんは俊葵の事が好きなの？」

「…ええ…好きよ。簪ちゃんと私の間を取り持つてくれた人だし命の恩人だし…顔もそこそこカッコいいときめいちゃった♪もしかして嫉妬した？」

「ううん、嫉妬なんかしてないよ。俊葵もお姉ちゃんの事を嫌いじゃないだろうし一緒に俊葵の女になろう!!」

「いい、良いの簪ちゃん!」

私はもう昔の私じゃない…お姉ちゃんを微塵も恨んではない。寧ろ尊敬している、そんなお姉ちゃんと同じ人を好きになれたのだから嬉しい。

「俊葵ならOKしてくれると思う…本気なら」

「勿論本気よ…ふふ俊葵くんも罪作りな男ね。クロエちゃんの他にこんなに美人な姉妹を手籠めにしてしまうんだもの」

「クロエ一人じゃない…東さんもいる…多分もつというかもしれないけど」

私を見た限りでは箒、セシリア、本音の三人は俊葵の事を好き…むう

「え? た、東博士!? 俊葵くん東博士の恋人だったの!? って事は東博士はまさかIS学園に!? それよりまずいんじゃないの!? 東博士の男に手を出すなんて!!」

私はなんて事をしてしまったの!? ああ…なんて事を…もしも昨日の事が東博士にバレていたら…ヒツ（ゾクツ）

「私は東さんに許可をもらった…お姉ちゃんはまだみたいだけど」

「明日の朝日を拝めるかしら…私」

ふふ…そんなに不安がらなくてもいいのにお姉ちゃんったら。俊葵を思う気持ち
が本気なら東さんはきつとOKを出してくれるのに。

俊葵サイド

ただ突っ立って待てるのは暇だったので近くのベンチに腰掛けて束と話をして待っている。

《俊くんまた女の子をたぶらかしたでしょ》

何言ってるんだよ…簪の事はもう済んだ話だろ。もしかして今更嫉妬か？らしくないぞ

《簪ちゃんの事じゃないよ。あの生徒会長の話》

生徒会長って…せめて名前で呼んでやれよ

《だってあの女の目…絶対に俊くんに惚れてるよおっ!!うっ!!》

楯無さんが本気じゃなかったら振るさ…俺は本気で俺の為に尽くしてくれる女にし
か尽くさないよ。

《だから困ってるのに…ハーレムは良いって言ったけど増やし過ぎだよおっ。こ
の調子で増やしていったら世界を相手に戦争をできるかもね》

おいおい…俺にそんな野心はない。せいぜい皆が幸せに暮らせたなら俺は満足だよ。

《だったらいいけど…あ、簪ちゃんたちが出てくるから切るね》

ブツ

更衣室の中を監視してたのかよ…あとで映像貰おう

プシュッ

自動ドアが開き簪と楯無さんが出てきた。立ち上がり簪たちの方へ向かう。

「お待たせ…待った？」

「少しな」

「そこは待つてないって言うのが男の子の甲斐性なんじゃない？」

楯無さん…顔赤いし心を覗かなくてもバレバレなんですけど…。ま、一応覗いておくか…どれどれ？

(うう…東博士は怖いけど俊葵くんとは一緒に居たいし…どうやって東博士に取り入ろうかしら。私の力を使えば様々な交渉事がスムーズに進む…とか、政界に太いパイプを築ける…とか)

はあ…こんなことだろうと思っただぜ。

「束に取り入ろうなんて考えているようだけどそんな事をしなくても楯無さんが俺の事を本気だつて事は分かっています。だから多分ですけど束は何もしないし俺も楯無さんに本気ですよ」

「わ、私の考えていることが分かるの？」

「俊葵には凄い力がある…はっきり分かんだね」

俺は別にホモじゃないけどな…

「凄いのね…驚いたわ」

「凄いののはこれだけじゃないですよ。みんなにも見せていない能力もあるので全部は教えられませんかね。最後に念のため確認します…楯無さんは俺の事…本気ですか？」

「あなたに救われたこの命…あなたの為、存分に使わせていただくわ」

「私も俊葵の為なら何でもできる」
ん？今何でもできるって？ってそんな事は置いておいてこの二人は本気だ。なら俺がすることはただ一つ…

ぎゅ…

二人を抱き寄せて耳元で囁く

「離さないからな…」

「はう…／／／」

「お姉さん落とされちゃったわ／／／」

こうして松崎ハーレムは更織姉妹を追い足して合計4人になったのであった。ああ…夜が大変そうだ（歓喜）

「あ、あの…二人きりで話があるのだけれど…」

「良いぞ、簪は先に帰ってな」

「うん、じゃあまた明日ねお姉ちゃん」

簪が廊下を曲がったのを確認すると楯無さんは額を地面に擦り付けて土下座した
「え?あ、え!ど、どうしたんですか!」

なんで楯無さんは土下座しているんだ?俺、楯無さんから何かされたっけ?全く覚えがない…。

「昨日の女…アレ私なの」

「昨日の…つて、ラブホの?」

「ええそうよ。怒りにまかせてあなたを殺そうとしたの…いくら謝っても謝りきれないわ。しかもそんな私は貴方の事を好きだなんて…」

「それ程までに簪の事が大事だったんだろう?許すよ、俺も死んじやあいないし」

「え!いい、良いの!」

「うん、許すよお。俊くんが許すならね」

「!?!」

俺ではなく束が返事をしたので俺も楯無さんも驚いた。

「た、束博士!」

「更織楯無…うん、覚えておいても良いよ。今のところ役に立ちそうな人みたいだし、可愛いし。それに相手を殺そうとする程の妹思いつてもポイント高いね。私も箒ちゃんのこと大好きだし」

「俺に手を出したことに關してはお咎めなしか？」

「だつてたつちゃんに手を出したら俊くんは嫌な気分になるからね」

「た、たつちゃんつて…束らしいや。楯無さん…これであんたも無事にハーレムの一員だ。これからよろしくな」

「そもそもな話だけど妹好きのお姉ちゃんに悪い人はいない。もしも私がたつちゃんの立場なら同じような事をしただろうし、昨日の事は水に流そうか…つて事でよろしくねえ〜」

「こ、こちらこそ…ハ、ハハ…凄い恋人ができちゃった」

ふう…これにて一件落着。無事に姉妹仲は良くなり、松崎ハーレムのメンバーも増えた。しかも束は俺に対して危害を加えようとした楯無さんを許した…奇跡だな。でもきつとそれは楯無さんが俺にとつて特別な存在だからだろう。まだ束は誰が死のうが何の感情も抱かない…少しは成長してくれていたら嬉しいな。

26話 金の貴公子と銀の子兔

松崎ハーレムが4人になってから初めてハーレム会議が執り行われた。束が用意した円卓を囲んでみんな座っている。束は珍しく真面目に座っている、真面目に。(↑ここ重要)クロエは淹れてきた紅茶をみんなに配り終えてクッキーを齧りながら話し合いの始まりを待っている。簪は何やら音楽を聞いているようだ。アニソンかな？楯無さんは束と同じように静かに待っている。俺はと言うと手足をベッドに縛り付けられて拘束されている。あれ？俺は皆の恋人だよな？なんでこんな仕打ちを受けているんだ？

「みんな揃ったことだし話し合いを始めようか…今日の議題は今までになく重要なものだから心して聞くように…」

((ゴクリ…))

今までってコレ第一回目じゃん…てか俺が拘束されている件については触れないのかよ…別にいいけど理由が知りたいぜ

「晴れて松崎ハーレムも4人になった…そこでこんな問題が浮上しました。それは…誰が俊くんの抱き枕を担当するか。みんなも知つての通り俊くんは抱き枕がないと寝れない…だから今までは主にクーちゃんや俊くんと寝ていたんだけどハーレムの人数も増えたことだしこれからどうしていくかを話し合いたいと思います。俊くん本人にはみんなの意見が纏まらなかった時にどうするかを決めて貰う為に来てもらっています」

「おい…じゃあなんで俺は縛られてんだよ」

「それでは意見のある人から挙手をして意見を述べてください」

「はい」

最初に挙手したのは簪だった。最初はクロエか楯無さんだとばかり思っていたから意外だな。

「月曜日から金曜日までの5日間は俊葵が決めて土日は私たちから順番に選ぶのはどうかな？」

「それはとても良い案だと思うけれど簪ちゃん、5日間はとても大きすぎるわ。俊葵くんを選ばれなかったら土日のどちらかしか一緒に寝れないのよ？ やっぱりここは土日月でみんな一緒に寝て、月曜日にくじを引いて残りの4日間の順番を決めればいいと思うわ」

「ちよつと待つてください。一緒に寝るだけでしたら一週間もいりませんか?もしも寝るだけでしたら俊葵様はいつ私たちとエッチをすれば良いのですか?」

「ハッ!」

何かに気付く簪と楯無さん

「つまり俊葵様と普通に寝る日は無くても良いのです。俊葵様は我々とエッチをすればそれだけで安眠できるのです!!」

いや、まあ床で運動したら程よく疲れて安眠できるけどさ…え、つてことは一週間ずっと俺は皆の相手をするの!?え!?休みは!?

「ナ、ナンダッテ!?!」

「ちよつと待て!!毎日やりまくってたらさすがの俺も疲れるぞ!!お前らは俺を殺す気か!?!」

「じゃあ早速予定表を作ろう。クーちゃん手伝って」

「簪ちゃん私たちは二人で頑張りましょう?」

「うん…お姉ちゃんと一緒…嬉しい」

俺の話を聞けえ〜♪

5分だけでも良い〜♪

しかしスルーされてしまった▼

ああ、神よ…私は如何したらよいのですか!?

神「知るか」

ここにさらに人数が増えるかもしれないって思うと先が思いやられるぜ…トホホ

その後、迫るみんなを縛り付けて大人しく寝る日が増えたとか…そして「あれ? 大きな目の抱き枕を買えば解決じゃね?」と気付いたのは更に1週間が過ぎた後だった。

「ああ…だりい」

「お前はまだまだましじゃないか…俺なんてのほほんさんがくつつ付いているせいでもっと暑い…そろそろ離れてくれないか?」

休み時間中、俺と一夏はダレていた。しかも俺にはのほほんさんが膝の上に乗っかって抱き着いてくるので一夏以上にダレていた。夏も近付いてきたこともあってかみんな半袖になっている…のだがのほほんさんは着ぐるみのようなダボダボした制服を着ている。本人曰く保冷材や通気性の優れた素材を使うことによって涼しさをキープしているらしい。一夏は男子用のオリジナル制服の半袖に袖を通してゐる。俺はというと、普通の制服では物足りなかつたので一夏が着ているタイプの物を俺風に改造してある。裏地に好きなロボットの刺繍があつたりナイフや銃を隠すポケットがあつたりと生地が厚めに仕立てられているので暑い。はあ…次は千冬さんの授業か…頑張るか…。

「まあいいじゃないですか」

「暑いなら扇子を買ったらどうだ？」

セシリアも箒も熱くないのかよ…汗一つかいていない

「お前らは暑くないのか？それ夏服じゃないだろ？」

「いえ、夏服ですわよ。生地が冬の制服よりも薄いのですわ。俊葵さんたちの制服はオーダーメイドですからまだ用意できていないのでは？」

マジかよ…

「いや、俺のは既に改造で生地が厚いから冬服を着ている気分だよ…はあ…新しい制服を買うか…」

「ふむ…な、夏服がないなら私が扇いでやらんこともないぞ／＼／＼」

「そ、そうですね。俊葵さんは団扇を持っていないようですし私たちが扇いで差し上げます。ですから本音さんそこを退いていただきませんか？」

「いやあくマツチーの傍は良い匂いがするから離れない」

汗臭いと思うのだが…

「それになんだか今日は甘い匂いがするよお」

「むむむ…」

そりゃあ朝から甘いお菓子ばかり食べたなら甘い匂いもするだろう。今日の気分は甘

い物だったので朝食は高さ30センチのクロカンブッシュとバームクーヘン一本、ケーキ2ホール、飲み物はヴァンホーテンのココア（砂糖とミルクをアリアリで）

甘い物尽くしの朝食じゃあまいち力が出ない：やっぱリストーキとか肉が必要だあ…。お昼はセシリア達と食べるのでみんなのお弁当が楽しみだー（棒）。 g k b r
「授業始まるし帰るねえ〜」

そう言うとのほほんさんは帰って行った。

「では私たちも」

「また後で来る」

セシリアも箒も帰った…あぁ〜夏服でもっと薄手になった二人が見た…かつ…た（ガク

俺がギリギリまでダレていると千冬さんと山田先生が入ってくる。あ、もう授業か：

「諸君、おはよう」

「おはようございませす!!」

「今日からより本格的なI Sの訓練を行う。その為、多少の危険を伴う…これからは更に気を引き締めて授業に取り組むように!!」

「はい!!」

入学してから数か月：やつと本格的になって来たな。他の生徒は実戦経験なんてないから基礎から入るのは当たり前なんだが長かった：これでクラスのみんなと手合わせができる

「それから転校生が二人いる。入って来い」

「こんな時期に転校生？」

「専用機持ちかしら？」

「しかも二人」

夏休みも間近に転校生は珍しいな：誰が転校生かは知ってるけど

扉が開かれて銀髪の美少女と金髪の美青年が入ってくる。おお!!遂に天使が降臨しなされたぞ!!シャルルちゃんマジ天使!!と、舞い上がる心を何とか押さえつけてラウラの方を見るとカチコチに緊張している。

「それでは自己紹介をお願いします」

山田先生が促すとシャルルは一步前に出て自己紹介を始める。

「フランスから来ましたシャルル・デュノアです。慣れない土地で色々みなさんに迷

惑をかけると思いますが、よろしく願います」

ぺこりと一礼をして自己紹介を終える。

「お、男？」

一夏がそう呟くとシャルルはクラス全体を見回して

「ええそうです。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

しかしシャルルの言葉はここで遮られてしまう、クラスの女子たちの叫びにも似た歓喜の声によって

「きゃああああああ!!男子よ、男子!!」

「お母さん…私を生んでくれてありがとう」

「美少年!!しかもブロンド!!」

「守ってほしい系の一夏くと俊葵さん!!そして守ってあげなくなる系のシャルルくん!!これで3Pが描けるわ!!」

「夏の祭典まであと少し…間に合うかしら…」

どうして必ずと言っていいほど腐女子がいるのだろうか（諦め）

「まだ自己紹介は終わっていない。静かにしろ…よしボーデヴィツヒ、自己紹介をしろ」

皆が静かになるのを確認してからラウラに自己紹介を促す

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……………シーン

「あのお…以上ですか？」

「まだだ……………趣味は武器磨きと訓練、好きな食べ物は美味しい物なら何でも食べる。嫌いな食べ物は特にないが不味い物を進んで食べる趣味は無い。私は軍属で普通の女子として生活したことがほとんどない。…ので迷惑をみんなに沢山かけると言うが大目に見てくれ。これから二年に上がるまでよろしく頼む（ペこり）」

こりや驚いた…まさかラウラがこんなまとも自己紹介ができるなんて。千冬さんも驚いている。

「デュノア、お前の席は織斑の隣でボーデヴィツヒは俊葵の隣だ。それからデュノア、お前の面倒は俊葵が見るから挨拶くらいしておけ」

「はい」

「はあ!?!ちよ、ちよつと待ってくれ千冬さん!!まさか部屋も俺と同じだなんて言いませんよね!?!」

一夏じゃないの!?!俺なの!?!そうなの!?!

「兄様の部屋は私と同じではないのですか!?!教官!?!」

「学校では先生だ!! (スパパーン!!)」

景気のいい音が響いて俺とラウラは叩かれる

「文句は言っても良いが聞き入れない。以上だ、仲良くしろよ」

そう言つて教室を出て行つてしまふ千冬さんと山田先生。解せぬ…

「こうなつちや仕方ねえ…よろしくなシャルル」

「うん、こちらこそよろしくね俊葵」

ああ、シャルルの笑顔は癒されるぜ

「むう……兄様は私の物なんだぞ」

俺の陰に隠れているラウラがシャルルに対して威嚇をする。俺はホモじゃないぞラ

ウラ

「ラウラ、早く着替えていきましよう。遅れたら千冬さんに怒られますよ」

「それもそうだな姉さん…ではまた会おう兄様」

クロエに連れられて着替えを取りに教室の後ろへ行くラウラ。クラス内ではラウラの兄様発言に対しての憶測が飛び回っていた。まあ、クロエとラウラが何とかするだろ。

「それじゃあ俺たちも行こうぜ」

「おう。あ、シャルルに一つ言つとくことがあった。絶対に立ち止まらずに全速力で走

れ。女子に捕まったら終わりだ：マジで」

「(・ω・)？」

きよんとんとしているが廊下に出たら分かるだろう：何故なら

「転校生じゃああああ!!者共お!!出合え!!出合ええい!!」

「まずは写真!!いや、握手!!」

「男子が三人揃っておるぞお!!」

「いやあく乱世乱世!」

「新聞部です!!一言ください!!」

流石は女子高だ：情報の伝達速度が並じゃない。俺はシャルルと一夏の手を取って窓を開ける

「諸君!!今日と言う日を忘れるな!!今日は俺が君たちから逃げ切れた日だ!!シャルル、一夏しっかり捕まっとけよ(ボソ)」

「え?え!?まさか」

「おい、まて」

びよん

「きゃああああああ!!」

「ぎゃああああああ!!」

「がっはっはっは!!風が気持ちいいだろう!!」

俺は二人を抱えて窓から飛び降りて中庭に生えている木の枝をクッションにしながら何回か木から木へ飛び回って地面に降り立つ。

「し、死ぬかと思っただぜ…ハアハア…」

「日本の男性ってエキセントリックだね…」

多分こんなことするのは俺だけだぞ。さあ、急ごうか。抱えていた二人を下ろして更衣室へ急いだ。

「男子が増えてくれて俺は嬉しいぜ」

「はあ…一人部屋だったのに」

更衣室に着いた俺たちはすぐに着替え始めた。一夏とシャルルはへそが見えるタイプのI Sスーツを着用しているが俺は全身を覆うようなタイプを利用している。今までは一夏たちと同じのを使用していたのだがこの間の実戦で体中に受けた弾痕や切り傷が多数あるのでそれを隠すための全身スーツ。その気になれば傷跡は消せるのだが歴戦の戦士っぽくて良い感じだと思おうので消していない。ちなみにこの世界に入った時に着ていたパイロットスーツは束の部屋のオブジェとなっていた。なぜならI S

スーツの方がISとの親和性が高いからである。折角のパイロットスーツもISの応速度が遅くなるのなら既存のスーツを使った方が良いとなつては形無しだ

「俊葵もシャルルも着替えるの早いなあ。何かコツでもあるのか？」

「僕は最初からISスーツを下に着ているんだ。着替えるときに少しでも時間短縮できるようにね」

「俺はもう慣れた」

「俺も最初から着て来ようかな…なにかと引つかかるし」

「ひ、引つかかる／＼／」

シャルルは女だし今の話題は顔を赤くするよな。だが今のシャルルは男のふりをしているのも更に畳みかける

「確かに引つかかったりして大変だよな。しかもピッタリと肌にひつついてくるからモッコリならないように注意しないと」

「ああ、分かるぜ。締め付けられると痛いんだよなあ。シャルルはどうやって対処しているんだ？」

「ぼ、僕に振るの!?!えつと…ぼ、僕のは小さいから…／＼／」

「へえ、やっぱり人によって個人差はあるんだな」

「一夏…それ以上はいけない。話をハッテンさせた俺が言うのは何だけど…」

「当たり前だろ。それより授業に遅れるぞ？先に行くぜ」

二人を置いてグラウンドへ行く。チャイムも鳴り始めているしこりや俺も一発食らったな…。

「転校早々遅刻をするとは言い度胸だなデユノア…それにお前たちはいつもより遅かったな。覚悟はできたか？」

遅れてきた俺たちを待っていたのは鬼だった。

「遅れてきたのには理由があります!!」

「ほう…俊葵…では何故遅れてきたのか説明してみろ。私を納得させることができなければ今日の授業で行う模擬戦はお前と私で行う」

う…千冬さんの相手とかやっつてられないぜ。マジで…

「頑張れ俊葵」

「僕のせいでごめんね…頑張つて」

一夏とシャルルが応援してくれるが俺にできるかなあ…。

「えつとですね…」

「なんだ、続きを言え」

「ちよつと耳を貸してください」

千冬さんの耳に顔を近づけてみんなに聞こえないように話す

「ナニの位置が良い感じにフィットしなくてトイレで調整してました。一夏は大便でシャルルは迷子になって遅れました」

「んな／＼!? そんな事は報告せんで良い!!」

あ、顔が赤くなった。成功かな?

「もしかして理由として不十分でしたか?」

「もういい…今回だけは許してやろう。ただし模擬戦は無しにはしない」

ええ〜〜〜

「しかも山田先生と私のペアだ。私にあんなことを言った罰だ」

「……………（。D。）」

なん…だと…!?

「普段はおっとりとしているが山田先生は元代表候補生だ。その腕前は私も認めている。喜べ俊葵、いつも言っていただろう《もつと刺激的な戦闘がしたい》と」

「……………（。D。）」

「山田君、降りてきてくれ」

千冬さんがインカムを使って降りてくるように指示すると山田先生が落ちてきた。

（比喩表現無し）

「ど、どいてくださあ〜〜〜い!!」

……………（。凸）ハッ!

山田先生の叫びで正氣に戻った俺は目の前に迫る山田先生のおっぱいに見惚れてぶらあ!!

どがしやーん!!

一瞬の判断で I S を展開したのはよかったが吹っ飛ばされてしまった。イテテ（痛くないけど）…まったく山田先生にも困ったもんだ。よいしょ…むにゆう。む…これは!! おお!!これはデカイ（確信）

しかしいつまでも触っている訳にもいかなので先に立ち上がって手を差し伸べる。「立てそうですか?」

「I S を装備していたのだけがないし大丈夫です。ありがとうございますね」

I S を解除してから立ち上がり土煙で汚れたスーツをパンパンと叩く。そのたびにとても大きなおっぱいがゆさつゆさつと揺れる。いやあ〜眼福!!東といい勝負なんじゃないだろうか…いや、東の方が大きいな。うん、間違いない。

「では早速模擬戦を始める。これを見れば君たちも山田君に対する見方も変わるはずだ。行けそうか?」

「はい、じゃあ行きます」

また展開しなおして空へと上がる

「私は狂桜を使うからお前は好きなISを使え。ただし簡単に勝てると思うなよ」

そこまで言われると本気を出したくなるぜ…ってあれ？狂桜（きようおう）じゃなかったっけ？

「狂桜では言い辛いからな。暮桜と発音の似ていた狂桜（くるいぎくら）と呼ぶことにした。東にもそのことを話して設定も変えてもらった。では私は先に上がっているぞ」

そう言うのと狂桜を纏って山田先生のいる位置まで上昇した

「俊葵、勝てそうか？」

「兄様なら勝てる…かもしれない」

「俊葵さん、頑張ってください」

「俊葵様なら勝てます…多分」

「マツチー頑張れえ〜」

「応援しているぞ」

みんなも応援しているしその応援に応えよう!!

「ブリュンヒルデがIS戦で初めて負けるところを見せてやるさ。嵐…松崎俊葵…発進する!!」

「試合のルールとかはありますか？」

「超能力の使用禁止だけだ。それ以外なら何でもやっていい」

「手加減はしません（・ω・）キリッ!!」

山田先生は本当に可愛いなあ

「では試合…開始だ!!」

いきなり瞬時加速で切り掛かってくる千冬さん。あぶねっ!!山田先生も俺の隙を狙い打つために重い一撃を加えるためにスナイパーライフルを構えている。

「シールドビット!!」

全てを利用し勝利を掴む!!自分を守るためではなくて山田先生の周りに展開して援護を阻害する。束さん特製の近接武器の一撃を貰おうものなら一発でシールドビットは破壊されるのでそうした。

「山田君の援護の邪魔をして一対一の場面を作るか…良い判断だがいつまでその作戦が持つかな？」

とは言え作中でも現役代表候補生を二人同時に手玉に取った山田先生は油断できない…だから速攻で終わらせる!!

「千冬さんを倒し終わるまでです!!」

全身からミサイルを発射しながら千冬さんに特攻する。

「では山田君は一生あの檻の中だな!!」

ミサイルを切り払いながら爆風を利用してこちらに加速する千冬さん。

「貰ったぞ!!」

しかし千冬さんの一閃は外れた。なぜなら爆風の中に出したダミーを切ったからだ。

「偽物か!!ええいうつとおしい!!」

そう簡単にやられてたまるかってんだ!!

俺は両手にナイフを構えて千冬さんに接敵する

「この機体だつて近接戦闘くらいできるんですよお!!」

ギヤイン!!ギヤイン!!

「ふんっ!!所詮だな…宇宙よりも踏み込みが足りないぞ!!」

くっ…千冬さんの言う通りだ。嵐は宇宙と違って近接戦闘用ではないので機体の構

造が近接向きじゃない。ので押し負けている

「ぬう…こいつあどおだあ!!」

激しい剣撃を弾いて顔面めがけてナイフを投げるが撃ち落とされてしまった。マズ

イ!!隙が…逃げねば!!

山田先生がこつちに来る前に瞬時加速で戦線離脱する

「大丈夫でしたか!?!」

「山田君か早いな」

「グレネードと手榴弾の混合爆破はさすがに効いたみたいです。おかげで弾薬の7割とシールドエネルギーを結構持つていかれちゃいました」

「その程度なら大丈夫だ。あいつは私たちよりも上で待機している…油断はするなよ」

はあはあ…マジかよ。ミサイルの雨で無理やりシールドを突破するなんて…ありえねえ。でも…まだ勝機はある。

両手にマスケツト銃を持つて千冬さんと山田先生が動きを見せるのを待っている。二人とも俺に向けて威嚇射撃をしながら突っ込んでくる。しかし隙が無い…なら

「有象無象の区別無く俺の弾頭は許しはしない!!」

そう言つて構えた魔弾を二人に向けて放つ。このセリフは言わないと気分が乗らないので言っているだけに過ぎない。音声認識でこのセリフを言わないと発動できないとかだったら面倒くさいしね

「山田君!!私に捕まれ!!」

「は…!!」

あの時にこの弾頭を見ていた二人はすぐに極超音速で逃げる。弾頭は二つだけなので逃げ切れないこともない…でも二つだけで追うと思つてはいませんか? ヒヒヒ

俺の周りに魔弾が装填されたマスケットが何十丁も草原に生える背の高いスキのように

現れる。俺はそれを両手に持つて弾頭を発射して捨てる。あとはこれの繰り返し

「発射されれば『どこまでも追尾する弾丸』はッ！既に先生たちの周りに20発！千冬さんの動きも、山田先生の動きも手に取るように探知できるッ！くらえッ！先生ッ！総数20発の魔弾のスプラッシュをーーツー！」

俺は容赦なく二人に対して射撃を繰り返す。極超音速で逃げる二人はいとも簡単に避けるが疲労は溜まっていく。しかもそれは千冬さんではなく通常のISを使っている山田先生にだ。

「織斑先生…もう…」

「分かった…地上に降りて迎え撃つ」

「はい…」

二人は急降下しながら弾頭を迎撃しようとする。無駄ですよ…この弾頭はこの前の改良型で装着されている無線と俺の左目のおかげで全て脳波コントロールできるし弾頭目線の映像も鮮明に見えています。苦し紛れの迎撃なんて当たりませ…ん。あれ？頭が…うつ…痛い…頭が割れるようだ!!なんだこりゃあ!!くそっ!!あと少しなのに!!

《今すぐ魔弾の使用を止めて。脳にダメージが出てきてる》

東か…。もうすぐで勝てるんだ…。このくらいの痛みどうってことない

《だからってこれはやりすぎ。もつと自分の身体を大切にしていよ。俊くんの代わりはいないんだよ?》

分かった…。この勝負は俺の負けだな。

《俊くんは自分の身体を大切にしたい戦い方を学ぶべきだね。このままじゃ本当に死んじゃうよ》

死なないって…。少なくとも東が死ぬまではね

《じゃあ俊くんが死ぬのはまだまだ先になりそうだね》

ああそうだな。千冬さんがこっち見てるし切るな

ブツ

ふう…。もうすぐで勝てそうだったのに…。もつと脳への負担を減らした弾頭の開発をしてもらわないとな。いや…。東の言う通り、物量に頼るんじゃなくて俺に合った戦い方を見つけないとな…。俺トリガーハッピーだから無理だと思っただけ

武装を解除してゆっくりと地上へ降り立つ

「この勝負は俺の負けですね」

「エネルギーはまだ残っているぞ?」

「さっきの弾頭は全て脳波で動かしていたんです。脳への負担が大きすぎて使用を止め

ろって言われて……」

「そうか……お前に合った戦い方もあるはずだ。それを探すと良いだろう」
千冬さんも東と似たようなことを言うんですね……似た者同士……ぷっ

27話 R-18 この中に変態が4人いる!!

俺は楯無さんと道場で試合をしていた。俺の女であり、学園最強と名高い楯無さんの実力を知っていたからだ。簪も相席して俺たちの試合運びを見ている。

「なかなか攻めませんね」

「貴方の実力がどれ程か一応は知っているから…ね。でも私って待つのは…嫌いなもの!!」

楯無さんは大きく踏み込んで手刀を放つ…ふむ、早さは千冬さんよりも少し遅いくらいか。まだ余裕はあるな。

突き出された腕を逸らせるように腕を回転させる。

「ふふ、少しはやるようね。でもお姉さん…強いわよ」

「知ってますよ。それより俺の方が年上なのにお姉さんなんですわね」

「だって俊くんが子供っぽいんだもの」

「だから俺に勝てるんですか?」

今度は俺の番と言わんばかりに固く拳を握って一撃一撃に力を込めて放つ。軽く避

けているように見えるが顔は真剣そのもので緊張している。そこに俺は更に攻撃を加える

「俺の早い突きが躲せるかあ!？」

「足元がお留守のようね」

しやがみこんで俺の突きを躲すと同時に、足払いで俺を転ばせる。

「ぐう…」

そのままかかと落としで俺の鳩尾を狙うがそうはさせない。俺は足を掴んで引つ張り、転ばせてからうつ伏せになった楯無さんの背中に跨る。

「私の上に乗るなんて許せないわね」

まだ余裕のある笑みを…そうじゃないとつまらないよな。俺が振りかぶって殴ろうとすると腋の間に足を入れて俺を吹っ飛ばす。足の関節柔らかすぎだろ!？」

「体軽やかに!!弓の様に腕引いて!!風擦るように腕振れば…さすればベルリンに赤い雨が降る!!」

嘘?!そんな技まで使えるのかよ!？」

楯無さんが放った手刀は俺の着ている胴着を掠って引き裂いた。達人の手刀は凄いうろたがこれは…もしかして爪を使って切ったのか。

「キン肉マンはお好きで?」

「関節技なんかは私でもできるようなのがあるから多少はね」

「ふう…じゃあ本気で戦ってもよさそうですね」

「いや…私の負けでいいわ」

両手を上げて降参のポーズをとる。

「ありゃ？良いんですか？諦めちゃって」

「油断していたとはいえ一度はあなたに負けているし今日はそのリベンジマッチをしたかったのだけれど…。やっぱ無理…好きな人に手を上げるなんて考えられないわ」

「そっか…俺も手を上げるのは嫌だし今日は部屋に戻って休もうか」

『その割に殺気を乗せて攻撃をしていたような…』

真剣勝負とはいえ恋人を相手に手を上げるのは気が引ける。と言うか嫌だ。

「俊葵もお姉ちゃんも凄い…動きを目で追うのでやっとなかった」

「目で追えるだけでも十分だよ。っておいおい、汗臭いぞ？」

簪と楯無さんが俺に抱き着いてきたので注意したが聞き入れない。

「良いの…俊葵の汗…良い匂い」

「俊くんの匂いは癖になるわあ」

仕方ないと思いつながら二人を抱き寄せる。

ふう…シャワーは地下の自室で浴びるか。寮の方はシャルルもいるし一緒に入るな

らそつちの方が良いだろう。

地下室

ありのまま『今』起こったことを話すぜ

『部屋に入り美人姉妹とセックスをしようと思っていたら、全裸の恋人が俺の枕でオナニーをしていた』

忙しいから研究所に籠りつきりだったんじや…

「ふうくん、俊くんって私に我慢させて別な女を抱く趣味があつたんだあ」

東に見つかってしまった▼

トシキは逃げ出した▼

しかし、回り込まれてしまった▼

「うっ…」

「別に攻めるつもりはないけどさあ。研究で忙しくて俊くとセックスできない私をちよつとは気遣ってくれても良いんじゃないかなあつて思ってる」

全裸で人の枕の匂いを嗅いでオナニーしている人に気を遣うか？でも、まあ…オナ禁中に目の前でセックスされたらムラムラのひとつでもするよな。

「研究で忙しいと思つたから地下の自室の方に来たんだが…なんで研究室じゃなくて俺

の部屋に？」

研究がしたいなら束専用の研究室がある。いつもごちゃごちゃに散らかっているが束の物がどこに行つたか分からなくならないように俺は基本的になおしたりしない。

「忙しくてセックスできないからオナニーついでに俊くんの履いていたパンツを拝借しよう……ね？」

「欲しいならやるよ……ほら」

タンスを開いて俺のパンツやシャツを何枚か取り出して束に渡す。が束の顔は芳しくない……ん？

「今、着ているヤツが良い」

「道場で楯無さんと試合をしてたから汗臭いぞ？」

「汗臭い方が良いの。ねえ？お願い」

両手を合わせて首をかしげてお願いする束。俺も悪い気はしないのでベルトを外し、ズボンを脱いでパンツ姿になる。

「パンツは脱がないの？」

「そんなに欲しいなら自分で脱がせろ」

やべえ……ニヤニヤが止まらない。俺の目の前に、顔を真っ赤にして膝をつく束を見ていると嗜虐心が疼いてしまう。いろんな女に手を出す事に吹っ切れた俺は、どうやらS

に目覚めたらしい。

「うん…じゃあ、脱がすね…／／／」

「ハイハイハイ、手は使っちゃダメだ。使っているのは口だけ…いいね？」

「え!?…やってみる」

すると束はパンツのゴムの部分を噛んでゆっくりと下ろそうとするがなかなかうまくいかない。それもそのはず、俺が履いているのはボクサーパンツなので脱がし辛い。

「どうした? 欲しくないのか?」

脱がし辛いのを知っているが俺は訊く。

「意地悪う…それに大きくしているから脱がせられないよう」

「それでもダメだ。口だけを使って脱がせ」

俺が束にパンツを脱がせてもらっていると簪が近づいてきて俺のシャツのボタンに手を掛ける。

「シャツは私が脱がせてあげる」

そう言つて一つ一つ丁寧に、ゆっくりと外していく。後ろから抱き着くようにボタンを外すもんだから簪の美乳が当たつてとても気持ちがいい。ブラとシャツ越したがそれでも柔らかさが伝わってくる。

「私も手伝うわ」

今度は楯無が俺の前に膝をついてパンツを下ろそうと口を使い奮闘し始める。タイミングを合わせて下ろしているので少しずつだが脱げていく。シャツの方はパンツと違って脱がしやすいので簪は既に脱がし終えて裸になった背中に舌を這わせて俺の背中を味わっている。簪ってこんなにエロい子だったっけ？

「えろん…んちゅ♡んう…ちゅ…レロ♡えへへ、しょっぱいくて美味しい／＼／」

「ん…う…凄く…興奮するし気持ちいいよ。どこでこんなプレイを知ったんだ？」

「ちゅぱ…♡パスイに俊葵の趣味を聞いたらエッチなアニメや漫画を見せてくれたの…んちゅ…その中にこういったのがあったから気になったの。もしかしたら私、Mっ気があるのかも…俊葵に奉仕すると…ん♡ここがムズムズするう…」

肩越しに簪の方を向くと両手を股に挟んでモジモジとしていた。時々、感じているのか体がビクンと揺れる…しかし口と舌は動かすのを止めずに丁寧に俺の背中を舐めまわしたり吸い付いたりしてくる。

「まだ処女なのにいやらしい子だなあ簪は…でも嫌いじゃあない、寧ろ大好きだ。いいぞお…もつと、もつとだ」

「えへへ、俊葵に気に入ってもらえて嬉しい…ちゅ」

簪の愛撫から目を離すのは後ろ髪引つ張られる気持ちだが束と楯無の方の進捗状況を確認する。既に膝上くらいまで下ろされているので、そろそろいいと思い自分でパン

ツを下ろす。

「束の目的はこれだろうか？ならもう手に入ったし大人しく部屋から出て行ってもらおうか」

長い間俺の匂いを嗅いで興奮している束へ『わざと』出て行くように指示をする。

「研究で忙しい身ならこんなところで油売ってるわけにもいかないだろう。いやあ、残念だが今日は簪と楯無と一緒に寝るんだ、出て行ってもらおうか」

「う～～～う～～」

俺のパンツを握りしめて渋い顔でこちらに何かを訴えかける束。何を訴えているのかくらいは分かるが…もつとイジメよう

「ふふ…今日は私たちの日なんですから博士は大人しく研究室で一人自慰に興じていてください」

「安心して…束博士の分までたっぷりと愛されますから」

簪も楯無も俺の心中を察したのか束を弄り始める…くく、束の顔がみるみる真っ赤になる。ありや…怒らせちゃった

「うう…もうっ!!」

我慢できなくなった束は俺の腕を掴んでベッドへ投げ飛ばしてマウントをとり、無理やりキスをしてくる。

「んぶ?!」

「んう…:じゆる…:んじゆ♡じゆりゆううくくく♡…:ぷはあ!!俊くんの意地悪…:もうこんなに濡れちゃったの…:お願い♡」

貪るようなキスを終わると涙目でおねだり…:か。そういうのは…:大好きだ!!確かにこのままの興奮状態じゃあ初めての簪や楯無に痛い思いをさせかねないし、ウォームアップも兼ねて束と前哨戦と洒落込みますか!!

「簪、楯無…:悪いけど最初に束の相手をするけど良いか?」

「それが俊葵の決定なら従う…:ね、お姉ちゃん」

「勿論よ。でも待ってるだけっていうのもつまらないから…:えい♡」

「きゃっ!!」

楯無は簪を押し倒して首筋を舐め始めた。

「お、お姉ちゃん!?!んう!!」

「安心して簪ちゃん、ファーストは俊くんの為に残しておくから。だから俊くと束博士のセックスが終わるまで二人で愛しましょう…:初めて入れる時に少しでも痛みを和らげるために濡らしておかないとね」

「ん…:あつ、あつ…:お姉ちゃん…:♡」

俺の為に具合を良くしておくのね…:おk把握

「もう……こつちも見てよお。 俊くんの匂いを嗅いで……ほら」

くちゆ……

艶めかしい水音を立てて秘部を人差し指と中指を中に入れ、俺の剛直を迎え入れるために開く。 愛液と汗でぐっしよりと濡れて恥丘に張り付いた陰毛がこれまた欲情させてくれる。 正直、もう我慢なんて出来ないし入れよう……うん

「それじゃあ……ん」

くち……ぬう……くちゆ、くちゆ♡

ゆつくりと膣壁をカリで搔くように挿入すると、小さく柔らかい突起のようなものが沢山ある膣内が俺を迎え入れる。

「はあ……んはっ……相変わらず俺をきつく締めあげるなあ……こは」

「あつ……だつて俊くんのが大きすぎるから……／＼／＼」

「ごめん……痛かったか？」

首を横に振り否定はするけど目の端に涙を浮かべている。 そんな顔を見るのは心苦しいので一時動きを止めよう……かと考えたが今の束は俺を受け入れたい様だ。

「動いて……痛くないから……んう。 それ……にッ……急に動かないで」

くちゆ、くちゆ……

「動いてと頼んだのは束だぞ？なら受け入れ……ろ!!」

ドチュ!!

腰を思い切り前に突き出してピストンを再開し、束いじめを堪能する…が剛直だけの快楽では物足りなさそうなので空いている両手で俺の目の前に雄々しく聳え立つおっぱいを下からすくい上げるように優しく揉む。……女性の象徴ともいえるおっぱいを雄々しくつておかしくないか? ……まあ…そんな事は気にするな(; . . .)

「あつ、あつ、んむう…やあ♡おっぱいは…んう!!はあ!!おまんこもおっぱいも…気持ち…良い♡一人でするのは全然違うよお♡」

「当たり前だろ…もつと動くからな!!」

バチュ!!バチュ!!

「あつ♡あつ♡お、奥に当たってるう!!良いよお…良いよお♡」

腰の動きばかりに気を取られてしまつて手が疎かになってしまつていたので少しだけおっぱいに集中して手を動かす。体重を乗せて力を入れて揉むと痛いので束を抱きしめて体面座位にしてから揉み始める。まずは乳首をイジメずにその周りを人差し指でツーツとなぞるように指を這わす。

「んう…♡なに…♡これえ…はう♡気持ち良い…けどもつと強くしてえ／＼／＼」

「でもおまんこは俺のチンポを締め付けてくるぞ? 気持ちいいだろう? …だからもう少しこのままで」

「じゃ、じゃあキスウ…キスして…ん♡えへへ、俊くんの唾液美味しい…もつと頂戴。
んちゅ…じゅる、じゅるるるるる♡ふはあ!!んじゅうう…えろ、れろ、んう…ちゅ
うう…♡」

やべえ…東のキスすごく美味しい。エロアニメや同人誌なんかでの比喻表現で甘
いつて表現されることがあるけど本当にその通りだな。ほんのり甘くて頭の中がふわ
ふわする…興奮しすぎで脳内麻薬が出ているのかな

「んじゅ、ちゅ、ちゅ、じゅりゅ…♡」

おまんことちんぽの接合部よりもいやらしい水音をたてて俺の唇を食う束に俺は
段々と興奮がMAXに近づいて行つた。腰は動かしていかないがおっぱいを揉むたび、舌
を舐るたびに束の膣内がうねうねと蠢いて俺の剛直を柔らかい膣壁で愛撫するので俺
の射精感はどんどん高まっていく。

「んちゅ…束、もう…ハアハア、出そうだ…」

「うちゅ…うん、良いよ」

体面座位から正常位にして束の太ももに手を乗せる

「んっ…も、もう私も余裕ないから…さあ／＼出して…膣内に…全部♡」

「言われなくても全部出すさ…膣内に!!ハア…ハア…イ…クツ!!」

ドビュ!!ドビュビュ!!ドク、ドク、ドク…ドク…

何度か大きく射精した後にはドクドクと鈴口からゼリーのような粘度の高い精液が束の子宮へと注がれる。束の子宮口は俺の精液を受け入れるために開き切っているのが分かる…。ので何の抵抗もなしに俺の精液は子宮内を縦横無尽に駆け巡って束を快樂へ誘う。

「ああ!!イク…俊くんの膣内射精で…イ…ツクウウウウ!!んあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!ぎもぢいいいよ…おゝお!!出てりゆう!!ぎもぢいいいの全部う!!出てりゆのおおおおおっほおっおおお♡」

口の端からよだれを垂らしだらしないアクメ顔を晒してイク束。よっほど気持ち良かったのか腰がまだカクカクと動いて、目も焦点が定まっておらず若干だが白目をむいている。

「ふう…気持ち良かったよ。さて、更織姉妹の相手をするから移動させるな」

束の膣内にあれだけ出したというのに未だに萎えない剛直を抜きベッドの端へ移動させる。束の秘部からは俺の精液と束の愛液のカクテルがコポコポと泡立ちながら垂れてきているが拭いたりしない…もつたいないじゃん。

「さて…次は簪たちの番…だ?」

簪と楯無の方を見ると…その…何というか…。シーツは愛液…いや潮でベシヤベシヤになってる。束とクロエの相手をした時ですらこんな濡れた事なんてなかった

ぞ。

「俊葵…ご、めん…潮…噴いちゃった…ハアハア」

「簪ちゃんの舌使いもなかなか…だったわ」

「二人とも俺とヤル前から本気出し過ぎたって。体力を温存させておかないと持たないぞ?」

「ふう…大丈夫、んう…ほらぐちゆぐちゆでしょ?今なら俊葵の大きい…その…もすんなり入ると思う」

楯無の身体に寄りかかって足を支えてもらいながら自分で濡れ濡れのクレヴァスを開く。まだ恥ずかしいのか顔を真っ赤にしているので俺の情欲を掻き立てる。

「何処にナニが欲しいんだ?ん?言ってみろよ簪、じゃないと楯無を先に相手をする」

「意地悪う…わ、私の…お、おまん…ここに俊葵の…大きいのを下さい／＼」

「大きい?なんだ?」

「おちんぼを下さい…／＼うう…恥ずかしいよう。きやう…うん…そこだよ。ゆつくりしようとか気持ち良くしようなんて考えないで。俊葵に気持ち良くなって欲しいから…」

プツン

き…切れた…おれの中でき切れた…決定的ななかが…。・普段は大人しい

簪がこんな卑猥なセリフを俺の為に…まあ俺が言わせてる訳なんだけど我慢はできない。

ぐちゅ…ぬぷ…

ゆつくりと簪の腔壁を削るように剛直を挿入すると簪の腔内は愛液でぬるぬるしているのですんなりと入るが処女膜にコツンと亀頭が当たり、そのおかげで簪はやはり処女なのだと分かる。温かく締め付けがキツイ、だが一生懸命に俺を気持ちよくしようと頑張っているのが愚息越しに感じさせてくれるのが嬉しい。

「あつ、俊葵のおちんぼが処女膜に当たってるのが分かるよ…／＼それがまだ私が女の子だって証…それを破いて私を俊葵の女にして♡」

俺は頷き、腰を進めて簪の処女膜を破る。破瓜の痛みに簪は顔を歪めるので俺はゆつくりとしたストロークで腰を動かし、簪の初物まんこをじつくりと味わう。十分に濡れているとはいえ簪のおまんこは狭く、処女というのもあって凄く締め付けてくれるのでピストンをするのも一苦労だ。

「あつ、あつ♡すこっ…いい…／＼私の腔内…削り取られてるのが分かるよ♡あう…んっ、あつ♡繋がつてるところが…ぐちゅ…ぐちゅ…ぐちゅ…つていやらしいよう。私エッチな子になっちゃったあ♡」

「もっともつとエッチな子にしてやる…だからもつと俺を受け入れろ」

「うん、受け入れるう…俊葵の全部を受け入れるう♡」

「今の簪ちゃん、すごく可愛いわ…お姉ちゃんも濡れてきちゃう♡」

楯無も興奮しているのか簪の足を抑えていた手を自分の秘部に持って行き自分で慰めている。

うん、入れた時よりは痛みは抜けたようだな。俺は楯無に退いてもらい正常位で簪を犯し始める。楯無は俺の後ろに回り抱き着いて自分の身体を擦り付けながら自分で弄っているようだ。後ろの方から楯無の押し殺したような喘ぎ声が聞こえる。

「簪のココ、もうこんなにくちやくちやだぞ。初めてなのに慣れるのが早いな」

「あつ、あつ、だつて俊葵が上手だから♡んつ、それに…好き…だから／＼あんつ、ああ!!お姉ちゃんに愛撫されるのも気持ちよかったけどやっぱり俊葵のが良いよお!!」

「んう…はあ…はあ、嫉妬しちゃうわ。私だつて簪ちゃんの事…んつ、好きなのに」

「ならおまんこを弄つてやれよ。俺の先走り汁と簪の愛液のカクテルが今なら飲み放題だぜ」

「あら、それは名案ね。簪ちゃん…お姉ちゃんがまた舐めてあ♡げ♡る♡」

「んつ、お、お姉ちゃん!!待つて!!ひゃうん♡だ、ダメエ…気持ち良すぎるのお…癖になつちゃううん♡あうつ、あつ、あつ…俊葵、お姉ちゃん、好き…大好きだからもつとお、もつとお♡」

おねだりされたら応じない訳にはいかないよな。

俺は更に腰の動きを早めて簪のおまんこを剛直で突き上げる。カリが簪の膣壁に引つかかる度に快樂から逃げようと身体を振ろうとするが俺の腕が簪の肩を押さえつけているので動けずに快樂から逃げられずにいる。それにも関わらず楯無の愛撫も止まらないので簪はどんどん絶頂に近づいていく。

「好きな時にイっていいぞ?」

「うん…でももうちよつと俊葵の身体を感じてたい」

きつとイクのを我慢しているんだろう。締まりがきつくなる…でもきつくなれば俺のカリが簪の弱いところを強く削るので快感は増していく。つまり簪は我慢すればするほど気持ち良くなるのだ…悪循環、いや良循環なのかな。

「あん、あつ、あつ、しゅご…い♡は、初めてにやによにいく♡」

「呂律も回らなくなつたか。いいぞ!!もつと俺を興奮させてくれ!!」

「んじゅ…じゆる、ちゅ、ちゅむ…えむ♡…ぷはあ…きしゅううくんちゅうう…じゅうううううう!!プハツ!!はあ…はあ…♡」

艶めかしい嬌声の音楽を聞くのもいいが貪るようなキスで楽しむのも良い。口を近づけたとたんに簪は俺の唇を食むように喰い付いたかと思うと俺の舌を吸い出して、自分の舌と絡めて唾液の交換をする。その間にも俺はピストンも忘れない。

「と、俊葵に興奮しやれてりゆう…あつ、あつ、もつと突いてえ♡奥、奥を突いてえ!!そこが良いのお…おほお!!」

ハア…ハア…簪、簪、簪い!!凄いい締め付けだ…ハア…良すぎて…もう…

「俺も…気持ちいぞ簪。締め付けがきつくてそろそろ…」

「うん、イっていいよ。私も…イク…逝きそう♡俊葵は…あつ、あつ、ダメ…息が続かな…い。ハア…ハア…も、もう…イ、イックウウウウ!!」

簪は絶頂し、そのおまんこは俺の剛直を遠慮なしに締め付ける。その刺激に耐え切れず俺もイってしまう。腰を思い切り前に突き出し簪の子宮口に龟头を押し付けて精液と欲望を簪の中に発射した。

ビュクツ!!ビュル!!ビュリルル!!

龟头が膨れ上がり何度か大きくビクンと跳ねながら精を吐き出し、後半は静かにトプトプと流れ出た。子宮に入りきらず秘裂からこぼれ出た精液をじゆるじゆると音を立てて楯無が吸るのを見てるとまた起ってしまう。

「んう!!俊葵のまた大きくなってる…でも次はお姉ちゃんに…ね?」

本当はこのまま突いて欲しいんだろうが我慢して順番を楯無に譲る。なんて優しいんだ!!

ゆつくりと簪の秘裂から剛直を抜くと小さく「あつ」と反応する簪。抜くと同時に愛

液と精液が混ざり合いぐちゃぐちゃになってる割れ目から俺が出した精が流れ出てくる。うわあ…いつ見ても俺の射精量はねえな、妊娠しないように術は掛けてあるけどこんな量を何度も中出ししてたらいつかは孕みそうだな。

しっかしこの征服感は何度味わっても心地良い。前世では2回も出したら打ち止めだったのに対して今は何度出したって萎えることを知らない…女性と愛し合うのに最適な身体になったって事だな。さて次は…

「楯無の番ですね。準備は出来ているようですし愛撫無しで挿入しますよ」

「え、ええ…良いわよ。簪ちゃんのクンニで私のおまんこはもうヌレヌレよ…さあ、入れて頂戴」

どうも歯切れが悪いな…もしかしてまだ怖いとか？嫌なら俺は別にお開きにしてもいいんだけど。一応、訊いておくか。

「まだ怖いですか？」

「いいえ、怖くはないの。ただ…本名で呼んでほしくて。私の本当の名前は刀奈なの…更織家では当主が楯無の名前を襲名する。だから刀奈はもう捨てた名前なんだけど…」

「刀奈…か、女の子の名前にしてはちよつと物々しい名前だね。でも好きだよ…その名前」

「お世辞なんて良いわよ…どうせ…」

「刀は持ち主の鞘に収まるものだろう?それとも刀奈は誰彼構わず付き従う鈍なのか?」

これからセックスするというのに暗いままで楽しくない。俺の為にも:そして刀奈の為にも大人な対応をしなくちゃな。子供っぽくても俺は年上なんだから

「私の主は俊葵様だけよ……ふふ、様付けで呼ぶと心地が良いわね。まるで大きな心に包まれて温かくなるようだわ。……お願いします:私を俊葵様の鞘に収めてくださいませ」

「こんな業物をどつかの誰かに渡すなんてもつたいないことができるか。刀奈は俺のモノだ……精進しろよ」

「ありがとうございます……それしか言う言葉が見つからないわ」

名の有る家の当主なだけはあるようだ。普段と違って年上で主人である俺に対してきちんと敬語で接する。普段通りでも構わないと思うが刀奈なりのけじめなのだろうな。少し堅苦しい気もするけど……

「さあ、湿っぽいのは終わりだ刀奈。愛撫は無しでいいと言ってたな……じゃあ入れるぞ」「来て……欲しいの♡東さんや簪ちゃんとのセックスを間近で見せつけられていたのよ?もう……我慢なんてしたくないわ♡」

「堪え性のない女だな……刀奈。まあ、俺も堪え性のない男だからお相子か……入れる……ぞ

!!

刀奈はきつと処女だろうが勢いよく腰を振るって刀奈の膣内を剛直で抉る。その途中になにか引つかかった感覚があったのでそれが処女膜だろう。激しい運動をすれば破けるなんて言うのは都市伝説だったのかな？まあ、関係ない…一度しかないこの感触を今はじっくりと味わう。

「んう……つう……これは…痛いわね。痛いのは嫌いだけど…この痛みは不思議とツ!!
ふう……ふう……とても良い気分だわ。これで私も俊葵様のモノになれたのね♡」

「俺のモノになれた事が泣くほど嬉しいのか？」

「嬉しい…わッ／＼／女はね…男の最後になりたいものなのよ。でも一番なのは…あつ、最初で最後が良い…の。最初…じゃあないけど、私を捨てたりしないでしょ？だから…最後になれて嬉しいの」

俺は彼女たちの最初の男になれて嬉しい。そして彼女たちは俺の最後になれて嬉しいという訳か…でも複数人いるから最後とは…彼女たち個人からしたら自分は俺にとっての最後の女か。成る程…じゃあ俺は皆の男に相応しくならないとな。

「刀奈…んツ…そういう俺達、キス…まだしてなかったな」

「確かに…あつ♡じゃあ、今からしmむぐう!?!んじゅ、じゅ、じゅうう…♡ぷあ…凄い…上の口も下の口も俊葵様の物に…あつ／＼／」

刀奈ってお師に弱いんだな。俺が無理やりキスをしたら少し逃げるように顔を逸らした。でも俺がしつかりと抱きしめていたせいで逃げることは叶わずに唇を奪われる。

「ハア…ハア…あつ、あつ、そう…よ♡ん…気づかないなんていらぬわ…好きなように動いて感じて…ほしい／＼／」

「なら…んう…東やクロエ、簪とも全く違う。つて当たり前か…みんな気持ち良い事には変わりないけど…さ!!」

しばらくスピードをランダムに変えながら腰を動かしていると、目の前で揺れる巨乳が目に入る。シミの一つもない真っ白なおっぱいの上には薄いピンク色の乳首が…あむ

「ひゃう!!ふえ!?ち、乳首は…きゆうん…敏感…だからあ!!あ、あん♡」

唇をうまく使い刀奈の乳首を噛まないように口に含む。もともと感じていたのか固くなっている舌で乳輪をなぞると刀奈は身体をビクンと反らせた。

「おまんこも乳首も全部…ああん♡気持ち良いよお!!はあん♡もつと…もつとお♡」

「もつと…なんだ?刀奈は普段から挑発的な態度をとるくせに攻めには弱いんだな…そんなに欲しいならおねだりの仕方が上品すぎやしないか?もつと下品で淫らな感じでおねだりしろ」

「うう…言うわ…んう…わ、私の淫乱ヌルヌルの俊葵様専用おまんこに…俊葵様のぶつ
とおおちんぽを思い切り突き立ててください!!我慢できないんです!!さつきまで処女
だったのにこんな優しいセックスじゃ物足りないド変態なんですう!!」

東や簪たちとはまた違った意味での征服感で俺の心が満たされていく。こんなに淫
乱な女なのに他の男には見向きもしないなんて優越感が凄い…うん、凄い!!一途で淫乱
…なんて素晴らしいんだ!!目の前にいる女も、傍で寝ている女たちもみんな俺のモノだ
と再確認すると下腹部に血が集まり愚息は大きさを増す。

「ん、う!?だつ、あ、っ、こ、これ…お、おお、きいわあ…ああ♡削つて!!犯して頂戴!!
ぐちやぐちやつて…おまんこ壊れちやいぞうあ♡」

「くく…最高だよ刀奈。やつぱり大好きだ!!」

無粋な着飾った言葉なんていらぬ。必要なのは俺の好意と欲望をぶつける言葉だ
けだ。でも…刀奈の耳には俺の言葉は届いていないようだ。

「あつ、あつ、あつ、んう♡これ…これしゅきい…ハアハア♡こんなじゃあすぐにイッ
てしまうわあ♡」

なら俺はもつと快樂へ墮としてやるよ。もともと速いピストンに力を入れて速度を
上げ、もつと深い位置へ突っ込む。刀奈の子宮も俺の子種が欲しいのか降りてきてい
る。思い切り入れると亀頭が子宮口を押し広げて中に入ろうとするが、俺のが大きいの

か刀奈のが狭いのか…亀頭が入る気配はない。

「イグウ…もうイツつじやうう♡そのまま突いて奥にい!!子宮に直接…ああ♡もう…ダメえ…イ、イ、イツグウウウウウ♡あ、あ…も、漏らしちゃうう…♡」

ビュクツ!!ビュル!!ビュウウ…ビュ、ビュ、ビュ……しよあゝ…

連続での中出しセックスで気持ち良くなりすぎたのか大量に射精した後、刀奈と一緒に潮を噴いてしまった。膈内に潮をぶちまけないように急いで抜いたせいか刀奈にぶっかける形になってしまふ。でも刀奈は汚れる事なんてお構いなしに手皿で俺の潮を受け止めてごくごくと喉を鳴らして飲んでる。

「汚いぞ?」

「んぐ、んぐ、んぐ……ぶはあ♡大好きな人のモノなら汚くなんかはない…わあ／＼それにしても…凄いわね。こんなに出したのに…」

刀奈の視線は俺の剛直へ注がれる。射精で少し萎えて下を向いてしまっているがデロンとなっただけで太さは変わっていない。限界まであと数回は持つ…と思う。

「じゃあ順番的に次は私だね俊くん」

体力を回復させた束が俺に寄りかかって来て、簪も動けるようになったので俺の足に抱き着いてペロペロ犬の様に俺の身体を舐めておねだりしている。刀奈は2連続がきついか寝つ転がって目を閉じている。すごい潮吹きだったし疲れたのだろう…うう

…一人ともヤル準備は万端という訳ですね、分かります。

「俊くうんもつとお…♡」

「俊葵のはまだ元気だよ…♡」

「スピーZZZ」

さて!!今夜は枯れるまで出してやろうじゃあないか!!

28話 ご飯は大事、ハッキリ分かんかね

何の滞りなく授業は終了した：ら良かったのだがそんなに上手くはいかない。

「デユノア君、第一印象から決めていました!!」

「私にISについて教えてください」

「わ、私にも!!」

「一夏くん、よろしくお願いします」

「一夏!!まさかあたし以外の女子とISの訓練をするつもりじゃないでしょうねえ?」

e t c

まったく：シャルルや一夏は人気があつて羨ましいなあ。俺?俺の周りには…

「私はお前の一番弟子だ。一夏よりも先にお前に教わる権利がある」

いや：まあ箒は専用機持ちじゃないし問題はないけど放課後に訓練してやってるじゃないか。今日くらいは誰かに譲ってやろうぜ。

「俊葵さんの嵐は射撃が主体のようですしここは私が」

セシリアのブルーティアーズは射撃と言うよりも狙撃に近いので俺の嵐とは戦い方が違うような…

「この中では俊葵様との付き合いが一番長いのでここは私が」

付き合いの長さは関係ないんじゃないか？寧ろあまり話したことがない女子と話を
して友好関係を広げたい

「小娘は黙っている。ここはブリュンヒルデの私がマンツーマンで訓練してやろう」

おい教師!!

「俊くんは私の恋人で、私は俊くんの物だからここは私が」

束エ!?どうしてここに居るんだよ…しかもISを装備して!?

俺の周りには軽い戦争が起こせそうな戦力が集まっていた。

「専用機持ちが一人のところを集まってどうするんだよ。それに千冬さんは教師でしょうが!!専用機持ちが班長になって訓練しようよ。あと千冬さんはそんなキャラじゃないでしよう?」

「んんっ!!いい、言われずとも分かっておるわ／／!!」

顔を真っ赤にして咳払いしてもバレてますよ…そんなところも可愛いですけど。

「束はおうちに帰ろうな」

頭を優しくポンポンと叩く…：ISを装備しているのでガンガンと金属音が響くが…。

「ほら、他の生徒も謎のISの登場に驚いているし帰ろうな」

「むう…今日は大人しく帰る。このISの説明をしたいから放課後に来てね、じゃあ〜ばいちゃ〜」

そう言うのと真つ赤なマントを纏って地下への入り口がある方へ飛び去った。

「それでは専用機持ちが班長になつて歩行訓練を行え。出席番号順に俊葵、織斑、オルコット、クロニクル、デュノア、嵐、ボーデヴィツヒの班に分かれる」

「こういったときだけ専用機を持っていない箒さんが羨ましいですわ…」

セシリアやクロエがなんか箒を睨んでいるが箒は我関せずと言った様子で俺の元へやってきた。

「で、ではよろしく頼む」

はあ…無事に授業が終了すればいいけど…。

まずは歩行訓練だ。俺が運んできた打鉄に箒を搭乗させる。本来なら搭乗しやすいようにしゃがませた状態で降機するのだが前の授業でそのまま降機したらしい。仕方ないので箒を抱きかかえて搭乗させる。

「きゅ、急に抱きかかえるな／＼／＼!!」

顔を真つ赤にする箒も可愛いなあ。俺はあえて箒を強く抱きしめて顔を寄せる。

「落ちると危ないからな……しつかり捕まっとけよ」

「あ、ああ……（うう……顔が近い……しかし言うなら今しかない）今日の昼は空いているか？」
「シャルルの世話役だし転校したばかりで色々と不便しているみたいだからみんなで食べる予定だ。勿論箒も誘う予定だったぞ」

「そうか……（私と二人つきりではないのか……残念だ）」

箒のヤツ可愛いなあ……（*、艸、）

心を読まれているとも知らずにまあ

「ほら、急いで乗り移れ、後がつかえてるぞ」

「分かった」

箒をI Sに搭乗させてから少し離れたところで箒の歩行訓練を見守る。授業はこの後、全く問題は起こらずに終了した。ただ箒とその後I Sに乗った女子全員がI Sを立たせたまま機体から降りたので全員をお姫様抱っこでI Sに搭乗させた……ふう。俺の気も知らないで……

昼休み

「僕も同席しちゃってよかったのかな？」

俺、箒、セシリア、簀、楯無さん、シャルルの大所帯で屋上に来て食事をしている。俺は自分で作った弁当を持参、内容は野菜炒めと白ご飯…シンプルが一番でしょ？（震え声）勿論、量は3〜4人前

ちなみに一夏は鈴と、クロエはのほほんさんと二人きりで食事を楽しんでいる。「という訳でお弁当公開タ〜イム」

楯無さんがそう言うと言はそれぞれ作ってきたお弁当を出す。シャルルは購買で買ったコツペパンを出した。日本の昼食でパンと言ったらこれしかないと言ったら本気にして買ってきたらしい。なんか罪悪感…

「私の弁当はこれだ」

なんて事を思っていると箒が俺の目の前に弁当箱を差し出す。フタを開けて中を見てみると中には唐揚げ、卵焼き、ほうれん草のお浸し、白ご飯、梅干しが入っていた。とてもシンプルだが食欲をそそるメニューだ。

「この量だと腹の足しにもならないと思うが、まあ食べてみてくれ」
「それじゃあいただきます」

まずは唐揚げを一つ頂こう。あむ…むぐむぐ…うまい!! 大蒜の風味に加えてくさみ取りにしようかと胡椒が入っている。ほんのり香る程度だが山椒も入っていてとても美味しい。次に卵焼き…むぐ…これは!? 甘さの強い醤油を使っているな…しかも砂糖

を加えて甘さを追加している。甘党の俺を気遣ってくれたのか。すげえ美味いぜ。そしてこのお浸し…他のオカズが味の濃い物ばかりだからか薄味にしている。うん…美味い。

「ど、どうだ？」

「凄く美味しいぜ、ありがとうな」

「味噌汁もあるんだ。口直しに…」

箒から渡された水筒から味噌汁を飲む…ふう…ほつとする味だ

「次の料理は…」

「私たちの料理…」

「私たち姉妹の手料理を食べられる人なんてこの世に数人といないわよ？」

簪と楯無さんは大きな重箱を取り出してふたを開ける。中には箒と同じように唐揚げ、卵焼きが入っており、その他にも蟹の爪やタイのアラ炊きなどが入っている。

「こいつあ豪華だな…ふむ…美味い!!」

箒の家庭的な味とはまた一味違った美味しさがある。きっと高級な食材を使っているのだろう。

「ぐぬぬ…これでは私の弁当が…」

「日本料理って綺麗だね」

「箸、別にいいじゃないか気にするなよ。箸の料理もすぐく美味しかったぜ。特に味噌汁は毎日飲みたいくらいにな」

「「!？」」

「「？」」

日本人である箸、簀、楯無さんは察した様子だがセシリアとシャルルは何が起こっているのか分からない様子だ。ま、そのうちに分かるさ。さて…最後はセシリアの料理…正直なところ食いたくねえなあ…だって原作であれだもん（・ω・）

「セ、セシリアは何を作ってきたんだ？」

さつきからランチボックスを持ってそわそわしているセシリアに話しかける。

「わたくしはサンドイッチを作ってまいりましたわ。ですが…その…見た目が悪くてとてもお出しできるような物では…」

「見た目より味だって。ほいっと」

「あ…」

セシリアからランチボックスを取り上げて中を見るとお世辞にも綺麗とは言い難いサンドイッチが入っていた。レタスの水分を吸ってパンがふにやふになっっている物、マヨネーズやケチャップがはみ出ている物などがある。一つとって口へ運ぶ……

「お、お口に合いますでしょうか？」

……不味く…ない…だと!?むしろ『美味しい』の部類に入る料理だ。マヨネーズやケチャップの量が少し多くてしよっぱかったりはするけど十分に食べられる味だ。

「うん、まあちよつとしよっぱいけど美味しいよ。ありがとな」

「本当ですか？見た目はぐしやぐしやで調味料の量も多すぎると思いますわ」

「そりゃあ見た目も悪いし調味料も多いけどさ…でも俺の為を思つて一生懸命作つてくれた料理を不味いなんて言えないし、愛情は最高のスパイスつて言うだろ？」

そう言うときセシリアは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「つ、次はもっと練習して美味しい料理を作りますわ…／＼（チエルシーに料理を教わつて正解でしたわ…わたくし一人で作った物は見た目はよかったですけど味は壊滅的でしたもの）」

あ、やっぱり自覚はあつたんだ

「昼休みは有限だし早く食べて午後の授業に備えよう」

こうして昼休みは平和に終了していった

放課後…俺は東に呼ばれて地下へ来ていた。

「東のISのデータならさつき貰ったからやつぱり来る必要な無かつたんじゃないのか？」

「ちゃんと見せておきたいし…それに会いたかった」

ギユ…

「ああ…その、なんだ。察してやれなくてすまん。…で、基本性能は本当に書類通りなのか？見た目はあんなスペックはなさそうだけど」

「ふっふっふ…このI Sの名前は『アリス』。宇宙と同じ拡張領域を利用しているから追加ブースターやシールドビットが入れ放題。だから機動力も防御力もある程度以上の上昇させることができるよ」

細いフォルムとは裏腹にビット兵器が大量に装備されているので火力も凄そうだ。顔の部分はマスクタイプで顔が見えないようになっていいる。そりやそうだな、正体がバレたらいけないわけだし。

「ワンオフアビリティは『狂気の国のアリス』で、能力はシールドビットによるエネルギー吸収。勿論、爆発の熱エネルギーも吸収できるよ。でも爆発した時の破片とかで傷つくから無敵って訳でもないけどね」

「いやいや、十分凄いや。流石だね…でもどうして防御型…いや、援護型にしたんだ？東らしくもない」

東なら高火力で敵を殲滅するような機体を作ると思ってたんだけど

「だって俊くんの援護をするために作った機体だもん。だ・か・ら…援護は任せてね」

「じゃあ次の出撃は一緒に……って事か。ところであのケースは何だ？あれも新しい兵器か？」

「まあね、俊くんの設計図の中に面白い物が有ったものから改良したのを作ってみただ」

そう言つて束は大きなスーツケースのような箱を開ける。すると中から燃え盛る炎のように真つ赤なボディスーツが出てきた。それは俺が何度も見直した大好きな映画の一つに登場するパワードスーツ……アイアンマンだった。

「これってアイアンマンだな……でもアークリアクターがないんじや動かないだろ？」

「アークリアクターなんて私にかかれば簡単に作れるよ。そもそもこれの設計図にアークリアクターも含まれていたから作っちゃった。ISに比べると戦力は小さいだろうけど……こういうった装備好きでしょ？」

「大好きだ!!」

まさかISだけじゃなくてアイアンマンにまで搭乗できるなんて……最高だ!!束は俺の夢を何でも叶えてくれる。こんなに嬉しいことは無い。

「でも……俺は束に貰つてばかりで何も……」

「そんな事ないよ？だって私の為に右腕も左目も……内臓の一部だって失つてくれた……それだけで十分だよ」

「それは再生するからいくらでも失ったって…最悪死んだって俺は死にきれない（この能力を身に着けてから死んだことは無いけどきつと死なないだろう。命なんて軽いものだ…特に俺のはな…マジで軽いから困るんだよ、っはっはっは…はあ）」

「気持ちの問題…俊くんって精神的に弱いから無理しちゃダメ。だから…ぎゅうくく」

東は俺の顔を掴んで豊満なバストに抱き寄せる

「俊くんは私がちやんと癒してあげる。それにこれからは私も俊くんと一緒に戦う。その為にアレを作ったんだから」

「凄くいい匂いがする…気持ち良い。温かくて柔らかい物に包まれるとすぐ癒される…シャルルと同室になる前から抱き枕を買って一人で寝ていたので色々溜まってる俺にこのおっぱいは…」

「いいよ…このまましちゃおうか」

「やっぱり俺は東に貰ってばかりだ…でも…そんな生活も悪くない」

溜まっていた物をすべて吐き出すように東の唇を貪るようなキスをする

「東が欲しい!!」

「私の物は俊くんの物だよ…全部ね。でも、まずは落ち着くために一回…ね?」

そう言う俺のベルトを外し始める。今夜は激しい夜になりそうだ…。

29話 非公式戦 前半

ラウラとシャルルが転校してきてから一週間以上が経過していた。二人とも学校生活に慣れ始めて友達も何人かできたようだ。これで原作小説に登場したキラクターの殆どが集結したことになる。東、クロエ、一夏、セシリア、箒、鈴、ラウラ、シャルル、簪、楯無さん…勿論、千冬さんや山田先生、その他クラスメイトとこれで役者は揃ったという事かな。学校生活もより楽しくなってきたが俺や一夏が存在を疎ましく思っている生徒もいるみたいで良くない噂を耳にすることもある。例えば「俊葵さんは研究室の出身で殺戮マシン」だとか「俊葵さんは獣で学園にいる女性の1割を手籠めにした」だとか「ゲイ」だとか散々なもの…しかも俺に關するものばかり。男がISに乗っているのが気に食わないのは分かるが酷いなあ…勿論、東は激怒したがこれらに關していくつかはあながち間違いないので俺は東をなだめるのに必死だった。

確かに獣呼ばわりやゲイ呼ばわりは嫌だが反論しても多勢に無勢…意味はないと思っているので実力で示そう。学年別タッグ戦が有るのでそれが良い機会だろうな。でも誰と組もうかな…俺が遠近両方ともできるので相手はいくらでもいる。セシリア

と組んで二人とも引き撃ちするもよし、箒と組んで二人で上がるもよし、簪と組んでミサイルと弾丸の嵐を巻き起こすもよし、クロエのジャミングと俺の光学迷彩を利用した闇討ちも良いだろう。シャルルやラウラの戦闘スタイルは分かっているが俺と合うか分からないのでそれは皆との訓練の中で探っていこう…まだ時間はあるんだ。

訓練前

俺はいつも訓練に使用しているアリーナへ向かっていた。この前からラウラとシャルルが参加するようになって訓練の幅も広がってより有意義なものに仕上がってきている。特に訓練の最後に行く俺とのルール無用の模擬戦がみんなにとって良い経験値になるらしい。最初は騎士道に反するとか、卑怯だとか言われていたが回数を重ねるごとに俺の迷惑を察してくれて、訓練の意味も理解した様だ…まあ、一般市民の一夏と箒はあんまし納得していなかったけど…。納得できないのは分からんでもない…だって軍属の候補生はそれなりの教育を受けているから自分の持っている物の重さや責任を深く理解している。だから戦闘行為に対しての覚悟が一夏たち以上にできている。しかし一夏達は違う…それでもテロリストなんかは卑怯な手段をいくらでも使ってくる。だからそれに対抗するためにこちらも卑怯で汚い手を使わなければいけない…強者を演じるのも疲れるよ…ホントに。

今日の訓練は鈴とセシリアとの三人で行う三つ巴の訓練なので、どんな立ち回りをするかを考えながら歩いていたらアリーナの入り口に着いた。しかし二人と何人かの女生徒が言い争っていたので自販機の陰に隠れて聞き耳を立てた。

「だからあたしたちが先に予約をして使えるようにしてたつて言ってるでしょ!？」

「あなたたちは使い過ぎなのよ。私たちは今年で卒業なの。スポンサーにどれだけ成長したか見せるチャンスがそこまで迫っているんだから変わりなさいよ」

「規則に従ってアリーナを借りているんだから先輩たちもそうしたら良いじゃない」

「鈴さんの言う通りです。あなた方の言い分はいささか横暴ですわ」

「ふくん、上級生の代表候補にそんな口を訊くんだ」

成る程、タッグマッチの練習をしに来たけど俺たちがアリーナを独占しているから文句を言ってるってわけだな。はあ…しかも候補生かよ…無駄にプライド高そうで男嫌いしてそうで関わりたくないなあ。でもこのままじゃ喧嘩になりそうだし出ていくか。

「そんなに言うならI Sで決着を付けようじゃあないか。俺は一人、先輩たちは4人同時で構わないぞ」

「ちっ…男が口を挟むんじゃないわよ」

「それに候補生のあたしたち4人を相手にして勝つつもりなの？無人機を倒した程度で

調子に乗らないでよね」

はあ…面倒くさい…どうしてこう仲良くできんのかね。

「そうか、口をはさんですまなかつた…じゃあ俺たちはいつも通り訓練するから先輩たちは後日また予約してくれ。行くぞみんな」

話しても無駄そうなので無視してアリーナに入っていく。頭の固い奴は無視するに限る。一緒に居ても腹が立って仕方ないからな。余計なストレスは溜め込みたくないし身体にもよくない。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!!話はまだ終わってないわよ!!」

「決闘するのが怖いんでしょう?あ、分かった。専用機を持ってないから負けるって決めつけてるんだ。いやあ〜可哀想になあ!!3年の候補生なのに専用機持ちじゃなとか(???)」

ISの数は限られているので候補生でも持っていない生徒も多い。あくまで候補生は実戦データを取るための処置で専用機なんかは国家代表であったり軍隊で研究、改良されているのがほとんどだ。逆に言えば一年生の時点で専用機を持っているセシリアや鈴が優秀と言うことになる。本格的に軍隊で部隊長をこなしているラウラやIS企業のテストパイロットであるシャルルは例外かな。あとは男の俺たち…一夏は千冬さんの弟だから専用機を貰えるのは当たり前前つちや当たり前前だし、俺みたいにISの創造

主たる束から直接貰えたりするのはまあ…当たり前とは言いがたい、たはは…

しかしこんな安い挑発に乗ってくる先輩たちはあまり国から信頼されていないようだな。

プツン

切れた…彼女たちの中で決定的な何かが。多分それは堪忍袋の緒だろうがな。

「い、言ってくれるじゃない…相手してやるわよ」

「ポロポロになって膝まづいても許してあげないんだから」

はあ…勝つ気でいるよ。

「俺は専用機を使う。その代わり先輩たちはエネルギー回復用のモジュールと弾薬回復用の大型ケースを使用して構わない。俺が先輩たち四人を全員、戦闘不能にしたら俺の勝ち。このくらいいのハンデは必要でしよう?」

「呆れて物も言えない。負けた時の言い訳にはならないわよ…」

「もしも負けたら何でも言うことを聞こう。本当に何でもいいぞ」

俺は更に挑発を続けて先輩たちを怒らせ、余裕をなくさせる

「じゃあ、あんたの持っているISを私たちの祖国に献上しなさい。男に二言は無いでしょっつー」

「ちよつと!!そんなお願い聞けるわけないでしょ!!」

「横暴ですわ!!」

「鈴、セシリア、黙ってる。俺は何でも良いと言った…二言は無いよ。ただし負けた時は…いや、試合終了後に言おう。20分後にアリーナ内に集合することで解散しますか」
そう言う俺は鈴とセシリアを連れてピットへ向かった。

ピット

「本気ですよ!?!あんな要求に従う必要なんてありませんわ!!」

「その通りよ!!しかもエネルギーと弾薬の補給をさせるなんて!?!あんな負ける気!?!」

セシリアは右、鈴は左側からギャンギャン文句を言ってる。

「別にいいだろう?俺の宇宙だつて積載量無限つて利点があるしワンオフだつて発現してるんだ。負ける要素なんてどこにもないよ」

「獲物を前に舌なめずりは三流のすることです。いくら俊葵さんが強くつても油断しては負けてしまいます」

「これは油断じゃあない、余裕つてやつだよ…それに万が一にでも負けたとしてあの束が俺のISを他人に渡すと思うか?きつとあいつらの祖国は俺からISを奪ったことを後悔するだろうよ。いや、後悔をする暇なんて与えずに束の命令で俺が滅ぼしに行くかもな」

「はあ…勝つても負けても先輩たちに救いは無いようね…ご愁傷さまだわ」

「必ず勝ってきてくださいね」

「任せとけ!!」

俺はセシリアと鈴に短く返事をしてアリーナ内に飛び立つ。

久し振りの戦闘だな宇宙。今回の戦闘は実戦じゃなくて形式的な試合だから緊張はしなくて済みそうだ。相手は4人だけどGWを落とすしに行つた時に比べると軽いさ。だから安心して戦おう…いや専用機ならいざ知らず、量産機のラファールと打鉄が相手じゃ戦いにならないな。よし!!じゃれつきに行くか!!

30話 R-18 非公式戦 後半

意外な事にアリーナ内では俊葵が4人の代表候補生を相手に苦戦を強いられていた。

予想外だったあ!!まさか4人の連携がこれ程のモノとは思ってもいなかった。3機のラフアールの内、2機が常に俺の周りを飛び回りながらミサイルとマシンガンで牽制をしてくる。本来なら足の遅いミサイルを避けたり迎撃するのは容易い。でもそこにマシンガンの牽制が入るだけでこんなに回避難易度が跳ね上がるなんてなあ…最近は嵐のシールドビットで防御していたから忘れていたぜ。しかも残りの1機は補給に行っているので隙が無い。そして俺の隙を見逃さずに打鉄が一撃離脱のパイルバンカーをミサイルの煙やハイパーセンサーの死角である直上や真下から加えてくる。

「試合前の威勢はどこに行ったのかしら!？」

ちつ…試合運びがちよつとくらい上手いだけで調子に乗りやがって…お前ら俺より年下なんだから敬語の一つでも使ったらどうなんだ!？」

「へっ!!俺の威勢は常に働きの者でね、今は出張中だがすぐに帰ってくるさ」

とは言ったものの打開策は見つからない。シールドエネルギーは殆ど削られていな

いけどローテーションで隙の無い奴らの相手をする俺はローテーション……ないな。しかし攻めきれないのはつまらない……とりあえずの目標は相手の補給を絶つ事……いや、全員を一気に倒す!!

「補給をどう絶とうかとか考えてるんじゃない？ 無駄よ、補給中はラファールに打鉄の援護をある程度付けているし対策は万全よ」

「それにあたしたち二人の権勢を避けるだけで手いっぱいじゃない。あなたはそのまま少しづつシールドエネルギーを削られて負けるのよ!!」

勝手な事言いやがって……でもまだ、まだ大丈夫。シールドエネルギーも弾薬もまだまだ豊富だし俺自身が緊張していない。実戦とは違って命の心配がないから落ち着いて周りの状況を確認できる。ユツクリと焦らずに戦えばいい……決して感情的になるな、まだ慌てるような時間じゃない。落ち着いて戦えば必ず勝てる。

ピット

セシリアと鈴はそわそわしながら俊葵の試合を観戦していた。その実力を実際に目の当たりにしていた鈴は負けることは無いにしろなんで苦戦しているのかと不思議に思っている。セシリアもいつもの訓練よりも動きが鈍い俊葵を心配しているようだ。

「俊葵の動き……なんだかいつもと違うわね」

「ええ、いつもならあの程度の弾幕なら無理やりにも突破して殴りかかるくらいの勢いがありますのに……。もしかして体調がすぐれないのでは!？」

「体調不良を負けの言い訳にするような情けない男だと思っう?」

「と、俊葵さんはそんな言い訳をするような男ではありません!!とても漢気溢れる素敵な方です!!でも……。いつもの俊葵さんと違いますの……」

「信じて待ちなさいよ。俊葵は絶対に勝つ……。だって今の俊葵は手加減をしているだけだもの。中国で戦闘を行った時と比べると遊んでるレベルだわ」

「IS相手の戦闘ではなかったがああ容赦の無さと圧倒的な火力を見ていた鈴は勝てる」と確信していた。

「むう……。私の知らない俊葵さんを知っていますのね」

「ふふん、良いでしよ。でももしイギリスであんな事件が起こったとしてもセシリアはきつと連れて行ってもらえないわね」

「信頼されていないから……。ですの?」

「あからさまに不機嫌になつてしまうセシリアを論すように鈴は優しい口調でなだめる」

「心配しているのよ。あたしは、軍属で人を殺す可能性だつてあつたからそう言つた訓練もして覚悟もそれなりにあつたわ。でもあんたは軍属じゃないでしょ?だから汚い

世界を見せたくなかったからかもしれないわ。それに俊葵だって自分の事を好きって思ってくれている女性に自分が人を殺すところなんて見せたくないでしょ」

「私は俊葵さんのやさしさに包まれていたのですね…え？ちよつと待つてくださいまし。私の気持ちに俊葵さんは気付いていますの!？」

「そりゃそうでしょ…あんだといい箒といいさ…あんな態度を取られちゃ鈍感な一夏以外は絶対に気付くわよ」

「そうでしたの…箒さんと一緒に本格的な告白を考えなければいけませんわね…」

「ま、頑張りなさい。本気なら俊葵も受け入れてくれるわよ」

アリーナ内の緊迫した空気と違い、ピット内は淡い青春の香りに包まれていた。

アリーナ内では相変わらず一方的に攻撃されている俊葵は隙を見つけようと躍起になっていた。しかし腐つても代表候補生の彼女たちに対して有効な策を見出せず…

「先輩たちは手厳しいですね」

「ふっ…今更弱音を吐くの？もう遅いわよ」

「そうそう、あんだみたいな弱い男になびくなんてイギリスの代表候補も落ちたものね。良い笑いものだわ」

「こんなに弱い男が鍛えてるならその子たちも弱いんじゃない？あははは!!」

ブチッ……

「よそ見してる暇は無いわY……きゃっ!!」

真上からパイルバンカーで奇襲を仕掛けてきた打鉄の腕を掴んで無理やり武装を剥ぎ取る。そして胸の装甲にパイルバンカーを連続でお見舞いし、そのまま地面に叩き付けた。さらに追い打ちをかけるようにドロップキックで腹を強打。

「イ……ナ……ズ……マ……キイイイイックウ!!」

俺の事を馬鹿にするならまだ許せる……だが俺の周りの人間を馬鹿にするのはゆるささん!!もう我慢の限界だ!!本気でぶつ潰す!!

俺の足元では苦しそうに呻く先輩がいるが関係ない。エネルギーはまだ残っているので追撃は必要そうだな。シールドで守られているなら顔を踏んでもいいよなあ!?

「ゴミはゴミらしく!!地面を這いつくばって人間様に踏まれてろお!!だああああぼがあああああ!!」

何度も何度も、心が折れるまで顔を踏み続ける。途中で髪の毛を掴んで頭突きや腹パンも欠かさない。コレを助けるための援護が来ないと思って後ろに意識をやると口を大きく開けて呆然とこちらを見ていた。

「おい……覚悟はいいか?……お前らを……潰す!!」

掴んでた髪の毛を離して残りの3人の方へ瞬時加速で一気に距離を詰める

「「ひっ!!」」

逃げるなよお…どうせ捕まえるんだからよお!!

一人の足を掴んで引き寄せる。ラファールは打鉄よりも装甲が薄いのでポロポロにしゃしゃり助かるぜ。攻撃が激しすぎたせいかなISスーツを破いてしまいが全く気にせずに攻撃を続ける。ポロポロになったコレの髪の毛を掴んで耳元で憎悪を込めて囁く

「俺の弟子たちを悪く言うな…殺すぞ」

これで残りは2人か…ん?白旗を上げてるな…誰が許すかよ

「そんなもんじゃ俺は止まらないぜえ!!白旗を下げなあ!!」

テンションマックス!!今ならいける!!

黒き翼を発現させて二人の後ろへワープする。こんなに短い距離でワープできるのもISの演算処理があつてこそだ。

急に相手が消えたと思つたら後ろに反応が出た2人は驚いてこちらを振り向いく、しかし俺がそんな隙を見逃すはずもなくアサルトライフル両手に構えて顔面に速射する。楯を呼び出してガードしたので近づいて格闘戦へ移行した。

「どうしたどうしたどうしたあ!!そんな実力で俺に勝とうとしたのかあ!?!ええ!?!」

二人同時に相手をするのはいつもなら難しいが黒き翼を発現させているので戦闘ス

ピードが何倍にも上がっている。なので何の問題も無く二人を殴り続けることができる。

暫く攻撃を続けていると二人のエネルギーは切れて試合終了のブザーがアリーナ内に響く。ちっ…もう少しお仕置きを続けていたかったが…まあいいだろう。勝てたしさ……。ボロボロになった4人を見下ろすと膝を抱いてガクガクと震えていた。きつとシールドエネルギーが切れる丁度まで攻撃していたので死の恐怖に襲われているんだろう。けっ…相手の実力を考えて挑んで来いってんだ…

このままアリーナ内に居てもやる事がないのでセシリア達のいるピットへ戻って二人と話している。

「凄いやない!!」

「俊葵さんのワンオフアビリティの能力は出力過多ですよ」

「うん…まあ…そうだな。はあ…でも冷静に考えると酷い戦いだつたなあ…」

思い返すだけで恥ずかしい…キレていたとはいえあんなに暴力的な試合をしてしまわうなんて。あれじゃあ対戦相手の彼女たちに失礼じゃあないか。

「いえ、俊葵さんを挑発したあの方たちがいけないんです。俊葵さんが気負う必要なんて全くありませんわ」

「セシリアの言う通りよ。あんなにハンデを付けてもらったのに負ける方も悪いわよ」

「むう：明日になったらちやんと謝りに行こう。量産機を相手に本気になりすぎた俺も悪い。彼女たちのプライドを刺激しないようにしなきゃいけないから大変だなあ：」
「確かに敗者が勝者に謝罪をされたらプライドが傷つくのは間違いありませんわね。ですが俊葵さんがそうしたいのであればそうすればいいですわ」

「ま、あたしらがあーだこーだ言つて止まるような男じゃないつて事は知ってるしね」

2人の意見を聞いて俺も心が決まった。明日の朝：はあ：覚悟はあつても嫌なもんは嫌なんだけどなあ：たはは

学園内寮

今しがた俊葵と相対していた少女たちは自室で落ち込んでいた。対戦相手は専用機持ちとはいえ男、そして自分は女、代表候補生：考えるまでもない。しかもこの試合の結果を聞いた国から『失望した』と言われた。今までの努力は何だったのだろうか：私
は国の為に頑張ってきたのに：と思うのは仕方ない

俊葵の存在は中国やドイツだけでなく様々な国にバレている。人の口に戸は立てられぬとはよく言ったものだ：第二の男性パイロットの存在を候補生が自国に知らせないわけがない。そんな訳で俊葵は全世界にバレていた：まあ、スパイ活動をさせようつて国はいくらでもある。彼女たちの祖国の様に…。

私のプライドはズタズタに引き裂かれた。今まで培ってきた戦闘技能や戦術の全てをたつた数分で否定されたから……。忠誠を誓っていた国にだって私の存在を否定された。でも……なんだろうこの気持ち。正直なところ凄く安心している……今までは凄く緊張していたと思う。あの男、俊葵さんに攻撃されて蹂躪されるたびに胸の奥が熱くなり心がキュンとした。まるで心と身体が俊葵さんのモノになれと言わんばかりに……。……あの娘たちはどう思っているのかしら。もしかしたら私の様に俊葵さんに恋心に似た何かを感じているかも……。はあ。

弱冠16歳の心は複雑に絡まっていた。

ドガシヤアアン!!

あ、机が吹っ飛んだ……あの机って強化合金製の作業台だよな
バキヤツ!!

今度はその吹っ飛んだ机が真つ二つに割れた

「ムキーーーー!!なんで俊くんや箒ちゃんたちが馬鹿にされなきゃいけないのお!!」

ISを装備した束は研究室で暴れまわっていた。壊れた物なら仙術を使えば元に戻せるがこんな風に怒っている束を見ているのも忍びない。

「落ち着けよ束。あいつらは人の實力を見る目がない雑魚だったただだよ。あんな奴らにいちいち怒ってたら身が持たないぞ」

「でもでもお〜」

ぎゅ…

俺は束の I S を強制的に待機状態に戻して後ろから優しく抱きしめる。こうすると束はある程度落ち付いてくれるので嬉し（ちよろ）い。そして耳元に口を近づけて囁く「俺が傷つくのを見て束が傷つくように、俺だって束が傷つくのを見るのは嫌なんだ…あいつらの処理は俺に任せろ。ちゅ…」

「ずるいよ…そんな風にキスされたら…」

ああ!!もう!!可愛いなあ!!

頬を朱に染めて俯いている。抱きしめると束の体温だけじゃなくて匂いまで手に取るように分かる。心の中だって読心術を使わなくても以心伝心だ…束も俺の気持ちを察してくれているらしい。

「昔の私は他人がどうなるうがどうでもよかった。まあ…今でもどうでもいいんだけどね。私にとつて一番大事な人は俊くんや箒ちゃんたちで、次に大事なのがその大事な人の関係者、それ以外の人間は死んでもどうでもいい人間だよ。そうはいつでも大切なものが増えすぎた…だからみんなを大事にしたいし愛されたい…」

「束…俺は嬉しいよ。なあ…束の気持ちは分かる。でもその可愛い口から直接聞きたいんだ」

「エッチ…うう…意地悪だよ…。…………。もう!!分かった!!分かったよ…。…スしたい…」

ぼそぼそと聞こえるか聞こえないか微妙な声で俯きながら呟く

「聞こえんなあ〜」ニヤニヤ

「俊くんに抱いて欲しいの!!エッチな事いっぱいして欲しいの!!うう…これでいいdむぐ!」

束のセリフをキスで中断させる

「んちゅ…ちゅ、ちゅ、…ちゆる♡じゅちゅ…ちゆる…ん…ぷはあ♡ハア…ハア…いきなりなんてえ♡」

目をトロンとさせ、苦しかったのか肩で息をして、呼吸を整えてこちらを見上げた。

「続きはベッドで…な?俺はこの部屋を元に戻してから行くからシャワーでも浴びてろ」

「うん…」

短く返事をする束は研究室を出て行く。俺は札を召喚し、部屋の四隅と中央に張り付けて呪文を唱える。すると部屋は淡い光に包まれてゆつくりと壊れて散らかった物

が元に戻る。ふむ…やっぱりこういうった世界の理を無視した能力は消費カロリーが凄いなあ。普段の超能力も質量保存の法則や慣性の法則を無視しているからそれなりのエネルギーを使う。しかし時間を戻すと言った能力はまた別格の様だ。

「ハア…ハア…いつものと違う…やっぱり仙術は危ないな。また今度どんな術があるのか確認しとかないと」

仙術、念力、衝撃波とよくよく考えてみれば十傑集の能力を全て引き継いでいるのでできることは大体わかるんだけどな。それでもちゃんと確認は必要だ…特に暮れなずむ幽鬼の生物を操る能力はどの程度操れるのか気になる。気持ちまで操れるのか、それとも体だけが勝手に動く感じで操れるのか…まあ、どちらにせよ能力を見せる時は相手には死んでもらうがな。こんな能力を見られた日にや、俺は世界から追われる身になるだろう。良い意味でも、悪い意味でも…そうなたら束にも迷惑が掛かる。

「ふう…これで元通りになった。必要ないと思うけど壊れないように術を掛けておくか」

札を張ったところと同じ場所に印を浸透させて物理的な防御力がある程度上げる。今度から実戦ではこの術を自分に掛けよう。そうしたら生身でも十分に戦えるようになる。今のままでも問題はないけど痛覚を遮断させただけでは体の状態が分からなくなり、体が動かなくなる場合があるのでこの術はそんな時に役立つ。

「おっそお〜い」

東の声がしたので振り向くとバスローブ姿の東が入り口に立っていた。きつとシヤワーだけだったから早いのか…それに風呂上がりだから頬は紅に染まっっていて、髪の毛先端からは水滴が落ちてゐる。待ちきれずに来たんだろう。

「乙女を待たせちゃだあ〜め」

乙女…ねえ

「ふんす!!」

物は試しと東の鳩尾を狙い正拳突きを刺す。が、東は軽々と片腕で防いだ。まあ、弱く打ち込んだから防げたのもあるんだろうけど…

「俺の正拳を片手で止める女性乙女と呼ばないよ」

「俊くんの前では乙女でいたい。ほら、私って世間から疎まれてるからさ…」

「それは今までさ。これからは違う…と思う。東の計画を知れば世間も味方を変えるんじゃないか?」

東はISの開発の他に計画がいくつもある。それを知れば東を敵視していた奴らだって…もしも敵が現れたら俺が消す。東に敵対する者は個人だろうと団体だろうと、国だって俺が滅ぼしてやるさ。

「そうかな…」

「そりゃあISは兵器って間違った見方が世間の意見だよ。でも本当は違うってことを知っている人間はいる。ISを使って世界を混乱させようとするクソみたいなテロリストや国は俺が制裁してやるよ…束の為に…な」

「ありがと…」

短く礼を言うのと束はバスローブの紐をほどいて、そのシミ一つない艶めかしい姿態を露わにする。

「風呂上がりだろ？冷えるぞ」

「じゃあ俊くんが温めて…」

裸で抱き着かれると俺も興奮しちゃうじゃないか。いったん束を引きはがして俺も全裸になる。今日は代表候補生との試合があつてかなり疲れているが…いや、疲れているので俺の息子はとても元気だ。身体が疲れる程に息子は元気になる…きつと生物の本能ってやつなんだろうな。

「良いのか？まだ8時だぜ」

「何時だつていいよ…抱いて欲しいな」

「せめてベッドでな…」

「うん」

束を抱きかかえてベッドルームへ行こうとすると、研究室のドアが開かれてとある人

物が入ってくる。俺も部屋を出ようとしていたので丁度目の前にその人物は呆然と俺たちを見ていた。

「……………」

何秒、いや何十秒向き合っていただろうか…。しばらくして俺は口を開く。

「そこに居られると出られないんで退いてもらえますか？千冬さん」

デデドン（絶望）

「あ、ああ…すまない」

横に避けた千冬さんをできる限り見ないように移動する。

「……………ちーちゃんも俊くんと寝てみる？」

束エ!?なんてことを言うんだ!!

俺に抱きかかえられている束が千冬さんの方を見ながらとんでもない提案をする。

千冬さんも怒鳴るように否定した。

「わ、私は教師だぞ!!」

「でも就業時間外でしょ？ならいいじゃん、ちよつとくらいさ」

そういった問題じゃないだろう束。千冬さんにだって人の好みはあるだろうし俺な

んかじゃあ…。

「だが…俊葵はお前たちの恋人だろう」

「そうだよ、俊くんは私たちの恋人…だからちーちゃんの恋人でもいいじゃない」

「それは!!……………考えさせてくれ。気付いていると思うが…私は俊葵の事が好き…だ。でも色々と考えさせてくれ」

千冬さんって俺の事が好きだったんだ。……………うえ!?ちふっ!?ええ!?

「本当ですか!?!」

「う、うむ…俊葵の事が好きだ。どうもお前の事を考えるとよく分からない感情に自分が支配される。気が付けばお前の背を追っているし、話していると胸の奥が熱くなるんだ。これは恋なのだと改めて知ったよ。だが私にも立場というものがある…だからしばらく考えさせてくれ」

千冬さんは顔を真っ赤にしながら自分の気持ちを俺に打ち明けた。なら俺も千冬さんに倣おう…

「俺も千冬さんの事が好きです。でも千冬さんがそこまで言うなら今日は抱きませぬ…また日を改めて二人つきりで…ね」

今日は束を抱く日だ。千冬さんとは一対一で寝たい…初めてが親友の目の前だなんて難易度が高すぎるしな。

「ええ…ちーちゃんも一緒にいいじゃん」

「初体験が親友の目の前だなんて恥ずかしすぎるだろ。察してやれよ…それに千冬さん

「一緒に居たら朝まで寝れなそうだ」

「じゃあどんなプレイしたか教える事、良いね!?じゃあ私たちはこつちだからまた明日ねちーちゃん」

「授業に支障が出ない程度に…な。また明日逢おう」

それだけ言うのと千冬さんは元来た道を引き返して自室へと帰った。何か用事があつて来たのではなかったのだろう…か?あ、戻つてきた…

「私としたことが用事を忘れて帰るなんて…。俊葵にコレを渡すために来たのだった…受け取れ。まったく…どこの国も考えることは同じという訳か…」

束を下ろしてバスローブを着せてから書類に目を通す。ふむふむ……………

「どこからあ?」

「アメリカ、ロシア、韓国、イギリス、その他各国…内容は…かなり極端に要約すると『男性パイロットがおるんじやろう?なら秘密にせんで情報公開せんかい…つて事で機体データをよこしやがれ。勿論これは情報開示義務だから謝礼なんて一銭もやらん』つて事が書かれてる。やっぱり俺の存在に気付いて動き始めている国もあるつて事か…幸いにも俺と束の関係性には気付いていないみたいだけど…どうする?情報開示する?」

束の方を見るとどこから取り出したのかタブレットを持って何か操作をしている。

「なにしてんの?」

「ゴミ掃除……」

多分ハッキングでもするんだろう。俺は止めさせるために束からタブレットを取り上げて床にたたきつけて壊す。

「こんな自分勝手な奴ら死ねばいいんだよ……」

「そのうち俺たちに頭を下げて助けを懇願する日が来る。その日まで我慢だ」

「なんで分かるの？」

「アームズフォートがグレートウォール一つだけとは考えられない。だから亡国企業はまたどこかの国で実験と称してゲストに対し、殺戮ショーを見せるだろう……既存の I S では到底かなうことのない A F に対して唯一の対抗策は核弾頭か俺くらいなものだ」

つまり俺が言いたいのは……

「俊くんはその助けを求める国に恩を売る訳だね」

「そういう事。まあ、金や土地と引き換えだけだね。さ、この話はお終い、今日はもう寝ようか」

「俊葵の言う通りだ。明日も授業があるのだ……楽しみはほどほどにな」

俺達に釘を刺すと千冬さんは今度こそ行ってしまった。残された俺と束は腕を組み二人だけのエデンの園へ入っていく……

「やっぱり束は綺麗だ…」

束の身体を見ているとため息がこぼれてしまう。まるで男を惑わすサキユバスの様に俺を虜にする。

「俊くんだって魅力的だよ。この大きい胸板にがっちりとした太もも」

「褒めても何も出さないぞ?」

「いつも中出ししてくれるじゃない」

「上手いこと言ったつもりか」

束に覆いかぶさってベッドへ押し倒す。既に全裸なのでタオルケットの冷たさと束の温かさが直接伝わって気持ち良い。束も気持ち良さそうに目を細める。ならもつと気持ち良くしてあげないとな…でもいきなりおまんこは弄らない。

抱きながら背中と頭を撫でて安心させる。この世界に来てから前世では考えられない程セックスをした。なので少なからずセックスが上手くなっていると思う…しかしもつと束たちを気持ちよくしたいと思うのは当たり前的事。

「えへへ、俊くんにこうされると凄く落ち着く。…ヒヤッ!もう、いきなりお尻触るの禁止!!」

「ええええ。束のお尻が気持ち良いからいけないんだよ(棒)」

「え?私のお尻そんなに気持ち良い?それなら仕方ないなあ〜ちよつとくらい揉まれて

も許さないとなあ／＼／＼／♥」

ちよろい（確信）

俺はそのままお尻を揉みつつ空いている方の手を胸まで持つて行き優しく撫でる。いつもは乳首を摘まんだり舐めたりするのだが今日は敢えてそうしない。

「んっ…今日の俊くんは控えめだね／＼／＼そういう気分？」

「ネットで調べたら前儀に時間をかけてほしい女性が8割強いるって記事を見かけてさ。だから今日は長めに愛撫しようかなって」

「ふうくん、そうなんだ。でも私はどっちでもいいかな」

「なんで？」

「だって俊くんって何ラウンドもするんだもん／＼／＼それにそのアンケートを答える女って一発二発撃ったら打ち止めになる男を抱いてる連中だよきつと。だから私は何度も抱いてくれる俊くんの愛撫が長かろうが短かろうが気にならないよ」

成る程…確かに何度も挿入してあげることができれば前儀は必要ない…のか？俺は特殊だからなあ。でも東が満足してくれるなら良いか

「じゃあいつも通りで良いか…ちゅ」

東が満足できるように愛撫を続ける。まずはキスから始めよう…次はお尻とお胸、勿論手つきはいやらしく。軽く触れているだけなのに指が肉に沈む感覚が何とも言えな

い。それに首筋の匂いを嗅ぐと甘い香りがするし束の身体は俺を喜ばすためにあるんだなあ。

「もう…匂い嗅いじやダメエ…♥甘えん坊さんだからあ／／／」

身体を振って逃げようとするが本気で逃げようとしていないので止めて欲しい訳ではないようだ。なら鼠蹊部も撫でてやろう。お尻を撫でていた手を鼠蹊部に這わせて束の秘部は触らないように…つと、こんな感じかな。

「あ…そこ♥んつ…良いよう♥焦らされてる感じがたまらない／／／」

「束がこんな風に男に好き放題されてるなんて誰も想像してないんだろうな。もしかしたら束の数少ない写真で抜いてる奴らがいるかもよ？」

「そんな奴らの事なんてどうでもいいよう…と言うか顔写真だけで抜けるなんて上級者だね」

顔写真だけでも想像できるから俺でも抜けそうだけど…って事は俺ってば上級者？ やったぜ。

「束は美人だから仕方ない事さ。彼女がいない連中はもしも自分がつて想像で抜くんだよ…前世の俺みたいに…」

「それ自分で言ってる悲しくならないの？」

「…まあ少しは…ね、でも過去の話だよ。今の俺は…ちゅ」

「んむう!?!ちゅ、ちゅう…んちゅ、もう…♡」

今の俺は昔の俺とは内面以外が何もかも違う。だから気負う必要なんてないさ…美人や美酒に酔いしれても構わない人生。最高じゃあないか!!

「やっぱり…んツ…俊くんは積極的な方が…♡ちゅ…んう……ぷはあ／／」

「積極的な男は如何ですか?」

「大好き!!んちゅ♡ちゅ、ちゅ、ちゅう……ふう／／愛してる♡ねえ、もう…シよ?」
もつと楽しんでいたかったが束におねだりされたら断る訳にも…

ギユ…

束の耳元に口を寄せて『俺たちを監視している者』にバレぬよう小さい声で話す。こうしていると抱き合つて耳元にキスしているようにしか見えない。

「黙って聞いてくれ。この部屋の入り口を見てくれ、勿論悟られないように…」

「んう?誰もいないよ?」

あ、そつか。束の目は俺と違って普通の目だから何も見えないのか。俺の左目には様々な機能がある。そのうちの一つ、サーモスコープが扉の前に人型の体温を感知した。

「俺の左目が感知した。でも、このパスを知ってる人間だから敵ではないよ。ちよつと会ってくる」

ベッドから降りて扉へ向かう。誰だろうか…やつぱり気になった千冬さんが戻ってきたのかな？

プシューー

開かれた扉の先にいたのは楯無さんだった。

「こ、こんばんは」

流石は楯無さんだ。こんな状況でも挨拶と笑顔は絶やささない。しかし手に持っている扇子には『南無三宝』と書かれている。

「主人の床を覗くなんて感心しないな…って言いたいところだけど何か理由があるんだろ？教えてくれ」

「織斑先生が地下に入っていくのが見えたから何かあったのではないかと思ってね。何も無かったら良いのよ。じゃあ東さんと楽しんだ」

ガシッ

「へいへい刀奈…覗くだけ覗いて帰るつてのは礼儀知らずじゃあないか？」

踵を返して帰ろうとする刀奈の手首を掴んで阻止する。

「それに俺と束の床を見て興奮してたんだろうが…ココはこんなに正直だぞ？」

開いている手を刀奈の股に差し込んで秘部をショーツのクロッチをなぞると『くちゅ…』といやらしい水音が聞こえるくらいに愛液で濡れていた。

「ん…だ、ダメ…／＼／＼今日は東さんの相手をする日…でしょ？」

「そうだよ。でも刀奈は部屋に戻ってオナニーするんだろ？ だったら一人で自慰に興じるよりも俺に抱かれなよ（キラン）」

一度でいいから行ってみたかったこのセリフ。絶妙な角度で白い歯を見せることにより反射させることができるのだあ!! 勿論サムズアップも忘れずに

分かりやすく言えば松○しげる

「ぶふう!!」

刀奈と東がほとんど同時に嘖き出す。……………解せぬ

「何年前の口説き文句よ（プクク）」

「俊くんエ…」

仕方ないだろ!! ネタが古いのは記憶がさあ!! ほらあ!!

「と、とりあえず今日は東と刀奈を抱くからな!!」

「くく…良いわ。ご主人様の命令なら…いえ、命令でなくとも抱かれないわ」

刀奈がセックスに加わった▼

「本当にお邪魔してよかったのかしら…久しぶりのセックスでしょう？」

「久しぶりだからこそだよ。たっちゃんも一緒に気持良くなるように、んちゅ…♥

ちゅ、ちゅ…えろ…ちゅう♥」

レズキスは和むなあ。そして和むだけではなく俺の息子まで元気にしてくれる。

「ちゅ…ん、じゆる…♥東さんのキスって濃厚なのね♥」

「俊くん仕込みの濃厚キسسのお味はお気に召したようだね」

「なら本家本元も堪能してもらわないとな」

二人の間に割って入り刀奈にキスをした。刀奈の口の中は東の唾液と混ざり合ったラブジュースで満たされていて、ある意味では蜜壺になっている。そんな蜜壺に舌を入れて中の蜜を堪能させてもらおう。

「んッ!？」

急に舌を入れたのに驚いたのか飛びのく刀奈。そんなに驚かなくてもいいのにな…

「そ、その舌…長すぎない?」

「そうかな?」

刀奈の口の中を隅々まで舐めまわすために伸ばしたのだがお気に召さなかったようだ。むう…解せぬ。

「20センチはあるわよ…もしかしてそれも仙術や超能力なのかしら」

「いや、これは忍術の一つで人体変化の一種さ。やろうと思えば女にだってなれるよ?」

ヘンゲ・ジツ!!

「凄…」

「やっぱり俊くんは凄いい!!」

「感動している暇はないぞつと…」

呆けている刀奈を押し倒して足首を掴み大きく股を開かせる。キスだけで濡れているところを見ると外で弄っていたようだな。折角だし手じゃなくて口でシテやるか…

「ヒヤッ!?!お、奥まで入ってくる!?!」

「ごんらクンニはなかなか味わえないぞ?」

舌だけの中に入れてかなり奥まで舐めまわす。舌を出したままだと喋り辛いな…舐めるほうに集中するか。

「んう…確かにツ…これは普通の男じゃ味わえない快感ね♥おちんぼとは違う、あつ…そんなところまでツ♥」

「たーちゃんばかりズルいく。ねえねえ俊くん、私にもお」

うくん、もう少し刀奈を味わっていたいので束には指で我慢してもらおうことにしよう。

「指も気持ち良いけどお…♥あつ…気持ち良いけどお…欲しいよう／＼／俊くんの長い舌でクンニしてえ♥」

仕方ないなア…じゃあ分身殿に頑張ってもらおうか。俺は札を呼び出して俺に変化させる。見た目も能力も俺と全く同じの分身の完成。

「え!?!」

「束…そっちの俺は忙しいから俺が相手をするよ」

「と、俊くんが二人…」

「俺たちは二人とも本物だよ。刀奈をクンニしている俺も札に戻るし、俺も札に戻る。見た目や能力、記憶や感情は全く同じ、呼び出した俺が俺を呼び出して無限に増えることができる。戻るときは誰か一人を残して札に戻ればいい。もつと本格的に説明してもいいけど今は素直にこの状況を楽しもうか」

東サイドの俺は束を仰向けに寝かせて太ももに手を当てると股間に顔をうずめてクンニし始める。こうして束が俺以外の人間にエロい事をされるのは新鮮だ…ってそのエロい事をしてるのは俺か（… ㊦、㊦）

「こっちの俊くんも本物だあ♥あう…そこおきもちい♥激しいけど優しいところが俊くんだあ／／／」

「私の方のご主人様もツ!?!きゅ、急に奥を突かな…きやう♥クリトリスはあ…あんっ♥」
二人とも喜んでいるみたいで結構、結構。やっぱリセツクスは気持ちよくなきやいけないよな。あ、刀奈の膣内が程よく締まってきた…そろそろイキそうなんだな。じゃあフィニッシュさせますか。刀奈の感じるところは確かこの辺だったな。

「ひゃう!?!そこはツ…んう…ダメ♥イク…イツちやうわ♥ん…んう、ああ／／／」

舌を器用に動かしてGスポットと子宮口を強めに舐めると刀奈は絶頂してしまった。東の方が気になったので見ると早々に達してしまったようだ。流石は俺!!

「戻るかい？」

「戻ろうかい」

4Pをしてもいいが今日は別な事を楽しみたいので呼び出した分身を札に戻して準備をしなくちゃな。まだ逝ったばかりで腰が抜けている二人の身体を綺麗にする為にお風呂へ運ぶ。追い焚きができるまで頭洗ったりして待つか。

俺が頭を洗っていると東は後ろから、刀奈は前から俺に抱き着いてきた。

「痒いところはなあい？」

「私たちが洗ってあげるわよ？」

お前たち…さつきまで腰が抜けてマットに寝つ転がってたんじゃあ…ああ、いつか。細かい事は気にしない気にしない。

「もつと後ろの…そこそこ、良い感じだよ。東は身体の方を洗ってくれ。もちろん身体でね」

「はぁ、ボデイソープをおっぱいに塗って…つと。よいしょ…ん、どう…かな？」

「グレイト…」

どんな高級ソープに行ったってこんな最高の女はいないだろう。そもそも東たちに

勝る女なんていない（確信）。

「ん…俊くんの身体…はあ♥私の為にこんなに傷を受けて…私が癒してあげるね／／んしよ…んしよ…えへへ、私のおっぱい柔らかいでしょ（*・ω・*）俊くん専用のおっぱいだよ〜♥」

「私のおっぱいも気持ち良いでしょう？大きさは大分負けているけれどハリは私の方が…んう、あるわ♥ご主人様を気持ちよくしてあげられるくらいの柔らかさはある…あつ、それ…つに、敏感なの♥」

確かに束のおっぱいは大きく柔らかい、刀奈のおっぱいは箒と簪の中間くらいの大きさの美乳で張りがある。束、クロエ、簪、刀奈、それぞれ違うおっぱいを持っている…つて当たり前か。大きさも違えば感度も違う、俺だけが知ってるみんなの身体…ああ!!辛抱溜まらん!!

「もう限界!!こいつを見ろお!!どうだ!!」

この中で束と刀奈に裸で迫られて勃起しない者だけがブラウザを閉じよ。

「凄く…大きいです」

身体も隅々まで洗われたので丁度いいだろう。俺は身体の泡を洗い流してフル勃起した息子を膝まづいている二人の前にブルンと差し出し、舐めるように促す。

「ああ〜む、じゅ、じゅりゅ…んふっ!!けほっ、けほっ…やつぱり大きいと喉の奥まで

加えると苦しいね／／」

じゃあ少し小さくしてやるか

「ありがと…じゃあ奥まで加えるね。じゅりゅ…んじゅ♥じゅ、じゅ…♥」

「じゃあ私は玉を舐めるわね。はぶっ…ん、んふっ…♥竿は小さくしても玉はそのままなのね／／あ、小さくしなくてもいいわよ…だって大きい方が舐め甲斐があるもの♥」

「これはこれで…んふう…。」

「折角だしその大きな俺専用のおっぱいでダブルパイズリしてくれないか?」

全ての男の憧れ…それ即ちパ・イ・ズ・リ!!誰もが憧れるパイズリ…それは女性の象徴ともいえるおっぱいに包まれるという安心感、そして奉仕の心を感じることができ最高なプレイ!!さらにそれが二人によるものなら…ただでさえ気持ちの良いおっぱい×2!!二人がおっぱいをこすり合わせるにより視覚作用も2倍で合計4倍!!さらにダブルフェラによって2倍!!つまりダブルパイズリは通常パイズリよりも8倍の快楽を得ることができるのだ!!

「んしよ…大きさを元に戻してくれたおかげで挟みやすいや」

「私もしてあげる♥私たちのおっぱいから可愛いお顔が出てるわ…はむ。ちゅ、ちゅ…」

「ああ〜ずるいく!! 私にも舐めさせてえ♥じゆる…じゆ、じゆう…♥えろ…んう…♥」
ダブルパイズリの次はダブルフエラか…最高だな。俺を喜ばす術を着実に身に付けてきている。この調子で簪やクロエにも…ぐへへ。

東も刀奈も俺の亀頭に口を付けて必死に吸い付いている。男冥利に尽きないが…もつとこう…何というかなあ。

「もつと舌を絡めたらどうだ?」(ニヤニヤ)

「じゃあ…ん♥ちゆ…じゆる…たーちゃん舌も美味しい♥」

「もう…ご主人様に…んちゆ、ちゆ…じゆ♥頼まれたらあ…はあ／／／」

あふつ…こ、これは(；；；；；；；；；；)

なんと素晴らしいのか!! 実際はそこまで気持ち良くないなんて言われているがそんなことは無い!! 程よく締め付けられた陰茎を抜かれながらの亀頭を二人の女が舐める…これは良いものだ!!

「ぐう…気持ち良くて…ぬう／／／」

「逝きそうなの? ふふ…好きな時にいつていいからね♥」

「ならもつと舐めてあげるわ♥えろ…れろん…ちゆ、ちゆ…じゆりゆりゆりゆりゆ…ぶはあ♥」

あ、これはアカン奴や…で、出る!!

どびゅっ!!びゅくっ!!びゅりゅりゅりゅ!!

す、すごい量が出た：相変わらずだなマイサン、それでこそ俺のチンコだ。

俺の息子から吐き出された精液で二人の胸から上は汚された。髪にまで掛かったのでちよつと心配だが洗えば大丈夫だろう：もし大丈夫じゃなくても超能力があるから元に戻せるか。それにしても：お互いに掛かった精液を舐め合う美女二人……：クル

!!
ビクン!!

「凄い……また大きくなった／＼」

「次は私たちの膣内で気持ち良くしてあげるわ♥」

束か……それとも刀奈か……どちらと先にシようかなあ。ふわふわした身体で優しく抱きしめてくれる束か……、大人な雰囲気で積極的かつ妖艶にリード（本人談）してくれる刀奈か……うむ……愛液ダラダラな束からするかな。

束に近づき、そのまま押し倒す。ナニをされるのか理解した束は大胆に股を開いて俺のを受け入れる準備をする。俺もそれに応えるために腰を低くして雄々しく反り返った剛直を束の中にインサート!!愛液でヌルヌルなので少し勢いよく挿入したが束も気持ち良さそうだ。

「んあっ!!ちよ、いきなりい……はう!!乱暴なのは嫌あ……もつと優しく……♥」

「いつも焦らしてばかりだから偶にはいきなり激しくするのも良いかと思っただけだなあ。でもまあ、口とは裏腹にしっかりと感じてるじゃあないか」

一息に奥まで挿入したがしっかりと感じてくれている。ちよつと不安だったけど問題なさそうだ。刀奈は刀奈で自分でおまんこや乳首を弄って自分の番に備えている。束には悪いけど刀奈を待たす訳にはいかなから本気で突くか…行くぞ。

「言わないでえ…恥ずかしいよう／＼あつ、あつ、そこっ…ダメツ…きちやうのお♥俊くんのおちんぽを舐めてた時に自分で弄ってからかすぐに逝つちやうのお♥くるっ!! きちやうううううう♥」

おまけとばかりにクリトリス弄ってやると思い切り腰を突き出して潮を噴いて俺の身体を汚す。だがそれが良い!!

ぷしゃああああああ…びゅっ、びゅっ

「あう…ちよ、ちよつと休…憩する…ね♥」バタン

「まだ休憩するのは早いぜ?」

脱力して倒れ込んでいる束を起こすとその豊富なおっぱいにしゃぶりつく。ミルクは出ないが構わない…何故なら束の汗の味がするからだツ!!少し濃い目のピンク色した束の乳首…うん、マンダム。口に含むと汗の味が口に広がる…勃起しているので少し硬いな。囁んじやおう(無邪気)

「ひゃうツ!? 囁んじやダメなのに…でも俊くんだから許しちゃおう♥」

片方の乳首を口で、もう片方を手で愛撫する。少し力を入れるだけで顔と手がおっぱいに埋まる…まじで東のおっぱいパネエツ。甘くていい匂いもするしおっぱいはやはり東が一番だなア…いや、千冬さんも山田先生もまだ堪能しちやいないので一番とは言い難いな。

「今…んふう…私以外の女の事を考えてた…(――)」

「わりい…許して…ちゆ」

「ん…ちゆ…許すよう。だって俊くんだもん♥おっぱいだけじゃなくてももう一回おまんこを…ね」

俺のオツパイ攻撃から抜け出すとまたベットに寝転がって俺を誘う。どうしてこうオスを誘うメスはこんなにもいやらしく、妖艶なんだろうか。気のせいだろうか官能的なおいが立ち込めていると思う。

「じゃあ…入れる…ぞツ!!」

さつきよりは弱めだがそれでも勢いをつけて奥まで入れた。この時に東がおまんこで締め付ける感覚が何とも言えない。東も口では嫌だとかダメだとか言ってはいるが本当に嫌なら突き飛ばしている。お互いに気持良くなくちゃセックスなんてただの交尾だしな…

「激しいの…イイツ!! あっ、あっ…膣内が削られるのしゅきい♥んふツ…あう、あっ、やめてって言っても止めないでね!! メチャクチャにしてえ…ほ、欲しいの／／」

「東エ…」

「遠慮なんていらぬ…俊くんだけのモノにシテ♥」

ぷつとぅん…

俺の中で最後の堤防が決壊した…獣の如く腰を振るい、乳房を揉みしだき、メスを凌辱した。今までにあつた優しさなどは微塵もないオスとメスの交わりあい。きつとここれが本当の交尾というものなのだろうな。

「あゝ、うツ!! お…ごお♥奥にい…当たってりゆ…俊くんのおちんぽ最高…りやよう♥ あっ、あっ、激しツ!! あゝ、あゝ、膣内が太いおちんぽでえ!! こんなに攻めらりえたらしゅぐにイツじやうゝうゝうゝうゝ!!」

いつ振りかも分からない激しいピストンに束は絶頂を迎える。しかし俊葵が近くとはなく次のメスへとチンポの先を向けた。

「おい、刀奈の後はまた抱くからな。準備は出来たか?」

「勿論よ、ほら…」主人様が気持ちよくなれるようにちゃんとほぐしておいたわ…来て♥」

ずっと弄っていたのか愛液で刀奈の秘部はぐちゃぐちゃになっていていやらしい匂いが立ち込め

ている。顔を近づけるとヒクヒクと穴を開けたり閉めたりして俺の一物が入るのを楽しんでしているよ

うだ。なら俺は焦らしたりせずに入れてやるのが優しさってもんだらう。

「刀奈のまんこも俺のに馴染んできたんじゃないか？しっかりと締め付けて出て行かないでって

おねだりしているぞ」

「あつ、激しいツ…もつと、もつとして欲しいわ♥強くても良いのお…私で気持ち良くなつて♥」

何そのセリフ…股間にビビツと来るんですが

「んっ!?!お、大きくう…♥ひう…//」

痛そうにしているが腕にしっかりとしがみ付いているので止めて欲しい訳ではないようだ。なら…………

続 30話 R-18

「少し強めに行くぞ…：そいやッ!!」

さつき束とのセックスで射精できなかつたので勢いがいつもよりも増している感じがする。いつもなら刀奈たちの身体を氣遣った相手に合わせたピストンを心掛けているが今回は遠慮無しに突くとしよう。刀奈も思いつきりして欲しいみたいだし…

「ヒツ…あつ、あつ、これ…：凄い♥もつとお…：もつと突いてえ♥」

勢い任せに腰を振るっているが刀奈は大丈夫だろうか？なんて考え今はない…：俺の中に有るのはどれだけ目の前のメスを氣持ち良くできるか、そして俺自身がどれだけ氣持ち良くなれるかだけだった。

「ご主人様ツ…：ご主人様あ／／ぐちやぐちや…：つておまんこからいやらしい音が、あつ、あう…：もうイキそう♥」

「好きな時にイケ…：俺とする前から自分で弄っていたろ。まだ入れて間もないのに愛液で滑りが凄いや…」

きつと俺の先走り汁も混ざっているのだろう。尿道を何かが昇ってくる感覚が止ま

らない：射精とは違う不思議な感覚だ。これはこれである種の快感を感じることができ。内側からの快感があれば外側からの快感もある：刀奈の膣内は一突きすること俺のチンポを締め付け、離れさせてくれない。

「ごめん…なさい、ハア：ハア：もう、イキそう／／先にイッてごめんなさい：でも我慢できないの♥」

抜くのも挿入するのも大変だ：締め付けがキツくてピストンがままならない。だが体重を乗せて半ば無理矢理に子宮口を押し上げ、振り返ったちんぽが刀奈の膣内の天井をゴリゴリと削りながらGスポットを刺激する。

「そ…ッ…：擦れてえ♥もう…：ダメ、イク…：あつ♥あつ、イク／／だめえ…：来ちやう…：何か来ちやうううううう♥」

膣の締め付けがきつくなり刀奈は背を反り返らせてイク。俺も少し休むために一度マイサンを抜き出して一息ついた。刀奈も肩で息をしながら俺をもう一度受け入れるために休憩している。股を思い切り開けて寝転んでるのでアナルも丸見え…：

▼ときはわるぢえをはたらかせた

「そいっ」

「ひいっ!?!」

つぶ：…と刀奈のアナルに人差し指の第二関節まで挿入した。突然の刺激にびっく
りした様だが問題はなさそうなのでそのまま動かす。

「そ、そこは汚いわよ!?!んツ：あ、なんだか：不思議な感じい♥」

「刀奈に汚いところなんて腹の中以外はないさ」

「んう：それは私が腹黒だつて言いたいのか？まあ：それもいいけど。アナルセックス：
する？」

返事の代わりに俺は一物にローションを大目に塗って、少しほぐしただけの刀奈のア
ナルへ押し込んだ。龟头が入り辛かったが入ってしまったえばあとはスルスルと奥まで侵
入できた。入り口の部分の締め付けがきついが…

「動くぞ…」

ずちゅ、ずちゅ：腰を前に突き出し射精できずにいきり勃っているチンポで刀奈のア
ナルを削る。ローションを塗っていてよかった：あ、でもアナルセックスをするときは
はゴムしなきゃ腸壁を傷つけるんじゃないやあなかつたつけ？

「私の身体がそんなに心配？裂けるくらいに激しくして頂戴：私を傷つけて♥」

「ああ：分かった」

おまんことは違った快樂が俺のちんぽを包んでくれる。おまんこよりも締め付けが
きつくて思いのほか気持ち良い。実際のアナルセックスはそんなに気持ち良くないと

いう人もいるがそんなことは無かったようだ。

「うう…痛いわ。でもこの痛みはご主人様から与えられたモノ…あつ、あつ♥もつと犯してほしいわ♥」
「アナルが裂けて血が出るくらいに私を愛して♥」

接合部を見ると既に切れて血が出ている。目元に涙を浮かべているが気持ち良い様だ。俺が腰を動かさなくても刀奈は自分で腰を動かして『ずちゆずちゆ』といやらしい音を立てながらピストンさせている。刀奈ばかりに動かせるのはいけないよなあ（ニヤリ）

「はふう…俺だつてまだまだヤレるさ。んっ…んっ…締め付けが…キツ」

刀奈を押し倒して四つん這いにさせて両手を掴むとゆっくりと腰を打ち付ける。

「あ、あ!!これなのよ、この痛み…この苦しみが私に愛を与えてくれるのよ♥逝つて…私のアナルに全部出して!!」

「分かつてるよ…全部…射精る!!」

ドビュ!!びゅりゅ!!びゅるるるるるる!!

一通り射精し終えて刀奈のアナルから抜くと『ごぶ…』と精液が大量に空気と共に出ていた。その精液は薄い赤色で血が混じっている。きつと切れた尻穴の血と混ざったのだろう。刀奈はと言うと恍惚の表情でぐったりとしていた。手足からは力を感じることは無く目は虚空を見つめている。

「あ……ああ……／＼／＼」

「まだこつちに出していなかったね」

寝転んでいる刀奈を無理やり起こしておまんこに挿入する。抵抗する力が微塵も残っていないのか俺にされるがまだ。

「これ……あつ、あつ、そこ……あう……。ああ……ああ……♡」

もはや刀奈の口からは意味のある言葉は発せられていない。獣の唸り声みたいな喘ぎ声を上げながら体を揺らしている。

「もうギブアップか？」

「ら、らっへ……もう、無理なお♡あん……あ、気持ちよしゆぎいなのおよ♡」

刀奈のおまんこは愛液と俺の先走り汁で大洪水になっていた。きつとアナルセックスの時からおまんこは大洪水だったのだろう。

「イクのが止まらない……止まらないのおくく♡もう本当に限界!!イク!!凄いのが来ちゃうくくくく!!」

正直、俺の限界も近い。東と刀奈の相手を休みなしで連戦しているので何時逝ってもおかしくない。

「俺も限界だ……全部膣内に出すぞ!!」

「出してえ!!全部!!私のいやらしくてぐちゃぐちゃのご主人様専用肉便器に中出しし

「……………」
 今夜も寝れそうにないな……トホホ

！
 ， — ！

・ —
 l, —

／ —
 ・ ，
 l, ！
 ！ i
 ，
 ！

31話 クラス内タッグマッチ

「昨日の夜は戻ってこなかったけど何処に行ったの？」

全弾発射《フルバースト》、即ち限界セックスを終えてぐったりしているところへシャルルが話しかけてきた。きっと昨日の夜、俺が帰って来なかったので不思議に思っているらしい。

「お、男には引けない時があるんだ…」

「あそこだろ？」 ↑ 一夏

「あそこだな」 ↑ 箒

「あそこですね」 ↑ クロエ

「兄さんの事だしあそこだな」 ↑ ラウラ

「あそこでは？」 ↑ セシリア

みんな順番に攻撃してくるやん…

「俺が黒ひげだったら飛び出してんぞ…しかも正解してるし…。ああそうだよ!!あそこ

に行つてたよう!!なんで俺が朝っぱらから千冬さんとガチバトルをしなきゃいけないんだよ……」

盛り過ぎたせいか……それとも自分だけがハブられたのが気に入らないのか朝一で呼び出されて千冬さんと本気で戦わなくてはいけなくなつた。結果は限りなく負けに近い引き分け。超能力抜ききの身体能力限定の真剣勝負……くんずほぐれつの寝技に投げ技、最後にや絞め技までありとあらゆる技をこの身に受けた。その結果、千冬さんの巨乳と柔肌を思う存分楽しめた……え?痛いに決まつてるじゃん。

「ははは……よく分からないけど俊葵も大変だね。で、どっちが勝つたの?」

俺と束の関係を知らないシャルルは取り敢えず愛想笑い……でも癒されるぜ。

「んな分かり切つてること訊くなよ……俺に決まつて………接戦でした」

急に背筋に寒気が……千冬さんは職員室で会議中のはずだ。うーむ……調子に乗るのはよくない、特に千冬さんに対しては……ね。

その後、俺たちは適当な雑談を繰り広げて千冬さんと山田先生が来るのを待った。

「今日の授業は1週間後に行われるクラス内タッグマッチのチーム決めだ。この間の襲撃で専用機持ち以外も緊急時には最低限の戦力になつてもらつた方が良くと会議で決まつてな。更に2週間後には学年別タッグマッチもある。同じタッグで出る必要はないが一人で戦うときと勝手が違うので、それも見越して訓練をしろ。以上……山田先生、

後を頼む」

そう言うのとタッグ決めを山田先生に一任して出て行ってしまった。多分まだ襲撃の後始末が残っているんだろう。

「ではタッグ決めを始めましょうか。あ、最初に言っておきますが騒いだりしたら出席番号順に決めますからね」

流石は山田先生、分かってらっしゃる。

「では話し合ってください」

俺は女子全員でじゃんけんをして勝ち残った一人とペアになる事となった。ちなみに一夏は俺が「遠距離武装の無い白式の援護にはシャルルの中距離支援型が一番相性が良い。それに男同士の方がやりやすいだろ」と言つて、シャルルとペアを組んでもらった。二人は原作でもペアを組んでいたし、シャルルは俺と同じ部屋なのでよっぽどな事がない限りバレはしないだろう。

セシリアを始めとするクロエ、ラウラの専用気持ちと箒は普段から俺とペアで訓練をしているのでじゃんけんは辞退していた。そもそも専用気持ち同士がペアを組んだらパワーバランスが崩れるというのもあるんだろう。つて事で専用気持ちは全員バラバラのタッグになる。しかし一夏とシャルルは2人とも専用気持ちだが男同士の方が見栄えが良いと反論する人はいなかった。……薄い本が熱くなるな。

適当に本を読んで待つていると俺の相方が決まったらしい。さあて誰じゃらほい。

「えへへええ。よろしくねマツチー」

「おう、よろしく頼む」

のほほんさんか、作中での戦闘描写が無かったからどんな機体コンセプトが良いか分からんな。一週間しか時間が無いから今日の放課後から訓練を始めるか。

その日の放課後

俺は第4アリーナでのほほんさんと射撃訓練をしていた…のだがこれ程までに射撃が下手くそだったとは…。射撃が苦手なのは知っていたし、貸し出し用のISが借りれなかったのでバランス型の宇宙を貸している。しかしバランス型とはいえ東特製の射撃用AIがインストールしてあるのでそれなり以上の射撃性能がある。なので敵が強いかわつぽどつか事が無い限りのを外すことがない…はずなんだけどなあ。

のほほんさんが撃った弾は的から大きく逸れてアリーナの外壁に当たる。もうここまでくると褒めるしかないね。上手い下手の区別はないんだけどある意味ではこういう腕前では何も言えないよ。スーパー下手くそだよのほほんさん。

「あ、また外れちゃった…折角ISを貸してくれてるのにごめんねえ…」

「人には得手不得手があるし謝る必要はないよ。単発で当てられないなら弾をばら撒く

ように撃てばいいさ。下手な鉄砲数撃ちや当たると言うだろ？ スロットに入っている G A N O I — S S — W G を取り出して撃ってみてくれ」

大型のガトリングを取り出し、両手に持つと的に向けて掃射する。バラバラバララララと通常兵器の火力ではなかなか聞く事の出来ない凄い轟音がアリーナ内に鳴り響いた。周りで訓練していた生徒や観戦していた生徒の視線は全てのほほんさんに注がれた。のほほんさんは暫く掃射を続け、土煙が酷くなった辺りで撃つのを止めて的がどうなったか確認する。

「凄い。初めての的を打ち抜いたかも」

ガッション!!ガッション!!と金属音を鳴らしながら体全体を使って喜びを表現するのほほんさん。あれだけの弾幕を張って動かないのが撃ちぬけなかったらそれこそ才能だよ:

この後、俺は射撃…と言うか弾をばら撒く系武器の扱いをいくつかのほほんさんにレクチャーして訓練を終えた。

食堂

みんなそれぞれのペアと食事をしているようだ。どんな戦術で戦うかとか装備はどうするか話し合っている。なので俺ものほほんさんと一緒に夕飯を食べながらこれからどうするかを話し合う事にした。

「やっぱりのほほんさんには俺と一緒に弾幕を張りながら逃げる戦法で良いんじゃないかな」

「でも、射撃特化の嵐ならともかくこの宇宙ってISはバランス型でしょ?」

「だつてのほほんさんは射撃苦手じゃん?それに嵐は俺以外が乗ると機体性能の4割も引き出せないからね」

「ふうくん、じゃあ宇宙でいいや」

「それが良いよ。嵐の戦闘コンセプトは乱れ撃ちだけど消費エネルギーが多い武器ばかりだから確実に当てなきや燃費が…ね?」

嵐で戦闘をしている時は弾を撒き散らすって感じだけど狙い撃たないと割に合わないのほほんさんとは相性が悪いISだと言える。

「それじゃあ私と相性悪そうだねえ。あ、でも宇宙を使つて試合出てもいいのかな?」

「良いんじゃないか?もしも文句を言われたらラファールを俺達で魔改造すればいいヤ」

「それもそうだねえ。で、マッチーの今日の夜ご飯は…何ソレ?」

俺が食べている料理が気になっているようだ。

「これか?これはシユパンヘルケルって言うドイツ料理だよ。子豚を皮がパリパリになるまで焼いてからソースをかけるシンプルな料理だね。前にドイツに行つてからハ

マった」

「ふうくん、一口貰っても良い?」

「おう、良いぞ」

俺は肉をナイフで一口大に切り分けてのほほんさんの口元に運ぶ。

「ほい、ああくん」

「あくむ…むぐむぐ…んく。うん、美味しいねえ。私も今度頼んでみよ」

少し離れた席

「自然な流れで俊葵さんとの関節キッス…流石のほほん!! 恐ろしい子!!」(金髪チヨロイン)

「ぐぬぬ…私を差し置いて俊葵とはい、あくんとは…私だつて…」(侍乙女)

「私は俊葵様から寵愛を受けていますから何とも思っていないません…ええ思っていないませんとも」(銀髪姉)

「兄さんの唇を奪うとは!」(銀髪妹)

「本音…羨ましい…。でも本音と同じ人が好きになれるなんて嬉しい」(戦隊モノ好きの少女)

「お姉さん…ちよつとだけ妬いちやうわ。でもこの胸の高鳴りは…何?」(生徒会長)

生徒たちが本音のはい、あくんに対して様々なコメントを残している事に気付いていない2人はそのまま食事を続けた。その日、俊葵と本音は2人で話し合う為に地下にある俊葵の自室へ向かった。

ちよつと外伝

俺は昨日戦った上級生に会うために普段は歩かない道を歩いていた。本当はあんなに酷い事をしたのだから会いに行くのが嫌で嫌でたまらない。しかもあの試合の事をみんなに言いふらされてでもしたら逃げ出してしまおうだろう。

「嫌ならあんな戦いはしなればよかったのよ」

案内を頼んだ楯無さんが横から話しかける

「うっ…」

言われなくても分かっているさ。いくら肉体を鍛えようが精神年齢までは鍛えられない。
い。

「だってみんなの事を馬鹿にしたんですよ？俺はそれを許せるほど大人じゃないです」
「大人じゃないって…あなた20歳でしょう？年下の私に敬語を使うのね」

確かに俺は楯無さんには敬語を使ってしまう。うくん…きつと小説を読んだ時が中

学生の時だったからだろう。それに楯無さんって…

「貫禄ありますからね楯無さん」

「それって私が老けているって事お？」

「大人っぽくて美人だって事です」

カア／／つと顔を赤らめて俯く楯無さん。可愛いなあ♡

「とても魅力的ですよ。おっと、到着したようですね」

なあ…居るよ…あの人たち。しかもコッチを見てヒソヒソ話してるみたいだし嫌だなあ

「ほら、お姉さんが付いてるからいつてらっしやい」

俺の方が年上なんだけどお…ま、いつか

「はあ…あのお、○○さん居ます？」

近くに座っていた上級生に聞くとすぐにその人たちのところへ行って俺のところへ行くように促したようだ。

「あ、あの…昨日は本当にすみませんでした。いくら腹が立っていたからと言ってあんな一方的な暴力は」

「謝らないでください。私たちも言い過ぎたと思ってるし…それに／／」

「それに？」

妙に顔を赤らめる4人…まさか!?

「そのお…彼女たちの事を本気で思いやる貴方の姿に憧れたと言いますか…惚れたと言いますか…キヤツ／＼／」

「あんなふうな男性から強い言葉で責め立てられるのは初めてで気持ち良かったとか…／＼／」

「俊葵様の言葉に酔いしれていたというか…／＼／」

「今度は言葉だけじゃなくて身体の方も…／＼／」

「……………」

俺と楯無さんは開いた口が塞がらず呆然と4人を見ている。

え、あ、ああ…アレね。イジメられる快樂を知ってしまったMに目覚めたのね。成る程…え!?ちよ、おかしくない!?ナンデ!?上級生ナンデ!?

「ですから私たちも俊葵様の役に立てればと話してましたの」

「どうか私たちを俊葵様の小間使いに!!」

「あ、ああ…でも今のところ掃除とか洗濯は自分でやってるし必要ないよ。気持ちだけもらっておくね」

「そんなご無体な!!」

「どうか!!」

《こいつ等は俊くんの為にどこまでできるかによるよねえ》

《確かに中途半端な覚悟なら迷惑この上ないわね》

ISのプライベートチャンネルで東と楯無さんが話しかける

《そうだよなあ…裏切られでもしたらとんでもない損害になりそうだし。まあ身体だけの関係も各かじやないよね、二ヒビ》

《ええく〜こいつらそんなに利用価値なんてないよ。たっちゃんみたいに諜報活動ができるわけでもないのにさ》

《でも色んな国にコネがあつた方が今後の活動はしやすいんじゃないか?》

《上辺だけの主従関係なら良いんじゃないかしら?いらなくなつたら捨てればいいじゃない。私たち更織家の手に掛ければ人の一人や二人、消すのなんて容易いわ》

さらつと酷い事を…でもそれだけ俺の事を思つての事なんだろうな。

《なら上辺だけの関係…って事でどうだ?捨てる時が来たらちやんと捨てるさ…悲しいけどこれ、現実なのよね。きつと一夏たちが聞いたら怒るよな》

《きつとまだ人間なのよ…》

《俊くんや私たちが人間じゃないみたいなの言ひ草だねたっちゃん》

《普通の人間は命を粗末にしたりしないわ。私たちとは…違うのよ…》

東、クロエ、楯無さんの三人は俺の為ならその辺の命なんて簡単に奪うだろう。そし

て俺もみんなの為なら…きつと強大な力を持ったから…かな。力を持つと人を虐げ、力が無いと人を羨み…寂しいな…。

《俺は力に溺れているだけかもしれない。……まあ、それは置いて返事するよ》

ちよつと長い相談を終えて彼女たちに向き直す

「勝手にしろ…ただし俺の迷惑になるような事だけはするなよ」

「…はい!!」

はあ…返事だけは良いんだから…。

俊葵はまだ知らない…この4人が後々とんでもない事をしでかすことを…つて書いてくれば盛り上がるって古事記にもそう書いてある。

3 2話 クラス内タッグマッチ

俺はのほほんさんがタッグマッチで使用する I S について千冬さんに質問をする為に職員室に来ていた。職員室内はクーラーが効いていても涼しいし女性しかいない： I S 学園は特殊な学校だし女性の教員しかいないのは当たり前か：。ん？でも用務員は男だったような：

「で、私に何の用だ？」

千冬さんの一言で現実へと戻される

「俺のパートナーがのほほ、じゃなくて本音に決まったのは知ってますよね？そのことで質問が一つ」

「パートナーの変更なら受け付けけないぞ？布仏のやつ、いつもはのほほんとしているが芯はしっかりとしている」

「そうじゃなくてですね、本音を使う I S の事です。訓練の時は貸し出し用の I S が借りれなかったので宇宙を貸していますが試合で専用機を使うのはどうかと思います」

てね」

特別な訓練を受けていないので本音の実力は一般生徒と同じくらい……だが使用する I S が専用機なのでそれなり以上の実力が出せる。

「強襲してくる相手が専用機持ちでないという保証はどこにもない。実戦の厳しさを生徒たちに教える為にもできる限り強い相手と戦った方が良い経験になるだろう」

「つて事は……」

「布仏の使用 I S は宇宙で構わない、訓練に励め」

「はい、じゃあ俺は戻ります」

職員室を出ての束のところへ行く。

宇宙は俺の物だが束が作ったものなので念のため、束にも連絡しないとな。

で、束のところに来たんだが……

「ふうくん、そのどこか抜けてる子に宇宙を貸すからカスタマイズをよろしく……つて言いたいわけだね」

「あ、ああ俺がしてやってもいいんだが束がやった方が確実だし完璧なものに仕上がるだろう？」

案の定とても不機嫌だ。のほほんさんは良い人だけど俺と関係性が強いかと言われたらそこまで強くない。束はどう答えるか……

「あの女は俊くんにとってどんな人？」

「一緒に居ると楽しくて癒してくれる存在。それに…」

「それに？」

「好き…かもしれない。のほほんさんは凄く可愛いと思うし守ってやりたいって思う」

「……………妬いちやうなあ。でも俊くんにとって大事な人なら私にとっても大事な人だよ。調べてみたところあの娘、簪ちゃんの専属メイドらしいね。そのうちクーちゃんと一緒にここで働いてもらおうかな」

良かった…：どうかOKしてくれたようだ。でものほほんさんに奉仕を期待するのは…

「ちゅ…ありがとう、束」

「キス以上の事は夜に…ね？」

「悪いが今夜はのほほんさんと作戦会議の予定なんだ。悪いけどまた今度な」

「偶にはこんな日があっても良いかな…ちえ…」

束には悪いけど今夜は本音と二人きりで作戦会議だ。さて昼ごはんも約束してるし行くかな。

食堂

「やったあ。これでマッチーのISに乗れるう〜」

当の本人は俺の苦勞を理解している様子は欠片もなく嬉しそうだ。のほほんさんの笑顔が見れたからまあいいか…

「喜ぶのは早いぞ、のほほんさん。宇宙が使えるようになったのは良い事だが訓練が必要な事に変わりはないからな？」

「はあい。あ、私の事は本音って呼んでほしいな／＼／」

「ん？どうしてだ？今まで通りののほほんさんで良いじゃないか」

「むう…乙女の気持ちは複雑なの」

顔が赤いし、心拍数も少しだけ上昇している。もしかして…

「分かったよ本音。これからもよろしくな」

「うん!!」

こうしてのほほん俊葵タッグは親睦を深めていった。…その陰では

「ぐう…簪に先を越されたから次は私たちの番だと思っていたのに…」

「私も同意見ですわ。次は私たちの番でしょうに」

「胸の奥がチクチクする…兄さんに対するこの気持ちは一体何なのだ…」

放課後

「SALINE05、コール!!」

両肩に無人機が使っていた分裂ミサイルをコールして俺に向けて全弾発射する。大量のミサイルが俺の後方から接近するが俺は慌てなければフレアも発射しない。静かに武装を全て拡張領域になおして身軽にし、回避に専念した。

迫りくるミサイルに対してロールや急停止を利用して回避する。流石は東の作ったミサイルだな…この程度の回避じゃあ全て避け切るのは無理だな。くっ…グレネード、コール!!

焼夷榴弾を装填したグレネードを呼び出してミサイル群の中心に打ち込んで残りのミサイルもほとんど撃ち落とす。残ったミサイルも焼夷榴弾から生じた熱に惹かれてミサイル同士で衝突して爆発する。全て撃ち落としたので下で待っている本音の元へ帰る。

「あああ、全部撃ち落とされちゃった」

「ビットの使用を制限してたから苦労した。本来ならもつと簡単に撃ち落とせたよ」

この訓練では本音の射撃と俺の回避を同時に訓練している。本音にはミサイルの他にも武器の使用は許可しているのに使わなかったところを見るとまだ少しだけ遠慮しているんだろう。

「まだまだマッachieには追い付けそうもないねえ」

「そう簡単に追いつかれてたまるかってんだ。さあ、次はミサイルだけじゃなくて他の武装も使って俺を追い立ててくれ」

「うん!!」

その後、圧倒的弾幕の張り方を覚えた本音の猛攻を意地と根性で避け切った。本音は武器の特性とその状況に合った武器選択をある程度は理解してくれたと思う…と言うかそうでないと困る。試合まであと6日なので少しでも実践訓練をしたい。

「状況に応じた武器選択は学べたか？」

「うん…ん? どうだろう私、感覚でIS使ってるからなあ」

……………(; 旦、)

「えへへえ」

……………(; 旦、)

「まあ…いいさ…明日も頑張ろうな」

「はあ〜〜い」

ふう…この調子で勝てるだろうか…不安だ

その夜

どうしてこうなった

「んう〜マツチー良い匂お〜い」

俺は本音の部屋の本音のベッドの上で全裸にひん剥かれ抱き着かれています。普段から裸で寝ているのだが女性が隣にいるのに裸と言うのもなあ…と思いパンツは着いたのだが…解せぬ。本音と簪のとても良い香りが充満するこの部屋で柔らかくて大きな胸を押し付けられると嫌でも反応してしまう。うう…我慢じゃ…我慢するのじゃ…。「えへへえ〜マッチー大好きい〜」

我慢………出来るかあ!!こんなもん我慢できる奴は不能かゲイのお方だけだぞ!!

「んう…ちよ、ちよつと苦しいよう…それに」

「簪より先だと罪悪感があるか? 残念ながら簪とは既に俺と寝たぞ…だから今夜の俺の夜食は本音さ」

「じゃあ…お願い／＼／＼」

「任せろ」

そう言つて本音のベッドで俺たちは愛し合った…

この夜の事を知った箒やセシリアは俊葵に告白するのを決意したという。ん? なんてバレたかつて? この学園のシステムを握っているのは束だぞ? ……な?

次の日

「なあ本音、一つだけ分からない事があるんだけどなんで俺の事が好きなんだ?」

本音の心を読めば済む話なのだが失礼だと感じたので直接聞く事にした。

「う〜んとね、よく分からないの。ただ、マツチーが他の女の子と話したりしていると胸の奥がチクチクするんだ…それにマツチーの傍に居ると楽しいの。えへへ」

「ありがとう…俺を好きになっけてくれて。ちゅっ」

「えへへ〜。ぎゅう〜」

お互いの気持ちちを再度確かめて熱いハグをして登校をした。その際に俺が本音の部屋にいる事を知らなかった筈とセシリアに問い詰められたのは言うまでもない。

放課後

今日も俺と本音はISでの射撃訓練をしていた。飲み込みが早いのか勘が鋭いのか既に射撃が上達してきていた。いや…射撃というか、弾を単にばら撒くだけと言うか…まあ、的には当たっているし問題は無いんだけどね。

「それそれそれおれ!!」

AA-12ベースのフルオートショットガンを両手に構えて的を打ち抜いていく本音。屈託のない満面の笑みで的をバラバラにしていく少女…う〜む…ある種ホラーだな

暫く撃ち続けているとブザーが鳴って訓練終了を知らせる。拡張領域に武器をなおすところに戻ってきた。

「うむ…まあ半人前くらいには上達したな」

「ええええ。的は全部打ち抜いたよう？」

「そういう問題じゃあないよ。的は打ち抜けばいいってもんじゃないんだ。避けにくい部位を狙わないと命中しないさ。だから今度は人型の的を使ってみようか…勿論、武器はスナイパーライフル…050ANSRを出して開始しろ。俺も手伝うから」

本音にライフルを出させて俺は後ろから抱き着くような感じで一緒にライフルを構える。

「俊くんのえっちい〜」

「狙撃に集中しろ。左足を前にして右頬にライフルを当てスコープを覗く…左手でしっかりと支えて…狙いを定めて引き金を引く」

バアン!!

「おお〜当たったあ〜!!すごおい!!」

「喜ぶのは早いぞ。今度は一人でやってみろ…きつとできるさ」

バアン!!

撃った弾は的の頭付近を少しだけ掠った。射撃用の制御アプリをインストールしている

のに外すのは論外だが本音にしては成長した方だ。

「次はもつとゆつくりと引き金を引いてみようか」

「うん……ふう……」

息を吐いてから止めて集中する本音

バアン!!

見事に的の頭を打ち抜く本音

「おお……!!」

しかし偶然だったのかマガジン内の弾をすべて打ち尽くしたが結局、当たったのは最初に二発だけで残りはすべて当たらなかった

「もつと訓練が必要だな……」

タッグ戦まで残り時間が限られている中で本音をどのように鍛えようか本気で考える、めんどくさがり屋の姿がアーリーナにあった。

33話 R-18 のほほんさんに添い寝してもらえるならなんでもできる

「えへへ、こうして二人つきりになるのは初めてだね」

「だってアリーナや食堂には他の生徒もいたからこれが初めてだよ」

「あつたかぬくぬくう。マツチーの身体は良い匂いがするね、すごく安心する匂いだよ」

「ええうちよつとだけだから…ね？それにマツチーだって本気で嫌がつてる訳でもないでしょ。ほおら、私おっぱいには自信があるんだあ。やわらかいでしょ」

「こんな事は誰にもしないよう。かんちゃんやお姉ちゃんにだってこんな事しない…」

マッチーの事が好きだからしているんだあ」

「ん…もう苦しいよ」

「離れたくないのは私も同じだよ。ふふ…嬉しいなあ。でも苦しいのは嫌だから優しく…ね」

「んふう…マッチーに包まれていると安心するう。…もう、お尻は掴んじや…ひやう!!もう…触るなら優しく揉んでよう…」

「謝らないで…嫌よ嫌よも好きの内って言うでしょ? マッチーにされる事で嫌な事なんてない…だから…んう、そうだよ。もつと…」

「え? エツチな子だつて? 酷い…でもマッチーに好かれるならエツチな子でもいいかなあ…」

「私だつてエツチな本くらい読んだことあるよ? だから色んなこと知ってるんだあ」

「もう…これでも私の職業はメイドだよ？夜伽とか性奴隷とか肉便器くらいなら知ってるう」

「えへへ、私つて本当にエッチな子で…あつ♡」

「マッチーばかり触つてズルい…私も触るんだからあ。ん…ん…どう…かな？」

「でしょ？体温高いからこうやってぎゅうぐつてされながらおちんちんを…」

「え？言わなきやダメ？」

「やっぱりマッチーの方がエッチだよ…言えばいいんでしょう、もうう…お、おちんちんを摩ると気持ち良いでしょ…恥ずかしい」

「今更だどう…むう、乙女心は複雑なの」

「んしよ、んしよ…おつきいなあ…男の子ってみんなこのくらい大きいの?」

「へえ〜マッチーのが大きいだけなんだ。大きい方が良いの?」

「小さいと男じゃない?…ってそれは言い過ぎだよ。それじゃあ世界は女の子ばかりになっちゃうよ」

「そんなに心配しなくて大きくなって小さくてもマッチーのおちんぼなら大好きだよ。だから…私の手で気持ち良くなってるね」

「ああ、こらあく匂いかぐなあ〜♡んう…首…舐めちゃ、ひゃあ♡」

「んう…♡はあん…気持ち…良いよう♡」

「え?名前前で呼んでほしい?」

「エッチの時くらいは名前で…って…と、俊くん／＼わあ〜!! 恥ずかしいよう／

／／

「だってえ…マツチーの名前を呼ぶだけでキュンってなっちゃうんだもん…／／／」

「それなら尚更？…い…くん…」

「うう…意地悪だよ。大きい声で言えばいいんでしょ…。もう……くんに…俊くん
にいつぱいえっちい事して欲しいの!!私の初めてを奪って俊くんだけの女にして欲
しいの!!」

「恥ずかしい…んう!?ちゅ、ちゅう……んじゅ、じゅ…ぷはあ♥」

「嬉しいよ…だって好きな男の人にキスされたんだもん。今度は私からするね…ちゅ…
ん、えろ…んふ♥」

「美味しい?本当にい?じゃあもつとキスしてあげるう。ああゝむ…ちゅ、ちゅる…♥」

「ぷはあ…ココ、すつごく大きいよう♥熱くってドクドク脈打ってる…」

「キスするたびにビクビクしてるね…俊くんのお・ち・ん・ぽ。ちゆる、ちゆ…ん、じゅちゆ♥私に身体を委ねて…出したくなったら好きな時に出していいよ」

「舌…出して。あむ…ちゆ、えろ…レロ♥えへへ、そんなに気持ち良いのお？んしよ、んしよ…ちよつと強く擦るね♥」

「もう…出すんだったら飲ませてよう♥ああくん…じゆる、じゆる♥れろ…ん、ん…らひて。へんぶらひてえ…ちゆ、じゅりゅ♥」

「んぶつ!?!んぶつ!!けほつ…けほつ…出し過ぎい♥」

「あ、待って、拭かないで。ちゃんと全部舐めとるから…ペろ、ペろん♥むう…苦い(＋＋)」

「で、出来るもん!!凄い量…でも飲めるんだから…んく、んく…ふう♥まだこんなに

……ええい!! 一気に!! ぐくぐく…ソフツ!!」

「ごめんね…男の人って飲んでほしいんじゃないの?」

「気遣わせちゃったかなあ…」

「そんなこと言って…別に私なんかに気を遣わなくたって…きや!!いきなり足を掴むのは禁s」

「うん…初めてだから最初は優しく…あう…ん、痛…いよ。でもすぐ温かい…俊くんのおちんぼが私の膣内にじゅっぷり入ってる」

「うん…分かってる♥ぎゅ…動いていいよ」

「んっ…凄いやう♥ゆっくり動いてくれるのにい…蕩けちゃう♥」

「あつ、あつ♥凄いやう…かんちゃんもお嬢様もこんなに気持ち良い事をしてたんだ／／／」

「動いて…奥にコツンコツンって当たってるのが分かる♥あうう…あ、あ、そんなに優しくなくてもお♥」

「俊くんは優しすぎるよお／／私の事は気にせずに気持ち良くなって♥」

「んっ…俊くんが気持ち良いなら私も気持ち良いから♥あつ、あつ、だいぶ慣れてきたよ…セックスってこんなに気持ち良いんだね♥」

「うん…ぎゆう…ふう、こうすると俊くんの匂いがして…もう♥」

「これはすぐに逝っちゃう♥俊くんも気持ち良さそうで嬉しい♥」

「ええ…声は…んっ、まだ恥ずかしい／／」

「ひゃうっ!?やめっ…あつ♥」

「あんっ ♥ 奥…当たって／／んんっ、もう…だめ ♥」

「出そう？ うん…出してッ ♥ 膣内でいいから!! 俊くんに出してほしいの!!」

「うん ♥ 私もイキそう…一緒に、一緒にイこう ♥」

「イ…つくう!!」

「出てりゅ ♥ 私の子宮に流れ込んでくるよう ♥」

「あ…まだ抜かないで／／」

「うん…このまま眠りたい ♥ 温かいよ…俊くん愛を受け止めることができたんだね／／

／

「おやすみ…ぎゅっ ♥ 愛してる…／／／」

34話

タッグ戦を間近に控えて忙しいのは分かっているが休みが無いと身体は持たないし、気も滅入るので今日は訓練を休んで本音とデートをしている。最近では本音に付きっ切りなので束たちに夜のお誘いを受けたりもしたがタッグ戦以降に皆で激しい夜を過ごそうと言ったら快く俺たちをデートへ送り出してくれた。デートと言っても簪とクレープを食べたアレをカウントするなら二回目、しないなら初回と言うのもあつて俺はかなり緊張している。セックスの時はあまり緊張しなかったのにデートで緊張する俺って…情けねえ

「マッチーとデート♪マッチーとデート♪」

俺と腕を組んで歩いている本音は俺の心情なんかお構いなしに豊満なおっぱいをぐいぐいと押し付けてくる。嬉しくないわけじゃないがやはり気恥ずかしいと思う…でもやっぱり周りの男たちが俺の事を羨ましそうに振り返るのは気分が良い。彼女持ちの男も本音と俺を見るので彼女さんに怒られてる…どや？羨ましがる？

「そんなに嬉しいのか？」

「うん!!嬉しいよう。だって好きな人と二人きりでデートだよ?嬉しくないわけないよお」

満面の笑みでこちらを見上げる本音。本音に限った事ではないけどみんなの笑顔を見てみると俺も幸せになれる。

「喜んでもらえたなら俺も嬉しいよ。で、どこに行こうか?実はデートプランは全く考えてないんだ。何か欲しい物とかがあれば買いに行くか。本当に何でも買ってやれるぞ。中国での任務で貰った報酬が大量に余ってるんだ。具体的に100億円程……」

本当は『俊くんが頑張って稼いだお金だから全部俊くんの物だよ?』と言われたのだが、どうせまたA Fが出現したら俺が倒さなきゃいけないし、その際に報酬をがっばり搾り取るつもりなので400億を渡して研究費に当ててもらっている。正直、100億でも多いと思っっているのだが束とクロエに押し切られてもらう事となった。鈴に報酬の話をしたら既に自分で稼いでいるらしいのでいらぬそうだ。代表候補生と言うだけで国から資金が出るらしい。ので今の俺の手元には100億ちよつとの大金がある。本音の為なら何でも買ってやりたいと思う。

「う〜ん…じゃあマッチャーが欲しい」

「非売品です」

「ぶうくく!! 即答お!」

考えた答えが俺かよ……もつと他にも良いものがあるだろうに。

「悪いけど俺は皆の共有財産なんだよ。宝石とかバッグとかブランド物には興味ないのか?」

「興味ない。前に親族とか更織家に近づきたい人から貰ったりしたんだけど使い勝手が悪いのが多いからいらないの。宝石も学校じゃ身に着けられないから必要ないかなあ」

「なら欲しい物とかはないのか? あ、勿論俺以外でな」

また俺と答えられると無限ループしそうなのでくぎを打っておく

「じゃあそうだなあ……お菓子、お菓子が欲しいな。マッチー手作りの」

「買うのならともかく手作りだとあんましお金が掛からないぞ?」

値段Ⅱ思いとは言いたくないが本音の事が好きなのできちんとした物を送りたい。なので手作りはちよつと……

「値段じゃないの。気持ちだよ……マッチーと二人きりでマッチー手作りのお菓子を食べたいの」

「お菓子だけじゃなくて本音も食べちゃうぞ?」

「良いよ……食べてほしいな……えへへ／／／」

自分で言っておいて恥ずかしくなったのか頬をポリポリと搔いている

「分かったよ。んじゃあ今度、一緒に作ろうな」

「うん!!」

元気のいい返事と同時に本音はより一層、腕に力を入れて俺に密着して豊満なそのおっぱいをグイグイと押し付けてくる。良くも悪くも束やクロエは目立ってしまうので女子と二人で休日デートなんて出来なかった俺はこういった行為に免疫が無くてどうも照れてしまうな……

本音からはお菓子のような甘い香りがする。多分、使っているシャンプーやボディソープの香りだろう。すごくいい匂いなので意識してしまう。頭一つ分くらい本音が小さいので本音の方を向くと俺の腕に当たって形を変え、谷間が協調されたバストへ視線が行ってしまう。ずっと見ていると本音がこちらを見上げる。バレテラ

「私はマッシー専用だからね」

ニパーと笑顔でこんな事を言われてカー／＼と俺の顔が赤くなるのが分かる。久しく忘れていたけど墮ちる感覚ってこうだったな。胸の奥が熱くなり背筋に寒気とも言えない気持ち良いゾクゾクとしたナニかが駆け抜ける。

「えへへえ。じゃあまずは映画を見に行こお。見たい映画があるんだあ。外国の映画なんだけど巨大口ポットが出てきてカイジューと戦うヤツ」

この後、俺は本音と映画を見て食事をした。特に予約をしていなかったが、休日にも関わらず待たずには入れたのは運が良かった。女子とのデートに焼き肉食べ放題はどうかと思っただが本音のお腹は肉の気分だったらしく満面の笑みでお肉にかぶりついていた。そして俺は店側に大損害を与えて伝説になったとかなってないとか…出禁になってたらどうしよう…。

本音とのデートはまずまずの結果かな…俺も本音も楽しめたが基本的に俺の趣味に付き合わせたようなもんだしなあ。本音は楽しかったと言ってくれたが本当に楽しめたのかは分からない…でも本音の笑顔を見ると…

「俺は幸せ者だな…ふふ」

「どうかしたの?」

俺がいきなり笑ったのでシャルが不思議がって俺の顔を覗き込む。俺は今、デートから帰って来て寮の部屋に戻っている。何度もこの部屋は空けて地下の方へ行っていたので久し振りって感じた。

「いやあ、良い女を恋人にできる俺は幸せ者だなあつてさ」

「何人も恋人がいるとそのうち刺されちゃうよ?」

「挿しているのは俺だけだな」

「ん？何を刺すの？ナイフってことは無いでしょ」

あ、シャルルって女だからこの下ネタは通じなかったか…きつと束や楯無さんなら気付いたんだろうけど…

「ちんこだよ（真顔）」

「ち、ちち、ちん!? / / 何を言ってるのさ!! もう!!」

ポツ!!

と音がしそうな程、真つ赤になって文句を言うシャルル。うん、可愛い。

「ははは、まるで女の子みたいな反応だな」

「え？あ、ああ…それは…」

「良いところ育ちの貴公子には下品すぎたか。すまん、俺が不謹慎だったな。……寝て忘れよう、俺はもう寝るから電気けすな。おやすみ」

俺は服を全部脱いで布団に入ると抱き枕にタオルケットを巻いて等身大の抱き枕を作る。そしてそれに抱き着いて眠りにつく…と見せかけてシャルルを監視する。超能力を使いシャルルの目と耳を俺のとリンクさせ、監視スタート

「もう寝た…よね。うん……良いところ育ち…かあ。そんなに良い物じゃあないよ…僕の立場は…。はあ……まあ、今はそれどころじゃないか」

シャルルはしばらく寝たふりをして俺が寝たのを確認するとシャルルは俺のPCに

何か端末を取り付けて操作する。するとパスワードが解けて俺のパソコンのデスクトップが現れ、『IS 実験 データ』というファイルがシャルルが開く。

「これだね…凄いいスペック…：普段の訓練じゃ手加減してたんだ。こんな化物みたいな機体に乗れるなんて…ISもそうだけど俊葵も大概人間じゃないかも」

一通り宇宙の実験データを見終えたと今度は『IS 武装 データ』を開く。あ、それは…まあ、コピーされなければ問題はないから見せてもいいかな。

「うそ…でしょ…なにこのオーバードウエポンってやつ…対無人IS戦闘でのデータがあるけどシールドエネルギーを一瞬で削り切って本体を粉々にしてる。それにこっちのミサイルやピットなんかも誘導性や携行性が高い物ばかり…どうりで俊葵が強いわけだよ。ん？こっちのファイルはなんだろ？マル秘映像？…もしかして実験の映像とか…一応、開いてみよう」

げえ!?そのファイルは俺と束やクロエとのハメ撮りファイル：見られると俺の性癖がシャルルにバレる!!急いで止めなくては!!

「動くな…」

枕の下に隠してあるM500をシャルルに向けて脅す。

「ヒィ!!」

俺が急に話しかけたので驚いたようだ。パソコンをボタンと閉じると恐る恐るこち

らを振り向いた。今のシャルルはさらしを巻いていないので美巨乳…しかもノーブラで乳首が少し浮かんでいるのが分かる…うくん、マンダム。

しかしこんなに早くシャルルがスパイ活動をするなんて…きつとデュノア社の方から命令があつたんだらう。

「俺のパソコンに変な端末を付けて…まあ大体何をしてたかくらいは察せるよ。データだらう？」

「ごめんね…ううん、謝つても許されないことを僕はしたんだ。ハハ…」

シャルルが男装して学園に入学した理由は分かっているが聞いておこう。だってできる限り原作通りに事を進めたいからな。

「ふう…長くなりそうだしお茶を淹れよう。紅茶で良いか？」

暗い空気で話をしたくはないので気分転換にお茶を淹れる。お茶菓子も用意してベッドに腰かけてシャルルの話を聞く。

「まずはなんで男の格好なんかしてたんだ？俺や一夏に近づくなら女の方が誘惑しやすいだらう」

「うん…まあ…会社の方からの命令だね。僕に父がデュノア社の社長なんだ。直接の命令だし従う他なかった…」

やっぱりシャルルにとつてこの話は辛い物なんだな…いつも笑顔のシャルルの顔か

ら笑顔が消え去ってる。

「命令って言ったって親なんだろ？なんだってそんなひどい事が……」

確か一夏も原作でこんな事を言っていたな。ここは出来る限り原作に準拠しよう。

「僕は愛人との間に生まれた子供なんだ……。本家に引き取られたのは今から2年前くらいだったかな。母さんが死んだのと同時に会社の人がうちに来て僕は連れていかれた。健康診断やDNA鑑定をしていると僕のIS適性が高いことが分かったんだ……それでなし崩しにテストパイロットさ。でもそのおかげで初めて父に会えた……たった2回だけど……会話も数回程度。ああ……本宅に呼ばれた時は酷かったな……本妻に会った時なんだけど『泥棒猫の娘の分際でこの家に入るな!!』って言われて殴られたよ。母さんもそういつた話をしてくれてたら心構えくらいはできたのにね、あはは……」

アレ？シャルルの立場や過去の事は知っているのに腹が立ってきたぞ。……ふう落ちつけ俺。俺はこの後シャルルを助けるんだ。怒りに我を忘れるな。

「それから少し時間がたってデュノア社は経営難に陥った。理由は簡単……国からの支援が無くなったからなんだ。いつになっても新しいものを生み出せない政府はデュノア社を見限って台頭してきていた他の企業に資金援助をしだした……」

「大手企業も裏を返せば政府の支援あつてのものか……脆いものだな」

「はは……言い返す言葉もないよ……まあ、その経営難もあつて僕は広告塔として丁度いい

し男性パイロットとして一夏のデータを盗んで来いって言われたの。転校当初は一夏の他にも男性パイロットがいたなんて報告になかったけど同じ部屋になれたし丁度いいから二人から盗めとも命令を受けたよ……」

「なん……だよそれ……」

「……ふう。全部話したら楽になったよ……こんな話聞いてくれてありがとう」

シャルルの目から大粒の涙が垂れる。顔は笑っているが辛いんだろう……当たり前だ。弱冠十数歳の女の子が右も左も分からない国でいつバレるとも分からないスパイ行為をするストレスなんて考えたくもない。

「僕はもうお終いかな……」

「なんでだよ？会社だって男性パイロットって偽装して送り出した罪があるだろう」

「会社は僕を切り捨てるよ……だって腐っても大手企業。人間の生き死になんて自由にする……良くて祖国で刑務所暮らし……悪くて暗殺されちゃうかもね、僕」

「シャルルはそれで良いのか？」

俺も一夏と同じ質問をぶつける。こればかりは俺から動くのではなくてシャルル自身に決めさせたい。

「どうもこうもないよ……僕みたいな小娘」

「俺はそんな現実的な話をしてるんじゃない。シャルルはどうしたいか訊いているん

だ」

「もう……いい加減にしてよ!!何!?なんなの!?僕が助けてって言ったら助けてくれる

の!?ふざけないで!!」

「助けるよ」

「嘘だツ!!そんな都合の良い話信じられないよ……僕を助けて俊葵に何かメリットがあるの!?」

ふう……信じてもらえないか。そりやそうだよな……でもちよつとシヨック

「無い……でも助けたいんだ」

「理由もメリットも無しに助ける!?冗談なら僕が傷つくだけだよ!!もしそれが本当ならその銃で自分を撃つてよ!!」

「分かった……どこだ?腕か?それとも足?まあ、どこでもいいけどね……」

俺は銃口を右の二の腕に押し当てて発砲する。もちろん音が響くといけないので境界を張つてからだだが。

「キャツ……う、嘘……」

「まだ信じられないか?それなら……」

次は太ももに銃口を向けて発砲する。特別な弾丸を使用しているので二の腕と太ももの肉が弾けて骨が見えている。うう……痛覚をカットしているとはいえかなり痛々し

い……。

「もう止めて!! 信じるから!! ……どうしてこんな事を…」

「シャルルに信じてほしかったからさ」

シャルルは俺に抱き着いて泣いている。シャルルにそんな顔をされると俺も悲しいぜ……

「うう……どうして……どうして僕の為にこんな……」

「抱き着いてないで傷口を見ろよ。もう治り始まつてる……俺はこんな体だし親と呼べる存在もない」

んだ。だから少しでもシャルルと父さんの間を取り持てたらなアつてさ」

傷口は既に筋繊維が繋がりはじめ、骨は見えなくなっている。

「すごい……それより僕と父さんの仲を？」

「ああ、自分の娘が嫌いな親はいない。俺がそれを証明して見せる」

「でも父さんは僕の事を道具としか見てない……それに助けるって言つたつてどうするの？ もしも無理なら僕の居場所は……」

「ならここに居ろ」

「え？ で、でも……」

「IS 学園はこの国、企業からも干渉されない……つまりは少なくとも卒業まで時間が

ある。その間に俺が何とかしてやる。そして俺がお前の傍に居てやるよ」
「本当に？」

不安げに俺を見上げる。その目には今までは見られなかった希望を力が少しだが宿っていた。

「本当だ……ここに居ろ。それに俺の目的はお前の身体だから……フランスに帰られると襲えなくなる（ニヤリ）」

俺はシャルルの両肩を抑えてベッドへ押し倒す。叫ばれたら厄介なのでM500を突き付けて大人しくさせる。

「キャ……うう……信じていたのに……」

「男性パイロットの恋人になれば本社からもVIP待遇だろうさ。もつと喜んだらどうだ？」

「俊葵は……僕の事が好き……なの？」

好きに決まってるじゃろがい!!いや、好きなんてもんじゃあない!!愛しているんだ!!
「嫌いな女を襲う訳ないだろうが……嫌なら抜け出してもいいぞ。まあ、力づくで犯すから関係ないけどね」

ハア……ハア……シャルルたその白い肌……じゅるり

「レイプする人は相手の事を気遣ったりしないよ。でも襲いたいならどうぞ……刑務所

で不細工で気持ち悪い看守に純血を奪われるくらいなら……。でも俊葵にはクロエが……」

「……………くくく…ふひひ…アーツハツハツハ。演技だよ、え・ん・ぎ。でも俺がシャルルの事を好きだつて事は嘘じゃあないぜ。でもよう、そんなマジな顔しちやってさあ。ちよつと笑わせようとしただけだよ」

「え？ええ！？酷いよお…僕は本気で犯されると思っていたのに……でも俊葵つて本当に優しいんだね。……改めてお願いするよ、僕を助けてください」

「任せろ…と、いう訳で役立ちそうな人を呼ぶ。信頼のおける人だから男装しなくても大丈夫だ」

俺は取り敢えず服を着て携帯端末を取り出して、束と楯無を呼び出す。まだ深夜前なのですぐに来るだろう。さて……二人をどうやって説得しようかな…面倒だ…。

コンコン

こんな時間に誰だ？…つて俺が呼んだんだから来るのは当たり前か

「来たみたいだ。入っていいぞお、鍵は開いてるから」

「誰を呼んだの？」

「この世で最も味方にしたい人で敵に回したくない人…かな」

シャルルに説明しているうちに扉を開けて束と楯無が入ってくる。楯無はともかく束を見たシャルルは驚いて目と口を大きく開けて啞然とした。まあそうだろうよ。

「で、助けたいのソレ?」

「やつぱり女の子だったんだ。何もしていなかったから見逃していたけど…その様子だと手を出したようね」

2人してシャルルを睨みつけるなよ。すごく怖がつてるじゃあないか…てかソレって…いくら俺のデータに手を出したとはいえ酷いな。

「シャルルを怖がらすな。自分の意思でこんな事をやったわけじゃないんだよ。被害は出てないし…それに…」

「それに…なに? 俊くんのデータに手を出したソレを私が許すとも思ってるの?」

お怒りのようで…

「二人つてのは、さ…凄く嫌なんだよ。…今のシャルルは誰も頼れる人がいなくて…怖くて、寂しくて、辛くてさ…一人は凄く寂しいんだよ。だから俺はシャルルを助けてやりたいんだ。…ダメ…か?」

「シャルルちゃんが俊くんの厚意を裏切る可能性だってあるわ」

「シャルルはそんなことしない!!」

「根拠はあるの?」

言うべきか……ここで俺がシャルルの心を読んだ、と嘘をつけば二人とも信じるだろう。でもシャルルに超能力のことを教えるのは……あ、超回復を見せたんだった……それに俺のモノにするつもりだし別に良いか。

「シャルルの心を読んだ。俺たちを裏切るつもりは微塵もないよ。だからシャルルを助けるのを手伝ってくれないか？」

「ふうん……でも私は止めておくわ、俊くんには悪いけどね。シャルルちゃんの事が嫌いつて訳じゃあないのよ？むしろ可愛いし好きの部類ね……でも、わざわざ私が動くほどの案件でもないだろうし。じゃあ私は部屋に戻って寝るわ。寝不足は美容の天敵だし、おやすみい〜」

そう言うのと楯無は出てつてしまふ。ああ〜貴重な諜報活動員があ〜。こうなったら束にだけでも手伝って貰わなくては!!

「私は……手伝ってもいいよ」

「ほ、本当か!？」

「うん……一人の寂しさは私もすごく知ってるし、親とのいざこざとかも私は辛かったから。でも一つ質問があるよ金髪フランス娘」

ソレは金髪フランス娘に進化した▼

「き、きんぱ……な、なんですか？」

「君は俊くんの女になるかい?」

ドストレートと真ん中。変化球ではない直球。さて、この質問にどう答える!? シャルル!?

「僕は俊葵に『俺が傍に居てやる』って言われた時にすごく嬉しかった。僕って単純な女だなあ…ちよつと優しくされただけで堕ちちゃった。…はい、僕は俊葵の女になります」

「裏切らない?」

「束博士を裏切るほど僕は馬鹿じゃありません」

「なら今すぐ俊くんとキスして見せて。そしたら信じてあげてもいい」

「え!?!いい、今ですか!?!」

おいおい…俺は嬉しいけどシャルルは…やつぱり震えている。でも俺はそんなシャルルも大好きだ!!よし、チャンスは逃すかよ…襲う!!

「んむう!?!んう…んちゅ…ちゅ♡ん、ん、んちゅううくく♡…ぷはあ。いきなりだなんて…初めてだったのに…」

「これから何度もするんだしいいじゃないか。それに俺の事が好きなら受け入れろ」

「うん…好き♡浅ましい女だって思う?」

いきなりキスをされたにも関わらず俺を受け入れてくれる。シャルル…俺はお前の

事を好きでよかったよ。肝心の束も俺たちの熱いキスを見てスイッチが入ったらしい。

「シャルルちゃんは浅ましくなんかなくお。俊くんに惚れるのは自然の摂理…だから当たり前前の事なの。俊くんの好きな人に悪い人はいない、つまりシャルルちゃんは良い人、ので私はシャルルちゃんを助けます!!」

「良かった…助かるよ。なあシャルル、もしも一夏が俺みたいにお前を助けるって持ち掛けたら一夏に惚れていたか？」

「多分、好きになってた。でも告白はしれないと思う…だって一夏の恋人は2組の鈴さんでしょ。でも今となっては関係のない事だよ、だって僕はもう俊葵の女なんだから／＼」

はあ…：…こんなに嬉しい事は無い。あのシャルルが!!あの天使シャルルが!!俺の事を好きだなんて…うう…泣けてきた

「どうしたの俊くん!?もしかしてどこか痛いの!？」

「うん、さっきシャルルに俺の事を信じて貰う為に腕と足を撃つたんだ。皮膚は完全に治ったみたいなんだけど筋肉がまだ少し裂けているみたいで…」

ここは誤魔化そう…シャルルと結ばれたことに感激したなんて言ったら束がどんな態度になるか火を見るよりも明らかだ。表面上は祝福してくれるだろうけど内心は何を思うか…。

「もう、無理しちゃダメ……って言っても無茶するのが俊くんただけどね。というわけでシャルルちゃん、この束さんと俊くんが君を助けてあげるからもう安心だよ。フランス政府に対して脅しをかけるならちようどいい素材もあるし……ぬふふ」

確かに国の大企業を相手にするならまずは政府を黙らせなきゃいけないが……悪い顔をし過ぎだぞ東エ。

「じゃあ私はデュノア社の陰の部分を探してくるよ。シャルルちゃん……君は絶対に助ける。松崎ハーレム成就の為に!!とおおおお!!」

ズドドドドと土煙を立てながら部屋を飛び出して地下室へ戻る束。結局束に頼りつきりかあ……少しは手伝えることがあったらいいんだが……。

「ありがとう俊葵。なんてお礼を言っただけ……」

「シャルルの笑顔だけで十分……と言いたるところだけど……ちゆ。これ以上の事はまた今度な」

「うん……おやすみ俊葵」

「ああ、おやすみ」

そうして俺たちは軽いキスを交わすとベッドへと戻った。

……ああ、俺全裸のままじゃん（／ω＼）

35話 試合開始

「狙い撃つ!!」

俺は目の前にいる2機のラファールの弾幕を掻い潜り、接敵して顔面にGNライフルをぶち込んでシールドエネルギーを削り取る。

「くっ…後ろに行つたわ!!」

「ミサイル!!コール!!」

「余所見はあ…だあめだよ」

同時に後ろを向いた二人に対して3門の大型ガトリングとショットグレネードが火を噴く。束に弾をばら撒くような武装が欲しいと言つたらこんな化物兵器を作りやがつた…使い手である俺の事も考えてくれよ(ニヤリ)ガトリングは当てるというよりも『とりあえず弾を撒き散らす』といったもので本音でもうまく使えているようだ。訓練のお陰だな、反動でブレブレの射線だがしっかりと敵は補足できている。ショットグレネードも敵に向けて撃てば牽制程度にはなる…のだが爆風の衝撃が高いので主兵装

以上の火力が普通に出せるんだよなあ…

「いやああああああ!!」

「うわらばああああああ!!」

「サヨナラ!!」

どっかーん!!

バクハツシサン!!

『試合終了!!勝者、俊葵・本音ペア!!』

試合終了のアナウンスと共に俺と本音はピットへ戻る。俺たちは今、クラス内タッグ戦の最中なのだ。優勝者にはご褒美があるのかなんとか。そのせいでみんな目をぎらつかせて勝負に挑んでくる。しかし代表候補生がいるペアや俺たちに勝てるわけもなく、現在残っているペアは俺・本音ペア、一夏・シャルルペア、箒・セシリアペア、ラウラ・相川ペア、そしてクロエ・夜竹ペアだけとなっていた。

相川さんはたしかハンド部に所属している活発な女の子だ。元々は俺かクロエとペアを組もうとしていたラウラがったが代表候補生や専用気持ち同士が組むとパワーバランスが壊れるとのことだったので辞退して一人になっていたところに相川さんが声を掛けてペアになったそうだ。なかなか友達を作れなかったラウラにとってクラスに馴染むための第一歩だな。本音は専用機使ってるって?……イメージしてみろ、本音

がラファールに搭乗して一発も当てられずに試合終了する姿を…。見るに堪えないだろう？だからせめて性能の良い機体に乗せてあげたいんだ。というか訓練中にずっと宇宙に乗っていたのでいきなり打鉄やラファールに適応できないと思ったからつてもある。千冬さんも許可してくれたし問題はないだろう。

ちなみにクロエは元々仲の良かった夜竹さんと組んだ。夜竹さんはとても華奢な体格でラウラやクロエよりも細く、俺好みの体型をしている…。じゆるり。そのうち俺のモノにできたらなあ…。なんて考えているのは本人にも束たちにも秘密。実家は名の有る大地主で部屋着や寝間着は浴衣が多いとか。長く伸びた黒髪にすべてを吸い込みそうな黒い瞳…。そして寡黙で瀟洒な性格。箒とはまた違った意味での大和撫子…。はあ…。彼女を見ていると自然とため息がこぼれてしまう程…。とまあとても可愛い女の子だ、うん。彼女の素晴らしさを語るには俺の語彙力では足りなすぎる。勿論、束よりも好きとは言っていない。ただ大和撫子と評するに値する女史という事だ。

シャルルを助けると宣言してからはタッグ戦の事も有りかなり疲れた…。と言うか現在進行形で疲れている。しかもそんな中で試合をしなくちゃいけないのもうクタクタだよ…。でもまあ、シャルルを助けることができたし万々歳かな。シャルルを助ける

算段はついていたので本音との訓練もあつたがとあるオペレーションを執行して解決した。アレックス・デユノアさんが話の分かる人で助かった…と言うよりちゃんとシャルルの事を愛していてくれて助かった。もしもシャルルの事を愛していなければ本社ごと俺は消し飛ばしただろうな。

ちなみにシャルルの立ち位置はまだ男。襲撃から日も経ってないうちにトラブルで生徒を騒がすのは得策ではないからだそう。なので俺と同じ部屋のまま…キスもセックスもした仲なので問題はないが束や簪が羨ましそうにシャルルに迫ってたな。シャルル…南無。

と、いう訳で俺の身体は今ボドボドなのである。アリーナの控室で寝っ転がって体力を回復させてはいるが連戦や夜戦のせいで回復速度が遅い。いくら俺が強化人間でもシャルルの為にフランスまで（ISで）行ったり、シャルルと初夜を迎えた後に嫉妬した束、クロエ、楯無、簪、本音を同時に相手してたら疲れるって…

「えへへええ〜また勝ったあ〜。どう？私も結構やるでしょ〜」

顔の上から本音の音がする。膝枕をしてもらっているので当たり前か…本音の太もも柔らかいなあ。良い匂いもするし最高だ。

「まあまあだな。訓練の結果は出ているがまだ機体に振り回されている。そもそも、その機体は俺に合わせて作られているし本音じゃあ機体性能を引き出せきれないよ」

「ええ〜、ひどいよう」

「でも…よいしょつと、ちゅ…援護してくれてありがとう。本音のお陰で勝てた」

起き上がってから本音の唇に軽いキスをする。本音は笑顔になり『私の本気を出したらマッチーの援護くらいお安い御用う〜』と頬をほころばせた。単純なやつ…でもそんなところが愛おしかったりする。

「次の試合は誰とだっけ？」

「んう〜とねえ…おお、クロちゃんときゅゆんペアだあ〜」

クロエと夜竹さんか…むう、黒鍵の能力は知っているが対策はしてないからなあ。とりあえずミサイルやビットは全部は取り外さないと勝てないな…となると本音には今日と同じ大型ガトリングとショットガンで戦ってもらうことになるだろう。そして俺もほとんどの武装を外さなきゃいけない…むう、厳しい試合になりそうだ。

「本音、試合まで時間があるがミサイルやビット兵器を外すから手伝ってくれ」

「んう、何で？」

「クロエの黒鍵の長所は電子戦。ミサイルやビットの操作が奪われたら大変だろ？ だったら最初から外してしまえばいい」

「ナイスアイディアだね。じゃあ行こうか」

俺の手を取ってピットへ急ぐ本音。クロエ：勝つぜえ、俺は（、ー）

クロエ・夜竹ペア

二人はピット内でこれから始まる試合について話し合っている。今までの試合には専用機持ちがいなかったのでクロエが一人で戦ってきた：しかし今回は二人とも専用機を使ってくる。たとえ本音がISに乗り始めて時間がたてつてないとはいえ油断はできない。

「勝てそう?」

「分かりません。でも俊葵様はこちらの手の内を知っているので勝てるかどうかは時の運ですね…」

「では運を引き寄せるために一生懸命頑張らしましょう。ところで作戦はありますか?」
「作戦というほどではありませんが一つ……大量のミサイルを撃つ。それだけです。迎撃の為にビット兵器を使用したら私の黒鍵で操作を奪う。もしも使用しなければミサイルを撃ち続ける。いくら俊葵様でもビット兵器無しで大量のミサイルを避け切るの
は不可能…」

「じゃあ勝負を長引かせないようにしないといけませんね」

《これから俊葵・本音ペア対クロエ・夜竹ペアの試合を始めます。選手はピットで待機してください》

「それじゃあ」

「行きましょう」

力強く頷いて二人は控室を出た。俊葵たちを倒すためにツツツ!!

俊葵サイド

「ちゃんと武装は外したか？」

「うん、言われた通りミサイルは全部外して散弾グレネードを装備したよ。あとクラスター爆弾も…でもこんなのが必要になるの？」

「どうせクロエは簪の様にミサイルをばら撒くだろう。てか黒鍵の性能は真つ向から戦えるようなものじゃないしね」

ふうくん、とんだか上の空。やっぱり専用機と戦うのが怖いのだろう。打鉄やラファールの性能は公開されているので、武装さえ分かれば相手の戦術が大体わかる。しかし専用機は性能、武装ともに基本的に非公開なので戦いづらい。

「怖がる必要はない。本音が乗った状態でも宇宙のスピードは黒鍵に勝ってる。もし危なくなっても俺が守るよ」

「えへへえ／＼／＼守ってくれるかあ／＼／＼よおつしい／＼頑張るぞ／＼」

元気になったようだね。少しでも本音の負担を減らしたいからこれからの試合は本気で挑もう…嵐の実力をためる良い機会だしな。

この後は特に会話もなくアリーナ内に飛翔する。クロエも夜竹さんもすでに定位置に居て俺たちを待ち構えていた。

「俊葵様…本気で行かせていただきます」

「本音…手加減…無用」

「……………いざい」

「さゆゆん覚悟お／＼ってマッチー顔怖いよ!?どうしたの!?!」

別に怒っている訳じゃない。ただ集中しているだけ…なんだが怖がられた。

「集中してる…だけ。怒ってない…」

きつと今の俺にオノマトペと付けるとしたら『ドドドドドド』が一番似合うだろう。心なしか顔も劇画タツチになっていると思うし。

「俊葵様も本気という訳ですね…私も全力で戦います」

『松崎さんの顔怖い…』

軽い挨拶を済ませるとナレーションが流れる

《さあ、皆さんお待ちかね。ついに専用気持ち同士の試合が始まります。特に注目すべきは黒鍵纏うクロエさん、これまでの試合ではライフルやグレネードを使用していましたがついに今回の試合でミサイルを解禁。対する俊葵さんは黒鍵のハッキングを恐れてかビット兵器とミサイルをすべて外している様子、私にもこの勝負がどう転ぶかわかりません!!ではあ……ISファイトオ……レデイ……ゴオオオオオオ!!》

試合開始の合図が鳴りクロエと夜竹さんはミサイルを呼び出して俺たちをロックオンする。

「作戦通り本音は下がって俺の援護を頼む!!ミサイルとビットの使えない嵐じゃどこまでやれるか分からない!!」

本音は短く頷くと俺の後ろに隠れて散弾グレネードを両手に構え、二人に狙いを定めた。

「それじゃあ行ってくる。ミサイルが飛んで来たらフレア、相手が近づいてきたらショットガン、それだけでも大分違う」

「行つてらっしゃい」

クロエの方に向き直るとすでにミサイルは発射されていた。それに対して俺は連射性と命中性の高いアサルトライフルを両手に構えてミサイル群に瞬時加速で突っ込む

《おおっとお!? 俊葵選手いきなりミサイルの雨に突っ込んだあ!?!》

一撃必中!! 追尾性の為に速度を犠牲にしたミサイルなど俺には全て全て全て全て全てで見える!! 落ち着いて狙撃すればこんなミサイルなど全て撃ち落とせるの、だあ!!

《凄い!! 俊葵選手、自分の周りのミサイルを全て躲しながら撃ち落としているツ!?!》

「流石ですね俊葵様…」

しかし私がハッキングできるのはミサイルやビットだけじゃあないんですよ。束様に改造していただいた黒鍵はISですらハッキングできるんです。まあ、それにはIS自体の情報が必要なので初戦の相手には使えないのですが…。しかし宇宙と嵐のデータは持っているので操ることができる。まずは本音の宇宙から…

「んう? マッチー、なんかおかしい」

「どうした?」

ミサイルを撃ち落としながらなので返事は自然と短くなる。残りあと少しだが油断できない…チャフや煙なんて撒き散らされたら厄介だ。

「んーつとね。身体が勝手に動いちゃうんだ。マッチーに照準を合わせたから逃げてえ」

「はあ!?なんでそんなに落ち着いてるんだ!?!」

「とにかく逃げてえ」

ちつ：クロエの黒鍵か、束のヤツ強化しすぎだろ。ミサイルは何とかなった……だが戦力差は単純に3対1……さて、勝てるか分からなくなってきたぞ

《これはどうしたあ!?!本音選手が俊葵選手を攻撃し始めたぞ!!何か恨みでもあるのかあ!?!》

「あつてたまるかあ!!クロエに操られてんだよ!!そうだろ、クロエ!?!」

本音のグレネードと夜竹さんのライフルによる攻撃をなんとか回避しながらクロエに話しかける。クロエは本音を操るのに集中していて動けないようだ。

「察しが良くて助かります俊葵様。この勝負は私たちがいただいたも同然ですね」

「本音よりも俺を操ったほうが勝負が早く決まるんじゃないか?」

「武装の少ない嵐よりも宇宙をハッキングした方が効率がいいと判断しました。それに本音が操縦していないのであれば武装は豊富な方が良いでしょう?」

「ああ、そうだな!!」

ミサイルが飛んで来ないのは良いけど豊富な武装で弾幕を張られるのはマズイ。夜竹さんも宇宙の武装を使っているのでアホみたいな火力の固定砲台が2台……反撃しようとして狙いを定める前に敵の弾が飛んでくる。

「優勝はクロエさんと私のものにする」

「俊葵様にはここで負けて頂きます」

「ごめんねマツチー」

「こままじや勝てない。超能力は使った時点で俺の反則負け。もともとビットや魔弾、ミサイルに頼りきりの嵐じや勝てる可能性はゼロに等しい。こちらの武装は実弾兵器が主なので弾切れも近いし、近接用のナイフもあるが弾幕を掻い潜って三人を相手にできるかと言われれば心許ない。ならこうするしかないかあ……………」

「クロエ……………」

「なんですか？勝負なら譲りませんよ。私たちは優勝して賞品を手に入れます」

「本気で行くぞ……………」

「ッ!？」

最初からこうすればよかった…確かに勝てる確率はゼロに近い、しかしそれは俺が攻めなければの話…。なんで俺が守りに殉ずる必要があったろうか。一方的に攻めればISの3機など物の数ではないのだ!!いぎ、参る!!

俺は両手に大型のライフルを持ち、楯代わりにして本音と夜竹さんに突貫する。ダメージ覚悟の捨て身だったので二人元へダメージを受けつつもたどり着けた。

「本音、夜竹さん…二人には悪いけど…………抉らせてもらう」

「ヒッ!」

本音からショットガンを奪い取ると夜竹さんの顎に突き付けて発砲。いくらISには絶対防御があるとはいえパイロットが気絶すればISは戦力にはならない。脳震とうを起こした夜竹さんはラファールを身に着けたまま落ちていく。

すまない夜竹さん……これも勝負なんだ

「くっ、夜竹さん……本音だけでもこちらに戻さない」と

無駄さあ!!

「スクリューウィップ!!」

逃げようとする宇宙の足を鞭で絡め捕り、こちらに引き寄せる。宇宙の場合は本音が気絶してもクロエに操られるので、本音と宇宙には悪いけど物理的に拘束させてもらおう。スクリューウィップで本音を亀甲縛りにする……これが生身の人間なら萌えたらうがゴツゴツしたISの亀甲縛り……ないな。

「すまないが暫くこのままだ。きついと思うが我慢してくれ」

「ん……う……分かった」

「さて……覚悟は良いかクロエ?俺は出てくる」

クロエの方を向き直ると両手を上げて降参のポーズをとっていた。

「降参です……ミサイルは撃ち尽くしましたし近接用の武装もありません。今の俊葵様

に勝てる要素が見当たりません」

《ええ…と、クロエ選手のサレンダーにより勝者!! 俊葵・本音ペア!! 試合終了ですツ
!!》

ナレーションの試合終了宣言と共に会場は沸いた。しかし俺は盛り上がる気分じゃない。クロエやつ…本気とか言つときながらサレンダーなんて…もうちよつと楽しみたかったのにさ。

俺は本音を解いてから控室へ戻る。次の試合は一夏・シャルルペア対箒・セシリアペアか…面白い試合になりそうだ。

36話

俺はクロエに文句を言うためにクロエサイドの控室へ足を運んだ。感情が昂つているのでノックもせずにドアを開けて中に入りクロエを怒鳴りつける

「さっきの勝負は何だ!？」

いきなり入って来て怒鳴り声が聞こえたので二人とも驚いている。俺だって部屋に入ってきたやつがいきなり怒鳴ったら驚くさ。

「申し訳ございません…」

「俺は謝罪が聞きたいんじゃない。何故試合を捨てたのか聞きたいんだ」

「はい…私のISは完全に支援型のISです。今までの試合は専用機の性能に頼って勝ち進んできました。勿論、俊葵様との試合も諦めずに戦う予定でしたが夜竹さんを倒されて切り札の本音も無いあの状況で勝てないと判断してサレンダーしたのです」

クロエの言い分も分かる。でもなあ…

「俺の女って自覚があるなら諦めるな」

「はい…申しわくむぐ?! んう…くちゅ、ちゅ、じゅる…ぷはあ♥ハア…ハア…♥」

「お仕置きキス。本当はもつとエツチなお仕置きをしたいけど夜竹さんもいるしそろそろ一夏たちの試合も始まるから…夜な」

俺の言葉にクロエは短く「はい」とだけ返事をして俯く。傍に居る本音と夜竹さんも顔を真っ赤にするが俺は気にも留めずモニターのスイッチを入れて試合観戦の準備をする。

「さあ、一夏…訓練の成果を見せてもらおうか」

画面内では一夏たちが定位置で試合が始まるのを待っていた。

ふう…大丈夫だ。訓練通りに、いつも通りにやれば問題ない。

「一夏…大丈夫? 凄く緊張してるみたいだけど…」

「大丈夫…って言いたいけどちよつと緊張してる。でも俊葵との訓練に比べたらセシリアのビットを避けるのは余裕だよ」

「あら、今までのわたくしと同じだと思っていたら痛い目にあいますわよ」

「私だって俊葵に鍛えてもらっているんだ。条件は同じ…負けはせん!!」

《皆さんお待ちせしました。これより一夏・シャルルペア対箒・セシリアペアの試合

を開始いたします!!でもまずは選手紹介。言わずと知れたブリュンヒルデの弟で松崎俊葵の二番弟子!!織斑あ……一夏選手!!次にデュノア社の御曹司、可愛い系イケメンのシャルル・デュノア選手!!松崎俊葵の一番弟子で天災、篠ノ之東博士の妹!!大和撫子!!篠ノ之箒選手!!そして最後はイギリス代表候補生にしてオルコット家当主!!セシリア・オルコット選手!!》

それにしてもこの解説実況ノリノリである。

《はたしてどちらが勝つのか!?二人とも専用気持ちの一夏・シャルルか!?はたまた、最新ビット兵器を持つセシリアと公式非公式無敗中である俊葵さんを師匠に持つ箒か!?それでは試合開始です。ISファイトオオオオオオオ!!レディイイイイイ!!ゴオオオオオ!!》

俺はまずセシリアに向かって瞬時加速を仕掛ける。ビット兵器は厄介なので先に倒してしまおうという算段だ。セシリアはいきなりの瞬時加速に臆することなく迎撃の為にライフルで俺を狙う…しかし俺には当たらない。本来なら瞬時加速は直線移動しかできないので真つ向から向かう形になり、いいのだが俊葵に教えてもらった秘策

がある。専用機の機動性だからできる秘策が：俊葵曰く『量産機でこんなことしたらP ICに負荷が掛かり過ぎてエネルギー消費がとんでもないことになる。勿論、専用機でも少なからず負荷は掛かるから使用回数は控えるようにしろよ』だそうだ。

どんな秘策かというと瞬時加速中に瞬時加速を別方向に行う秘策だ。最初にこれをやった時はGが掛かり過ぎて制御ができずに明後日の方向に吹っ飛んでった。しかし今回は成功した：でもやっぱりGがキツイな。

「んな!?ほ、箒さん!!」

「任せろ!!」

やっぱり箒が前衛か。予想通り……

《シャル、セシリアを狙えるか?》

《そのためのタッグでしょ?任せよ》

そういうとシャルはセシリアの援護を阻止するために俺とセシリアの間に割り込む。俺はこつちに来る箒を迎撃するために雪片式型で居合の構えをとる。箒は小太刀を両手に持ち中段に構えてこちらへ来る：箒の二刀流か：俊葵との訓練で一度も見たことがない。この日の為に特訓していたのか。

「いざ尋常に……勝負ッ!!」

ギヤイン!!

箒の初撃はうまく弾いた。相手が小太刀なので打ち込みは浅い：しかし次撃が俺の胸を突く。小太刀の機動性を活用した連撃が俺を襲う。俺の知らないうちにこんなに強くなっていたなんて：

「ぐう…：まだだ!!」

大振りだが箒を振り払うために雪片を長めに持って振る。しかし箒は避けずにこちらの間合いに入ってきた。

「!？」

「お前は焦ると顔に出る。悪い癖だぞ」

そう言うのと雪片の鏝付近に小太刀を添わせて動きを止める。

「ISの性能は一夏の白式の方が上だが剣道の腕は私の方がまだ上だ!!」

そのままもう片方の小太刀で俺の首を狙ってきたので雪片を手放して距離を取る。俊葵との訓練のおかげで武器を手放して逃げるといふ選択肢が増えた。今までの俺なら避けきれずにやられていただろう。

《一夏、大丈夫?》

《ちよつとまづい》

《手を貸そうか?》

《いや、箒は俺一人で倒す。だからシャルはセシリアに専念していてくれ》

箒と距離を取って落ち着いているとシャルから通信が来た。エネルギーもまだあるし大丈夫だ：零落白夜も3〜4撃分は残っている。箒：お前は俺が討つツ!!

シャルルサイド

一夏は一人でも大丈夫そうだね。ふう：一夏は十分強いと思っていたけど箒さんもなかなかやるなあ。少し押されているように見えるけど焦りは見えない：僕は僕の仕事に専念しよう。

「余所見は命取りですわよ」

おととつと：危ない危ない、変に考え事をしながら戦わない方が良いなあ。セシリアさんの射撃ってかなり精度高いから集中しなくちゃ…

「じゃあおしゃべりはこの辺にして……本気でやろうか!!」

拡張領域からフルオートショットガンとマシンガンを取り出してセシリアに弾幕を張りつつ接近する。

「私の弱点は『狙撃とビット操作は同時にできない事』だと思っではいませんか？ 残念ですがビット兵器の扱いは俊葵さんに手取り足取り教えて頂いたのですわ!!」

セシリアさんはビットを操作しながらこちらを狙撃してくる。嘘：たった一週間でここまで強くなれるなんて信じられない。俊葵……いったいどんな訓練をしたんだろ

う? くっ…こつちに反撃をさせる気がまるでない。

「狙撃だけじゃなくてこんな事も出来ますのよ」

ハンドガンを両手に持ち、ビットと併用して僕を追い詰める。しかもビットは上下左右の四方からの確に狙う…避けにくいように微妙にずらしての同時射撃。このまじやエネルギーが…仕方ない。多少のダメージは覚悟で!!

僕はグレネードを呼び出して自分の近くで爆発させて、煙幕代わりにして戦線を離脱する。

「煙幕…では私は一夏さんを狙うとしましょう」

あ!!し、しまった!!一夏は箒との戦闘にいつぱいいつぱい。僕の役目はセシリアさんを押し留める事だったのに!!

「なんだ!?! ロックオンされてる!?!」

「さよなら…一夏さん」

ビット4基の掃射によって隙のできた一夏は箒の剣撃によって完全に沈黙。試合の流れは完全にセシリアと箒に来ていた。

一夏が…くっ、僕が焦ったせいで!!ダメだ…落ち着け僕、落ち着いて対処するんだ。僕のエネルギーは残り4割、武器弾薬は3割くらい残っている。戦術を立て直して戦うんだ…一夏の分まで…。

「箒さん、援護は任せてくださいまし」

「ああ、相手が一夏でないなら太刀を使おう。セシリア：お前に本物の居合を見せてやる」

箒もセシリアも準備万端だ。僕も：これが今できる全力!!僕は両手にサブマシンガンを持つてこつちに向かつてくる箒に突貫する。箒：行くよ!!

「レイン・オブ・サタデイ!!」

僕は負けないんだ：悪あがきでもいい。少しでも：

「すう~~~~~……………：……………喝ツ!!」

僕が仕掛けたのと同時に目の前に飛んできたナイフ（小太刀）：まるで僕が仕掛けるタイミングを知っていたかのような妨害。一瞬：一瞬だけ目を瞑ってしまった。スゴイや箒：その一瞬で近付いて切るなんてさ：完敗だよ。遠距離武装のある僕に有利だと胡坐をかいていたのが敗因かな。

「凄いですわ箒さん：本当に見えませんでした」

ヒーーーーー!!

『凄い!!その一言に尽きます!!一夏選手と箒選手の剣撃、シャルル選手とセシリア選手の銃撃戦!!どちらも目にも止まらぬ早業の応酬!!どちらが勝つか予想できないこの試合：それを制したのは箒・セシリアペア!!』

セシリアサイド

試合を終えて私と箒さんは戦いでかいた汗をシャワーで流していた。少しばかり狭さが否めませんが中学校の頃に使用していた校内のシャワーよりはずっと広い。

「さっきの試合はセシリアのお陰で勝てた。流石は代表候補生…私よりもずっと強いな」

隣のシャワーから箒さんの声が水音と共に聞こえてくる。

「それは箒さんが前衛をしつかりと務めてくれたので私がシャルルさんに集中できただけの事…それに箒さんも一夏さんを相手に押していたではありませんか」

「一応は剣道の中学生部門では日本一だからな。ブランクのある一夏に負けはせん…それよりもアレはどうする?」

「勿論、実行しますわ。でも…勝てるかどうか」

私たちの計画は俊葵さんに勝たないと始まらない…でも俊葵さんペアは本音さんを差し引いても優勝候補。私たちには勝てる可能性なんて…

「それでも戦うんだ、全力でな。負けたっていいじゃないか…どちらにせよ全力でぶつかれば俊葵は分かってくれる」

それもそうですわね…次の試合は絶対に負けられない!!

37話

ラウラ・相川ペア 控室

スタスタスタスタ↑落ち着かないラウラの足音

ズズズズ：↑落ち着いている清香がお茶を啜る音

必要以上に緊張するラウラの姿からはいつもの威厳は感じられず、新しい家に連れてこられた子猫のようなその姿からは微笑まじさが感じられた。清香がお茶を啜っているのもラウラが可愛くて上がった口角を隠す為でもある。

「次の試合の相手は俊葵か…」

兄さん、にいにい、お兄様と様々な呼び方を試してみたが俊葵に『別に呼び捨てでいいぞ？俺よりもしつかりしているしなんだかむず痒い』と言われた事があって今では呼び捨て。俊葵も内心、『ラウラは作中で人を呼ぶときに呼び捨てだったし俺も呼び捨てで呼ばれたかったんだよなあ』と思っていた。

「ちよつと緊張しすぎじゃない？リラックス、リラックス」

「これが緊張せずにいられるか。俊葵と初めての真剣勝負なのだぞ…はあ、俊葵を失望

させないような戦いぶりを見せなくては…」

「真剣勝負って…いつも訓練で俊葵さんとの戦闘経験はあるんでしょ？」

清香の言う通り、ラウラは俊葵との戦闘経験はいくらかあった。しかし訓練と実戦は一味違う。訓練試合は相手の弱点を直したり、強くしたりする試合なのでそこそこ手心を加える程度なものだ…しかし実戦は相手の弱点を的確に突き、して欲しくない戦法を積極的に押し付ける。

「訓練とは違う…教えられた通りの動きができるだろうか!? 射撃も正確無比なものだろうか!? ああ!! 考えれば考える程に緊張してきた!!」

「これじゃあ何を言っても無駄ね…試合開始までにどうにかなればいいけど…」

一抹の不安を抱きながら二人は試合開始を待っていた。

俊葵・布仏ペア

落ち着きのないラウラ・相川ペアと違って俊葵たちはかなり落ち着いて試合を待っていた。

「ズズズズ…ああ〜お茶がうめえ〜」

「むぐむぐ…んく…ふう。お茶菓子も美味しいよう〜」

俺達の次の相手はラウラと相川さん…さつき、ちよこつと控室を覗いたらラウラが落ち着かない様子だったので何も問題はないだろう。ラウラの弱点は環境の変化、試合の流れが変わることにボロが出るのでそこが狙い目だ。…とまあ俺が試合に向けて色々と考えているってえのに本音ときたら。

「この最中も美味しい〜。あ、この栗満点の栗大きい〜♥」

満面の笑みを浮かべて俺が買ってきたお菓子を食い漁っている。俺が食べるために買ってきたのに…でも本音の笑顔が見れたし満足かな。

「当たり前だろ。なんてったってその和菓子某デパ地下で限定販売されてる奴だからな。式神を遣わせて買ってきたんだ。味わえよう？」

「うん!! ああ〜む…むぐ…」

はう…可愛いなあ本音は。む? 本音がちよいちよいと手招きを…なんじやらはい?

「お裾分け…ちゆ、ん…えろ♥んう…ちゆ、ちゆ、ちゆうう〜♥」

抱き着かれてベロチュウをされたと思ったら口の中に羊羹を押し込んできた。いや…嬉しいんだけどいきなりされると反応に困る。口の中には羊羹の甘さと本音の唾液の味が広がり、俺を蕩けさせる…くう、美味い!!

「ふう…試合前からナニやってるんだろうな俺達」

「まだ少し時間があるから／／…キヤ!」

本音の言う通り、試合まではまだ時間がある。本番は出来なくてもキスや愛撫くらいなら……。俺は本音を抱き寄せて服の隙間から腕を忍ばせた。

「本番はまた今度な」

「んう…：私は何時でも…：良いよ／／俊くんが望む時に抱いてくれたら私は嬉しいな」
♥

「イイ女が俺に惚れてくれたおかげで感涙に咽び泣きそうだぜ…：つたくよう。ちゅ…：」

首筋にキスをしながら慣れた手つきでブラを外す。ブラ越しのおっぱいもなかなかおつなものだが、やはりおっぱいは直に触るに限る。少し力を入れるだけで指がおっぱいに埋まってしまふ…：大きく柔らかい、しかし決して垂れてはいない。女性の身体は男には分からない神秘でおっぱい…：いや、いっぱいだ。

「気持ち良い…：はう♥俊くんの手つきいやらしい…：でも大好き／／」

「俺も本音のこと大好きだよ…：んにや、愛してる」

「ひやう!?もう、耳元で囁くの禁止い…：ひゆう…：禁止なのにい。甘えん坊さんだなあ…：いいよ、ギユってしてあげる」

広げられた腕に包まれると心底癒される。束のおっぱいもどっこいどっこいの大きさなので同じことをできないことも無いのだが母性の度合いが本音の方が大きい。山田先生もきつと同じくらい母性があるのできつと癒されるんだろうなあ…：あ、束たちの

おっぱいで癒されなくて訳じゃあないぞ!!

「よしよし…倭くんの髪の毛さらさらして気持ち良い〜」

「そりゃあそうだろう。俺だって髪の毛のケアには気を遣うさ」

自然由来成分がふんだんに使われているシャンプーやコンディショナー、ボディソープを普段から使用しているので髪の毛なんかは人一倍に手入れされているはずだ。かなり値は張るが贅沢な人生を5〜6回繰り返し返してもおつりがくるほどお金があるのでこういったところで使わないともったいない。

「本音はどうなんだ？ 凄く甘くていい匂いがするけど」

「わたしはハチミツ入りのを使ってる。甘くていい匂いだし髪にも良い成分がたくさん入ってるんだって」

ハチミツ入りのコンディショナーか…俺も使ってみるか。

「スンスン…確かに言われてみるとハチミツのような香りが…。ちゅ…なんだかほつとするよ。…………ごめん、やっぱり我慢できない」

本音の匂いを嗅いでたら興奮してしまった。いや、最初から興奮していたんだけど柔らかな身体に包まれて、頭まで撫でられて、終いにや甘い匂いを漂わされたら我慢は出来ない。

「うん、良いよ…おいで」

がばっ!!

「ふふ…激しいよう♥んう…あつ、ソコ…ん、好き♥」

試合前なのに…いや、試合前だからこそ俺たちはこうやってお互いを興奮させる。…と言うのは建前で本当は本音を抱きたいだけだ。どうしてこう好きな人と一緒にいると興奮するのだろうか？俺がおかしいのか、それともこれが普通なのか分からない。でも一つだけ分かることがある…俺の性欲は天井知らずだという事だ。だから俺がここで本音とセックスすることは悪い事ではない。

ガチャ

「試合開始15分なので二人はビットへ……………」

やまた、せんせいか、あらわれた▼

としきとほんねはみうこ、きか、て、きない▼

「……………」

なんて間の悪いタイミングで入ってくるんだ。おかげで俺の息子が萎えてしまったじゃあないか。…さて、十何秒か三人の間に沈黙が訪れる。最初に沈黙を破ったのは俺だった。

「分かりました。じゃあ着替えたらすぐに行きます」

取り敢えず俺は本音の腔内から息子を抜いて互いの秘部を濡れタオルで拭く。そし

て山田先生に

返事をしてちよつと強引にだが退室してもらった。先生もいたんじやあ着替えられないしな。

俊葵・本音サイドのビツト

「勝てるかな？」

「勝てるさ……相手がラウラなら手加減の必要はない。本音はバックアップに徹していてくれ」

ラウラのシユバルツエアレーゲンは俺の宇宙よりも性能は下だが今回は使い手が違う。ラウラにはその性能差を補って有り余るほどの実力がある。俺よりも実戦経験は豊富だろうし相手の動きを読むのも上手いだろうな。この試合……油断したらきつと負ける。

「了解く♪」

「相川さんは量産機だから問題ないとしてラウラには十二分に注意しておけ。油断したら狙い撃ちにされる」

この試合に勝てばあとは決勝戦のみ。一夏と戦えないのは残念だが成長した筈とセシリアの相手をするのは楽しみだ。だから勝たせてもらうぜ……ラウラ。

『皆さん!!待ちに待った時が来ました!!現役軍人のラウラ・ボーデヴィツヒVS世界最強の漢・松崎俊葵さんの試合!!きつと今大会最高の試合になること間違いなし!!それでは皆さん…一緒にいきますよお?すう………ISファイトオ:レデイ:ゴオオオオオオオオ!!』

この実況解説いつつもテンション高いなあ:悪い事じゃあないけどもうちった冷めてても良いんじゃないだろうか。俺も戦闘時にはテンションが上がるのだが上げ過ぎても空回りする。つまり丁度良い具合の熱さで戦うのが良いと思われ。

「俊くん危ない!!」

あ、試合はもう始まっているんだった。こんな風にボケーっとしてたらラウラ以外のやつも攻撃してくるよな。避けるか。

「こんな攻撃を避けるのなんて軽い軽い。ほいっさ」

左目は封印しているが元々のステータスがカンストしているのでレールカノン避けるのなんて昼飯前。流石はラウラだ:すでに次弾を装填して発射準備に取り掛かっている。しかしその隙が命取り!!

「ビット及びシールドビット展開。本音は後衛を頼む…。ラウラ……:気を付けろよ(二

ヤリ」

ラウラの後ろにいる相川さんは特に脅威にならないので本音に任せよう。俺はラウラの左右と後ろにはビットを、俺の前方にはシールドビットを展開しながらラウラへ突貫する。

「私のシユヴァアルツエア・レーゲンにはA I Cが搭載されている。単調な射撃なんぞ効きはしないぞ!!」

「油断は禁物と教えたのを忘れたのか?」

「偏向制御射撃だ?!」

偏向制御射撃。本来なら直進しかしない加粒子砲を曲げる繊細な技。しかし蓋を開けてみると仕掛けは簡単にA I Cの範囲を格段に上昇させて物理的に粒子を曲げているだけなのだ。セシリアの偏向制御射撃の仕掛けは知らないけど俺のは力業なので褒められた戦法ではないかな。

自分の注意していたところとはズレた位置に着弾したので驚いたようだ。念のために相川さんにも射撃をしていて正解だったな。俺がラウラに集中している間にこちらへ向かって来ていたようだ。

「爆ぜろ!!」

丁度、俺がラウラと相川さんの中間地点にたどり着いた辺りで近接信管ミサイルを全

弾発射する。相川さんだけなら通常の接触系のミサイルでもいいのだがラウラの場合はAICがあるので近接信管型にした。

爆音とともに爆炎がラウラと相川さんを包み、二人の視界を遮る。俺は勿論そんな隙を見逃しはしない。すまないな二人とも……これが勝負だ。

二人がいた場所へゆつくりとエイムしながら引き金に指を掛ける。発射したまではよかった……しかし銃弾が命中した手応えが全くない。それどころか煙が少し晴れてきているというのに!?!見えてもおおかしくないのに!?!二人の姿はそこに無い……どこだ!?!どこに!?!

「油断は禁物だよ俊葵さん。ラウラからどんな戦法で来るか念のために聞いておいて良かったよ。じゃなかったら……こんな物を用意していなかったからさ!!」

俺がほんのちよっぴり油断した数瞬の間に上昇し、俺よりも上位に陣取り武器を構えていた。

あの銃についているサイトはまさか!?!

「サーマルサイトだ……俊葵。悪いな、これが勝負だ」

「ごめんね俊葵さん……優勝は私たちがいただいたよ」

回避間に合うか……それとも反撃か。ラウラはレーザカノンを、相川さんはサブマシンガンとショットガンを俺に向けている。そこで問題だ……この不意を突かれた状況でど

うやうやあの攻撃を躲すか？

3 択―ひとつだけ選びなさい

①・ハンサムな俊英は突如、反撃のアイデアをひらめく

②・仲間が助けにきてくれる

③・かわせない。現実是非常である

答え……………④ 躲せないのではなく躲さない!!そして反撃をする!!だ!!

ミサイルを発射した後の外部装甲を前方にパージしていくらか防御する。流石にレールカノンは防げなかったが射線を少しずらすことができた。

「小癪な……」

「時間稼ぎは任せて!!」

ラウラが次弾装填をする時間を稼ぐ気か……なら本音に相手をしてもらおうか。俺にはやらなきやいけない事がある。

「本音……露払いは任せたぞ」

「ま〜かさ〜れた〜♪」

そう言うとき本音は分裂型のミサイルを呼び出し相川さんに向けて発射した。おいおい……友達相手にも容赦ないなあ……。……おっと、俺はラウラに集中しなきゃあいけねえんだった。

「私の武装がレールカノンだけだと思うなよ」

でもお前の武装って腕部のサーベルとワイヤーだけじゃ…

「こんな事も有ろうかと用意しておいて良かった…これが私の新戦法!!」

両手に連射性能の高いアサルトライフル、両肩にはミサイルポッドか。流石に主砲だけでは戦いづらいと判断したのだろう。丁度いいや、普段は見られないラウラの姿を見せてもらおうか!!

「行くぞ俊葵!!」

両手のアラルとラウフルは腰撃ちで弾をばら撒きながら瞬時加速での特攻に見せかけた陽動か。まずラウラは勝負を急がないのでこんな攻め方は絶対にしない。なら何か策があるのか?…:…:…:考えてもしようがない、俺も攻める!!

「そんな豆鉄砲で俺が止められるかあ!?!」

俺は両手にツエリスカを持ちラウラに狙いを定める。ラウラからの攻撃はビットで防ぎながらの射撃。しかし弾丸はラウラに一発も当たらず仕舞い。集中…:リロードしてもう一度だ。ビット操作もエイムもいつも通りにやれば問題ない。でも手が震える…:俺がラウラの覇気に圧されている!?!

「待てッ!!逃げるな!!」

「戦術的撤退だ!!」

と、言いつつもちやつかりラウラに向けてミサイル発射。卑怯？おいおい勝負に卑怯もくそもあるか。勝てばいい、それがすべてだ。

「くっ…うっおとしい!!」

これでちつたあ時間稼ぎが…ッ?!

ミサイルの爆風の中から二本のワイヤーが伸びてきて俺の足に絡みつく。ミサイルが命中したのを確認してほっとした瞬間の隙を見逃さないと流石!!そのまま引つ張られて…あ、ちよ、ちよつとまてて（ガゴン!!）

『決まったああああああ!!ラウラ選手の右ストレエー…ツト!!俊葵選手の顔面に炸裂!!これは痛い。大丈夫か俊葵選手!』

「さあ!!立ち上がれ!!そしてかかってこい!!」

ブチ…

「だつたら好きなかかってきてやるよお!!」

いくらISを装備しているとはいえ同じISの一撃が効かない訳じゃない。頭が揺れて視界がグワングワンとする。でもちゃんと見えているぞ…お前が!!

TRANS—AM SYSTEM 起動

「ラウラ…お前は立派だったよ、尊敬に値する小娘だ!!」

ガゴン!!

「後ろから!？」

目の前には俊葵がしっかりといる。しかし後頭部に衝撃が走った。これは…アレは俊葵じゃあない!! 確かにセンサーには反応があるがアレは違う!! 質量を持った残像だともいうのか!？」

「何処を見ている!! 私はこちらだ!!」

ガゴン!!

《俊葵選手のISが真つ赤に燃えている!?そして二体…三体…もつと増える!?これは一体どういうことだあ!？」

質量のある残像。疑似的なGN粒子だけではF91の真似事しかできない。だからトランザム中に拡張領域へ空気中の様々な粒子を圧縮、そして放出することによって限りなく本物に近い残像を残す事ができるようにした。

「くっ…それが本物か分らん!!」

「どれも本物さ!!」

残像の中にビットを紛れ込ませてラウラの注意が逸れている方向から狙い撃つ。何発かは避けられたが格闘と射撃の混合攻撃にラウラのシールドエネルギーはどんどんと減っていき……

「くう…だがな俊葵…お前の攻撃でやられはせんぞ。清香ア!!」
「うん!!」

煙幕か、鬱陶しい。相川さん…まだ残っていたのか。本音は無事か…それよりもトラ
ンザムの時間が。

TRANS—AM SYSTEM 終了

「ごめんね俊くん。倒せなかった…」

「いや、無事でよかったよ。それよりも俺の方がすまない…エネルギーが底を突きかけている。これ以上のエネルギー武器の使用はできない。そしてミサイルも打ち尽くした…」

「じゃあこれを使って」

そういうと本音は俺に日本刀を渡してくれた。これは俺が念のためにと本音に持たせていたものだ。

「したら本音の武装が」

「私がつけても仕方ないし俊くんが使って。私は弾が残ってる武装で援護するから。…私も守られるだけは嫌だよ」

「分かった。ラウラは俺に任せろ。そろそろ煙幕も晴れるな…行くぞ!!」

相川さんの事は全て本音に任せよう。俺はラウラを倒すだけだ!!

煙幕が晴れラウラが見えるとすぐに俺はラウラに突貫した。策がある訳でもないの
で無意味に策を弄するよりも一転構成にした方が勝率は高い。

「正面から私に向かつて来るか!!このシユヴァルツエアレーデンに向かつて来るか!!」

たしかこういつた時にはこう言えと副官に言われていたな

「最終ラウンドだ!!」

ラウラめ…乙な奴。そんなセリフを言われたら俺も燃え上がるじゃあねえか。しか
し心は静かに…刹那の時を待たねば（使命感）

抜き身の刀を左手で軽く握り体中の力を抜いて接敵と同時に切り掛かる。

「早い…だがその程度の動きなら見えている」

ツ…左目の眼帯を外して!!くう…動けん。

「俊葵も私の知らない新兵器を搭載していたんだ。卑怯と言うはずはないよな」

作中で箒だつてA I Cを腕力で解いていたんだ。俺にできないはずがない（断言）。

丁度、相川さんは本音で手いっぱいの様だし本気でぶち破る!!

『ラウラ選手のA I Cに捕らわれた俊葵選手。まさかと思えますが力で破るつもりです

!!』

「そんな事したら筋肉や骨がどうなるか分かっているのか!?!」

「試合が終わってから治せばいい。ラウラ、俺の弟子なのに知らないのか…俺は負ける

のが大嫌いなんだ。勝つためなら自分の身体がどうなろうと知ったこっちゃあ……：……ねえんだよおおお!!」

ブチブチと筋繊維が千切れていくのが感覚で分かる。だが超能力禁止の試合ではこの強化された身体をフルに活用するほか勝つ道はない。

「チエストオオオオオオオオ!!」

俺は咆哮し気合の雄叫びを上げ一気に刀を振り下ろした。必殺の間合いだったので攻撃はラウラにしっかりと直撃。シールドエネルギーはゼロになりこの勝負は俺の勝利……じゃない!!まだ相川さんが……

「俊くんは決着をつけたみたいだし私も必殺技、いっくよお!!ディープストライカー装着!!」

黒き翼が発言していない宇宙は超高速機動戦が出来ないので専用のアタッチメントとして束に注文した物の一つだ。VOBの技術を応用した推進力に他を圧倒する兵器の数々……それらから逃れられる術は無し!!

「え、ちよ、それは!!」

「えへへえ〜♪イツケエエエエ!!」

爆音と噴煙がアリーナを埋め尽くし試合は終了した。嵐も宇宙もかなりのダメージを受けたので次の試合はまともに戦えるかなあ……

38話 試合終了

「本当にすみませんでした…ちょっとやりすぎました」

絶賛土下座中…

「謝らないでいいのに…次の試合まで30分もある。簡単な修理ならできるから問題ないよ♡」

先程の試合でトランザムを使ったりディープストライカーを使ったりとISに負担をかけたのでメンテナンスをお願いしに来た次第だ。

「本音もお咎めなしか？」

「ふふ…俊くんの女を私が傷つけると思ってるの？そんなことは絶対にしない。私が一番嫌いな事は俊くんが悲しむこと。だからそんな事はしないよ」

「んじゃあ俺の女以外のモノが俺の機嫌を損ねたら？」

「そんなの決まってるよお。全部ぶち壊すだけ♪」

分かってはいたが清々しいほど屈託のない笑顔で狂気的な事を言ってくれる。束…

それほどまでに俺を

「それじゃあ修理に取り掛かるね。でもIS本体はともかくとして武装の損傷が激しいから別なのを使ってほしい。俊くんのISは他のISとは規格が違うから武装に使われる部品も威力も違う。高威力を保つためにほとんど使い捨ての様に武装を使っている状態なんだ。だから替えの武装がない以上、次の試合は通常武装で戦ってもらうことになる…それでもいいかな？」

「構わないよ。俺の為にありがとう…ちゅ♥」

俺の為に身を粉にして働いてくれている束に俺はこうやって癒してあげる事しかできない。もつと他にもしてやれることがあればいいんだけど…

「むふうふう!!束さん!!がんばっちゃうゾふうふう!!」

幸せそうな束の顔を見ていたらそれも良いんじゃないかと思う。

箒・セシリアペア 控室

「遂にこの時が来たな…勝てる自信は？」

「五分五分ですわ。俊葵さんたちが先ほどの試合で武装を使い果たしていることを祈りましょう」

「それは希望的観測じゃあないか」

セシリアとは対照的に箒は現実的な考え方をしていた：しかしセシリアは確信している。『俊葵さんは次の試合でビット兵器とあの新武装（トランザム）を使用しない：いや、使用できない』のだと。

「セシリアらしくもない。勝負の勝敗を相手に依存するなんて…」

「以前、俊葵さんから聞いたのですわ。『俺の武装は特別製だから長時間使ったらすぐに壊れてしまう欠陥品なんだ』と。ですから連戦している俊葵さんには武装があまり残されていらないと思うのです」

「まあどちらにせよ私たちは本気で俊葵にぶつかるだけだ。そして勝利し気持ちを伝える」

「そうですね。私たちの実力を俊葵さんに見てもらいましょう」

今日という日を特別な日にするために乙女（漢女）は準備を重ねてきていた。そしてそれをぶつける瞬間が目の前まで迫ってきている。俊葵に思いを伝えるため：すべてを掛けて乙女は闘う!!

《遂にこの瞬間がやってまいりました!!様々な者の《思想（おもい）》が交差するこの大会。ある者は自分の実力を試すため!!またある者は思い人に気持ちを伝えるため

!!皆の思いを孕んだまま迎えたこの決勝戦!!それを制するのは俊葵・本音ペアか!?セシリア・箒ペアか!?私にも誰にも分からない!!では観るしかないでしょう!!どうぞご唱和ください!! I S ファイトオオ………レディ………>>

「「ゴオオオオオオオオ!!!」」

アリーナの全てがこの時の為にあつたかのような感じだ。観客も選手も実況も一つに混ざり合い心地が良い。心拍が上がり鳥肌が立ちゾクゾクする……こんなに楽しいと感じたのは久しぶりだ!!

「本音!!セシリアを頼む!!」

「アイ、アイサー♪」

セシリアの事は本音に任せて箒に向き直る。セシリアもこちらに手を出さないところを見ると俺の思いを察してくれたらしい。本当に良いオンナだぜ……

「決着をつける時が来たな……俺はコイツで戦う。遠慮はいらない……本気で来い」

「多くは語らない……すべては刀が教えてくれるだろう。だがこれだけは口にしておきたい……私は今日こそ俊葵!!お前を超えてみせる!!」

それを聞ければ十分だよ箒。機体性能を覆して俺に勝ってみろ!!

俺は箒が突貫したタイミングと同じタイミングで接敵する。箒はソレを予想していたのか慌てることなく俺が繰り出す斬撃を捌く。普段の訓練通りのコンボは既に見切

られているという訳か…面白い

「…どうした俊葵。お前の実力はそんなものじゃあないだろう」

「俺の剣撃を捌きながら話しかけるなんて余裕じゃないか」

「この顔を見ても余裕があると思うか？」

パツと見は大丈夫そうだが…まあ、大丈夫じゃあねえだろう。瞬きすらしてしまおうと受けてしまいかねない連撃を受けている最中だもんな。手加減をしてやりたいが俺も箒が本気でかかってきているのだから俺も本気で相對するのが劍士に対する礼儀だろう。

「余裕があろうがなかろうが関係ない!!」

片手に刀、もう片方の手に鞘を持ち二刀流の箒を追い詰める。觀戰している者の視線では互角に打ち合っているように見えるがそうではない。勿論それに気付いている者もいる。

「無理して二刀流で戦わなくてもいいんだぞ？」

「無理なんてしていいない!!」

「そうかい♪」

箒の動きは手に取るように分かる。二刀流なんて慣れない事をするからそんな動きになるのだ。

刀を持つ手に力を込めて箒が振り下ろした刀を思い切り叩く。確か《鮫衝撃（アタツコ・デイ・スクアール）》って技だ。漫画で見た技が使えるなんて嬉しいなあ。超人的な肉体があつて初めてできるからやってみたかったんだよ。

《おおっと箒選手どうしたあ!? 動きが止まっているぞお!!》

「ツ!!」

「さて…少なくとも数秒は動けないぜ。刀を離さなかったのは褒めるがこの状態では負けも同然だな」

「…早、く…やれ」

「ドラア!!」

箒が吹抜けた事を言うもんだからつい殴ってしまった。殴られた箒はそのままアリーナの地面へ激突して土煙を立てている。

「足を踏ん張り腰を入れい!! そんな事では男の俺一人倒す事叶わぬぞ!!」

こんな事で負けを認めてもらつては困る。クロエもそうだったが諦めが早いぞ。クロエの時は仕方なかったが今回は違う。なら最後の一瞬まで俺に相對しろ!!

本音・セシリア サイド

・「くう…ちよこまかと逃げて。正々堂々と戦つてください!!」

「ええ…だつて俊くん言つてたよ。『戦いは相手にとって嫌な事を押し付けければ勝てる』つて。だからセツシーが苦手な戦法で戦う〜♪」

「いの……」

本音はセシリアから全力で逃げていた。俊葵との訓練で8つ以上のビットから逃げる訓練をしていたので、今更セシリアが操る4つのビットから逃げるのはそれほど難しい事ではない。同時発射された4本の光線を上手い具合に身体を逸らせて最低限の動きで回避をする。

「避けるばかりが私じゃなくいよう〜♪」

私は拡張領域からフルオートのハンドガンを二丁取り出してセツシーに狙いを定めて発射した。セツシーからビットで攻撃されてるし大まかな狙いだけど威嚇にはなるかなあ〜。

本音が放った弾丸は勿論セシリアには届かない。しかし銃弾に気を取られたセシリアはビットの操作が少しだけ疎かになった。その隙に本音はセシリアから更に距離を広げる。

「あの本音さんを一週間でここまで育て上げるなんて…俊葵さんは流石ですわ。ですが私だつて負ける気はありませんのよ!!」

セツシーも本気だあ。俊くんにはビットの避け方を教えてもらつて良かったなあ。一

つのビットに集中せずにハイパーセンサーで視界をぼんやりと見る感じで…よし、また避けた。

本音はセシリアの猛攻を紙一重で何とか躲している。しかしそれは宇宙の性能が有つてこそ出来る事だ。専用機に搭乗していてもギリギリで回避しているのだから専用機に比べて性能の低い量産機に搭乗した場合は考えるまでもないだろう。

「くっ…やはり俊葵さん専用機の性能は伊達ではありませんわね。しかしあくまで俊葵さん専用機…いくら性能が高かろうが登録パイロットである俊葵さんが乗らない限り本領発揮できるはずもない。そうでわね、本音さん」

「んう…、そういった事はよく分からないけど頑張つて勝つよ」

「では…」

「うん♪」

「勝負!!」

セツシーも本気だ…凄い、こんな緊張は俊くんとの訓練では感じられなかったよ。今までの試合とは全く違う。これが本当の闘いなんだ。まあ…セツシーの迫力が凄いから逃げるけどね。

私は正面から向き合わずに逃げ続ける本音さんに苛立ちを覚えていた。

「どうして貴女なのです!!どうして私ではなく貴女が!!」

「ちよ、怖いよセツシ。落ち着いて落ち着いて」

「私だって俊葵さんの事を!!」

今日のセツシーなんだかいつもと違うよう。どうして……あ（察し）

「セツシーも俊くんの事が……」

「ええ……そうですわ。だからこそあなたには負けられません!!」

私も俊葵さんの事が好きですのに……どうして本音さんを抱いたのですか。確かにペアである以上、二人になる機会が多くなるのは必然。だからって夜まで一緒なのはズルい……。

「撃ち落として差し上げますわ……」

ライフルを構えつつビットで本音さんを追い立てる。先ほどから掠る程度しか当たっていないが段々と本音さんの速さにも慣れてきた。

「きゃっ!!」

よし……良い感じに当たり始めましたわね。速度に任せた素人の直線的な回避なんて慣れてしまえばどうという事はありません。

「踊りなさい!!私とブルーティアーズの奏でる円舞曲で!!」

俊葵・箒 サイド

動けるようになった箒は刀を握りなおし俺に突貫してきた。遠距離武装を一切持たない箒にはこの戦法しかないのだろう。俺も箒に合わせて武装は近接武器だけにしている。

「それで本気か？」

箒の連撃を上手い具合に凌ぎながら話しかける。

「くっ…なぜ当たらないんだ」

「本気で戦えと言ったのは箒…お前だ。でも今の箒相手に本気は出せないみたいだな」

「なんだと!？」

「少しだけ本気を出そう」

俺は左目の眼帯を外して刀をダランと力なく左手で持つ。

「眼帯を外したただけではないか!？私を舐めているのか!？」

「ごちゃごちゃ五月蠅い。良いから攻撃して来い」

ブチ

「うあああああ!!」

そんなに腕を振り上げたら…そいっと。剣を学んでいるのなら居合の届く範囲に容易には行っちゃいけない事くらいわかっているだろうに。まあ、箒が冷静だったとして

も左目を開放した俺の動体視力を超える動きなんて出来るはずもないけどね。

「落ち着けよ…そんな乱れた太刀筋じゃ俺は倒せないぜ」

「黙れ!!お前はここの勝負になにも覚悟がないからそんなことを言えるのだ!!」

「覚悟お!?こんな練習試合でか?」

「実戦経験のある俊葵からしたらこんな大会はお遊びだろうな。でも私には…いや、私とセシリアには実戦以上の覚悟があるんだ!!」

「そうですわ!!」

セシリア!?本音はやられてしまったのか!?

「ごめん…ね」

そういうと本音は宇宙を纏ったまま地面に落下していった。

少し前の本音・セシリア サイド

本音はセシリアの攻撃を避けきれずにいた。

「これだけ撃ち込んでいるのにまだ落ちませんの…(呆れ)」

直撃だけを数えても20は撃ち込んだ。主武装のスターライトmkⅢも数発は直撃させた。並のISなら2〜3機分のシールドエネルギーは削っただろう。しかし尚

も動き、回避を続ける宇宙に驚きを隠せずにいる。

「ですがあれほどの攻撃を受けたのです。もうそろそろエネルギーも底をつきかけているのではないですか？」

「うん…セツシーの言う通り。もう私は闘えるだけのエネルギーは残されていない。でも!!」

本音は残り少ないエネルギーを全てスラストターに集中させてセシリアへと突貫する。

「ごめんね俊くん…私にはこれくらいの事しかできない。もつと役に立ちたかったな…（；；▽；）

「私が最後に見せるのは!!」

セツシーの目をくらますために拡張領域から《打ち上げ花火》を取り出してセツシーに向けて投げる。それをセツシーは見事に撃ちぬいた。計画通り…セツシーが撃ちぬいたものは大きな爆音と爆炎でセツシーを包み込んだ。

「セツシー覚悟おっ!!」

近接格闘用のナイフを取り出して爆炎へと突入…でもセツシーはそこにはいなかった。どこにいつちやっつたの!?

「私は何回も俊葵さんと訓練をしていますのよ? 俊葵さんが煙幕を好むのは既に承知の上…そして数日とはいえ俊葵さんが本音さんに稽古をつけているならば戦術が似てい

て当然。さようなら…本音さん」

ああ…負けちゃった。俊くんの役に立てなかった…。

「ごめん…ね」

私はこうして意識を手放した。

「2対1か…まあ予想はしていたけどさ。いざこんな状況になると緊張するよ…でもそれと同時にワクワクする」

「そんな事言つて…左目を開放してはありませんか。箒さんとの勝負でいっぱいいっぱいでは？」

「いや…箒一人相手にするのは刀一本で事足る。だけどセシリアがいるならもうちよつと使わせてもらおうよ」

拡張領域から更に7本の刀を取り出す。そして嵐のシールドビットがあつた箇所に装着して構えた。

《俊葵選手はまさかその8本の刀で戦うつもりなのか!?これは面白いです。果たして二刀流の箒選手はこれにどう対抗するのでしょうか!?》

「剣を馬鹿にしているのか。刀は多ければいいというものではない」

別に馬鹿にしているつもりはないんだけどなア…。

俺はとりあえず箒に攻撃を仕掛けた。特に奇襲とも言えない一撃だったので簡単に防がれる。でも剣撃は防げてでも爆破は防げないだろう（ニヤリ）

「点火あ!!」（カチリ）

刀の柄の部分に有るスイッチを押しで爆破させた。

「箒さん!!」

よそ見しているセシリアには新たに取り出したナイフを投げる。

「ッ!」

当たる寸前で避けられてしまう…がしかしそのナイフは特別製でね。

「点火あ!!」（カチリ）

爆発するんだよね♪

《俊葵さん…なんてお人だ。こんなトリツキーな戦い方を見た事はありません!!》

俺は箒とセシリアに隙を与える間もなく攻撃を仕掛ける。二人同時には無理だから後衛のセシリアから狙う。

「くっ…こんな卑怯な」

「卑怯？ルールに則って戦っているのに失礼だなあ」

セシリアは俺のナイフの一撃を近接用ブレード《インターセプター》で受けながら憎々しげにつぶやく。そんなセシリアに俺は更にナイフを取り出して切り付ける。

「実力主義なのですね。とても崇高な信条ですこと」

「違うな…俺は実践主義で礼儀正しい男だ。だからこそルールの範疇でできる作戦を最大限に遂行している」

「では私たちのコンビンেশョンも卑怯ではないな!!」

本気が切り掛かってきたので一旦、セシリアから距離を取って体勢を立て直す。しかしそれがいけなかった。セシリアはこの機会を逃すものかとビットとライフルで俺を追い詰める。そしてクールダウン中も箒の一撃離脱の居合に少しずつだが俺のシールドエネルギーが削られていった。

このままじゃあ負けちまうな…いくら俺が強くてもビットもトランザムも使えない嵐なんてちよつと高機動な器用貧乏になってしまう。

《私たちは夢を見ているのか!?!なんと俊葵さんが追い詰められている!!これは箒・セシリアペアの優勝かあ!?!》

仕方ない…これだけ言われたら使わざるを得ない。これだけは使いたくなかったけど……外部装甲パージ!!

全身装甲の一部をパージして箒とセシリアに向けて発射した

「もう煙幕は通用しませんわ」

「二度も同じ手に引つかかるか」

「油断大敵だぞ…目を凝らしてよ…く見ろ!!」

すると二人は馬鹿正直にハイパーセンサーを起動させて破片一つ一つに集中する。勿論、俺の狙いはそれだ。二人の意識が破片に集中した一瞬を見逃さずにスイッチを押す。すると破片は強烈な光と共に爆発した。

「ぐう…閃光弾だと」

「これは…予想外、ですわ」

両目を手で押さえる二人は隙だらけで最後の一撃を加えるのに時間はかからなかった

ビーーーーー!!

《試合終了おおおお!!クラス内タッグマッチを制したのは俊葵・本音ペア!!》

ふう…何とか勝てた。このままじゃあダメだな…箒たちには失礼だがもつと楽に勝てるようにならないとな。臨海学校や文化祭と作中でも大きなイベントがある。本来なら一夏たちで解決すべき問題だけこの世界には俺ガイル…だったら俺がどうにかしなきゃいけないだろ。俺はまだまだ強く成らなきゃいけないんだ。

39話 R-18 俺と本音とクーちゃんと… 前篇

全ての試合が終わり学年全体でお疲れ様パーティーが学食で開催されていた。パーティーの主役はそれぞれのクラスで優勝したペア。詳しく聞いてはいないが鈴と簪は無事に優勝したらしい。ぶつちやけ一週間後にも大会があるので特に気にしてはいない。しかしみんなはそうではないらしく…

「優勝おめでとう」

「流石は専用機持ち。私たちとは一味違う」

「今度、私たちと一緒に訓練しない？ISよりも私を操縦しても…良いよ♥」

「私って結構、テクニシャンなの／＼／寝技…試してみない♥」

「私のご主人様になってください♥」

E t c . . .

「はあ…」

「折角優勝したのにテンション低いよお〜マツチ〜」

「本音は嫌じゃないのかよ…」

「何が？」

「他の女が俺に言い寄って来てる事がだよ」

俺の女が俺以外の男に言い寄られてたら間違いなくその男は俺に《削除済み》されるだろう。本音たちに嫉妬心というのはないのだろうか。

「だってマツチーはちゃんと私たちの事を見てくれるから安心できるんだあ〜」

「……………くう／＼／」

面と向かつてそんなこと言われたら照れるじゃあねえか。てかみんな俺たちを見てニヤニヤしているぜ。本当に恥ずかしい…。

「ヒューヒュー♥」

「え!?! 俊葵さんと本音ってそういう関係!?!」

「知らなかったの? 大会の一週間前から同棲していたのよ? それに本音のあのセリフ…間違いなく俊葵さんは本音を食べた後ね」

「ええ〜羨ましいい〜。私も俊葵さんに告白しようかなあ〜」

「止めときなよ。だって確認が取れているだけでクロエさん、本音、簪さん、そしてロシア代表の楯無会長と付き合っているのよ? 私たちじゃあつり合いが取れないわ」

「ふえ〜凄いメンツ。それに比べて私は一般ピープル…諦めるしかないわね」

「せめて専用機が有ったら…はあ」

俺の基本スタンスは『来る者を拒まず、去る者は殺す』だから受け入れはするんだよなあ。ただ束との関係を今のところ外に漏らすわけにはいかないから安易にハーレムは増やせない。束との関係を公式に発表出来たらいろんな国が俺に候補生を近づけるだろう。それからでも遅くはない。

「なあ本音。俺ってモテてるの?」

「え? 気付いていなかったの? マッチー凄くモテてるよ。だってファンクラブがあるんだよ。羨ましいよ」

何それ、初耳なんだけど。俺のファンクラブだって? ……今度、挨拶がてら顔を出しても罰は当たらないだろう。

「それよりも早く料理を取りに行こう。セッシーとしてののんが待つてるよ」
「お、おう……」

その後は箒たちと談笑や食事を楽しんだ。夜遅くまで楽しめたらよかつたのだが消灯時間は変えられない。お疲れパーティーは千冬さんに止められるまで続いた。

IS学園 生徒寮 俊葵 自室

この部屋には沢山のモノが置いてある。しかしどれも学生寮には似つかわしくないモノばかり。例えばマルチデスクの上に置いてある4Kモニター……の隣にあるPS4とヘッドセット。本棚に本と一緒に陳列してあるフィギュアとBD BOX…そして

多数のゲームソフト。しかしそれ以上に異彩を放っているのが…

「ふう…／＼／＼／＼／＼／」

M字開脚で足を固定され猿轡と手錠、そして目隠しを装着されているクロエだろう。本音へのご褒美とクロエへの《おしおき》を同時に行うために俺の部屋に来てもらった。シャルルには今夜だけ地下にある俺の部屋で寝てもらっている。お預け続きだったのでオナニーすると思う…ので監視カメラで監視中。そんな事も知らずに寝ているんだろうなあ。

「クーちゃん興奮してるねえ。ねえねえ俊くん、クーちゃんが何を考えてるか分かる？」

「うくん…つとだな。『ああ♥縛られて身動き一つできない状態なのに俊葵様の愛を感じます♥見られている／＼／私の隅々まで俊葵様に／＼／ハアハア／＼／もつと私を辱めてください♥(CVクロエ)』って感じだな」

「すごい。俊くんって声帯模写もできるんだ」

驚くところはそこかよ…と言うかクロエもクロエだ。こんな縛られているのに興奮しているだなんて最高じゃあないか。

「ま、クロエはこのままにしておいて俺達は楽しもうか。クロエへのお仕置きは俺達のエッチを目の前で見ることだ」

「目隠しされてるのにな？」

「……………。いいじゃないか。取り敢えずヤルぞ」

本音をベッドへ押し倒すとボタンを一つ一つ外していく。

「服くらい自分で脱げるよ／＼／＼もう…今日の下着はセクシーじゃないのにな」

黒は女を美しく見せる。では白はどうだろう。白は女性を品よく見せる。女性と言うのは不思議なもので下着の色によって風格が変わるものなのだ。今、本音が身に着けているのは純白でシンプルな下着。とても俺好み（そもそも美しい女性が身に着けた下着が好き）のイイ下着だ。

「す／＼綺麗だよ」

腰に手をまわして本音の香りと感触を楽しむ。本音も俺の背中に手をまわして楽しんでるようだ。

「俊くんってかなり逞しいよね。鍛えてるの？」

「実はこの筋肉とかは超能力で成型してるんだ。みんなには内緒だよ」

綺麗に割れた腹筋も皮膚をパンパンに張らせる筋肉も超能力で作ったものだ。それでもきちんと筋肉としての役割はこなしてくれるし、心肺能力も強化人間なのでその辺の男とは違う。

「ふうくん…ペロ」

「ん…まだ風呂に入っていないから汚いぞ」

「そんなことないよお。俊くんの味がする…私ってこれくらいの事しかできないから…。クーちゃんやお姉ちゃんみたいに家事や書類のあれこれは出来ないし、東博士みたいに頭良くないし…だからせめて俊くんを癒してあげられたらなあつて。この傷跡もすごく痛そう…ペロ」

ぎゅ…

「俺だって心配なんだぞ。俺も東より頭良くないし、忍耐力もないし、自己中心的だし、なにより体中傷だらけだ。そう考えたら可愛くて俺を癒してくれる本音の方がよっぽどつかましいや」

「私は俊くんのカラダ大好きだよ。なんだか漫画の主人公みたい。…ちゅ♥えへへ俊くとちゅーしちゃった／／むぐ…んちゅ、ん…じゅ、じゅる♥ちゅる…ちゅ、んちゅ♥俊くんのおちんぽ、パンツの中で大きくなってる。私で興奮してくれたんだ…もつと興奮してほしいな♥」

「もうかなり興奮してるよ。…舐めてくれるか」

「うん／／あむ…んちゅ、ちゅ、ちゅる♥」

本音が舐めやすいように仰向けに寝転ぶ。すると本音は俺の股の間に顔を近づけて

愛撫し始めた。丁度、俺の弱いところを的確に愛撫するものだから長くは耐えられそうにないな。しかも本音の愛撫はただ愛撫に非ず。いやらしく音を立てながらの上目遣いフェラ…これは良いものだ。

「気持ち良さそう♥じゆる、ん、んちゅ…じゆる♥えろ…ちゅ、ちゅ…じゆるるる♥んふ…ふはあ／／かたーい／／血管も浮き出てるし舐めるたびにビクンビクンつてするよお」

「とりあえず出そう…口の中に出していいか？」

「うん…らひて♥じゆる、じゅ…んちゅ、ちゅ、ちゅ…らひて♥全部飲んであげるから…えろ、あくむ…んう。ちゅ……んぶツ!?ん…ん…♥(ああ／／いっぱい出てるよう♥)んく…んく…ふはあ♥」

俺は我慢せずに本音の口へ精液を流し込んだ。あふう…久しぶりの射精だったからかなり出たな。まあ、初めの一発はこんなものだろう。

本音は目の端に涙を浮かべながら苦しそうにごく…ごく…とゆっくり口の中に出された俺の精液を飲んでる。口を離さないところを見ると嫌ではないようだ。

「ん…んぐ…ふう／／全部飲んだよお♥凄く美味しい」

「いやいや、不味いだろ。苦いし臭いし…なんだってあんなもんを飲めるんだ？」

「俊くんのだから飲めるんだあくえへへ。今度は私のも舐めて欲しいな♥」

すると今度は本音が寝転がり俺を待つ。俺は本音の太ももに手を当てゆつくりと本音を秘部を観察する。本音の秘部は既に濡れていた。きつと俺のを舐めている時自分で弄っていたのだろう。

「それじゃあ行くぞ……ん」

舌を伸ばして（物理）本音の鼠蹊部を舐める。まずは外からゆつくりと攻めていこうか。焦らずゆつくりと……時間はあるんだ。

「ふふ……くすぐりたいよお。ん……俊くんの長い舌すごい／＼／＼こんな他の男の人じゃ絶対にできない」

「させてたまるかよ。俺の女には誰も手出しさせない。だから安心しろ本音」

「うん……私も俊くん以外の男の人とエッチしたくない。濡らしくてカッコいい俊くんが好き♡」

嬉しい事を言ってくれるじゃあねえか。よっしゃ!!今夜は出血大サービスだ。あんな所やこんなところまで舐めまわしてやるぜ!!

俺は舌を分裂、延長させてちよつとした触手モンスターを作り出す。舌を本音の手足に絡ませて体中を優しく舐めまわし始める。

「ひゃうっ!!そ、そこは!!あはははは!!だめ、くすぐっつ!!だめえくっ♡」

じたばた暴れて逃げようとするが俺から逃げられる訳がなからう。動けば動くほど

舌が本音の柔肌に食い込み愛撫をする。

「はあ…はあ…／＼／＼もう…気持ち良すぎて限界い♥」

「まらまらこれから（まだまだこれからだ）」

舌を出したままだと喋り辛いな…テレパシーで良いか。

『そんなにくすぐつたいなら舐める場所を変えようか。どこを舐めて欲しいか言つてごらん』

「じゃあ…お…こ／＼／＼」

『声が小さくて聞こえないなあ。もつと大きな声で言つてくれ』

「うう…恥ずかしい／＼でも俊くんがそれで喜んでくれるなら何でも言う…」

縛られ顔を真っ赤にしながらも俺の為に…あ、さつき射精したばかりなのにまた大きくなつてきた。

「おまんこを舐めて…今度は外じゃなくて膣内をお願い♥」

『任せろ…とびっきりの快楽を与えよう』

本音の身体の拘束を解いてやり、ベッドへ寝かせる。そして舌を一本に戻すと豊満なおっぱいを揉みながら本音の膣内へと舌を侵入させた。

「んう!!しゅごひい…子宮口までとどいてりゆう♥」

『本音のココ、凄くいやらしい味がする。』

「そんなこと……言わないでえ♥ひう……俊くんの舌気持ち良い／＼／私、俊くんに犯されてるう……おまんこの中を俊くんのペロに犯されてるう♥」

おまんこばかりに集中すると本音がかわいそうなのでおっぱいも優しく揉んであげて。すくい上げるように下から手を添わせて摩るように包み込む。汗を掻いているので普段のさらさらとした感触と違いしっとりとしているのがこれまた良し。

「おっぱいも一緒にいじっちゃあ／＼」

『でも乳首が固くなってるぞ……感じているんじゃないのか?』

「うん……感じてる／＼／あ、誰でも良い訳じゃないよ……俊くんだからこうなってるの♥」
うっ……めちゃんこ可愛い。俺の息子も痛いくらいに勃起している……ハメたい。

「ふふ……入れて良いよ♥もう我慢できないんでしょ?」

本音の心遣いに甘えるのでしょうか。俺は舌を抜いて亀頭を本音の秘裂に宛がい、腰をゆつくりと前に突き出して挿入する。きつとエッチな漫画なら『ぬぷう』って擬音と共に挿入されただろう。本音の膣内はとてもふんわりとしている。東のおまんこが全てにおいて高水準の名器だとするなら、クロエのおまんこはキツめで締め付けがみんなよりも良い。しかしふんわり加減とぬくぬくさでは本音がダントツで一番だ。東には辛い辛い本音のおまんこは本当に柔らかくて温かく、優しく俺のちんぽを包み込んでくれる。

「んう…えへへえ〜♥ 俊くんのおちんぼが根元まで入ってる…動いて良いよ。私もすごく気持ち良いから♥」

俺は本音の言葉に甘えて腰をゆっくりと前へ突き出してピストンする。入れる時は柔らかな膣壁が俺のちんぼを優しく包み込んで、抜くときは入れる時と打って変わって抜けないように吸い付いてきた。

「すげえ吸い付き…そんなに抜いて欲しくないのか?」

「うん♥ だって俊くんのが入ってるだけで身体が勝手に反応しちゃうんだもん／＼ん…おちんぼの先が子宮口に当たって気持ち良い♥」

「どうやら何度もセックスするうちに本音のポルチオ性感帯は俺に調教されていたらしい。」

「あ、あう、俊くんのカリ高おちんぼに犯されてる♥ こんなにすごいおちんぼに犯されるなんて最高だよ♥」

……………エロい。

「ん…やっぱり俊くんってエッチの時に私の心読んでるでしょ? だ、だってえ…こんなに気持ち良いんだもん♥ ぐちゃぐちゃって音を立てて…私のおまんこいやらしいよお／＼／」

「エッチの時はそんなことしないよ。互いに信じあってるからこそセックスは気持ち良

いんだ。だから俺たちのセックスが気持ち良いのは俺たちの身体の相性が最高だって事」

「私が一番…：相性イイ？」

う…：一番して欲しくない質問。一番じゃない訳じゃないんだけど部分的に一番ってだけだしなんて答えようかな。

「なくって一番は束さんだよ。嫌な質問してごめんね」

「んなことあない!!」

「んあ!!」

「あ、ごめん」

感情が高ぶって前かがみになったせいで本音の中に思いきり入れてしまった。痛い思いをさせてしまったな。

「本音が一番じゃない訳じゃあないんだけど皆それぞれが良い味を持つてるといいうか、気持ち良いというか…：だから…：」

「うん…：俊くんの優しさはちゃんと伝わったよ。でも俊くんって欲張り」

「うっ…」

「そんなところも好き。今日は大丈夫な日だからこのまま膣内に…：お願い♥」

なんてイイ女なんだ本音は…：よっしや!!めちゃんこ気持ち良くしてやるぞ。

「あう…気持ち良い♥ 太くて大きいけど痛くない…不思議、こんなに大きなものが私のおまんこに入るなんて♥」

「気に入ってもらえたなら嬉しいよ」

「うん、これ好き…突かれるたびに、あつ…ぐちゅって音が／＼／＼ダメエ…音を立てないで♥」

「わり…でも、ハアハア…：我慢できない」

「あ、あつ♥ イイ…：子宮が疼くよ♥」

本音のおまんこも締めまりが強くなりイク準備をしているようだ。俺のちんぽも裏筋辺りがムズムズして射精してしまいそうになる。こらえろ…こらえるんだ。

「ひゃう…もう、もう無理い♥ イキそうだよ♥」

「我慢なんかする必要はない…ぞ。俺もそろそろイクそうだ」

「じゃあ一緒にイキたいな♥ そう…もつと気持ち良くして／＼／」

まずいですよ。イク…もう、辛抱溜まらん!!

どびゅっ!! っと思いきり切り鈴口から大量の精液が本音の子宮に流れ込む。子宮に収まりきらない精液は膣内を駆け巡り本音の秘裂から流れ出てきた。

「私もイックうううう!!」

俺の射精と同時に本音もイキ、子宮が更に締まった。射精しながらのピストンにこの

締め付けは…

「ふえ!?ま、待って!!まだ出るn…んう♥まだ出てる…あふう♥」

本音のおまんこからちんぽを引き抜くと膣内から大量の精液が流れ出る。こうして見ると俺の性欲つてすごいな…。

「凄く気持ち良かった…♥えへへ〜♥」

「俺も最高だったよ。でも収まりがつかないから…さ」

「イツたばかりだから口でしてあげるね♪」

そう言つて俺の股に顔をうずめようと本音は…

「むぐー!!」

いきなり声がしたのでそちらを向くとクロエが顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけている。あ、目隠しは何とか外せたんだ。

「ほふへははりふふひへふ!!(本音ばかりずるいです)ははひひほいえふえふあふあふ!!(私にも入れてください)」

やべえ…クロエの事さっぱり忘れてたぜ。取り敢えず喋り辛そうだし猿轡は外してやるか。

「ふう…ありがとうございますごいます俊葵様。猿靴葉を外して頂いた上でこのようなお願いをするのは誠に恐縮ですが…その…私も犯してください♥あのように濃厚な空間を見せ

つけられては私も我慢できません♥」

めちゃんこ抱きたいけどお仕置きにならないしなあ。どうしたもんか…

「試合でのことならいくらでも謝罪いたします。どんな命令もお聞きいたします!!」
「から私を犯してください…」

「流石に可哀想だよ。クーちゃんも犯してあげて」

んう…本音が言うなら仕方なし。クロエも犯すか…実は俺も犯したかったし。
「それじゃあしつかりと奉仕しろよ」

クロエの拘束を全て解いてやる。さて…後半戦の開始だ。

「ああ／＼俊葵様の…はあ♥」

「クーちゃん幸せそう」

39話 R-18 俺と本音とクーちゃんど… 中篇

「俊葵様の…既に大きくなられて／＼」

「感想を言ってる暇が少しでもあるなら俺を気持ち良くしろ」

俺も昂っているのぢよいSになっているのが分かる。クロエも物欲しそうな目でこちらを見ているので嫌ではない…寧ろ感じているようだ。

「では…あむ、じゆる…ん、ん♥ふごいれふ…ちゆる、ちゆ、えろ♥とても美味しゅうございます／＼」

「クーちゃんおいしそう♥ねえ私も舐めて良い?」

「悪いが今はクロエの時間だ。本音はまた後でな」

クロエのフェラチオを見て興奮したのか本音がフェラをねだるが俺はそれを敢えて制止する。ずっと拘束してクロエもきつかったろうし、その罪悪感からクロエには一人で味わってほしいから。

「なら仕方ないなあ…クーちゃん、俊くんを独り占めするんだからちゃんと気持ち良くしなきゃだめだよ?じゃないと私が俊くんを奪っちゃうんだから」

「分かってます、本音。ああ…私の小さい口に合わせて俊葵様のモノも小さく♥俊葵様のお心遣いが私の身体に染み渡ります♥じゅりゅ、じゅちゅ、ちゅ…ちゅ、じゅるるるる♥……………ぷはあ♥先走り汁が出てまいりましたね／＼／」

本音に挑発されてクロエも本気で俺をイカせようとする。本音の時とは大きさを変えているのでクロエの小さな口でもちゃんと根元までフェラできてくるようだ。しかしこれだけ小さくしないとフェラがしにくいという事はフェラって実はかなり苦しいのかな…今度やってみようかな(馬鹿)

「じゅる…じゅる…んく、んく…はう♥俊葵様の先走り汁が美味しすぎて…もう…イ…………クウ♥」

しよあああああ……………びちや…びちや

フェラをしながら自分を慰めていたのか、俺のチンポをディープスロートすると同時に潮吹きしてしまった。床に水たまりを作りながらアへ顔で俺のチンポを喉の奥まで啜え込むクロエ…うっ、エロ過ぎ…俺も…イク。

「んぐ!?ずず…ずず…ぐくん…ぷはあ!!急に大きくなられて♥私の口で感じて頂けたのですね♥」

「誰が口を離していいと言ったあ?ちゃんと根元まで啜え込んで全部飲め」

クロエの頭を両手で押さえつけてもう一度根元まで押し込む。まだ射精の途中だっ

たのでクロエの口の中いっぱいには精液を吐き出す。これには流石のクロエも吐き出してしまった。

「…ッ!?げほっ!!げほっ!!…も、申し訳ありません…ですがごぼした精液はきちんと舐め取りますので…」

なんだか胸の奥がゾクゾクする。四つん這いになって床に零れた精液をクロエ…エロ過ぎ。なんだろ…メチャクチャ虐めたい!!

「ああ…俊葵様のおみ足も…ぺろ、ぺろ…とても美味い…俊葵様、俊葵様あ♥」

「凜としたクロエも可愛いが奴隷のようなクロエも堪らないよ。身体を重ねることに俺好みになるな」

「本当ですか!?!はう…そのお言葉だけで達してしまえそうです♥…ちゅ、ちゅる…もつと…もつと欲しいいれふ♥おまんこもこんな…////」

クロエの股を覗き込むと愛液でぐしょぐしょになっていた。きつと潮吹きした後も自分で慰めていたのだろう。

「ふえ?…と、俊葵様!?!そこは恥ずかしいです////」

クロエの膣内に入れたくて痛いくらいに勃起したちんぽをクロエの秘唇へ宛がう。その為に両足を掴んで深山の体勢になり挿入した。

「あん♥子宮口に…届いています////でも…俊葵様のサイズ…ん…束様とセックスす

る時と比べて…ひゃ♥」

クロエが余計な事を言うのでちよつと強めにピストンをして口を塞ぐ。

「俺が好きでやってることだ。わざわざ感謝されるような事じゃあない」

「それでも俊葵様の優しさを感じる事が出来ます♥この体勢も私のお気に入りと知って…あつ♥激しい…です♥こんあに激しくされては…ああ、もうダメ…もういつてしまいます♥」

愛液と先走り汁でぐちやぐちやのクロエのおまんこが更に俺のチンポを締め付けてイカせようとするのが分かる。俺と一緒にイキたいのだろう…可愛い奴め。それじゃあちと早いけど加速するぞ!!

「だ、だめれしゅ♥おまんこ、おまんこ感じししゅぎれるのおくく♥俊葵様のおちんぼを入られるだけでイキそうなのにい…こんな激しくされたりやああ♥」

「俺も…クロエのおまんこが俺のちんぼを締め付けるもんだから俺もイキそうだ。はあ…はあ…膣内に全部出すからな!!」

ピストンの速度を速めてクロエの子宮口へゴツゴツと亀頭をぶつける。正直、興奮しすぎてクロエの身体の事なんて考えていない。

「あゝあ!!おぐぎでまず♥わだしのおまんこの中で!!太く!!大きくなつてます♥削り取られるう♥おまんこ削り取られてイグ!!いつじやうのほおおおおお♥」

「俺も…イク!!」

イク寸前に思いきり腰を突き出してクロエの子宮へ直接、精液を注ぎ込む。クロエはあまりの快楽にアへ顔を晒している。そんなクロエを見てみると俺の息子は再起動… まだまだイケるぜえ!! クロエ!!

「ま、まだ固ひい!! イつてます♥まだイつてるのに!! こんな激しいピストン… たえられにやい♥ ハア… はあん、もう好きにしてください♥ おまんごも、おっぱいもお!! 俊葵様の好きなように犯し尽くじでえええええ♥ あ、あ、あ、あ… …♥」

「こんなにいやらしい女を犯してるんだ!! 一回の膣内射精で収まるか!!」

「イ、イ… イイです♥ ひう… あ、あ… …♥ 俊葵様の… また固くなつて♥ らひて… もう… どこにでもらひてくらはいいいい♥ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!」

二度目の膣内射精をする頃にはクロエは白目をむいて身体をガクガクと震わせるほどの快楽の絶頂に浸っていた。さすがの俺でも本音から連続続きだったので少し萎えている。

「ハア… ハア… 流石に疲れた」

「すごい、俊くんのおちんちんまだ少し硬いよ」

半起ち状態の俺の逸物をフニフニと握る本音。ああ… そんな風に触られるとまた…。

「これでまた私と…」

そこまで言うとは本音は俺の後ろを見て固まってしまふ。え？何？俺の後ろに誰かいるの？

恐る恐る振り返るとそこには一人の鬼が立っていた。

「私は学生らしい清く正しい交際をしろと言っていたはずだが？」

千冬 降臨

「もしかして嫉妬ですか？ぷぷぷブリュンヒルデ（処女）が嫉妬してやんの〜」

ぐしゃ!!

俺が最後に知覚したのは右腕を振りかぶる千冬さんと何かかひしやげた音だった…。

「流星は強化人間…私の本気の正拳を顔面で受けて無事に復活するとはな。まあ…束の夫になる男ならそれくらいはして貰わないと困るが…」

ええ…束の恋人ってハードル高すぎ。でもそれくらいじゃないと釣り合いがとれないのも事実…てかここ何処？さっきまで俺の部屋にいたはずなのに。

「気絶したお前を私の自室へ運んでやった。クロニクルと布仏はちゃんと寝かしつけてきたから安心しろ」

いや…貴女の寝かしつけるはなんか怖いな…。

「それにしても…地下へ行ったらお前の部屋でデュノアが寝ていたのでもしやと思っ

たが……。案の定だったな」

「俺もまさか千冬さんに人の情事を覗く趣味があったなんて思ってもいませんでしたよ。本当のところ……まさか俺に抱いて欲しくて嫉妬してたり？」

「……………／／／」

俯いちゃった……え？えええ!!嘘でしょ……あのブリュンヒルデが、織斑千冬が!!いや、俺の事を好きだって知ってたけど自分の教え子に嫉妬してたの!？」

「え、えつと……取り合えずお風呂に入つて来てもいいですか？さつきまで……ああ……つと、汗かいちゃったので」

「分かった。では私も入るとしよう／／／」

「俺と？」

「ああ!!」

「え？」

「え!!」

なんてテンポのイイ会話だろう。ちよつとした冗談で一緒に入ろうと言っただけなのに了承されてしまった。まさか千冬さん……

「こ、これからその……す、するのだろうか？なら風呂くらい一緒に入つてもいいではないか」

なんだろうこの感情は…一夏に対する罪悪感と千冬さんに対する愛情がごちゃ混ぜになって訳が分からない。でもこれだけはハッキリと確信を持って言える。俺は今夜、千冬さんを抱きたい!!

「そうですね…じゃ、じゃあ入りませうか」

脱衣所

流石は千冬さん、脱ぎっぷりが男前だ。つつい千冬さんの脱衣に目が行ってしま

う。
「千冬さんの身体マジで綺麗だ…。均整の取れたボディ…束たちとはまた違った美しさがあります」

「褒めるな／＼／俊葵だつてなかなかどうして筋肉質で良いと思うぞ。だがこの傷跡は…」

千冬さんは優しく俺の傷跡を指でなぞる。それはお腹、背中、脇腹と場所を変えながらじっくりと観察するように。好きな人に身体を触られるのはとても気持ちが良い、と言うかかなり安心する。

「やはり私はお前を守r」

「はい、それ以上は言っちゃダメです。俺はやりたい事をしてこの傷を負ったんです。

だから何も言わないでください」

「しかし教師として、東の親友として本来は私が!!」

「じゃあ俺は東の恋人としてこの傷を負いました。それで良いじゃないですか」

千冬さんは気負いすぎなんだよ。もつと気楽に生きて行こうや。

「それで…良いのか?」

「千冬さんらしくないですね」

「そうかもな…俊葵、お前といると調子が狂う。なんだかすぐく甘えなくなるのだ…」

全裸で俯いて顔を赤らめる千冬さん。……なにこの可愛い生物

「だが私は教師だ。それにブリュンヒルデ…そんな私が甘えるなんて迷惑だろう?」

「そんな事ないですよ。めいっぱい甘えてください…俺、千冬さんの事が大好きですか

ら」

俺の本心を改めて真っ直ぐに伝えると千冬さんはまたうつむいてしまった。でも心なしか口角が上がっていたのを俺は見逃さなかった。

ぎゅ…

「いつも俺が甘えているから今日は千冬さんが甘えてもいいんですよ?」

「生意気なことを言いおつて…だが、凄く心地がいいな」

「でしょう?でも、千冬さん…俺は凄く脆い人間なんです。ちよつと小突かれたらばら

ばらに崩れ落ちる積み木のような男です」

俺の事は俺が一番よく分かっている。俺の心はガラス以上に壊れやすい紙装甲だ。本当にそんな俺でいいのだろうか…。

「知っているよ…だからこそお前を守ってやりたいと思う。でもお前が優しい男だと知っているから甘えたいんだ。不思議な男だ…とても不安定で保護欲を掻き立てられると同時に甘えたくもなる」

「でも今夜は千冬さんに甘えて欲しい気分です」

「ああ、私も甘えたい気分だ。ふっ…私をここまで惚れさせるなんて大した男だよ。よし!!風呂に入るぞ!!」

「お、おう…//」

教師の部屋はやっぱり生徒よりもいくらか優遇されているんだな。浴槽の広さとか棚などのオプションが学生寮と違う。地下の部屋の方が広い事に違いはないけど、それでも二人で入るのに困らない広さはある。

「教師の部屋ってやっぱり生徒とは少し違うんですね」

「当たり前前田のクラッカー。とはいえ地下にあるお前の部屋に比べたら月と鼈だな」

おれに後ろから抱きかかえられるかたちで湯船に浸かっている千冬さんが応える。

たまあに思うんだけど千冬さんって古いよね、色々と

「なにか失礼なことを考えただろう」

流石千冬さん、鋭い!!略してきす☆ちふ

「分かりますか？」

「なんとなくだ」

「なんとなくですか」

「ああ、なんとなくだ」

………しゃべることが無い。千冬さんも俯いて顔を赤くしてるだけだしどうしようか。

数分間の沈黙の後に千冬さんが口を開いた。

「私で良いのか？」

「貴女だから良いんです」

「家事は苦手だぞ？」

「メイドを雇います」

「そこは普通『俺がします』と答えるところだろう」

普通はそうかもね…普通は

「千冬さんは俺で良いんですか？」

「お前だから良いんだ」

「そう…よっしゃ!! さっさと風呂から上がってやりましょう!!」

千冬さんも動揺しているが嫌ではないようだ。俺は千冬さんの手を取って湯船から上がり、バスタオルで俺たちの身体を拭く。そしてバスローブを着てからベッドに腰かけた。

隣にはバスローブ姿の千冬さん。風呂上がりだからなのか興奮しているからなのかは分からないが頬が朱に染まっていて色っぽい。しかもボディソープやシャンプーの匂いが俺も興奮させる。ここに来てまで俺は『本当に俺でよいのだろうか?』なんて野暮なことは考えたりしない。

「それじゃあ…えっと…千冬さんは初めてですよね?」

「当たり前だろう…俊葵が初めてだ／／」

ぎゅ…

「ひゃ♥い、いきなり抱き着く奴があるか!!」

「もう我慢するのは嫌です。俺は今夜、千冬さんを俺の女にします」

「私はもうお前の女だ／／だからその手を離しな…んう♥」

後ろから抱き着きながら大きな乳房をすくい上げるように揉む。本音よりもほんのちよつぴり小さいが張りがあつて指を押し返す感触が心地良い。感触だけを言えば楯

無やシャルルのおっぱいに似ている。

「止めろと言ってる……くうん♥声が……勝手に出て……／＼／」

俺の手の中で世界最強の人類が喘いでいる。なんて素晴らしい!!

「触り方がいやらしい……ぞ／＼／わざと乳首を避けているな……このお」

「気持ち良くないですか？」

「気持ち良い……だが、癩だ。この私が男に良いようにされるなんて……／＼／」

しおらしい千冬さんはギャップがありとても可愛い（確信）

「タダの男じゃないですよ。世界で一番強い男です」

「そう……だな。ん……もつと、揉んでくれ／＼／」

「お、素直になりましたね」

「……馬鹿者／＼／」

千冬さんの許可も下りたので、出来る限り優しく乳房を揉む。すべすべで肌触りも最高だ。本人は何の手入れもしていないのだらうけどスタイルグンバツで髪も綺麗……何も知らない人にモデルやってますとか言ったら信じるだらうな。

「んう……東たちにもこんなことしているのか？」

「今は東たちの事を言うのは止めましょうよ。ここには俺と千冬さんしかいませんので」

「それも…そうだな／＼／俊葵…その、キス…しても良いか？」

俺は返事の代わりに顔を近づけて千冬さんの唇を奪う。こんなサプライズは苦手なのか顔が真っ赤だ。可愛い千冬さんにはご褒美を…

「んう!?ちゅ、ちゅ…んちゅ♥ん、ん、ちゅる…:…ぷはあ♥いきなり舌を入れる奴があるか／＼／」

「でも喜んでるじゃないですか…上だけじゃあなくてココもね」

千冬さんの秘部に手を伸ばしてショーツのクロツチをなぞると既に愛液で濡れていた。胸を触り、キスをしただけなのに濡らすなんてえつちい女だなあ。

「そこは…汚いぞ／＼／」

「千冬さんの身体に汚いところなんてありませんよ。それに気持ちいでしょう?」

「あう…なぜ…一人ですると全然…♥」

そりやそうだろ、同じトコロでも触る人が違えば快感も違う。千冬さんには最高の快楽を味わってほしいのでちよつと本気出しちやおうかな。

「あつ…そこばかり／＼／も、もう十分に濡れているだろう…:…だから、その…／＼／」
千冬さんが何を求めているかは知っている。こんな簡単な事は心を読まずとも分かるよ。でも俺は…

「千冬さんの言葉でハッキリと言ってくれないと分からないなあ（棒）」

「ぐぬぬ…分かっていくせに。……い、言えばいいのだろう。ふう……と、俊葵のを入れてくれ／＼もう指だけじゃ切ないんだ／＼」

「俺の…なんですか？指？それともおちんぽ？」

「お、おお、おち…おちん…ぽだ／＼頼む…早く私を女にしてくれ♥」

ベッドに横たわり、自分で足を開いて俊葵に自分の恥部を見せる千冬。羞恥心にさらされながらも俊葵に抱いて欲しいという気持ちがある。そして俊葵もそんな千冬に応えるために千冬の秘裂へ逸物を宛がう。

「入れますね…千冬さんの膣内…にっ!!」

「痛っ…くう…思いのほか痛いのだな…。だが…気持ち良い♥」

「俺も気持ち良いです…千冬さんの膣内が俺のちんぽを良い具合に包み込んでくれる」

「動かしてもいいぞ。私も…もっとお前を感じたいんだ♥」

俺の背中に手をまわして抱き着く。俺も千冬さんの背中に手をまわして抱き着いて身体を密着させる。ついに千冬さんと……

39話 R-18 俺と本音とクーちゃんと… 後篇

「あ、ん…これで私は…お前と一つになれたのだな。嬉しいよ…これで私もお前のモノだ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないですか。世界最強の女が俺の下で喘いでると思うとさらに興奮しますよ」

さつきまで処女だったのにも関わらずしつかりと俺の逸物を根元まで咥え込んでいく。初めてなのは知っていたので少しだけ小さめに調節していたのだが、これだけ気持ち良いと元の大きさに戻ってしまう。

「お、おい!? んう…お前の…アレが大きく…♥」

「千冬さんの膣内が気持ち良すぎるせいですよ」

「ば、ばか者…／＼／＼あ、あ、待て…奥に当たって♥」

千冬さんはこう言っているが照れ隠しみたいだ。一突きするごとに程よく締め付けてくる。千冬さんのおまんこの最高で、裏筋とカ리를程よく刺激してくるので我慢するのが大変だよ。

「くう…ん、ん、あう……声が…漏れる／＼／」

「恥ずかしながらずに声を出してください。千冬さんの喘ぎ声もつと聞きたいです」

「そんな恥ずかしい事…できる……かあ♥」

「声…出てるじゃないですか。ここには俺しかないんだしもつと素直に感じて下さいい…ちゅ」

優しく啄むようなキスをしながら、突くごとに大きく揺れる巨乳を摩る。

「ちゅ、ちゅる…ん、やめ…あつ♥だめ…動きながら胸を…んう、揉むなあ♥」

「良い感じにとろけてきたじゃないですか。もつと快楽に素直になつてくださいよ」

ちんぽを奥まで挿入させて子宮口をグリグリと押すように腰を使う。勿論それをするのと同じにおっぱいも愛撫するのを忘れない。

「分かった…声を出す…だから手を止めてくれえ♥」

「だが断る」

俺は更にピストンを早めて、乳房を強めに揉みながら…

「ひう…あ、あ、くう…気持ち……／＼／」

「んう？なんだつてえ？」

「気持ち良い……そう言ったんだ／＼／これで良いのだろ…あう、あ、そうだ♥んあ…もつと突いてくれ♥もう痛くないから…頼む……犯してくれ♥」

「やっ」と素直になったか…。でも嬉しいな…これで千冬さんと互いに気持ち良くなれる。

「勿論です。ちゃんと気持ち良くなってくださいね千冬さん」

「ああ!!こんな…初めてだ♥初めては痛いと思っていたが、んう…あう／／きつとお前だからだろうな…／／」

俺も気持ち良いよ。一突きすることに愛液と先走り汗が絡み合っぐちゅぐちゅになる。

「千冬さん綺麗だ…」

「ん…ああ…千冬で良い♥呼び捨てにしてくれ…私とお前はそういうカンケイだ。ああ♥くつ…んあ、ああ…もつと奥まで♥」

「千冬…千冬!!」

「気遣いなんて出来るかってんだ、くそツタレ!!」

「そんな…乱暴にい♥はあ…はあん、あん、良い…はっ、はっ。イキそうだ…くそ…俊葵よりも先に…♥」

「そんな気遣いは無用だ。俺の我慢も限界だ…そろそろイク」

「ああ!!逝ってくれ…私の膣内で思い切り／／あ、あ、もう駄目だ…ん、イク♥イツクウウウウウウウ♥」

千冬はビクンと身体を大きくのけぞらせてイク。同時に膣内の締め付けもきつくなり俺も射精してしまう。ドクドクと子宮にめがけて精液を流し込んだ。

「ああ…膣内に…：…はああはあ…膣内に出てる…：はあん♥これでは妊娠してしまうのも時間の問題だな♥」

「妊娠しないように術を掛けているので安心してください。それより身体を拭くのでこつちへ」

千冬さんと体面座位の体勢になり、用意しておいた濡れタオルで千冬さんの身体を拭く。

「お、おい。このくらい私一人で」

「こういう時には男に花を持たせるもんですよ」

「…：…すまない。私もまだまだだな…」

「初めてだったんですから当たり前です。それよりもう一回お風呂に入りませんか？お風呂でも…：ね♪」

「あ、ああ…：／／／」

このあと滅茶苦茶セックスした

数時間後

流石は千冬さん…3回戦まで持つなんてさ。こんな事なら勢力増強の呪いでも使った。今は疲れきって二人してベッドに横になっている。

「凄く良かったです」

「私もだよ…：…なあ、俊葵。お前の最終目的は何だ？」

「どうしたんですか？藪から棒に」

「お前と束が何かをしようとしているのは分かるが内容が見えてこないものでな」

言うべきか、言わざるべきか…：どちらにせよ何時かは言うんだ。なら今言っても問題はないだろう。束も分かってくれると思うし。

「俺たちの最終目的は人類の宇宙移民です。今の地球には環境問題に食糧問題と色々と問題があります。だから人類の一部を宇宙に住まわせて解決をする。…と言ったところですかね」

「そんな事が可能なのか？」

「千冬さん…：まだ俺の本気を知らないでしょ？可能ですよ。俺と束が手を組めばね。…俺からも一つ聞いておきたいことがあるんですけど良いですか？」

「ああ、何でも訊いてくれ」

これだけはハッキリとさせておきたい。千冬さんに限らず俺の女全員に訊いている質問だ。

「千冬は俺の為にどこまでやれますか？」

「そうだな……まだ、分からない。でも私は必ずお前の味方だ」

「それが聞ければ十分です。裏切らないでくださいね。もしそうなったら俺は千冬を殺さなきゃいけない」

「バカ者……私はもうお前の女だ。ちゅ……♥もう寝よう、明日も早い」

そう言う俺を抱き寄せて毛布を目深に被る。俺も睡魔がそこまで迫ってきているのですぐに寝れそうだ。

千冬さんの胸の谷間に顔をうずめて静かに目を閉じる……千冬さん……

「愛してます……zzzz」

40話

クラス内タッグマッチは俺とのほほんさんペアの優勝で幕を閉じた。特にこれと言ったトラブルやアクシデントが無かったので良かったと思う。しかしこれから数日後に開催を控えた学年別タッグマッチはそうはいかない。ラウラのシユバルツエアレーゲンに搭載されたVTシステムが発動しない可能性があるからである。俺の大切なラウラのISにそんな不細工なものを搭載したドイツ軍にはそれなりの制裁を加えたいので世間にVTシステムの存在を認知させなくてはいけない。だからと言ってラウラに辛い思いはして欲しくない…むう、考えることがいっぱいで頭がパンクしそうだぜ。

「眉間にしわ寄せて…何か考え事？」

そんなにしわを寄せてないと思うのだが…まったく束も心配性だなあ。でも束が心配するくらい俺の顔がしかめっ面になっていたのだろう。心配されるというのは良い気分だ…無論、こんな風におっぱいを背中に押し当てられるのも良い気分。

「まあな」

「へえ、樂觀的な俊くんも考え事するんだ」

「失礼な奴め…俺だつて考え事くらいするさ。ラウラの I S に搭載されている V T システムについてちよつとね」

俺だけ悩むのはアンフェアだと思つたので束にも一緒に何かいい案がないか考えてもらおうか。

「あの不細工な代物か…私もアレは見逃せないなあ」

「だろ？だからと言つて勝手に外すのも角が立つてしまう。ドイツに相談しようものならそんなものは搭載してないの一点張りだろうし…やつぱりタッグマッチで暴走させてぶつ壊すしか方法は…」

「俊くんがそうしたいならそうするといいよ。私は俊くんに従うだけ…相談してくれてありがとう」

相談つて…束が俺に話をさせたんじゃあないか。まあ、一人で考えるよかはるかに良い…束に隠し事なんてしたくないし、俺もこの世界ではまだ社会的地位がしっかりしていないので束に手伝つて貰うのが良いだろう。

「じゃあタッグマッチが楽しみだね。ムフフ…ドイツ軍が慌てふためく姿が目に見えよ」

「おいおい…めっちゃ悪い顔してるぞ。それも束らしくていいんだけど」

今はこうして束と二人きり…優勝祝いに昨日は本音たちと寝たが体力と精力は有り余っている。ならする事は一つだけだろう？

ぎゅ…

「甘えたいの？」

「うん…だめかな」

「ううん、嬉しい」

はあ…束のおっぱいはやっぱり癒されるなあ。柔らかくて暖かくて…なにより良い匂いだ。このまま時が止まれば…

ゴチン!! ☆

「うごっ!?!」

「私が直々にお前を部屋まで運んでやる…ありがたく思え」

げえっ!?! 千冬!?!

「や、やめろお!! 放せよ、放してくれ!! 俺は束と…畜生!! 束え!! 愛してるぜえ!!」

この夜、俺は一人で寝る羽目になったの言うまでもない。千冬さんは俺の首根っこを掴むと引きずって俺を部屋まで連れてくると思い切り振りかぶってから投げて部屋にぶち込んだ。いきなりのご帰宅にシャルルは驚いて目を覚ますし、俺は腰を打ち付け

て痛い思いをするし…。

東も俺と寝たそうにしてたのにい…はあ、隣のベッドでシャルルが寝ているだけマシか。東と寝ようとしていた手前、シャルルを抱くのもなんだか気が引けるし大人しく一人で寝るしかない…な。

「僕じゃ役不足だったかな？」

「そういう訳じゃあないよ。東を抱こうとしてた手前、ここでシャルルを抱いてしまうと東の代わりにシャルルを抱いたって感じがして嫌なんだ」

「東博士もきつと気にしてないと思うよ？勿論、僕も気にしないし」
「違うんだシャルル…お前たちが気にするしないの問題ではないのだよ。」

「うくん…こればかりは割り切れないなあ。ま、俺が変なこだわりを持っていてるって事を頭の片隅に置いていてくれ。おやすみシャルル、愛してるよ」

「俊葵がそう言うなら僕は従うだけ…お休み、僕も愛してるよ／＼／」

布団を目深に被り寝やすいように少しの光も遮る。目を閉じると思い浮かぶのは俺が殺していった人間たちの断末魔や最期。そのたびに俺は考える…「俺のやってきた事は本当に正しい事だったのか？」と。しかし何度考えようが俺の中で答えは至極簡単だ…「正しい」に決まっている。最初は東の為に戦っていると思ひ、すべてを東のせいにしていた。でもそれはお門違いだ…なら俺は俺のために戦う。この世界に俺という存

在を肯定させるために、何よりも束たちに愛されるために戦っているのだ。

これから先も亡国企業は何度も束の邪魔をするだろう。俺は束の邪魔をするモノを全て破壊し尽くすだけだ。国だろうと一個人だろうと関係ない：そうやって俺はこの世界でzzz

地下研究所

俊葵がいないと研究所はとても静かで束が操るキーボードから発せられるタイプピング音と空調の音しか存在していなかった。立体映像キーボードなる素晴らしい発明品があるのだが束はタイプピング音が好きらしく旧式のモノを使用している。本来ならこのタイプピング音と共に俊葵の歌うアニソンが響いているのだが今日はいないのでほんのちよっぴり静かだ。まあ、クロエがいるので少しだけ音が多い：なんて詩的な事を束は考えない。考えているのはいつだって俊葵の事と研究の事ばかり。今この瞬間も俊葵の新しい装備の開発に精を出している。

「束様、今度は武装ではなくIS本体の開発ですか？」

「そうだよ。対アームズフォートIS：その名も《雷電》圧倒的な殲滅力、絶対的な防御力、神秘的(?)な機動力の3つの条件を満たしたIS。宇宙は万能型、嵐は遠距離、でも二つの機体はあくまで通常戦闘用のISであってアームズフォート戦は考慮さ

れていないんだあ。だから今度は攻撃力と防御力と機動力兼ね備えた弱点の無い要塞のような機体を作ったってわけ」

東が大型ディスプレイに映し出した機体の完成予想図を見てクロエは絶句した。

『これが…I…S? 東様には申し訳ありませんが、私にはこのISが大型の作業用ワードスーツにしか見えません』

「この大きさのISを稼働させるのには苦労したよ。宇宙に使用している縮退炉は試作機だから本来の出力は発揮できていない。だけどこの機体に搭載されている縮退炉は改良に改良を加えた…まさに縮退炉の完成形と言っても過言ではない。まあ…俊くんが持ってた設計図にはもつと化物じみた動力源があったけど…。取り敢えずこれさえあれば既存のISでは起動すら出来ないような高出力の武装も雷電なら使い放題。きつと地上で最も強い存在になるだろうね」

「ぶ、武装はどのような感じなのでしょうか?」

「基本的な武装は宇宙が装備しているオーバードウェポンの改良型かな。グラインドブレード、ヒュージキヤノン、マルチプルパルス、ヒュージミサイルをベースに連続稼働時間の増加と連射性の向上をさせた…俊くん曰く『よくもまあこんなキチガイ兵器を作ってくれたもんだ(*、ω、*)』だって。すっごく喜んでいたみたいだし私も完成が待ち遠しいよ」

好きな男性の為だからとはいえこれ程のバケモノ機体を作り上げるとは…流石は束博士です。………なのに私と来たら俊葵様の為に何もできないでいる。簪や楯無様は暗部関係で、本音はメイドですしシャルル様は工業面、セシリア様は政治及び金銭面…身体も貧相で何の価値も無い私は如何したらよいのでしょうか。

翌朝

「俊葵さん、優勝おめでとうございます」

「流石は男性パイロットです。今度私たちと一緒に訓練しませんか？」

「ああ…俊葵様♥瞼に焼き付いた俊葵様の雄姿に涙が滲みます♥」

「私を調教して貴方様の奴隷にしてくださいませ♥」

E t c

なんかおかしなセリフが聞こえたのは気にしちやダメだ。この前のパーティーで聞いたセリフがあったような気がしたがきつと気のせいだ。朝ごはんを食べに食堂に出てきたらこれだよ。一昨日の試合は教員が録画して生徒にデータを配布したらしい。どうやら代表候補生の試合や上手い試合運びをできた生徒の試合を見せて向上心を煽ると同時に目先の目標を作る為だそうだが…。

「俺の試合なんか見ても参考にならないと思うんだがなあ…」

専用機ありきのあの戦闘は一部の生徒にしか効果がないのではないだろうか。

「そんな事はないぞ。少なくとも武道を嗜む身としてはあの剣舞は参考になった。…で
きるかは別としてだが」

「そのうち俺と同じ土俵に立てる日が来る」

「ふっ…同じ土俵どころか追い抜いてやるさ」

「そりゃ楽しみだ」

今日は珍しく早起きしたので朝食もいつもより早めに食べている。そしてたまたま
見かけた箒と一緒に食事中。箒は焼き鮭定食を、俺は2ポンドステーキ、おうどん、大
根おろしかけごはん《かつお節乗せ》、豚汁《大盛》、酢豚を注文して食べている。

うむ…やっぱりIS学園の学食は美味しい。前世では基本的にコンビニ弁当だったの
で人の手が入ったものを食べる機会が少なかった。ので学食のおぼちゃんが作る料理
やみんなの手作り弁当がとても美味しく感じる。事実美味しい訳だし。

「箒の鮭も美味そうだな。今度食べてみよう」

「食べたいのならそう言え。ほら、一口やる…あ、あくん／＼」

別に今食べたいわけじゃないんだが…でもここは箒の心遣いに甘えるところ

「あくん…んう。これは…美味しい。脂の乗った身、辛過ぎず丁度良い塩加減、水分を飛ば
さないよう絶妙な焼き加減。流石はIS学園の学食だ…一味違う」

「お前は食レポをする芸能人か」

「美味しいんだから仕方ないだろ。箸も俺のを食べてみるよ。ほら」

ステーキを一口大に切り分けて箸の口の前へ差し出す

「これは…か、かかか、関節キツス!!」

いや、さつきお前が食べさせてくれたのも間接キス…まあいいか

「いらぬなら俺が喰うぞ」

「いらぬなんて言つてないだろう!! た、食べる…あむ…むぐむぐ。これはなかなか／

／

頬を染めながらも美味しそうに食べる箸、それを眺めて『幸せそうだなあ』と思う俊葵、更にその二人の様子を羨ましそうに見つめる生徒たち多数。今日の朝も食堂にいる生徒たちの視線を釘づけにしていたのは俊葵だった。

「と言う訳だ。学年別タッグマッチまで時間が無いのでさつきとペアを見つけて訓練に励め。以上、今日の授業はこれで終了だ。アリーナは多数あるが早く申請しないと訓練できないだろうから急ぐことだな」

そう言つて千冬さんと山田先生は教室を後にした。普段以上に女子生徒から話しかけられて心身ともに疲労していた俺は話をほとんど聞いていなかった。きつと次に行

われるタツグマツチに関する事を話していたんだろう。あとで箒かセシリアにでも聞か。

「ねえねえあなたは誰と組む？」

「私は〇〇と組むわ。それよりも織斑くんやシャルルくんにアピールしなくていいの？早く行かないと誰かに取られちゃうわよ」

「それが織斑くんはシャルルくんと組ませる予定みたいよ。男同士の方が気楽で、転校したてのシャルルくんにはその方が良いと思うし…それに…むふふ／＼／＼」

「それじゃあ残りは俊葵さん…」

「バカ言わないでよ…私たちにチャンスはないわ…だって本音やセシリアさん、ラウラたちが有力よ。箒さんとは毎日のように放課後訓練をしているし。はあ…専用機持ちや俊葵さんの彼女が羨ましい」

「なんて言われていきますけど俊葵さんはどなたとペアを組む予定ですか？」

「そうさねえ…正直誰でも良いかな。だって誰と組んだって負ける気しないからね」

「むう…本当にそうですから何も言えませんわ」

悔しそうに頬を膨らめますセシリアも可愛いなあ。そんなセシリアを見ていたらほっ

ぺたを突きたくなるじゃあねえか。

「次のタッグマッチは専用機同士でのペアが許されているから俊葵も油断していると危ないぞ」

「そうだけ俊葵。俺達だって毎日の訓練で少しずつ強くなってるんだ」

俺とセシリアの会話を聞いていたのか箒と一夏が話しかけてきた。箒たちの言う通り、専用機持ち同士のペアはかなり厄介だ。片方が量産機なら性能差を押し付けて無理矢理にでも勝利を掴みに行けるが二人とも専用機持ちだったらそんなことできない。

「わあつてるよ。だから俺も次の大会では武装を一試合毎に交換する予定だ。束にはその分迷惑をかけるけど勝利には代えられない」

「今度の試合はどっちの機体を使うんだ？」

「うくん…宇宙かなあ。この間が嵐だったから操縦感を忘れないためにもね」

「それは良い心がけですわね。では遠距離攻撃が得意な私と」

「いやいや、ココは敢えて近接機2機で前線を押し上げるために私と」

積極的な女は大好きだけど今回のペアはくじじやなくて俺が決めよう。ラウラの事も有るし慎重に事を進めたいからね。

41話 R-18 わがまま束と謙虚なクロエ 前篇

最近、束をかまってやれていなかった俺は地下室で束とイチャイチャしていた。ここに来る前にきちんとシャルルに断わってきている。『んじやあここ最近は構ってやれなかったから束のところへ行ってくるよ』と言ったら『本妻を大事にするのは良い事だけど妾もいる事を忘れないでね』だつてさ。……明日はシャルルと過ごさないと怖い事が起こりそうだ。

「んう〜♥久しぶりの俊くんの匂いだあ〜♥すう〜……はあ〜」

束は《人間をダメにするソファ》に座り俺を膝の上に固定して俺の匂いを嗅いでいる。俺も男だし体重が重いのだが束はそんな事お構いなしのようだ。

「ああ〜癒されるう〜♥俊くんが傍に居るだけで束さんは通常の3倍は頑張れるよ」

「本当にいいだけで良いのか?…俺に出来る事ならさせてくれよ。偶には束に何かしてやりたい」

こんな機会でもない束に何もしてやれないので今日は奉仕しようかな。

「じゃあフェラチオさせて。フェラチオされて蕩けた俊くんの顔を見るのが好きなんだあ〜♥」

「いや…だから俺は束に何かしてやりたいんだってば」

「だから私は俊くんにフェラされてほしい。それに…最近私を放ってる感じが、束さんも嫉妬しているのだよ、ぶんぶん」

むう…俺がしたいのはそういう事じゃあないんだけどなあ。ま、いいか

「悪い悪い。確かに本妻とのカンケイを疎かにするのはいけないな…頼むよ」

「うん♪大好き♥んちゅ…ちゅ、ちゅる……じゅ、じゅちゅ♥……ぷはあ♥」

本音はパンツ一丁になった俺の股の間に座り込んでパンツ越しに息子を摩っている。俺はフェラしやすいように大きさを調整して束に任す。

「えへへ。久しぶりのおちんぼ♥スンスン……はあ…イイ匂い♥それにこんなに大k…んう?」

「どうした?」

「なんだかいつもよりすごく小さくない?」

何だそんな事か

「大きすぎるとフェラが大変だろ。だから口の中に全部入れても苦しくないような大き

さと太きにしてみた。それにちゃんと根元までフェラされると凄く気持ち良いんだよ」
 「もしかして気を遣ってれたの?」

「セックスに限らず前儀や男と女のカンケイは互いに気持ち良くなkachayいけないんだ。だから気にしなくていいよ」

「じゃあ私の魅力とテクニクで大きくしちゃうんだから。あむ…ん、んじゅ♥えろ…ちゅ、ちゅ…大きすぎないから舐めやすい♥」

俺のムスコを根元まで口に咥え込んで舌を器用に使い裏筋を舐る束。いつもの大きさをならここま

で咥える事は出来なかつただろう。相手によつて最適な大きさに調節できる俺のムスコは世界最

強の逸物…反りもカリ高も自由自在。どんな男にも負ける気はしない。

「ん…ちゅ、ちゅ…おいひい♥先つぽから先走り汁がでてるよ。ちゅくく、んふふ♥なんだろう…精液つて本当は苦くて美味しくないはずなのに俊くんのは凄く美味しいよ♥」

「無理してないか?」

「そんなことないよ。むしろ積極的に俊くんを癒してあげたいなあ♥裏筋も玉も舐めてあげる…えろ、ちゅ、ちゅ…ちゅる♥血管が浮き出てる…そろそろイキそうかな?」

「ちよつと感度を上げているからな。ちんぽを小さくした分、感度を上げてつり合いを取ろうとしたんだけど失敗だったみたい。敏感になり過ぎてメチャクチャ気持ちいいや。もうイキそう…わりい」

ちんぽを小さくして感度を上げた事によって感度は濃縮され、何もしていない状態で半イキ状態になってしまう。そんな状態で束に根元まで啜えられてフェラチオをされたら耐えられるわけがない。

「じゅぽ、じゅぽ……らひていいよ…受け止めてあげるから♥じゅる…んちゅ、ちゅ、ちゅ〜〜〜♥」

「くう…コレ…まじで効く…イ…クウ…」

「んぶツ!? んう!! ん…んく…じゅる…ごくん♥…ぷはあ♥ 痛い…まだ出てるよお。ちちゃんと飲んであげるね♥ごく…ごく…はふう♥ 美味しい…」

す、吸い取られる…すごいバキュームフェラ。根元まで啜え込んで苦しくないのかな? かなり射精したはずなのに全部飲むなんて。

「ふふ…こんなに射精したのにまだ固い♥」

「大丈夫か?」

「うん。俊くんのならいくらでも飲めるよ。でも今はこつちで飲みたい気分♥」

束は仰向けに寝転がると股を開いて秘部を俺に見せつける。束のおまんこは既に濡

れて、薄い陰毛が恥丘に張り付いていた。何度見ても美しい…。この世界に来てから何度かA Vを見て自分でシた事もあった。その中でこんなに美しいおまんこはなかった…多分、補正とかもあると思うけど東は最高のオンナだ。

「東…」

「うん、キテ…」

東の上に追いかぶさり膣内へちんぽを挿入する。外だけでなく膣内も愛液で満たされていてすんなりが入っていく。ちんぽに纏わりつく膣壁がたまらなく気持ち良い。

「俊くんのおちんぽ気持ち良いよう♥あ、あ、んう…もつと突いて♥」

「言われなくたってそうするよ」

自然と腰の動きが早くなる。心なしかちんぽも大きくなった気がする。東もそれを感じ取っているようだ。

「あん♥俊くんの大きくなってる。オナニーなんかよりもずっと気持ち良い♥あ、あん、…おまんこずちゅ、ずちゅ…っていやらしい音…出てる」

「おっぱいが寂しいだろ。あむ…ちゅ、ちゅ、東のおっぱい甘くて美味しいや」

「ひゃうツ!!んう…おっぱいも同時なんてダメエ♥」

「良いじゃないか。東は俺のモノなんだか…ら!!」

「あん!!奥に届いてるよ♥遅しくて、気持ち良い俊くんのおちんぽ最高だよ♥あん、あ

…そんなに…激しくッ!!」

束となら何度だつて交わえるよ。

「嬉しい…ねえ…膣内に射精して♥今日はアブナイ…日だけど…あん♥膣内に欲しいよ。いつもは能力で避妊してくれてるでしょ?だから…ね♥」

「それは…ダメだ…」

「ん、ん…あう、どう…して?ハア…ハア…私じゃあダメ…なの?もしかして嫌いになつたの?!嫌だよう…俊くんに嫌われたら生きていけないよお」

束は目にいつぱいの涙を浮かべて俺に抱き着いてきた。嫌われるのが怖いんだろう…俺もそうだ。束やみんなに嫌われたら生きていけないよ。

「俺が束を嫌いになる事なんてないよ。だけど束だけ妊娠するのズルいだろう?」

「じゃ、じゃあ!」

「愛してるよ、束…ちゅ。妊娠はまださせてあげられないけど、特別なプレゼントをあげる」

束の右手を掴んで特別なおまじないを掛ける。するとゆっくり黒いラン科の植物柄の刺青が広がっていく。所々、ハートマークや♀マークを織り交ぜた淫紋だ。

「ハレは?」

「束が俺のオンナだつて証。俺とカンケイをもつたオンナにしか見えないからプールと

か温泉も入れるよ。ちなみにこれを刻んだのは束が最初…満足してくれた？」

「ああ…♥たまらないよ♥俊くんの童貞の次に嬉しいプレゼントだよ」

いや、俺の童貞にそんな価値はないと思うのだが…まあ、束が喜んでくれたなら満足だ。

「ところでこの花は何？」

「それはラン科セツコク属の花でデンドロビウム・ファレノプシスって言うんだ。花言葉は『わがままな美人』『お似合いの二人』『魅惑』『有能』まさに束にばっちりな花だろう」

「私って我が儘かなあ？」

「我が儘に求められるくらいがちょうどいいのさ。ちゅ…動くからな」

背中にも手をまわして抱き着いて腰を突き出す。束も俺に手と足をまわしてがっちり捕まり、より深く挿入できるように抱き着く。

「あん／＼／ふふ…じゃあたっぷり求めてあげる♥あ…ソコ…うん、良いよ♥あああ…ダメ…んう♥」

「まだ俺も学生だし…さ、他の娘も学生だ。だから皆が卒業するまで妊娠は待ってくれ。その分束にはつらい思いを」

「ダメ!!ちゅ…ん、ちゅる…ちゅる、じゅ♥んんくくぶあ♥それ以上は言っちゃダメ。

私は幸せだよ。だから、んう…今は楽しも♥」

束エ…お前、俺のハートに火をつけたぞ。

「あん、そこツ…削られる♥俊くんが腰を動かすたびにおまんこ気持ち良いよ♥俊くん

♥俊くん♥俊くん♥」

「くう…また締め付けが…イ、クウ」

「出して…俊くんの精液♥私の子宮も精液が欲しくておちんぽにキスしてるのが分かるでしょ♥」

もう限界だ。束の子宮口が俺の鈴口をちゅ、ちゅ、とキスしているのが分かる。膈内もうねって肉茎を程よく締め付け射精を促す。

「亀頭が膨らんでるのが分かるよ。腰の動きも…ん、ああ♥早くなくてきてる…我慢しないで出して♥」

「俺もそのつもりだ!!」

「あん、ソコツ!!好き…あ、あ、もつと激しくなって…イイ♥イイのお…もうホントに…♥」

束も腰を動かし始めて俺を求める。俺もそれに応えるようにラストスパートをかける。

「ああああ〜♥もう訳が分からないよ…頭の中が俊くんで満たされる♥あん、あん…

んうくくく♥イツクうううううう♥」

束の嬌声と共に俺の鈴口から大量の精液が束の子宮に流れ込む。ギリギリまで我慢していたのでかなりの量だ。入りきらなかった精液が接合部の隙間からいやらしい水音と共に零れている。

「あううううう……しゅ、しゅごいよう♥ちゅ……んちゅ、ちゅる……きしゅくく♥ちゅ、ちゅ……あう、俊くん……らいしゅきい、んう……ちゅぱつ♥」

同時にイケるなんて最高なセックスだ……んう、満足。でも束は満足じゃないみたいだな。足と腕でガツチリと固定されてペロチューされる。

「俊くんの唾液美味しいくく。もつと飲ませて♥ちゅううくく、ちゅ、ちゅる♥……あ、ごめん。男の人って射精した後は休まなきゃだったね」

そう言うのと拘束を解いて濡れタオルで俺の身体を拭いてくれる。束にさせておいて俺が何もしないのは心苦しいので、束のおまんこを綺麗にすることにした。まず精液を全部取り出して……空中でソフトボールくらいの大きさの球体にまとめる。そして濡れタオルで拭く……完璧

「こんなに出てたんだ。ねえ、これ飲んでいい?」

「え、あ、ああ、別に構わないけど」

「じゅるじゅる……ん、ん、んく……ごくん……ぶはあ♥精液も美味しいよ」

美味いもんなのかね…精液って。生臭くてねばねばしてて苦くてさあ、どう考えてもまずいはずなのにな。

「そうだ、クーちゃんを呼んで3Pしよう(唐突)!!久しぶりに俊くんが地下に帰ってきたことだしクーちゃんも呼ぼうよ」

クロエとはつい最近シタばかりなのだが…ま、いつか。人数が多い方が楽しいし。

「そうだな、じゃあクロエを呼んでくるよ」

41話 R-18 わがまま束と謙虚なクロエ 中篇

クロエのお部屋（地下）

「俊葵様あ…ん、ん、そこ…イイです♥奥まで届いて…イ…クウ♥」

クロエはベッドの上で小型のデイルドを片手に肩で息をしていた。普段通り、俊葵の事を思いながらのオナニー。しかし身体は満足しても心が満足しない…

「うう…俊葵様…私は主人をオナネタに使う変態奴隷です…。どうか…どうかお許しください」

「別に謝らなくてもいいのに」

「と、俊葵様?!いつからそこへ!?!」

見られた!!私が俊葵様でオナニーしていると見られてしまった!?!

「クロエが俺の名前を呼んでイクところから見えた。これから束も含めて3Pしようと思っただけ…」

俊葵様は何か言っているようですが私の耳にはまったく届かない。私はもう終わってた…絶対に俊葵様に嫌われた。だったら私はもう生きてはいけない…死ぬしかない

護身用のグロック34で頭を吹き飛ばすために枕の下から取り出してこめかみに突き付ける。

「てなわけで俺と一緒に…って、おいおいおい!!何してんの!」

「だって私の事をお嫌いになられたでしょう? 俊葵様を穢すつもりはありません…ですが私は…うう…」

「やめないか!!(バシン)」

グロックを持つ手を叩かれ、つい落としてしまう。どうして…死ぬ事すらお許しにならないのですか? 私にもつと苦しめと…そのつもりなのですか?

ぎゅ…

どうして…私にこんなにも優しくしてくれるのですか…。

「まったくもう…お前はまじめすぎるんだよ。もつと気楽に生きようや。というかオナニーするくらいなら俺に言えつて。オナニーなんかよりもセックスの方が気持ち良いんだから」

温かい…あの研究所に居た頃はこんなぬくもりはありませんでした。俊葵様に拾われてから幸せ続きで死んでしまいそうです。

「私はただ…俊葵様をお慕い申し上げているだけで…」

「分かってる」

「そんな俊葵様をいつの頃からか心の支えにしていたのです。私にとつての俊葵様はもはや崇拜の対象になっていいるのです」

ああ…言つてしまった。もう終わりました…このような重すぎる愛を受け止めても
らえるはずがありません。

「くくく…くく…くく…アツハツハツハツハ!!イーヒツヒツヒ、ゲホツ、ゲホツ!!そんなこと
で悩んだたのか!?こりやあ傑作だよ。ならお前は俺が死ぬと言えは死ぬのか?」

「はい、俊葵様が命じるのなら何でもいたします」

「そうか…なら俺が死ぬまで死ぬことは許さん。俺はお前の事が好きなんだ。それに俺
を穢したと言つたがそれは違う。お前は俺を愛してくれただけだ」

「しかし…」

「これ以上ぐちやぐちや言うな。俺も束もクロエの事が好きなんだ。それに俺は極度の
寂しがり屋なんだよ。重くて潰れるくらいの愛が俺にはちようどいい。もしも今度自
殺しようとしてみる…ケツにバーボン突っ込んで火炎瓶にしちまうぞ」

俊葵様…ぐず…なんとお優しい…。こんな私を愛してくださるなんて…

「お、おい…泣く事はないだろ。火炎瓶にするなんて嘘だつてば。うくん…そうだ!!」
俊葵様は私の右手を掴むと何やらおまじないを始めた。すると梅の花の刺青が右手
に広がっていく。呪文が終わる事には美しい流線型のタトゥーは完成していた。

「梅の花言葉を知ってるか？」

日本の花には疎いので私は首を横に振る。すると俊葵様は察してくれたのか説明を始めた。

「梅の花言葉は『忠義』、『高潔』、『気品』だ。クロエ…それは俺とカンケイを持ったオナナにしか見えない。だからそれはクロエが俺のオナナだって証だ。もう勝手に死のうなんて思うな。俺はまだクロエを愛したりない」

「分かりました…私の全ては骨の一片、血の一滴に至るまで俊葵様の所有物です。もう自殺をしようなんて考えません。ですから…そのお…対価として愛してくださいますか？」

「もちろんだ…ちゅ♥それじゃあ束の部屋に行こうか」

「はい♥」

束のお部屋

「なあ、束。恋人にオナニー見られたら死にたくなるか？」

クロエはシャワーを浴びているのでタイムミングもぼっちだったので良い機会だと思いい束に質問する。さっきのクロエの行動は気になるし、束の意見も聞いておきたいからね。

「うくん、どうぞよろ。死ぬまでとはいかないけどかなり恥ずかしいかな。だってその人に失礼じゃない？ エッチな事がしたいなら直接言えばいいわけだし」

「なるへそ。答えてくれてあんがと」

「何かあったの？」

「まあ…クロエとちよつとな。詳しくはクロエに悪いから言えないけど」

クロエも他の人に知られたくないだろうし、束には悪いけど少し内緒にしよう。：
あ、でも察しのいい束なら気付くな。

「ふふ…もう分かっちゃった。へえ〜クーちゃんがねえ〜」

「クロエには内緒だかな。もう解決したことだから」

「俊くんがそう言うならそうするよ。そろそろクーちゃんもシャワーを浴び終わって出てくると思ってから準備しようか」

「おう」

濡れたバスタオルとコンドームをベッドのわきへ置いて、冷蔵庫からつまみやジュース、お酒を出して準備完了。ベッドメイキングは束がすでに済ませておいてくれたのでクロエが出てくるまでに準備は終わった。

「お申し付け下さったら私が準備いたしましたのに…」

「少しでも早くクロエを抱きたかったからね」

「それは…とても嬉しいです…それよりもコレはいい…」

今のクロエはバスローブではなくヴィクトリアメイド服を着ている。勿論、束にも同じものを用意して着てもらった。

「俺の趣味」

「了解です。ではすぐに脱いでベッドへ…」

「それを脱ぐなんて勿体ない!!」

「ツ!?!」

俺と束は同時にクロエの肩を掴んで、食い気味に詰め寄る。クロエもいきなりの事に驚いているな。

「お前は分かかってない…着エロは素晴らしいんだ」

「そうだよクーちゃん。クーちゃんはガータータイツの素晴らしさを分かかってないよ。

この太ももと鼠蹊部の間に存在する肌色」

「は、はあ…」

「ま、これからじっくり分かせてあげるさ。クロエ、束まずはスカートを膝まで上げろ」

「はい…////」

「うん♥」

言われた通りにスカートの端を摘まんでゆつくりと膝までスカートを上げる。

「……／＼／＼（どうしてこんなにも恥ずかしいのでしょうか。いつもに比べて圧倒的に露出は少ないはずなのに……）」

「えへへ／＼／＼（ううううなんだか恥ずかしい。裸とは違った恥ずかしさだよ／＼／＼）」

恥じらいを持った二人はとても美しいな。普段のセックスでも恥じらいが無いわけではないのだが、こういった着衣している状態での恥じらいもまた一興。

「二人とも足を肩幅よりも少し広めに開け」

しばらく二人のタイツを楽しんだ後に命令する。二人は何の疑いもなく足を広げた……くくく。俺は寝転がりクロエのショーツを覗き込む。

「と、俊葵様!？」

としきのHPがすべてかいふくした▼

薄暗い部屋だが左目の暗視モードを起動させているので問題はない。黒色で装飾が細部まで施されたオープンクロッチのショーツが見える。うん、俺のセンスは間違いないじゃあなかった。俺がクロエにプレゼントしたこの下着はかなり似合っている。

「いやらしい下着だな。俺に犯されるのを楽しみにしていたのか?」

「はい……／＼／＼俊葵様がお喜びになるよう精いっぱい身の支度をさせていただきます」

た。お気に召しましたでしょうか？」

「素晴らしい…舐めるぞ」

「どうぞ／＼／＼」

寝ころんだまま舌を伸ばしてクロエのおまんこの中に侵入させる。お風呂に入っていたので愛液の味は薄いですが、それでも舐めていると愛液が垂れてきた。太ももに垂れたのが勿体ないので舐め取るとクロエが反応する。

「ん…あ、あ、ソコ…いい…です♥もつと舐めてください♥」

東の方をちらと見るとスカートの裾を啜えて、自分でおまんこを弄っていた。東も俺にシテ欲しそうだな…ちよつとくらい無理しようかな（ニヤリ）

4 2 話

「あら、鈴さん。奇遇ですわね。俊葵さんになにか？」

「あんたこそ俊葵に何か用があるんじゃない？」

くっ…私がもつと鈴さんの行動に注意していれば俊葵さんと何の苦労もなくペアになれましたのに…。

一番ペアになりそうだったクロエさんはラウラさんと組み、一夏さんはシャルルさんと男同士で組みました。残されたのは本音さん、箒さん、そして4組の簪さん…本音さんは前回組んだので辞退すると仰っていましたから、この方も問題外でした。箒さん、簪さんとはバトルロワイアル形式の試合でわたくしが勝ち残ったので必然的に私と俊葵さんがタッグを組むはずでしたのに!!

「ええ、私こそ俊葵さんのペアに相応しいのでこれからペアを申し込む予定ですわ」

「あんたみたいなヒヨロヒヨロISがペアじゃあ俊葵が可愛いそうだわ。辞退しなさいよ、あたしが俊葵と組むんだから」

予想外でしたわ……まさか鈴さんが俊葵さんを狙っていたなんて。

「一夏さんと組めなかったからと言つて他の男性に尻尾を振るのは一夏さんに対して失礼ではなくつて?」

「ハア……本音を言うると一夏に言つちやったのよ。『何でシャルルと組んだのよ!? 恋人のあたしじゃ不満つて訳!? もういいわ……次のタッグマツチでポコポコにしてやるから!!』つて」

「それで俊葵さんと……ですが私も譲れませんわ。……そうですわ、決闘をしましょう。負けたら俊葵さんから手を引く……それでよろしいですわね?」

「ええ、良いわ。早速勝負しましょう」

久し振りの真剣勝負……勝つて俊葵さんとのペアの座を勝ち取りますわ!!

東宅

「東、俊葵は何処へ行った? あいつに渡さねばならない書類がこんなに届いているのだが」

「うーん、どこだろお? ちーちゃんの狂桜で探してみたら?」

「それができたら既にやっている」

「それにしてもすごい、それ全部俊くん宛てなんだあ。内容は？」

「何処の国も俊葵を代表候補生にしたいらしい。ま、少なくとも学園にいる間は俊葵が望まない限りそんな真似はさせない」

日本を筆頭にアメリカ、中国などの大国はなんとか俊葵に取り繕うと必死だった。それもそのはず、男性パイロットだけではなくその後ろには篠ノ之束博士及び一国家の軍事に匹敵するほど武力が付いてくるのだから。

しかし俊葵は日本、ドイツ、フランス以外の国にこれでもかと言うほど興味がなかった。

「ま、俊くんもアメリカの代表は死んでも嫌だつて言うだろうね」

「何故だ？ 大国の代表ともなれば扱いは最高クラスだろう」

「前にアメリカ代表になれば社会的地位も軍事力もトップランクになるよつて言ったら…」

『アメリカの代表なんてこつちから願ひ下げだ。あいつらは日本を自分の属国か何かだと勘違いしている。いつか必ずアメリカには苦汁…いや、煮え湯を飲ませてやるよ』

「つて言つてたから」

これには流石の千冬さんも呆れていた。俊葵は自他ともに認める自己中心的な人間だったが、ただそれだけの理由で大国の代表を辞退するなんて思つてもいなかったからだ。

「私も日本に勝つたくらいでデカイ顔してる国は気に入らないから俊くんの意見に賛成だけど」

「お前ら…はあ。私も俊葵の味方だから強くは言わないが表向きは世界に敵意がない事を示しておけ。あとから面倒なことになりかねない」

「ちーちゃんが言うなら仕方ないなあ。でも俊くんなら世界を滅ぼす力を持つてるから問題ないんだけどなあ（ボソツ）」

「聞こえてるぞ」

えへへえくと照れながらも東は世界が滅んでも構わないと思ってる。愛しの俊葵が好きな女性だけを集めてスペースコロニーで過ごすのも悪くはないと思ってるのだから。

俊葵サイド

タツグマツチまであと数日、みんな訓練やらペア決めやらで忙しい。普通の生徒は優勝目指して頑張っている…しかし、俊葵は違った!! 逆に怠けた!!

なに? ペアが決まらない? 逆に考えるんだ、決めなくていいさと

俺はいつもの飲み屋街へ来ていた。もちろん無断外出…後で千冬さんに半殺しにさ

れるかもしれないなあ。でもそんな事を気にしていたらいい酒は飲めない!!今日は羽目を外すぞおっ!!

デデッデッデデン、デデッデッデデン

携帯の画面を見ると織斑千冬の名前が表示されている

「あ（察し）も、もしもし」

《お前に渡す書類がある。どこにいる?》

「ええ〜つと…ちよつと千冬さんからは遠いところに…」

《まったく…無断外出は関心せん。羽目を外したい気持ちも分からんでもないが校則をはきちんと守ってほしいものだ》

千冬さんの言う通り、集団で生活している以上ルールに従わなくちゃあいけない。うん、反省しなきゃな。

《まあ、外出届は私が適当に書いて提出しておくからお前は遅くならん程度に帰ってこい》

「あなた教師でしょう…そんなことして良いんですか?」

《就業時間とはつくに過ぎた。今はお前の恋人として動いている。それと書類だが内容は『代表候補生にならないか?』という各国家からの招待状だ。どうする?》

「日本、ドイツ、フランス以外のは全部燃やしてください。読む必要が無いですから。そ

れじゃあお願いしますね」

プツ…

ふう…代表候補生なんて面倒くさそうなものに誰が好き好んでなるかよ。セシリアみたいに代表候補生であることにプライドを持っている人には悪いけど、俺はもつと氣楽に生きたい。

「さて……今夜は飲むか」

東・千冬サイド

「どうりで狂桜のセンサーに反応しない訳だ…」

「外出中だったでしょ？」

「俊葵がどこにいるのか知っていたなら教えて欲しかったな」

「私だって俊くんのプライベートを完全に管理している訳じゃないよ。管理しようと思えばできるだろうけど…」

好きな人を管理したいという気持ちは東にも少なからずある。隠し撮りや盗聴を何度もしているが必ず最後にはバレて『おしおき』を受けた。

「二期時は俊くんの監視してたんだけど…」

「なるほど…察したよ」

やはり束は監視していたのか…束の技術や行動力ならそれも可能だろう。しかし失敗していたようだな…なら私がやっても同じだろうな。

「で、俊くんは何処に行くって言ってた？」

「そう言えば聞いていなかったな。自分で調べてみたらどうだ？街の中の監視カメラくらいなら覗けるだろう」

「うーん、やめておこうかな。どこに行こうが俊くんの勝手だからね。私は俊くんと同じことされても問題はないけどこれ以上やって嫌われるのも嫌だし」

「珍しく懸命だな。では私も部屋に帰るとしよう。書類なら明日に渡しても問題ないな」

俊葵サイド

生まれで初めてキャバクラと言うところに来た。前世ではキャバクラはおろか風俗にも行つたことが無かったからな。まあ、そんな事にお金を使うくらいなら趣味にお金を使う方が有意義だと思っていたしね。

俺は客引きに案内されるまま店の中に入る。店の中はとても豪華できらびやかで、

キャバ嬢たちも綺麗なドレスに身を包んでいる。席は平日にもかかわらず埋まっているところを見ると繁盛しているようだ。

「可愛い子が沢山いますよ。指名できる子のリストです」

ふうくん、こんな感じのシステムなのね。何度も通いつめれば固定とかできたりするのかな？

リストの中から名前も見ず、適当に3人の女の子を指名する。初めてなので加減が分からないがお金はあるから大丈夫だろ。

「かしこまりました。ではこちらの席でお待ちください」

奥の方にVIPの文字が見えたのだが、そっちには通してくれないんだなあ……つて一見さんを通す訳ないか。それにしてもこの服装は場違いじゃあないかな。周りのお客さんはスーツを着ている人が多かったので、普段着だととても目立つ。

「春香です。今夜はよろしくお願いします」

「千早です……えつと……その……よろしく……お願いします」

「あずさです。楽しんでいってくださいね」

写真よりも可愛いじゃない。今夜は楽しめそうだな。

俺を囲むように座る女の子たちになんだかワクワクしてしまう。しかし普段からテーブルに座るとこんな感じなので緊張はしていない。メニューを手にとって中を見

ると予想以上の値段だったのでびっくりはしたけど問題ない。お金ならある。

「好きなお酒を注文して良いよ」

「じゃあ、私はアツプルサワーで」

「マタドールをお願いします」

「私はテキーラで。お客様は…えっと、何とお呼びしたら？」

あ、名前を言っただけでなかったな。これじゃあ彼女たちが俺を何と呼んでいいかわからなくて困ってしまう。

「俊葵でいいよ。それと俺は梅サワーを頼もうかな」

注文を受けたフロアスタッフはキッチンの方に下がり、すぐに注文したお酒を造って来てくれた。うん、御客を待たせないのは良い事だ。

「それじゃあ乾杯をしようか。かんぱ〜い!!」

「かんぱ〜い!!」

グラスを一気に傾けて飲み干す。乾いた喉に冷たい梅酒が良い感じの刺激を与えてくれる。彼女たちを見ると軽めに飲んでいた。

春香「良い飲みっぷりですね。でも大丈夫ですか？」

「このくらいのお酒なら何の問題もないよ。なんてたって俺は強化…強靱だからね、あはは」

「確かにすごい筋肉ですね……お仕事は何をされているのですか？」

チラチラと左目の眼帯を見ながら質問してくる千早ちゃん。やっぱりこの眼帯は気になるようだ。眼帯の端から火傷した肌も見えているしね。

「二応、学生だよ。あ、梅サワーおかわり。それと……この一番大きなオードブルを3つお願いします」

嘘をついても仕方ないので本当の事を言う。三人ともかなり意外そうな顔をしている……多分、もつと他の職業を想像していたのだろうな。

千早「大学生ですか？」

「んにゃ、高校一年生」

千早「……、高校生!？」

「通いなおしてるんだ」

あずさ「凄いですね〜」

嘘は言っていない……嘘は言っていない。大事な事なので二回言いました。

春香「もしかして実家がお金持ちとか？」

「いやあ、彼女がお金持ちなんだよ」

千早「もしかしてヒモってやつですか？」

あずさ「コラ、千早ちゃん。俊葵さんに失礼でしょ」

千早「あ、ご、ごめんなさい」

「はは、確かに彼女がお金持ちでこんなところに来てたらそう思うよね。でも自分の小遣いくらいは自分で稼いでるから気にしなくていいよ。…そうだ、何か欲しいものはないかな？何でも買ってあげるよ」

酒が少しでも入ると調子に乗ってしまうのは悪い癖だね、うん。でもどうせ一人じゃ使い切れないから可愛い女の子にプレゼントをしても罰は当たらないだろう。

あずさ「ふふ、早速プレゼントですか？そんな事では破産してしまいますよ」
「とりあえず、はいコレ」

カバンの中から100万円の札束を6つ取り出して二つずつ三人に渡した。この後も酒の入った俺は初めてのキャバクラでかなりのお金を使った。三人に渡したお金も合わせて720万……普通のサラリーマンなら一年分のお金だ。

キャバクラってやっぱり上流階級の人がある店だな……いや、俺がドンペリとか頼みすぎたのがいけなかったね。

4 3 話 決着

俊葵がキャバクラで遊びほうけている頃、セシリアと鈴は俊葵のペアの座を掛けて決闘をしていた。射撃戦の得意なセシリアに対して近接格闘が得意な鈴、まるで水と油の二人の試合はかなり拮抗している。

近寄られまいと逃げるセシリア、どうか自分のリーチで戦おうとする鈴、互いの顔に疲れの色が見え隠れして着た頃に流れが変わった。

「これだけは使いたくなかったけど…悪いけど本気出すわよ!!雷声龍（レイ・シエンロ）!!」

九龍から取り出した新武装を展開する鈴。見た目はダンプカーの荷台のような形をしているが威力は俊葵と束のお墨付き。レイ・シエンロンは落雷並みの電流を発することができる。しかし威力に比例して消費エネルギーもすさまじいのでここぞというとき以外の使用は控えていた。

「あら…正々堂々の決闘で束さんから頂いた新武装を使うなんて卑怯ですわね」

「勝てばいいのよ。勝てば官軍負ければ賊軍つて言葉知らない？ 負けた奴らが何を言おうと負け犬の遠吠えなのよ」

「その意見に関しては何も同意しませんわ。ですから貴女が何をしようと勝たせていただきませぬわ!!」

私はライフルを構え直して鈴さんに目当てを付ける。名前と武器の形状から察するに電撃を発生させる武装でしょうか…回避が難しそうですわね。

「真つ黒焦げになつちやいなさい!!」

やはり電撃を発生させる武装…くつ、避けづらいことこの上ないですわ。

「よく避けるわね。俊葵もこれには苦戦してたつて言うのに」

「俊葵さんの偏向射撃に比べたらこんな攻撃を避けるのなんて朝飯前ですわ!!」

空中では避けづらいと察したセシリアは地面に降り立って滑るように回避をする。以前、一夏が鈴と戦っていた時の回避方法をまねて自分でも練習していたのだがこんなところで役に立つとは本人も思っていなかった。

「くうくう!!あの時の一夏と同じ避け方!!」

「ガサツな貴女と違って私は回避が得意ですの。さあ、当ててごらんなさい」

そう言いながらセシリアは鈴に対しての狙撃を開始する。避けながらの狙撃は俊葵との訓練である程度はできるようになっていた。

「こんのお…拡散!!」

鈴が叫ぶとレイ・シエンロンの電撃が分裂してセシリアに襲い掛かる。しかしセシリアに届くことは無い。地面を滑走しながら踵に装備されている姿勢固定用のターンピックを利用して急停止やターンで全て避けるセシリア。

「ふふ…今日はターンピックが冴えますわ。私はこれでも射撃が得意ですよ？たとえ射線が真つ直ぐでなくとも、複数の弾が同時に発射されようとも、ある程度以上の回避は必然ですわ」

「だったらあたしの得意な近接格闘で勝負をつけてやるわよ!!」

両手に分裂させた双天牙月を持ち、展開させた龍咆を発射しながら瞬時加速でセシリアとの距離を一気に詰める。しかし感情的になり動きが直線的な鈴の攻撃をセシリアは最低限の動きとナイフでうまくいなす。

「近接格闘は貴女のテリトリーだったような気がするのですが？」

「ぐぬぬ…（落ち着いてあたし…俊葵にも言われたじゃない。『お前はすぐ感情的になって動きが単調になる』って）」

軽く挑発されつつも何とか落ち着き、普段の自分らしい格闘を取り戻した鈴は少しずつセシリアを追い詰めていた。

「くっ…インターセプターだけでは流石に防ぎきれませんわね…」

「隙あり!!」

セシリアが姿勢を崩した瞬間を見逃さず、双天牙月を連結させて大きく振り下ろす。「この瞬間を待っていましたわ!!」

私が隙を見せれば鈴さんは必ずソコを攻める。しかも両手をそんなに手をお上げになつてまあ…ふふ、こちらこそ隙ありですわね。先ほどの新武装でエネルギーはギリギリのはず、ならこれで削り切りますわ。

鈴の重い一撃を受け止め、その隙に手榴弾を拡張領域から取り出す。鈴はセシリアにがっちりと組み付かれて逃げられない。

「あんたまさか!？」

「さあ、どつちが生き残っているか!!」

二人は轟音と爆風に包まれて落ちてゆく……。試合終了のブザーがアリーナ内に響き決着が着いた。ゆっくりと煙が晴れて行きその中から現れた影は……

「鈴さん…貴女の敗因はたった一つ。たった一つのシンプルな答えです……貴女は私に本気を出させた」

俊葵争奪戦を制したのはセシリア・オルコットとなった。

俊葵のペアは無事にセシリアに決まった。それでセシリアは俊葵の部屋（地下）に呼

び出された。思い人のプライベートルームに思い人と二人きり…これが緊張しないわけがない。

ここが俊葵さんのプライベートルーム…落ち着きなさいセシリア、身体は隅から隅まで余すことなく洗いましたし下着も一番セクシーな物を選んだ。香水だつて限定販売50個のナンバリングされている物を着けてまいりました…抱かれる準備は万端ですわ!!

暫く一人で待っているとシャワーを浴びた俊葵が部屋に入ってきた。

「お、先に来てたのか。待たせてごめん」

「そ、そんな…待ってなどいませんわ。寧ろこの高揚を鎮めるために時間が欲しかったくらいで…ツ!?ふ、ふふ、服を着てくださいまし!!」

「ん?ああ、そうだな。じゃあ着替えついでにお茶と茶菓子を持つてくるから適当に待つてくれ」

「そう言い残して部屋を出て行く俊葵。セシリアは言われた通り部屋の中にある椅子を適当に選んで座つて待つ。」

どうして服を着ずに出てくるのでしょうか…見てるコッチが恥ずかしいですわ。それにしても…ああ…俊葵さんのアレ…はう／／とても遅しかったですわ／／束博士やクロエ、本音さんはアレを毎日のように…羨ましい。私と箒さんも負けてはいられま

せんわね。

「さつきは汚いものを見せてしまったな、すまない。普段からこの部屋じゃあ服着ていなくてさ」

「服を着ないとお風邪をひいてしまいますわ」

「バカは風邪をひかないんだよ、はっはっは。まあ、ゆっくりしてくれ。今日ここに呼んだのは二人きりで話をしたかったからなんだ」

ふ、二人きりでお話!? これはもしかするともしかしちやうかもしれませんか…。落ち着きなさいセシリア・オルコット…英国淑女として取り乱しては嫌われてしまうかもしれませぬ。

「ふう……お、お話とはいったい何でしょうか?」

「俺さ、セシリアの事が好きなんだ」

「ぶふっ!!」

セシリアは落ち着こうと思つて口をつけた紅茶を思い切り俊葵に向かって吹いてしまった。

「申し訳ございません!! すぐにお拭きいたしますわ!!」

ポケットからハンカチを取り出して俊葵の顔を拭く。しかしシャツにまで掛かつて

いたので俊葵は今一度、着替えなおしてきた。

「そんなに驚く事か？」

「当たり前です!!いきなりあんな事を言われても困りますわ…」

「嫌だったか？」

「そうではありません…ただ」

ただ、ここで私は了承してしまうと箒さんに悪いですわ。でも俊葵さんから告白していただいたのに断るというのも…どうしましょう。あ、そうですわ!!これなら箒さんよりも先に俊葵さんとお付き合えることは無いでしょうし、俊葵さんのお顔を立てる事が出来るのでは!!

「ただ…とても嬉しいのですがこのような状況と場所で告白されても…。それに俊葵さんには私から思いを伝えたいのです。ですからもうしばらくお待ちくださいませ」
「そっか、分かった。いつまでも待っているよ。…よし、じゃあ本題に入ろう。次のタッグマツチについてだ。俺はこの大会でやらなければいけないことがある。セシリアにはその手伝いをして欲しいんだ」

この後、俊葵はラウラのシュヴァルツエア・レーゲンに搭載されているVTシステムをどう発現させて破壊するかを説明し話し合いは終わった。

44話

「俊くうくん♥」

甘い猫撫で声で束がすり寄ってくる。こういった時は決まって俺に甘えたいか何かして欲しい時に限る。

「今日は疲れたからエッチはしないよ」

「そうじゃなくてく。いつも頑張ってる俊くんにギユ……無理しないでね」

いつもは強く抱きしめる束だが今夜は違った。優しく愛娘を抱きしめるかの如くソフトなタッチで俊葵を抱きしめる。

「急にどうした？」

「明日からの試合を頑張れるように束さんの愛情を注入くく♥」

「ありがとう」

そう言つて俺も束を抱きしめ返す。ウエストはとても細いのおっぱいもお尻も肉付きがとても良い。だからこそ体系の維持がかなり難しいはずなんだけどなあ……。俺

の作った料理やお菓子を大量に食べているはずなのにどうして…

「どういたしまして…でもなんか失礼なこと考えてない?」

「東はこのグラマーな体系を維持するのにどんなことをしてるのかなって」

「もう…分かり切ってるくせに／＼／セックスってかなり体力を使うし、良い全身運動になるんだよ。それに俊くんって一回戦だけじゃ終わらないから♥…ちよつと服を脱いで全裸になって」

「ん?別に良いけど……」

東に言われた通り裸になる。東の前で裸になるのは今更だ、あんまり恥ずかしくもない。

「ふふ…俊くんのお身体ってすごいよね。伸縮自在で何でもできるんだから」

「うん、まあ何でもできるよ。…それだけなら脱ぐ必要なくない?」

「久しぶりに見たかったの。えへへ、すごく固あい♥」

固いだけじゃなくて柔らかくもできるんだけどね。筋肉、骨の密度の自在。だから俺の本当の体重は学園に提出してあるプロフィールよりも少し重い。…だから俺はデブじゃあない。デブじゃあない。

「この身体が私を護ってくれるんだね。どんな護身よりも安心する」

「確かに地球上で一番安全な場所は俺の傍だからな。核弾頭だろうと隕石だろうと俺が

吹き飛ばしてやるぜ」

「超能力を使えば俊くんは誰にも負けないのどうして使わないの?」

「今までの価値観や常識を打ち壊すほどの強い力を持つ者を世間がどんな風に扱うか：ISを作り出した束なら分かるはずだ。ISならまだ女尊男卑の世界になるだけで済む：でも俺は個人だ。相手が誰でも負けないけどいずれ俺を潰そうとする国が現れるに決まってる。そうなった時、真つ先に矛先が向くのは皆……俺のせいでみんなを危険にさらしたくない」

「そんな……私は俊くんの敵なら誰でも!!」

「違うんだ束……確かに味方でいて欲しい。でも……俺は……お前に……」

「……ごめん……本当にごめん。俺なんかいなければ……みんな苦しまなくていいはずなんだ」

バシン!!

「ツ?!」

いきなり頬に鋭い刺激を受けて顔を上げる。すると怒気を含んだ束の顔があった。

「私は俊くんがいるから夢をかなえられる。クーちゃんは命を救われた。みんなだつてそう……俊くんがいなければ何も変わらなかつた。良くも悪くも俊くんは変化を促してくれたんだ。だからそんなこと言わないでよ……こんな灰色の世界でも俊くんがいるか

ら生きていられるんだよ」

「なんだかネガティブになったみたい…打たれ弱いなあ俺…たはは…いつつも同じ事で落ち込んで、同じように励まされる」

「それでも良いじゃない、俊くんは俊くんだよ。だからそんなに気負う必要はないの。今夜は一緒に寝よ？温めてあげる…おいで♥」

ぎゅ……

ベッドに入り束を抱きしめる。二人には大きすぎるベッドだが今日はそれでもいい。

「大丈夫だよ…大丈夫」

「うう…ぐず…ごめんなさい…情けなくてごめんなさい…」

「良いんだよ、今日はもう寝よ？明日は試合だから早く寝なきや」

「うん…でもこうしたい」

束のおっぱいに顔をうずめて抱きしめる。思い切り束の香りを吸い込んで深い眠りについた。

「で、試合前日だというのに恋人と裸で抱き合って寝ていた…と。はあ…俊葵さんの強さは知っていますか？油断しては負けますわよ？」

「たはは、返す言葉もないよ。ところで一回戦の相手は誰だ？」

「ラウラさんとクロエさんのペアですわ。運がいいですわね。一回戦から目的のペアと戦えるなんて」

確かに何十組といる中のペアから一回戦から俺たちが当たるなんて…まさか東が何かしたとか…考えすぎか。今は目の前の試合と計画に集中しよう。

「そうだな。これで面倒くさい他の試合をしなくて済む」

「ふふ…俊葵さんらしいですわ。でもどうして他の試合が無くなるの？」

「VTシステムはかなり危険な装備だ。学園側も生徒を危険にさらしたくないから試合に出るISは全て点検する。試合に出るISがいなくなれば大会もなくなるって訳」

「では私のブルー・ティアーズも点検を…」

「俺の息がかかっている生徒のISは東が直接点検するから今日中に終わるよ」

「それでは不公平ですわ」

「セシリアは人間が平等だと思っているのか？」

セシリアの一言に思うところがあつて質問をした

「ええ、人間は平等であるべきですわ」

「人間が平等ならこんな世の中になっていない。それにセシリアは男に対してこうあつてほしいと思うことは無いか？ そう思った時点で平等に扱ってない」

「それは…」

「そうだ、屁理屈だけど正論だ。でもこの理論は同じ人間の目線で見た時にのみ有効だよ。束や俺みたいに人間を超えた者からすれば人類みな平等だよ」

人類みな平等、平等に下位の存在だ。きっと中世の貴族や王族も似たようなことを思っていたに違いない。

「ふふ…流石は俊葵さん…強者だからこそその意見ですわね。早く私もそのステージへ上がりたいですわ」

「俺のオンナってだけで一般人以上のステータスは持ち合わせているんじゃないか？」

俺のオンナに中途半端な奴はいない。全員が全員、社会的なステータスも戦闘技術も覚悟も一般人なんかよりも違う。俺と束の最終目的の為に手となり足となり働く最高の女達だ。

「確かに男性パイロットの友人でいられるのは光栄な事だと思います。でもそのうち…」

「ああ…そのうちに…な♪」

この後も二人で雑談をしながら試合開始まで待った。

ラウラサイド

「一回戦から俊葵とか…はあ、憂鬱だ」

「どうかしましたか？俊葵様とは前回も戦ったはず。緊張する必要はありません」
「姉さんはいつも俊葵と一緒にいるから緊張しないんだ。うう……」

思い込みの激しいラウラは前回と同様に緊張している。それに対してクロエは落ちて着いて紅茶とシフォンケーキを嗜んでいる。

「確かにいつも一緒に居ますが俊葵様が何を考えているかはまだ完全には分かりません。今回の試合もどのような展開になるか…まあ、いつも通りにすれば勝てますよ……多分」

「姉さん!!」

「だって俊葵様は素で強いじゃあないですか。相方が一般生徒なら勝機はあったでしょうがセシリアさん…私のI Sも電子戦よりから中距離支援型にシフトチェンジしたとはいえ勝てるか…」

今回の大会に向けてクロエは電子戦では分が悪いと判断して束に中距離支援用の装備に改造してもらっていた。具体的な改造内容は多連装ミサイルポッドに空中機雷、パルスマシンガンにアシッドガン、そして最終兵器『大型火炎放射器』

「あれだけの武装を積んで…姉さんは大規模な基地でも占拠するつもりなのか…?」

「俊葵様と限りなく互角に戦うためにはこれでも足りませんよ。束様とパスイのシミュレーションによると大前提として俊葵様が使用するISは宇宙のみ、武装スロットに制限有り、ワンオフ禁止、超能力の禁止、常にリーダーに映っている状態、こちらに有利な地形、これらの条件が揃ったうえで国家代表候補生クラス3人で互角以上に戦えます」

「それで互角か…訓練をし始めた頃はまだ機体の性能に頼った戦いが目についたが、最近は宇宙も嵐も乗りこなしている。だから俊葵の成長は侮れないぞ。もしかしたらそのシミュレーション以上に強くなっているかも…」

「確かに……勝てるでしょうか？」

「さあ……」

一抹どころじゃあない不安を抱えながら試合は始まる!!

45話

第一試合は開会式の後、すぐに執り行われるのでアリーナの中では一番大きな第一アリーナで行われる。この大会は生徒たちの学習意欲向上とともに学校外へのアピールも兼ねている。テレビ局や各国のスカウト、その他VIPに対して生徒たちを売り込むこともこの大会が開かれる理由の一つだった。

それ故に学年に関わらずほとんどの生徒が緊張していた。しかし全く緊張していない男が一人…。

俊葵・セシリアペア 控室

試合開始を15分前だというのにココはとても良い香りに包まれている。

「まだ食べるのですか…?」

「ふいふあいあえおふああごしあえ（試合前の腹ごしらえ）」

口いっぱいステーキを頬張りながら応える。試合前の腹ごしらえは大事。腹が減っては戦は出来ぬって言うし、食堂へ行つてステーキと唐揚げを大量に買って来た。

「らいひよーぶ。あんおかあるっへ（大丈夫、何とかなるって）」

「それならいいのですが……ちょ!?ま、まだ食べるんですの?」

「んぐんぐんぐ……ぶはあ!!へ?食後のおやつは必要だろう?」

カバンから取り出したバームクーヘンにかじりつく。口の中にバターの香りとおほのかな甘みが広がる。バームクーヘンを包み込むようにキャラメルソースとチョコソースが半分ずつつかかっているのもポイントが高い。

「むふう!!美味しい!!セシリアも食べるか?」

もう一つバームクーヘンをカバンから取り出してセシリアに渡すが首を横に振った。

美味しいのに……

「それ一つで何キロカロリーありますの?」

「確か3500くらいだったかな。今から試合があるし丁度良いだろ」

『ステーキや唐揚げも合わせると20000キロカロリーは軽く超えていますわよね……。それだけのカロリーを消費できる俊葵さんの身体がどうなっているのかとても気になるますわ』

「んぐ……んぐ……くん……あふう。それじゃあ行こうか」

「はいはい…」

試合前の腹ごしらえを終えた俊葵とセシリアは急いでピットへ入った…

アリーナ

試合を控えて俊葵ペアとラウラペアは競技場の中心、地上から10数メートルに待機している。代表候補生二人を含む全員が専用機持ちという今大会でも異例のカードがここに揃った。

《ついに学年別タッグマッチの開催です!!第一試合は何と俊葵・セシリアペア対クロエ・ラウラペア!!なんと全員が専用機持ちと言う贅沢な試合です。この試合を見逃しては一生の損ですよ》

相変わらず実況解説の人テンション高いなあ…そんなテンションでよく朝から晩まで喋れるもんだ…。

《俊葵さんのISは遠近中全ての距離で戦闘を行える万能型、セシリアさんのISは遠距離狙撃のブルーティーズ。対するクロエさんのISは電子戦用のISでしたが今回は俊葵さんと試合をするにあたって敵地制圧型に改造してあります。そして今回の試合の目玉!!ラウラさんのシュヴァルツエア・レーゲンは俊葵さんの宇宙とはまた

違った意味で万能型の I S!! どちらが勝つか分からないこの試合!! もう私からこれ以上話すことは無いでしょう…… I S ファイトオ…… レディ…… ゴオオオオオオオ!!」

試合開始のホイッスルと共にセシリアは後退、俺は両手にライフルを構えたまま急上昇する。まずクロエから再起不能にしてから計画を進める予定なのでクロエに狙いを定めた。

「装備を変えて物量で俺を倒そうとするのは良い案だね。でもそれだけじゃ俺は倒せないぞ!!」

「それはコチラのセリフです。機体性能だけでは私を倒すことは叶いませんよ!!」

クロエは両手にヒートハウザーを構え、更に楯の拡張パックを両肩に装備して突貫してくる。弾速の遅い放物線上に飛んでくる発射体はある意味避けづらく敵の動きを止めるには丁度良い。くっ…動きの速い宇宙を止めるには滞空時間の長いヒートハウザーは打って付けだなあおい!!

「呼出（コール）!! ツェリスカ!!」

ライフルを捨てハンドガンでクロエの発射した弾を全て早撃ちで撃ち落とす。既に左目を開放しているので撃ち落とすのは簡単。

しかし撃ち落とした弾は激しい閃光と音で俺の視覚と聴覚を奪った。

「ぐう…目が…耳も…クソッ!!」

「常人なら弾丸を撃ち落とすなんて発想は有りませんからね。俊葵様の身体能力を逆手に取らせていただきました。しばらくは動けないと思えますが油断はしません。今すぐ決着をつけさせていただきます!!」

何も見えないし何も聞こえない……こんな大きな隙をクロエが見逃すはずないよな……きつと攻撃を仕掛けてくる。……ちよつと卑怯だけど探知系の超能力を使わせてもらおうよ。

クロエが近づいてきているのが分かる。これは……ブレード……いや、この構えはヒートパイルだな。なら……俺は。

「覚悟ツ!!」

クロエのパイルが当たる瞬間に体をねじって回避する。そして伸びきった腕を掴んでクロエの勢いを利用して地面に投げつけた。

《フラッシュバンを食らいながらもクロエ選手の一撃を避けたア!?!》

「ぐっ……なぜあんな状態で避けられたのです?」

「俺が攻撃を避けるのに理由も理屈もいらない!!俺だから避けられたんだ!!不思議に思う必要はない!!」

セシリアサイド

「俊葵さんは大丈夫そうですね…問題はこちら」

「よそ見している暇はない。……待ったなしだ」

現役軍人のラウラにセシリアの正確無比な狙撃は避けやすいらしい。ラウラはスターライトMk. 2の銃口から推測して少し動きをずらすだけで回避している。

「流星はラウラさん…私の狙撃なんてお見通しという訳ですか。では…これで!!」

ビットの時間差射撃ならどうです…ラウラさん。

セシリアはラウラの反撃を避けつつタイミングをずらした狙撃で少しづつ追い詰める。自分のリズムを乱されたラウラは当たらないにせよ、苦い顔をしていた。

「ちっ…面倒くさい」

ラウラさんが集中力を切らしている今がチャンス!!

私はあえて両手にインターセプターを持ちビットの射撃の合間にラウラさんへ攻撃を加える。ラウラさんのAICについては俊葵さんから説明して頂いたのでその範囲内に留まらないように心がけた。

「ビットを使用している間は集中しているから移動できなかつたんじゃあないのか…
くう。この間の試合をもっと見ていればよかった」

「相手が自分よりも格下だと肩をくくっていたのが仇となったようですね。」

「高を括るだろ…肩をくくってどうすんだよ…」

「と、俊葵さんはクロエさんに集中しててください!!とにかく!!ラウラさんを倒すのは私だという事です!!」

くう…俊葵さんに恥ずかしいところを見られてしまいましたわ。これ以上はもう…

俊葵サイド

「クロエ…悪いけど俺には計画があるんだ」

「そうでしたらまずは私を倒す事です」

「ほんのちよっぴり本気でやろうか（ニヤ）」

46話

「悪いな…クロエ。俺には計画があるんだ」

「く…動けな…」

クロエをスクリューウィップで縛り付けてとどめを刺す。これでラウラ対俺・セシリアになった。計画の第一段階は終了したな。次は第二段階『ラウラの挑発』。でも俺と出会った事でラウラも考え方が変わったしちよつと超能力を使って無理やりVTシステムを発現させるか。

「くつ…クロエがやられたか。だがまだだ…まだ終わらんよ」

まだ諦める気のないラウラはルールカノンを構えて俺たちに向き直る。なので俺はラウラの心に直接語り掛けた。

《本当にそう思っているのか?》

な、何だ!?

《自分の事は自分が一番わかっているはずだ。今のお前じゃあ俊葵にもセシリアにも勝てないことを…》

黙れ!!誰だか分からんがこれ以上の侮辱は許さん!!

《ふふふ…怒るって事は自分が弱いつて認めているじゃないか》

だ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れええええええええ!!お前に何が分かる!!私の何が分かる!!

《今まで下に見ていた他国の代表候補生に自分と互角以上に戦われ…師匠であり、兄であり、そして思い人でもある俊葵に失望され…。哀れな女だ…》

私はまだ…私はまだやれる…やれるはずなんだ……

《どうした?言葉に覇気がないぞ?そんなにアイツに見放されるのが怖いか?》

……………怖い

《ならば力を求めろ…すべては力だ。力さえあればすべてが手に入る》

お前は…

《力に溺れる…力を崇拜しろ…力に屈しろ。力こそパワー》

それで俊葵に嫌われないのか?勝てるのか?

《求めろ…さすれば与えられん》

私は……私にはお前が必要だ!!

ラウラとの交信を終え、東の回線にアクセスする。

「東、計画を開始する。VTシステムの強制発動を頼む」

《任された!!》

束の一言と共にラウラのシユバルツエアレーゲンは黒くてドロドロとした液体に状態を変化させる。心なしかラウラは全てを受け入れたような顔で黒い液体に包まれていった。

シユバルツエアレーゲンは段々と形が定まってきたドロドロとした液体から男性のような形に変わっていく。しばらくするとソレは俺の宇宙と同じ形になった。

「俊葵さん……ラウラさんのあの機体は……」

「ああ、俺だな。ラウラにとつて力とは俺だったようだ。千冬さん、山田先生、生徒や要人の避難は任せました。俺はラウラを止めます」

《何が止めます、だ……これもお前の計画なのだろう？ 思う存分やってやれ》

千冬さんの許可も出たしやりますか!!でも原作通りに進めたいから生身で戦わなきゃ……勝てるかなあ。

取り敢えず宇宙を拡張領域へなおしてアリーナへ降り立ち、ラウラと向かい合った。「ラウラ……辛い思いをさせてすまない。だけどこれは俺の『計画』に必要な事なんだ」
「……………」

やっぱり返事はナシか。まあ、良いさ……俺がここでやる事は一つ。生身でVTシステムを破壊してラウラを救い出す。一夏にだってできたんだ……俺にもできるさ。

ラウラは太刀を構えている。あの構えは俺がよくやった居合抜き構えだ。よし

……お前がその気なら俺も同じ土俵で戦ってやろう。

拡張領域から一本の刀を取り出してラウラに相對する。長さも太さもラウラが持っている刀に全然及んでいない。しかし武器の大きさが勝負を決する要因に成らないという事を教えてやる。

「行くぞ!!」

上段に構えた刀で切り掛かるとVTシステムは俺の動きを呼んでいたのか瞬時に足裏に裝備されたナイフで俺の下腹部へ切り付けてくる。

「!？」

何とか身体をねじって回避をしたが無理に回避したせいで腰に大きな負担を掛けてしまった。しかしあんな裝備は宇宙に搭載されていないはず……

「東……ラウラのシュヴァルツエアレーゲンにも俺の宇宙にもあんな裝備はなかった。どういうことか分かるか？」

《仮説だけどVTシステムがラウラの記憶とシュヴァルツエアレーゲンの経験から俊くんの戦闘パターンを割り出してどんな状況にも対応できるように進化しているんだと思う。……それよりあのくそシステム……俊くんの姿を模倣するなんて絶対に許さない!!ラウラちゃんが乗っていかなかったら生まれきたことを後悔しながらぶっ殺してやる!!》

「落ち着け…大丈夫。このシステムも分かっているんだらうよ。たとえばブリュンヒルデの姿を模倣したとしても俺に勝てないことを…任せろ」

束との回線を切りラウラに向き直る。構えは相変わらず俺と千冬さんの良いところを取った型。一見したら隙が無いように見えるが普段からの修行で千冬さんと楯無さんの相手をしている俺からしたら機械的な構えなんて隙だらけ。

「チエスト〜〜!!」

こんな機械相手に構えなんて必要ない。力押しで行こうか!!

しかし流石は機械と言うべきか人間の限界を超えた動きで斬撃を放っているのにはほとんど防ぎきっている。俺はまだまだ戦えるが中に入っているラウラは激しい動きの負担をダイレクトに受けているはずだ。一瞬の隙さえ作れば超能力で切れ味を最大限にまで高めた一撃でラウラの救出ができるのに……

「こんな言葉を知っていますか？四つ足の馬でさえ転ぶ事もある」
「つまりどういうことだセシリア？」

セシリアはラウラの手を見事に撃ちぬいて太刀を弾いてから応えた。

「強さはいつまでも続かないという事ですわ」

一瞬の隙を見逃さず俺は思い切り刀を振りぬいてシユヴァルツエアレーゲンを真っ二つに叩き切る。パツクリと割れた本体からは気絶したラウラが顔をのぞかせた。そ

の顔はとても安らかで綺麗だった…。

……

……

…

「私は……負けたのか」

でも不思議と悔しくはないだろう？

「そうだな……とても心地良い感覚だ。あそこまで清々しく負けるなんて思っていないかったからな」

生身の人間に負けたのに悔しくないのか？

「俊葵は特別だ……俊葵を見ているとまるで自分が守られる存在なのだと分かる。もう私の中に何のわだかまりもない……これからも守ってもらおうか。なあ、俊葵」

え!? ちよ、いつから気付いてたんだ!?

「初めから気付いていたよ。愛する男の声を忘れる薄情な女に見えるか?」

いや……本当にごめん……すごく辛い思いさせて

「正直、嬉しかったよ。私の思い違いでなければ俊葵は私の事を真剣に考えてくれている……それが分かっただけで感無量だ」

そうか……もうすぐ起きる時間だな。じゃあ俺は行くよ。

「ああ、また明日」

……

……

……

「ふう…終わったな…ああ、疲れた」

「お疲れ〜」

「お疲れ様です俊葵様」

大会は無事に中断、生徒とゲストにはVTシステムの事を伏せてとある実験兵器の暴走とだけ伝えてもらった。まあ何人かにはバレてるだろうけど問題はない…無理やりばらそうとするなら俺が消すだけだし。

「俊葵もラウラのISからVTシステムを外すだけなのに大変だったね」

ラウラとの対決が終わった後は保健室で身体検査があった。なんでも生身でISと戦ったものだから骨が折れてないかとか内出血はないかとか半強制的に調べられた…医療カプセルに入ったらすぐに治ると言ったのだが検査して書類提出しなきゃいけない決まりらしい。

「まったくだよ…でも愛する女の為ならなんだってやるさ。だけど本当に疲れたあ〜」

く。束えくクロエエくシャルルウく癒してくりやれくく」
身体検査と事情聴取を全て終わらせた俺は地下室へ戻っていた。そして束とクロエとシャルルに思いきり甘えていた。

「勿論♥」

俺のベルトを外し、ズボンを下ろす束

「私も俊葵様にご奉仕させていただきます」

シャツのボタンを外し脱がせるクロエ

「僕だって最近結構って貰えなくて寂しかったんだから……ちゅ♥」

キスをするシャルル

きつと今夜は眠れない夜になりそうだな……

48話

日も傾く夕暮れ……紅い夕日が教室に差し込み一組の男女を照らす。

「はあ……掃除面倒くさいなあ……」

「でも俊葵が掃除したところ凄く綺麗だよ」

「そりゃ埃が残ってたりしたら気になるだろ。やるならキツチリかつちりやらないと」

俊葵つて変なところで細かいなあ。そんなところもカッコいいんだけど。

シャルルと俊葵は放課後の掃除当番で教室を掃除している。シャルルが箒と塵取りを器用に使つて床掃除をし、俊葵は窓や手の届かないところを超能力を使つて拭き掃除をしていた。

「俊葵の超能力つて使い勝手良さそう。日常生活で役に立ちそうだし羨ましいよ」

「使えば使つただけお腹減るからあんまり良いとも言い難いぞ？それにこんな大きすぎる力よりも……」

俊葵は掃き掃除をしているシャルルを後ろから抱きしめて耳打ちをする

「愛する女を護れる力があれば十分だ……愛してる」

「ひう……」

い、いきなりなんだから……もう。でもこんな風な事をされるのも悪くない。ううん、もつとして欲しい。俊葵に抱きしめられると凄く安心する。ん……エッチな手つき……もつと触ってほしい……もつと僕を味わって。

「従順な奴隷にはご褒美をあげなくちゃね」

机の上に押し倒し制服を脱がしつつ首筋の匂いを嗅ぐ。柑橘系の爽やかな甘い香りが俊葵を包み股座をいきり勃たせた。

「ダメ……止めて、ここ教室だよ……人が来ちゃう♥」

心と身体は俊葵を受け入れる準備を完了させているが口はまだ理性を保っているように建前だけの制止を懇願する。しかし俊葵は愛撫を止めずに超能力で扉とカーテンを閉めて教室を一時的に現世と完全に隔離した。

「これで誰も入ってこれない。東も千冬すらも入ってこれないほとんど完璧な空間だから諦めて……」

「俊葵……僕もう……」

互いの唇が触れ合う寸前……夕日が急に強い閃光を発してシャルルの目をくらませた

「え!? ちよ、ちよつと!! ナニコレ!!」

ガバツ!!

「はあ……はあ……。……夢かあ」

折角もうちよつとで俊葵と……はあ。うう……アソコ濡れてるし背中も汗でびっしり……気持ち悪いからちよつと早いけどシャワー浴びよう。

ベッドから降りて服を脱ぐシャルル。ぐっしよりとクロツチを濡らしたショーツに手を掛けた時、隣のベットにラウラがいない事に気付く。シャルルはもしやと思い急いで身支度を済ませると俊葵の部屋へ急いだ。

俊葵の自室

学年別タッグマッチを終えて俊葵は今度こそ一人部屋になった。と言うのも「男子高 校生にもプライベートはあるし、俺と一夏は特別な存在だ。ちよつとくらい優遇されても良いんじゃないかなあ……? 一人部屋が欲しいなあ……。一人部屋ならいつでも女の子とか呼び込めるしい……。それにもし、もしですよ? 千冬さんが俺に説教があるって俺の部屋に来て俺一人しかいないんですよ? 一夏や他の生徒がいないから『二人つきり』で説教ができちゃうなあ……。(棒) ねえ……。千冬さんあん、一人部屋にしてくださいよ……。」なんて建前や欲望が見え見えのお願いを千冬さんが受け入れて学校側

も承諾した事にある。

「んう……ふあ……ああ……ふう。昨日変な時間に寝たから変な時間に起きちゃった」

ベッドの脇にある時計を見ると画面は6時過ぎを表示していた。いつもならこの時間はまだお眠なのだが、折角の土曜日だ。シャワーを浴びて早めの朝食を採ろうと俊葵は布団を除けてベッドから降りようとする。しかし布団をめくるとそこにはラウラがスヤスヤと寝息を立てていた……全裸で。

「予想はしていたけど行動が早いな……。おい、ラウラ起きろ。朝だぞ」

〽としきはラウラをゆすった

〽へんじがない ただのしかばねのようだ

「えいー」

ドウクシ

〽としきはザオリク（デコピン）をとなえた

〽かいしんのいちげき！

〽ラウラはめをさました

「んう……うう……酷いぞ俊葵……こんな起こし方をするなぞ」

「自分のベッドで寝ないラウラが悪い。なんで俺のベッドに潜り込んでいたんだ？しかも全裸で」

ラウラは立ち上がると俺の前で腕を組み答えた

「うむ、実は俊葵と付き合うにあたって副官に助言を求めたのだ。そうしたら夫婦とは同じ床に就き、包み隠さぬものだとか教わった。だから私はこうして包み隠さず同じ床に就いたという訳だ（えっへん）」

「うん、あながち不正解でもないけど正解でもないからなそれ。包み隠さないっていうのは精神面や秘密とかの事であって物理的な事じゃあない。それに日本の気候は欧州と違うから全裸で寝るのはお勧めしないぞ。俺は全裸で寝るの好きだけど」

「そ、そうなのか……」

副官から教わった夫婦仲を良好にする方法が失敗したことが分かり見るからに落ち込むラウラ。うん、こんなラウラも可愛い（確信）

「でもまあ、ラウラは俺との仲を深めるためにこんな事してくれただろう？ありがとな」
 「う…そ、そうだ。私はお前との仲を深めるためにあえてこのような行動に出たのだ。いいか、決して私は間違ってるなどいない。いいな!!」

「はいはい」

全裸のラウラを抱きしめて頭をなでなでしてやる。すると扉が急に開いてシャルルが飛び込んできた。

「……にラウラが来なかった!？」

「それならここに居るけど」

「遅かったかあ……」

「どうしたの？」

シャルルは夢の内容はさて置き、俊葵とラウラに事情を説明した。

「ふう〜くん、てかラウラがここに居るってよく分かったね」

「うむ、シャルルは超能力でもあるのか？」

「だってこの間の事でラウラも俊葵の事が好きだって分かったから……。それより早く服を着てラウラ。部屋に帰るよ!!」

無理やりラウラに服を着せるとシャルルは帰ってしまった。ラウラの残り香を楽しんでいると、ふいに別の香りが漂っている事に気付く。

「……せめてシャワーを浴びてから来いよ。普通の人にはバレないだろうけど愛液でぐっしより濡れてたのが俺にはバレバレだぜ」

食堂

「はあ……」

シャルルは朝食のマカロニサラダのマカロニをフォークで弄りながら悩んでいた。

絶対にバレたよなあ……僕がアソコを愛液で濡らしてたって。だって俊葵の嗅覚とか聴覚凄いもん。いやらしい変態だって思われてないかな？

「朝からそんなテンションでは今日一日を乗り越えられないぞ。まったく……んしよ、んしよ……しかしまあこのマカロニをフォークに刺すのはなかなか面白いな」

なんかこうしてみるとラウラって猫みたいだよ。小さくて人懐っこくて可愛くて……やっぱり俊葵もこんな女の子が好きなのかな？僕の事好きって言ってくれてるけどなんだかラウラを見ると自信がなくなるなあ。

「どうした？食べないのか？朝食は一日のスタートダッシュに必要なエネルギーだ。ちゃんと食べなきゃだめだよ。あむ……むぐむぐ……ごくん」

「だからって朝からステーキはちよつと……俊葵じゃないんだから」
「俺がどうかしたか？」

俊葵の声が聞こえて振り返ったら特別メニューの大盛ステーキを持った俊葵がいた。
「朝からステーキをよく食べれるなって話」

「美味しい物ならいつでも入るだろ。それより二人とも今日は暇か？」

「私は暇だな」

「僕は俊葵の為ならもしも予定があっても俊葵を優先するよ」

「なら朝ご飯を食べ終わったら買い物に行かないか？臨海学校を目前に控えたのに水着

持つてないんだよ。だから皆で買物に行こうと思つてただけど皆用事があるつて断られたんだ……二人はどうかかな？」

僕とラウラは二つ返事でOKして部屋へ戻り準備を済ませた。

「俺の都合で二人一緒なのはごめんな。ホントは二人きりでデートしたかっただろ？」

「ううん、そんな事ないよ。僕は俊葵と一緒にデートできるだけで嬉しいんだから。ね、ラウラ？」

「勿論だ。姉さんには悪いが今日は俊葵を二人占めだな……ふふ」

「喜んでくれてるなら俺も嬉しいよ。それじゃあ行こうか」

俊葵は僕とラウラの手を取つて歩き出した。俊葵つて女心を分かつてるよね。僕がこうして欲しいいつて思つてるとソレを的確に察してくれるもん。うう……僕もラウラも顔が赤くなつちやうよう。

電車内

「やっぱり土日つて事もあつて人が多いね」

「ああ、だがこうして席が空いていたのは幸運だったな。本当に俊葵は立つたままで良いのか？」

空いた席にはシャルルとラウラを座らせて俺は立った。別に疲れないし、そもそも女性に立たせて男の俺が座るのもなんだか嫌な感じだ。それに男は勃つ生き物だしね。

「ジトーーー（一一）」

「どうかしたか？」

「俊葵…またおやじギャグを考えてる」

時々思うんだけどシャルルつて変に勘が鋭い。悪い事じゃあないけど俺のギャグが滑るのはいただけじゃないな。

「それにしてもなんだか乗客に見られている気がするのだが？」

なんとおっしゃるラウラさん。当たり前だ…ただでさえ銀髪で美人で眼帯で目立つのにI S学園の改造制服を着てたら目立つよ。

「俊葵もなかなか目立ってるよ…」

「え？俺も？」

「だって俊葵も顔の左半分にはやけどの跡があるし眼帯もしてるし、それを差し引いてもカッコいいし。大体その服装だけでも目立つと思うよ？悪い意味で」

何と失礼な。この私のファッションセンスが悪いというのか？

「ああ、確かに俊葵の服は悪目立ちするな」

「そうか？カッコいいじゃあないか、仮面ライダーBLACK RX」

俺の今の格好は仮面ライダーBLACK RXのシャツにピンクのハイビスカス柄のステテコ。う〜ん、やっぱりカッコいいと思うんだけどなあ。

「しかもこのシャツ、市販されてないんだぞ？密林で探したけどなかったから自分でデザインして生地にも拘って作った一品なんだ」

「いや、シャツもそうだけどそのステテコ…いったい誰が買ったの？」

「俺だけど？」

「……………」

「俊葵は戦闘のセンスが抜群で武器を手足のように扱う…」

「料理も上手で女の子にとっても優しくてカッコイイ」

「でも…ファッションセンスだけはないよね（ないな）」

なんだか馬鹿にされた気分…悪い気分じゃあないけど。

電車の中で暫く雑談をしていたら目的の駅に着いた……………

49話

「ねえねえ、あの銀髪の女の子可愛くない？」

「隣の金髪の娘も可愛いわね。銀髪の娘の服って見た感じ制服みたいだけど何処の制服かしら？」

「え!?!知らないの!?!アレってIS学園の改造制服よ!!はあ…羨ましいわ。アレ一着で十何万円とするの…最高級の生地になノカーボン繊維を織り込んで防弾性もある凄い制服」

「まさにセレブ高校って感じね。私たちとは住む世界が違うみたい」

「確かに…ところで隣の男は誰かしら?なんかオタクっぽい格好だけど」

「さあ?見た感じ20代後半って顔だし教師なんじゃない?IS学園って秘密が多そう
で外出できないさそうだし見張りだったりして」

「ああ、ISや国家に関する秘密とかね。それにあんな変な人が彼女たちの彼氏なんて世の中おかしいわよ」

.....

.....

...

「あいつらを合法的に消してくる…」

「僕も…」

「おいおいおいおい、待て待て待て待て」

彼女たちの話を聞いてキレた二人を何とかなだめて落ち着ける。こんな街中で I S を出されちゃ困るのは俺たちだけじゃなくて千冬さんや学園にも迷惑をかけることになる。彼女たちがどうなるうと俺には全く関係ないけどみんなが迷惑するのはいけない

「別に良いじゃないか。こんな事で腹を立てているようじゃまだまだ子供だな」

「僕はね…自分の事を馬鹿にされるのはいくらでも我慢できるんだ。でも俊葵の事を馬鹿にされる事だけは何かあっても我慢できない」

「同感だ。俊葵の素晴らしさを何も分かっていない子娘どもが…自分のクズ度を棚に上げて俊葵を見下しおって…」

俺の事をこんなにも考えてくれてるなんて…本当に彼氏冥利に尽きるなあ、本当にもう。でも I S 学園の生徒としてまだ問題を起こす訳には行けないので二人には抑え

てもらわないと。

「言いたい奴らには言わせておけばいいさ。いずれ俺がどこの誰だか分かった時には考えを改めるはずさ。それより早く水着シヨップに行こうか」

「きつとその時には俊葵のファンも沢山増えるだろうね。……ちゃんと僕たちを見ててね」

「私は寂しがり屋なんだからな……」

俺はさりげなく二人の手を取って水着シヨップへ足を進めた。その道のりで通行人がシャルルとラウラに見惚れたり、俺を羨望と嫉妬のまなざしで見たりするのはとても心地の良いものだった。

……俺ってそんなに老けてるかな……一応、肉体年齢は二十歳なのに……。

……

……

……

水着シヨップ

「凄い……水着と言うのはこんなに種類があつたのか」

「これだけあつたらどれを買うか迷っちゃうなあ」

「それじゃ分かれて買い物しようか。はい、これ俺のカード。利用限度額無制限だから」

ら好きなだけ買い物して良いよ」

「い、良いよそんなの!!僕たちだってお金くらい」

「そうだぞ、私たちを気遣う必要はない」

そんなつもりはないんだけど…

「お金なんてあり過ぎてても困るんだよ。それに二人とは初デートなんだし俺に花を持たせてくれても良いんじゃないか?」

「むう…俊葵って偶に強引」

「し、仕方ないから使ってやろう／／／」

うんうん、女の子は素直が一番

……

…

水着ショップに到着した俺たちは各々に分かれて臨海学校で着る水着を選ぶことにした。本当は俺もシャルル達と水着を選びたかったのだが周りの視線が痛かったのと臨海学校まで水着姿をお預けしておきたかったので一人で選んでいる。それにしても

……

「男用の水着ってあんまり種類ないなあ…」

女性用の水着9割5分で男用の水着コーナーは5分って感じだな。いくら女尊男卑

の時代だからってこれは酷い…しかも女性客になんか変な目で見られるし最悪。あれ？店員もなんか面倒臭そうって顔してないか？

「まあ、可愛いのがあったしこれで良いか…」

俺が手に取ったのは真っピンクの短パンタイプ、ハイビスカス柄。一番端っこのラックに掛かっていて75%OFFのシールが目立つこの一品…どうしてこんなに割引されているんだ？こんなにも良い水着なのに。「まさに夏!!」って自己主張の強すぎるハイビスカスに遠くにも俺だと分かる真っピンクさはポイント高い。

「とりあえずこれを買うか。………?」

妙な気配を感じて試着すると見せかけて更衣室に入り左目の義眼と監視カメラをリンクさせて周りの様子を見る。カメラだけだと音が聞こえないので静かに耳を澄ませる。

………

…

「付き合わせて悪いわね。あんたは俊葵とココに来たかったんじゃないの?」

「いえ、私はまだ俊葵さんとお付き合いしていないので…。それに箒さんに悪いですわ」
この声は…鈴とセシリアか。決闘以来二人でいるところをよく見かけるけど仲良くなったなあ。それにしても鈴は一夏と来なくて良かったのかな?」

「鈴さんこそ一夏さんとデートしなくて良かったのですか？」

「一夏はこの間のVTシステム騒動でISを点検に出さなきゃいけないんだってさ。東さんがいるから任せればいいのに国の方針で専用の機関に任せるんですって。まあ、ISに関しては東さんにも分からない事も有るみたいだしどこでやっても検査だけなら一緒だろうけど」

「確かにそれは私も思いましたわ。私たちの都合も考えて欲しいですわね」

一夏も大変だな…俺？俺もISを点検に出せって言われたけど「そんなに点検したけりやお前らが来い。文句があるなら聞いてやる。ただし聞くだけな。俺のISは束にしか点検させない」ってやんわりと優しくオブラートで三重に包みこんで伝えてやった。そのかいあってか俺と日本の関係はなかなかギリギリのバランスで保たれている。どうせ俺が日本の利益になると分かれば態度を変えるのは目に見えているけどね。

「お客様？大丈夫ですか？」

おっと、長く籠りすぎたかな

「大丈夫ですよ。今出ますんで」

……

…

「なあ、シャルル。俊葵に見せるのはどんな水着が良いだろうか？」

「うーくん、俊葵ならどんな水着でも喜んでくれそうだけど」

「だが似合う水着を着たい……これなんてどうだ？」

そう言つてラウラは左手に持つている競泳水着を差し出す。

「それともこっちか？」

次に右手の旧型スクール水着を差し出した。

「……どうしてそれを選んだの（呆）」

「うむ、実は昨晚ドイツにいる副官のクラリツサに訊いたのだ。『どのような水着を着て行けばよいか』とな。そうしたらクラリツサは『俊葵さんはマニアックな性癖をお持ちです。で隊長の魅力を最大限に引き出す競泳水着などがよろしいかと』と助言してくれたのだ。やはり困つた時にはクラリツサに訊くのが一番だ」

「確かに俊葵はマニアックだけどさすがにそれは……これなんかラウラに似合うと思うんだけどなあ」

シャルルがラウラの為に選んだ水着はシンプルな作りのフリル付き黒ビキニ。シンプルでありながら寄せてあげるタイプの水着なのでラウラでも若干なりの谷間を作ることができる。そして谷間の部分は大きく開いており、なかなかどうしてプリティと言ふよりはセクシイな水着だ。

「う……そ、そんな物を私に着ると言うのか!? 恥ずかしくて俊葵の前に出られなくなる!!」

「ふう〜くん、じゃあ僕はこの水着で俊葵をメロメロにしてイチヤイチヤしちやおうかなあ〜♪」

シャルルは自分で選んだ水着を身体に合わせながらラウラを挑発する。

黄色い生地には黒いラインが入っているととても明るいビキニ。シャルルが作中で着ていたヤツに似ているが違うところがある。それは……………

「シャルル…布地の面積が少なすぎないか？」

「確かに少ないけど俊葵にはエツチな僕を見て欲しいなあ〜♡」

「シャルル…お前は何も分かっていない」

「俊葵!?!」

いきなりの俊葵の登場に驚く二人。とつさに選んだ水着を後ろに隠すが俊葵にはバレている。

「露出が多ければ良いという訳じゃないんだ。言うなれば水着と言うのは女性をさらに美しくする装備。装備が少なすぎれば必然的に魅力は半減してしまう。しかし適切な水着を着こなすことができれば魅力は何倍にも跳ね上がるのだ。という訳でこつち来い」

俊葵はシャルルの手を引いて何着か水着を持って一緒に試着室へ入っていった

50話

シャルル「……………」

俺「……………」

「あのさ……」

沈黙に耐えかねたのか、それとも二人きりの空間に流れる空気に耐えかねたのか分からないがシャルルが恐る恐る口を開く。

「どうして俊葵まで試着室に入ってきたの……これじゃ着替えられないよ／＼／＼」
「これならどうだ」

シャルルの後ろに回ってゆつくりとボタンを外し、着替えの手伝いを始めた。シャルルも最初こそ抵抗をしていたが諦めたのかされるがまま俺の腕の中で俯いている。

「もう抵抗しないのか？」

「だって……俊葵に求められて抵抗なんて出来ないよ／＼／＼」

「ここでスルのも良いけど先に水着姿のシャルルを見たいな。まずはこれから着てみようか」

俺が選んだ白を基調としたビキニを渡す。それを素直に受け取り下着を脱いで着替える……俺の目の前で。うっくん、マンダム。

「えへへ／＼／＼どうかな?」

「やっぱり美人は何を着ても似合うなあ。シャルルはどちらかと言うとシンプルに均整の取れた美人だからシンプルな水着が良く似合う」

「それ褒めてるの?」

「料理で例えるならトッピングは付いていないけどかなり美味しいって感じ?」

「それってみんなにも言えるよね」

「……………ぐう」

ぐうの音が出ちゃったよ

「またツマラナイ事考えてる。でも褒めてもらったのは嬉しいなあ♡次はこれとか来てみよう♡」

次にシャルルが手に取ったのはフリル付きの黒い水着。さっきの白いビキニをプリーティとするならこっちはセクシイって感じだな。とても大人っぽい良い水着だ。

「どうかな?」

「似合わないな」

「け、結構ばっさり言うんだね……まあ良いけど」

「ちよつと派手すぎる。もつと落ち着いた雰囲気の方が似合うと思う。だからこれなんてどうだ？」

「今度はオレンジを基調に白のラインが走っているデザインのパレオ。しかし下が無く、パレオだけになっている。」

「……………これを着るの？臨海学校で？」

「……………ごめんなさい」

「俊葵のえつち…でもこれはこれで良いかも……………ほら」

試着室の壁に手をつけてパレオをはだけさせて秘部を露出する。ナニをされるか想像したのかほんのり濡れているのが…これはなかなか……………フッフ

「期待してるとこ悪いけどそれはまた今度な」

優しくパレオを元に戻して後ろを向いてシャルルが別な水着に着替える時間を作る。

「今日の俊葵、なんだか紳士的なんだ」

「ラウラも一緒に来ているしエッチはまた今度ね。…そろそろ着替えたか？」

「うん♥セクシイな僕にメロメロになっても知らないからね♥」

ゆつくりと振り向くと背中とお腹の部分が大胆に空いているワンピースタイプの水着を着ていた。普通のワンピースタイプと違いスカート丈が長めに作られているのがポイント高め。そしてオレンジ色とレモン色の幾何学模様の中に小さな黒い四角や三

とくぎ

まほう

どうぐ

にげる

↓

とくぎ

まほう

どうぐ

▽にげる

としきはにげだした

▽しかしつかまってしまった

シャルルはにげだした

▽シャルルはにげきれた

「ごめんね俊葵……恨まないでね」

「図つたな!!シャル!!」

「俊葵は良いご主人様だったけど恋人が多すぎたんだよ」

……

…

は…

固い床に正座するのはキツイな…いや、お二人の怒りも十二分に理解できるけどこれ

「暇かどうか訊いて回ってたのはデートのお誘いだったわけだ（ドドドドドドド）」

「だが私たちを誘わなかったのはなぜだ？（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

「男女二人つきりで試着室なんて：／／え、えっちいのはいけないと思います／／」

四面楚歌：いや、三人だから三面楚歌だね。どこかに逃げ道が：

「逃げ切れるなんて思わない方が良いよ？」

「まさか私たちから逃げ切れるとでも？」

「だ、ダメです俊葵くん：そんな：：ああ／／」

一人だけ脳内の妄想にトリップしてるけど一番厄介な二人が正常だ。諦めよう……

「悪かったよ：ちゃんとどんな理由で暇か訊いたか説明するべきだったよ」

「うん：なんだか調子狂うなあ」

「もつと言いつくをすると思つたが：まあ私たちもそんなに怒つてはいない」

「良かった：許して貰えて。：で、三人も水着を買いに来たんですか？」

「束に押し切られて渋々来たという訳だ：別に私は水着なんていらなひと言つたのだが

……

ああ：なんとなく分かるわ。千冬さんって真夏のビーチでも水着よりもラフな格好で海に入らずに生徒たちの監視をしているイメージあるから。でも渋々って言ってるけど顔赤いし照れてる。

「ちーちゃんスタイル良いし俊くんにアピールするチャンスだよ?」

「べ、別にアピールなど／＼／」

可愛い（確信）

「千冬さんも可愛いところあるなあ（2828）」

「おい……………」

ヒツ…

「どんな水着を着て欲しいんだ／＼／?」

「ふえ?」

「だからどんな水着を私に着て欲しいのかと訊いているのだ!!」

これちゃんと選ばないと殺される奴だ。束は山田先生と一緒に水着を選びに行っている。束え…逃げないでよ。

……

…

「この水着なんてどうだ? いや、これも捨てがたい。くつ…まさかこんなに水着の種類があるなんて思ってもいなかった。おい俊葵、お前はどんな水着が好みだ?」

両手いっぱい水着を持って俺に尋ねる。まるで欲しいものが沢山ある子供みたいで微笑ましい。千冬さんにもこんな乙女みたいなどころがあるんだな。

「とりあえず三つに絞ってください」

「何故だ!?可愛い水着がこんなにも…」

「この試着室は3着までしか持つては入れません。ですからそれとそれと…あとそれを着てください。他のやつは俺がなおしておきますから」

千冬さんに似合いそうな水着を適当にチョイスして他の水着は元々置いてあったラックになおす。それにしても女性用の水着ってどうしてこう複雑な造りになってるんだ?そりやあすぐにポロリしてしまうような水着じゃあいけないのは分かるけど、この紐が沢山あるやつなんか結ぶのが大変そうだな。

「彼女さんへのプレゼントですか?」

千冬さんを待つっていると店員が話しかけてきた。きつと俺を彼女の水着を選ぶ彼女かなにかと勘違いしたのだろう。ここでいいえと答えるのは簡単だ…しかしいいえと答えてしまった場合の俺の立場が危うい。仕方ない…

「ええ、まあ…でも女性用の水着ってよく分からなくて…」

「確かに男性には縁のない商品ですからね。もし宜しければ一緒にお選びいたしますよ?」

「それは助かります。丁度一人で困っていましたから」

ふう：優しい店員さんで良かった。女尊男卑の世界にも男に気を使える女性がいるもんだな。……でも頬が若干赤いのはなんでだろう？

「顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

「えっ!? あ、はい、大丈夫です。それより彼女さんはどんな色が好きですか？ まずはどんな水着かを選ぶ前に色を選んでいきましよう」

「そうですねえ…（東は）ピンクとかが好きですね」

「それでしたらこちらへ」

生まれて初めて女性物の水着を女性店員と一緒に買う俊葵のはじめてのおつかいが始まった。

……

…

「ねえねえまややん、こんなのかどうかなあ」

「それは…ちよつと露出度が高くないでしょうか？」

東と真耶も二人で水着を選んでいた。しかし真耶を俊葵好みにコーデイナートしようとする東は『こうでねえ』と思いつながら自分の選んだ水着を着ない真耶に四苦八苦している。

「俊くんにアピールするいいチャンスだと思うけどなあ〜」

「わ、私は別に松崎くんの事なんて……その……」

「写真部から没収した俊くんの隠し撮り写真でオナニーしている事は知ってるよ?」

「——ツ／／」

真耶はもはや言葉を介さずとも俊葵の事が好きだと一目瞭然、束の誘導尋問に応えなくても良い事まで答えそうな勢いだ。

「まやさんは俊くんに釣り合う数少ない女性だと思うんだあ。だから自分の気持ちに正直になりなよ」

「うう……ならせめてそのエッチな水着は松崎くん……いえ、俊葵くんの前だけに……」

「ふふ……これで俊くんも喜んでくれるかも。うん、分かったよ。じゃあソレは俊くんとセックスする時用のね。じゃあ次は臨海学校で着るやつを選ばお〜」

束は真耶の手を取って店の奥へと姿を消していった。

51話 R-18

「こっちの白いビキニと黒いブラジリアン水着、どっちが良いと思う？」

「…白いビキニですね（俺以外の人にセクシイな水着姿は見せて欲しくないし）」

「ふふ…お前は嘘が下手だな。今、一瞬だけだったが黒い方を見ただろう。本当はこっちの方が良いんじゃないのか？」

流石は千冬さん。ブリュンヒルデの名は伊達じゃあない。

「俺以外の男が千冬さんのセクシイな姿を見るのが嫌なだけです」

「ならこっちへ来い…」

すると千冬さんは左手に水着を、そして右手は俺の左腕を掴んで試着室へ入った。まあ…必然的に俺も一緒に入ることになるわな。

「お、お前だけだからな…私の裸を見せる男は…／＼／」

そう言うとお腹をゆつくりと俺に見せつけるように脱ぐ。こういった事が苦手なのか腰をクネクネされているがぎこちない。しかしそれも良し!! 普段とのギャップが激し

すぎで…

「千冬さん!!」

「ひやつ!?!おい…いきなり抱き着くな。それにバタバタしていたら店員にバレるぞ（小声）」

「結界を張りましたから大丈夫です」

「分かった、分かったから落ち着け。まずは水着を着させてくれ」

渋々と千冬さんから離れて着替えの様子を見て待つ。

……

…

「ど、どうだ？我ながら似合っていると思うのだが」

「なんて言えば良いのかな…なんか…こう…とても似合ってます」

「襲われると思ったんだが…お世辞は言わなくて良いんだぞ」

千冬さんに黒い水着はとも良く似合っている。千冬さんの焼けていない絹のような肌に艶のある黒髪、それら全てが調和していた。

「違うんです…欲情とかそんな劣情じゃなくてミケランジェロの彫刻やダ・ヴィンチの絵画のような美しい物を見た時の感情に似ています。尊い…多分そんな感じですよ」

「そうか…／／／」

ぎゅ……

「だがコツチは欲情しているみたいだぞ……相変わらず大きいな。服の上からでも形が分かるほどだ。小さくしなくてもいい、何も変わらないお前のを見たいからな」

「恥ずかしいですよ／＼」

皆の前で裸になるのは慣れているけど、それは自分から裸になつていたので恥ずかしくなかつたんだ。でも今回は違う。千冬さんは俺が服を脱ぐのを待っている。

「そんな事を言うな。私とお前の仲じゃないか」

「なんか今日の千冬さんいつもと違いますね」

「学校では教師と生徒だからな……外でくらい普通の恋人でいたい」

「そうですね、千冬さんの……いや千冬の言う通りだ」

なんだか今日の千冬さんは押しに弱い雰囲気。自然と口調も砕けてしまう。

「おい、確かに恋人同士でいたいとは言ったがな、私は年上だぞ。せめてさんくらいは付けて……んむ!」

千冬さんのお説教が始まりそうだったのでキスで塞ぐ。

「お説教しちゃうお口は塞いじゃおうね。千冬だって偶にはこういうった事をして欲しかったんじゃないの?」

「そんな……ん、私が……そんな事……／＼」

「正直になれよ……心の奥底ではいやらしいピンクの感情がとぐろを巻いているぞ。俺には分かる。イジメて欲しいんじゃないのか？」

千冬さんを抱きしめてお尻を撫でまわす。千冬さんは抵抗もしなければ受け入れているという訳でもないようだ。しかし若干だが千冬さんの匂いが変わった。俺とセックスをしている時の女に似た匂いがする。

「うう……今日の俊葵はなんだかいつもと違うぞ」

「ほら、そこに手をつけて……そう、お尻をコツチに向けるんだ」

俺は千冬さんのお尻に顔をうずめておまんこを舐め始める。一気に入れようかとも思ったが普段よりも大きいのでしっかりと濡らさないとね。

「あ、あ、そこ……んう／＼／＼声が出てしまう……くう♥」

いつも不思議に思うんだけど、どうして好きな人の体液って美味しいんだろ？いくらでも舐めていられるよ。

「ん……あつ、あつ……止め／＼／＼ひやう……ダメ♥」

「結界を張っているから声を出しても大丈夫。ほら……声を出して♪」

舌を伸ばしておまんこの奥にある子宮口を舐めまわす。セックスの時でも刺激できるが単調な刺激になってしまうので、敢えて舌で刺激をする。

「奥まで届いてる……あん♥声を出す／＼／＼ちゃんと声を出すから少し休ませてくれえ

「ダメだね」

そう言ってクンニリングスを再開する。千冬さんの力なら少し暴れるだけで俺から離れられるのにそうしないって事は受け入れているんだろうな。

10分後……………

……

…

「ハア…ハア…もう、ダメだ♥頼む…入れてくれ／＼／＼私のおまんこに早く俊葵の太くて大きなおちんぼを入れてくれえ♥」

ちよつとやり過ぎちゃったかな（汗）でも喜んでいるみたいだし結果オーライ。さて…折角おねだりしてくれているんだし入れt

デンドンデンドンデンドンデンドン!!。パツパパくくく。パパパくくく!!

あ、東から着信だ。

「なんじゃらほい?」

《ちーちゃんだけズルい…》

ガチャン!!。ツーツーツーツー

あ…（察し）

「千冬さん……東から呼出ツス」

「え……そんな……もうこんな濡れているというのに……ハア。東………」

怒つてらっしやる。これは近づかない方が吉だな。

周りに店員がいないか確認してから俺が先に試着室を出る。すると買い物袋を両手に持った東と山田先生がとつてもイイ笑顔で出迎えてくれた。その後説教が数十分にわたって繰り広げられたのはもはや語るまい……

52話 R-18

「うう…酷いです東博士。こんな破廉恥な水着を選ぶなんて…そもそもなんでこんな水着がここに売っているんですか!？」

「まややん固すぎい〜。私の事は東さんで良いよ〜」

「東さんはもつと常識の範囲内で水着を選んで下さい」

東が選んだ水着はまさに男受けが良さそうな布地の面積が少なめで谷間を大きく作る牛柄のビキニ。個人的に俊葵と二人きりの時に着る水着としては何分問題はない。しかし今回は臨海学校で着用する水着なので派手なのは頂けない…真耶は先ほどから束に抗議しているが聞き入れていないようだ。

「ええ〜まややんお堅〜い♪ねえ…もつとえつちなまややんを見せて欲しいなあ♡」

真耶の後ろからその大きな双丘を両手で優しく持ち上げる。

「私って俊くんが一番だけど可愛い女の子にも興味あるんだあ〜♡」

「わ、私はノーマルです!!それに私は……と、俊葵くんが一番ですし／＼／」

「それじゃあ止めよう、うん。まややんは大事な俊くんの彼女になる女の子だし」

「じゃあ私は一人で水着を選びますのでこれで……」

ガシッ

「むっふっふっ〜ん、この束さんから逃げようなんて100年早いんだなあ〜♪」

「うう……もうえっちな水着は選ばないでくださいね……」

しっかりと肩を掴まれた真耶は諦めた。束はと言うとにんまりととてもイイ笑顔で

真耶の水着を選び続けるのだった。

……

……

……

51話の最後に続く……

俺「……………」

束「……………」

千冬さん「……………」

山田先生「……………／／／」

デアドン！（絶望）

「ちーちゃん…お話があります」

「う、うむ…」

「ちふゆはたばねにつれさられてしまった

「えつと…山田先生」

「は、はい…／＼／＼」

「折角の二人きりですしどこかで軽く何か食べませんか？」

「はい…／＼／＼」

「なんだか借りてきた猫のように大人しくなる山田先生。……可愛い!! (確信

……

…

「買い物を買ませた俺と山田先生は近くの喫茶店に入りゆったりとした時間を過ごしていた。」

「こうして二人きりで話をするのは初めてですね。なんだか新鮮な気分です」

「学校では他の生徒たちもいますし二人きりにはなれませんから。でも織斑先生とはい

「つも一緒にいますよね？」

「うっ…鋭い質問。なんやかんやで山田先生もしつかりと教師なんやね。俺と千冬さんがそういう関係だという事に気付いているみたいだ。」

「ええ……まあ、千冬さんとは大人な関係ですからね。それなりにヤル事はヤツてますよ。一教師としてやっぱり気になるようですね」

「不純異性交遊は教師として見逃せませんからね……なんて言えないですよ、私は……だって私も松崎くんと……／＼／＼」

「束と何かあつたんですか？」

「はい、束さんに自分の気持ちに素直になつた方が良いと言われました。でも怖いですが……」

ああ、束め……山田先生に「俊くんの事好きなんですよ？だつたら告つちやいなよ。まやさんは俊くんに相応しい数少ない女の子なんだから」なあんて言つたんじやないの？いや、確実に言つてるねこれ。

「怖いのは俺も同じですよ。だから卑怯ですけど先に言わせてもらいます……」

深呼吸して心を落ち着ける。言うぞ……言わなきや……

「俺……山田先生の事が好きです。俺と付き合ってください」

「ツ!?え、わ、私も好きです!!鈍臭くておっとりしてますがそれでも良ければ……よろしくお願ひします」

「(こちら)こよろしくお願ひします。つて事で俺の事は下の名前で呼んでください。俺も山田先生の事を学校以外では真耶さんって呼びますから」

「はい／＼／」

俺と真耶さんの思いが通じ合ったところで店員が料理を持ってきた。真耶さんにはチキンドリヤとウーロン茶、俺には2ポンドステーキとペプシコーラ、そして二人で食べるためのピッツア3枚、大盛ポテトフライ2皿、豆腐サラダ2皿。

「相変わらず凄い食欲ですねまゝ…俊葵さん／＼／」

「これがみんなを守るためのエネルギーになるんですよ真耶さん」

「その中に私も入っているんですか?」

「勿の論です。真耶さんは俺が必ず守りますから。さあ、早く食べないと冷めてしまいます」

「ふふ、とても嬉しいですよ」

真耶も喜んでくれて俺も嬉しいよ。……もつと頑張んなきゃな、皆を守るためには力を完全に制御できるようにしないと。

「あ、あの…俊葵さんのステーキを一口いただけますか／＼／」

「はい、良いですよ」

大きなステーキを小さく切り取って真耶の取り皿に2、3個入れる。しかし真耶はただ何か言いたそうな顔をしている。

「できれば……えつと……／＼／」

あ…（察し）

「はい、あ〜くん♪」

「あ〜くん、むぐ…んぐんぐ…ごくん。はう…とても美味しいです（うっとり）」

「それはステーキが？それともフォークについてた俺の唾液が？」

「ツ!!／／／」

リングも照れる程、顔を真っ赤にした。ちよつと意地悪が過ぎたかな。

「うう…両方です…／／／」

恥ずかしがりながらもちゃんと答えてくれる真耶さんマジ天使。

「意地悪は禁止です…／／／私の方が年上でお姉さんなんですからね」

人差し指で俺の鼻先を指しながら「メツ」と優しくしかってくれた。本当にありがとう〜ございます。本当にありがとう〜ございます。大事な事なので二回言いました。

「前世の分も合わせたら俺の方が4〜50歳俺の方が年上ですけどね」

「今は私の方が年上なんです。ちゃんとお姉さんの言うことは聞いてくださいね」

「勿論です…あの…」

「なんですか？」

「あ、甘えてもいいですか／／／？」

東や千冬さんには甘えたくてもなんだか違うんだよなあ。甘えられないって訳じゃ

あないんだけど、束も千冬さんも俺が甘える前に甘えてくるので甘えづらい。

「良いですよ。お姉さんに任せてください。精いっぱい俊葵さんを甘やかせてあげます」

この後、俺たちは食事をすぐに済ませて日がまだ高いというのにホテルへINした。まあ、ここに至るまでにももの凄く恥ずかしがる真耶さんをなだめるのに苦労したが結果オーライ。

部屋に入り真耶さんに抱き着くと何とも言えない良い香りに包まれる。柔軟剤の香りなのか真耶さんの香りなのか分からないけれど皆には無い独特な香り。

「ふふ…まるで大きな赤ちゃんみたいです」

「うっ……」

「照れないでいいでちゅよおっ♡」

何で赤ちゃん言葉!? もしかして恥ずかしさが振り切っておかしくなったの!?

「俊くんはママに甘えたいんでちゅねえっ♡」

「あの…俺21なんですけど…」

「もう…分かってますよ? はいはい…大丈夫大丈夫♡」

ダメだこの人…あれ…なんだか心地良い。何故だ…分からん!! 俺の知らない新兵器が内蔵されているとも言うのか!?

「もつとぎゆうくくくつてしてあげますからベットへ行きましょうねえ」

あ…分かった…これアレだ。社会的地位が高い人がキャバ嬢やソープ嬢に甘えたくなるアレだ。

ベッドの上で膝枕をさせられてしまった。真耶さんは右手で俺の頭を撫でながら、左手でジーンズの上から俺の股間を摩っている。目の前には東よりも大きな爆乳…いや、超乳が…素晴らしい。

「ココをこんなに大きくして…いけない子ですね。メツ、ですよ俊くん♥お母さんに興奮するなんて／＼／＼」

あ、そういった設定なのね。おk把握。

「か、母さん…／＼／＼」

ダメだコレ…恥ずかしくて死にそう。いや…もういつそのこと殺してくれ…。

「はう…なんでしようこの胸のときめきは…これが母性なのでしょうか？もおくつと甘えて良いんですからね♪」

そう言いながらブラジャーを外して上着を胸の上まで捲り上げて授乳するように前かがみになる。

「まだ母乳は出ませんがいずれは俊葵さんが私を…ああ、いけません!!そんな…ああん

♥」

ダメだ…千冬さんとはまた違った意味でダメだこの人…。

「ほら…お母さんのおっぱいでちゅよ〜♪」

え、これやらなきや…はあ…。

「あ〜〜む…ちゅ、ちゅば…んちゅ、ちゅ、ちゅ」

「ん…エツチな赤ちゃんです／＼だつて赤ちゃんはこんなに乳首を舐めません♥ あん…ああ、ソコ…気持ち良い…です」

感じながらも撫で続けてくれる。懐かしいと言うか、何と言うか…これで子守歌とか歌ってくれたらいう事なしだな

「ちゅば…ちゅ…ちゅ〜〜つぱ♥あの…子守歌とか歌ってくれたらなあ〜…なんて

／＼／

「良いですよ♥〜〜♪〜〜♪」

「……………母さん(泣)」

「〜〜♪〜〜♪〜〜♪」

家族が死んで何十年と経つ……

「〜〜♪〜〜♪〜〜♪」

よく恋人や妻に母性を求めちゃいけないつて言うけど、それは絶対に無理な話だよ。だつて男つて言うのは夫には成れても父親には成れない生き物だから。いつまでも心

のどこかに子供の部分があって、知らず知らずのうちに恋人や妻に母性を求めてしま
う。俺も例外じゃなかったみたい…。

「俊くん…ごめんなさい。やつぱり…男の子としてじゃなくてオトコとして俊葵さんと
……カンケイを持ちたいです」

「俺は……甘えても…いいですか？」

「勿論です!!それじゃあお風呂に入ってから仕切り直しましょう」

「じゃあ一緒に入りましょうか」

「ふえ!?!いい、一緒に…ですか／＼/?はい…分かりました／＼」

……

…

「すげえ…」

明るい場所で初めて見る真耶さんの全裸半端ねえ。出るとこ出てて締まるところは締
まつてるレベルじゃない…元代表候補生の肉体は本当に伊達じゃあないようだ。

「そんなに見つめられるとドキドキしてしまいます／＼」

「いや、こんなに大きなおっぱいを見るなんて言う方が無理ですよ。触ってもいいです
か?」

「どうぞ、思う存分揉んでください。もう私の胸は俊葵さんの物ですから…／＼」

真耶さんのおっぱいを後ろから両手ですくい上げる。正直、大きいから垂れているんじゃないかと思っていたけどそんな事は全然ない。程よい張りがあつて沈んだ指が押し返される。そして体温も高い…たまらん!!

「ん…俊葵さん優しいですね／＼あつ…あ、あん、凄く優しい手つきで嬉しいです♥乳首も…優しくお願いします」

真耶さんのおねだりを無下にするのも心苦しいよなあ。仕方ないなあ。

ゆつくりと手を動かしながら真耶さんの乳首を掌全体で優しく摩る。真耶さんの乳輪はちよつと大きめなので掌にピッタリフィット。陥没しているのでそれ程強い刺激にはならないだろう。

「声…出ちやいますう♥あ、あつ、あう…自分でするのよりも気持ち良いです／＼もつとお願います…私、胸が性感帯なんです…あん、あ、あう…♥」

真耶さんの喘ぎ声がお風呂場に響く。初めて聞きたいやらしく艶のある声に俺の股間もいつも以上に興奮している。今回は大きさを変えずに素の大きさをセックスしようかな。

「あ…俊葵さん、お尻に俊葵さんのお、おちんちんが当たってます／＼ひう…凄く大きいです♥16〜17センチはありますよ!」

「え?普通はこのくらいあるんじゃないですか?」

53話 R-18

「真耶さんのおっぱい本当に柔らかくていつまでも触っていたいです」

「ん…初めてこの大きな胸が役に立ちました／＼」

お風呂に備え付けられていたマットの上でくんずほぐれつローションマッサージに興じる。はう…真耶さんのおっぱい最高。

「大きいおっぱいにコンプレックスでもあったんですか？」

「あ、あう、だって…男の人にジロジロ見られるし…ん、肩も凝るし大変なんです。可愛いブラも選べませんし…それにまだ成長してますし…」

え？マジで？そのおっぱいまだ成長してんの？………ありがてえ。

「それなら俺が真耶さんに可愛い下着をプレゼントしますよ。お金に糸目は付けません、真耶さんが好きなデザインをオーダーメイドさせていただきます」

「そんな…悪いです。下着くらい私、買えますから」

「またまたそんなこと言ってる。一週間に一個は壊しているの知ってるんですから」

ね?」

「二ヶ月に一個です!!あ、言っちゃいました…うう／＼／」

月に一個壊すつてなかなかのお胸をお持ちで…

「良いじゃないですか。それにしても…ほほう」

「んっ…そこ…敏感だから…あっ♥乳首…穿つたりしちゃ…やあ／＼／ダメ…お願い…ああん♥」

「ほおれほおれ…ここがええのんかあ…?」

ローションでぐちゅぐちゅになつている真耶さんの乳首を重点的に優しくこねくり回す。陥没している部分を人差し指で引つ掻く度に気持ち良いのか真耶は身体を逸らせた。

「あん、あつ、あつ…そこばかり…んっ、くう♥」

「声を我慢しなくて良いんですよ?ここには俺しかいないんですから」

「ひゃ…耳元で囁くのも…感じちやいますう♥あんっ…もう…お仕置きです♥」

「あうっ!?!ちよ…いきなり」

真耶さんは急に振り返ると俺をマットへ押し倒して股間を弄り始めた。ローションのヌルヌルと真耶さんのすべすべな肌が…たまらん!!

「ふふ…とても立派です♥初めてですの上手くできるか分かりませんが…ん、ん、えろ

「大きさを変えていない俺のちんぽを口に頬張る。少し苦しそうだが嫌じゃないみたい。舌のざらついた感じや初めてのアラのぎこちなさが欲情させてくれる。それに若干や歯が当たっているのも刺激的で気持ち良い。」

「ちゅ、ちゅ、ちゅぱ…無修正で見た事も有りますが…：俊葵さんのおちんぽ、凄くカッコイイです♥」

「他の人のをじっくり見た事ないから分かりませんがどの辺が違うんですか？」

「AVでは大きすぎてフェラチオを苦しそうにしているというイメージがあつたのですが俊葵さんのは大きいにも関わらず凄く舐めやすいです。太過ぎず細すぎず…この太く浮き上がった血管も…はう、素晴らしいです♥それにこのカリ首も高くて口の中をゴリゴリと削られる感じが何とも…こんな凶悪なおちんぽをおまんこに入れたらどうなってしまうのか考えただけでエッチな気分になります／＼／＼」

「へ、へえ〜褒められるとなんだか照れるな／＼／＼長さはどうですか？全部入らないようでしたら短くしますよ？」

「変えないでください。素の俊葵さんとセックスがしたいんです。フェラチオの練習をする時に使ったデイルドより大きいですが何とかあります。ん、んちゅ、んぐ…ん、ん、ん…：じゅ、じゅちゅ♥」

息を整えると喉の奥まで一気に俺のおちんぽを啜え込む。相当奥まで入っているのか真耶さんの喉がぼっこりと浮き上がっている。うへえ…あんなところまで入ってるのか。

「ん、んぐ…じゆる、じゅちゅ…ふはあ♥ゲホツゲホツ!!ふう…ふう…大丈夫です…でもちよつと休憩させて下さい／＼／＼」

喉にこんなもの入れられたら誰だつて咽るよ。…ちんぽのおく匂い染み付いてく、むせる。休憩はさせてあげたいけど…涙目で苦しんでいる姿は興奮する。

「ごめん…真耶さん。我慢できない!!」

真耶さんの頭を無理やり掴んでちんぽを喉の奥まで挿入する。

「んう!?ん、ん、んぐ…／＼／＼ふはあ!!もう…ああむ♥じゆる、じゆる…ふう…あの、もつと好きにして欲しいです♥俊葵さんの好きなように私を使つてください♥」

やっぱり真耶さんもMか…偶には俺を攻めて欲しいんだけど…。それでも俺を愛してくれるなら何だつて言い!!

「んぶつ…ん、ん、じゆる…じゅりゅ♥喉の奥…ゴリゴリつてえ…ちゅ、じゆる♥」

「真耶…さん、そろそろ限界…」

「真耶です、真耶つて呼び捨てしてください俊葵くん。もつともつと私を俊葵くんのモノにしてください♥その為なら…ん、ちゅ、ちゅ…ふはあ♥」

「だから…もう出ちやう」

「らひて…くらはい…ん、んちゅ、ちゅ…♡私の口に全部!!じゆる、じゆるるるる!!」
「くあ…もう…イ、イツクウウウウ!!」

腰が浮き、尿道の中を何かがせりあがってくる感覚が全身を突き抜ける。精液が鈴口から排泄させ真耶の口の中を、喉の奥を汚す。つい真耶の頭を掴んで喉の奥に突っ込んで胃に直接射精した…苦しそうにしてはいるがおまんこから大量の潮を噴いているので気持ち良いらしい。

「んう…!!…ゴク、ゴク…じゆるるるる♡ぶはあ!!ふふ、尿道に残った精液も全部飲んでしまいました♡生臭いとか苦いとか言われているので飲めないかと思いましたが俊葵さんの精液は練乳みたいに甘くて美味しいです♡」

「は?嘘やろ?マジで!」

真耶が美味しそうに床に零れた精液を四つん這いになり舐めているので、俺も気になつて亀頭の先に付いている精液を指で掬つて匂いを嗅ぐ。

うん…匂いは練乳だ。でもまさか味は…。

恐る恐る精液の付いた人差し指を口に入れる。

「ツ!」

マジで練乳だコレ…アイエエ!?セイエキ!?セイエキナンド!

パスイ、何で俺の精液が練乳になっているのか分かるか？もしかしたら俺が忘れてい
るだけかもしれないし教えてくれ。

《少々お待ちください、学園内の監視カメラ（俊葵が仕掛けた奴）の映像を検索して
おります。……………見つけました。》

どんな状況でこうなった？

《本音様の意向で俊葵様の精液を甘いハチミツにする計画がおりでしたね？》

ああ…覚えてる。でも確かあの時に作った札は失敗して精液を練乳にするって変な
奴になって捨てたはずじゃあ…。

《確かにあれは俊葵様が廃棄しました。しかし皆様がゴミ箱から入手したようです。
監視カメラの映像によりますと昨晚、束様が寝ている俊葵様の額にその札を張っていま
すね、はい》

……………。俺の個人的なお楽しみ用部屋は指紋、網膜、声紋の3重ロックじゃなかった
のか?!しかもその管理はお前じゃあないかパスイ!!てか何やってんだよ束のヤツ…………。
《お忘れですか？わたくしの開発者は束様なのですよ…申し訳ありません》

あ…（察し）

《それでは真耶様もお待ちの様ですし私はこれで…》

パスイとの交信を終えて真耶の方を見ると零れ堕ちた精液も飲み干してこちらを恍

惚の瞳が見つめていた。

「シャワーを浴びてからベッドで本番しますか？」

「はい…俊葵くん♥」

熱いシャワーを浴びてバスルームを出ると……

東「いなくなっただと思っただらこんなところに居たんだけ…（ゴゴゴゴゴゴ）」

シャルル「真つ昼間からナニをやっているの俊葵…（呆れ）」

箒「わ、私は偶々会った姉さんに無理やり連れてこられて／＼／」

セシリア「わたくしも偶々お会いしたシャルロットさんに強く勧められて／＼／」

楯無「折角のラブホテルなのだから人数は多い方が楽しいでしょ？」

本音「えへへ、来ちゃった」

もしかしたら今日が俺の命日になるかも…死因は…そうだなあ…腹上死。

55話

IS学園臨海学校 宿泊地のバス

かつてこれ程までの緊張感があっただろうか……いや、ない（反語）

俺が一番後ろの5人シートに座っている。具体的な席順はこんな感じだ

シート

クロエ

俺 シヤルル クラスメイトA クラスメイトB クラスメイトC

なぜ俺が窓際にいるかと言うと……

「うう……やつぱりキツイわ。ISにいくら乗っても酔わないのに……うう……」

絶賛乗り物酔い中。頭が痛くて少し吐き気がする。前世でもそうだったが俺は極端に乗り物酔いが酷い。船や飛行機は言うに及ばずバスでも酔ってしまう。多分、俺が酔わない乗り物は自動車とバイク、自転車くらいじゃないかな。

「俊葵かなり辛そうだね。はい、お水。でも俊葵って痛覚とか遮断できるんでしょ？そ

れなら平衡感覚とかも弄れないの？」

「うん…できるけど人間でいたいんだよ。ただでさえ化物じみた身体能力だからこういったところで人間アピールしとかないとね…うう…」

隣のシャルルが俺にペットボトルのお茶を差し出す。ちなみに俺とシートに挟まれているクロエはじやんけん勝利して俺の膝の上に乗っている。

シャルルから受け取ったお茶を飲みながら窓を開けて外の空気を吸う。これだけでも気分が全然違う。まあ、人によつて酔う原因は違うらしい。俺の場合は人酔いと振動酔いが酷いのでバスや飛行機、満員電車みたいな狭い空間に詰め込まれた上に振動するモノは完全にダメ。

しかも今の俺は様々な感覚が鋭敏になってるので、人の気配や振動を人何倍も感じてしまい乗り物酔いに拍車がかかる。自分で運転する車はある程度大丈夫なのになあ。

「僕の膝を枕にして寝ても良いよ？」

「キツイようでしたらすぐにでも膝から降ります」

シャルルとクロエの心遣いは嬉しいがじやんけん勝ち取った折角の席だろう。でききる限り満喫したい。

「喋れない訳じゃあないよ。それにクロエを抱いていた」

「あふう…俊葵様に包まれてクロエは果報者です…あう♥」

「むう…俊葵とはこの前いろいろあったから何も言えない…ぐぬぬ」

「シャルルもおいで…ぎゅ、んっんっ♪二人ともいい香りがする♥」

左手でクロエを抱いて右手でシャルルを抱きしめる。クロエからはほのかに甘いカスミソウの香り、シャルルからは柑橘系の香りが俺を包み込んだ。これは…良いものだ。

「もう…俊葵のエッチ…好き♥でもそろそろ離さない…織斑先生がこつちを見てる」

「なら呼んでやれよ。千冬さんもぎゅっしてしますからこつちへ来たらどうです?」

ちよつと大仰に千冬さんと呼ぶとしかめっ面でぶつぶつ何やら文句を言っている。

「まったく…す…（立ち上がる）

「お前は学生らしい付き合いらと…」すたすた（こつちへ歩いてくる

「言つたはずだ」すと…（シャルルと俺の間に割り込んで座る

「よつて俊葵の行動は私が傍で監視することにした」ぎゅ…（俺のシャツの裾を掴む

クラスメイトを含む一部の生徒に俺たちの関係がバレている。だからこういった場所ですかさかこんな事してくるなんて思ってもいなかったのでもちよつとびっくり。

「千冬さん…」

「な、なんだ?」

「すつごくいい匂いがします」

「ぶふっ!!わ、悪ふざけはよせ／＼」

顔を真っ赤にして可愛いなあ千冬さんは。しかし俺が千冬さんとデレデレするとちよつと機嫌が悪くなる人が若干二名。

クロエ「俊葵様…クロエは寂しゅうございます」

膝の上で姿勢を変えて体面座位になる。そしてそのまま抱き着き首筋の匂いを嗅いでくる…まずいですよ!!

シャルル「むう…織斑先生もクロエもずるいよ。でも今は我慢…今は我慢だよシャルル（僕は俊葵に日焼け止めオイルを塗ってもらおう約束してるんだから!!ああ、ダメだよ俊葵♥そんなところ…みんなが見ているのに♥）えへへえ〜♥」

シャ、シャルルは何をしているんだ？不機嫌かと思つたら、今度はニヤニヤして…うゝむ…全然わからん。

とまあ、そんなこんなでバスは俺たちを乗せて高速道路を進んだ。途中で我慢できなくなつた東がサービスエリアに現れたり、本格的にバス酔いして寝込んだりと多難な道のりではあつたが無事(?)に旅館に着けたから良しとしようかな。

…

…

「I S 学園皆様、今年もようこそお越しくございました。私は当旅館の女将をしております清洲景子と申します。この花月亭に宿泊している間は私共がお世話をさせていただきます」

旅館に着くなり美人女将の歓迎を受ける。年齢は30代つてところだろうか。綺麗な赤色の着物を着ていて頭には簪で髪をまとめている。お辞儀をした時に見えたうなじにドキリとしたのは俺の心の中だけに留めておこう。

「毎年この旅館を使わせてもらっている。お前たちもI S 学園の生徒として礼儀正しくするように」

「「「「よろしく願います」」」」

うんうん、きつと来年もこの旅館を使うだろうからI S 学園の株を下げないように礼儀正しくしないとね。千冬さんの言う通りだ。ただ知識を教えるだけじゃなくて礼儀礼節も生徒たちに教える…親元を離れた寮生活だからこそだと思う。

「それじゃあ各々レジメに書いてある自分の部屋へ荷物を運ぶように。荷物を運んだら今日は自由時間だ。水着に着替えて海に行もよし、旅館の中を探索するもよし。ただし旅館の方に迷惑が掛かるようなことだけはしないように。それでは解散」

千冬さんの言葉でみんなは旅館の中へ入っていく。さて…俺も部屋へ行こうかな。

「俺の部屋はつと……ありゃ?書いてない…」

旅館の見取り図の中に俺の名前が無いので隅々まで探すけどここにも俺の名前は書いていない。

俺が止まる部屋を探していると後ろから本音が抱き着いてきた

「ねえねえマツチーの部屋どこ？夜に遊びに行くから教えてえ〜」

「悪いけどここに載ってないんだ。もしかしたら…」

「もしかしたら？」

「お前は私と同じ部屋だ」

「デアドーン！」

「え〜〜織斑先生だけズルい!!」

「俊葵さんは共有財産のはずです!!」

「先生だけ俊葵さんを独り占めする気だあ〜」

「私は俊葵と私と同じ部屋と言っただけだ。別に部屋に来て俊葵とナニをしようが私は関知しない。だが私の部屋に来る勇気があればの話だがな（ニヤリ）」

それだけ言い残して俺の手を引いて旅館の中へ入っていった。

……

…

教員室と書かれた扉を開け部屋の中へ入る。中は狭すぎず広すぎない3人用の部屋

だった。きつと俺と千冬さんと真耶の三人の部屋になるんだろうな。

「ふう…おい、さっさと着替えて海へ行くぞ」

「え、あ、はい」

千冬さんが頓狂な事を言うので俺も生返事になってしまう。まさか千冬さんが海を
楽しみにしていたなんてね。

「私は別に海が楽しみという訳ではない。ただ私と俊葵が同じ部屋だとバレてしまった
からな。もし遅くなったら変な噂が流れてしまう」

別に俺的には流れても良いと思うのですが…なんて言ったら怒るんだろうな。口は
禍の元…何も言わないに越したことは無かろう。

「じゃあ着替えて先に行ってくださいませね」

男性用着着は着替えやすくていい。全裸になりかばんから俺が購入したど派手な水
着をしてレッツラゴ〜♪

部屋を出てすぐにセシリアと出会った。もう皆行ってしまったと思っていたので少
し驚いた。

「俊葵さんのお部屋はコチラですね」

「千冬さんと真耶と一緒にだけだね、たはは…参ったよ。これじゃあ女の子一人連れ込め
ないや」

「臨海学校中は真面目にしなさいと言うことなのかもしれないわね」

「セシリアも手厳しいや」

「ところでその水着は？」

「可愛いだろ？俺が選んで買ったんだよ」

「とても可愛らしい水着ですわね。俊葵さんらしさがにじみ出ていますわ」

えへへへ。セシリアに褒めてもらっちゃった。えへへへ。

「セシリアも可愛い水着だね」

上からパーカーを羽織っているが青を基調として白いラインの入ったビキニはとても可愛い。パレオの間から除く十代の太もも、鼠蹊部は光輝いて見える。ああ……この白い肌を俺色に染め上げられたらなあ。

「ふふ、褒めてもらえて嬉しいですわ」

二人で雑談しながら海へ向かっていると地面に突き刺さったうさぎ耳を発見した。

「あの……俊葵さん、アレってまさか」

「……………はあ。東、近くにいるんなら姿を見せろ。他の生徒に見つかるとはいいけど」

……………。

「ダメーのようだね。でも絶対にどつかにいるから気を張らないと」

「神出鬼没……東博士って何を考えているか分かりませんわ」

「俺もだよ」

こうして東がいる事を確認しつつ俺たちは海へ向かった。

56話

東がどこかに隠れていることを確認した俺とセシリアはみんなが待っている I S 学園のプライベートビーチへと足を運んだ。白い砂浜に青い海、見渡す限り船なんて一隻もない。多分、I S 学園はここ以外にもいろんなところに私有地を持っているんだろうな。

「まあ、日本の海にしてはそこそこですわね」

俺の隣でセシリアが何か言っているが聞かなかったことにしよう。そりやあ普段から海外旅行で色んな綺麗な海を見ているお嬢様からしたらソコソコだろうよ。

「旅行じゃないんだから観光地みたいなのは学校側も用意しないよ」

「それもそうですわね」

セシリアも納得したところで階段を降り砂浜へと降り立つ。すると狙いすましたかのように物陰から俺のファンクラブ（自称）に所属している女子たちに囲まれてしまった。右を見てもおっぱい、左を見てもおっぱい。前後左右全てに多種多様、三者三葉、十人十色の水着姿の美女たちが!!

さすがはI S学園とでもいうべきか…もしかしたら入学基準の一つに容姿があるのではないだろうかと思うほど美人ぞろい。I S学園の生徒だと言わずにモデルやアイドルやっていますと言ったら十中八九信じるだろう。

「お待ちしております」

「冷えたジュースをご用意させていただきました」

「さあ、こちらへどうぞ」

「なんと素敵な水着でしょう」

「俊葵様のセンスが光り輝いていますわ」

褒め殺しさせるのも悪くないと思いつながらセシリアを見るとツンとそっぽを向いてしまった。ちよつとデレデレしすぎちゃったかな。

「みんなの気持ちは嬉しいけれど折角の自由時間だ。俺は俺らしく勝手に楽しませてもらうよ。みんなもビーチバレーをするなりビーチフラッグをするなり楽しむと良い」

これ以上セシリアのご機嫌を損ねるのはよろしくないなので、強引にみんなを振り切つてシャルル達が待つパラソルへやってきた。

「もお〜、遅いよ俊葵」

「悪い悪い、ファンに囲まれてさ。セシリアもごめんな」

「べ、別に怒ってなどいませんわ。ところでどうしてシャルルさんはシートに寝転んで

いますの?」

シャルルは今まさに砂浜にシートを敷き、そこへ寝そべっている。しかも水着の紐をほどいて。

「ふふふ〜ん♪ねえ〜俊葵い〜♥日焼けしたら大変だよねえ〜♥」

あからさまな猫なで声で俺を誘うシャルル。実はシャルルと約束してたんだよね…。タッグマッチで一夏と組ませたのでそのお礼をしないと「じゃ、じゃあ臨海学校で海に行った時に、日焼け止めオイルを塗ってほしいな…／／」とのこと。特に断る理由もないのであの時は軽い気持ちでOKしたけど……

「……………」

若干や後悔中…セシリアを含む数人に囲まれて冷や汗が流れる。これ皆もオイルマツサージしなきゃいけない空気やん。

「とりあえずやるか…」

掌にオイルを垂らして体温で温める。夏の暑い日とはいえ意外と液体は冷たく感じる。それは熱伝導が深く関わっていて、液体の熱伝導率が高いからなのだ。簡単な説明をすると温度が体温以下の液体に触れると液体が体温を奪うので冷たく感じる。

と、誰も聞いていない蘊蓄を披露して俺は両手をシャルルの腰へ置いた。ふにゆりと優しく俺の手のひらを押し返す肌が何とも言えない。

「ん…あつ♥そこ気持ち良い／＼／」
「そりや良かった」

短く返事をしてからオイルマッサージに集中する。いつもならおふぎけでおっぱいやわき腹を触ったりするのだが今日はまじめモード。

「うゝゝゝん♥俊葵マッサージ最高だよ…疲れが抜けていくみたい」

横からでは揉み辛いのでシャルルに跨り、親指に力を入れて背骨の辺りをなぞり上げる。気持ち良さそうに目を細めるので俺も気を良くしてマッサージに熱が入った。

「ふあゝゝ、そこ…ん、ん、ああゝゝゝ／＼／」

何とも言えない声を上げながら俺にされるがままのシャルル。

結局、背中だけじゃなくて腕や足先までしつかりと余すところなくオイルを塗り終えた。流石に皆の前でおっぱいや股間にオイルを塗るのは気が引けたので水着の上から自分で塗ってもらった。

「んふうゝゝゝ!!大・満・足!!」

じゃあ僕は遊んでくるねえゝゝ、とオイルマッサージを終えたシャルルは友人の輪を見つけて走って行ってしまった。

残された俺たちはどうしたもんかと考えていると一人の女生徒が俺の前へ出てきてマッサージをお願いしてきた。シャルルとの約束以外、特にすることは無かったので

マツサージ再開。

「お、同じクラスの相川清香だけど覚えてるかな？」

「勿論だよ。確か趣味はスポーツ観戦でハンドボール部に所属してるよね？」

「はい!! 俊葵さんに覚えてもらえて嬉しいです」

人の顔と名前を覚えるのがかなり苦手な俺が覚えていた数少ない生徒の一人。ちなみにどのくらい苦手かと言うと同じクラスになった人の名前を一年かけてやっと覚えたくらい。大学に至っては卒業するまで名前を覚えなかった人もいる。でも相川さんは特徴があつたからね。ハンドボール好きって。

「まあ、俺もハンドボールには興味あるからね。速攻に次ぐ速攻の応酬、ディフェンスの声出し、そして厳しい先生……まさに青春って感じだよ」

前世では小中高とハンドボール部に所属していたので少なからず興味はあつた。しかし惰性で続けていただけなので上手さはお察しくください。今の身体なら国の強化選手に選ばれるくらいいの成績は残せそうだけど……。

「俊葵さんがハンドボール部に入学したら全国大会で優勝間違いなしです」

「うーくん、そりゃ優勝するだろうけど女子ハンドだろ？」

「いえ、うちの学校のハンドボール部の名目はハンドボール部ですので俊葵さんが男であろうと関係ありません。それに男と言う理由で入部できなかったら俊葵さんは何処

の部活にも所属できません」

「ま、そりやそうだ。じゃあマッサージ始めるから寝そべてくれ。触られたくない場所とかある？今のうちに言っておかないとあんなところやこんなところまで触っちゃうよ」

オイルを掌に広げて温めながら相川さんに尋ねる。シャルルは俺の彼女だからそれなりにエッチなマッサージもできるだろうけど相川さんは違う。だから一応、触ってもいい場所を聞いておかなきゃいけない。

「俊葵さんにお任せします…／＼／」

「分かった、あんなところやこんなところまで触っちゃうからね」

57話

相川さんをマッサージし始めた頃は普通にするつもりだったのだが、ハンドボールで鍛えられた肉体の美しさに見惚れてしまった。

肩の筋肉、腰から脇腹にかける美麗なライン、そして整った肩甲骨と背筋はまさに芸術だ。しかし千冬さんの筋肉には到底及ばない。例えるなら相川さんはそれこそ高校生美術大会で見るそこそこいい絵止まりだろう。それに比べて千冬さんは古代エジプトの壁画、古代ギリシアの大理石製の彫像、現代においてはダ・ヴィンチ、ルノワールの作品のように気品と優雅さ、そして何よりも威厳があった。

だからと言って相川さんの筋肉が悪いという訳じゃあない。きっとキッチンとした鍛え方で筋肉をつけたのだろう。無駄な筋肉が一切見当たらない。筋トレの素人は取り敢えず筋肉をつけようと滅茶苦茶に鍛える。だから変なところに筋肉が付くのだが相川さんにはソレが見当たらない……と言うことは自分に合った鍛え方を知っているという事。

改めてI S学園の生徒のレベルの高さを実感する。

ふにつ…ふにつ…

「ん…あつ／＼／＼気持ち…イイン♥」

このオイルに特殊な薬でも入っているのではと疑いたくなるな。ちよつと手に垂らして腰や背骨に沿ってやると目を細めて喘ぎ声をあげる。

さっきのシャルルといい相川さんといい年頃の女子って感じやすいのだろうか。

「ああ…体の疲れが抜け落ちるう…♥」

見物している他の生徒たちも顔を赤くして相川さんのマッサージを見ている。

「俊葵さん…あん、ハンドボール部でマネージャーしませんか？今なら可愛い女の子を囲ってマッサージし放題ですよお／＼／」

おほお、凄いい魅力的なお誘い。ハンドボール部に所属する俺のファンクラブを囲って放課後の汗だく乱交。にへへ…たまらん。

「それマジ？」

「大マジだよ…／＼／」

「あぁー！！相川さんばかりズルい！！俊葵さん、茶道部に入部しなよ。和装美人と狭い空間に一緒に居られるよ！！」

「いや、俊葵さんは吹奏楽部に入部すべきね。間接キスし放題なもの！！」

「俊葵さんが調理部に入部してくれたら裸エプロン強化週間を作りたいと思います」

「水泳部は旧スクだけじゃなくて様々な水着を使用します!!」

「生徒会に入ってくれたら毎日、ご奉仕しちゃうよん」

エトセトラ、エトセトラ…みんな俺をエロ魔人か何かと思っているのか…。間違っ
てはいないけど複雑な気持ち。

ん…今、楯無さんの声がしなかった？

マツサージを中断して声のした方を見ると全速力で誰かが岩場の方にダツシユして
いた。青い髪をなびかせながら…。

「悪い相川さん、そろそろマツサージを切り上げて俺も遊びに行くわ」

「はい、いつてらっしやい」

タオルで手を拭いてから楯無さんが逃げて行った岩陰にダツシユ、ダツシユ、スクラ
ンブルダツシユ!! (ただの十傑集走り)

楯無さんのところへダツシユする俺、そしてそれをぼかんと眺めるセシリアとその他
ファンクラブメンバー。

……

…

「()まで来れば…」

「ところがどっこい安全じゃあないんだなあこれが」

後ろからこっ所りと近づいて抱き着く。ビクンと身体を震わせるが俺と知って安心したのか全く抵抗はしない。

「あら…みんなが近くににいるのに積極的ね／＼／」

「フンツ!!」

そのまま股に頭をくぐらせてから両手を交差させて掴みジャパニーズオーシャンサイクロンスूपレックスホールドをお見舞いする。

「ぐえ!!」

体中砂まみれにしながら楯無さんは立ち上がりゆらりゆらりとこちらへ来る。なんだかこれに海藻を乗つけたら海の妖怪みたいだ。

「とおくしいくきいくくうくん」

「あ、そういうのいいですから」

「あら、そう」

「単刀直入に訊きます。なんで臨海学校に付いて来たんですか？それも虚さんに仕事を押し付けて」

「仕事は終わらせて来たわ。なんの問題もない…はず」

はずって…それでも仕事を終わらせてきたのは本当だろう。でなきやIS学園の生

徒会が請け負う仕事の全てを虚さん一人で捌けるはずがない。：帰ったら虚さんのメンタルケアをしよう。

「それなら良いですけど。どうせ簪の事が心配で付いて来たんでしよう？俺が居るから安全なのに」

「それは…そうだけど…」

「気持ちばかりですよ。だから一緒に簪のところに行こっか」

「え、ちよ、ちよつと待って。勝手に付いて来たのがバレたら簪ちゃんに怒られちゃうわ」

「良いから、良いから。ほら、行くぞい」

無理やり楯無さんの手を取って簪の元へダツシュ。折角、海に来たんだ。姉妹で遊ばないと損だぜ。

……

…

「はあ…」

「これで水着に着替えてから13回目のため息ですよ？織斑先生」

「分かっている…はあ…」

俊葵の選んだ黒いブラジリアン水着を身に着けながら千冬は浮かない顔をしていた。

本人は自覚していないが、俊葵が他の女の子とイチヤイチャしているのを見て心中穏やかでない。

「私だって俊葵に見てもらい…それなのにあいつときたら他の女の子のところには行きおって」

「ふふ、心配しなくても俊葵君なら来てくれますよ。それとも俊葵君の事を信用していないんですか？」

「う、うるさい／＼／＼さあ、あつちでビーチバレーでもするぞ!!」

こうして千冬の照れ隠しで大変な目にあつた生徒がいたとかいかなかったとか。

……

…

「き、来ちゃった♪」

「なんで来たの…」

「虚お姉ちゃんの仕事が増える〜」

「感動の再会とはいかなかつたようだね」

簪も呆れちゃつてるよ。

「だって簪ちゃんだけ俊葵さんとビーチでイチヤラブなんてずるいわ。お姉ちゃんも遊びた〜い」

「べ、別にイチャラブなんて／＼／」

「それじゃあ私はイチャラブする／＼♥」

更織姉妹がしている隙に本音は俺の腕におっぱいを惜しげもなく押し付ける。着ぐるみのようなダボダボの水着(?)に身を包んでいるがおっぱいだけは形がはつきりと浮き出ていた。

てかどんだけおっぱい大きいんだよ…

「だいたいお姉ちゃんはいつも自分勝手に…」

「恋愛は自分勝手に強引な方が良いのよ。俊葵くんは押しに弱いからグイグイいかなきゃ」

「え?それ初耳なんだけど」

「言つてなかったかしら?」

「聞いてないよ／＼」

二人ともまだ言い合いをしてる…本音も離れないし。仕様がなから本音とイチャイチャしようか。

「なあ、本音。あつちの岩陰に行こうか。二人は言い合いしてるし気付かないよ」

「行こ／＼行こ／＼」

……

…

「なあ、セシリア」

「なんですの箒さん」

「こうして美味しいジュースを飲みながら日光浴をするのは素晴らしいが…俊葵がいないと寂しいな」

二人はビーチチェアに背を預けてビーチバレーの疲れを癒していた。しかし俊葵と一緒に入れないという寂しさは寝転がるだけでは癒せない。

「そうですね…はあ、今頃どこで何をしているのでしょうか」

「さあな、でも臨海学校はあと何日もあるんだ。きつとチャンスは巡って来る…と思う」
「思うだけですか？」

「いや、必ず来る!!そしてチャンスを生かし私とセシリアは俊葵の彼女になるのだ」

「はい、頑張りますよ。私たちも俊葵さんに…あの…クロエさんたちと同じ事を／＼」

専用機を持つていようと、姉が世界一の天才であろうと彼女たちは十代の生娘に過ぎない。初心な心にあの時の記憶は少々、刺激が強すぎた。

「そ、そうだな…／＼／＼」

赤面する二人は興奮を冷ます為にジュースを飲み、もう二休みする事にした。

……

…

「ん…／＼だめ…バレちゃうよう…♥」

「バレたって構わないよ。だってみんなに俺と本音はラブラブなんだって教えられるんだから」

「へえ…バレても構わないんだ」

「ねえ、簪ちゃん私にいい考えがあるわ。今から俊葵くんにお仕置きをするの」

「そうだね…お仕置きしようか」

背筋に何か寒いものを感じて海に向かって駆け出す。

三十六計逃げるに如かずと言うし逃げよう…うん、それが良い

58話

チャパパパパパパ!!

水面を走る一つの陰

ジャババババババ!!

それを追いかける水上スキー

「はっはっは、追い付いてみる!!俺はここだ!!」

「俊葵、凄いい…」

「どうやったたら水面を走れるのかしら」

十傑集走りと衝撃波の応用で水面と足の裏の間に薄い膜を作り、それを蹴るように走っているの浮いているように見える。しかしこの技は意外と勝手が悪く水面で止まることができないし、荒れた海では効果が無い。

実際は止まることができただが燃費が悪すぎる。薄い膜だけなら簡単に作れるが浮くとなると衝撃波で自分の体重を支える事になる。足の裏のジェット噴射でホバリ

ングが難しいのと同じ原理だ。

荒れた海で使えないのは単純に波の動きが変則的で、薄く張った衝撃波が波の衝撃にぶつかり乱れてしまうから。ロマンを求めると使い勝手が悪くなる、ノンケでもよく知ってることだ。

……

…

俺の方が先に砂浜に到着して簪と楯無さんを待っていると千冬さんと真耶さんが近づいて来る。さつき構ってやれなかつたのでどことなく不機嫌そうだ。

「おい、こんなところで超能力を使うな。他の生徒にバレでもしたら大問題だぞ」

「織斑先生の言う通りですよ俊葵くん。先生たちが隠ぺいするのも限界がありますからね」

「文句があるなら力づくで従えてみたらどうですか？世界最強の女と元代表候補生の二人がかりなら何とかなるかもしれないよお」

こぶしを握り締めて足に力を入れる。砂浜なので踏み込みが甘くなるが問題ない。むしろ本気の踏み込みができてしまったら、それだけで格闘の性能は上がるので手加減には丁度いい。

「ほう…私に勝ち越しているからといって調子に乗るのは良くないなあ（ニヤリ）」

そう言いつつ拡張領域から刀を取り出して構える千冬さん。踏み込みが浅くなるのを見越してか、軽い小太刀を持っている。

「すこしお灸をすえないといけないですね」

摩耶さんも取り回しの良いグロック17―フルオートカスタムのドラムマガジンを両手に構えていた。

「夜以外で二人と戦うのは久しぶりですね。ふふ…凄く楽しみです」

「隙あり!!」

千冬さんは足で砂を俺の顔に浴びせて目つぶししてきた。まさか千冬さんがそんな事するなんて思っていなかったので意表を突かれて砂を浴びてしまう。

急いで立ち退こうと足に力を入れようとしたが出来ない。仕方ないので後ろに倒れ込み千冬さんの一閃を避ける。

「お前らしくもない。以前のお前ならこんな陳腐な攻撃は避けていたろうに」
「まったくです。確かに最近は忙しかったですが訓練を疎かにしてはいけませんよ」

動きが緩慢になった左足を見ると太ももと膝から血が出ていた。痛覚を遮断していたから気付かなかったのだろう。きつと千冬さんが目つぶししたと同時に撃たれたのかな…痛いのは嫌いなんだよ。

傷口から銃弾を取り出して痛覚を少しだけ元に戻す。戻したとたんに火傷のような

熱い痛みにも襲われた。だけどこれで少しは動きが自然になる。

「うぐ…痛いのは本当に嫌なんだよ…」

全身に力を込めてゆっくりと呪いを全身に纏っていく。胸の中心から黒い流線型の模様が広がり手足を包み込んだ。

「こら、卑怯だぞ」

「あらあら」

「俺は素手だからこれくらい良いじゃないですか」

追撃が来る前に千冬さんとの間合いを詰めて攻めに転じる。いつまでも後手に回っているのは勝てるモノも勝てなくなる。

「動きがぎこちないぞ。まだ足が痛むんじゃないのか？」

千冬さんの言う通り…まだ左足が万全じゃなくて突きも避けられてしまった。しかも真耶さんはその隙を見逃さずに銃弾を撃ち込んでくる。

「ぐう…痛い…痛い…よお」

痛覚を遮断していいないので痛みをダイレクトに感じる。いつもはISという安全な鎧に守られているし、痛覚も完全に遮断しているので戦闘でこんな痛みを感じるのは久々だった。痛みを感じた時の戦闘のほとんど、俺が怒り心頭で脳内麻薬ドバドバ出た状況だったのでこんな痛みは初めてだ。

膝と腹部に受けた銃傷が焼けるように痛い。この術は身体能力を上げるだけで防御力を上げる訳ではない。

「痛い…痛い、痛い痛い痛い!!」

「お、おい…俊葵?」

「俊葵くん、大丈夫ですか?」

痛いのは嫌だ…嫌だ嫌だ!! 守らなきゃ…自分を守らなきゃ!! きつと千冬さんと真耶さんは言葉を掛けたんだろう…でも何も聞こえなかった…《聞こえなかった》んだ。今は自分を守らなきゃ死んでしまう。ぼくをこうげきするわるいやつたおさなきや。

手足に張り巡らした術を一旦、解除する。そして新しい術を身体に掛ける。

「うう…うう…うう…。グルルルル…」

爬虫類のような鱗が全身を覆い、強靱な尻尾が生える。半竜属のような鋭い牙と爪、更に太い手足を手に入れ二人を睨みつけた。

何かを察したのか二人ともISを装備している。

それでい…い…そうじゃない…とふた…きずつけて…。いしきがな…なくなる…

まえ……たのむ……お…を…とめて……く…r

こうして俺の意識は闇へと落ちていった

…

……

…

意識が戻って来て目を開けると宿の天井があった。手足は無事に動くことも確認。

全身がズキズキするし頭もボーっとしている。ああ……段々と思いついてきたぞ。確か砂浜で千冬さんと真耶さん相手に本気を出して…本気を…ハッ!!二人は無事なの!?

無理やり起き上がりとして背中と両手に痺れるような痛みが走る。でもそんな事はどうでもいい。今は千冬さんと真耶さんの無事を確認しなくては!!

と思ったところで扉が開き千冬さん、真耶さん、そして束の三人が入ってきた。

「あ、目が覚めたんだ。良かったあ〜、身体の具合はどう?」と束

「ふう…まったく、私も大変だったぞ」と千冬さん

「本気で戦ったのなんて何年ぶりでしょうか」と真耶さん

訓練の後のようなことを言う三人はいつもと少し…いや、かなり違っていた。

「まさか世界最強の二人と代表生クラスの三人を同時に相手してあそこまで善戦するなんてね。しかも生身で」

そう言う束のスカートの裾から延びるカモシカのような足は一本しかなかった。

「そもそもアレは生身と言うのか?」

千冬さんも左腕から左肩までごっそりと無くなっていた。

「うーん、一応は生身じゃないでしょうか」

真耶さんはあの豊満なおっぱいが無くなっていて、顔も左目と口以外は血の滲んだ包帯に包まれている。

俺が…俺がこれをやったのか？こんな…こんな…酷い事…俺が。

「んう？この傷？大丈夫、大丈夫うーん。こんな傷はすぐに塞がるよ」

束が全部言い切る前に三人の服を無理やり脱がせて全裸にする。そして傷の具合をじっくりと観察した。

服の下はもつと酷い傷が沢山あった。普通の人間なら既に死んでいるような傷ばかり。どうして生きているのかが不思議なくらいだ。切り傷、擦り傷は言うに及ばず火傷に裂傷…傷口は塞がっているがかさぶたから血が滲んでいる。どうしたらIS…それ専用機に搭乗した凄腕をこれ程…。

「クソツツ!!どうして言い訳なんか!!」

いきなり怒鳴った俺に驚いているが俺はどんな事お構いなしに怒鳴り散らす。

「俺は悪くないとも思っているのか!!ふざけるな!!どうして俺はいつもいつもいつも!!」

「ど、どうしたの俊くん!?まだ寝ていた方が…」

「どうして俺の心配をする!!俺はほとんど外傷がないのに!!」

「だって俊くんは怪我をして…」

「お前の方が酷い怪我じゃないか!!どうしてお前はいつもそうなんだ…無理矢理にでも治してやるぞ」

服の裾から多数の治療用護符を部屋に撒き散らす。そして三人の怪我している箇所へ張っていく。欠損している部位は何枚も張り合わせて身体と癒着させた。

本来は治療力の向上だけだが今回は更に術を上乗せで掛ける。術者の命を使う技だけれど不死身の俺からしたら何の問題もない。ほんのちよっぴり苦しむ程度だ。

「凄い…足が生えてきた〜♪傷も塞がったし痛くな〜い」

「確かこれは…ありがとう俊葵」

「私の顔も胸も元通りです。良かった、これで俊葵さんにいっぱいエッチな事ができま
す」

無事に治ったみたいで良かった。

「ゲホツゲホツ!!はあ…はあ…ひゅ…ひゅう…」

ああ…酷い喘息を患ったみたいだ。すげえ苦しい…でも嫌じゃない。

「俊くん大丈夫!?!」

「だ、大丈夫…夫だ。このくらい…三人の苦痛に比べたら屁でもない」

そうだ……こんな事で音をあげてたまるかってんだい。俺なんかよりも苦しんだはずだ。

「ねえねえ、ちーちゃん聞いた？」

「ああ……ちゃんと聞こえたぞ」

「私も聞きました」

何を訳の分からないことを……

急に柔らかい物に顔を包まれたので顔をあげると束の顔が目の前にあつた。左腕は千冬さんの。右腕は真耶さんのおっぱいが包んでいる。

「私たちも俊くんに酷いことしたんだよ？ 俊くんの意識が無いのを良い事に手足を引きちぎったり、絶対制空領域を生身に仕掛けたり……」

「でもそれは俺が悪いわけで束たちは何も悪くない」

「いえ、そもその原因は私が俊葵くんの膝を撃つたことです。だから怪我をしたのは自己責任なんです」

「だからお相子だ。もう何も気にするな。私たちも怒っていないし俊葵の事を嫌いになつたわけでもない」

本当に……

「信用しろ」

「そうそう、だって私たちは俊くんのオンナなんだからね」

「なんで…」

「常識的に考えたらおかしいよね。でも違う…だって傷は塞がったし、もう痛くもなんともない」

へっちゃんと言いたいのか手足を動かして俺に見せる。その肌を見ると傷はおろかシミすら見つからない程の完成度で治療は完了していた。

「それにいい経験だった。暴走状態の俊葵の戦闘力も分かったしな」

「学校での状態になられたら困りますけどね」

「俊くんは自分を守ろうとしただけだったんだよ。それが暴走してこうなっちゃったってわけ。だからもつと訓練しよう？そうすればこんな事は二度となくなるよ」

「そうだな、束の言う通りだ」

「私も一緒に頑張ります。まだまだ未熟だと思いき知らされちゃいましたし」

俺は本当に良い女に恵まれたなあ…涙が出てきやがる。くそ…みんな痛かったろうに…苦しかったろうに…(泣)

「もしかして私たちが痛い思いをしたと思っっているなら大間違いだよ？」

「ふえ？」

丁度いま心配していたことを指摘されて頓狂な声を出してしまう。

「私もちーちゃんもまやちゃんも全員、痛覚をマヒさせて戦っていたからね。俊くんの前で言うのは何だけどあんな酷い傷を負っているのに痛覚が通ったままだと痛みでショック死しちゃう」

「おいおい、そんなに泣くことは無いだろう」

「よしよおし、ママのおっぱいに甘えていいでちゅよ〜♪」

痛みを感じていなかった。たったそれだけの情報で俺の心は救われた気がする。

「ぶっ…はは、ははは。良かった…本当に良かったです」

三人の笑顔を見ていたら落ち込むのもバカバカしく思えてきて笑ってしまった。三人もそれにつられて笑い暗い空気はどこへやら。そうだな束…やっぱり笑顔が最高だよ。

59話 R-18 (本番無し)

「ところで俺の暴走を知ってる人は何人くらいいますか？ 場合によっては皆の記憶操作をしなきゃいけない」

夕飯が準備されている大広間への廊下を歩きながら、ふと気になったので千冬さんに訊いてみる。

「戦うときに裏山の方へ誘導したから目撃者はいない。ちゃんと確認も取った」

「私たちの怪我についても知っている生徒は限られています」

それは良かった。あんな酷い姿を俺以外の人間に晒すのは心が痛む。

「とにかく今日会った事は何の問題もない。事後処理もばっちりだ。壊れたISの修理も全力で行う…束が」

「ええ〜私も俊くんとお食事したいよう〜」

「お前が出て来たら生徒たちが混乱するだろう…。せめて明日の演習まで待て」

「むう…分かった。じゃあ私は移動式ラボに居るから用事があつたらそこまで来てねえ

くく

そう言うのと廊下の窓から飛び出して行ってしまった。確かココ三階だよな…ま、東なら大丈夫だろう。

浴衣の帯を締めなおして不自然じゃないか確かめてから宴会の間へ入る。宴会場は和式と洋式に分かれていた。主に外国出身の生徒はテーブルに座っている。きつと足が痺れるからだろう。みんな俺たちを待っていたのかきちんと席に座っていた。

それにしても畳のテーブルってなかなかアンバランスだな…俺の席くくくつと、あそこが空いてるな。

適当な席を見つけて座ろうとしたらいきなり腕を掴まれた。

「と、俊葵…お前の席はこっちだ」

箒に連れられるままセシリアと箒の間に座る。別にどこでも良かったのだが箒たちが一緒に座りたいのならそれも良いだろう。二人とは訓練以外で話すことが少なくなってきたので丁度良い機会だ。

…

…

目の前に運ばれてくる料理は近海で取れたお魚の新鮮な刺身にタイのアラ汁、蒸した海鮮丼など多種多様。海の傍の旅館なので海の幸をふんだんに使った料理がメインだ。

食事が最後まで運ばれたのを確認すると千冬さんの合図で夕食の時間が始まった。豪華な食事のお陰か臨海学校の空気のお陰か分からないがIS学園での食事よりもにぎやかになる。

「このお花は一体どのような種類の花でしょうか？」

そう言つてセシリアは小鉢から飾り包丁をいれた小さなカブを箸でつまんでいた。

「それは花の形に切つてあるだけで花じゃないよ。多分それはカブか何かじゃないかな」

「日本料理は本当に素晴らしいですわね。味だけでなく見た目でも楽しませてくれるなんて。あむ……んく、出汁が芯まで染み込んでいますわ」

「だろ？3カ月前のセシリアに今のセシリアを見せてやりたいぜ」

「それは言わないお約束です」

そう言つてまた別な料理の飾り包丁に見惚れている。そして俺はそんなセシリアに見惚れている。でも見惚れてばかりでは腹の足しにならないので俺も食べ始めよう。

いざ刺身を食べようとして左隣に座っている筈と肘がぶつかつてしまった。こういう時に左利きつて面倒だ。

「ごめん、痛くなかつた？」

「ああ、大丈夫だ。それより早く俊葵も食べてみる。これとか美味しいぞ」

「おう…あむ……ん。なかなか美味しい。やっぱり海が近いから昆布や魚でだしを取っているんだな」

半ば強引に《はい、あくん》をされてしまったがどうと言うことは無い。もう慣れた。

今度はぶつからないように気を付けながら食事を再開。新鮮な刺身に味の染みだ煮つけ、どれも高級料亭顔負けの味だ。高校の臨海学校と侮っていた…やっぱりIS学園半端ねえよ。この調子だと修学旅行はとんでもないことになりそう。

「俊葵さんが先ほどから刺身に付けている、その緑色のペーストは何でしょうか？」

「これは山葵つて言つて…そうだなあジャパニーズマスタード…いやホースラディッシュだったかな、たしかジャパニーズホースラディッシュだった。分かるかな」

「成る程、ではこれを刺身に付けていただきましょう」

あ…慣れない人がそんなに付けちゃあ…

「~~~~~ツツ?!?!」

声にならない悲鳴を上げて鼻を摘まむセシリア。よっぽどつか鼻にツンときたんだらう。

「と、とても……ふふふ風味ががが」

若干声が震えてるじゃねえか…震え声でもきちんと料理を褒めるのはお嬢様だから

なんだろうな。育ちの良さが見え隠れしてる。

「ほら、山葵はこれくらいで良いんだよ。はい、あくくん」

ほんのちよっぴりだけ山葵を付けた味の刺身をセシリアに食べさせる。

「これが本当に先程のお刺身ですの？全然違いますわね」

「だろう？山葵には殺菌効果もあるからお刺身との相性は抜群だ」

「ところで俊葵さんはこの後はお暇でしょうか？」

「この後とは食事の後の事を言っているのだろう。お風呂に入ったりする以外はする事も無いし暇と言えは暇だ。

「ああ、お風呂に入ってからなら暇だな。部屋に來てもいいぜ？千冬さんと真耶がいるけど」

「千冬さんがいる部屋に行くには勇気が必要だなセシリア」

「ええ、まったく」

「来るのか？」

「ええ……まあ……」

「折角の臨海学校だし……」

何故そこで頬を赤らめる。まさか千冬さんと真耶のいる部屋でセックスするなんて事はないよな。逆ならこの間やったけど。

「せめてお風呂に入ってからね」

……

…

一時間くらい寝ていただろうか。枕の傍にあるデジタル時計は8時前を示していた。夕食を食べてから一休みしたんだつたな。そろそろお風呂に行こうか。

「確か俺は専用の個室露天風呂のはず…」

旅館のパンフレットに書いてある見取り図で女湯の場所を確認する。

「うん、個室露天風呂の傍だ」

これなら覗くのには苦勞しない。ふっふっふ…：IS学園の浴室は覗きにくいからな。今日こそみんなの御姿を舐めまわすように見つめてやるぜい。

「ん？風呂か。ちよつと待て私たちも一緒に入ろう」

部屋を出ようとしたら千冬さんと真耶に捕まってしまった。ちえ…これじゃあ覗きが出来ないじゃないか。

……

…

結局、千冬さんと真耶に圧される形で露天風呂まで来てしまった。はあ…悔しいけど二人から目が離れない。しかも一枚一枚、俺に見せつけるように脱いでいる。ぐぬぬ

……。

「ふふ、そんなに気になりますか？」

「見たければ見ても良いのだぞ？」

さ、触りたい…そのすべすべの肌を舐め回したい、揉みたい、愛し合いたい。でも目的を見失うな…俺の目的は覗き。

「ほら、行くぞ」 むにゅ

「行きましょう」 むにゅん

ああ…ココは天国だ。

……

…

所変わって女湯

「なあセシリア…」

豊満なバストのお陰で掻いた汗を少し強めに洗いながら箒が問う。

「なんですの箒さん」

とても大きく形の良い、とても大きく形の良い安産型のお尻を洗いながらセシリアは返す。

「俊葵の様子がおかしかったと思うのは私だけか？」

「箒さんも気づいていましたか。確かに夕方からの俊葵さんはどことなく暗いと言うか
テンションが低いと言いますか」

「それに千冬さんや山田先生の方ばかり気にしていた…でも直接聞くのは気が引ける
な」

「それもそうですわね」

箒とセシリアはもちろんシャルルやラウラも俊葵の様子がおかしい事に気が付いて
いた。しかし牽制し合っているのか、それとも俊葵に気を使っているのか直接聞くよう
なことはしなかった。

「……………箒さん」

「なんだ？」

「なんだか視線を感じるのですが」

「私もだ」↑箒

「奇遇だな、私も」↑ラウラ

「僕も」↑シャルル

「わ、私も…」↑簪

「ツゝゝゝ」↑シャンプーが目にかかってしみている本音

……

…

女風呂付近の草むら

「まったく…なんで私がこんな事を…ハア」

「教師の私たちに頼むようなことではありませんよ…コレ」

「なら断ればよかったですよ。強制したわけじゃあないし」

俺はいま千冬さんと真耶の肩に足を乗せて露天風呂の岩の隙間の小さい穴から中を覗いている。

「断れるわけがないだろう。お前の頼みだ」

「確かに教師として大事な事も有りますが私も一人の女です。ましてや俊葵くんの女ですからね。俊葵くんの為なら何でもできちゃいます」

「しく、静かにしてください。ラウラがこつちを向いています」

しばらくじっと動かないでいるとラウラがどんどん近づいてきた。

「どうかしましたの?」

「いや、この辺りから気配を感じて…」

バレそうだったのでもちよつと遠くの草むらを超能力でカサカサと動かす。

「狸か猫じゃないか?豊かな自然に囲まれた旅館だし動物の一匹や二匹いてもおかしくない」

「確かに筈の言う通りかもな。蛇の可能性だってある…心配をかけてすまない」

そのままラウラは身体を洗いに行ってしまった。こうしてみるとラウラもなかなか肉付きが良いんだよなあ。小さくて可愛いと思っていたけどオーバーウェイトにならない程度の筋肉が綺麗についている。

「やっぱり覗きつてドキドキしますね。それに興奮してきました」

「はあ…あとは勝手にやってくれ」

そう言う二人は俺を下ろして個室に付属している露天風呂の方へ帰ってしまった。一人で覗きをしてもつまらないので俺も戻ろうかな。

「それにしてもクロエの腕、それどうしたの？」

「これですか？これは俊葵様からいただいた大切な贈り物の一つです。いずれシャルルさんもいただけるでしょう」

「何を言ってるんだシャルル、姉さんの腕には何もついていないぞ」

「この刺青は俊葵様のお相手をした者にしか見えないそうです。これなら温泉やプールにも入れると」

なんだ、俺が掛けた術の話か。なんとあの刺青にはクロエも知らない秘密が……ないんだなあこれが。ちゃんとクロエにもあの刺青の能力について説明したしね。

「他にはどんな効果があるの？」

「俊葵様との相性なんか分かります」

「相性？」

「俊葵様が興奮している際に光るように……」

突然黙りこくったクロエに皆の視線が集中する。しかしクロエは皆の視線など気にしないで辺りを見回した。

「俊葵様、隠れていないで姿をお見せください。ここにいる生徒は全員が俊葵様のファンクラブの者です」

バレちゃった…仕様がない。だからと言って素直に出て行って良いものか…。俺のファンクラブ員だけでも少なからず羞恥心はあるのではないだろうか。

「と、俊葵様が近くに!？」

「ムダ毛の処理をしておけばよかった…」

「うう…夕食を食べ過ぎたからお腹が…」

羞恥心はあるけど見られてもいいのか…

「俊葵様?どこにいらつしやいますか?クロエは何処を見られても恥ずかしくありませんよ」

「僕も…」

「クロエ姉さんがそう言うなら私も…／／／」

よし…みんな乗り気そうだし飛び出そう。行くぞ…いち、にの、さん!!
膝のばねを利用してジャンプした瞬間に木の根っこに引つかかり顔面から地上にダイブしてしまった。

「イツテエ!!」

あ…思わず叫んじゃったよ。

「そこだ!!」

倒れた鼻先にラウラのナイフが突き刺さる。次にどこから取り出したのかセシリアのライフルがこちらへ銃口を向けている。

「まさか侵入者がこんな身近にいるなんて…」

「IS学園が宿泊している旅館を襲うんだ。覚悟くらいはしてきたよね?」

ドラムマガジンのAA-12を発射準備に入ったシャルル

「ちよ、ちよつと…」

まさか俺が誰か分かかっていないのか!?

「木の枝が邪魔ですわ…シャルルさん!!」

「まかせて」

任せてじゃねえよ!!

「俺だ!! 俊葵だよ!! よく見てくれ!!」

大声で叫ぶとようやく俺だと気づいたらしい。俺に武器を向けた三人は顔を青ざめた。

「さて……ラウラ、シャルルさん、セシリアさん、この責任をどのような形でとっていただきますでしょうか」

三人の前に立っているのだから顔が見れないがきつと怖い顔しているんだろうな。三人の青ざめた顔を見ると大体察せる。

クロエに手伝って貰い露天風呂へ這いあがる。湯気をくぐると辺り一面の桃源郷。ああ……生きていてよかった。

「さて……俊葵様、ご迷惑をおかけしましたのでこちらへどうぞ。先ほどもお伝えしましたがここに居る女性は全て俊葵様のモノでございます。好きな方をお選びください」

お選びくださいって……半数は日本人だが残りの半数は外国人。アメリカ、ロシア、ブラジル、フランス、ゲルマン、東南アジアも混じっている。うくく→こりやまるで美人ぞろいの万国博覧会だ。

シャワーの前に座ると近くにいた女の子が呼んでもいないのに両脇を挟み、シャルロットが背もたれ代わりに俺の背を支えてくれた。

「俊葵様……この世の天国を心行くまでお楽しみくださいませ」

「楽しむのは良いがやっぱりこれが無いと始まらないよな」

拡張領域から焼酎とコップを取り出す。

「クロエ、コップにお湯を注いできてくれ」

「どれほどお入れいたしましょう」

「4だ」

「かしこまりました」

クロエからコップを受け取り焼酎を注ぐ。未成年のみんなには焼酎の香りがキツイのか少し顔をしかめた。

「お風呂に入りながらの飲酒は身体に悪いですわよ」

「酒は漢を磨く水、酒は百薬の長、酒は良い物なんだ」

「しかし…」

「焼酎は芋の水、水戸様は丸に水、意見する奴あ向こう見ず」

ぐいっと杯を傾け一気に飲み干す。清酒よりも度数が高いので体の中がすぐにポカポカしてきた。

「俊葵様の勝ちですねセシリアさん」

「また負けたか八連隊、今日も勲章九連隊つてな。がつはつはつはつは!!」

「じゃあ僕たちは俊葵の身体を洗うよ」

ボディーソープを手に出して三人で身体を洗ってくれる。

「俊葵さんの…その…とてもご立派な…ご子息ですね」

「そうかな?」

「はい、もしも俊葵さんとセックスする事になったらとAVで勉強しましたけれど日本人としてはかなり大きい方だと思います」

「そうかい…じゃあ頼むぜ」

今夜は色々忙しくなりそうだ。

…

…

「なあ鈴…お前の部屋は隣じゃなかったか?」

「そうね」

「女子は専用の露天風呂があるんじゃないのか?」

「俊葵のファンクラブの子たちが俊葵を招待するから貸し切り状態」

「最後の質問だ。どうして俺と同じ露天風呂に入ってる?」

「……………ここ、恋人だからよ／＼／」

「そう…か／＼／」

数秒の沈黙が二人の間に流れる。

『ど、どうしよう…俊葵ならこういつた場面で気の利いた一言を言えるんだろうけど俺

にはそんなこと無理だ。鈴のやつどことなく顔を赤らめて：俊葵に貰ったエロ本でこ
ういったシチュエーションがあつたぞ。クソ：沈まれ俺の息子：：：勃起しているのが
バレたら鈴に殺される！』

『ああ、もう！どうして何も言ってくれないのよ：あんたが一言「抱きたい」って言つて
くれればこつちは抱かれる準備は出来ているんだから。：ホントは私から言うべきな
のかなあ。いつもそそうだ、一夏が言ってくれないからって逃げてる。もう私のおまんこ
は濡れてるのよ！』

二人にとって体感時間数分の沈黙の後、先に口を開いたのは一夏だった。

「俺：：実は一人部屋なんだ。だからその：：もし良かったら来てくれないか」

い、言つた：：言つたぞ。誘つちまつた。

「そうなの：：」

一人部屋って事は：：つまりそういう事よね。誘われちやつた／／一夏に誘われ
ちやつた。

このあと二人が一夏の宿泊している部屋でナニをしたか：：それを知る人は当事者二
人と二人が所有するＩＳだけだった。

：：：：

：：

「世界中探しても二人しかいない男性パイロットが覗きとは…」

「うおっ!!びっくりした!!」

露天風呂に戻る途中で木の裏から女性が姿を現す。ISスーツを着ているところを見るとIS学園の関係者かな?

「えつと…あの…IS学園に居場所がなくなるのは困るのでこの事は内密に…」

「ちつ…勘違いしてないか。私は…こういう者だ」

ポケットから自然にサイレンサー付きのハンドガンを取り出した。暗いので種類までは分からない。

「止めときな、ここには三人いる。三対一だと分が悪いんじゃないか?」

「どこにいる?」

「俺とスミスとウェッソんだ」

俺も拡張領域から44マグナムを取り出そうと光の粒子が銃を形成する途中で撃たれる。

ぼひゅ…

「うっ…」

携帯電話やハンケチを取り出すような自然な動作だったので反応が遅れて腹に弾丸を受けてしまった。やっぱ撃たれてから痛覚をマヒさせても痛みが尾を引くなあ…。

「ふっ……これがあの男性パイロットとは。こんな奴が千冬姉さんの教えを受けていると
思うと腹立たしい」

千冬姉さん……まさかこいつ!?

「織斑……マドカ」

「ッ!？」

「織斑千冬の出来損ないが……」

適当な事を仄めかせれば動揺してくれるだろう。その隙に逃げれば……流石に旅館の
中には入ってこない……はず。

「貴様……どこまで知っている」

「さあね……もしかしたら何も知らないかも」

「良いから言え」

服を着ていないので両肩を直接掴んでブンブンと振り回される。傷にそこそこ響い
た。

「自分が誰か知りたいのか？」

「私は……私は織斑まどかだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「篠ノ之東なら何か知っているかもな……だが逃げた方が良いぜ」

「何を……ハッ!!」

俺から飛び退いた瞬間に彼女がいたところに散弾の雨が降る。

「俊くんになづくくな!!」

やっぱり束か。

「ここは退くか…俊葵とか言ったな。近いうちにまた会おう。その時がお前の死ぬ時だ」

煙幕と共にまどかとはどこかへ消え去った。近いうちか…まさか……な。

「大丈夫、俊くん」

「そこそこな、取り敢えず千冬さんに連絡しようか」

腹から弾丸を取り出して傷口にお札を一枚貼っておく。これだけで数分後には傷口が塞がっている。

「そうだね…」

どこか浮かない顔をする束。まどかの事を何か知っているような雰囲気だ。これは後できちんと話してもらわないといけないな。

……

……

部屋へ戻ると千冬さんも真耶も部屋着に着替えて俺を待っていた。

「サプレッサーの音がしたが何か問題でもあったのか？」

聞こえていたのかよ（驚愕）

「うん……ちよつと、ね。悪いけど真耶ちゃんは席を外してくれないかな」

「はい、ロビーで待ってますから終わったら呼びに来てください」

東もマドカの事はあまり口外したくない事らしい。真耶が部屋を出て行ったのをしっかりと確認してドアと窓に鍵をかけてから口を開いた。

「マドカちゃんに会ったよ……この旅館を襲撃するのか、それとも俊くんを暗殺したいのか分からないけど」

「そうか、生きていたのか」

「あの、マドカって……」

二人だけで会話が始まりそうだったので口をはさんだ。

「VTシステムについては前に話したよね」

「ああ、ラウラのISに装備されていたヤツだ」

「あれはあくまでトレースしてシステム通りに動くだけの機械にすぎない。だからこそ問題は山積みだった」

いくら千冬さんの動きをトレースできるとしても、それはあくまで第一回大会までの千冬さんの動きだ。それに機械の考えには限界が出てくる。

「成長に限界があるって事か？」

「その通り…だからみんな考えた。どうしたら継続的に成長をして限界の無い最強の兵士を作れるか…って。そして答えは出た。織斑千冬のクローンを作り自分好みに成長させる事」

「そんな…いったいどうやって」

「ちーちゃんの遺伝子を採取するのはそう難しい事じゃないよ。スポーツ選手やI Sパイロットなら血液検査とかは普通にやっていることだからね」

「私も束もそんな計画は許したりしなかった。研究所は全て破壊して…可哀想だがクローンには全員、死んでもらった。だが…」

マドカが生きていた…きつと二人の手から逃れたんだろう。

「もし二人が良ければマドカも俺の女にしたいなあ…なんて」

「すまない俊葵…きつとマドカは私を恨んでいる。だから私の恋人の俊葵を好きなることは無いだろう。その…何と言うか…本当にすまない」

「私はマドカちゃんの事嫌いじゃないよ…でもちーちゃんが言うなら仕方ないね」

「そうですか…ま、普通はそうですね。でも千冬さん、マドカから逃げないでください。マドカの事何も知らない俺が言うのは何ですけど、きつとマドカは千冬さんの事を嫌ってないと思うんです。むしろ…変な想像しちゃってごめんなさい」

「いや、良いんだ。気を遣ってくれてありがとう」

しばらく千冬さんは俺を抱きしめた。途中から束も一緒に三人で互いの体温を確かめ合った。

60話

セシリアサイド

お風呂から上がりさっぱりとして部屋へ戻ったセシリアは俊葵の部屋を訪問する準備を始めた。彼女は本国でコツソリと購入した下着をカバンから出して吟味する。みんなが帰ってくるまでに決めなきやいけないのだが迷ってしまうのが乙女心というもの。

「こちらのライトバイオレットのレース付きの下着にいたしましょうか…それともブルーのシースルーにいたしましょうか。迷ってしまいます…いえ、迷う必要なんてありません。私のIS、ブルー・テイアーズのパーソナルカラーは青。つまり私には青が似合うという事」

それに女性誌には派手な色でゴテゴテした下着は男性受けしないと書いてありました。それならやはりこちらの下着で正解。そうと決まれば皆さんが帰ってくる前に急

いで着替えましょう。

帯を緩めて浴衣と下着を脱ぎ裸になる。夏とはいえ夜は肌寒く夜風が体温を奪った。

ああ……この冷えた身体を俊葵さんに温めてもらえたらどれ程……（／＼／＼／＼）

シヨーツとブラを着て姿見で似合っているか確かめる。セシリア程の美人なら大抵の装飾品は似合うのだが相手にどう思われるのか気になっているのだろう。十数分の間、姿見の前で体をくねらせたり豊満なお尻を持ち上げてみたりとしていた。

まあ、そんな事をしていたらみんなが帰ってくるわけで……

「ああ……セシリアがエッチな下着を着てる……」

「!?!」

「ホントだ。セツシー、おぬしも悪よのう」

「今から俊葵さんのところに行くんでしょ。良いなあ……代表候補生は……」

「くんくん……いつも匂いが違う」

匂いに敏感な本音がしきりにセシリアの首筋や手首の匂いを嗅いでいる。セシリアも嫌な予感があったのか急いで浴衣を着なおすがもう遅い。

「このバニラの甘い匂い……でも鼻を突くようなひどい匂いじゃない。まるで幼い日に食べた懐かしいアイスクャンデーのような優しさを感じる。これは……レリエルの香水だね。しかもこの独特の香りはナンバーシックス。わあ……高級品だよ……」

「セシリアそんな高級ブランドの香水を持つてたの!？」

「一振り数十万円の!？」

「年間生産数にバラつきがあつて数量限定の受注生産しか受け付けてないとか」

「しかも王室御用達で一般の受付はほとんどしていなくて有名な」

「貴族たちの間でも舞踏会にこの香水を振つて行くだけでその家の品格が分かるという
…」

火の付いた女子を止める術はセシリアも持ち合わせていないようであつさりと話に流されてしまう。

「えつと…でしたらこれは皆様に差し上げますわ。ですので私はこれで…」

ガシツ…と肩を掴まれ口角が不自然に上がった笑顔で固まるセシリア。そして満面の笑みの三人。

「それとこれは話が違ふよ〜」

「これは色々といふかなきやいけない事があるね〜」

セシリアが解放されて本音と共に俊葵の部屋へ行けたのはこれから20分後の事
だった。

ラウラサイド

ラウラ・ボーデヴィツヒは考えていた。俊葵の部屋へどのような下着を着用すればいいのかと。クラスメイトに相談した時は普通に良いと教わったが一抹の不安がよぎる。「仕様が……本国のクラリツサに連絡を入れるか。時差は……向こうは昼頃だから大丈夫だろう」

携帯端末でクラリツサ・ハルフオーフにコール。すると2コールと待たずに電話に出るクラリツサ。軍隊だからという訳ではないが電話にすぐ出る人は好きだ。

『こちららはクラリツサ・ハルフオーフ大尉です。何か問題でも起こりましたか?』
「話が早くて助かる」

『確か隊長は臨海学校のはず……まさか敵I Sの奇襲ですか!?!しかしドイツから日本まではどうやっても時間が……』

「違うぞ。私の言う問題とは俊葵の部屋へどのような下着で行けばよいのかということだ。襲撃など受けていない」

『成る程……確かにそれはI Sの襲撃以上の大問題ですね』

「分かってくれるか」

『モチのロンでございます。隊長の願いを叶える事こそ黒ウサギ隊の存在価値ですから。それではまず隊長の装備をお教えください』

「ああ、そうだな。自分の戦力が分からなければ相手も倒せないからな」

とてもコンパクトな旅行鞆を開き、奥の方に入っている下着袋を取り出した。

「学園の購買部で購入できる白の下着、スポーツブラとスパッツ、そして通信販売で買った少し大人な下着の三種類だな」

『つ、通信販売をなさったのですか？おひとりで？』

「うむ、アレはとても便利なものだ。俊葵が通販にハマるのも無理はない」

『しよ、少々お待ちください』

電話口で独特なメロディーが流れ始める。特に不思議がることは無くラウラは下着を綺麗に陳列させた。

クラリツササイド

「隊長殿が通信販売で大人な下着を購入したぞー！！」

部隊全員に聞こえるように声を張り上げて叫ぶ。

「隊長が!?!」

「まさか俊葵さんの為に!?!」

「ど、どうでしょう!?!」

「慌てるな!! 現地では隊長が一人で戦っておられるのだぞ!! そんな時に我々が焦ってどうする」

黒ウサギ隊副隊長の肩書は伊達じゃない。一喝で恋に恋する乙女たちを黙らせた。

「まずは赤飯を炊くのさ。日本では破瓜の血に見立てたご飯を炊くことで男女の仲を祝うと聞いたことがある」

「流石は副隊長、伊達に日本の漫画やアニメを愛好してはいらっしやらない!!」

「私たちにできない判断を瞬時に下すことができる」

「そこに痺れますわ」

「憧れますわ」

「では私は隊長との電話に戻る。赤飯は頼んだぞ」

「「Ja!!」」

ラウラサイド

『お待たせしました』

「うむ、それでどの下着が良いだろうか」

『大人な下着とはどのような下着でしょうか? それによっては組み合わせを変えなくて

はいけません』

「む、そうなのか？」

『お言葉ですが隊長殿、侵入任務でハンドガンはとても傾向性が高く隠しやすいので重宝しますね』

「そうだな」

『では隊長殿はそのハンドガンをそのまま使いになるでしょうか？いいえ、隊長はそんな愚かな真似は決していたしません。消音装置や拡張マガジン、または近接戦闘用にナイフも携行するでしょう』

「つまり下着の組み合わせは任務成功のための要因だと」

『その通りでございます。ですので情報を』

「うむ、そうだな。黒のハーフカップブラだ。レースが可愛くてな、気に入っている」

『流石です隊長。仰りにくいですがハーフカップブラは胸の小さな女性のためのブラです。まさに隊長の為に用意されたブラと言っても過言ではありません』

「そ、そうか…それは良かった。それでショーツは同じ柄の物になる。やはり上下でそろえた方が良いと思うのだが」

『隊長殿の判断に間違いはないでしょう。では私はこれで…』

「ちよつとまでクラリツサ、折角久し振りに声が聞けたんだ。もう少し付き合え」

『それは構いませんが』

「付き合わせてすまないな。クラリツサ：お前の声を聴くと不思議と落ち着くのだ」

『ぶっ』

「どうかしたのか？」

『いえ、鼻血が出ただけですのでお気遣いなく…』

「それなら良いのだが：そう言えばなクラリツサ」

『はい、なんででしょうか』

二人の華やかな会話はクラリツサが俊葵の部屋へ行かないのかと言う質問があるまで続いた。

シャルルサイド

「シャルルさんって度胸あるよね。織斑先生と山田先生のいる部屋まで行こうとしてるんだもん」

「だって俊葵が僕を待つてるからね」

「ヒューヒューお熱いね〜」

「えへへ〜／／／」

セシリアの部屋と違いこちらは和気藹々としていた。

「それにしてもシャルルのお父さんも凄いいよね。娘の為に高級香水メーカーから限定生産の商品を取り寄せるだもん。デュノア社の社長はやっぱり違うなあ」

「下着にしたってシルクの高級品でしょ？ 私もそんなお父さんが欲しかったなあ」

「そんなことないよ。僕のパパは普通だよ…多分」

親子の仲が良くなったアレックスさんはあれ以来、シャルルに対して世話をかなりやいている。『お小遣いは足りているか？』を皮切りに『ホームシックになつていないか？』『新型のISが欲しければ一台くらいまわしてやるぞ』などなどあげて行けばきりが
ない。

「社長令嬢は言うことが違うなあ」

「そんな、社長令嬢じゃないよ。実家とはずいぶんと遠いところで暮らしていたし…」

「ふくん、そんなものなんだ。でも良いな…この香水」

「そう？」

「そうだよ。多分この香水を使ってる生徒ってセシリアくらいだよ」

このセリフはあながち間違いではない。セシリアが使っている香水と同じメーカーの違う限定商品だからだ。勿論、手に入れる事ができるのはごく少数の選ばれた人間の
み。

「じゃあこれみんなも振って良いよ。僕は今夜しか使わないだろうから」
「ホント!?!」

「やったー」

「じゃあ僕は行ってくるね」

「成功を祈ってるよ〜」

「頑張れ〜」

ルームメイトに背中を押され部屋を出るシャルル。清楚系の下着と柑橘系の香水に身を包み俊葵に部屋へいざ行かん。

61話

「本音さんはどのような下着を？」

「なんと私はノーブラノーパンです（えっへん）」

ブルンと大きなバストを揺らしながら胸を張る。

「相も変わらぬ豊満なお胸でありますこと…羨ましい」

「ええ、大きすぎても肩凝るし可愛いブラもないし大変だよ。それにセツシーだつてお尻がセクシーであ〜」

「そうかしら…」

「マツチーは柔らかいお尻大好きだよ」

本音は自分のお尻を撫でながら軽くため息をつく。少しでも胸よりもお尻に栄養が回ってくればと思いつながら。

「そ、そうですか…／＼／＼別に気にしてはいませんが一応お礼を言っておきますわ。…で、その着ぐるみは何ですか？」

「お気に入りのパジャマ。フカフカで温かいのだ」

全身をすっぽりと覆えるサイズの着ぐるみパジャマ。海で着ていたヤツとは色違いの黒色。

「いったい何着持っていますの…」

この時のセシリアは本音が10着以上持っていることをまだ知らない。

そうこうしているうちにセシリアと本音は俊葵の部屋の前へ着いた。しかし先客の姿が3つ。

「あら、シャルルさんにラウラさん、それに箒さんまで。扉に耳をつけて何をしていますの？」

「静かに…お前たちも中の様子を聞いてみる」

「?」

箒の言う通りにセシリアと本音も扉に耳をつけた。

『おい…もつと優しくしてくれ』

『へいへい』

『ん…そこは…あん♥』

『良い声を出しますね…興奮してきましたよ』

『バカ…興奮してどうする／／』

『はは、それもそうですね。ん…しよ、なかなか千冬さんも…息が荒いですよ』

『それは…あんなに強くするから』

『仕方ないでしょ。強くしないと意味がないし』

艶めかしい千冬の喘ぎ声と息の荒い俊葵の声が聞こえてきた。そんな声を聴いた女子高生が中で何を行っているのか想像するのは東の山から登ったお日様が西の海へ沈むくらい当たり前田のクラツカー。

「(こ、こ)、これはいったい／＼／＼」

「静かにしないとバレちゃうよ」

「ああ、そうだな。バレてしまうな」

「[[[[[[………]]]]」

沈黙は金、5人は口を閉じて盗み聞きを再開する。

『真耶も一緒にしますからこっちに寝てください』

『は、はい…／＼／』

『やっぱり真耶は大きいから固いですね』

『あん…大きいと……仕方ないんです』

『ふふ…すすべすべで揉み心地が最高です。それに体温も高くてずっと触っていたい』

「な、なななな!!」

「バカ、静かにしろセシリア!!」

「もう、二人ともバレちゃうよ!!」

「ああ、バレてしまうな」↑千冬

「ほら、織斑先生もこう言ってるしセシリアは静かにした方が……」

開かれた扉の前に真顔の鬼が一人。はだけた浴衣の帯を締めないしながらしやがんでいる五人を見下している。

「……」

「私は部屋に戻って静かにしていますわ」↑セシリア

「私もセシリアに倣おう」↑ラウラ

「ち、千冬さん……これは……その」↑箒

「あははく見つかつちやつたあ〜」↑本音

「……」↑シャルル

無言でダツシユするシャルルの浴衣の裾を踏んで逃亡を阻止しながら、セシリアと箒の手首を掴み拘束する。本音は逃げる様子もなく千冬の脇をスルリと抜けて一足先に部屋の中へ入った。ラウラはと言うと千冬の覇気に圧されて腰を抜かしている。

「逃げる元気があるなら丁度良い。簪とクロエの奴も連れて来い。偶にはみんなで腹を割って話すのも悪くないだろう」

「は、はい……」

力なくうなだれる三人は簪とクロエを呼びに行ったのだった。

……

…

「なるほど…マツサージをセックスしているのと勘違いした訳か。アホか…」

ラ「返す言葉ありません…」

簪とクロエを含める7人は畳の上に正座して千冬さんの前に座っている。

「いつまで正座しているつもりだ。足くらい崩しても構わん、説教するわけでもないしな」

セ「でしたらお言葉に甘えて…」

シャ「僕も」

次々に足を崩すが緊張感あふれる部屋の空気が良くなることは無い。それを察したのが千冬さんは冷蔵庫からビールを取り出して飲み始めた。

「ああ〜これだ!!夏の夜はクーラーの効いた部屋で冷たいビールに限る。山田くん、君も一杯やりたまえ」

ゴクゴクとうまそうにビールを凝視する7人。普段の千冬しか知らないみんなにはさぞおかしな光景だろう。

ほ「あの…それは」

「ビールだ。私がオイルを飲むターミネーターに見えるか？」

ラ「勤務中にビール…ですか？」

「公務員の就業時間は午後5時、何も問題あるまい」

か「先生もお酒を飲むんですね」

「羨ましいのか？まったく…俊葵、ジュースを出してやれ」

「へーい、みんな何飲む？」

セ「俊葵さんを選んでいただけるのならなんでも」

他のみんなも首を縦に振っている。正直な話、何でも良いってのが一番面倒くさいんだよな。きつと夫婦仲はこのセリフで下り坂になるのだろう。

「じゃあほい」

本当に適当に選んだジュースをそれぞれに投げてよこす。俺はルームチェアに座ってヘッドホンを付けてパソコンとにらめっこ。やらないといけん事が沢山あるのは大変な〜のだ。

それぞれ恐る恐るジュースに口を付ける

「飲んだな」

シャ「え、飲んだらいけませんでしたか？」

「口止め料のようなものだ。私がビールを飲んだことはオフレコで頼む」

ほ「あ、はい」

「ふう…どうだ、落ち着いたか？」

ほ「いや、落ち着いたかと訊かれましても…」

シャ「まだ怖いというか」

セ「プレッシャーがあると云いますか」

ラ「緊張しています」

「今の私はただのお姉さんだ。緊張する必要はない…そうだ。俊葵、こいつらもマツサージしてやれ」

キーボードから手を放しヘッドフォンをずらして千冬さんに反論する

「あの…俺、明日の準備があるんすけど」

「明日の準備とは何だ？」

「新型ISの初期設定」

「そんなもの明日で良いだろう。それを含めての臨海学校だ」

少し考えてパソコンの電源を落とす。

「明日手伝ってくださいよ…まったく。じゃあセシリアからマツサージしようか。浴衣脱いでくれ」

「え!?ぬ、脱ぐのですか?」

「そりゃあ脱がなきゃマツサージできないだろ。下着くらい見られても良いじゃないか。水着みたいなもんだ」

「ですが…その…」

浴衣の下にセクシーな下着を着ているセシリアはどうも齒切れが悪い。しかしそんな事はお構いなしの本音さん。

「セツシーはいやらしくい下着を着ているから脱ぎたくないのかなあ〜?」

「本音さん!」

「ほほう…セシリアはいやらしい下着を着ているのか…そうりや!!」

セシリアに後ろから抱き着いて帯をゆっくりと解く。

「これはこれは…セシリアはエロいなあ〜」

はだけた浴衣の裾から下着がチラチラと見え隠れしている。ふふ…俺の為にコレを。

「うう…皆さんに見られてしまいます／＼」

「どうせ見せるんだ。ていつ」

セシリアをさつきまで千冬さんが寝転がっていた布団へ押し倒す。そのまま背中に跨り背中を指圧する。

「ん…あう…／＼」

わずかに空いた唇から甘い吐息を漏らすセシリア。俺は背骨に沿って上から下へ力を込めてなぞった。

「ソコ…そこですわあ…」

腰のあたりまで来た指を今度は背骨と脇腹の中間へ押し込む。

「んう…声…出てしまいますわ」

か「セシリア…エロい」

た「エロいわね」

本音「エロくくくい♪」

「皆様もこのマッサージを受ければ…あん♥プロ顔負けの腕前ですわ／＼」

みんなはゴクリと唾を飲み込み覚悟を決める。

そんなみんなを尻目に2本目のビールを開ける千冬とチューハイを傾ける真耶の姿がそこにはあった。

62話

臨海学校二日目の朝、真耶のおっぱいに顔をうずめた状態で目が覚めた。抱き枕が無いと眠れない癖はどうにか治さないと旅行先で寝れなくなってしまう。でも人に七癖我が身に八癖と言つて誰にでも癖はあるものだ。

ス~~~~~:~~~~ハア~~~~~♪

「最高……」

それに抱き枕が無いと眠れないという事は、逆に考えてみると眠るときは必ず何かを抱いているという事。つまり女性の良い香りに包まれながら熟睡できるということだ。

「ちゅ……」

朝から大きなおっぱいは久しぶりなのでちよつと悪戯したくなる。

「大きな赤ちゃんがお目覚めの様ですね」

「目、覚めてたんですか？」

「俊葵くんが起きる少し前から起きていましたよ。私が起きる前から俊葵くんのコツチ

は起きていたようですが」

悪戯っぽく微笑むと俺の股間を優しくまさぐった。服を着ていないので真耶の手の感触をじかに感じる。

「織斑先生が起きる前に一回だけ：／／／」

「ほほう、私起きる前に：なんだ？」

ゆつくりと寝返りを打って千冬さんの方を向くとすでに起きていたようでごちらを見返してきた。

「俊葵、先に朝風呂に行つてくると良い。私は山田君に少し話がある」

「え、あの、私も俊葵くんと一緒にお風呂に：」

俺が布団から出ると千冬さんは真耶のマウントを取りにんまりと笑った。これ以上ここに居るとお子様には見せられないエツちな事が起こるので、これ以上勃起したくない俺はそそくさと部屋を出た。

浴衣で本気勃起したら布をかき分けて裾から『こんにちは』しちゃうもんね。

……

……

篠ノ之束の朝は早い。少しでも早く起きて俊葵の行動を監視するためだ。誰に頼まれたわけでもない、誰かの為でもない。それは全て俊葵の事を愛すが故、生活の一部と

化していた。恋する乙女の行動を阻止することは例え作者であっても出来ないのだ。

「東様、朝食の準備が整いました。和食と洋食のどちらにいたしますか？」

モニターとにらめっこしているとクロエが呼びに来た。みんなと同じ部屋に宿泊していたクロエは結局する事が無くなってしまう束のお世話を焼いている。

「朝ご飯くらい自分で作れるからクーちゃんはみんなとお泊りしてて良かったのに」

「いえ、東様や俊葵様の為に働ける事こそ私の幸せでございます」

「ふくん、まあクーちゃんがそれで良いなら東さんはこれ以上何も言わないよ。で、朝食のメニューは？」

「和食は鰻の蒲焼、鯛のアラ炊き、御御御付、白ご飯です。洋食はーキロステーキ、ほうれん草とコーンのバター炒め、カレーライスとなっております」

朝からこんな重い食事は俊葵くらいしかしないだろう。

「朝から重いなあ……」

「東様は昨日からお忙しいようでしたので性のつく料理をと思ひまして。ご迷惑だったでしょうか……」

「全然迷惑じゃないよ。ありがとうクーちゃん」

しばらく考えた後で東は和食も洋食も食べる事にした。大食いキャラは俊葵だけだと思つた？残念、束ちゃんもでした。身体も脳みそも規格外の束は俊葵とまではいかな

いがそれなりに大食いなのだ。

……

…

朝ご飯を食べ終えたみんなはプライベートビーチとは別の場所へ集合していた。臨海学校の二日目は新装備の実験とデータ収集が主になっている。代表候補生は勿論のこと、一般の生徒たちも練習機を使つて企業から受け取った機材の点検をする。

様々な企業と国の思惑が交差して機密保持が厳守となっていた。前日のビーチと場所が違うのもそのためだ。

「ふむ、ようやく全員揃つたか。おい、遅刻者。五分の遅刻だ」

「はい……」

「う……つす」

なんと遅刻者は珍しくもラウラ・ボーデヴィツヒさん、その人。訊くところによるとラウラは皆が朝食を摂っている時にも寝ていたらしい。普段と違う環境でペースが乱れたのか、海で遊んで疲れたのか……理由は分からないがラウラにも高校生らしい一面があつて微笑ましい。当の本人は微笑む余裕なんてないだろうけど。

もう一つの返事は誰かつて？俺だよ（食い気味）

朝から激しい運動（意味深）をしていたのでお腹ペコペコ。だから朝ご飯をいつも以

上に食べていたら遅刻した。ラウラが急いで朝ご飯をかつ込んでるのを見て察するべきだったと珍しく反省している。

「顔なじみだからと甘やかす気はない。しかしここは軍隊ではないからある程度の範疇でしか厳しくできません。ISのコア・ネットワークについて説明しろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。(以下原作3巻P155・8〜14行参照)」

「さすがに優秀だな、合格だ。遅刻の件はこれで許してやる。以後、気を付けるように」
「はっ!!」

ビシッと敬礼をして列に戻るラウラ。俺もその後を追うようにそそくさと列へ戻ろうとしたが千冬さんに肩を掴まれてしまった。

「お前には…そうだな、罰として試作武装を運んでもらおう。お前の宇宙ならいくらでも入るし問題なからう。もう少しで昨日の砂浜に届くはずだ。さあ、行ってこい」

「ええ…だったら朝そう言うってくださいよ。そうしたら最初から海岸で待っていたのに」

千冬さんは不平不満をたれる俺の胸ぐらをつかんで耳打ちしてきた。

「楯無も来ている。従業員は荷物を置いたらすぐに帰る。みんなもISの起動、初期設定などで時間がかかる。そして今の私は大変機嫌が良い。少しくらいのおいたには目

を瞑るくらいにな」

「いつてきまゝ〜〜す!!」

ぴゅーつと砂煙と立てながら海岸の方へ飛び立つ。千冬さんのお許しも出たしちよこつと楽しむぞう。

「現金な奴め。よし、では専用気持ちはそれぞれ俊葵が運んできた武装の点検とテストを行うように。それ以外の生徒は5人一組で武装のテストを行ってくれ。何か不備や分からない事があつたら私や山田君に言うといい。それでは始め!!」

「ち〜〜〜ちや〜〜〜ん!!とうつ!!」

大声を張り上げながらズドドドと砂煙をあげながら篠ノ之束御大登場。千冬の数メートル前で大ジャンプをしてだいしゆきホールドをしようとする束を千冬はアイアムクローで締め上げる。

「いたたたた!!痛いよちーちゃん。これじゃ世界に名高い束さんの頭がザク口よろしく弾けちゃうよ!!」

「離してやるからきちんと挨拶をするんだぞ」

「へ〜〜い」

変なところで俊葵とそっくりだな。返事といいテンションといい…。

「どうも〜束さんだよ〜♪好きな食べ物俊くんとクーちゃんの手料理、好きな人

は俊くと俊くんの恋人、好きな事は研究と食事」

「まともな挨拶だな。珍しい」

「ええ〜それどういう事〜？私だつてちゃんとできるんだお〜」

えっへんとしてたり顔の束。ブルンと揺れる双丘は女子高生の視線を集めた。

「俊葵に何か言われたな？」

「うっ…」

千冬の推理通り束は俊葵から強く念を押されていた。「I S学園の生徒には粗相のなように頼む。関係性は薄くても同じ学園に通う仲間なんだから」と。

「凶星か…で、何の用だ。用事が無いならさっさと帰れ。今から忙しいんだ」

「ちーちゃん冷たく〜い。いいも〜くん、箒ちゃんのところに行っちゃやうから。箒ちゃ

〜くん、久しぶり〜」

「ね、姉さん…恥ずかしいからもう少し静かに」

「今日は箒ちゃんにプレゼントがあるのだ」

「聞いてない…」

胸の谷間から何やら小さな黒い塊を取り出して箒に渡す。

「あの、コレは一体なんですか？」

「箒ちゃんに合った形態になるからちよつと待つてね」

不思議そうに箒は調べたりするが何の変哲もない黒い立方体にしか見えない。あま
り重くなく、匂いもない変なものだと思つた矢先、ソレは形を変え始めた。

「これは…凄いい綺麗だ」

黒い塊だったソレは箒の手の中で燃え上がるような紅色の髪留めの紐へと変化した。
金の刺繍も施されており単純な装飾品としても価値はありそうだ。しかし重要なのは
そこではない。

「髪留めですね。ちよつと驚きましたけど姉さんにしては普通だと思ひます」

「他人行儀なのはダメダメ。姉妹なんだからもつとフランクに行こうよ」

「はい…いえ、えつと…：うん／＼／」

「うんうん、姉妹はこうじゃなきゃね。他人行儀は終いにしないといけないよう」

「プ…クク…」

束のギャグで場が白けたのにも関わらず笑つたのは簪だけだった。どうも簪のセン
スは俊葵や束とフェーリングが合うみたいだ。

「あ、それとソレは箒ちゃん専用の新型ISだから好きに使つていいよ」

「とんでもないことをサラつと言う束に他の生徒はやいのやいのと不平を漏らした。

「ええ〜〜良いなあ良いなあ〜」

「箒さんず〜る〜い〜」

「不公平だ〜」

「不平等だ〜」

エトセトラ

そんな生徒たちの前に立ち東は諭すような優しい声で語った。

「みんなは面白い事を言うね。歴史のお勉強が足りないのかな。人類は有史以来、一度たりとも平等だったことは無いんだよ？」

東の正論にみんなは俯いて何も言えなくなってしまった。しかし東は喋るのを止めない。

「例えば電気会社に勤めていたらそのメーカーの商品を少し安く買えたり、働いているスーパーの店員割引が有ったり。今の箒ちゃんの立場はそれと一緒だよ。ISの開発者が家族にいただけ」

「おい、東。その辺にしておけ」

これには流石に千冬も口を挟む。

「みんなは自分の立場を分かっているよ。本当に…ね。だから私が今ハッキリさせなきゃいけないんだ。君たちは運が良い…って事でみんなが使うISの調節なんかは全部東さんがしてあげるから箒ちゃんを嫌いになつたりしないであらね」

「東…」

「私ね…俊くんと出会えて世間に対して前向きになったかも。えへへ、なんてね／＼」
「篠ノ之博士!!」

一人の生徒が手をあげ、束に質問をした。今までの束なら『うるさい、邪魔、どっか行け』と突っぱねただろう。

「どうして私たちにそれ程していただけるのでしょうか？」

「だから君たちはとても運が良いんだよ。君たちは俊くんにとって大事な存在なんだ。だから私にとつても大事な存在ってわけ。もちろん深い意味じゃないよ」

「姉さん…折角の誕生日プレゼントだけどこれは受け取れない」

「ええ〜なんで？もしかして気に入らなかった？それは箒ちゃん専用の近接特化ISなんだけど」

「違うんだ。私は専用機に頼ることなく俊葵と一緒に戦いたいんだ。他のみんなに負い目が無いと言えようそになる…だからこれは受け取れない」

「そっかあ…じゃあ新しいプレゼントをまた用意するね。よお〜し、始めよう!!」

箒から待機状態の紅椿を受け取った束は専用IS《アリス》を展開しテストで使用するISの初期設定を開始した。

「箒さん、本当に良いの？折角の専用機だよ？私なら貰っちゃうなあ」

「私も欲しい…でも私が求めている強さとは違うんだ。本来の専用機持ちはそれ相応の

努力をして専用機を持っている。だからこそ私は自分の実力で専用機を手に入れた
んだ」

「箒さん真面目だね」

「うんうん、私も箒さんみたいになりたいな」

箒もクラスメイトと衝突することは無く、図らずも俊葵の望むようなシナリオが進んでいくのであった。

63話

夏の強い日差しの下、俺は届いた荷物を宇宙の拡張領域へ格納していた。コンテナから出して型番を確認、スキャニングを済ませてから一つ一つ格納するので時間がかかる。

「楯無さんが手伝ってくれなきやもつと時間がかかってましたよ」

「生徒会長として生徒のお手伝いをするのは当たり前的事よ」

「そこは彼氏の手伝いって言うてくれないんですね」

「もう、拗ねちゃいやよ」

「拗ねていませんよーだ」

あからさまに拗ねた様子でプイと明後日の方向を向いて作業を進める。実際は全然すねてなんかいないんだけどなんとなく楯無さんを困らせたい。

「ふふ、じゃあそういう事においてあげてあげるわ」

「……………」

「どうしたの？」

「いや…なんだか嫌な予感が……」

「気の所為じゃない？ 悩みすぎると禿るわよ」

どうもさつきから嫌な予感が頭の片隅から離れない。何て言えばいいのかな…分かる人にしか分からないと思うけどインフルになった時に小便をした後の残尿感のようなものだ。

どうも沖が気になって仕方ない。束はこちら側の陣営にいるし銀の福音が暴走する事はないはずなのに。まどかの襲来も予定外だったしもしかしたら…まさかね。いや…念のために探らせよう。

懐からお札を一枚取り出して式神を呼び出す。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン。ハクション大魔王でござやるよ」

「沖の方が気になるから見てきてくれないか。」

「へーい、宇宙貸して」

待機状態の宇宙を渡して見送る。もしマドカがいたとしてもサイレント・ゼフィールスの一機や二機くらいならどうにかなるだろう。

「やっぱりに気にしすぎだと思っただけけれど」

「本当に嫌な予感がするんですよ…なんかこう…虫の知らせって言うんですか」

「で、偵察を出すのは良いけど拡張領域に入った試験用の武装はどうするの？」
「あ!!」

急いで呼び戻し武装だけ嵐に詰め込めるだけ詰め込んだ。それでもコンテナ一つ分は入らなかったたのでシールドビツトの上に乗せて運んだ。

……

…

試験場所に戻ると束がISの調節を行っていた。何があつたかは分からないけど悪いようにはなっていないようだね。

「早いな俊葵。もっと遅くなると思っていたが…急いだのか？」

「臨海学校の授業中くらいは自重しますよ」

各班に装備を配り終えた俺はビーチチェアに寝そべってクロエの用意してくれたラムネを飲んでいる。ちなみにラムネとサイダーの違いは、ビー玉栓のビンに入っているか否か。ただそれだけなんだそうだ。更に付け加えるとラムネビンの中に入っているビー玉は通常販売されているビー玉よりも小さい。

「授業中に寝そべってラムネを飲むことが自重するというのか。なるほど…よく分かった」

「そう怒らないで下さいよ。俺だって試験運用する武装があれば積極的に授業に参加し

ますよ？でも肉体労働をさせられて、やる事がありませんじゃあ寝そべりたくもなりま
すって」

「そう言うと思つてな…東、用意は済んだか？」

「もちのろん、クーちゃんも手伝つてくれたからすぐに終わったよ」

東の方を見ると打鉄やラフアールよりも一回り大きい専用機が鎮座していた。黒を
基調としたカラーリングで細部には黄色のラインがあしらわれている。頭部にはモノ
アイのセンサーが付いており武装らしいものは見当たらない。

まるでザクの神様みたいなカツコだな。

「でっけえ…」

「むっふっふ、コレこそ俊くん専用の新しいISなのだ」

「マジかあ…」

「良かったな俊葵。これでお前も授業に参加できるぞ」

東もニコニコと俺の顔色を窺っている。ここまでされて授業に参加しないのも悪い
と思ひ、重い腰を上げた。

「へーへー参加してきますよーだ」

「初期設定は俊くんの好みに合わせておいたけど細かいところまではやってないからそ
の辺をお願いね」

装甲の出っ張りを利用してISに搭乗する。

『初めまして俊葵様』

「パスイカ、久しぶり。……初めまして?」

『はい、私はオリジナルから派生した分身ですので俊葵様との面識はございません。ですが記憶はございますので今までと同じように接してくださいませ』

「打鉄二式の中にいるのがオリジナルって事か」

『その通りでございます。打鉄二式のオリジナルを筆頭に宇宙、嵐、黒鍵、アリスの中にもインストールされております』

「それじゃ忙しいだろ」

『その様な事はございません。現在は並列化を行っていませんので……俊葵様にも分かりやすく説明するとタチコマのようなものです』

「ふうくん、そりゃ分かりやすいや」

パスイと雑談をしながらもセンサーや指先の感度を設定する。強化人間の俺からするとロックオンの感度と距離は常人の何倍も高い。しかしそれには弱点もあり感度が高すぎると本来、反応しなくてもいい物にまで反応してしまう。

「このISのコンセプトは何だ?」

『対アームズフォート用のISになっております。武装の説明は如何なさいますか?』

「今はいい。設定しながら適当に見るから」

右手で仮想立体マウスを操りながら左手で画面をタッチして設定を続ける。スラスター出力に四肢の感度、指先に至るまでありとあらゆる設定が存在する。授業で使う量産型ISはいつもこの設定を行っているとと思うと専用気持ちの俺たちはかなり優遇された立場にあるのだと自覚させられた。

「超小型縮退レーザーミサイル、コレダー攻撃、近接用トマホーク、etc、etc…よく拡張領域に入りきったな」

「そのISは今までのISと違って拡張領域は殆どないの。だから武装は全て内部に搭載されているよん」

「流石…恐れ入ったよ……………」

「どうかした？もしかしてそのIS気に入らなかった？それなら作り直すけど」
「違う…ちよつと休む」

式神が何かと戦い始めたようだ。まだ式神に任せても良いが少し疲れている。これは集中して戦った方が良いかも。

ビーチチェアに寝そべて目を閉じる。銀の福音に苦戦するはずもないんだけど…

64話

海面から1500メートル上空を駆ける影が五つ。俺、銀の福音、黄金の夜明け、アラクネ、そしてサイレント・ゼフィルス。

「La…♪LaLa♪」

歌に呼応して福音の各部位が開きエネルギー弾を乱射する。全て直線的な弾道なので避けるのは容易い。しかしそのエネルギー弾は俺を通り過ぎてから戻ってきた。

「リフレクタービット…展開」

「ハハッ、所詮だね。期待して損したよ」

サイレント・ゼフィルスとアラクネの拡張パックなんて聞いていないぞ。それにこの空間は何だ…妙に暑くてたまらん。息苦しいし視界が歪む。

「凄いわねえ。並のIS乗りならこのゴールドン・ドーンの生み出す灼熱地獄だけで辛いはずなのに」

反射したエネルギー弾も避けながら福音に反撃するが弾丸は宙を穿った。新型の広

範囲爆撃 I S に潜在能力不明の I S が 3 機：普通なら逃げ出しているとこらだ。でも…。
「最っ高に興奮してきた!! 手前ら全員ぶつ殺す!!」

根っからの負けず嫌いで独善的で自己中心。そんな俺の前にこんな強い奴らが立ちふさがっている。ならぶつ飛ばして突き進みたくなるのが俺の性つてもんだろ。

「エンジン開放、宇宙、突っ込む!!」

通常の何倍の G が肌にピリピリと刺激を与えてくれる。二つの縮退炉から生じるエネルギーは機体の推力に利用するには有り余った。ワンオフアピリテイによって機体細部に刻まれた裂け目と翼からエネルギーが熱となり放出され空気中の原子をプラズマ化させる事で電気を纏っているように見える。

しかしそれでも熱エネルギーが消費されることは無い。消費されないエネルギーは機体の中に籠る。それはかなり危険な事だ。つまりそんな状況を打開するために俺はどうするかと言うと…。

「オーバード・ウエポンを使用する」

『どれをご使用になりますか?』

「マスブレードとグラインドブレードを同時展開、それと小型 V O B だ。急げよ」

『了解 (ラージャ)』

本来の大型武装展開は速度を落として行うべきなのだろうが緊急事態だし仕様がな

い。多少被弾しながらだけど展開はできた。

「あらあら、とても強そうな武装ね。でも私のバリアは破れるかしら？」

「無理に決まってるだろ、スコール。あんな武骨で優雅さの無い武器じゃ」

滅茶苦茶言ってくれるじゃあねえの。ぶっ潰してやんよ!!

グラインドブレードを展開している左手を振りかぶって思い切りゴールデン・ドーンへぶつける。しかし見えない壁のようなものに阻まれて火花が散った。ラウラのAICとは根本的に違うようだ。何が原理か分からないけどぶっ壊せないのは癪だな。

「へっ、壊せないでやんの。福音!! さっさとこいつをやっちまいな」

「L a ♪」

「まどか、貴女も行ってきなさい」

「命令なら……」

レーザーの発射口を展開した福音と予備のビット兵器を展開したサイレント・ゼフィルスが俺の背後へと回り込んで来た。この距離だと避けるのは難しいな。

「瞬時加速!!」

VOBの噴射口を下へ向けて思い切りブーストをかけてなんとか回避する。

「ちっ……」

「L a ……」

まったく…口数の少ない奴と戦うのは苦勞するぜ。ん？何故かって？そりや…文字に起こすのが大変だからだよぉぉぉ!!

『先程の回避をもう一度行うとV O Bが故障いたします。戦闘の続行に問題はありませぬが壊れてしまいますと回避能力が』

「黙ってエンジンを噴かせろ!! いぎとなつたら生身でやる!!」

いちいち故障だなんだと気にしていたらこいつらを相手になんて出来ない。

「本当に嫌だね…こんなクールな奴らを相手にするのはさあ!!」

左目の眼帯をむしり取ってI Sの各部センサーに接続する。頭の中に上下左右全ての様子が飛び込んで来た。

考えろ…どこが手薄か、次に攻撃来るのはどこか、考えろ。俺は戦闘のプロでもなければラウラたちのように幼いころから訓練してきたわけでもない。だから考えろ!! こいつらは力押しじゃあどうにもならない。

ヒットやエネルギー弾を急加速や急旋回で回避するがそれでも何発かは被弾した。相手も人間だ…学習くらいする。ヒット数に対してエネルギー消費が激しいと。

「L a…L a…」

福音のバックユニットが割れてミサイルの発射口が見えた。まどかも使い捨てミサイルポッドを展開している。くそっ…こんな時に嵐なら手数で勝負ができたのに。

「マルチプルパルス展開!!最低限のエネルギーを残してチャージ急げ!!異論は聞かん!!」

『了解(ラージャ)』

ミサイルの発射と同時にチャージが始まる。その間はミサイルに被弾しないようにしないといけない。ヘッドバルカンの必要性はこんなところにあつた!!

「チャージまだか!?!」

『58%完了』

「もう発射する。マルチプルパルス前面に展開……発射!!」

ミサイルをギリギリまで引き付けてから発射。センサーには何発かの撃ち漏らしがあつたこの程度なら問題ないだろう。手持ちの火器で対応できる。

大型のガトリング砲を取り出してミサイルの迎撃をする。

「あたしらを忘れてもらっちゃあ困るぜ」

ミサイルの迎撃に気をとられていると後ろからアラクネに拘束されてしまった。後ろから……なんて卑怯な!!とは言わない……これは実戦だ。卑怯汚いは敗者の戯言にすぎない。

「さて……ここからどう料理してやろうか」

「まずはあなたの顔を拝ませてもらおうかしら。私たちをこれ程苦戦させた相手はこれ

までいなかったわ。だからそのお礼くらいは貰っていいと思うのだけれど」

何やら変な機械をこちらに近づける。きつとISを奪取するための装置か何かだろうな。東のISをそんなものに触れさせてたまるか。

ISを解除して待機状態に戻す。

「あら、なかなかどうしてイケメンね。お姉さん惚れちやいそう」

「寝言は寝てから言いなクソババア」

「口の利き方に気を付けな。手を放して海に放り投げても良いんだぜ」

「口が減らないのはお互い様だろう？」

さて…銀の福音だけなら手加減しても良いと思えたんだがこの三人が一緒だと本気にならざるを得ないな。

「お前たちは本当に運が良い。俺の本気を相手にできるのだからな」

「はあ？生身のお前に何がでk」

衝撃波で俺を捕まえていたアラクネを無理やり引つpegし彼女たちから距離を取る。まだ体は動く…さてこの身体が壊れる前に何とかしなくちゃね。

「なんだいありやあ!？」

「新型のIS…それとも…とにかく生け捕りにしましょう。本部に連れて帰ればいくらでも調べられるわ。M、彼を殺しちゃダメよ」

「分かった…」

「無駄話はダアメ〜〜♪」

瞬時加速でマドカに組み付いて思い切り回転しながら海面まで数秒と掛からず叩き付ける。急加速と衝撃で気絶したのかプカプカと力なく浮いているだけだ。

「あはあ♫全員…にいがあさあなあい〜よう〜〜♡」

目を大きく見開き口角を最大まで上げた邪悪な笑顔で彼女たちを見上げる。昨日の暴走とは違う。意識はハッキリしていた。ただ興奮が抑えられない…なんだか酔っぱらってテンションが上がった時にそっくりだ。今なら何でもできる…そう確信できた。

「おい、何だよあのバケモノは…ISのセンサーには何の反応もなかったぞ。スコール…まだあいつを生け捕るつもりかい？」

「もしあれがISだとしたら世界最高の性能は間違いないわね」

「そんなの見りゃ分かるさ。だからどうするか訊いてるんだ。Mだって素人じゃないのはスコールも…」

「もちろん分かっているわ。ただあの彼の性能を見ておきたいのよ」

「でも…あたしは」

「心配してくれているのね。嬉しいわ」

オータムの腰に腕をまわして熱い口づけを交わす。その瞳は母親が我が子に向ける

ような優しさに満ち溢れていた。

「オータムがそこまで言うなら後は銀の福音に任せて私たちは帰りましょう。貴女の言う通り死んでしまつては元も子もないもの」

「スコール／＼／」

二人でイチヤイチャと：俺の目の前で随分と余裕をぶっこいてくれちゃつてんのね。いいぜ：そつちがその気ならどこまでも追いかけて血反吐を撒き散らすまでいたぶつてやるよ。

「後は任せたぜ福音」

「La~~~~♪」

二人に追いつこうとする間に割つて入る福音。

「邪魔だぁー！！」

無理やり組み付いてゼロ距離斉射を浴びせてきたので衝撃波で吹っ飛ばす。やはり生身で攻撃を受けると欠損が激しいな。左腹部と胸部に被弾して挟られている。

「LaLa~~~~♪」

人が乗つていなければスクラップにしてやるところだ。

爆炎が掻き消える前に俺は瞬時加速でスコールとの距離を大幅に縮める。彼女に追いつくころには体中ポロポロだろうが腕だけ残っていれば十分。

「お痛はだめよ」

彼女までもう少しだというのに熱波のようなものに阻まれた。皮膚が焼け肉が爛れる。「凄い…本当に凄いよ。こんなISがあるなんて。熱を操る俺とどっちが強いかなあ!!」

俺も両腕を過熱させてバリアを破ろうとしてみたが火花が散るだけで効果はない。

これなら練習してたアレをやるうかな

「The world!!動きよ止まれ!!」

俺が叫んだ瞬間に俺の周り一帯が全ての動きを中止した。福音のエネルギー弾、アラクネが発射したミサイル、黄金の夜明けの熱波、全てが停止して動きを止める。

「面白いだろ? ちょっとしたお遊びさ。誰もが想像したことあるんじゃないかな。自分以外の時が止まったらって…まあ俺のは時止めとは言い難いけどね。動けない気持ちはどうだい?」

さあ…シヨウタイムだ。

動けない時の中で黄金の夜明けに接近した時。まさに俺がスコールに組み付こうとした瞬間に心臓を撃ちぬかれた。ビームが飛んできた方を見ると壊れたバイザーから怒りに燃える瞳をこちらへ向けたマドカが見えた。

「がっ…かはっ」

周囲の時間が動き出し全ての攻撃が俺を襲う。

皮膚が裂け、肉が弾け、骨が砕かれ、内臓が焼ける。痛みは感じないが身体がバラバラになっていく感覚だけが残った。

「黄金の夜明けとサイレント・ゼフィルスの実戦テストは良好。それじゃあ帰りましょう」

「銀の福音は如何する？連れて帰るか？」

「いえ、銀の福音は私たちの撤退の援護。ここに残して追撃を迎撃してもらおうわ。どうせパイロットを懐柔しない限り専用機は手に入らないし」

「そうだな。おい、エム!!そんなところでフラフラしてないでさっさと来い。帰るぞ」

「……………」

薄れゆく意識の中で三人の背中が遠ざかって行った。嫌な予感当たっちゃったよ……宇宙の回収と福音の鹵獲……後は頼んだぞ……俺。

……

……

やられたか……生身なら勝てると高をくくったのが間違いだったな。相手はセカンドシフトをしていない機体だったのに負けてしまった。

「ちっ……くそツタレ!!」

手に持っていたラムネのビンを近くの岩にたたきつけて悪態をつく。物に当たるのはいけないと頭では理解しているが、ついつい物に当たってしまう。

「あ、あの…」

声が出た方向を向くとクロエが心配そうにこちらを見ていた。

「ご気分が優れないようでしたら私がマッサージなどをしますが…如何でしょうか？」

「大丈夫だ…少し気が立っているだけだから。酷いこと言うと思うから離れててくれ」

「しかし…」

「頼むよ……凄く機嫌が悪いんだ。クロエを傷つけたくない」

俺の気持ちを察してくれたのかクロエは自分の I S の元へ帰って行った。しかし今度は束が心配そうにやって来た。

「何か問題でもあった？」

「ちよつと…な、しばらくしたら忙しくなると思う」

「もしかしてマドカちゃんの強襲？」

「それに近い。それよりラウラが呼んでるぞ。早く装備の調節をやってくれ」

どうして正直に言えないんだろうな。相手は全員、専用機持ちだったし逃げたとしても誰も攻めたりしないだろう。むしろ善戦したことを称えてくれるだろう。しかしそうではない。『負け』という現実は変わらないのだ。

「次はない……」

ぽつりと呟いただけなのにシャルルには聞こえていたようだ。

「なにが？」

「何でもないよシャル。……ちよつと用事があるから旅館に戻る」

「そんなことしたら織斑先生に怒られちゃうよ？」

「それなら大丈夫だ。あとちよつとしたら山田先生が走って来る。理由はすぐに分かるよ」

「？」

「それじゃあ行ってくる」

嵐を展開して旅館へ飛び立つ。千冬さんが何か言っていたが嵐の音に掻き消えた。

……

…

山田先生が慌てた様子で招集をかけたのはそれから数分後の事だった。

65話

旅館に帰った俺はまず女将の清洲景子さんに会いに行った。

IS学園がこの旅館を使用しているのは関係者以外には伏せている。メディア関係者は言うに及ばず、政府関係者にも一切の情報を公開せずに行っている臨海学校だ。誰かの襲撃を受けること自体がおかしい。

だったら内部犯を疑うのが一番だ。しかしIS学園の生徒、教師、それらの関係者の銀行口座や通信記録をパスイに調べさせたが何の問題も見つからなかった。ただの一人を除いて…。

「まさかIS学園が毎年使用している旅館のスタッフの中に…それも女将が亡国企業のメンバーだったとは思いませんでしたよ」

「よく分かったわね。そうよ、私は某国企業の一人…みんなは私の事を風（カーム）と呼んでいるわ」

「誰にも靡かないって事なのかな？でも俺には靡いて欲しいな」

「それはあなたの部下に成れって事かしら？」

「その通り。景子さん、貴女はどうも自分に嘘をついている。本当は彼らに従いたくないんでしょう？」

黙って下を向く景子さんに構わず続ける。

「とある時期からあなたの口座へ多額のお金が入金されている」

「それは夫の保険金よ」

「違うね。ただの自動車事故にしては多すぎる額だ。それにあなたは結婚していない。出所不明で海外口座からの入金…そして同時期にIS学園専用の旅館として使われ始めた」

全てパスイが調べてくれた。IS学園の地下にある巨大なサーバーを利用していなければきつと調べる事は出来なかっただろう。

「それに今回の奇襲はタイミングが良すぎた。本来なら今年の臨海学校は銀の福音だけが襲撃する予定だったんだらう？しかし俺というイレギュラーが生じ専用気持ちも三人も用意した」

「……あなたの言う通り。私は企業からお金を受け取ってIS学園の情報を横流ししていたわ。でも仕方なかったのよ。祖母から受け継いだこの旅館を護るためにはお金が必要だったのよ」

「だからって…いや、貴女にとってこの旅館はとても大事なものだっただんですわね」
「責めないの？」

「誰にだって大事な物の一つや二つは有りますよ。だから僕にもそのお手伝いをさせてください」

「それは…どういう…」

今まで情報を流し続けていたターゲットからそんな提案をされたら信じられなくて当然だろう。しかし景子さんに悪気はない。心の奥でかなり葛藤してきたことが分かる。

「お金が必要な俺が工面します。守ってほしいのなら俺が守ります。その代わりに景子さんは俺の下で働いてくれませんか？」

「……」

疑いの目を向けられるがそれも仕方ない。

「正直なところ貴女が欲しいんです。美人でお淑やかで和服が良く似合う。なにより辛薄そうな未亡人ってところに惹かれました」

「もし私が従わなければどうするつもり？」

「死んでもらいます。脅しじゃありませんよ」

「選択肢はないのね…良いわ。あなたの女になる」

袖口に隠したナイフを拡張領域になおして、改めて歓迎する。東たちは色々と言言を言うだろうが俺がスカウトした女だ。それに能力を使つて若干洗脳したのだから裏切る心配は一切ない。きつと納得してくれるだろう。

……

…

俊葵が景子をスカウトしている時、専用機持ちは個室へ集められていた。

「以上が現在、我々が置かれている状況だ。理解できたか？」

「はい!!」

返事をしたのは一夏だけで代表候補のみんなは返事をしなかった。

「どうした、返事が聞こえなかったぞ」

セ「福音がこちらに向かつて来ていることは承知しました」

ラ「しかし暴走の原因が不明ではどう対処してよいのか分かりかねます」

鈴「実験の失敗なのか：それともハッキングされたのか」

シャ「パイロットも搭乗している事を仮定すると鹵獲は我々の戦力だけでは不足だと思えます。福音の基本スペック、装備、戦闘パターンなど開示をお願いします」

「暴走の原因については米軍から何の情報も与えられていない。しかし基本スペック等の上方なら条件付きで受け取った。しかしこれらを開示するとお前たちには守秘義務

が課せられる」

セ「死ぬよりはマシですわ」

シヤ「セシリアの言う通りだよ」

一夏「みんなを守るためにも教えてくれ」

簪「情報戦は基本」

「そうだな……これが福音の情報だ。決して口外するな」

メモリーチップを受け取った皆はそれぞれ I S に接続して福音のスペックを確認する。まだ I S に疎い一夏はよく分かっていないようで鈴に教えてもらっている。

そんなところへ俊葵参上。

「待たせたな。いまどの辺まで話し進んでる？」

「福音の基本スペックに目を通してもらっているところだ」

「報酬は？」

「そういった話は出てきていないな」

「じゃあ情報を提供してくれた人に電話つないでください。報酬の話します」

何処からともなく現れた束が俺に携帯端末を渡してくれる。4 コール目でようやく

電話に出た。

「忙しいんだ。後にしてくれ（英語）」

「私は松崎俊葵だ。報酬について話がしたい（日本語）」

「なんの様だ？英語で話もできないのか？（英語）」

「どうやら俺が誰か分かったうえでこんな態度をとるのか。教育がなっていない証拠だね。さすがはアメリカ産の種馬、脳みそはすっからかん。」

「仕様がないので自動翻訳をする。」

「報酬の話がしたい。我々は無償でISの暴走を止める程お人好しじゃあない」

「ふん、お前たちは黙って従ってればいいんだ」

「そうか…なら暴走したISは俺たちの予想外のスピードで市街地へ侵入。その後、万単位の人間を殺戮…うん、良いエピソードだ」

「電話を切り束へ返す。」

「今すぐに銀の福音の暴走を公に晒せ。報酬を払うつもりが無いのなら払わなきゃいけないような状況を作ってやる」

「セ「俊葵さん、何を考えているのですか!?!こうしているうちにも福音は人口密集地へ侵入しようとしているのですよ!?!」」

「タダで死ぬと言われて死にたくない。それにIS学園関係者ならいざ知らず、名前も顔も知らない誰かが死んだって構わないよ」

「一「俊葵が行かないなら俺が行くぜ。誰も傷つけさせない」」

一夏が勝手に部屋を出ようとしたので手首を掴んで思い切り壁に放り投げた。強く背中を打ち付けた一夏はせき込んでいる。そんな一夏に銃を向けて問いかける。

「福音は最新機だぞ。下手したら死ぬかもしれない、死なないにしても怪我をするのは間違いない。なのに無償で暴走を止めるのか？ そんなのは論外だ。なによりアメリカの態度が気に入らない。日本の領海を侵犯し、違法な実験をして、暴走したら『お前たちで何とかしろ。金は払わないぞ』ときたもんだ」

「げほっ…げほっ…だからって死んでいい人間は一人もない!!」

「実力も無いのに綺麗事をぬかすな。せめて身近にいる恋人の一人くらい守れるようになってからそういう事は言え」

「守れるさ!!」

一夏が俺の胸ぐらを掴んだと同時に鈴の両腕を操作して首を絞めさせる。

「鈴!?! 俊葵…お前!!」

「守れていないじゃないか」

「…それは…俊葵が!!」

「じゃあ福音なら待ってくれるのか？ テロリストが待ってくれるのか？ 待つちやくれな
いよ…だから俺は一度死んだんだ」

困惑する専用機持ちに数時間前の出来事を話した。みんなありえないといった様子

で静かに聞いてくれた。

「一夏…俺はお前の考えを否定したいわけじゃない。でも綺麗事じゃどうにもならないヤツが相手なんだ」

「俺は…悔しい、すごく悔しい。全部、俊葵の言う通りだ。気持ちばかりが逸つて実力が追い付いていないのに」

「一夏、正しさとは強さだ。強者が雪を黒いと言えば黒くなる。それが世の中の理だ。強さこそ…」

「俊くん電話きた」

気分良く一夏に説教していると束に中断されてしまう。別に不機嫌になったりはしないがちよっぴり興が冷めてしまった。

「もしもし?」

あからさまな不機嫌な返事。それでも相手はちゃんと返事を返してくれた。

「私は米軍の司令部の人間だ。報酬について話がしたいというのは君かね?」

「俺の携帯に掛けてきたのはあんたらだろ? 察しろよ…使えねえな」

「単刀直入に言わせてもらおうと報酬を払う気は全くない。誰が好き好んで年端も行かない子供に報酬を」

「じゃあ福音はパイロットごとバラバラになり海に沈んじやうな。ISのコアも修復不

可能になってね。いやあく仕方ないだろ。だって最新機だよ？本気で戦わないと危ないしさあ」

「…アメリカと戦争がしたいのか？」

「調子に乗っていると痛い目を見るぞ。俺は誰にも屈しないし、従うつもりもない。それは俺が誰よりも強く気高いからだ。一度だけしか言わないから注意して聞け。報酬は10億ドル、戦艦大和のサルベージ、及び改装。大和のサルベージと改装は仕事が終わってから一か月以内でやれ。もし万が一にでも払うつもりが無い場合は…：途方もないお仕置きを遂行する」

「ふざけるなよ若造が…」

「そうか、じゃあ仕事を済ませてからお仕置きをしよう。これは商売だ。お前たちの依頼で俺は動く、だから雇い主のお前は俺に報酬を払う。それがなされない場合は裁かれて当然だ。ただ裁くのが俺というだけ。いつまでも最強気取ってんじゃねえぞクソ豚。上には上の存在がいるって事を思い知らせてやる」

携帯端末を握りつぶしてゴミ箱に捨てる。

ち「俊葵…まったくお前と言う奴は…」

た「うんうん、俊くんはそうでなくっちゃね」

ク「アメリカと戦争をするおつもりなら私にも一声おかけくださいませ」

「どうせ無駄金を大量に持っているんだ。俺が代わりに使ってやるよ」
た「ところで仕置きってどんなの？」

「宇宙から数トンの隕石を数個落とす。人工衛星よりも高い位置からの襲撃だ。ただの隕石の仕業なら俺がやったなんて気付かないだろうしね」

一夏や箒は信じられないという顔をしている。何万人という人を殺すんだ…その反応が当たり前だ。

一「もう俺が言っても止まらないよな」

「分かかってんじゃない」

握った拳を突き出してきたので俺も拳を突き出してぶつける。

「それじゃあ…行こうか!!」

福音を止めるために結成されたチームが空へ舞い上がったのは、アメリカからの詫びの電話が入った後だった。

66話 小便は済ませたか?神様へお祈りは?部屋の隅
でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK?

「なあ、俊葵!!教えてもらったスペックよりも強くないか!」

「多分それ俺の所為」

「なんで!」

「こいつのAIはパスイほどじゃないにしろソコソコのモノを積んでいるからね。俺と
の戦闘で学習したんだろ」

さっきの戦闘と比べて動きが格段に良くなっている。セシリアのビットを華麗に避
け、ラウラの長距離射撃を予測して反撃、鈴の近接攻撃は言うに及ばず、シャルルの火
力ではなかなかダメージが出ない。ダメージソースとなるのは一夏の零落白夜だが肝
心の一夏があともう少しというところで避けられてしまう。

なので命中している攻撃はシャルルの散弾と俺の偏向射撃だけだった。それでも縮
退炉を搭載していない嵐や散弾の攻撃程度では絶対防御は抜けない。

「くそ…やつぱり嵐じゃ火力が足りないか。仕方ないから宇宙を探しに行く。一夏、お前は付いて来い」

「俺もここに残つてみんなと戦う!!見捨てていけないか!!」

「俺のシールドピッドが無ければ今頃お前は全身大やけどで海に浮かんで魚のえさだ。落ち着け一夏、落ち着いて周りをよく見ろ。エネルギーの残りが少ないお前はどのみち補給が必要だ」

「そうだけど…」

「それとも俺たちの恋人が信じられないか?うん?」

少し考え一夏は外部スピーカーをオンにして振り返った。

「少しだけ持ちこたえてくれ!!すぐに戻る!!」

覚悟完了したみたいだな。

俺は一夏の手を取つて全速力で俺が死んだ海域へ急いだ。

……

…

「私たちは行かなくて良かったのお姉ちゃん」

「俊くんの報告だと亡国企業が近くににいる可能性が高い。それに敵は景子さんが裏切ったことを知っている。だったら彼女を守る人が必要でしょ?」

「元は某国企業の間人なのにな……本音は？」

「隣の部屋でお菓子を食べてるわ」

「その本音じゃない」

叱られた楯無さんは肩をすくめながら口を開く。

「この場を和ますためのジョークじゃない。本当の事を言うとまだ信じきれないわ。俊くんの選んだ女性だとしてもね」

「手厳しいわね」

「許可さえ出たら殺したいくらいには嫌いよ。俊くんの傘下に裏切者はいらぬもの」

「あらあら……随分と」

肩をすくめるとぬるくなったお茶を啜つて一息つくと携帯端末を取り出して何かを確認し始めた。

「妙な動きはしない方が良いわよ?それを口実に貴女を殺すから」

「突入は10分後、5人編成の小隊が4、主装備はサブレッサーを付けたサブマシンガン、副装は各々個別にハンドガンを装備、配置はこんな感じよ」

そう言つて端末の画面に映し出された周辺の地図を見せる。地図には現在地を表す赤いマーカーと敵を示す青いマーカーがある。

「なるほど、守つてほしいわけ?」

「違うわ。あなたたちを助けるのよ。元同僚の首を20個渡したら信用してもらえるかしらっ？」

「バックアップはしない…よ」

「必要ないわ」

そう言つてふすまを開けて出て行つた。

……

…

自室へ戻つた景子さんは戦闘に備えてとある武器を着物の袖にしまふと携帯端末で敵の位置を改めて確認した。

「顔も名前も知らなくて良かったわ。だって何も気負う必要がないんですもの」

「風…いや、ここでは清洲景子だったな。織斑千冬の所在は？」

振り向くと開いた窓から一人の兵士が土足で足を踏み入れていた。

「お茶はいかが？」

「早く答えろ。時間が無い」

「そう…つまらない男。あの人はそんなんじゃないわ」

スツ…と景子さんが手を払うと男の首が綺麗に切れて畳の床へ落ちる。

「これでも諜報部の幹部の一人なのよ？あなた達のような平社員が勝てるわけないじゃ

ない。さて…隠れていないで出て来なさいな」

「何もない空間に呼びかけるが返事はない。」

「そう…」

「今度は両手を突き出して思い切り左右に開く。すると壁が綺麗に切れて崩れる。そして瓦礫と一緒に人間4人分の肉片が生まれた。」

「あと15人、この調子だとすぐに終わりそうね。ここは私の世界なの…あなた達はどこで死ぬのよ。お小水は済ませましたか?神様への御祈りは?部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする準備はよろしいでしょうか?」

「死体から通信機を取り、他の部隊へ連絡をした。敢えて自分の位置を教える事で敵を迎え撃つのだ。その方が広い場所で戦うよりも有利だと分かっているから。」

……

…

「なあ俊葵、お前が死んだのはこの辺りか?」

「この辺りだよ。でもおかしいな…宇宙の反応が全くない。海流の動きも計算して現在地を算出したはずなのに」

「しばらく探していると遠くの方で漁船を見つけた。作中に出てきた不法入国した漁船だろう。本来はこの辺で一夏達が戦っていたのか。なんだか物語の裏を見てる感じ」

…違うかな？

そんな事より俺のISだ。周辺数キロに亘ってサーチを掛けたが全然反応が無い。

「探し物も大事だけどあそこの漁船に避難勧告を出さないと。このままだと巻き込まれちゃう」

「そうか…そうだな。行こうか」

漁船に近づくと中国語で何か話している。

「パスイ、自動翻訳と変声機能ON」

これで良し。一夏には下がらして一步前へ出る。

「今この辺りの海域はIS学園が貸し切りである訓練を行っている。その訓練では実弾も使用している。だから今すぐにこの海域から離脱して近くの漁港へ入ってくれ。そして然るべき処置を受けてもらう」

「分かった。すぐに出て行く」

「そうか、良かった。ちゃんと指示に従ってくれて…ところで何を釣っていたんだ？」

沖合に出ている船にしては甲板に釣り竿の一本の無い。網で魚を取っている雰囲気でもないので訊いてみた。

「あ、ああ…ちよつとした…そう、宝探しだよ」

「宝探し？」

「そう、宝探し」

「日本の領海で手に入った物なら日本政府の物だ。悪いが確認させてもらおうか」
すると船員は目の色を変えて俺に近づいて来た。

「悪いがそれは出来ない」

「すぐに出て行く、荷物は海に捨てる。それでいいだろう?」

「良くない。警察に見つかったら嫌なものなのか?良いじゃないかお宝くらい」

「なんだか気になったので多少無理矢理ではあるが甲板の床を開けて船内を探す。も
し資源的な物ならコレを口実に中国へ制裁を行える。」

「おいおい、勝手に入るな!!訴えるぞ!!」

「俺の国で好き勝手やったんだ。これくらいの覚悟もなしに日本の領海を犯すな」

「漁や釣りに関係の無いものばかりが散乱している。近くの木箱を開けてみると…。」

「ひゅー、こいつあすげえ。一夏、これ見てみるよ」

「甲板にいる一夏を呼んで箱の中身を見せる。」

「おい、これって銃だろ。詳しくないからどの銃と違ってのは分からないけど密入じゃ
ないか」

「へへ、とんだものを見つけちゃった…な。一夏、アレ…」

「倉庫の奥の方を見るとぼう、と光が漏れている。近づいて布をめくると医療カプセル

だった。

「なんでこんな高価な物が…」

俺が使っているものと構造が似ていたので、設定を弄り有色ガラスを無色へかえた。すると中には宇宙を装備した俺が入っていた。

「一夏…先に皆と合流しろ」

「でも…」

「いいから合流しろ。ここで俺に何が起きても振り向かずに飛ぶんだ。行け!!」

倉庫の壁を壊して一夏は皆の元へ飛び立った。残された俺は医療カプセルを壊して宇宙を回収し式神を札へ戻す。

「見られちゃったね…」

返事もせずにシヨットガンの銃口を頭に合わせて発砲する。即席の肉塊の完成。

この船は沈めなきゃいけない。東の宇宙を汚い手で触ったゴミは掃除しなきゃね。

銃を取り取り応戦してくるがISに対して自動小銃程度の火力じゃ傷一つ付ける事さへ叶わない。俺は静かに怒りを落ち着けながらゆっくりと一人一人確実に頭をつぶしていった。

67話

「くたばれゴミクズ共!!よくも俺を穢してくれたな!!お前たちみたいな下等な奴らに触られる気持ちがあつてたまるか!!」

「全身を悪寒が駆け巡る。まるで汚れた流し台を掃除している時にゴム手袋の裾から生ごみが入った時のように。」

「面倒だからまとめて吹っ飛ばすか…パスイ」

『了解、多弾倉ポータブルミサイル、使用可能です』

両上腕部に大型のミサイルポッドが装着され発射管扉を開く。そして前面にGNライフルピット、体中のGNミサイルも展開して一斉掃射をする。

もちろん全弾命中して船は木っ端微塵になる。

『生体反応を探知、まだ生存者が3名います』

「KO—5K4/ZAPYATOIを両手に装備」

大型のガトリングガンを取り出して船の残骸を掃射する。ここに彼らがいた事実は

消さなくてはいけない。だから生存者は一人もいてはいけない。

『生体反応ゼロ、目標の達成を確認いたしました』

「あらあら……私の部下が死んじやったわ」

声が出た方を見ると黄金の夜明けが浮遊していた。リーダーに反応が無いところをみるとかなりの高度を飛んできたか水中を潜って来たか……どちらにせよ俺に気付かれずによくも近づいたものだ。

「ふん、こんな使い捨て要員が死んだくらいじゃ悲しまないくせに」

「バレちゃった、でも迷惑なことに変わりはないわ。折角の任務が台無し。使えない駒は処分するに限るわ」

「俺も処分しに来たわけか？ 悪いがさっきの様にはいかないよ。もう油断も手加減も容赦もしない」

「せっかちな男は嫌われるわよ？」

「……………」

「私がここへ来た理由はあなたを勧誘するためよ」

「……………」

「もちろんあなたの友達も一緒に来てもらうわ」

「こんな事だろうとは思っていたがいきなりだな。こういった事はもうちよつと後に

なると思っただけなのに。

「悪いが嫌だね。俺はお前たちのようなテロリストとは違う」

「そうは思えないわ。貴方がフランスと中国で行った事を考えたらね。貴方の最終目標を訊いておきたいわ」

「……なら、教えてやる。俺の最終目標を」

……

…

「風!!止めろ!!俺たちh」

「バラバラ死体の一丁上がり」

「撃て!!殺せ!!」

放たれた弾丸は景子さんに到達する前に何かに弾かれて、てんで違う方向に着弾する。

「ふふ…年は重ねたくないモノね。昔のように上手くはいかないわ」

そう言いつつ最後の一人の首をはねる。残った胴体は掃除しやすいように四肢を切断して一か所にまとめてあった。

「ひゅく♪凄いい、ちよつと見直しちゃった」

「今度は貴女が相手かしら? ロシア代表の更織楯無さん」

「まさか、I Sを装備していても苦戦すること間違いなしだわ。さつきは御免なさいね」
「良いのよ。逆の立場なら私も警戒していたわ」

ゆつくりと近づき景子の腰に手をまわして抱き寄せる楯無。そして何の抵抗も見せないまま強く抱きしめる景子。二人の間に桃色の空気が漂う…。

「貴女、俊葵さんのオンナじゃないの？」

「ある程度のは自由は認めてもらっているわ。とは言え男には手を出さないけれど」

「そう…でもダメよ。私は俊葵さんに抱かれるまでは誰とも寝ないって決めているから」

「残念…」

「落ち込まないの。俊葵さんに抱かれた後なら相手をしてあげるわ。そこに隠れている妹と一緒にね」

「簪ちゃんにその趣味はないの。それに手を出してほしくないわ」

「私は…俊葵だけのモノ…だから。…ところでこの死体の山は掃除しないの？」

返事の代わりに霧纏いの淑女を呼び出してナノマシンで掃除を始める。

「お姉ちゃんのナノマシン良いなあ」

「制御が難しいから慣れないうちは大変よ」

ナノマシンに包まれた死体がゆつくりと分解されていく。束に改造されたナノマシ

ンは空気中や包んでいるモノの元素を利用して様々な液体を作ることができる。例えば二酸化炭素を包み込めば炭酸水が、塩を取り込めば塩素を主とした液体が作れる。

しかしこのナノマシンの本領は硫化水素や濃塩酸や濃硝酸を作れるところにあった。元々、開発段階でオミットされた機能なのだが、半ば強引に束に改造された。

……

…

「クソツ!!全然、攻撃が当たらない!!」

「一夏、落ち着いて。そんな大振りの攻撃じゃ隙が大きすぎる」

鈴が衝撃砲で牽制しつつ一夏の援護に向かう。

「でも俺の零落白夜じゃないとダメージが…」

「僕たちだって負けていられないよ。セシリア!!」

「はい!!」

シャルルの合図で投げた手榴弾をセシリアが撃ちぬき、銀の福音の周りにビームかく乱幕を散布する。福音の武装がビーム主体だと聞いていなければこのような戦略はできなかつた。

「こ・れ・で・も……ずえりや!!」

「喰らえ!!」

とても乙女が出していい声ではない気合の入った怒号をあげながら鈴の双天牙月とシャルルの灰色の鱗殻が福音の腹部に直撃する。福音は反撃しようとビーム発射管を展開するがかく乱幕によってビームが発射されない。

直撃を受けた福音は大きくよろけ、傷跡は大きく損傷してパイロットスーツが少し見えている。

「L……a……L……」

福音がどうなったかというのと、そのままうづくまるように手足を折りたたむと海上に波に揺られていた。

「ふう……ようやく終わった。俊葵が前哨戦でシールドエネルギーを消費させてくれていなかったら勝てなかったかもね」

「まったく……アメリカも面倒な物を作ってくれたものですね」

「一夏もなかなか頑張ったじゃない」

「へへ……ありがとうな、鈴」

『私もこの距離での狙撃をよくも成功させたものだ。5キロ以上離れた場所からの狙撃なんて二度とやらんぞ』

「ラウラもよく頑張ったね。はあ、早く旅館に帰って温泉に入りたいなあ」

『おい……ちよつと待て、この反応は何だ!?!』

「どうかしたの?」

『お前たちの下方250メートルにエネルギー反応一つ!!警戒されたし!!』

ラウラの警戒と同時にセシリアにエネルギー弾が着弾する。初段が直撃してバランスを崩したところに次弾も命中した。

「セシリア!!」

「一夏、下がちなさい」

「でもセシリアが!!」

「私は大丈夫ですわ…すこし、シールドエネルギーを削られましたけど…」

爆炎の中から姿を現したセシリアはビットが破壊されており、主兵装のライフルも破損していた。しかしIS本体は無傷でとっさに防御したのがうかがえる。

「それよりもアレはまさか…セカンドシフトですわね。与えられた情報には無かったようですが」

「どうするの、今の戦力じゃあ勝ち目はない…俊葵とは連絡が取れないの?」

『連絡を取っている…早く出てくれ…、おい俊葵!!急いできてくれ!!』

電話が繋がったとたんに、まくしたてるように叫ぶ。予期せぬセカンドシフトはプロのラウラをもってしても予想外の出来事だった。

『どうした?俺も忙しいんだけど』

『福音がセカンドシフトした。私たちの戦力では太刀打ちできない。至急援護に来てくれ』

『任せろ…できる限り福音は刺激するな』

『聞いている通りだ。セシリアをカバーしつつこちらへ退避しろ』

「『了解!!』」

……

…

「悪いな、ちよつと急ぎの用事ができた。貴女とのダンスは楽しかったけれどこれで終わりにしますね」

ラウラから連絡を受けた時に俺は生身で黄金の夜明けと戦っていた。わりと本気で戦っていたのにまだ倒せていない。

「福音のセカンドシフト…でしょう? ようやく種が芽吹いたようね」

「時間が無いからガチでイクぜ。せいぜい死なないでくれよ…」

両手を合わせて目を瞑り集中する。そして圧縮した水と空気の弾を黄金の夜明けの周りに浮遊させた。

「これが何かわかるか?」

「水ね。それがどうかしたの?」

「100分の1に圧縮した空気や水を開放した時の衝撃を想像してみろ…頑張つて生き残つてくれよ」

指パツチンと共に水と空気が破裂して周辺にある全ての物を吹き飛ばした。

68話

福音はまさに終焉を告げる天使の様だった。

破損した腹部を中心にさなぎが蝶へと羽化するみたいにヒビが入り、パラパラとエネルギー体が海へ落ちる。頭部に装備されていた大型スラスター兼主武装は外れて光から成る大きな翼になっていた。

シャ「はは：もう乾いた笑いしか出てこないよ。あんな化物を相手に勝つなんて無理だよ」

セ「弱音を吐くつもりではありませんが現在の武装では難しいですわ」

鈴「でも何とかしなきゃ。人口密集地で暴れられたら国際問題どころじゃないわよ」

一「鈴の言う通りだぜ。俺たちで何とかしないと」

ラ「だが弾薬もエネルギーも武装もままならない状況で最新鋭の第三世代の機体を相手にするなんて論外だ。一刻も早い撤退と増援の要請をだな。そもそも私たちのISでは攻撃を当てる事はおろか追い付く事すら…」

この場に悲観的なラウラを批判する人は誰もいない。それはラウラの話していることが現実で最善策だと知っているからだ。シミュレーションで何度も絶望的な体験している代表候補生も実戦での絶望に堪えていた。

ラ「織斑先生に連絡を取る：異論はないな？」

シャ「僕は反対だよ。俊葵の話だと昨日の夜にテロリストが下見に来ていた。多分、旅館の方も襲撃されている可能性がある。そんな時に援護なんてお願いできないよ」

鈴「じゃあどうすんのよ？」

ラ「こうする!!」

シュヴァルツェアレーゲンのレールガンが火を噴くと同時に銀の福音の翼が変形して弾丸を包み込んだ。

「L a ~ ~ ~ ~ ~♪」

そして包み込まれた弾丸を砕いて散弾銃のように打ち返す。ISにはそんな攻撃が効くはずもない：そう思った一瞬の隙がラウラを襲った。

瞬時加速以上の爆発のような加速でラウラに急接近して、大きく翼をはばたかせ光の羽を舞い踊らせる。

ラ「こんなもの!!」

とつさのP I Cで防御しようとするが数百個のエネルギー体に対して同時にP I C

を掛ける事なんて出来ない。せめて全面だけでもと防御した瞬間に羽は爆発しラウラは海面へ落ちて行つた。

一「ラウラ!!」

鈴「この…これでも食らいなさい!!」

非固定ユニットから衝撃波を放つが銀の福音には届かない。翼を盾のように変化させて衝撃波を防いでいる。しかも盾は千枚岩のような多層構造になっており、衝撃を段階的に減少させて防ぎきつた。

シャ「僕はある限り熱くならないキャラのはずなんだけどなあ…。でも親友が目の前でやられて怒らない薄情者でもないよ!!」

主武装が楯に変化している隙を突こうと両手にショットガンを構えて突貫した。

「La♪」

ショットガンが直撃するのもお構いなし、福音は楯を素早く細身に変化させ突撃してくるシャルルに突き立てる。普段から近接戦闘の訓練を俊葵としているシャルルにとってこの程度の攻撃は避けるのは容易い。

腕と刀身をしっかりと見て剣の軌道を読めばこんな斬撃なんて…。

腰をひねりすんでのところで刀身を回避した…。と思われたが刀身がシャルルの身体と重なった瞬間に大爆発を起こして海に落ちていく。

「LaLaLaLa~~~~♪」

一 「クソ……早く来てくれ……俊葵い!! 早く来てくれ!!」

虚しい叫びに返事をするように福音のエネルギー弾が一夏と鈴へと発射される。無数に飛んでくるエネルギー弾を回避するすべなどない。

一 「ごめん……俺が弱いばかりに」

鈴 「バカ……謝らないで」

二人は抱き合い……そして爆炎の中でキスをした。

69 話

「あれだけの衝撃波を受けてよく無事だったな。並のISなら装甲は剥げてパイロットの内臓や骨はぐちゃぐちゃになっていた」

「バリアが無ければさすがの私も無事では済まなかったわ。…ふふ」

「何がおかしい?」

「今福音から連絡があったわ。どうやら貴方の御仲間はいギリス代表を残して全滅したみたいよ」

「バカな…いくら強いとはいえ所詮はコンピュータ制御のISだぞ。代表候補を含む全員が専用機持ちの小隊が負けるわけない。」

「映像を見る限りではとても無様な死に様ね。笑っちゃうわ。あの程度で代表候補生なんて」

「プツン…と俺の堪忍袋の緒が切れるのと同時にスコール手足がひしゃげる。黄金の夜明けの装甲は裂け、バイザーは砕け…ほとんど達磨のようになったスコールを見下し

た。

「はあ…キレイたら調整が難しいな。要反省だ…」

半壊した宇宙の縮退炉を稼働させてみんなの元へ急ぐ。原作通りの負傷なら数分数秒が命取りだ。

しばらくブースターを壊れるほど吹っ飛ばしていると、負傷したセシリアが海面すれすれを何かを抱えながら飛んでいるのを見かけた。

「セシリア!!」

遠目にも負傷しているのが分かったので急いで近寄る。

「無事か!？」

「はい……私は無事ですわ。でも……でも……」

セシリアの手の中に有る物を見て絶句した。

「これは……」

「私以外は…みんな……私が弱いばかりに……」

セシリアは腕に抱えている、なんとかシャルルとラウラだと判別できるモノを俺に見せた。

血が滲んだ包帯、欠損している部位、包帯で全身をくるまれているので髪の色で何とか判別できる。

「生きているのか？」

「ISの生命維持装置をフル稼働させて何とか命を繋いでいる状況です」

それを聞いて急いで回復用の札をシャルルとラウラの全身に余すところなく貼る。そしてその上から更に肉体強化用の札を貼って回復力の向上もさせた。

「すまないセシリア：俺がいればみんな傷つかなくて良かったんだ」

「俊葵さんもご自身の役割を果たしただけですわ。これは私たちの責任です」

「そう言ってもらえると気が楽になるよ。一夏と鈴は……」

「爆炎に包まれ海に落ちていきました。助けようとしたのですがシャルロットさんとうラウラさんを助けるので精いっぱいです……み、見捨て……見捨てて来てしまいましたあ!!」

両目にいっぱい涙を流しながら懺悔の言葉を漏らした。あんな状況で二人も救出してきたのだ。誰もセシリアを攻める事は出来ないし俺も攻めたりしない。

だから俺はセシリアを優しく抱きしめる。

「大丈夫、二人も医療ポッドに入っていればすぐに良くなるさ。一夏や鈴だってまだ死んだとは決まってる。俺が今から救出に行ってくる。セシリアは二人を連れて旅館へ戻ってくれ。良いね？」

「私は何もできないのですか？……誰も助ける事が出来ないのですか!？」

「シャルルもラウラもセシリアが居なければ死んでいた。少なくとも二人は絶対に助か

るよ。全員は救えなくて当然な状況だった。だからセシリア……」

ちゆ……

「これ以上、悲しい顔をしないでくれ。俺まで悲しくなる」

「分かりましたわ……旅館に戻り3人の帰りを待っています」

「ああ……」

セシリアに背を向け福音のいる海域へ目を向ける。

「福音……お前だけは許さない、絶対にだ」

……

……

「まいったわ……これじゃあ動けないわね」

達磨のような状態になっても尚スコールはまだ生きていた。傷口はとても人間のモノとは思えない人口の筋繊維と強化骨格が顔をのぞかせている。

「盛大にやられたな」

「オータム……助けに来てくれたの？」

「恋人を見捨てるわけがないだろう。ほら、体重をコッチに預けて」

「ありがとう、今度なにかお礼をするわ」

返事をする間もなくオータムはスコールの唇に己の唇を重ね、舌を奥まで侵入させ

る。

「ん…ちゆ、ちゆ…じゆる♥」

「んう…もう、オータムったら。情熱的ね」

「本当に心配したんだからな／＼ちゆ、ちゆ／＼♥無抵抗なスコールを襲うのが癖になりそうだけ」

「貴女が望むならいつでも襲われてあげるわ」

「スコール／＼／俺のスコール／＼」

ますます興奮するオータムにスコールが待ったをかける。

「続きは船に戻ってからにしましょう、ね？」

「ああ、そうだな。それよりあのパイロット…松崎俊葵だったか。次に会うときは絶対に殺してやる」

「それは無理ね。私も手加減をして戦っていたわけじゃない。なのに一瞬でこの有り様よ。どんな手品を使ったか分からないけど一瞬で手足がつぶれたの」

「スコールが手も足も出なかったのか？」

「そうよ…彼の言っていた『ISを装備している間は手加減』ってセリフは間違いじゃないわ。間違いなく彼は世界で一番強く危険な存在。どうにか手中に収めたい…」

「おいおい、そんな焚火に放り込んだガソリンよりも安定してないヤツを従えるなん

「無理だ」

「そんな生易しい物じゃない…体内に入ったテトロドトキシンってところね。彼の気分次第でどんなモノでも滅ぶ」

「冗談はよしてくれ。そんな力を持つていながらどうして学生なんてやってるんだ？力があれば独立もできるだろう」

自分の愛しい人が自分の望む質問をしてくれたスコールは少し嬉しそうに口を開く。

「弱点はそこよ。独立できない訳がある。百獣の王ライオンがハーレムを作るようにね」

……

…

「最初からクライマックスだぜえ!!」

福音を見つけた俺はISを待機させて千冬さんたちと戦った時と同じ肉体強化をする。手足の先から鱗が生えて来て全身を包む。全身の骨格も変化して凶たく強靱な尻尾と鋭利な爪が生えて変化は完了した。

「5……秒……で……コロス!!」

5

空気を圧縮させ壁を作り、両手で思い切り叩いて加速した。

4 福音の反撃を咆哮でかき消して右腕を掴み魂を抜き取ると同時に引き千切り、勢いそのままに身体を回転させる。

3
2 そして勢いを利用して回し蹴りで両足をへし折る。

1 手刀で首をはねて：

最後に福音のコアを引き抜いて完全に沈黙させる

「ハア…ハア…クソ…：…あとでナターシヤを生き返らさないとな」

まだアメリカと戦争すべき時ではない。仕様がなないので浮かんでいるナターシヤの遺体を拡張領域へしまう。まあ、魂さえあれば身体なんて幾らでも生み出せるが労力が違う。

とりあえず任務終了のお知らせを千冬さんにするか。

携帯端末を取り出して千冬さんに電話をする。3コールと待たずに出てくれた。

「目標は沈黙、任務完了です」

《ご苦労…一夏と凰の事はオルコットから報告があつた。後で捜索隊を編成しよう

》

「それなら俺が探しに行きますよ。その方が早いですし」

《それは助かる。今すぐにもでも探しに行つてほしいがとりあえず帰還してくれ。捜索の際に何かあつたら大変だ》

「分かりました。これより帰還します」

ボロボロになつた宇宙は待機状態にして嵐を纏う。一回目の福音戦に続き、全力のO Bによつて宇宙は稼働がままならない程のダメージを負つていた。正直、宇宙には悪い事をしたと思つている。

「すまないな宇宙…帰つたらすぐに修理してもらうからな」

嵐にも悪いと思ひながら旅館へ急いだ。

70話

旅館に帰った俺は千冬さん、真耶、束の3人に迎えられた。みんな寝静まった夜だといふのにずっと起きていてくれたらしい。

「ごめんなさい千冬さん……一夏を守り切れませんでした。俺が一夏を一人で行かせていなければ、黄金の夜明けに手間取らなければこんな事には」

『あの時にああしとけばよかった』の積み重ねが現在だ。お前が気にする事じゃない。それにまだ死んだと決まったわけじゃないだろう？もしかしたら無人島に流れ着いて嵐とよろしくやっているのかもしれない」

強がってはいるが一夏の事が心配でたまらないのだろう。さつきから話をしている最中も人差し指と親指を口の前でしきりに擦らせている。

「そう……ですね。あ、福音の残骸です。束、コレの回析を頼む」

拡張領域からバラバラになった福音だったモノを取り出す。床が血で汚れるといけないので念力で浮かせる。

「ひゆくさすが俊くん、この破壊痕は本気出してるねえ♪私たちと戦った時の変身を使ったでしょう?」

「分かるか?」

「もちのロンロン。ね、まややん」

「はい、右腕の痕なんか特に分かりやすいです。強い力で握られて爪が喰い込んでいます」

「傷跡を見ただけでどんな攻撃でどんな手段で壊したか分かるってすごい事じゃないのか? 東も真耶も普段はのほほんとしているから忘れがちだが、片や世界最高の頭脳を持った狂人(褒め言葉)、片やブリュンヒルデに手強いと評されるIS学園の教師。俺の女は素晴らしいな。」

「おい…任務内容は福音の無力化だぞ。誰も破壊とは…」

「広義的には破壊も無力化の一種では?」

「はあ…アメリカにどう説明する気だ?」

「俺が言った報酬を払わなければ鹵獲した福音のコアは握りつぶす。それからパイロットの身柄も報酬が払われるまで拘束する。まあ、このまま伝えたら角が立つから…:そうです…:『暴走するようなISは東博士に調査してもらう。パイロットは激しい負傷により日常生活に支障が出ているので施設で治療、及びリハビリをしている』とでも報

告すればいいんじゃないですか？」

「簡単に言ってくれる。だが良いだろう。それがお前だからな」

やれやれと首を振るが内心、頼られて嬉しい様だ。

「パイロットは後で生き返らせときますよ。ちゃんと魂は保存してありますし」

「それならいつくんもしばらくは大丈夫だね」

「ちつつち、そうはいかない烏賊の金玉。人間の魂は死んだら抜けてどっかに逝っちゃうんだ。その辺をフヨフヨと浮いてる奴もたまにあるけど基本的には違う」

「でも俊くん前に魂はろうそくの炎みたいなものだって」

「それは身体と魂の関係。魂単体の話じゃあない。死んだ人間の魂を探すってのは携帯端末やネットを利用して地球上に存在する特定の人を前情報もなしに探すような物さ。俺たちって例外はあるけど」

「例外？」

「強い肉体を持つ人間の魂は特別なんだ。見ればすぐに分かる。だから東や千冬さんの魂ならすぐに見つけられるよ」

「では一夏の魂は…」

「死んだら蘇生させるのはかなり骨が折れるな。こんな事なら…」

俺はいつ死んでも大丈夫なようにIS学園の自室に自分の魂の一部を封じ込めた札

をストックしている。

「だが本来なら死んだ人間は蘇らない。一夏の搜索は明日以降に行く。今日は休んでくれ」

「分かりました。一夏と鈴なら生きてますよ」

「予言か？」

「俺の勘です。主人公はそう簡単に死んだりしない：アニメや小説の常識です」

「だがこれは現実だ」

「現実が小説より奇なりつて事も有るでしょう？」

「ふん、気休めだ。だが：ちゅ♥その気休めは嬉しいな、助かるよ」

凄く優しい顔：はあ、綺麗だ。

ロビーに束と千冬さんを置いて真耶と改めて用意された別室に帰った。千冬さんの事も心配だが負傷しているシャルルとラウラが心配だ。念のため多めに回復札を貼っておいたが欠損した部位の再生は出来ていないはず。

「良かったのちーちゃん？」

「良いも悪いもあるものか：私怨で大国と戦争するほど私は愚かでないよ」

「私は戦争しちゃうかも。いつくんと鈴ちゃんとこんな目に合わせたアメリカを許しはしない。俊くんも言ったようにお仕置きが必要だよ」

「そうか……これは私の独り言だ。もしアメリカが多大な損害を被ったら少なからず私
は嬉しい。今後、アメリカに対して制裁を行えるなら私は出来る限りの支援を行う。
……オフレコだぞ?。」

「ふふ、了解了解♪じゃあ私も部屋に戻っていつくんと鈴ちゃんの搜索だなあ。おや
すみちーちゃん」

「ああ、おやすみ束」

こうして千冬の慌ただししい一日は終わりを告げた。

……

…

扉を開けると本音とクロエがシャルルとラウラの看病をしている。二人とも意識が
はつきりしているのか談笑していた。

コチラに気付いたクロエが真っ先に俺の元へ向かってくる。俺の帰りを待ちわびて
いたのだろう。

「お帰りなさいませ、俊葵様。福音の撃破お疲れ様です」

「ただいまクロエ。シャル、ラウラ、身体の方はもう大丈夫なのか?」

「ああ、俊葵に張つてもらったこの紙切れのお陰だな」

「もうその辺を走り回れるくらい元気だよ。足が有ればの話だけだね」

無くなった左足の付け根をさする。包帯に血が滲んでいないので無事に完治はしたようだが日常生活に支障が出そうだ。しかしラウラもシャルルも抉れた傷痕を撫でている。

「幻肢痛か？」

「まあね、ちよつとチクチクする。でも大丈夫そのうち気にならなくなるよ」

「私も問題ない。医者の話ではこれから消化に良い物しか食べられないらしいが気にならないな」

「俺が気にするんだ！包帯を取って服を脱げ、いや脱がす」

布団を引つpegがして無理やり二人の服を脱がせる。傷は塞がっているが火傷や裂傷の痕があった。傷痕と欠損している部位を束たちにしたように札を貼り合わせて新たな身体を作る。

「これでよし…これからは気を付けてくれよ。傷ついた恋人を見るのは嫌だから」

「ほう…これは便利だな。部隊に一人欲しいな」

「そんな一家に一台みたいな言い方しないの。俊葵だつて困ってるじゃん」

「そんな事ないぞ。黒ウサギ部隊は良いぞお、何より終身雇用だ。それに軍備を使い放題、申請すれば新進気鋭の戦車、戦闘機、武装が手に入る。俊葵なら入隊してすぐに将校になれるよう私が上層部と交渉しよう。そうしたら収入も沢山、生涯安心だ。：

まあ安全とは言い難いがな」

ラウラの言うように黒ウサギ部隊に就職するのも良いな。男性パイロットならそう悪い待遇はされないはずだ。俺を取り込む事ができれば必然的に東や千冬さんも一緒に手に入れる事ができる。どこの国だつてそうしたいのは目に見えている。

「ずるいよラウラ。俊葵、僕のところに就職したら間違いなくデユノア社の次期社長だよ。そして僕と結婚して夫婦で会社を経営していくんだ。東さんの技術力とデユノア社の影響力があれば世界一の会社にできるよ」

「二人の提案はとても魅力的だけどそんな先の事まで考えちゃいないよ。今はみんなと楽しい学校生活を送れたらそれでいい」

「それって僕たちと結婚したくないって事？」

「結論を急ぐな。最終的にちゃんとみんなと結婚するよ。でもまだ高校生だしいろいろと問題が山積みだ」

「男性パイロットとの結婚なら法律上問題があつても、その子どもは良い研究対象になるからどこの国も結婚を許すんじゃないか？それにお前と自国の代表候補や代表が結婚すれば必然的に東博士もセットだ。表では否定していても俊葵を引き込みたい国は何処にもある」

「そりゃそうだけど……ともかく若さの勢いで結婚なんてしても良いことは無い。女子高

生と結婚して世間に叩かれるのも嫌だし。叩かれちゃったら……」

春分砲の一斉掃射的になってしまふ。『男性ISパイロットの正体!! 女子高生に手を出していた!!』なんて一面が数週間にわたって世間を騒がすことになるだろうな。実際、手を出してはいるんだけどそれとこれとは話が違う。ともかく世間は俺を怒らせないようにして欲しいね。無駄なカロリー消費をしたくないし。

「確かにそれは大変なことになりますね。きっと警察は死体の処理に困り果てる事でしょう」

「姉さんは何を言ってるんだ？ 何故、死体の話が持ち上がる？」

「俊葵様に悪いイメージを持たせるような出版社の人間はその血肉の一片に至るまでこの世から削除されるべきだからですよ、ラウラ。たとえ相手が無抵抗で善良な一市民であらうと俊葵様の事を悪く言うのであるならその時点で存在価値はゼロ。この世の中は基本的に俊葵様を中心に回っています。ですからこの世に存在するすべての物は俊葵様の為に存在すべきなのです」

「はは……僕たちなんかよりクロエの方が俊葵の為に何でもできるんだね。ちよつと羨ましいな」

「でも殺人は悪い事だぞ姉さん」

「ラウラ、言い方が悪かったですね。お掃除と言い換えましょう。人間大の生ごみの処

理です」

「いや、そうではなく…」

「いずれ分かります、ね」

「わ、分かった」

流石のラウラも取り付く島が無い。有無を言わせぬ物言いのクロエに臆して布団にくるまってしまった。

「あらら、寝ちゃったよ。僕も寝ようかな…それじゃ今日はありがとうね、おやすみ」

シャルルもラウラの隣の布団にくるまり目を閉じる。残された俺とクロエと本音の三人は特にする事もないので各々の部屋へ帰って行った。

……

…

「ナターシャの容体はどうだ？手足は無事に癒着したかな？」

「モチのロン、東さん特製の医療ポッドと俊くんの魔法が合体すれば死んだ人間すら数分で蘇生可能なあゝのだ」

ポッドの中を見ると顔色の良くなったナターシャがスヤスヤと寝息を立てている。愛機が暴走したと思ったら医療ポッドの中で寝ていた、ナターシャは死んだことにすら気付いていないだろう。だがそれで良い。俺が超能力者だなんて知っている人間は限

られていた方が良い。

「目が覚めたら死んだってこと以外の顛末を説明してやってくれ」

「俊くんはこんな時間にお出かけかい？」

「扉の前に箒とセシリアが来ている。それに箒に誕生日プレゼントを渡さないと」

「それじゃあ行つてらっさ〜い」

「おう」

扉を開けると予想通り箒とセシリアが待っていた。

「よう、こんな夜遅くに何か用か？」

「俊葵さんこそ、これからどちらへ？」

「扉の外から青春の香りが漂ってきたから出てきた。俺に用事だろ？場所を変えようか」

……

…

二人と一緒にいるのがみんなにバレると色々と面倒なので旅館の傍の森を抜けた先にあるこじんまりとした海岸に連れ出した。夏とはいえ夜は涼しい。

「こんな時に悪い。俊葵に伝えたいことがあつてな…勿論、一夏や鈴に悪いとは思う。でもこの機を逃したら一生後悔すると思うんだ」

「別に一夏達は関係ないだろう。どうせ無事だ。今頃、無人島でよろしくヤツてるだろうよ」

「やっていると何をやっていきますの？」

「そりゃあナニだろうな」

「？」

分からないなら分からなくてもいい。むしろあまり分かって欲しくない。

「それはそれとして話ってなんだ箒」

曖昧にした場の空気を元へ戻す。

「あ、ああ……今日はその……月が綺麗だな」

確かに箒の言うように今夜の月は満月、周りには邪魔な灯りがないので綺麗な月夜を満喫できる。だが箒が言いたいことはそう言った事ではない。

「箒さん、確かに今夜の満月は綺麗ですが今は違います」

セシリア……違うんだよ。

「箒、俺は死んでも構わない」

俺の答えを聞いたとたん箒は両手で顔を覆ってしまった。しかし指の隙間から紅い頬が見え隠れしているので嫌ではないようだ。

「俊葵さんまで、二人とも何をおっしゃっているのですか？」

そんな筈とは違い英国人のセシリアには難しかったようだ。

「昔前の英文学者が生徒に『《I love you》は《月が綺麗ですな》とでも訳しなさい。《我、君愛す》なんて日本人らしくない』って言ったんだ。まあ、諸説あるけどね」

「では死んでも構わないとはどういう意味でしょうか？」

「俺は君の為なら命なんていらないうって事だよ。日本人はシャイなんだ。だから遠回しに言ってるの」

「そういった大事な事はちゃんと口にしませんと…」

「そうだな、やつぱりちゃんと言った方が良いよね。次はセシリアの番だ。俺はセシリアが大好きだ。きっと世界で二番目にセシリアを愛している自信がある」

「二番ではありませんのね」

「あからさまに拗ねた態度をとってしまった。でも二番目と言ったのにはちゃんとした理由がある。」

「悪いなセシリア：いくら傲慢な俺だってセシリアの両親以上に愛してるなんて言えない。だってまだ俺がセシリアと過ごした時間以上の時間を両親は過ごしているから」

「では…」

「二人とも俺と一緒にいて欲しい。ずっとずっとこの先も：俺と生きて欲しい。俺が自

信を持って二人を世界で一番愛しているのは俺だと言いたいんだ」

二人の手を取って抱きしめる。二人の身体は夜風に当たっていたのに温かい。

「俺も二人が大好きだ」

「ツ／＼／／」

「あはは、二人とも真っ赤っかになってやんの」

「ば、馬鹿者／＼／あんな…あんな（ワナワナ）」

「ずるい…本当にズルいですわ」

抱きしめる力を少し緩めて箒と向き直る。

「誕生日おめでとう箒。ちゅ…」

セックスの時にするキスとは違うとても優しい、くちびるがほんの少し触れる程度のキスをした。でも箒の気持ち俺の中に溢れる。

「箒さんばかり…」

「しよすがないだろう、今日は箒の誕生日だ。ほら…セシリアも。ちゅ…」

「うふふ、これで私も俊葵さんのオンナなのですわ。もう感無量ですわ」

すごく嬉しいはずなのに二人を俺の戦争に巻き込む可能性があるかと思うとなんたか可哀想な事をしたと思う。

「ホントに良いのか？」

「今更そんな事を言わないでくれ。私は俊葵の事が好きなんだ」

隣でセシリアもうなずいている。

「もしかしたら俺のせいで辛い思いをするかもしれないぞ?」

「覚悟の上だ」

「人殺しを命令するかもしれないぞ」

「俊葵は私に人殺しをさせるのか?」

そんなに真つ直ぐな瞳で見ないでくれ。心の中を見られているようだ。

「いや…『今』はそんなことしない」

「『未来』ではそんなことするのか?」

「……する、俺の為に人を殺してもらおう、多分。黙っていたら仲違いの原因になりそうだから言っておこうか。俺の目的の一つは亡国企業の壊滅だ。その為なら人殺しだろうが大量虐殺だろうが平気でしてやるつもりだ」

「私たちにそのお手伝いをして欲しい…」と」

「俊葵、私は人殺しはしたくない。だが俊葵の邪魔もしない。それでは…だめか?」

「強制はしない。前線で戦うこと以外にも大事なことはたくさんある。でも確認してきたかったんだ。人殺しの俺と一緒に生きてくれるのかを」

二人への負い目から眼を逸らしてしまう。本音や簪たちに人殺しをさせる事を躊躇

しない訳じゃない。でも箒とセシリアは俺のオンナの中でも比較的まとも(?)な方だ。だからこんな闇の世界に足を突っ込んでほしくない。

「答えは決まっている。人殺しは……その、できないかもしれない。でも私は俊葵と生きたい!!」

「私も俊葵さんと生きたいですわ。わ、私はエリートですから、人殺しも……覚悟ができれば……その、できるかもしれない。もう……私を一人にしないでください」

「もう何も言わない。絶対に疑ったりしないよ。箒もセシリアも絶対に俺が幸せにする。だから……俺を一人にしないでくれ」

もう一度俺は二人を強く抱きしめた。

71話

流石に女子高生2人と夜遅くに森の中というのは事案になりかねないので2人は先に旅館へ帰つてもらつた。今は一人で崖の上に座つて潮風とタバコを楽しんでいる。鼻につくこの独特の匂いもまた癖になりそうだ。しかしこの匂いはタバコの匂いだけじゃない。

「隠れていないで出て来たらどうだ？姿は隠せてもその殺気だけは隠せていないぞ」

振り返ると木の陰からフルフェイスのメツトを着けた女性が現れた。ISスーツを着ているので体格がもろに分かる。ぷりぷりのヒップにくびれたウエスト、そして豊満なバスト…体格だけなら束そつくりだ。

「福音の暴走はあんたの仕業か？」

「お前には関係ない。死んでもらおうか…」

「へへ、人気者は辛いね。でも俺は殺されないよ」

「それは私が決める事だ」

そういうとI Sを呼び出すが両手を覆ったところでI Sの装着は止まった。いや、彼女は自分で装着を止めている。

「私の恋人に手を出すとは言い度胸だな…私の刀がお前の首をはねるのが早いか、それともお前がI Sを装着するのが早いか…。勝負しても良いがこの刀はI Sのシールドだろうが切り裂くぞ」

かなり怒気を含んだ声色で千冬さんは彼女の首筋に刀を押し付けていた。

「だから言ったでしょう。俺は殺せないって」

「……そうか、どうしてお前は……いや、殺したければ殺せ。死んだところで後悔はない」

「そうか…なら罪を償え」

千冬さんは本気で首をはねそうだったので少しのあいだ動きを止める事にした。なぜだか彼女には死んでほしくないよ、そう思ったからだ。

「嘘を言っちゃあいけないよ。君にはまだまだする事があるはずだ」

「う…ぐう…俊葵、何をする」

「ごめんなさい、千冬さん。その人が生きていた方が俺も敵ができて戦う口実ができてくれます。いつでも俺の命を狙っていいよ。でも強いヤツをけしかけてね。弱い奴らを虐殺するのも良いけど今回みたいに強い相手を倒すたびに自分の強さを再確認できる

から」

「お前は……どこまでも人を見下す奴だ」

「そりゃあ俺はお前たちよりも上の存在なのだから仕様がなない。文句があるなら俺を殺して証明しろ」

「ちっ……お前のどこが良いのかさっぱりだ。風にしてもスコールにしても……ではまた会おう。今度こそ絶対に殺してやる」

その言葉を最後に彼女は透明化して風の音と共に何処かへ去っていった。彼女の気配が完全に消えたのを確認してから千冬さんの金縛りを解く。

「なぜ生かした？戦う理由が欲しいなんて嘘だろう」

「あながち嘘じゃないよ？確かにアメリカに喧嘩吹っ掛けたしアレが原因で戦争になっただって構いやしない。けど今回はそうじゃあない、合法的に他国に侵入して破壊行動がしたいんだよ」

「まだお前の計画とやらはスタートしていないのだろう。だったら大人しくしているのが良いんじゃないのか」

「はは、千冬さんには嘘がつけなないなあ。本音を言うとな、あの人から良い匂いがしたんですよ」

「香水なんて臭わなかったぞ？」

「なんていうか雰囲気は凄く良かったんです。それこそ達してしまいうほどに最高の匂いでした。彼女は俺のモノにするって決めました。きっと彼女なら最高の相棒になってくれるかもしれません」

「私や東ではアイツに劣ると…」

あ…落ち込んだじゃった。無理もないか、ポツと出の女に彼氏の興味が逸れたら嫌だよね。

「心の支え的な意味じゃなくて俺の駒として動いてくれる部下としてです。彼女の心は何処までも純粹に染まりますよ。俺の部下になれば誰よりも忠実に命令をこなす犬になってくれる。間違いない…」

「クロエがいるではないか。あいつでは役不足か？」

「クロエの心は確かに純粹ですが単色ではありません。俺と東の色が混ざっています」

「東やシャルロット、ラウラはどうだ？」

「俺が危険な任務を頼むのを見たいですか？」

「箒やセシリアは如何するつもりだ？あいつらにも殺しを頼むとさつき言っていた」

「やむを得ない場合には殺しだつて命じます。でも基本は俺が殺しますよ。兎にも角にも彼女が欲しいんです。どこまでも俺に忠実で駒や犬のように扱える女が」

「ああ言えばこう言う。俊葵…まったく、お前がそう言うならそれで良い。だが私の事

もちゃんと見てくれよ…寂しいのは嫌だ／＼／＼それからその顔は止めろ…まるで悪魔だぞ」

拡張領域から鏡を取り出して顔を見ると邪悪に歪んだイケメンが一人いた。

「うん、イケメンですね」

「まったく…」

……

…

「ん…うう…」

「目、覚めたみたいね。気分はどう？」

身体中がズキズキする。まるで風邪をひいたみたいだ。

「ねえ、聞いているの？もしかしてどこか悪い？」

鈴の声が聞こえる。…そうか、俺たちは福音に攻撃されて…。

「はあ…顔と性格以外は悪いみたいね。特に頭が…」

「はは、返す言葉もないよ」

「起きているならさっさと返事しなさいよ。心配したじゃない」

「心配してくれたんだ？」

「心配するわよ!!でも良かった…白式のおかげで助かったんだからお礼くらい言ってお

きなさい」

待機状態の白式を見ると形が変わっていた。大きなガントレットからシンプルなブレズレットになっている。

「へへ、また助けられたな。ありがとう白式」

「そうそう、あたしも甲龍に助けられたし…って言いたいけれど違うわ。あんたの白式、セカンドシフトしてるわよ」

「本当か!？」

「ええ、どういう訳か私たちが爆風に巻き込まれる寸前にあんたの白式が形を変えて守ってくれたのよ。だから…その、ありがとう」

俺の白式がセカンドシフト…そうまでして俺と鈴を守ってくれたのか。ありがとう白式、なんてお礼を言っているのか分からないよ。

「確かに白式には本当にありがとうだな」

「ま、助けてくれたまでは良かったけどこれからどうするの？あたしの甲龍は故障して呼び出せないし。でもサバイバルキットだけはなんとか取り出せたけどね」

「俺の方は…」

白式を呼び出そうとするが反応が無い。セカンドシフトをしてもダメージは治らないのかな。ISについてはまだまだ素人だし学校に帰ったら東さんに訊いてみよう。

「呼び出せないや」

「そんな都合の良い話はない…かあ。あたしのサバイバルキットに入ってる食料と水じゃあもって一日ね」

「希望的観測はしたくないけど明日辺り俊葵が探しに来てくれないかな」

正直、不安でいっぱいだ。でも俺が気絶している間、鈴は今の俺以上に不安だっただろう。なら少しでも鈴が安心できるように俺がしっかりしなくちゃ。

「俊葵ならすぐにでも私たちを見つけてくれるわよ。東さんだっているんだし」

「それもそうだな。きつと俺たちを見つけてくれるさ。見つけてくれなかったら…：…：それとときや俺たち二人がこの島のアダムとイブだな」

「バカ…：…（でもそうなら少しは嬉しいかも）

…

…

「襲撃を受けたのは本当ですか俊葵くん!？」

「別に死んでないから良いでしょう。それよりもイイ女だったなあ。引き締まったウエスト、豊満で柔らかそうなバストとヒップ、まるでありやあ東の分身だよ」

「ええ〜そんな女より東さんの方がスタイル良いよ〜」

グイグイと腕に胸を押し付けてアピールしてくる。

「ごめんごめん、束のスタイルも最高だ」

「お前の最高は一体どこにあるのだ…」

俺の性格を知っている千冬さんはあきれ顔だ。確かに千冬さんの言う通り、俺の最高は何処にあるのか曖昧だけど…。

「俺が好きになった人が全て最高です。束にも千冬さんにも真耶にもそれぞれの良さが有ります。だからこうして優劣をつけることなく愛せるんです」

椅子に座っている俺の後ろに真耶、正面に千冬さん、右隣に束が座っている。そして胸を押し当てたりマッサージをしたりと任務で疲れた俺の身体を癒してくれている。

「こんな贅沢はどここの風俗に行ってもできないんだからねえ」

束の押しが少し強くなった。右腕に感じる束の体温が心地良い。

それに対抗してか千冬さんの愛撫も激しさを増した。

でもあまり嬉しくない。確かに気持ち良いのだが…なんか、こう…違う。決定的な何かが違う。

「ごめん、ちよつと外を散歩してくる」

「もう夜も更けた。就寝時間もとつくに過ぎているから外に出るのはよせ。さつき襲撃されたのをもう忘れたのか？」

「ほんの少しで良いんです。外の空気を吸って落ち着きたい」

「ええ、夜はこれからののに落ち着いてどうするのさ」

「そうです。せめて楽しい思い出を作りましょう」

三人の制止を無視して部屋を出る。少し罪悪感が残ったが追いかけてこないの何かを察してくれたのか、それとも俺のわがままに慣れたのか。ともかく俺の足は本音のいる部屋に向いていた。

……

…

本音が宿泊している部屋のドアを開けるとまだ明かりがついていた。課外授業の定番ともいえる恋バナやU・N・Oでもしているのだろう。しかしドアの開く音に気付いたのか、部屋の電気が蛍光灯から豆球に変わった。

「安心しろ、先生じゃなくて俺だ。本音に用事があつて来たんだけどまだ起きてるか？」
「なにになに、夜這いに来たの？」

「残念ながらそうじゃあない。ちよつとついて来てくれ」

羨ましそうに見つめるルームメイトを尻目に俺たちは既に人のいなくなった露天風呂へ行った。

「エッチがしたいならちゃんと言ってくれればいいのに」

脱衣所に着くや否や俺は本音の胸に顔をうずめた。

「ごめん……ごめん……」

「……………」

自然と目から大量の涙が出る。東はそんな俺を優しく見下ろし頭を撫でてくれた。

「俺が強ければみんな傷つかずにすんだんだ。俺が弱いせいでみんなが苦しい思いをした……夏も鈴も生死不明だ。二人が死んだら俺は皆にどんな顔をすればいい？何が専用機持ちだ……何が男性パイロットだ……俺は何もできないクズじゃないか……許してくれ、許してくれよお」

「大丈夫だよ、大丈夫だから泣いても良いんだよ」

「うう……情けない……ホントはこんな姿誰にも見せたくないんだ。俺は強くなくちゃいけないんだ。誰よりも何よりも」

「じゃあレアマツチーゲットだぜい。私はね、ドジだしのほほんとしてるし俊くんの役に立てるか不安だったんだよ。もし私にだけそんな姿を見せてくれるなら嬉しいな」

「ダメなんだ……俺はみんなに母性を求めている。それじゃあダメなんだよ。でも求めてしまうんだ。うう……うう……ぐす……求めてしまったらみんなをオンナとして見れなくなってしまう」

俺はこの世界に来てから何不自由のない生活を送っている。でも誰もが持っているモノに焦がれていた。お金でも力でもなく、俺は家族愛を欲していた。この世界に俺の

居場所はない。だからこそ力で、魅力で、カラダでみんなを繋ぎとめるのに必死になっていた。

「怖いんだよ…どんなに強くなっても、どんなにみんなに愛されても足りない。どうしようもなく怖いんだ。ごめんなさい…ごめんなさい」

「俊くんは人の心が見えるんでしょ？ だったら私の心を見て。きつとそれで安心するか」

「止めてくれ!! それはしないって一番最初に誓ったんだ。みんなが俺を信用してくれて俺がみんなを信用する。それなのに俺は皆に嫌われないか不安になって…」

顔を上げた瞬間に俺の潜在意識が本音の心を見てしまう。本音の心の泉から湧き出る水にはみんなの顔が浮かんで消えてを繰り返して止まることを知らない。そして泉の横には俺を中心にみんなと一緒に写った写真がある。そして俺と本音が二人きりで写ったモノは水面にもどこにもない。

「どうして本音は…どうして…」

「えへへ、私は俊くんが幸せなのが一番幸せなの。もし私が俊くんを独り占めしちゃったら、俊くんは他の女の子と遊ばなくて悲しくなっちゃう」

「良かった。俺、本音の大好きで良がつだよお〜〜〜」

「ちゅ〜〜〜♥」

頭を両手でつかまれ熱いフレンチ・キスをされてしまった。本音の舌が俺の口の中を縦横無尽に駆け回る。

互いの粘液を貪るような激しいキスはしばらく続いた。

「私だけじゃなくてみんなも同じ気持だよ」

「そうか…そりゃあ嬉しい。でもこの先も俺は事あるごとに泣きつくと思う。落ち込んでみんなに迷惑をかけると思う」

「でもそれって私たちを信用してくれている証拠だよ」

「その通り!!」

ガラツと開けられた扉の向こうには束を筆頭に松崎ハーレムのメンバーが勢ぞろいしていた。

「今の話聞いていたのか?盗み聞きは感心しないな」

ク「俊葵様!!私は俊葵様の為に何でもいたします。どんな俊葵様でもお慕い申し上げます。ですからどこへも行かないでくださいませ」

東「そうだよ俊くん。ほら、折角みんな揃ったんだし皆で俊くんを囲もう。俊くんは私たちをお母さんと呼んでもいいんだよ」

シャ「僕たちみんなで俊葵のママンかあ…うん、凄く興奮する」

「お前ら……こうなったらどうにでもなっちゃまえ」

みんなの身体に己をうずめて体温と香りを楽しむ。深刻な顔して悩んでいた自分があほらしい。きつと一夏も鈴も生きている。絶対に生きていなきやダメなんだ。俺の物語でバッドな出来事が起きてたまるか。

「血の繋がりが無くても私たちの黒ウサギ部隊は家族になれた。だから俊葵、お前も家族に慣れるのだぞ」

みんなが俺を支えてくれる。これから先も俺は泣く、確実に。落ち込んでみんなに迷惑をかける。けどみんなは俺の事を裏切ったりしない。みんなが俺を想い、俺がみんなを想う。家族って言うのはそんな簡単なモノだったのかもしれない。

71. 5話

俺は一夏達が遭難した海域にある無人島を文字通り駆け回っていた。ISの反応が無いのできつと白式も甲龍も壊れているのだろう。人間は水も食料もなしで数日は生きられる：しかし外傷を負った極限状態のはず。

「式神たちは何をやっているんだ」

まだ亡国企業がこの海域にいる事も考慮して宇宙と嵐、そして新型ISの『ガンバスター』をそれぞれ5機ずつ式神に装備させ一夏達を探し回っている。

もしかしてもう死んでしまっているのか：いや、そんなはずはない。俺の占いがそう言っているんだ。俺の占いの的中率は100%、預言は絶対です。お目覚めテレビの占いカウントダウンよりもよく当たる。

「勝手にくたばりやがったら地獄の果てまで追いかけて金玉引きちぎってファックしてやる」

『俊葵様、一夏様を保護いたしました』

速いな、おい。俺はまだまだ時間かかると思っていたのによお。

「何処で見つかった？」

『俊葵様が探しに出た後で東様が海岸から数百メートル地点に浮かぶ無人島で発見いたしました。狼煙が上がっていたのですぐに見つかった模様です』

「マジかよ…」

式神たちを全て札に戻して目を開ける。左右から繰り出させる突きと蹴りを上手くいなしながら半歩下がりがり体勢を立て直した。

「一夏は見つかったようですよ、千冬さん」

「そうか、お前が見つけたのか？」

「束が見つけたみたいです」

15体全ての式神を札に戻したので15体分の経験が一気に身体と脳を駆け巡る。様々な匂い、感触、味、景色が記憶として頭の中に流れ込んで来た。

「隙ありよ！」

楯無さんが千冬さんを入れ替わりで俺に攻撃を仕掛けてくる。見様見真似の拳法だけど圧倒的動体視力と筋力を駆使すればなんちゃって拳法でも十分強い。

攻撃を受け流しては反撃、楯無さんも先を読み俺の攻撃を受け流し反撃。ずっとこんな感じで変化が無い。達人同士の戦いは短いか長いかのどちらだが今回は長いようだ

な。

「一夏も戻つて来るようですしそろそろ止めにはませんか？」

「そうね、早朝からずっと戦いつぱなしで疲れたわ」

「私もだ。いきなり呼び出されたかと思つたら訓練してくれなどと…昨日の今日で、まったく。少しは休んだらどうだ？」

「休むわけにはいかないんですよ。俺はもつと強くないと…」

「これ以上強くなられたら私たちの立つ瀬がない。私たちを頼つてもいいんだぞ」
「そうそう、もつと頼つて欲しいわ」

左右から優しく抱き着かれては「はい」と答えざるを得ない。

「そうだな…頼るもの大事だよな。よし早速頼っちゃおうかな」

「何かな何かな？お姉さんに言ってみなさあ〜〜い」

「マツサージをしてくれないか？昨日から戦い通して疲れちゃって疲れちゃって」

「千冬さんもお願ひします」

「ふっ…私も今日は山田君に頼るとするか」

俺は二人にすり寄り寄られながら旅館へと戻った。

…

…

「山田せんせ〜、織斑先生と俊葵さんは何処ですか？もしかして昨日なにかあったんですか？」

「二人は昨日の事で少し用事があるみたいです。詳細は説明できませんがなにも問題ありません。さあ、皆さん手を動かしてください。今日は忙しいですよ」

各々にI Sの試作武装を展開させ昨日できなかった訓練を再開させる。みんなてきぱきと行動してくれるのでこの調子だと今日中に終わり、夜にはバーベキューもできるかもしれない。今年の臨海学校はトラブルで延長してしまつたし生徒たちにもお詫びとして少なからずサービスしても良いと思う。

「それよりも…職権乱用はいただけませんよ。織斑先生」

朝ご飯を摂り試作実験の準備に取り掛かろうとしていたら、「悪いが私は俊葵に用事がある。午前の授業は山田くん一人で行つてくれ」と急に言われ一人でやる羽目に…。私だつて俊葵さんとイチチャイチャしたいのに。

「はあ…」

「どうかしましたか山田先生」

「いえ、何でもありません。早く終わらせたらそれだけ自由時間も増えます。早く終わらせて遊びましょう」

「やつた〜」

「まややん分かってるう〜」

こうなったら早く授業を切り上げて私も俊葵さんとイチャイチャします。昨日のアレだけじゃあ全然足りません。

……

…

千冬さんと刀奈にマツサージをしてもらいながら空中に投影しているモニターを使いよつとした「仕事」をかたす。

「マツサージをして欲しいとか言っておきながら私たちは無視か？」

「いや、アメリカがちゃんと報酬を払ってくれるそうなんですよ。大和のサルベージも日本政府と協力して行うそうです」

正直なところ喧嘩腰での交渉だったのでこうして報酬がしっかりと支払われることに関して驚きを隠せない。下心は少なからずあるのだろうが法外すぎる報酬を良くもまあ払う気になったものだ。

「それは良かったわね。でも大和のサルベージは批判的な人もいるわよ？」

「それは分かっているよ。でも俺は日本を守護った魂をこの目で見たいんです」

「本音は何だ？」

「戦艦大和を隅々まで調べ上げて超大和級戦艦『紀伊』を建造します。そして二番艦、三

番艦と量産して世界最強の大艦隊を作ります」

「空母は作らないの?」

「作ったところでパイロットが必要だ。それならみんなのISと戦艦をリンクさせ、一人に一隻ずつ戦艦を任せただ方が良い。」

いくら戦闘機が攻めて来ようと撃たれる前に撃ち落としてしまえば問題ない。ミサイルや銃弾だつて縮退炉を動力にすれば直撃したつて傷一つつかないイナ―シャルキャンセラーを発生させることができる。

「設計は出来てもそれを作る材料や場所はどうするつもりだ?」

「束が所有している島にドックが有ります。資材だつていくらでも用意できますよ。海の底には人類がまだ見ぬ資材に溢れています。俺ならそれらを発掘できる」

「人材はどうするつもり?」

「俺を数百人に分身させれば何の問題もないよ。資材の精錬、加工、組み立て、全て俺だけで出来る事が出来ます。必要なのは設計図と時間だけです」

精錬するための熱も、熱した金属の加工も、組み立ても超能力さえあれば何でもできる。

「俺は何でもできる。ただ面倒臭がつてやらないだけです」

モニターを消して千冬さんと刀奈のおっぱいに顔を埋める。千冬さんからはミント

の香り、刀奈からは甘い香りがした。

「甘えん坊だな」

「ふふ、可愛いわ」

どうも甘えてしまう。でも仕方ないだろう…みんなが俺に頼ってくれと言うのだから。嗚呼、生まれてきてよかった。

……

…

旅館の裏手にある森

「昨日ぶりかな、織斑マドカ」

「何故私がここに居ると分かった？」

「そりゃあ俺が知っていたからさ」

お道化て見せると懐から銃を取り出して俺に向けた。それと同時に俺もS A Aを彼女に向ける。彼女のソレとは違い戦術的優位性なんてありもしないぶし銀の装飾だらけ。左手のS A Aには青龍、右手のS A Aには白虎が彫られている。

「震えているぞ」

「クツ…私だってお前くらい」

「どうして俺にそんな拘る？」

「お前を殺すことが私の仕事だからだ。任務はこなさなければいけない。それは雨の日に傘をさすくらい当たり前な事だ」

「お前は自由じゃないな」

「私は生まれた時から自由なもんか。私は闘い続ける事を運命づけられているんだ」
眉間にしわを寄せて俺を睨みつける。

「雨の中、傘をささずに踊る人がいても良い。自由とはそういうものだ。俺の元へ来な
いか?」

「なんだと!」

「お前が欲しい。お前を抱かせてくれ」

「んな…ななな（わなわな）」

ワナワナ症候群かな?

「バカを言うな!! 私は敵だぞ!!」

「それがどうした。俺がお前を自由にしてやると言ったんだ。お前の好きな千冬さんにも会わせてやるぞ?」

千冬さんの名前を出すと目の色を変えた。やっぱり千冬さんに何かしら思いがある
だろうか。

「ただし千冬さんにどんな思いがあるのか教えて欲しいな。さあ…教えてくれよ」

マドカの目を見ながら心の底に語り掛ける。優しく、ゆっくり、全てを受け入れる声でマドカの中に入った。

「私は出来損ないなんだ。誰からも愛されていない。でも彼らは私のスキルを必要してくれた。だから私は従ったよ。……姉妹は全て処分されたけど私は生き残れた。本当は千冬姉さんに愛して欲しかったんだ。家族が欲しかったんだ……」

マドカも俺やクロエと同じだったんだな。ただで逢えた人が違うだけ。

「マドカ、俺の計画の一部になって欲しい。だけど今は時期じゃあない。また会おう……お前はもう俺のモノだ」

マドカの足元に俺の連絡先を書いた紙きれを一枚残して影の中に潜った。

……

…

マドカとの会合を終えて部屋に備え付けられている机の陰から部屋へと戻った。束は姿を現した俺に驚いた様子もなくタイプライター型のキーボードをカタカタと鳴らしている。レトロな感じが何とも言えない。

「マドカに会って来たよ。彼女には俺の連絡先を渡しておいた」

「そう……なんだか複雑な気持ちだな」

「彼女は居場所が欲しかっただけなんだよ。俺やクロエと一緒にようね。だから俺は

居場所を提供してやることにした」

千冬さんの方を見ると複雑な表情をしている。

「私の不始末が引き起こしたことだから決着は私がつけたかったのだがな。俊葵、お前がマドカを受け入れるというのなら俺はそれに従うだけだ。せめて幸せにしてやつてくれ」

「何言ってるんですか？俺たち全員でみんなを幸せにするんです。一人はみんなの為にみんなは一人の為に、ですよ。千冬さんとマドカの姉妹丼も食べたいですしお寿司」

「ふっ…変態が」

しかし千冬さんの表情は柔らかく憑き物が落ちたようだ。

「俊葵、お前は凄いな。何でもできてしまう。私がずっと悩んでいたことが馬鹿みたいだ。俊葵なら世界を平和にできるかもな」

「それが俺の最終目的ですから。素晴らしい人間が統治する平和な世界。誰もが幸せになれる世界」

「俊くんの作る世界ならなんだって素敵だよ」

「世界中の人間が笑顔に暮らせる世界を作ろう。それが俺たちの目標だ」

……

…

「たまに俺が誰だか分からなくなるよ。分身も多用するとこんな弊害があったんだな」
「なにかおつしやいましたか？」

「何でもねえよ」

俺の日本語が分からなかったのか聞き返してきたので適当に流す。

今は国際空港からアメリカ大使館に向かうリムジンにくそツタレの交渉人と乗っている。今回の報酬を届けに来たとかなんとか英語で宣った。俺と話したいのなら日本語を話せってんだ。

「まさか臨海学校中でお忙しいなかご足労いただけのなんて」

「ああ、そうか。あんたは日本語を話せるんだったな。となりの白豚にも日本語で話せと言ってくれないか」

「と、俊葵さん、あなたがいくらISのパイロットで今回の英雄だからと言ってその発言はよした方が…」

「そうだな…汚い言葉を使うのは良そう」

まだ時期ではない

「悪かった。拙い英語だが頑張るよ」

……

…

その後、大使館などでかいアタツシユケースを数個受け取りナターシャの身柄をアメリカ側に受け渡した。勿論、銀の福音には監視システムを上手く隠してある。

「まさか本当に払うなんてね」

「アメリカ政府も日本と：いや、貴方とより良い関係を築きたいものでね」

「あんたらが興味あるのはコイツだろ」

スマホのトップ画を見せると目の色を変えた。やっぱりな。

「東博士とあなたはどのような御関係で？」

「ビジネスパートナーみたいなものさ。東は俺の秘密を知りたがっている。俺も東の作るISには興味がある。お前らはそのおこぼれを貰おうとしているな」

「その為にこちらを故意にさしていただきました」

三人の男がカートを押してきた。車輪の音から察するに何か重い物を乗せているのだろう。荷物を覆っているカバーを外して驚いた。

「これはお近づきの印に。ほんの気持ちです。これであなたを我々側にいて欲しいとは考えていません」

「そう、なら気兼ねなくコイツを受け取れるな。その言葉通り俺は西にも東にも付かない。俺が付くのは最高にイカした女がいるとこだ。それよりどうして俺の好み割れてんだ？」

「独自の情報網とだけお伝えしておきましょう」

「壁に耳あり障子に目あり、片と背中に妖精さんってか。世界平和の為に俺が出動するような事件が起きない事を祈ってるよ」

カートの上に乗っている純金と白金の延べ棒を拡張領域の中にしまってから大使館を出る。その際に中指立ててペロを出しているところを見た奴はいない。

「待って、まだお礼を言っていなかったわね」

呼び止められたので振り返るとナターシャがいた。金の為にやったことだ。お礼を言われる筋合いはない。でもナターシャにとつて良い人であることに不利益はない。

「ありがとう、この子もきつと喜んでるわ」

「そりやあ良かった。ISは生きているんだ。可愛がつてくれよ」

「詩的表現ね。そういうのは大好きよ、ちゅ♥あなたはまた会いたいわ」

俺もだよ。

くちびるに残る彼女のぬくもりを確かめながら誰にも見られないところで札に戻った。

7 2 話

臨海学校が終わり I S 学園の生徒には夏休みという一大イベントがやって来た。高校生の夏は人生で 1、2 を争う重要な時期なのでみんな目の色を変えている。

俺も前世で高校の夏休みを謳歌して…謳歌した…謳歌したかなあ。補習、模試、確認テスト、集団自習、進学校に入学したから休みはお盆くらいだった気がする。そう考えたら夏休みを楽しんでいなかったのかも。

「くそ…しかもなんで I S 学園の課題はこんなに多いんだよ。補習や模試が無いのはありがたいけどこれじゃあ休みの殆どが宿題で埋まっちゃう」

机の上に置かれた課題の山は悪態をついても睨みつけても減りはしない。減るのは時間とやる気だけ。

「俊葵はこんな問題すぐに解けるよ。だって高校一年生の内容だよ？」

「俺の知っている高校生は一年生の時点でこんな内容やらねえよ。ああ…この学校に入って授業を受けた時から薄々感じていたけど他の高校よりも授業スピードが半端ねえ」

「世界一倍率の高い学校だから仕方ないよ。偏差値も世界で上から数えた方が早い学校だし」

「くそ…そうだ!! クロエ、宿題終わったら見せてくれ。日記と自由研究以外なら写したってバレねえだろ」

「そうおっしやると思っていましたのでこちらにご用意させていただきました。日記以外はすべて終わっております」

「もう、クロエは俊葵に甘すぎ。宿題はやる事に意義があるんだから。俊葵も笑顔で受け取らない。このままじゃ夏休み明けのテストで酷い点を取るようになるよ」

そう言われた俺はクリアファイルからさつき返された期末テストの答案用紙をシャルルに渡す。これを見ればシャルルも納得してくれるだろう。

「凄い…俊葵って頭も良かったんだ」

「流石は俊葵様です。全教科95点以上とは…」

そりゃあ大学まで出たんだから高校一年生の一学期の内容につまずいてはいてられない。難しい問題はいくらあつたけど授業はちゃんと聞いていたしテスト範囲も簪と勉強したので良い点は採れた。

「そんなこと言うシャルルはどうなんだ…つと」

シャルルの手元から答案用紙を奪い取って見る。

「あ、ちよつと僕の答案!!」

一通り目を通してからシャルルへ返す。

「シャルルもなかなか良い点とつてるじゃん。平均点よりも高いし」

「うう、だつてもつと良い点数を採れると思つていたんだもん。こうなつたらクロエも点数教えてよ」

「ええ、どうぞ」

俺とシャルルに見えるように答案用紙を見せる。どの教科も丸ばかりでバツが見当たらない。

「クロエ…もしかして満点採つたのか?」

「束様より様々な知識をいただいておりますので」

束の授業を受けていたらこんなな良い点数を採れるのか…。いや、クロエは元々才能があつたのかもしれない。それと努力が相まって開花したのだろうな。

「すげえ…じゃあこの宿題も間違いはないわけだ。それじゃ俺は今から写す作業に取り掛かるから」

クロエから課題の冊子を受け取り教室を出る。学生寮へ戻ろうかと考えたが万が一にでも千冬さんにこの事がバレてはいけくない。色々と考えた結果、地下の自室に行く事にした。

……

…

地下には俺の部屋がいくらかある。洋室、和室、ラブホ風、射撃練習所、開発室、拷問室、エトセトラ、エトセトラ…。

「写す作業も大変だなあ…」

「ちーちゃんも意地悪だね。俊くん書類上では大学を卒業しているのにさ」

この世界での身分証明は全て束によって行われている。俺の親族、出生は限りなくグレーにしてあるけれど。本格的に調べれば分かってくることだろうけれど、そんな事をしても俺が異世界人だなんて発想は誰にもできない。万が一にでも俺の正体にたどり着いた奴には死んでもらうけどな。

「前世では大学をちやんと出たんだぞ。私立だったけど…」

「公立も私立も関係ないよ。大学は何を学ぶかじゃなくて何をするかだからね。自主的に活動できたのならどんな学校だって一流大学だよ」

「それこのあいだテレビでどつかのお偉い先生様が言っていた言葉だね」

「ふん、あんなへなちよこ先生とは比べ物にならないくらいのが天才束さんにはそんなの関係ないよ〜だ」

ふくれっ面になる束は可愛い、ふくれっ面になる束は可愛い。

「だいたいこんな宿題やる必要はないよ。ちーちゃんに訴えてくる」

「誰を訴えるって?」

「あ、ちーちゃんどこから入って来たの。ううん、そんな事より酷いや。どうして俊くんにこんな宿題を出すのさ」

気が付くと束の後ろに般若がいた。

「プライベートと学業は別物だ」

「ぶーぶーちーちゃんなんて大嫌い〜。ねえねえ俊くんもそうでしょう〜」

「そんな簡単に嫌いなんて言えないよ。俺は千冬さんのこと大好きですよ。勿論、束の事も」

「ふん、お世辞を言っても無駄だ。教師だから生徒には平等に接しないとイケない。…だが終業式も終わり就業時間も終了。偶々、偶然、手元からこんなものが落ちたとしても管轄外、仕様の無い事だ」

千冬さんの手元から落ちたものを手に取ってみるとそれは夏休みの宿題の解答用紙だった。

「教師がこんな事して良いんですか?」

「課題はする事に意義がある…だがお前はそんなこと言っても意味ないだろう。前世でしっかりと働いたお前にはこんな課題に意味はない」

「確かにな。課題つてのは学習の意味もあるが、真面目に何かをするって意味もある。千冬さんの言う通り、真面目で最強でイケメンな俺には課題なんて必要ないですね」

「むふふう〜ちーちゃんも俊くんに甘いじゃない。やつぱりちーちゃん大好き〜♡」

「まったく…」

心変わりの激しい奴だ。千冬さんもこんなこと思っているんだろうな。その証拠に肩をすくませてやれやれといった感じだ。

…

…

分身を駆使して宿題を終わらせた。10人に分身したらこんなにとくさんあつた宿題も数時間で終わってしまう回答を貰っているわけだから一人でやったとしても数日で終わるのだけれど夏休み前に終わらせてずっと遊んでいたい。

分身を札に戻して宿題をクリアファイルに綴じ机の棚に立て掛けておく。これで夏休みの宿題は終了、あとはこれを提出するだけだ。

「お疲れ様です。俊葵様」

「おう、これで遊び放題だぜ」

「もう夜も更けています。お風呂の用意はできていますが如何いたしましたしょう?」

お風呂に入って寝るのか、それともそのまま寝るのか。普通の解釈はそうだがクロエは尋ねているのはそうじゃないようだ。

俺のデザインしたヴィクトリア朝のメイド服に身を包んでいる。普段は市販されている奴だが「特別な時」だけはその服を着るように言い聞かせていた。

「俊葵様…誠に申し訳ないのですが一つお願いがあります。どうか聞き入れて頂けないでしょうか？」

恭しくこうべを垂れスカートの端を摘まむ仕草には気品が込められている。

「なんだ？言ってみろ」

「もし…もしも夜伽がお決まりにならないのでしたら今宵のお相手をさせて欲しゅうございます」

クロエは頭をあげずに下を向いたまま震えている。きつと断られるのが怖いのだろう。なら少し安心させてやらないと。

「わざわざ夜伽を頼む手間が省けたよ。流石はクロエだ。俺の気持ちをいち早く察知して行動するなんて。これからはクロエに足を向けて寝れないな」

安心させるつもりで言った言葉なのにクロエの顔色は芳しくない。

「お褒めに与り感謝の極みにございます。しかし足を向けて寝れないとは俊葵様も意地が悪うございます。その様な事を言われてはこれから椋鳥、二つ巴での体位で行為をす

る事に委縮してしまいます。俊葵様は私とそんな体位でする事が嫌いなのですか？それでしたら今までは私のわがままを我慢して…ああ、誠にお詫びのしようもございません」

「もうクロエに失礼な事は出来ないって意味だよ。さあ、こつちへおいで」

「まだシャワーを浴びていないので汗臭いです」

「構うもんか…」

無理やりクロエを抱きすくめ首筋の匂いを楽しむ。クロエは汗臭いと言ったがそんなことは無い。何とも言えない良い香りがする。脳髓の最奥をズドンと刺激する危ない香りだ。L a v e — P o t i o n . N O 9 よりも効くぜ。

「クロエ…クロエ…」

きつと女の香りつてのは世界中のどんな麻薬よりも男を刺激してくれる。

「どうぞ…私のモノは全て俊葵様のモノです。さあ…」

押し倒されながらもスカートの端を持ち上げてショーツが見えるようにしてくれた。純白でありながら細部まで織られた装飾は純血のショーツを妖艶な遊女に見せる。それも自分だけを愛し尽くしてくれる最高の遊女だ。

「こんな最高の夏休みは初めてだぜ」

……

…
夏休み初めの日は熱帯夜よりも熱く甘い夜を過ごした。しかしその朝はとてもすつきりしていた。色んな意味で。

寝起きも清々しくとても気分が良い。時計を見ると、その針は7時前を示していた。休みの日に限って早起きになるのは今生でも変わらないようだ。

布団を剥いでベッドから降りてクーラーの電源を付けようとしてリモコンを探したが既に電源は付いている。備え付きのキッチンから音がするので誰かがクーラーをつけてくれたのだろう。それに朝食まで準備してくれている。

「お早う御座います俊葵様、早いお目覚めでございますね。昨晚はとても熱い夜を過ごしましたがお身体に不調などはございませんか？」

ああ…そう。昨日の今日だ、クロエがいるのは当たり前。寝ぼけて忘れてしまっていたよ。

「朝勃ちを不調と言うなら俺は絶不調だ」

「ではすぐに私をお使いくださいませ」

エプロンを外し、ショーツを脱いで寝転んでいる俺の元へ歩みを進めた。

「たまにはエロアアニメでも見ながら自分で抜くよ。今どきのエロアアニメって作画とか声優が良くて最高なんだぜ？」

「そう…ですか。でしたらオナホール代わりにフェラチオなどは如何でしょう。俊葵様は天井に備え付けられたモニターでエロアニメをご覧になり、その間に私がご奉仕させていただきます」

「なにその新しいプレイ。堪らないんだけど」

さつそく俺はお気に入りのエロアニメのBDを挿入してエロアニメ鑑賞を始めた。

7. Ichサウンドヘッドフォンを付けながらのエロアニメ鑑賞、それだけでも高なのにオナホ代わりのフェラチオ。しかもソレをしてくれるのが俺の為なら命はいらないという極上のオンナ。

「ふう…こんなに爽快な朝勃ちの処理は初めてだよ」

「それは宜しゆう事にございます」

「クロエ、本当に良い女だな。髪はまるで白銀の糸、肌はシルクも恥じらう純白、瞳は満天の星空ときたもんだ。クロエの瞳は本当に美しいよ」

「そんな、私など束様や本音と比べたら貧相な身体です」

「それがまた良いんじゃないか」

発展途上のクロエのおっぱいを優しく両手で包み込む。薄いピンク色の乳首に手が触れるとクロエは身体を少しこわばらせた。しかし嫌がっている様子は一切ない。むしろ俺に背中を預けてうるんだ瞳でこちらを見上げる。

「悪いけど今はすつきりしているからまた今度な。さあ、早く朝ご飯を食べて出かけよう」

「畏まりました♥」

……

…

夏休みが始まる前に宿題を終わらせていたのは何もクロエと俊葵だけじゃあない。夏休みの宿題を早めに終わらせて暇を持て余している少女がここにも一人いる。

「俊葵はもう宿題を終わらせたかな」

「私は終わってなあ〜い」

「本音は私の宿題を写すだけじゃだめだよ？」

「テストは一夜漬けで何とかなるも〜くん」

「もう…そうじゃないよ」

簪も夏休みに入る前に宿題を終わらせてしまい時間を持て余していた。そして本音はそんな簪の宿題を写す作業に精を出している。これはこれで良いコンビなのだ。

「I Sの整備でもしようかな」

「それならお姉ちゃんと出かけましょう。天気も良いし絶好のお出かけ日和よ」

「お姉ちゃん…前にも勝手に入ったらダメって言ったよね」

「それより早く着替えて出かけるわよ!!本音ちゃんも手伝って」
「は〜〜い」

楯無に注目しているのを良い事に本音は普段では考えられないような素早い動きで簪のスカートのホックを外し脱がせる。

「ッ!!??」

咄嗟に両手で下半身を隠そうとするが楯無に上着を掴まれて脱がされてしまう。物の一瞬で下着姿にされた簪は諦めて出かける事を決定した。

73話 俊葵とクロエの初デート 前篇

クロエと並んで街中を歩いているとそこから鋭い視線が突き刺さる。その視線に含まれる感情が嫉妬や羨望だという事は想像するに難くない。

「俊葵様、なにやら視線を感じるのですが」

「気にするな。俺たちの格好が少しばかり目立つ格好をしているからだって」

クロエは普段着をほとんど持つていないのでメイド服、俺は普段着だけど顔の火傷痕を隠すためのマスクを着けている。それを差し引いてもクロエの容姿はよく目立つ。

「これも俊葵様の魅力のなせる業なのですね。流石です」

「そりやどうも」

褒められて悪い気はしない。寧ろ心地よい。しかし周りの視線を差し引いてプラマイゼロ。マイナス成分を発する不愉快極まりない愚民は頭を引きちぎってケツの穴にぶち込んでやりたいよ。

「ところで今日はどちらへ」

「クロエの普段着を買おうと思ってさ。下着とかはたくさん持っているけど外出用の服

は全然持つていないだろ。だから今日はクロエにお洋服のプレゼント」

「俊葵様を買っていただく必要はございません」

「そんなこと言わずにプレゼントさせてくれよ。偶には良いじゃあないか。いつもお世話になつてゐるんだし」

「私が俊葵様のお世話をするのは至極当然のことにございます。どうか私のような下賤の者に俊葵様の財産を使うなどおやめくださいませ」

「クロエ、お前は俺の事をマジで好きな事はよぉぉく分かつてる。でもねえあんまりほめ過ぎたりすると皮肉に聞こえるんだよ。だから俺の事を考えているなら俺の好きなようにさせてくれないか。じゃないとお仕置きしちゃうよ」

クロエの腰に手をまわして耳元で囁く。ビクンと身体を震わせるが振りほどくそぶりは見せない。

「畏まりました：／／では今日の買い物は俊葵様に甘えさせていただきます」

「おう、今日は俺が何でも買ってやる。洋服だろうが宝石だろうが時計だろうが何でも買ってやるよ」

「ふふふ、それは楽しみです」

手を腰から放して、今度はクロエの右手に持つていく。小さく柔らかい掌を握るとクロエも握り返してきた。身長差が30センチ近くある俺たちが手を繋ぐとちよつとし

た親子みたいだな。

周りから注目されるのはもう慣れた。嫌な思いは変わらないけど可愛い彼女を見せつける事ができるのだと思うと心地いい。遠巻きに見る事しかできないってのはかわいそう。

……

…

まずはクロエの要望でお洒落な洋服店に入店した。ユニクロやしまむらとは全く違うワンランク上の人たちが来るような店なのでなんだか緊張する。クロエのメイド服は上品でどこへ出しても恥ずかしくないが、俺の着ている可愛いクジラのシャツは悪目立ちして良そうだ。

「じゃあ俺も服を探すからクロエも欲しい服を探して持ってきてくれ」

「畏まりました。ではしばらく探してまいります」

クロエは女性物を取り扱っているフロアへ行ってしまった。と言ってもこの店自体が主に女性物しか取り扱っていない。男物は端っこにちよびつとあるだけだ。

「俺が欲しい洋服はなさそうだな」

そういう訳でみんなに来て欲しい服を探すたびにレッツラゴー。サイズは分かっているのに適当に手に取って似合うかどうか吟味する。

フリルの多いゴシック調のロングスカートや純白のワンピース、キャミソールも捨てがたい。

しばらく探していたら一人の女性に声を掛けられた。

「ちよつと！ここは女性物を取り扱っているんですよ。さつさと出て行って」

「彼女にプレゼントを買おうと思つてね。邪魔はしないから貴女も買ひ物を続けてどうぞ」

「貴方の存在が邪魔なのよ。早く出て行かないと警察を呼ぶわよ？」

はあ……この手合いの連中は面倒くさい。正直こいつを殺して監視カメラやここに居る奴らの記憶をいじくればバレはしない。でもそんな手間をこんな奴に掛ける程俺は暇じゃあないんだ。

「勝手にすれば」

無視を決め込み箒に似合いそうなシャツを見つけたので手に取つてみる。しかし箒の胸だとこれは苦しいだろうな。

「ISも使えない男子が調子に乗つて!!」

「誰がISを使えないつて？」

左手だけ宇宙を展開して見せつける。学園外でのISの展開は原則禁止だが今はそんなこと関係ない。このメス豚を黙らせたいからね。

「俺の I S 適性は S S + だ。専用機だつて持つている。あんたはどうなんだ？ I S を使えるのだろうか？ さあ、あんたの I S を見せてくれよ」

「これだから男は屁理屈をこねる！」

「これは理屈だよ。 I S を使える女は偉い、なのにどうして I S を使える男は偉くないんだ？ おかしいじゃあないか。少なくとも俺はかなり社会的に貢献しているぞ。お前は I S に乗れないのに I S に乗れる俺を下に見ている」

「そもそもこんな公共の場所で I S を展開して！」

「こうでもしないとお前は信じないだろう？ 自分が女だからつて偉そうに…俺はお前みたいなのが大嫌いなんだ。自分が一番偉いと勘違いしている」

「あなたはどなの？」

うう怖くいい。そんなに睨みつけられると漏らしちゃうよ。

「俺は『力を持つ者が偉い』という考えだから少なくともお前よりは偉い」

「独善的な！」

俺たちの口論が聞こえたのか店員が駆け寄って来た。

「申し訳ありませんが他のお客様の迷惑になりますので外へ出て頂けないでしょうか」

「言われてるぞ」

「いえ、貴方に出て行って欲しいのですが」

はあ……どいつもこいつも。折角のデートなのにイライラがマックスハート!!

しかし穏便に事を済ませよう。暴力に頼ってはいけない（戒め）

「調子に乗るなよ」

二人の首を絞めて顔を近づける。そして二人としつかりと目を合わせて心の一番奥まで俺色に染め上げる。今まで持っていた価値観を全て消し去って俺の価値観を植え付けた。これでこの二人は俺の物になった。

「俺の買物物の邪魔をするな。良いな？」

「はい♥」

「何かお手伝いできることができましたらいつでもどうぞ♥」

二人の彼女さんごめんさい。でも彼女たちが最初に突っかかって来たんだ。俺は文句を言われる筋合いはない。寝取るのは心苦しいけど俺に寝取られる程度の女と付き合っていたのが悪いよ。それにすぐに堕ちちやったって事は君たちは彼女たちに心から愛されていなかったんだね。

「ああ……くそツタレな気分だ」

罪悪感なんて捨てたと思っていたのに……まだ悪人に成り切れないなあ。悪いことしただと思っっているのが証拠だ。

「泣けるぜ……」

…

…

「やはり俊葵様はコチラの清楚系がよろしいのでしょうか。それともセクシー系が…；そもそも俊葵様に買っていただけだと思うと緊張してそれどころではありません」

左手に青のワンピース、右手に尋常じやないローライズのホットパンツを持ったクロエは悩んでいる。誕生日に好きなガン普拉を選んで良いと言われた作者並みに悩んでいた。

「いえ、俊葵様を喜ばせるためには沢山選ぶことが一番なはずです。私にプレゼントすること、俊葵様が幸せになるのであれば私は買って頂くのみ!!」

サイズが合う洋服を手当たり次第にカートへ入れていくクロエ。さながらタイムサービス品を目利きせずには買う主婦の様だ。

しばらくするとカートは一杯になり服の山が出来上がる。

「俊葵様、お会計の方をお願いしても宜しいでしょうか？」

「すっげえ…いや、沢山選んでくれて嬉しいよ。店員さん、これ全部お願いします」

良かったです。やはり俊葵様は喜んでくれました。俊葵様の喜びは私の最上級の喜びです。ああ…；俊葵様の奴隷として私は合格でしょうか？いえ…；この際、合格不合格などはどうでもよいのです。奴隷の私が俊葵様に認めて欲しいと思う事がおこがましい

…。私は俊葵様の御心のままに存在すれば良い。

「34万4600円になります」

「高ツ!？」

え？俊葵様…まさか…私ほとんどない間違いを…ああ!!あああああ!!

「仕方ねえ…カードでお願いします。一括で。…どうしたクロエ?頭でも痛いのか?」

「今…た、高いと…」

「ちよつとびつくりしたただだよ。クロエのお洒落の為なら一億だって安いさ。安心しろよ。こんな事で嫌いになつたりしないからさ」

「そうおっしゃると俊葵様は私を抱きしめてくれました。とても優しいお方…このお方に愛される私は果報者でございます。」

「何分間抱きしめられたか覚えていませんが気が付くと次の店へ入っていました。俊葵様との初デート…終了まで私の理性が残っていることを祈りましょう。」

74話

クロエとの初デート、俺は今までのデートよりもはるかに困っていた。本音や簪は「ここに行きたい」「ここで食事がしたい」と明確に要望を言ってくれた。しかしクロエは「俊葵様の赴くままに」「俊葵様のお好きな物を」と自分の要望を言ってくれない。いや、それが要望なのかもしれないけれど俺としてはクロエ自身に楽しんでほしい。

「折角だし新しくできたカフェにでも行ってみるか？」

「畏まりました」

「ダメダメ、今日の俺たちは主人とメイドじゃなくて恋人同士なんだからそういうのは禁止」

「わ、分かりました。俊葵さ……俊葵さんが行きたい場所にクロエも行きたいです」

「じゃあ新しくできたカフェに行こうか。ずっと行って見たかったんだ」

「じゃ、じゃあそれ……で」

恐る恐る……いや、どちらかと言うとこれは慣れないしゃべり方に混乱しているのだろ

う。しかし俺の言いつけを守る辺り素晴らしい。

カフェに向かう道すがらもずっと俺の三歩後ろを慎ましやかについて来ている。今時分こんなにお淑やかな大和撫子はなかなかお目に掛かれないぞ。

そんなクロエはとても綺麗だ。だから何度もナンパされているが全て躲し切っている。すげえ…。

しばらく歩みを進めてカフェの前に銀行へ行つた。もしカードが使えない店だといけないし、現金はいくらか財布に入れておきたい。

「それじゃあATMに行つてお金下ろしてくるから」

「分かりました。ではソファをとつておきます」

とつておきます…か。クロエも段々と日本に慣れてきたようだ。

順番待ち用の札を機械から受け取りクロエの元へ帰ろうとした瞬間、銃を持った覆面の三人組が銀行に入つて来る。そのうちの一人がショットガンを天井に向けて威嚇射撃をした。

「テメエら全員人質だ!!おかしな真似しやがったら撃ち殺すぞ!!」

決まり切つた文句を垂れながら受付の女性に、これまたお決まりの文句を垂れる。

「このかばんに入るだけ札束を詰める。早くしねえと人質が死んでしまうぞ」

「は、はい!!」

受付の女性は青ざめて裏の方へカバンを持って行った。これからお金を詰めるのだから。

シヨットガンを持った犯人以外の二人は人質を一か所に集めている。賢明な判断だけど武装がハンドガンだけじゃあ心許ないな。サブマシンガン程度は持って来た方が良いでしょう。

「おい、テメエも人質なんだ。さっさとあっち行け」

シヨットガンの銃口がこつちを見ている。これはいただけじゃない状況だな。撃たれてしまったら服がぼろぼろになってしまおうし、血で汚れてしまおう。

「俺このあと予定あるからさっさとお金をおろしよ」

「聞こえなかったか？さっさと行け」

ここで争っても仕様がないので大人しくクロエの隣に座る。それにしても銀行強盗に巻き込まれるなんてついてないなあ。

「俊葵様、このような連中でしたら4秒も有れば削除できます。いつでもご命令を」

「警察の目につくのはいただけくない。黙ってやり過ぎそう」

警察の目に留まってはこれからの活動に多大な影響が出てくる。俺はいま指紋、声紋、網膜のデータが無いんだ。これを機に調べられて登録なんかされたら最悪だ。

「おい、あんた。強いのか？あいつら銃を持っているけど人数を集めたら何とかなるか

もしれないぞ」

人質の一人が俺に犯人を捕まえる計画を話しに近づいてきた。その人の後ろにはガタイの良い男性が4人ほどいる。

「バカ言うな。相手が素人だったとしても銃を持っている相手に無謀すぎる」

「でもこのまま悪事を見逃す気か？」

「俺はまだ死にたくないの」

「おい、そこ！何をこそこそ話している!？」

チツ……こいつが俺に話しかけてくるから犯人に目立つっちゃったじゃないか。

「抵抗なんかするなよ。こっちには……こいつがあるんだ」

これ見よがしに銃を見せつける。でも俺が普段使っている銃からしたらおもちゃみたいなものだ。

「変な格好しているがなかなか美人じゃねえか。俺たちの相手でもして貰おうかな。はははは」

そう言つてクロエの手を掴む。その瞬間俺の身体は勝手に動いていた。

まずはクロエの手を掴んでいる手の手首をほんのちよつぴり本気を出して握り骨をへし折る。次に太ももを思い切り蹴つて大腿骨を粉々にした。

「ぐあ!!」

「てめえ!! 兄貴をよくも!!」

ハンドガンで身体を撃たれるが何のダメージもない。

縮地で距離を詰めて顎を砕いて気絶させる。最後の一人の方を見ると腰を抜かしてへたり込んでいた。

「おい…あんた撃たれてるぞ」

「そうだな。最悪だ…お気に入りの服が汚れたよ」

「早く救急車を」

「呼ばなくていい。こんな傷じゃあ死なないよ」

「で、でも」

「しつこい!! 俺は今お気に入りの服をボロボロにされてイライラしているんだ!! 黙ってろ!!」

胸糞悪い。最低最悪な気分だ。

「俊葵様、お着替えでしたらお手洗いでどうぞ。替えのお洋服はコチラに」

「ああ」

クロエから替えの服を受け取りトイレの中で着替える。お気に入りのシャツだったのがボロボロの血まみれになってしまった。証拠品として押収されるのも嫌なので原子分解で処理した。

トイレから戻ると既に警察や救急隊が駆け付けており犯人グループは担架で運ばれている。

「犯人たちを無力化したのは君だね。撃たれたと聞いたけど…」

「彼らの勘違いでしょう。私は忙しいのでこれで」

「ちよつと話を聞きたいから署まで来てもらおうか」

「お断りします。俺を拘束したいのならこちらまで連絡を」

そう言ってI S学園の学生証を見せて握手をする。

「あんたが…?!」

「オフレコでお願います。あまり目立つのはいただけませんので…どうかご理解を」

「はい、では後日伺います」

話の分かる警察で良かった。面倒くさい警察は俺を連れて行こうと躍起になる。

「俊葵さん、早くカフェに行きましょう」

クロエも俺の気持ちを察してか手を引いて銀行の外へと連れ出してくれた。

……

…

「さっきの警察は処分しなくて良かったのですか？俊葵さんの正体を知った人間です

っ」

「ふふ、クロエもまだまだだよのう。あいつと握手をした時を呪つといた。きっと今夜中に事故にあつて死ぬんじやあないかな」

「ああ……／＼／＼申し訳ありません俊葵様。やはり恋人のデートとはいえ私は俊葵様の気にあてられてしまったようです。お許しください」

「いつも通りの方がしつくりくるな。問題ない」

「しかし俊葵様がわざわざ手を掛けなくとも、私にアレの処分を任せてくださればよかつたのに」

「俺の能力はまだまだ未知数だ。できることが分かつていても結果が分からない。そんな力を使う気にはなれないからな。人体実験だよ。この刺青にしたつて自分の身体に彫り込んではいけるけれどいつ副作用が見つかるか分かつたもんじやない」

「私たちの身体に刻み込まれた物も俊葵様の刺青と同じなのでしようか？」

「いや、クロエたちに彫り込んだものとは別物だよ。みんなには安全な物しか与えていない。俺のは術や超能力を簡易的に放出するためのものだよ。いちいち札を取り出したり長つたらしい呪文を唱えるのは面倒だからね」

言うなればショートカットのようなものだ。体中に術を染み込ませることによって取り出してすぐに使うことができる。特に肉体を更に物理的強化してくれる術や蘇生術は常時発動させておいてもデメリットは少ない。

デメリットと言つても見た目が派手なタトウーという事くらいだろう。顔や手足の傷跡も相まって通行人からはジロジロ見られて嫌な気分だ。見せないようにもできるけれどみんながこつちの方が良いと言っているのでそのままにしてある。

「ほら、そうこうしているうちに着いたぞ。中に入ろうか」

クロエと話し込んでいたらすぐに目的地へ到着した。

お洒落な装飾が施された手すりにつかまり二階へと昇り店の扉を開く。

「お帰りなさいませご主人様、お嬢様。タバコをお飲みになりますか？」

「ああ、喫煙席で頼む」

喫煙席は店の奥まった場所にポツンとあった。まあ、喫煙できるカフェなんて珍しいから贅沢は言えないけれどね。

席に着いてクロエとメニューを見ながら雑談を再開する。

「カフェと言うのはメイドカフェだったのですね」

「クロエには退屈な場所だったかな？」

「いえ、俊葵様とお出かけになれるのでしたら戦場から地獄の果てに行こうと幸せです。しかしなぜメイドカフェなのでしょう？このような場所はメイドも雇えない、モテない可哀想な人種が赴く場所と存じております」

クロエはまるで薄汚い家畜を見るような冷やかな目で周りの客を見下す。クロエ

の言った事が聞こえていたのか数人の客はコチラを睨みつけるが、心理を突かれたのか、はたまたクロエの圧に負けたのかバツが悪そうに視線を落とした。

「俺以外の男には手敵しいのなお前」

「俊葵様以外の男性には何の魅力もございません。炉端の石ころよりも価値のないモノに優しくする必要はありませんので」

「クロエの言う事にも一理ある。しかしもつと優しく生きろ。敵は少ないに越したことは無い」

「畏まりました。ではこれから俊葵様の敵をあまり作らないように行動させていただきます」

「ご注文はお決まりですか、ご主人様」

このカフェのメイド服のデザインはなかなか凝っているようだ。プリーツを摘まみ軽くカテーシーをする際に裾から裏地が見えたのだが綺麗で繊細な刺繍が施されているのが見えた。

「メイドと一緒にいちやいちゃお茶会セットを二つ、それから聳え立つ雪白き巨峰（白熊大盛）、黒き泉の妖星（コーヒーフロート）、そこ知れぬ奈落への階層（サンドイツチセツト特大）をお願いします」

「畏まりました。ではメイドを二人ほど指名してくださいませ」

そう言ってメニュー表の裏側を見せる。そこにはこのカフェに在籍しているであろうメイドたちのプロフィールと顔写真が載っていた。しかし新人欄に二人ほど顔もプロフィールも書いてないメイドがいる。

「それじゃあ新人の二人をお願いします」

「それでは少々お待ちください」

メイドの後ろ姿が見えなくなるまで待ちカバンから葉巻を取り出す。前世でも紙巻ではなく葉巻を好んで吸っていたので今生でも吸う事になっている。

シガーカッターで吸い口を切り口に含むと何とも言えない芳醇な香りが口に広がる。火をつける前、吸い始めから終わりまでの全てを楽しむことができる葉巻はとても良いものだ。

火の無い葉巻を楽しんでいるとクロエがマッチを取り出して火を着けてくれた。傍から見ればヤクザのような男がメイド服を着た外国人の美少女を手籠めになっているとでも見えるのだろうか。

「俊葵様は葉巻を好んで吸っているようですが何故でしょうか？」

「紙巻のタバコは紙が燃える匂いが嫌いなんだよ。クロエにも分かりやすく言うなら100%ジュースか否かって感じかな。葉巻は高級品ってイメージだけどそれに違わぬ美味しさがあるんだ。ちょっと吸ってみろ」

そう言つてもう匂いの付いた手を嗅がせてみる。

「すん…すん…」

「で、コツチが紙巻きたばこだ」

「すん…すん…いまいち分かりかねます」

「じゃあこれでどうだ」

紙巻にも火を着けて煙を吐く。もちろんクロエに直接吐きかけたりはせず手に吐き掛けて匂いをかがせる。

「うっ…確かに葉巻の方が甘く深みのある良い香りでした」

「だろ？機会があれば吸ってみると良いさ。なあに、癌になったら俺が新しい身体をこさえてやるさ」

「お待たせいたしました」

葉巻の火を消して灰と燃えた部分を綺麗に切り取つてシガーケースへなおし、注文した品を受け取るために振り替える。

「まじかよ、ベイバー」

75話 R—18

注文した料理を受け取るために振り替えるとそこには見知った二人がいた。

「新人メイドってラウラとシャルルだったのか」

「うう…こんな恥ずかしい格好…：俊葵だけには見せたくなかったのに」

「まさか初めての指名が俊葵だなんてびっくりだよ」

俺もびっくりだよ。朝から二人で出かける予定を立てていたがまさかバイトをしていたなんて。

「ほらせつかく注文したんだ。こっちに座って」

クロエの隣にシャルルを、俺の隣にラウラを座らせる。自分んちなら肩でも抱いて頼みずりしたいところだけど他の客もいる店の中じゃあとてもそんなことできない。俺にも常識はある。

「どうしてこんな所でバイトをしてるんだ？シャルルもラウラもバイトしなくったってお金持ってるじゃん。そうじゃなくてもシャルルはともかくラウラが接客業をするな

んてね」

「シャルロットと買い物をしていたらこの店長にヘッドハンティングされたのだ。私は嫌だと言ったのに……」

「僕だつて俊葵に会うつて分かつていたら安請け合ひしなかつたよ」

「素材が良いからなのかな……凄く似合つてると思う」

「褒めたつて何も出ないぞ／＼／＼！」

「俊葵つてば女の子の扱いがホントに上手いよね／＼／＼」

「こうやって煽るときやあ後からベッドの上でたつぷりサービスしてもらえるからな」

ワザとらしく言つたのに二人とも嬉しそうにしている。きっと本当にベッドの上でサービスしてくれるのだろう。

「クロエは普段からメイドの格好してるし二人も学校でメイド服着てみたらどうだ？」

「バカを言うな。こんなヒラヒラな服を着ていてはいざという時に対処できない。でも

……地下の施設限定なら着てやらんこともないぞ／＼／＼」

「僕もみんなに見られないところなら良いよ／＼／＼」

それじゃあ二人の分のメイド服もデザインしなきゃいけないな。クロエのメイド服のデザインも一新しよう。これから忙しくなるぞ。

……

…

「ほら…く、喰え／＼／」

「あ〜ん…美味い、もう一杯」

「クロエもあ〜ん♥」

「あ、あ〜ん」

俺もクロエもメイド喫茶を楽しんでいる。料理も安物の冷凍や出来合いだと思っていたがそうではなかった。きちんと手作りされている味に違いない。だってサンドイッチの味付けがシャルルの物と大差ないし。

メイドに食べさせてもらったり、肌と肌とをくっつけ合ったりできるコースなのに俺と同じ注文をしている客は少ない。値段も見ずに注文したからちよつと不安になってくる。

「このメニューっていくらなの？」

「指名料が5000円、10分毎に2500円だよ。俊葵は30分遊んだから12500円だね」

「マジかよ…結構高いのな。どうりで頼む客が少ないわけだ」

二十分で一万円なんてどう考えても割に合わない。キャバクラやガールズバーの方が安上がりだ。否、店で高い酒を注文させられてアフターで高いブランド物を買わされ

…どつちもどつちだな。

「しかも写真撮影は別料金と来た日にゃあ商売あがったりだろ」

「はは…でもこんな高額でもお金を落とす人がいるんだからメイド喫茶もバカにできないよ」

シャルルの言う通り、こういった場所でもお金を落とす人がいるから経済が回っていいんだ。

「はふう…家の外でこういった事をするのも悪くないな。次は一人で来よつと」

「私では満足させられないのですね」

ツーンと拗ねてしまったクロエもまた可愛い。

「クロエとは家でいっぱいイチャイチャしてるだろ？たまには一人で遊びたい時もあるって」

「姉さんだけじゃなくて私たちも構え」

「僕も放っておかれたら寂しいなあ〜」

夏休みで時間がたっぷりあるのでみんなといっぱいセックスするのも良いな。いつもは時間や学校の都合上、一日に1〜3人ずつしかセックスできなかった。これからは一気に全員と大乱交パーティーができる。

今までよりもHotな夏になりそうだ。HでOppaiがTakusanの夏…イ

イネ!

……

…

シャルルとラウラと別れた俺たちは再び街道を歩いている。今度は腕を組んでいるので、より恋人感が増した。

「今日は思いがけない出会いが多い日だな。午前中の銀行強盗といい、シャルルとラウラといい」

「きつと今日はそういう日なのでしょう。俊葵様を独り占めできると思っていましたのに少し残念です」

顔色一つ変えずに拗ねた言葉を放つのでちよつとした社交辞令に聞こえてしまうが、実際は拗ねているのだろう。組んでいる腕に込められる力がほんのちよつぴり強くなった。

「残念がる必要はないよ。相手がクロエなら俺はいつだってデートするよ?」
「本当ですか!?!」

目をキラキラさせながら（物理）こちらを見上げる。

「本当だよ。ほら、次はあの店に行こうぜ」

ちよつと無理やりだけど照れ隠しの為にクロエの手を引いて適当な店に入る。クロ

工にはバレただろうか…バレても良い。だってクロエの事が大好きなんだから。

……

…

クロエの洋服を買って（メイド）カフェでお茶してデートつばい事を一通り済ませた俺たちは恋人たちが最後に行きつくデートスポット、ラブホテルに来ていた。時計や装飾品類もプレゼントしようと思ったがそれはまた今度のお楽しみ。

俺たちを尾行していたカメラマンは全て無力化しているので誰かに見られることも無い。未成年とこんなところに入る訳だから誰かに見られるなんて御法度。

「無事に入る事が出来ましたね」

「監視カメラにちゃんとタミーの映像を流してくれたか？」

「こんなところのお粗末なカメラを騙す事くらい私の黒鍵に掛ければこの程度…」

「お茶の子さいさい屁のカツパってか？すげえな」

「俊葵様には敵いません」

「謙遜するな。技術的な面では俺よりもクロエの方が優れている。俺は破壊専門だよ」

クロエの腰に腕をまわして抱き寄せる。朝から暑い日差しの中を歩きつばなしだったので汗の匂いが強い。

「せめてシャワーを…今日は暑かったので汗をかいています」

「それがまた良いんじゃないか」

うなじに顔を寄せるとあからさまに拒否されてしまった。強化人間で筋力が強いとはいえ俺を振りほどくには非力過ぎる。

暴れるクロエの細い腕を掴みベッドへ押し倒してクロエの香りを楽しむ。

「ダメ……です。臭いです……／＼／＼」

「そんなに嫌なのか？」

「俊葵様はこうなされた方が興奮すると思ひまして……本当はもつと私を楽しんでほしいです。手かせをして猿轡を噛ませて弄んでください」

長めのファーを取り出してクロエの手を縛る。猿轡もクロエの口に合わせた小さい物を着けてあげる。

「ん……／＼／＼ああ……／＼／＼」

最後に首輪をつけて完成。

「苦しかったり辛かったりしたらすぐに暴れるんだぞ？すぐに拘束を解いてやるからな」

「ん……」

何かを訴えるような目をこちらに向けるがみんなの心は極力読まないとルールを決めたので何を訴えているのかさっぱりだ。

セックスを楽しむ時くらいは互いに手探りが良い。

「もっと激しくして欲しいって顔だな。主人の俺にそんな反抗的な目を向けるな!!」
クロエの背中を思い切り引つ搔く。白い肌に三本の傷痕が付き紅い血が流れた。

「お前は俺の道具だ。道具に自我は必要ない」

更にクロエを傷付け続ける。腕、足、臀部、背中、腹部、体中に痛々しい引つ搔き傷が残るが、当の本人は恍惚とした表情で受け入れた。

「次はもっと痛いぞ」

ろうそくに火を着けて傷ついたカラダに溶けた蠟をゆつくりと垂らす。一滴、一滴、ぼたぼたとクロエの身体を紅に染めていく。

「ん……う……♥」

クロエは身体を振らせて抵抗するが抑え込んでるので抜け出せない。

「こうしたらもっと楽しめるだろ?なあ、クロエ」

目隠しをさせて視界を奪う。

「ん……ん……ん……!!」

今までと違う訴えをしているようなので仕様がなく口枷を外してやる。

「誠に申し訳ないのですが私の目は特殊で……その、目を瞑っていても周りの様子が分かるのです。それは目隠しをされても同じことで……。ですからこのようなプレイで俊

葵様を楽しませることができないと存じます」

「これならどうだ？」

クロエの目に特殊な御札を貼りつけて視界を奪う

「何も見えません…少し不安です、はい♥」

「何が不安だよ。感じてるくせに良く言うよ」

クロエを跪かせて無理やり口の中に足を入れる。急な事でビックリした様子だが、すぐに自分の口に何が入れられたのかを理解して愛撫を始めた。

「ちゅぷ…ちゅ、ちゅ…んう♥」

「歯を立てないように気を付けて…そう、良いぞ」

「ふあい／＼／ペろ…ペろ、ちゅ、ちゆる♥」

跪いているクロエの背中に溶けた蠟を垂らす。痛々しい生傷に蠟が垂れるたびに体を震わせ痛みを我慢する。

「ちゅ…とても美味しゅうございますう♥俊葵様の御御足を愛撫できるだけでクロエは…クロエはあ／＼／」

恍惚とした表情で足を舐めるクロエはとても美しく、俺を魅せてくれる。その姿は嗜虐心をくすぐり昂らせた。

喉の奥へと爪先を押し込むとえずきながらもしつかりと俺のモノを愛撫する。苦し

そんな表情をし、瞳の端に涙を浮かべるが俺は手加減なんてしない。

「うぐ…おえ…。ん…んぐう…じゅ、じゅる♥げほっ…げほっ！」

「誰が口を放していいと言った？」

「も、申し訳ございません…」

『俺に嫌われるのではないか?』そう思っているクロエは一生懸命に俺を愛撫する。そんなクロエが愛おしく思え、空いている右足で頭を撫でた。

「哀れだな…まるで奴隷だ。自由を奪われ、体中を爪と蠟で傷つけられて尚もかしづいて足を舐めている」

「ふあい♥わらひは俊葵様の奴隷れす…ちゅぶ、ちゅぶ。もつと痛めつけてくらはい／＼」

「この欲張りめ。奴隷が主人にモノを乞うなど…このメスガキ!!」

割と強めにクロエの横つ面を蹴り上げる。蹴られた頬は腫れあがり口の端からは紅い血が垂れている。

「申し訳ございません♥ではお好きないように…／＼」

フラフラしながらもこちらへ寄って来るのでベッドに投げ飛ばして覆いかぶさる。

「それじゃあ好きなようにさせてもらおうよ」

怯えるでもなく、苦しむでもなく、クロエは快楽と興奮に包まれながら俺を受け入れ

る準備を始めた。

76話 R-18

俺はクロエに覆いかぶさると縛られた両手を挙げさせてベッドの装飾に固定する。口と足は自由にしてあるが暴れて抜け出そうとする様子はない。

「前も傷つけてやるよ。感謝しろ」

鋭く上がった爪を柔肌を立て突き刺す。数ミリ程度食い込んだであろう爪を思い切り引いて肉ごと皮膚を削る。

「あゝう!!」

痛みにカラダをよじり叫ぶが、その頬は紅く興奮している。優しく乳房を撫でながら爪を立て肉を削り取った。

「ああ……う……／＼／＼」

「辛そうだな。止めるか？」

「め……いで……さい……」

「もつとはつきり喋らないか!!」

右の乳房の思い切り爪を食い込ませてお仕置きをするとまた大きく体を逸らせて叫ぶ。

「もつと痛めつけてください!!俊葵様の愛をもつとカラダに刻み込んでください!!俊葵様に喜んで頂けるのでしたら私は手足がもげようと構いません!!」

「よく言った。それじゃあもつと痛めつけてやる」

左手を白くなるまで熱してから、もう一度クロエの柔肌に爪をゆつくり優しく立てる。真つ白で綺麗な肌が赤黒く爛れ肉の焼ける匂いが部屋に立ち込めた。

「あ、あ、あああああ♥俊葵様があ…俊葵様が私を求めてくださる!!私は幸せですう〜♥」

カラダだけでは可哀想なので右手でクロエのほとをショーツの上から優しく撫でる。『くちゅ…』と艶めかしい音が聞こえてきてクロエがどれ程、興奮していたかが分かった。

「ん…////」

大陰唇を人差し指と中指で遊びながら優しい愛撫を繰り返す。手持ち無沙汰の左手に蠟燭を握り、溶かしてからクロエの身体に叩き付けるようにぶつ掛ける。

「ひゃうっ////」

蠟が掛かる度に腔肉が俺の右手を指を締め付ける。そして締め付けられた指を動か

すたびに快樂に身をよじらせた。

「チンコを挿入しなくたって気持ち良いだろう?」

「はいい…俊葵様の優しさに包まれてとても幸せです♥」

「こんな酷い事をしてるの?」

手のひらに残った蠟を叩き付けるようにクロエへぶつかる。白い肌にもまた紅い花が咲いた。

「あうっ!!こんなにも酷い事をされているのです♥俊葵様が見てください、手に掛けてくださる、あまつさへ私が俊葵様の所有物である証を身体中に刻んでくださつた。こんなに幸福な事はありません。きつと私はこの傷を見るたびに俊葵様に愛されていた時の事を思い出すでしょう」

やっぱお前は最高だよクロエ。今だけはお前が俺のオンナの中で一番だ!!

……

…

ほんのちよつぱり興奮しすぎてしまったようだ。切り傷、火傷、裂傷のクロエではお目に掛かれない傷痕ばかり目立つ。

「ふう……凄く綺麗だよ」

クロエには苦痛という概念が無いのだろうかと思うほどボロボロになった頃、俺のチ

ンポは血管が浮き出てパンパンに張っていた。

流れ出た血液と失禁したクロエの小便でシーツは紅く染まっているし、部屋の中は血と肉と軽いアンモニア臭が立ち込めている。何も知らない人が入ってきたら殺人現場と思うだろう。

「ベッドが汚れちまったな。こんな汚い場所でクロエを抱きたくないや。おいクロエ、まだ生きてるか？」

「ふあ、ふあい…なんとか生きれました…はふう♥」

「苦しくなかったか？」

「とんでもございません。俊葵様に求めて頂けて感無量でございます。」

「それじゃあ今度はクロエが俺を幸福にする番だ」

拘束を解いて顔に張り付けた札も剥がしてあげる。そして傷ついた身体を癒してあげようとしたが拒まれてしまった。

「我が儘をお許しください。この痛みは俊葵様から頂いたものですので残しておきたいのです。宜しいでしょうか？」

「良いけれど傷痕は後で消させてもらうよ。傷ついたクロエも美しいけどいつものクロエが良いよ」

「我慢できません!!」

ガバツと急に飛びついて来たクロエに反応はできたがあえて押し倒された。

「無礼をお許しください……」

「無礼なんかじゃないよ。俺もクロエも裸じゃないか。裸の男女に序列や優劣はない：俺がクロエのモノになっても良いってことだ」

「俊葵様!!」

傷だらけで細い二本の腕が俺の身体を抱きしめる。強化人間とは言えその腕はとても非力で俺の身体を支えるには心許ない。

「ありがとう……さあ、クロエの好きにしてくれ」

「では……ああむ♥じゆる……じゆ、じゆる……んう。とても遅しい：馬並とは仰りますがまさにそれです、小さくしないでください。これ程の巨根に私が快楽を与えていると思うと……」

小さい口をいっぱいいっぱいに拡張して俺の逸物を頬張っている。缶コーヒー並の太さに16cm×18cmの長さを根元まで咥え込んで喉に亀頭や肉茎が浮き出ているのが見え、俺は更に興奮した。

「んぶ……ん、ん、ぷはあ／＼／＼いつもより遅しい♥」

「それだけ俺のポテンシャルは凄まじいって事だよ。これ以上に大きくすることも、いつもより小さくすることも自由自在だぜ」

「これ以上大きく成られては私の身体が保ちません。それに適切な快樂を与える事が出来なくなつてしまいます。男性は巨根に成りたがっていますですが理解しかねます」

クロエの言うようにセックスとは子を成すだけではなく、互いの愛を確かめ合う行為でもある。SMプレイは例外として相手が肉体的、精神的に傷つくなんて事があつてはならない。しかしクロエがあまりにも可愛いものだからちよつと意地悪になつてしまふ、

「与える？この俺に与えるだど？」

「し、失礼をしました。快樂を差し上げる事が出来なくなつてしまふと…そう申し上げるべきでした」

「良いじゃねえか。与えてもらおうか…お前の快樂つてヤツをさ」

再び寝転んでクロエの愛撫を待つ。手足を脱力させているが俺の股間は怒張しはち切れんばかりに勃起している。ドクンドクンと血液の脈動が目に見て分かるほどの逸物をクロエは臆さずに喉の奥まで啜え込んだ。

クロエの口の中はとても温かく気持ちが良い、喉の奥は程よく締め付けて射精感を高めてくれる。しかも喉は膣孔と違って嚙下する際の筋肉の動きが有るので正直なところ下手な膣孔よりも気持ちいい。

タダ締め付けるだけの膣よりも握ること様な締め付けを行う喉は格別だ。特にクロ

エの喉は口淫するためにあるのではないかと錯覚してしまう。

「んぶ……ぶ……じゆる、じゅちゅ♥れる、れる……ん、んく……ん、ん／＼／」

ワザと飲み込む動作をする事で喉を動かし唾えたまま快楽を与えてくれた。それもクロエは俺の腰に手をまわしてチンポの根元が隠れる程しっかりと唾え込んでいる。

ほどなく俺は我慢できなくなりクロエの頭を掴んだ。きつと掴まなくともクロエは逃げたりしないと分かっているがこうする事で征服感を味わえた。

「クロエ……射精く!!」

ドブツ……とクロエの胃に直接、精液をぶち込んだ。

「ん!!ゴク……ゴク……ゴク……ゴク……♥」

まるで長い小便をする時のような射精の途中で亀頭を口まで引き抜き口の中にザーメンを溜めさせる。射精が終わるとクロエは自然と俺を見上げ口を大きく開けて俺の成果を見せつけた。

「あ、あ、くくく♥……くくん……ふはあくくく♥とても……とても美味しゆうございませう♥」

口いっぱい精液でうがいをしてからの一気飲みに興奮しない男はいない。俺のチンポは射精の疲れを忘れへそをパチンと叩いた。

「そこに寝ろ……その狭いマンコにぶち込んでやる」

「はい…:♥」

期待に満ち溢れたクロエのほとを包むショーツはもはやショーツの体を成していなかった。それはまるで土砂降りの中を駆け、濡れて透けてしまったYシャツの様だった。

甘い女性特有の香りがする。とても良い香りだ。きつとこの香りに含まれたフェロモンが俺の神経に直接語り掛けてくるのだろう。『このメスを犯し、蹂躪し、種を着け、子を産まし、自分のモノにしろ』と

77話 R-18

「僭越ながら進言させていただきます俊葵様…：シーツも身体も汚れてしまっているので浴室で身体を洗いながらセックスをするというのは如何でしょうか？」

「確かにそうだな。よし、風呂場でフアックしてやる」

クロエの言うように汚れてしまったベッドの上で抱くのはどうも嫌なので、お風呂場にエアーマットを敷いてセックスをする事にした。

空気を入れる『アレ』を探したが備え付けられていなかったもので、仕方なく超能力を使って膨らませた。これだけの大きさのモノを普通に膨らまそうとしたら何十分かかるか分からない。

「私の汚物でベッドを汚してしまい申し訳ございませんでした。さあ、お風呂が沸き上がったのでお先にどうぞ」

「クロエは良いのか？」

「私はこの傷ですし…」

クロエの身体に優しく触れて傷を全て癒す。しかし治すのは傷だけで傷痕はきちん

と残っている。

「これでお湯が沁みたりしないぞ」

「ありがたい御座います…では…」

お湯を張った湯船にローションの粉を混ぜてローション風呂にしてから二人で入る。俺の家ほどではないにしろそこそこ大きな湯船なので二人が入ってもお湯がこぼれるなんて事も無いし、狭くなることも無い。しっかりと足を延ばしてくつろげた。

「このローションはとても良い香りがしますね。これは…：バラの香りでしょうか」

「オプシオン料金を取られたからこれくらいは用意してもらわないと困るよ。でもこれは天然物のバラの香りじゃない。化学合成されたバラの香りだ。クロエ、一流のモノか三流のモノかを判断できる感覚は持つておかなきゃいけないな」

「はい、俊葵様を失望させぬよう奮励努力いたします。…：いつまでもこのままというのは間が保ちませんね。そろそろ始めさせていただきます。…：いつまでもこのままという」

ピンピンに勃起した俺のモノに跨るとゆっくり秘裂に挿入していった。

入り口はとても狭かったがローションと愛液のお陰で『にゆるん』と入った。入ったと思っただらあととは簡単に7割くらい肉茎がずぶずぶとクロエの膣壁を削り取る。

「あ、あ、あうくく♥凄いい…：とてもキツイ筈なのにおまんこが喜んでいきます。膣の入り口も膣内も俊葵様の巨根に広げられてえ♥」

残りの3割もぶち込むためにクロエのお尻をしつかりと鷲掴みにし、補助腕を生成し肩も掴んでから思い切り腰を振った。何か狭い入口を亀頭が突き抜けて『どこか』へ侵入する。膣内に挿入した時と同じ感覚だがさつきよりも狭い入口だった。

「んう!?が…かはつ…そ、そこは…ああ♥」

クロエの反応から察するに俺のおちんぼはクロエの子宮の中へ侵入した様だ。ゆつくりと腰をグラインドさせて子宮の天井を優しくコツンコツンとノックしてやると、それに合わせてクロエの口から嬌声が漏れる。

「普段はおまんこに合わせて小さくしているからこんな感覚は初めてだろ。ぶつとくて長いチンポはどうだ?」

「ひゃ、ひゃい…:…これ、がオンナの喜び…:…なのです、ね／＼／んあ…:…私の事を侵略するおちんぼ様あ♥」

「俺以外のチンポでもこうなるのかな?」

「俊葵様だけです♥ 俊葵様以外の男が私に挿入しようとしたら舌を噛んで自決します♥」

心からそう思っているのか締め付けがきつくなつた。俺もクロエの想いに応えるために腰を動かす。ゆつくりと、だけど確実にクロエの膣壁をカリ首が刺激している。

「さつきまでの荒々しい前戯とはまた違う優しいセックス／＼／俊葵様の愛と思いやり

を全身で感じています。 あん、そんな急に…あ、あ♥もう…俊葵様あ♥」

おねだりするようにな自分から腰を動かしてきた。俺は4本の腕で優しくクロエを包み込んで滑らないように固定する。

「俊葵様は優し過ぎます♥強く、気高く、優しく…:もう!!ちゅ…:じゆる、ちゅ、ちゅう
〜♥んう〜〜ぷはあ♥」

口内を舐めるような濃厚なキスを不意打ちされてしまった。唇が重なる前からクロエは舌を目一杯出して俺の口を侵略する気であった。俺は口に入って来たクロエの舌を逃さないように吸い出す。

「んう!?!ん〜♥じゆる、じゆる、ちゅちゅ…:ちゅ♥」

唾液の交換なんて生易しいモノではない、もつと野性的で官能的なキスは何十秒も続いた。そして先にギブアップをしたのは俺だった。

「ぷはあ…:はあはあ…:つべえわコレ。クロエ、分かっていると思うけどもう…:正直クロエの膣内の刺激がヤバイ」

前戯ではフェラチオの方が気持ち良いと言ったがさつそく例外に出会った。数の子天井、ミミズ千本、蝟壺と名器を表す言葉は多々あれどこれ程の名器は何と形容して良いか分からない。

優しい締め付けと思ったら上下左右の膣壁が別々の生き物のように動き始める。『ぞ

りぞり』と心地の良い扱きで射精感を高めてからの『ぬるぬる』による焦らし…クロエのおまんこは俺の為に進化しているとしか思えない。身体を重ねれば重ねる程クロエは名器…いや、良いオンナになっている。

「ちゅぱ…どうぞ♥出してください♥」

ちんぽを抜いてからクロエをしゃがませて口の中に無理矢理ハメて喉の奥に射精する。

「ぶっ…ん…んく…く…く…く…く…く…ぶはあん♥もう…俊葵様なら生中出しでも宜しかったのに…♥」

ココで中出ししてしまうとローション風呂にザーメンが混ざっては入れなくなるのであえて口内射精をした。でも精液を飲んで惚けているクロエを見たら嗜虐心がふっふっ湧き上がってくる。

「俺のやる事に文句があるのか?」

「そのような事あるはずもございません、どうか…どうかお許しを俊葵様♥主人に逆らう私にお仕置きをしてください♥」

湯船から出るとマットに仰向けに寝るクロエ。服従のポーズを取りながらM字開脚をして臍に指を突っ込んで自ら『ぐじゅり』と拵げた。

「本音を申しますと俊葵様の逸物を欲して仕様が無いのです。私の色に狂ったほどを慰

めいただけますでしょうか？」

「お願いする必要なんか無いよ。俺もクロエとセックスをしたくて堪らないんだから」

クロエの上に覆いかぶさって抱きしめる。するとクロエも足を組んで俺を逃がさないように捕まえる。逃げる気なんてさらさら無い俺は腰を器用に動かしてクロエの膣内に肉棒を挿入した。

……

…

学園に戻ると既にみんなは寝静まってしんとしている。しかし監視カメラや赤外線センサー、動体探知機、重量センサーは作動しているので自分の部屋に戻るのも一苦勞。クロエが気絶していなければセンサー類を全部切ってもらうところだ。

今は女子寮の壁を空き巣さながらよじ登っている。わずかな出っ張りに指先を掛けて慎重に上る。超能力で上つても良いが、万が一にも誰かに見られるようなことは有ってはいけない。

「へい、クロエ。部屋に着いたぞ」

「むう……zzzz」

「仕方ねえ……」

超能力で鍵を開けて部屋に侵入する…前にトラップが仕掛けられていないかよく

観察する。するとキラリと光る一本のワイヤーを発見。そのワイヤーの先にはボウガンの引き金があった。

「ふえ…あんなのに撃たれたら大変な事になるぜ」

ラウラを起こさないようにゆつくりと窓を開けて部屋へ侵入する。悪い事はしていないはずだけど緊張する。

空いているベッドへクロエを横たえて布団を掛ける。これ以上の長居は無用なのでクロエが寝たのを確認するとすぐに部屋を出て自分の部屋に戻った。

……

…

扉を開けると普段通りの俺の部屋。しばらく寮の部屋に戻っていなかったから少し匂いが変わっている。しかしきちんと整理整頓が部屋の隅までなされている。きっとクロエが掃除をしていてくれたのだろうな。

「こんな時間に帰宅とは良いご身分だな」

「クーちゃんと随分楽しんで来たみたいだね」

「ふあしゅ!?!」

暗い部屋でいきなり後ろから声を掛けられたのでビックリして変な声が出てしまった。拡張領域からハンドガンを取り出して声のした方へ向ける。

「た、東さんと千冬さんじゃあないですかあゝあははゝ」

「……………」

「あの…怒ってます?」

「怒ってないよ(ツーン)」

どう見ても怒っている。今回はちよつとおイタが過ぎたようだ。二人に連絡を入れていたらこんな事にはならなかったと思う。

「怒ってないのは本当だよ。怒ってないけど…………」

「けど?」

「これ見て」

「そ、それは…………」

俺のコレクションじゃあねえか…しかもちよつと特殊な奴

「この『ぼっちゃりさんちの未亡人日記』って本に出てくる女の人みんなぼっちゃりしてるよね」

「あの…それあ…」

「してるよ、ね?」

圧が…圧が凄い。

「うん…」

「こういうの好きなのにクーちゃんを凌辱してきたんだ？」

「うん…」

「男の子だからこういうのに興味を持つのは良いよ。クーちゃんも幸せそうだったしね。そもそも俊くんが犯しちゃいけない女なんていない。でも私たちも呼んでほしかったなあ。このカラダは俊くんの為にあるんだから」

「あの…話が見えてこないんですけど」

どうも束の話は噛み合わない。なんだか怒っているのか論しているのか。

「つまり俊くんの事が大好きだってこと。もう…相談してくれたらぽっちゃりになってあげるのにい。未亡人は嫌だけど。最近は俊くとセックスできなくて寂しかったんだよ？おかげで料理を食べ過ぎて…ほら」

ペロンと捲られた服の裾から覗くお腹はぽっちゃりとしていてスカートのベルトに乗っかっている。しかしデブではなくきちんと括れが有り柔らかそうなカラダでありながらも均整がとれていた。

「いいや、俊葵は筋肉の方が好きだ。これを見ろ」

「もう止めて下さい…」

千冬さんの手に握られていた物も俺のコレクションの一つ。初回限定版でわざわざ出演女優のサイン会で買ったものだ。

『元陸上選手のセックス(シックス)パック』か…良い趣味だな」
「俊くんはぼっちゃり好きなの」

「ふん、お前の腹も尻もそのDVDに出てくる女より小さく締まっている。ぼっちゃり好きの俊葵はそんな程度のぼっちゃりでは満足しないぞ。しかし私を見る」

ガバツと漢らしく素っ裸になった千冬さんの身体は凄く綺麗だった。ここ最近は見
ていなかったたので変化がよく分かる。

腹筋のシックスパックはよりくつきりはつきりし、手足は勿論のこと肩や腰も綺麗な
筋肉に覆われている。俺の為に筋トレをしていたのか以前よりも身体が大きくなっ
たようにも見えた。

「フフ、こんなDVDに出演するような小娘と比べてどうだ？無駄な脂肪はないぞ？し
かし胸は柔らかい…ほら、俊葵好みのカラダだろう？」

「俊くんはぼっちゃり好きなの…！」

二人は俺を取り合うように挟み込んで身体を密着させてきた。東のおっぱいは『む
にゅ〜ん』と形を大きく変え俺の腕を包み込んだのに対して、千冬さんのおっぱいは
『むにい』と心地の良い力で腕を押し返す。

どちらのおっぱいにも言える事だが柔らかい、そしてデカイ。そしてデカイ。

「ふふう〜ん私はMカップの120cmだもんねえ〜。やあ〜い、ちーちゃんの貧

乳う〜」

「黙れ、私だってGカップの100cmだ。その辺の子娘と比べたら巨乳のはずだぞ。それにお前の胸は垂れてきているじゃないか」

「この垂れ具合が俊くん好みなんだよねえ〜?」

「いいや、このハリと艶が俊葵好みなのだ」

正直な話どちらも好みです、はい。巨乳貧乳関係なく俺はおっぱいが大好きだ。あとお尻も大好き。

「二人とも気持ち良くて大好きです。喧嘩は無いですよ」

「俊葵が言うなら…」

「俊くんが言うなら仕方ないなあ」

二人とも女の顔から雌の貌に変化した。俺の腕を抱く力も心なしか強くなった気がする。

「地下に行くか?」

「もう我慢できないからここでシよ?」

「私も同意見だ」

うわああ、すっげえ大胆。ダイターン3、なんちゃって。

「今つまらない事を考えたでしょう?」

「ほら来い」

手を引かれてシングルベッドに投げ飛ばされる。三人がシングルベッドに寝転がる
とこんな狭いんだな。

「本当にクロエとセックスをしてきたのか？こんな大きくして…」

「うわあ〜お〜♪巨根だあ〜♥」

むっちり美女とムキムキ美女の二人に挟まれて勃起しないやつはロリコンかゲイの
どちらかだろう。クロエとの疲れが残ってないと言えばウソになる。しかし俺のモノ
は目の前の雌を犯す為にしっかりと勃起していた。

「前戯なんて必要ない。早く入れろ」

「私の方がヌレヌレだもん。ほら、俊くん専用のほかほかおまんこだよ？」

二人とも魅力的でどちらかなんて選べない。千冬さんの締め付けのキツイ筋肉おま
んこにも入れたいし、束のふわとろほかほかおまんこにも入れたい。

もうこうなったら自棄だ。チンコと金玉が枯れ果てようと犯し尽くしてやるぜい、こ
んちきしよーめー。

俺の夏休みはきつと今までにないほど充実するものになるだろう。

まだ3日と過ぎていない夏休みを過ごしながら俺はそう確信していた。

78話

リムジンの扉が開かれると日本の気候特有の『むわっ』とした熱気が私の顔を撫でる。潮の香りと近代的なコンクリートの濡れる匂いが熱気と混ざり合い少し不快になった。

「イギリスでの公務、お疲れ様でしたセシリアお嬢様」

「ええ、まったくですわ。本当ならすべて断って俊葵さんとの夏休みを……」

「代表候補生の責任があります。それをお忘れなきよう行動してくださいませ」

当たり前の正論をメイドに言われてあからさまに拗ねる。チエルシーの言っている事は分かる、自分がしなければいけない事も理解している。でも私は高校初めての夏を想い人と少しでも多く過ごしたかった。

「分かっていきます。分かっていきますとも……俊葵さん」

「呼んだか？」

急に声を掛けられて思わず声を上げてしまう。淑女としてちよつとどうかと思う声を上げた事はここに居る三人だけの秘密にして欲しい。

「イギリスに帰省をしている間は俊葵さんとお会いできずに随分と寂しかったのですよ」

「俺もセシリアと会えなくて寂しかった」

「俊葵さんには私の他に沢山の女性を囲っているから寂しいはずありませんわ」

皆さんへの嫉妬からついつい意地の悪い事を言ってしまった。自分では「大人」のもりでも恋や愛が絡むと「子ども」になつてしまう。

「ははは手厳しいな。本当に寂しかったんだつてば。セシリアの事が恋しくつて恋しくつて眠れぬ夜を幾夜過ごしたか…」

「俊葵さん／＼／」

俊葵さんも私と同じような思いを…

「夜も眠れず昼寝したくらい恋しかったよ」

「期待した私がバカでしたわ…」

「本当は俊葵様の事を想い自分を慰めておりました」

「チエ、チエルシー!!」

どうしてチエルシーがその事を?! いえ、ちゃんと部屋の鍵は閉めていましたし張型も枕の下に隠していました。

「へえ、セシリアも可愛いところあるじゃんよ」

「はい、『俊葵さん…あう、そこはダメエ♥』と身をよじらせながら張型をほとに擦り付けるセシリアお嬢様はとても可愛らしい乙女でした」

「あう…／＼／＼もう止めて下さいまし／＼／＼」

顔から火が出るほど真っ赤に赤くなっていると自分でも分かる。そしてシヨーツのクロツチが少し湿ってきていることも…。

「その動画ある？」

「(こちらに)ございます」

「なんで映像媒体に残っているのですか?!すぐに消しなさい!!」

「まあまあ、セシリア。ちよつとくらい良いじゃないか。本人のいないところで言う事は本音だつて言うじゃない。セシリアが普段は俺の事をどう思っているのか知りたい」

「俊葵様の言う通りですお嬢様。お嬢様は俊葵様に対してもっとアピールすべきです。しかしあのシースルーのネグリジエは少々下品かと思えます」

「ツ／＼?!」

もう何を信じて良いのか分かりませんわ。チエルシーの留守を狙って通信販売で購入したあのネグリジエがなんでバレたのかしら。スーツケースの二重底の裏に黒色の袋に入れて隠したはずなのにバレたという事は私のプライベートはもうありませんのね。

「セシリアはえっちな〜♪まあ、それはさて置き」
さて置くのですね

「民営プールテーマパークのプレオープンチケットを手に入れたんだけど一緒にいかない？しばらく会えなかったからちよつとしたお詫びのつもりなだけ」

俊葵さんの手には2枚のチケットが握られていた。

「他の方も一緒…というオチではありませんわよね？」

「もちろん俺とセシリアの二人つきりだよ」

「プールのようですから水着を着る事になりそうですけれど…」

「太ったか？」

「そんなことはありません!!」

むしろ俊葵さんといつ『そういう事』になっても良いようにスタイルは維持している。ストレッチやヨガは欠かさず、ランニングや格闘体術で全身トレーニングしていた。だから水着を着る事に抵抗はない。

「じゃあ決定な。さっそく明日行くから準備してね。んじゃ」

行ってしまったわ。まるで嵐のような人…そんなところに惚れてしまったのですが／＼惚れた弱みとは良く言ったものですね。

「チエルシー、あとは私が運びますわ。貴女にはイギリスへ戻って屋敷の管理をお願い

します」

「畏まりましたお嬢様。差し出がましいようですが一つだけ。俊葵様はとても良いお方です。どうかチャンスを見逃しにならぬようお気を付けくださいませ」

そう言い残してチエルシーはリムジンで行ってしまった。

残された私は荷物を拡張領域の空きスペースへなおし寮室へ戻った。久しぶりの学園はセミと部活動に励む生徒の声で熱気にあふれている。

ああ…なんだかこの騒がしさも『戻って来た』と思わせてくれますわ。喧騒がこんなにも心地よい物だとは知りませんでした。

……

…

IS学園寮

「こつちにしようかな…それともこつちか?」

セシリアとのプールデートを目前に控えてほんのちよつぴり緊張している。両手に持ったピンクとブルーの水着がその表れだ。

「派手な真つピンクのアロハ柄と真つ青なかき氷模様…どつちが良いかな?」

ファッションセンスが他人とどこかズレている俊葵の選ぶ服はいつも派手な物か落ち着いたものに限定されていて、いわゆる『これ一枚着ておけばok』なんてものは無

かった。特に派手なのがいけない。ピンクが好きなのは分かるが俊葵の私服でピンクと言ったらアロハしかない。

落ち着いたものも単色シャツでそれに派手な上着を合わせている。一見するとなかなかのコーデイネットだが、それを支えている人がいる事を忘れてはいけない。なぜなら購入した時は派手な物には派手な物、地味なものには地味な物を組み合わせようと考えていた阿呆がここに一人居るからだ。

「それとも新しい水着を…用意している時間はないか。臨海学校でこのピンクのアロハは着たし青にしよう。セシリアもきつと青色の水着を着てくるだろうし恋人みたく色を合わせようかな」

青色の水着をカバンの中にしまって明日の準備を続ける。

お財布、水着、タオル、濡れた服を入れる大きな袋、ハンカチ、携帯の充電器とバッテリー、お気に入りのM500、スペツナズ式のツイストダガーを数本入れて準備完了。なんだか持っているだけで安心できる物は人それぞれ違う。例えば好きなトレーディングカードゲームのデッキ、ぬいぐるみ、キーホルダーなど小さくて軽い物が多い。確か何とかがって名前がついてたはず。そんな中で『俺が持っているだけで安心できるモノ』は銃火器とナイフだ。

自分で言うのはアレだが俺は公式非公式問わず多数の組織、個人から狙われている。

そんな時に警察なんて税金泥棒の無能集団に俺を守れるとは思えない。そもそも殺しにかかってくる相手に対して警告をしている時点で甘ちゃんすぎる。だから俺は自分の身は自分で守らなくてはいけない。

ISを人前に晒したくない状況では特に：だ。カバンには大きな銃火器は入らないので小さな物に限定されるがやっぱり持っているだけで安心できる。

「宇宙の拡張領域に入れればいいのに」

いつの間には部屋に入っていた束が裸で抱き着いて来た。

「大勢にISを使つてるところを見られるだろ？」

「こんな銃じゃISに抵抗できないよ」

「それ俺のM500だ。返してくれよ」

束からM500を取り返してカバンの中に入れなおす。束にしてみれば5発しか入らない銃を好んで使う事がおかしく思えるのだろう。そうでなくともリボルバーなんて古臭いと思つているかもしれない。

「俺はリボルバー好きなの」

「私よりも？」

「もちろん束の方が好きだよ」

「もうっ…キスしたって許さないんだから…ダメ…やめ、ちよ、ちよつと…あう／＼」

…

…

よく朝起きたら隣に全裸の束と真耶が寝ていた。とりあえず全裸で寝て体温が低くなっているのでシャワーを浴びる。もちろんその前に二人へ毛布を掛けるのを忘れない。

「俊葵様、おはようございます。朝食は如何いたしましたしょう」

「ああ…眠い…ああでもシャワー浴びなきゃあ…。おうクロエ、背中を流せ」

「お風呂のご用意はできております。では参りましょう」

クロエの手に引かれるまま浴室へ入る。クロエがなんで鍵のかかった俺の部屋にいるのかという疑問はどうでもいい。とにかく今は寝汗を流したい。

「俺が朝は機嫌が悪いって知っていたか？」

「いえ、俊葵様は寝起きの機嫌が悪い。という事なら知っておりました」

「それで十分だ」

クロエを押し倒して馬乗りになる。クロエは表情一つ変えようとせず俺の身体を可能な限り洗い続ける。

「やっぱりクロエは良いなあ。束たちがメインディッシュだとすればデザートだ」

「私などは前菜のチップスにもなりません。しかし俊葵様は私にとつての…あの…その…」

「無理に例える必要はないよ」

馬乗りから抱き合う体勢に変えて身体で洗ってもらう。

「俺は何だつていいよ。どうせその程度の男なんだし…」

いけない、ちよつとネガ入ってる。

「今すぐ俺を喜ばせろ。頼むからさあ…」

ダメだ…このままじゃ悪循環で自己嫌悪が激しくなるばかりだ。どうにかしてこの状況を脱さないといけないな。

「では朝勃ちの処理をいたしましょう。セシリアさんに会われるのですから、俊葵様の肉茎が暴走してはいけません」

「うくん…今はそのう気分じゃあ…」

「ではマツサージなど」

「それもなんかなあ…」

「ふふ、いつも通りで安心いたしました。セシリアさんがお待ちです。そろそろ上がりましょうか」

いつも通りとはどういう事だろうか？ただ我が儘にクロエを振り回しただけなのに。

「俊葵様、貴方は常に我が儘であるべきです。傲慢や慢心は強者にのみ許された事。ですから強者である俊葵様の我が儘は叶えられるべきなのです」

「ならクロエの言う通り一発抜いてからデートに行こうかな」

その後、乱入してきた東と真耶さんの相手もしたのでセシリアとの待ち合わせに遅れそうになったことは言うまでもない。

……

…

「ごめん、待ったかな」

「いえ、特に待っていませんわ。待ち合わせ時間ピッタリ、さすが俊葵さん」

汗の匂いをごまかす為か制汗剤の香りが強い。きつと長い間待たせたのかもしれない。

「本当は待ってたら？」

「いえ、待ってなど」

「正直に言わないと今日のデートは無しだぞ」

「……本当は少し待ちましたわ、30分ほど…」

やっぱり待っていたんじゃないか。30分前と言えば俺が東にフィニッシュを決

めていたころだ。こんな暑い中セシリアを待たせていたのに…。

「待たせてごめん。セシリアを待たせてちよつとお痛をしてみた」

「俊葵さんらしいですわ。ちよつとむつとしましたがそれが俊葵さんですものね」

「その代わり今日はセシリアとデートだ。セシリアの分まで外泊許可も貰ったし夜まで一緒にいられるぞ」

「…／／／」

ナニを想像したのかボツと頬を紅く染める。今からこの調子じゃあプールで大丈夫かな。

「ほら行くよ」

セシリアと腕を組んでモノレール乗り場へと急いだ。

トシキとセシリアが二人並んで歩いて行くのを見ていた影が二人。異性関係の情報を収集する時の女性のリーダーは何より情報収集能力が高い。

「ふっふっふ、あそこのテーマパークには私の家が一枚かんでいるのよ。逃がさないわよん」

「僕のお父さんもあの企業に資金援助していたなら早く教えてくれればよかったのに」

「どこの誰だか知らないが、誰が呼んだか謎の人、皆の助けを聞きつけて、やってきましたパイロット。今度は己の欲の為、ともかく欲を満たす為、金と権力携えて、行くが

二人の乙女道。

……

…

IS学園を經由しているモノレールは連日人であふれている。特に休日はIS学園から町へ行く生徒たちが多い。

俺やセシリアはIS学園でも有名人なので目立ってしようがない。がしかしいつもよりは目立っていない。

「今日の俊葵さんはとても…その…」

「刺青と傷が少ない？」

「ええ、いつもより綺麗な身体をしております」

「今からプールに行くからな。不必要な刺青と傷跡は消してきた。でもこの傷だけは消したくなくて」

シャツの上から残した傷痕を優しくなぞる。

「この傷とは？」

「俺が最初の戦闘で負った傷だよ。カッコ悪いけど苦い思い出の傷なんだ。でも、だから大事にしたいかな」

「初心忘れるべからず、という事ですね。良い心がけだと思いますわ」

「そう言われると嬉しいな。セシリアもお洒落してきたんだ。その服初めて見るよ」

セシリアはいつものワンピースではなくて七分丈のパンツに蒼いキャミソールを着ている。上着は着ているけれど大きくて形の良いおっぱいはよく目立つ。それにスリムタイプパンツなので大きくセクシーなお尻の形もはつきりと分かってエロい。

「急なデートなのでおろしたてですわ。どうでしょうか？」

「すごく可愛いよ。でも目のやり場にちよつと困るな」

「そんな、俊葵さんでしたらいくらでも見てくださいませ。もちろん着ている服の下も……です／＼」

「外泊許可書を提出してもらっててよかった。今夜は俺の隠れ家で過ごそうか」

「とても楽しみですわ／＼」

「そりゃよかった」

そんな二人の様子を探る新たな刺客が4人。

「東様、これは俊葵様のプライベートの侵害になるのでは？」

「大丈夫だよ。私たちは偶々手に入ったチケットを使って休日を楽しみただけだから」

「その通りだ。久しぶりの休暇を楽しませてもらおうか」

「どうして私まで……まだ学校でやらなきゃいけない仕事があったのに……」

最強と最恐を乗せた列車はいつも通りのコースをいつも通りの時間に通り過ぎてい

く
の
だ
っ
た。
。

7 9 話

プレオープンだというのにプールは大盛況だった。並ぶ必要はなかったけれどそれなりに人がいる。迷子にならないように気を付けない。

「よし…それじゃ俺はこっちだから後で逢おうな」

「はい、ではプールでお会いいたしましょう」

折角つないだ手を放してお互いの更衣室へ行く。男性用の更衣室はごった返していた。そんなに女性の水着が見たいのかね。

まずは服を脱いで全裸になる。人の裸を見る趣味を俺は持っていないが周りの人は違うらしい。人の視線には敏感なので見られているのが分かる。身体には小さきまざまな怪我の痕があるから仕様の無い事なんだろうけどほんのちよっぴり恥ずかしい。

「すっげえ…ヤクザだヤクザ」

「デカーーーい、説明不要ッツツ」

「おとーさん、なんであの人のからだけがばっかりなの？」

「しー！見ちゃいけません！」

せめて俺の聞こえないところで言って欲しいもんだ。

水着を穿いてアロハを着て準備万端。銃やナイフは必要なさそうだしカバンの中に入れたまま携帯だけ取り出してロッカーの中にしなう。

「よし…」

周りの視線に包まれながら消毒液を浴びてプールを目指す。財布は持ってこなかったが携帯で買える物ができるので必要ない。…と思う。

取り敢えずセシリアが出てくるまでにペットボトルのジュースでも買っておくか。どうせ後から必要になる訳だし。

近くの自販機に携帯をかざして炭酸飲料と濃縮還元の100%ジュースを買う。セシリアは確かオレンジジュースで良かったはず。俺は何でも飲めるので取り敢えず炭酸を選ぶ。

セシリアには悪いけれど小腹がすいたから何か食べれるものも買っておこうかな。女性の着替えてどうせ時間がかかるだろうし、と思い売店へ足を延ばす。

「ドネルケバブのホットチリソースを5個、ホットドックを5個、ビッグハンバーガーにパテを三枚追加したヤツを5個、以上でお願いします。あ、それとホットドックとバーガーのマスタードは大盛で」

「か、かしこまりました」

焼きそばやたこ焼きも良いが箸を使わずに手軽に食べられるものを買っておこう。ゴミが少ないし手も汚れにくいので立ちながら食べられる。

店の奥を覗くと手抜き無しで作られている。作り置きを出さない店は好きだ。メニューの看板にも『注文を受けてから調理いたしますので少々お時間をいただきます』と注意書きがしてある。

これだとファーストフードじゃなくてスローフードだな。早さが足りないッ！

十数分待つとようやく注文した品が出てくる。少し待たされた感が否めないが紙袋から香ばしいチリソースが香ってきたので許してしまう。

さっそくケバブの袋を破り一口頬張ると口いっぱい甘いソースと肉汁があふれた。トマトの酸っぱさが肉の脂っぽさをスツキリとさせレタスのシャキシャキ感が最高のコラボレーションを奏でる。

三つ目のケバブを平らげる頃にセシリアとの待ち合わせ場所に着いた。セシリアがまだ来ていない事を確認してハンバーガーの袋を破る。マスタード多めと言ったのに予想以上に少ない。味は悪くないけれどもうちよつとパンチが欲しくなる。

しばらく待っているとセシリアが姿を現した。真つ黒なビキニを着ていたので最初はセシリアだと気付くまでほんのちよつぴり時間が掛かった。

コチラに気付きトコトコと小走りでこっちへ来る。その際におっぱいがプルンプルンと揺れ動く。俺しか視界に入っていないのか

「お、おう…」

「あの…どうでしょうか？ 似合っていますでしようか／＼」

「セシリアって黒も似合うんだな。スゲエ可愛いよ」

「ありがとうございます／＼ 俊葵さんの水着もとてもユニークで似合っていますわ」

「そりやどうも。コレ喰うか？」

褒められて気分のいい俺は一人で食べても味気のないホットドックをセシリアに勧める。

「では」

…

…

しばらく二人で遊んでいるとある看板の文句が目に入った。

『ペアで頑張れ！ 頂上目指してGO MY WAY！』とはなんでしようか？ レースなら自分の道よりコースを走ったほうが良いと思えますが」

「英語が堪能なセシリアからしてみれば日本人の英語はおかしく感じられるのかな。ア

レは意味のない文句だよ。たぶん二人三脚か何かの宣伝じゃあないかな。出場してみるか?」

「え、あの、二人三脚だと身体が触れ合ってしまいます／＼」

「そんなの気にするなつて」

ワザと身体を密着させるように抱き寄せる。脇腹に当たるおっぱいの感触が素晴らしい。

「見ろよ。優勝賞品は豪華旅行券だつてさ。しかもペアでのご招待、七泊八日の家族風呂温泉ツアー。どうせ夏休みの予定なんてまだ決まつてないんだ。二人の仲をしつぱりと深めようじゃあないか」

「……／＼／」

真つ赤な顔を伏せてしまった。この沈黙は否ではなく応だろう。早速セシリアと出場申し込みをやりに行く。

「……貴方も一緒に出場するのですか?」

「もちろんです。プロですから」

「ではコースの方へ行つて待つていてください。あともう少し手始まります」

受付のお姉さんの『空気読めよ』つて目は完全に無視して出場を決定。俺のやる事に文句のある顔をするなんて命知らずな奴だな。クロエや束がいなくて本当に良かった。

「じゃあセシリア、ストレッチを手伝ってくれ」

スタート地点は水着美女ばかり。右を見ても左を見てもおっぱいっばい夢いっばいお尻もいっばいぷるんぷるん。セシリアにストレッチを手伝って貰いながら彼女たちの横乳や下乳を盗み見る。

「俊葵さん…私に集中してくださいまし」

むにゆうと背中におっぱいの感触。力が抜けておでこが太ももにピタリと引っ付く。

「これだけ準備したら十分ですわね」

「ああ、あとはスタートを待つばかりだな」

……

…

「あ、貴女は?!」

「オフレコで頼む。私とコイツも出場する」

「もちろん宜しいです。こちらにご記入を」

……

…

「それでは第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レースの開催です!!参加者の女性陣に大きな拍手を!!」

わああ！つと大きな拍手と歓声に包まれながら俺たちは入場する。男性の参加者が俺を含めて三人しかいない。受付での圧力に屈しなかった漢が二人もいると思うと少し嬉しくなった。

「二部、分不相応な方がいますが良しとしましょう」

ジロリと俺たち漢が睨まれる。特に俺に対する視線はいつそう厳しい。きつとこの傷の所為だろうな。

「ルールは簡単、浮島やコースから落ちて水中に入ったら失格です。ペアのどちらかが落ちても失格にはなりません。二人そろっていないとクリアが難しいコースばかり。それではスタート三秒前…2…1…ゼロオ!!」

パアン！と景気の良いピストルの音と同時に皆は一斉にスタートする。俺とセシリアも一位を目指して走りだした。

「まったく…水上戦闘の訓練はあまり得意ではありませんの」

「そう言ってる割に良い動きしているじゃん」

俺達ペアは全体の真ん中らへんをゆっくりと走っている。他のペアは水着を奪い合ったり押しあつたりと妨害工策に勤しんでいた。

水着が取れた時の歓声は男のモノに相違ない。だつてそうだろ…。

「男のくせにこんなところに来るなんて。空気を読みなさいよ」

悪口を言われそちらを向くと俺の右後ろでスタートした女性が俺を押そうとしてきた。特に脅威でもないのでヒラリと避けて先を急ぐ。俺に避けられた彼女は勢いそのまま他の女性にぶつかり、そのすぐそばで水着がひらひらと宙を舞っている。

「ひゅ〜♪脱げちゃった」

「俊葵さん、集中してくださいまし。そろそろ第一関門ですわ」

前を見ると3メートルは有りそうな大きな壁がそそり立っている。ペアの片方が肩車でもして相方を越えさせてから引き揚げてもらうのが常套手段だろう。しかし俺達ペアにあの程度の壁は何の障害にもならない。

「自分で上れるか?」

「もちろんですわ」

他のペアがあの手この手で上っているのを横目に二人で同時にジャンプをして飛び越える。着地も無事に終わりさて次の関門へ急ごうとしたところで俺たち二人の上を影が通過した。

影は俺たちの目の前に着地するといきなり攻撃を仕掛けてきた。

「むっふっふ、捕まえたよんセシリアちゃん♥」

「(´▽`)から先へは行かせないぞ俊葵」

げえ千冬!あと束。

「卑怯だぞ!」

「だまらっしゃい!一夏と鈴のためにも負けられん。あの二人はもつと仲を深めるべきだ」

それには同意するけれど…。

「セシリアちゃん♪俊くんとの温泉旅行は渡さないよん」

「セシリア…残りの障害物は任せたぞ!!」

このまま二人に阻まれていたのでは俺たちは負けてしまう。二人には悪いけれど本気で対処させてもらうぜ。千冬さんを腕を掴んで力任せに束にぶつける。しかし二人とも超人的な身体能力の持ち主なので水に落ちる寸前で浮島に握力だけで捕まっている。

「凄い!さすが世界最高峰の頭脳と肉体を持つペア。あの程度ではびくとも致しません!」

二人を相手に食い止めている俺を褒めろよ。

「どうしてココに?俺がセシリアとデートするなんて誰にも言つてなかったんだけど?」

「それならセシリアちゃんがスキップしながら皆に自慢していたよ。校内で知らない人はいないくらい周知の事実だよ」

「私たちの他にもいろんな方法でチケットを手に入れてきている生徒もいるぞ。今頃セシリアもリタイアしている頃だろうな」

千冬さんの言葉に動揺した俺は東に突き飛ばされて浮島のない方へ身体が向かう。浮遊感に襲われて重力に従い水面へと誘われる。

「これで後はオルコットだけだ」

まだ…まだ終わってない!!

「オラア!!」

両手で思い切り切り水面を叩いて浮島まで戻る。

「んなつ!!なんて事だあ!!水面を叩いて戻ったぞ!!」

実況解説もさすがにあの動きをどう解説して良いのか分からないようだ。

無事に浮島へ着地した俺は俺に背を向けている二人の足を掴んで無理やり水面につけた。二人だからどうせ無事だろうと思っっている。

「むう…負けちゃった」

「私はまだ戦えるぞ!」

「負けを認めようよちーちゃん。ISを使って良いのならまだ戦えるけれどもう駄目だよ」

「くう…自腹で二人を温泉に招待するか」

80話

「セシリア、しつかり掴まっけていろよ」

「畏まりました」

セシリアを背中に背負ってコースを爆走する。障害物などものともしない身体能力で束と千冬さんに奪われた時間を取り返していく。

斜めになった板が二つ用意された障害物は二人で向かい合わせになり互いに押し合ってクリアする物なのだろうが俺には関係ない。壁を蹴り落ちないように軽やかなステップでクリアした。

誰が必要としているのか分からないが昇り棒の障害物があった。きつとおっぱいに挟まれた棒を見たいのだろうな。セシリアはこの障害物をクリアする時に降りることを申し出たが関係ない。二本の棒を掴みゆつくりと確実に上ってクリアした。

そして最後の障害物：ロッククライミング。プロ用の難易度だろコレ……頂上付近が鼠返しになってんぞ。

「今度こそ降りますわ」

「いや、セシリアには俺の強さを見てもらいたいからしつかりと掴まっけていてね。このくらいのロッククライミング、俺には地面を歩くのと大差ない」

そう言っつて思いきり足の指に力を込めて壁の出っ張りに引っかけて壁を歩く。

「凄い!!これまでも障害物を難なくクリアしてきたがこれは本当に凄いぞ!!か、壁を歩いているう!!」

「騒ぐほどの事でもないさ。こんな出っ張りだらけの壁は床と何ら変わりない。世界のロッククライマーの程度が知れるな」

「騒ぐほどの事ですわ。こんな芸当は誰にもできません」

「実はセシリアと俺の体重をほぼゼロにする忍術を使っているから指の力で上っているだけなんだけどね。風が吹いたら飛ばされちゃうからさっさとゴールしようか」

「卑怯な事は嫌いです」

「セシリア、お前は勘違いをしている。ルール説明の時に超能力や忍術を使っつてはいけないなんて言われていない。なら使っつても大丈夫だ。モラルやマナーなんぞ勝負の世界では必要ない」

「むう…：やっぱり俊葵さんのそういつたところは嫌いですわ」

「ハッキリ物を言う…：セシリアのそういつたところ嫌いじゃないな」

「本気にしないでくださいまし…本当は愛しております。俊葵さんにほんのちよっぴり意地の悪い事をしてみたかったです」

セシリアも可愛いところがあるじゃあないか。

数十秒後、他の選手がロツククライムに到達した時点で俺たちはゴールして優勝賞品の旅行を手に入れた。

他の選手は悔しがると思いきや圧倒的な実力差に何も言えないようだ。むしろセシリアの正体を知った人は我先にとサインをねだっていた。

因みに東と千冬さんの傍には誰も近づいていなかった。まあ、あんな圧倒的オーラを発する人に近づける人はそういないだろう。

「優勝おめでとう。一応、賛辞の言葉を贈らせてもらおうか。たとえお前が卑怯な事をして優勝したとしても証拠がないからな」

「知ってたんですか？」

「いや、どうせこんな事だろうと思っていただけだ」

千冬さんに隠し事は出来ないなあ。浮気とかゼツタイできなさそう。

「で、俊くんはその旅行券を使って誰と旅行に行くのかなあ？」

「それなんだけどセシリアと行く事にするよ。一緒に取った賞品だし別に良いだろ？」

「もちのろん、一緒に行っておいで〜」

「あの…実はこの旅行の日には予定が入っていました。ですから…その…イギリスへ帰らないといけないのです。私は予定さえ合えばいつでも構いません。東さんか織斑先生が使ってくださいまし」

そうか、ならセシリアには今度埋め合わせするとしてこのチケットは誰と使おうか。セシリアと行く予定だったから他の人と行く事なんて考えていなかった。

「なら東、一緒に行こうか」

「うーん…行きたいのは山々なんだけどその日程はクーちゃん和黑鍵の点検をするって決めたんだよね。俊くんには悪いけどクーちゃんの方が先約だから行けないなあ。ごめんね、ちーちゃんと同じ来て」

「私もその日は予定が入っているな。臨海学校でのことをIS委員会に報告しなくてはいけない。あのクソババア共が…ろくにISの操縦もできない耄碌は黙ってお飾りになっただけならいいんだ」

IS委員会のクソババアといえは俺のISを日本の所有物にしようとしていた連中だ。俺が『どこの国の代表にもならない。文句があるなら俺よりも強いヤツと戦わせろ』と言ったら日本の代表候補生数人と戦わされた。結果は言うまでもなく俺の圧勝、それ以来は全く干渉してこないのが俺の実力がよく分かったとみえる。いつか殺す。

「大変そうですね。それじゃあ一緒に行く人は後で探すとして今日は遊び倒すぞお」

」

……

…

廻ること数時間前のＩＳ学園、ここにもデートをしようと画策する男子が一人。彼女のいる部屋の前に来ていた。

ノックをすると部屋の中から『あゝい』と気怠そうな鈴の声が聞こえてきた。きつと昔みたいに短パンタンクトップでクーラーの効いた部屋でポテチを食べながら寝転がってゲームをしていたに違いない。

「人がクーラーの効いた部屋でポテチを食べてゲームしてる時にどこの誰様よー…つて一夏じゃない。あんた今日休みだったっけ？」

俺の予想通り、鈴は短パンタンクトップ姿で出てきた。

「用事が早く終わってこんな物を手に入れたから一緒にどうかかなと思つてさ」

午前中に簪と一緒にある雑誌の取材を受けた。記者の話では日本の代表候補生と男性パイロットのインタビューをしたかったそう。俊葵がメディアへの露出を避けているので必然的に俺の方へそういった話が舞い込んでくる。

俺も悪い気はしなかったし謝礼も支払うと言われたので二つ返事で引き受けた。引つ込み思案の簪が受けた理由は知らないけれど明るく応対で着ていたと思う。

「街の方にできたプールのチケット。もし暇なら一緒に行かないか？」

「行く!!ちよつと待ってなさい!!」

『ボタン!』と勢いよく閉じられた扉の裏側ではあーでもないこーでもないと言う鈴の声と何かを物色している音が入り混じっている。

ちよつと(15分)待っていると扉から着替えた鈴が荷物を持って現れた。

「化粧はしなかったのか？」

「これからプール行くのに化粧するバカがどこにいるのよ。それにあたし化粧ってなんだか苦手だし。あ、でもやっぱりお化粧して着飾ったほうが良いかしら……」

「そういうつもりじゃないんだ。鈴が化粧したところ見た事ないからちよつと思っただけ」

彼氏とのデートなのに化粧しないのか、という気持ちが無いわけでもない。ほんのちよつぴりある。そんな気持ちで鈴を傷付けてしまったのか。

「でも、こんなに可愛い鈴は俺の彼女だぞ! って周りの人に対する優越感を感じたいかな」

これが世に言う男のプライド…なのかもしれない。でも俺のプライドの為に鈴を利用するのか? そんなのダメだ。

「ならあたしもちよつとした化粧くらいはできるようにならないとなあ…正直に話してくれてありがとう」

「なんか、ごめん…」

「謝る必要なんてないわよ。あたしだって一夏にはあたしの彼氏としてカツコよくいて欲しいとか思っているもの。お相子よ、お相子」

「ありがとう鈴。それじゃあ行こうか。電車に乗り遅れたら大変だ」

鈴の小さな左手を包み込むように握る。この小さな手が大きなISを操っているんだな…。

「うん…／＼／＼」

等身大の優しい愛を醸す二人の間は俊葵曰く『あいつら見ると心が洗われるようだ』とのこと。ぶつちやけ作者も書いていてブラックコーヒーが欲しくなる。

…

…

時今に至れり

鈴が中学生と間違えられたり、俺が逆ナンされたりと色々あつたが今は落ち着いている。鈴もプールチェアに寝転がって俺が買ってきたフォカッチャサンドを頬張っている。

トマトとオリーブのソースを頬つぺたに付けて頬を膨らませた姿はとても可愛い。

「なあ…鈴」

「もぐ…もぐ…んく、あによ…」

「美味いか？」

「当たり前でしょ。あんたも食べる？それだけじゃ足りないでしょ」

そう言つて俺にフォカッチャを差し出す。俺は手に握つたハンバーガーを包んでいた袋を見下ろす。

確かに鈴の言うように俺の腹は満たされていない。だからと言つて鈴に買ってきただご飯を食べるなんて事は出来ない。だから断わつて別な物を買に行こうと立ち上がったたら腕を掴まれた。

「ちよつと待ちなさいよ。ああ〜〜む…ん…ん…ごくん。ふう…よし、あたしも買っていくわ」

「それじゃあ逸れないように…」

ワザと鈴の肩を抱いて密着する。やつぱり男の独占欲は際限がない事を再確認した。俺もこんなに独占欲があるんだから俊葵も独占欲があるんだろうな。俊葵の独占欲か…：…そもそも俊葵の彼女は誰だ？

東さんや千冬姉も俊葵の彼女らしいけど…クロエや簪も俊葵の彼女だしいったい何

人いるのだろうか。ちよつぱり羨ましい。

なんて思っていたら腕をつねられてしまった。

「あなたの考えている事なんてお見通しなのよ。どうせあたしの他にも彼女が欲しいなんて思ってたんでしょ？」

「うっ…」

「別に良いわよ。ただあたしが認めた女限定だけだね」

「俺は鈴一人をきちんと…」

つい本心とは違う事を口走ってしまふ。鈴の事は大好きだしずっと一緒に居たいと思う。でも他の女性から迫られた時にハッキリと断れるだろうか。

「あたしが良いって言ってるんだから良いのよ。俊葵を見なさい。あんなチャランポランでも何十人も女囲ってるのよ」

え？そんなに？

「あんたも女を囲うくらい甲斐性を見せなさい。良い事？あたしはね、あんたに一番でいて欲しいの。その為なら女の一人や二人同時に抱きなさいよ。：ちよつと嫉妬するけど／／／」

「俺…やつぱり鈴が好きで良かったよ。うん、鈴の言う通りにする。でも気になる人がきたらまず鈴に報告するよ。ちゃんと査定してくれよ」

「もちろんよ、一夏の彼女がその辺のどこの馬の骨とも知れない女なんて嫌だもの／＼」

「げえ俊葵!?!」

「ジャーン!ジャーン!!ジャーン!!!」

「そんなに驚くことは無いだろJK」

「いつからいたんだ?」

「お前がこのプールに来た時からずっと見てたぜ。逆ナンした女は全部俺だぜ」

「フアツ!?!」

俊葵が超能力者だつてことは知っていたけど変身とか分身もできるのか。凄いな。

「俊葵、あんた趣味悪いわよ」

「巨乳はお嫌い?」

恐らく俊葵だろう女性が鈴を後ろから抱きしめる。

「お嫌いね」

「ところで今は何人に分身しているんだ?」

「日本だけなら都道府県ごとに10人、とある島には1000人つてところかな」

「すげえ…」

「ソレなんの役に立つのよ」

俊葵は凄い。きつと俺が想像しているよりも凄い。千冬姉や束さんが惹かれるわけだ。

「俺の役には立ってくれるよ。日本中の治安を俺が裏から守っている。法律を守って民間人を守らないクソの役にも立たない警察なんかよりも法を破って悪人を殺す俺の方が優秀だ」

「悪人でも人を殺すのはよくないと思うぞ」

「一夏の言う事ももつともだ。でも偽善で誰も救えないよりも悪で誰かを救える方がいい」

「必要悪ってことか？」

「違う、俺は悪じやあない。どちらかというところ正義だね」

「俊葵の考えはやっぱり間違いだと思う」

「なら今ここでどちらが正しいか決めるか？」

歪んだ笑顔で俊葵は構えた。胸の中心から黒い刺青が腕を覆う。

「周りに人がいるし怪我人も出るだろ」

「冗談だよ。本気にすんなって。一夏は俺の親友でもあり弟子でもある。そんな奴を殺す訳ないだろ。一夏がいやがることは控えるよ…できるだけ。そんな事より俺はこい

つを届けに来たんだよ」

そう言つて封筒を俺に渡した。

「ソレさつき手に入れた温泉旅行。二人一組でご招待なんだけどハーレムメンバー全員が予定あつて一緒に行けないんだよ」

「何十人もいるのに全員ダメだったのか?」

「はあ? そんなにいる訳ないだろ。東、千冬さん、クロエ、箒、セシリア、シャルル、ラウラ、簪、楯無さん、本音、景子の12人だな。ファンクラブもあるみたいだけど実際に会つてみないと本気かどうか分からないし」

「ふくん…凄いな」

「だろ? で、この温泉旅行要るか? 鈴と行つて来いよ。二つの意味で」

「俊葵が行かないならおれが貰うけど。ありがとな」

「たまには気が利くじゃない」

「へーへー俺はどうせ偶にしか気が利きませんよーだ。じゃあ俺はもう行くよ。楽しんで来いよ」

「おう!」

こうして俺と鈴が互いの愛を深め合う機会を得て、心も身体も重ね合つたのはまた別の話。

81話

夏と言えばなんだ？

コミケと答えたあなたは間違いない……いや、俺が傷つくだけだからやめておこう。とにかく夏と言えばコミケだ。

早朝3時、いつもよりかなり早い時間から俺は外出の準備を進めていた。なぜなら今日は八月某日、コミケが開催される日。宇宙の拡張領域に必要なものすべてを詰め込んで外泊許可書をクロエに渡す。

「俊葵様、今日はどちらへお出かけですか？」

「ちよつと個人的な買い物で数日間ここを空ける。何かあつたら携帯に連絡してくれ」「差し支えなければご一緒したいのですが……ダメでしょうか？」

クロエがコミマに……考えられない。確かに一緒に来てくれると便利だけれどアレに耐えきれぬだろうか。男の俺でさへキツイのに女性のクロエなら尚更だ。それにコスプレと勘違いされて盗撮でもされてみる……盗撮した奴を射殺しかねない。

「うくん…まあ、良いか。小銭を多目に持つてきてくれ。そこでの買い物は小銭が基本になる」

「畏まりました。では正門でお待ちください」

正門で待つっていると直ぐにクロエが来た。手荷物は見当たらないので拡張領域にしまっているのだろう。

「それじゃあ行くぞ」

「はい。では出発しましょう」

始発に乗っていたのでは間に合うはずもないのでISで向かう事にした。タクシーで行こうとも考えたがISの方が早い。

「学園外で無許可のIS展開は例外を除いて法律違反です。お言葉ですがお金を積みめば大抵のモノは購入できます。このように法を犯してまで買いたい物に赴く必要はないかと…」

「会場限定のモノもあるんだ。少しでも早く行って並んでおきたい。徹夜はご法度かどうかで法律で禁止されている訳でもない。迷惑にならないければそれでいいさ」

すでに法を犯していると突っ込みを入れないのはソレが無駄な事だからとクロエは理解しているから。クロエの中心が俊葵であるように俊葵の中心も俊葵なのだ。

…

…

有明の国際展示場は四本の柱にピラミッドを逆さにしたものを乗つけた変な形をしている。個人的にもっと普通のビルの方が使い勝手が良いそうとも思った時期があった。しかし開放的なデザインは嫌いじゃあない。

「ここが…東京ビッグサイト。初めて見ましたが変なデザインですね。それに変な人も沢山います」

「はは、俺もその一人さ」

「俊葵様は違います。さあ、前へ向かいましょう。俊葵様の望むものが手に入らなければ大問題です」

既に並んでいた徹夜組に銃口を向けそうな勢いだったので制止する。こんなところで発砲騒ぎや徹夜組の騒ぎが大つぴらになつたら今後のコミマの存続に関わつてしまう。

「ちゃんと並んで買う。暗黙の了解なんて守る必要のないルールはどうでもいい。でもここに居る人たちは俺と同じ目的を持つ同志だ。正々堂々と買い物をする。金や地位で手に入らない価値のある物を買う場所…それがコミマだ」

「御見それいたしました。俊葵様がそれ程までコミマ？とやらを愛しておいでとは…。では私もそれに倣わせていただきます」

背筋をピンと伸ばし凜とし佇まいで俺の横に並んでいる。その雰囲気当てられたのかクロエの周りには一人分の空気ができている。

朝日が昇り始める頃になるとさすがの俺も暇を持て余すようになった。携帯端末に入れているソシヤゲもスタミナ切れで暫くできないし、わざわざカードで石を買ってスタミナを回復させるほどハマっている訳でもない。

「ああ…徹夜組に参加するのがこんなにも苦行だったとは思わなんだ。雰囲気味わおうとしたのが間違いだったかも」

「どうして会場でしか買えぬものがあるのでしょうか。もし一般販売もしていたら俊葵様がこんなにも苦しむ必要はなかったのに」

「直接サークルの人から買えたらいいんだけどなあ。それか同じものを自分で作るか」「クリエイティブな事は良い事だと思います。俊葵様もドージンシやフィギュアを作ってみては如何でしょうか？私のような貧相な身体で宜しければいつでもモデルになります」

「クロエは独り占めしたいからフィギュアにはしないよ。それより開場まであと何時間だよ…」

……

…

「これより開場いたします。大変込み合いますので決して走らないでください。また他のお客様の迷惑になりますので押ししたりしないでください」

おなじみのアナウンスが流れると長蛇の列が少しずつ動き出す。先頭集団では既に走ったりした人が警備員に取り押さえられているのがチラリと見えた。

「押さない駆けないって小学生レベルの注意も守れないヤツが同じ穴の貉だと思おうとゾツとするよ」

「しかし万が一にでも俊葵様の望む物が手に入らなかったと思うと…」

「それじゃあ絶対に手に入れないとな」

「できる限り穏便な手段で…ですか？」

「そりゃあ問題を起こして目立ちたくない」

「ではそのように…」

クロエも分かってくれたようで何よりだ。こんなに人がたくさん集まるような場所
で問題を起こしたくない。

なんて事に思いを馳せながらゆっくりと進む列に身を委ねるのだった。

……

…

本館に入れた俺はまずお買い物リストと展示場の立体地図のデータをクロエに渡し

た。

「クロエはこの場所で全年齡対象の同人誌を確保してくれ。リストと立体地図は黒鍵の中に入れたから分かると思う。分かんなかったら片っ端から二冊ずつ確保しろ。もしも売り切れていたら持っているオタクから買い取れ。十万円までなら払っても良い」
「畏まりました。では行ってまいります」

そう言うのと長蛇の列を回避するために電灯やエスカレーターや装飾の出っ張りを利用して器用に目的地まで登って行つた。

「目立つなって言ったのに……まあ良いか。よし、俺も行くのかな」

俺が買うものはもちろんR—18同人誌。売り切れる可能性があるのではんちよっぴり卑怯な事をさせてもらおうよ。

カバンの中から御札を取り出して周囲の壁や柱に張り付ける。

広域的に術を掛けるのはまだまだ難しいな。やっぱり展示場すべてに術を掛けるには道具が必要不可欠だ。

しばらく合掌をして呪文を唱えようと周りの人間が俺のことをまるで『洋服店に置いてあるマネキン』のように意識しなくなった。これを利用して俺は最前列まで行って買物を済ませる。

この術を使っている間に同人誌を盗んでしまえば良いじゃないかと安直な事を実行

してはいけない。なぜならこの術は人間を欺けても機械は欺けないからだ。つまり盗んだところを見られても大丈夫だが写真や動画には残る。記録媒体に残ってしまったら意味がない。

「悪いな諸君、欲しい物はどんな手段を使っても手に入れないと気が済まない性格なんだ」

両手いっぱい同人誌を抱えながら壁沿いまで何とか到着する。こんなに人がいる場所でISを展開するわけにもいかない。荷物はトイレで拡張領域にしまう他ない。しかし案の定トイレにも長蛇の列。

仕方ないのもう一度同じ術を使おうとしたら強い力で肩を掴まれた。懐からハンドガンを取り出して振り返ろうとしたら銃を構える前に前方から来たもう一人に手首を掴まれてしまう。ハンドガンを手放しもう片方の手にハンドガンを持ち換えようとするがそれも三人目に阻止されてしまった。

「この俺の動きに適応している?!

「朝早くにベッドを抜け出したと思っただらこんなところに来てたんだあ」

「コミケに行くんだったら私も呼んでほしかった」

「生徒会長に無断で外出なんて良い度胸しているじゃない♥」

生徒会の二人組+簪に囲まれてしまった!逃げ出せない!

ん？生徒会の三人中二人がここに居るといふ事…は。

「また虚さんに仕事を押し付けてきましたね？」

「今度こそ全ての仕事を終わらせて来たわ。虚ちゃんにこれ以上のストレスを与えるとどうなるか分かったもんじゃあないわ」

どこか遠いところを見ながら言う楯無さんの目は少しうつろに見えた。

「簪はともかく本音までついて来たのか？」

「面白そうだったからあ〜」

「だからってこんな汗臭い場所に来なかったって…しかもIS学園の制服で。目立っただろ？」

簪は仮面ライダーのキャラシャツを着ているが楯無さんと本音はIS学園の制服を着ている。

「だってコミケではコスプレをすんでしよう？だから人気のコスプレを調べたわ」

「そしたらIS学園の制服が人気のコスプレって分かったのお〜♪」

「そーいやコスプレブースにIS学園の制服っぽいのが居たなあ。遠目でも正規の制服とは違うと一目で分かる。あんな奇抜で露出度の高い制服を着ている生徒はいないからだ。」

「う〜ん…楯無さんは有名人なんだからもうちよつと目立たないようにですね…」

「おい、アレってマジもののIS学園の制服じゃね？」

「めっちゃ胸でけえ」

「ロシアの代表までいるぜ」

「ちよつと写真撮ろうつと」

やっぱりな（レ厨

「手遅れですね」

「みたいね。どうしようかしら」

「三人の携帯は頑丈？」

「それって物理的に？それとも電子戦的に？」

「後者だね。盗撮なんて許せないよ」

俺が何をするか察した三人は携帯を拡張領域にしまった。三人がしまったのを確認してから宇宙の小型のパルスライフルを取り出してチャージする。傍から見れば光るモデルガンを持っているだけにしか見えない。

ほんのちよつぴりチャージしただけで周りの電子機器は壊れだした。ざまあ見晒せ
茄子の糠漬けつてんだこんちくしょう。

「敵襲ですか!?!」

周りのオタクたちがおたおたするのを見ながら俺が満足気になっていると上の階か

らクロエが両手に持った紙袋をバタバタさせながら飛び降りてきた。

「ちよつとね。盗撮した奴の携帯を壊したくてさ。でも一人二人のを狙って壊すのは面倒だから周りにいる人のを全部壊しちゃった。そんなことはどうでもいいんだよ。ちゃんとリスト通りに買い物をしてきてくれたか？」

「こちらにございます。いえ、こちらは私が持ちますので……そちらも私がお持ちいたしまししょう」

俺が持っている同人誌まで持とうとするので拡張領域へしまった。クロエの持っている物も宇宙の拡張領域へ無理やりなおす。みんな携帯やゲームが壊れて混乱しているので誰にも気付かれることは無かった。

「だいたい何で二階から飛び降りたりしたんだ？足の骨でも折ったら大変じゃあねえか」

「このくらいの高さなら昇るのも降りるのも問題ありません。地図を見ていたら急に映像が乱れましたので敵の攻撃かと思いましたが」

「さすが強化人間、普通の人間にできない事を以下略。ちよつとした大所帯になっちゃったな。外に行こうか」

館内は暑いし外の風にも当たりたかったのでコスプレブースへ移動する。途中で俺とクロエもコスプレ衣装に着替えた。

……

…

「I S学園の制服ってマジで人気だったんだな。そこら中に似たようなの着てる奴らが
いるよ」

「おそらく世界一有名な学校の制服ですので人気なのかと思われます。ところで俊葵様
のソレは…：いったい何のコスプレなのでしょう？」

「コレか？これはデビルメイクライの主人公ダントエのコスプレだよ。このコスプレの為
に髪も染めたし身長も伸ばした。顔も変えてみたんだけど…：似合っているか？」

「とても良くお似合いです。益々愛を深める事になりました…：／／／」

全身真っ赤なコーデに身長ほどある大剣を背負い、懐にはエボニーとアイボリーの代
わりに金色のデザートイーグルを忍ばせている。自分で言うのもアレだが完成度はか
なり高い。

「う〜くん、俊くんすつごくカッコ良いわ。お姉さん惚れちゃいそう」

「マツチ〜大きい〜♪」

楯無さんと本音に挟まれながらだと歩きにくい。簪とクロエの視線だけなら特に問
題はないけれど、周りのオタクたちの羨む視線まで突き刺さると気持ちが悪い。

「あぁ〜〜もうっ!!引っ付くな!!暑っ苦しい!!」

無理やり二人を引っぺがす。羨ましいとか俺と変われって思っているヤツがいるなら申し出る。変わってやるから。勿論そいつの命の保証はしない。

「それより折角コスプレしたんだ。撮影しようぜ。クロエ、適当にポーズをとってくれ」「こつちにも笑顔を！」

「スカートの手を摘まんでください」

「振り向きを一つ」

俺が撮影を始めると調子に乗ったオタクたちが押しつけ押しつけクロエに群がる。あからさまに嫌な顔をされているのに写真を要求する君たちには脱帽するよ。

「気持ち悪い豚共！私は手前らのような愚民の為にこの服を着ている訳ではない！」

「冷たい視線もイイ！」

「もつと蔑んで！」

「ブヒ——！！」

「…うえ」

クロエもあんな顔するんだな。俺に小便引つ搔けられても嫌な顔一つしないクロエが吐きそうな顔をしている。レア顔ゲットだぜ。

「撮らせてやれ。俺はちよつとその辺行つてくるから」

「そんなぐ無体な!?お助けを!!俊葵様——!!」

クロエは自分の事を自分でどうにかできるオンナだ。きつとどうにかするだろう
 (すつとぼけ)

……

…

コスプレブース某所ではとても大きな人ばかりができていた。その中心にいるのは
 織斑千冬と篠ノ之束そして山田真耶教諭。

「なんで私までこんな格好を…」

「私なんてまだ仕事が……」

コミケ会場のコスプレブースで二人はフラッシュの雨を浴びながら大きなため息を
 ついた。それに比べて束は嬉々としてフラッシュの雨の中を踊っている。

「オタク共を味方に付けければ心強いからね。俊くんのためにも頑張ろう」

束も不思議の国のアリスのようなフリフリドレスをはためかせながらポーズをとる。

「しかし…この、なんだ？これは…対魔忍？とか言ったか。こんな破廉恥な服を着せ
 おって…」

「まだそっちの方が良いじゃないですか。誰が喜ぶんですか、こんなホルスタイン柄の
 衣装…。露出度も高いしブラのホックが壊れそうで怖いです」

真耶の背中ではコスプレ衣装のチャックとブラが悲鳴を上げていた。

「ちーちゃんのバトルスーツは大体そんな感じじゃ〜ん」

「五月蠅い。お前には羞恥心というものがないのか？」

「蚊や蠅に裸を見られて恥ずかしい？まあ、人間に見られたり記録メディアに残ったりしたら面倒だから嫌ではあるけど恥ずかしくはないよ」

「こい、コツチのダンテもすげえ」

「すげえ完成度」

「剣を構えてください」

「銃は有りますか？」

束たちを見かけたので会いに来たはずなのにオタクに囲まれてしまった。仕様がなので剣を抜いて振り回す。もちろん彼らをバラバラにできるけれどそんな事はしない。あえてこうすることで束のところへの道を作る算段だ。

俺の考え通り道ができたので歩み寄る。こちらに気付いていないようなので脅かしてやろう。

「二人並んでください」

「ぬわっ」

コツソリと千冬さんの後ろに近づいたのだけれどオタクに押されてバランスを崩してしまった。そしてそのまま俺の声に振り返った千冬さんのおっぱいに顔面ダイブ。

『わっ』と周りで声が上がった。

「この…破廉恥漢!!」

割と本気で振ったのかコンクリートの地面に刀がめり込んでいる。

「ああ、やつちまった」

「ダンテVS対魔忍」

「ダンテに500」

「俺は千冬さんに500」

なんか賭け事が始まってるんだけど。ま、別に良いか。

俺も抜いた剣を構えて千冬さんに相対する。千冬さんも六本ある刀を全て抜いて自分の周りに立たせる。あの刀の射程距離に入ったら絶対に殺される結界の様だ。

「来ないなら私から行くぞ!!」

跳躍と同時に刀をこちらに向けて投げる。俺はそれを避けて反撃しようとしたが目の前から千冬さんがいなくなっていた。

俺の影が大きくなったのを察して急いで今いた位置から飛び退いた。その瞬間、千冬さんが振って来て二本の刀の刃が全て地面に『スツ…』と入っていった。末恐ろしい切れ味だ。

「俺を殺す気ですか!!」

俺も反撃と剣を振りかぶって思い切り千冬さんに振り下ろす。しかし避けられてその刃は地面を大きく砕いただけだった。

「貴様のような破廉恥漢など知らん!!」

返事と共に斬撃が飛んでくる。俺はそれを太刀を巧みに扱い弾いてコートに隠したデザートイーグルで反撃した。

しかし直線的にしか飛ばない銃弾は千冬さんに当たるはずもなく、真つ二つに切られてしまった。

「やるな…」

「本当に俺が分からないんですか？」

「私の命を狙うものは少なくともいからな。いちいち顔も名前も覚えてられない」

「これならどうです?」

右手で顔を覆って元に戻す。顔の左半分には火傷の痕が浮き出て、袖口から覗く肌にはいつもの刺青が走る。

「なっ!?!」

「へへ、剣を収めてくださいよ」

「分かった…」

「こんな人前で千冬さんの本気を見せるわけにはいかないでしょう」

そうやって周りに呪符を撒き散らして皆の記憶を消し去る。どうしてここに居たかすら覚えていないだろう。

……

…

混乱を収めた俺たちは会場を離れて近くのホテルのスイートルームを借りた。欲しい物は買い終わったし、この大所帯ではラブホテルに泊まる訳にもいかなないのでこの位の広さが丁度良い。

クロエと本音には作者ごとに収穫物を別けてもらい、楯無さんと簪にはローション風呂の準備、真耶さんにはコンビニへご飯と飲み物を買ってくるようお願いした。そして束と千冬さんは俺の目の前で正座している。

「束はまた俺の監視か?」

「だって俊くん、朝からどこかに行っちゃうんだもん」

「そうか、それは悪かった。置手紙を残しておくべきだったよ。でもそれはそれでこれはこれだ。せめて一言あって良いだろう?」

「スパイっぽい事したかったんだもん」

絶対それが9割だろう。そういうった事は俺に対してではなく俺と一緒にして欲しい。

「千冬さんは何で一緒に付いて来たんですか?」

束の時よりも呆れ気味に訊いてみる。

「無理やり連れてこられた。私に他意はない」

「無理やり?」

「付いて来ないと俊葵に私の恥ずかしい写真を見せると言われた。仕様がないだらう…
従わないと高校生の時の写真が俊葵に見られてしまう」

それはそれで見て見たいけれどここはグツとこらえて判決を言い渡す。

「じゃあ束は有罪、千冬さんは無罪放免」

「意義あり!」

「裁判官は絶対だ。束には禁欲3日を言い渡す」

「そ、そんなご無体なあ〜」

束は正にこの世の終わりと言った顔で俺の足に縋りつく。

「三日もセックスをお預けなんて死んじやうよお〜」

「別に死にやしねえだろ。三日以上もお預け喰らってる奴なんて他にもいるぞ。大体、束は時間さへあれば求めてくるじゃあないか。偶には落ち着いたらどうだ?」

「俊葵の言う通り、年中発情するのは親友としてどうかと思うぞ」

「束さんはもう少し落ち着くべきね」

「束さんばかりズルい」

「束様はもう少し自重すべきかと思えます」

「集中砲火じゃん…俊くん助けてよ」

束の言う事にも一理ある。俺にとつては他の女の子とセックスするチャンスだけだ。束にとつて三日間の禁欲は俺が思っている以上に辛いのもかもしれない。

「うん…でもお仕置きはしたいし。よし、それじゃあセックスを一日一回に限定しよう」

「うう…一回…?」

「普通は一回で十分だ。でもその一回を拷問にするぞ…」

全身に深緑色の鱗を纏わせて、腰から延びる尻尾は電柱のように太く逞しい。身体も2m50cmを超え、おおよそ馬並という言葉が罵声になるほどの陰茎が股座から生えている。

臨海学校で暴走をしたのを切っ掛けに俺はあの状態を改良して今の姿を作り上げた。パワーとスピードの両立を図るために絞り込まれた肉体は戦車の砲弾すら傷をつけることはできない。

簪「ひっ…」

楯無「ひゅ…」

千冬「暴走しないだろうな？」

クロエ「そのように逞しいおチンポ様に犯されたら壊れてしまいます／＼」
東「まさかだよね？」

「そのままかだよ……この身体で東を犯し尽くしてやる」

結局、おちんちんを挿入することがかなわず愛撫だけで東を失神させるまでに至ったのはまた別なお話。って言っとけば読者は勝手に妄想するってエロい人が言ってた。

8 2 話

目が覚めると俺のベッドに美少女がセクシーなネグリジエで心地よさそうに寝息を立てていた。訳が分からない。訳どころかここは何処で俺は誰なんだ？何も思い出せないぞ。

落ち着け…とにかく落ち着くことが肝心だ。なんかドラマでこんな状況があつた………気がする。まずは記憶の整理から始めよう。

昨日の事は…思い出せない。その前の事は…思い出せない。自分の名前も隣で寝ていた彼女の事も何も思い出せない。なんてこつたい…正直なところパニックになつていないのが不思議なくらいだ。

と、とりあえず顔を洗つてシャワーを浴びよう。なんだか変な汗をかいた…。ココ俺の家だよな？

もしかしたら彼女の家かもしれないと思つたが一緒に寝るくらいの間柄ならシャワーくらい借りても良いだろう。

一つ目の扉はデカイキッチン、二つ目の扉は誰かの私室、そして三つ目の扉でようやく正解を引き当てた。こんな広い家に住むなんてすごいお金持ちなんだな。それに趣味も良い。この家の主人はロボットが好きらしい。私室にはプラモデルやフィギュアが並んでいた。

バスルームも広くて全面ガラス張り。まるでラブホテルだな。

シャツを脱いでまず驚く。

「これが俺の身体なのか。傷だらけじゃあねえか。でも筋肉ムキムキ…イイネ。」

次にズボンとパンツを脱いで驚く。

「ううう→俺の息子はビッグマグナム♂イイネ！」

そして最後に鏡を見て驚いた。

「なんだよコレ…」

顔の半分が火傷で爛れている。それに左目の色がおかしい。ちゃんと両目とも見えているから元々の体質なのかもしれないけれど少し怖いな。

浴槽には既にお湯が張っていたので身体を軽く流してから湯船に浸かる。

「ああ〜、いい湯だなあ。身体に染み渡るよ」

肩まで使つても足を曲げることなく湯船に浸かることができる。良い風呂だ。

「ちよつと落ち着いたし情報を整理しよう。まず俺は自分か誰だか分からない。家族や

友人関係についても何も思い出せない。でも俺は時計の読み方や給湯器の使い方は覚えていた。つまり日常生活を送れるだけの記憶は残っているって事だ。スマホのパスワードが思い出せないのは厄介だけれど指紋認証とかで開けるだろう。……もしかして俺ってすんごく頭が良かったのでは？」

でも身体中に残っている傷痕は何だろう。S Mプレイの後にしては過激すぎるし……そうだ、交通事故の痕だ。そして左目はきつと俺がハーフだからだ。それなら左目だけ色が違う説明もできる。

まあ、分かりもしない事を考えるよりも身分証明書が有れば俺が誰なのか分かる。風呂から上がったらかバンとか財布とか探そう。

その後しばらく湯船に浸かった俺はベッドルームへ戻った。さっきまで眠っていた少女はすでに起きたのか何処かへ行ってしまった。キッチンの方から水音がしたので朝食でも作っているのだろう。

「彼女がここに来る前に何か俺の身分を証明できるものを探さないと……ってな」

まずはエロ本が隠してありそうなこのクソデカイベッドの下から探そうかな。

ベッドの下へ手を突っ込んですぐに何か固いものに指先が振れる。取っ手が付いているので何かケースの様だ。開けるためのスイッチも鍵穴も見当たらない。

「これどうやって開けるんだ？」

適当に触っていると側面が光る。気になったのでそこをさすったり押ししたりしていると『カシヤツ』と景気の良い音が鳴ってケースが開いた。すると中には白銀に輝くM500が入っていた。

「なんで俺はコレがM500だつて分かるんだ？……ただの銃好きだったのか？」

取り敢えず手に取ってみる。モデルガンにしては精巧に作られている。弾丸もモノホンそっくりだ。まさかこれは本物の銃……それじゃあこの身体の傷は……。

怖くなった俺は急いで銃をケースに入れてベッドの下へ隠す。

「おはようございます、俊葵様」

やましい事をしてしている時に後ろから話しかけられると誰でもびっくりするだろう？俺もそうだ。

「おう!?お、お、おは……おはよう」

振り向いたら俺の隣で寝息を立てていた少女がメイド服を着て立っていた。

「驚かせてしまい誠に申し訳ございません。いえ、驚かすだけならどれ程よかったです。しょうか……私は主人よりも遅く起床してしまいました。どうかこの無能な奴隷めに罰をお与え下さいませ」

うやうやしく頭を下げる様はとても身に入っている。どうやら俺の事を主人と呼んでいるようだ。彼女の様子から俺は普段から恐ろしい主人だったのだろう。

「たまには良いんじゃないか？俺だつて早起きしたい時もあるし…えっと、罰はいいかな」

「なんと寛大なお方でしょう…私のような矮小な存在をお許し下さるとは。ああ…クロエは俊葵様に使えることができて心底嬉しゅうございます」

取り敢えず俺の名前はトシキで彼女の名前はクロエ、そして俺のメイドだという事が分かった。一緒に寝ていたしそういった関係なのかも。

「何はともあれお腹すいたよ。朝ごはんにしよう」

「既に…用意させて頂きました。昨夜はとても励んでおられましたのでスタミナを回復させるような肉料理を多めに作っております」

朝から肉料理か…なんてことは思わない。兎にも角にもお腹がすいて仕様がな

「それから束様と千冬様は先に席についておられます。食事が冷めてしまいう前に一緒に食しましょう」

…

…

朝食の席にはクロエさん以外の女性が二人も座っている。さつきクロエさんが言っていたタバネさんとチフユさんだ。それにしても二人とも超がつくほどの美人…おっぱいもデカくて俺好みの美女だ。

対照的な美女二人は向かい合って座っている。黒髪の彼女がチフユさんで藤色の髪で不思議の国のアリスの様な格好をした彼女がタバネさんだとクロエさんの会話からなんとなく察する。漢字ではどう書くのだろう…チフユさんは普通に千冬だろうけどタバネさんは…田羽根…田場根…東、コレが一番普通だな。

開いた席は二つ名ので俺とクロエさんの席だろう。クロエさんは上座に座ろうとしないのであそこが俺の席か。

「おはよ。昨日はクーちゃんとよろしくやっていたみたいだねえ」

「申し訳ございません…束様を差し置いて俊葵様の夜伽に選ばれてしまって…」
「俊くんの決めた事だもん。でも…えいっ」

束と呼ばれた女性に抱きしめられて緊張してしまふ。

「束さんは俊くん成分を補給するのだあ」

爆乳を押し付けられて興奮しない男はいない。少なくとも俺の息子はとても正直だった。ズボンの中で全弾装填を終えて発射準備は整っている。

「ねえねえ、俊くんのココはもうこんなに大きい／＼／」

「せめて朝ご飯を食べ終わってからにしろ束。行儀が悪いぞ」

「へへ、さっさと食べるもんねえ」

束さんは大きなステーキをフォークで串刺しにして思い切り頬張った。もにゅも

にゆと美味しそうに肉汁を味わっている。しばらく咀嚼をしてから『ごくぐん』と大きく喉を膨らませて飲み込んだ。

ただ咀嚼して、嚥下させて、くちびるを舐めているだけなのに凄く興奮する。

俺の股間には血が集まってこれ以上に無いくらいパンパンになっている。きつと俺は昨日の夜、クロエさんを抱いて何度か射精しているはず。それなのに身体は肉を欲し、女性を犯そうとしている。

「あの…後で自分で…」

「そんなこと言つてえ〜♥ここはこんなに私を求めてるよお？」

「ホント、大丈夫ですから」

「もしかして新しいエロゲーを買ったでしょう？ 束さんは何でもお見通しなのだ〜。俊くんがこうしてエッチを拒む時は決まって新しいエロゲーで抜く時って相場は決まっているもん」

「うん…まあ…そう」

嘘は言っていない。記憶がないから俺が持っていたエロゲだったとしてもニューゲーム状態だ。束さんとクロエさんはどうにか誤魔化せたけど千冬さんがこちらをじつと見てくる。

「今日のお前はなんだかおかしいな」

ギクツ

「もう、俊くんがおかしいのはいつもの事でしょ」

「束様…それはそれで」

「えつと…束さんの言うように俺はいつも通りです…よ？」

俺が束さんと言ったのを三人とも見逃しはしなかった。まずはクロエさんが椅子を蹴って俺を転ばせる、次に千冬さんが刀を俺の喉元に押し付けて束さんがグロツクで俺の腹部に数発の弾丸を撃ち込んだ。

「うっ…ああ…痛い…痛いよお」

「俊くんをどうした!!」

「何も聞いていないのに撃つな。死んだらどうするつもりだ」

「俊葵様に危害を加えて成り変わろうとするゴミは死んで当然です」

痛い…腹が燃えているようだ。どうしていきなり…。

「痛い…助けて」

『お言葉ですが束様。この方は俊葵様で間違い御座いません。多少言動に難有りですが身体的特徴もゲノムも俊葵様のモノに相違ありません』

「え？でも私の事を束さんなんて絶対に言わないよ？」

『しかし私は俊葵様にずっと装備されたままでした。ですので俊葵様が入れ替わったと

したらすぐにでも分かります』

「じゃ、じゃあ……もしかして」

『はい、彼は俊葵様です』

「嘘でしょ……じゃあ……私は……」

痛みが和らいでいく。ああ……出血多量で死んでしまうのか。何て短い人生だった。いや、実際は短くないかもしれないけれど記憶喪失の俺としては短い人生だった。

「ああ……なんだか意識が遠の……かない？あれ？お腹も痛くない」

撃たれたはずのお腹の傷跡は無くなっていた。傷口は塞がり痛みもない。凄い……いったいこの身体はどうなっているんだ。

「俊葵、何があったのか説明しろ。まるで訳が分からんぞ」

「えっと……俺も何が何やら。自分が誰かも思い出せなくて……誰か説明してくれよ」

「思い出せない？私たちの事もか？」

「はい、クロエさんのおかげで俺がトシキで皆さんが千冬さん、束さん、クロエさんという事だけしか……」

「いつもの冗談ではないよな？」

「えっと……本当に記憶が……」

「俊葵様でしたらあの程度の銃弾は防いでいます。それに痛覚も感じている……悪ふざけ

でないとしたら本当に記憶喪失をしているとしか考えられません」

千冬さんの詰問にしどろもどろになっていたらクロエさんが助け船を出してくれた。記憶が無くなる前からクロエさんにはお世話になっていたのかも。

「とりあえず日常生活に問題は有りません。携帯電話の使い方や常識は忘れていません。パスワードは覚えていないですけど」

『俊葵様のパスワードはすべて私が管理しているので問題ありません。銀行口座のパスワードからアダルトサイトまですべてのパスワードを網羅しております』

また天の声が聞こえる。どこからともなく聞こえてくるこの声の正体は一体誰なのかな。辺りを見回しても4人しかこの部屋にいない。

「誰ですか?」

『申し遅れました。私はPilot Support Education Interfaceです。皆さんは頭文字をとってパイイと呼んで下さります。今の俊葵様にも分かりやすく説明いたしますと『ISのパイロットのサポートをするための人工知能』とでも言いましょうか』

「I…S…」

何だろうか。IS…パイロットって事は何か乗り物か何かなのかな。

「簡単に言うとISというのは女性しか乗れない宇宙服だ。この束が作った。おい、お

前の発明品なんだからお前が説明しろ」

「私は……俊くんを…ああ…ああ!!」

「大丈夫ですか?」

「どうして俊くんはいつもそうなの!？」

「何が?」

「いつも私たちに優しくつてさ!!私は俊くんを撃つたんだよ!!」

「痛かったけど傷は治ったし傷跡もないし。別に勘違いだったわけだし気にしていませんよ。ほんのちよつぱり怖かったけど」

大丈夫だつてことの証明の為に撃たれた箇所を見せる。傷口はすっかり塞がつて跡もない。俺がどんな人間かは知らないけれど撃たれた傷がすぐ治るって普通じゃあない。

「東さんが悲しいと俺も悲しくなります。だから元気出してください」

「許してくれる?」

「許すも何も俺には記憶がないですから皆さんがいないと生きていけません」

「えへへ〜私がいなくて生きられないかあ〜♪そつかあ〜そつかあ〜♥でゆふふのふ〜

♥よおうし、俊くんの世話は東さんにお任せなのだあ」

さつきまで落ち込んでいた人とは思えない程、元気になった東さんはISについて懇

切丁寧に説明してくれた。そして千冬さんは俺の立場やここが学校の地下研究所兼俺の自宅である事を、最後にクロエさんは俺の学校生活での言動、地位、交友関係、交際関係を丁寧に教えてくれた。

三人から話を聞く限りでは俺という人間はどうしようもなく無責任だという事が分かった。何股もかけて女の子を、しかもまだ世間を知らない幼気な女子高校生を手籠めにしていたなんて考えられない。

「とりあえず俺が無責任一代男だという事がよく分かりました。本当にごめんなさい。きつと皆さんにご迷惑を掛けて生きていたと思います」

「そんな事はごさいませぬ。俊葵様はとても優しい方なので女性を惹きつけるのです。かく言う私も俊葵様の優しさに救われた一人でこの身体の一片、血潮の一滴から骨のかけらまで全て俊葵様の所有物でございませぬ。どうかお好きなようにお使いくださいませ」

「こんな美少女が俺の所有物なんて酷い事を言うなんて正気の沙汰じゃあない。俺に弱みを握られているんだな？ そうなんだろう？」

「そんなこと御座いませぬ」

「東さんも千冬さんもきつと俺に弱みを握られているんだ。そうじゃあないとこんな美人が俺の恋人なはずがない」

「むう…そんな事ないのに。それじゃあ俊くんのオンナ全員が俊くんの人柄に惹かれたって証明してあげるよ」

不穏な捨て台詞を残して三人は外へ行ってしまった。待っていると言われたけれど外に出たくてしようがない。

しばらく待っていると束さんは沢山の女性を連れて戻って来た。彼女たちに外見のな共通点はなく、強いてあげるとしたらみんな美人だという事だ。

「あの…彼女たちはいったい……」

「み〜くんは俊くんのハーレムメンバーだよ。どんな言う事でも聴くから何でも命令してみてください」

「め、命令って…」

どんな命令をすればいいのか分からない。例えば『三回回ってワンと言え』とか『お手、御代わり、お座り、伏せ、チンチン』とかそう言った事しか思い浮かばない。そもそも初対面の女性に対してエッチなお願いなんて出来ないぞ。

「エッチなお願いでも良いわよん♥」

蒼髪の女性が艶やかな声色で俺を誘惑しながら身体を寄せてきた。こんな美しい女性に寄られると緊張してしまう。

「あ、えつと、エッチなお願いって」

「みんな俊葵くんが記憶喪失なのを知っているわ。でもみんな何も気にしていないから好きなように命令して良いわよ。例えば『全裸になって公開オナニーをしろ』とか『靴を舐めろ』とか色々あるでしょう」

「俺はそんな酷い命令をしてたんですか!？」

「俊くんは日常的にしてたよ」

「俊葵は鬼畜だった／＼／＼」

「俺はそんなに酷い人間だったのか」

「俊葵さんはとても紳士的で優しくて誠実な方でした。偶にエッチな時もありましたがそれを差し引いても素晴らしい男性ですわ」

「結局のところ鬼畜だったの？紳士的だったの？」

「みんなが嘘を言っているようにには思えないしどれが本当の俺か分からない。

「つまりこう言う事!!みんな、全裸になって俊くんにご奉仕するよ!!」

東さんの合図で一齐に服を脱ぎます。ある人は恥ずかしがりながら、ある人は自棄になりながら、ある人は率先してスポポ〜ンと、そしてまたある人は下着が気に入らなかつたのか何処からともなく下着を取り出して着替えた。何も無い空間から突然、光の粒子と共に下着が現れたけれどどんな原理なのだろうか。

「それまで……しなくても……」

後退りしながら逃げ出すチャンスを窺う。しかし扉は彼女たちの後ろ、窓は地下なのでハリボテ。右には蒼髪のお姉さんが…いや、俺の方が年上だから蒼髪のお姉さんっぽい雰囲気美人が、左には東さんが、そして後ろには千冬さんが抱き着いて俺を逃がそうとしない。

「お、俺記憶がないから実質童貞で…上手くできるか」

俺はまだこの時に余計な事を言ってしまったと思ってもいなかった。

楯無「俊くんの童貞はこの世で最も価値あるモノの一つだわ」

簞「ここはオークションで決めよう」

簞「でも俊葵への愛をお金で推し量るのか？」

セシリア「しかしここに居る皆さんの共通点と言ったらお金持ちという事だと思われ
ます」

束「セシリアちゃんの言うようにみんなお金持ちだね。あ、簞ちゃんの分は私が払うから気にしないでねえ」

ラウラ「む…束博士は余裕綽々といったところだな」

千冬「こいつは俊葵の一回目の童貞を貰っているからな。……ちつ」

真耶「これ私は不利です…生徒より貯蓄の少ない教師って……」

「あの…皆さんはお金持ちなのですか？オークションって言っても……」

「そうだ、敢えてとんでもない初期価格にすればみんなも手を引いてくれるかも。そうだなあ……いくらぐらいが良いだろうか。東さんはすごい発明した博士みたいだし……。」

「オークションの初期価格は1000万円で行かないか？」

真耶「食費は学食が安いから何とかなるとして……職員寮に住んでいるから家賃はないし夏のボーナスが出たから……えつと……車を買う貯金を使えば250万円くらい……」

千冬「私は2000万円だ」

シャルル「僕は……お父さんに頼めば……それでも3億ぐらいかな」

楯無「日本で5億円くらいなら」

ラウラ「150万ユーロくらいならすぐに用意できる」

セシリア「300万ユーロは固いですわ」

東「なら私は500億くらいならすぐにでも払えるよ」

「それってジンバブエドルですよね？」

「もちのろん円だよ」

ええ……みんな超リッチなお嬢様。1000万円くらいならすぐに払えるのか。

東「でも俊くんが一番好きなのはあゝゝコレ!!」

東さんがどこからともなく取り出したステッキを振るとステッキの先から金貨が

ジャラジャラと溢れてきた。

「それも東さんの発明ですか？」

東「そうだよ♪東さん特製の拡張領域。分子の再編成を利用した四次元ポケットだよ。自分やISを中心にこの四次元領域を固定してほんのちよつぴりの夢と希望を与えてやれば…ほうら俊くんの大好きな物があふれてくる」

まだまだ貴金属はあふれてくる。金貨だけじゃなく銀の皿やフォーク、スプーン、箸、ナイフ、日用品以外にも腕輪や腕時計、ネックレスなどの高価そうなものが出てきた。

「凄いですね。東さんってお金持ちだったんだ」

東「これは全部俊くんのモノだよ」

「ええ…俺もすつごいお金持ち。…つてことは金銭面で俺が困ることはないのかな。じゃあオークションする必要もないわけだ。それじゃ俺の童貞はお金じゃ売りません。みんな俺の言う事聴くんでしよう？」

この時のみんなの顔はきつと二度と忘れないだろう。一度見たら忘れられない美少女が一度見たら忘れられない苦虫を噛み潰したような美少女になった。

ただこの時、クロエさんだけが『俊葵様…どうか…：オーラルセックスだけは開放してくださいませ』と最後まで泣き付いていた。

一体俺はみんなにとってのなんだっただろうか。

83 話

記憶を失ってから数日、この世界の常識や俺の事を大方分かり始めた。今は夏休みで俺はこの地下室だとある研究をしながら過ごしていたそうだ。まあ、記憶がないわけだから何を研究開発していたかはさっぱり分からないけれどもろくなこと考えていなかったのは間違いない。

「俺は一体何者なのか…生きるべきか…死ぬべきか。それが問題だ」

「俊葵様は生きるべきお方で御座います。俊葵様ほど素晴らしい人間はこの世に居ますまい」

クロエさんには正直なところ困っている。クロエさんよりも積極的な娘はいくらでもいる。東さんを筆頭に何度も夜這いして来たり、風呂場に侵入なんて日常茶飯事だ。でもクロエさんは違う。

クロエさんは俺の命令を正確無比に実行した。本当に何でも言うことを聴くのか試してみたところ。本当に俺の足を全裸でなめながらオナニーをして潮吹きまで実行し

て見せた。

「人殺しの俺が素晴らしい人間なのか？」

「俊葵様はいつも誰かの為に戦っておいでです。誰かの為に身を粉にして働く俊葵様を誰が残酷非道な鬼畜外道と罵れましょうか。どうかご自分をお攻めにならないでください。私は俊葵様の優しさで今この瞬間を生きていられるのです」

「その優しい俊葵様は今からお前をレイプするぞ？それでも良いのか？」

「お言葉ですが俊葵様にレイプができるはずありません」

「まあ…そりゃあ童貞で性知識は中学二年生くらいしかないけど」

知識としては記憶にある。でも実践としての記憶は一切ない。

「そうでは御座いません。レイプというのは嫌がる相手に対して無理やり性行為を迫ることです。しかし私は俊葵様に犯されるのなら何時でも何処でも何度でも構いません。どうぞ、俊葵様の性処理ができるのなら喜んでこの身体をお使ください」

「マ、マジで使うぞ？」

「どうぞ(自由)に…」

言われるがまま俺はクロエさんの胸に手を伸ばす。布ごしにクロエさんの柔らかい乳房に触れる。

「ひゃん／＼／＼」

「ごめん、痛かったか？」

「いえ、俊葵様に触れて頂くのが数日ぶりでしたのでとても嬉しくて感じてしまいました。この調子では愛撫だけで気が触れるくらいに達してしまいます」

「そんなまさか。こんな童貞の愛撫で感じるわけないだろ」

更に俺は乳房を揉みしだく。クロエさんが嫌がるようにわざと強く揉んだり乳首をつねったりしているのに感じてばかりいる。

「嫌じゃないのか？」

「ん…俊葵様が私を見てくださる、触れてくださる、まして愛撫まで…：私は俊葵様無しでは生きて往かれぬ存在です。俊葵様を愛しているのです」

このストレートな行為は俺の心を傷付けた。彼女の好意が嫌なんじゃあない。この好意が記憶を失う前の俺に向けられたものだと思うと申し訳なくてどうしようもなくなった。

「俺はもうクロエさんの知っている俺じゃあない。俺はもう俺じゃないんだ…：だから俺に好意を寄せてもそれは俺じゃない。俺は今、クロエさんが好きだから愛撫している訳じゃない。性欲を満たすために愛撫しているんだ」

想いが声と涙になって体外へと流れ出る。

「クロエさんやみんなはすごく可愛いし美人だし気立ても良い。お金持ちで俺が欲しい

と言ったものは何でも買い与えてくれた、でも俺はそんなみんなに何も返せていない。みんなを利用していただけだ。生きるために」

「俊葵様に求められて皆様も喜んでおります。俊葵様が気に病むことなど何一つ…」

「俺は本当にみんなを愛していたのか？みんなを性奴隷として鎖につないでいただけなんじゃあないか？みんなが優しいのも記憶があつた頃の俺に戻って欲しくないんじゃないか？」

「私はどちらの俊葵様も愛しています。もう……俊葵様の涙は見たくありません。俊葵様には笑っていて欲しいのです」

クロエさんに押し倒された俺は何の抵抗もできない。抵抗したくない。全ての責任をクロエさんに押し付けようとしている。

「俊葵様はいつも悩んでいました。とても優しい方でした。セックスのたびに私の身体を気に掛けては泣いておられました。怖いんです…いつか俊葵様が私を捨てるんじゃないかと」

「そんな…」

「ええ、俊葵様はお優しい方ですからそんな事は仰りません。でも俊葵様の迷惑になるくらいならいつそ…そう考えてなりません。記憶を失われた今なら尚更です」

か細い腕が俺の身体を包む。俺はクロエさんを抱き返して優しく語り掛けた。

「俺も怖いんだ。俺は一人だから、家族がいらないから捨てられたら生きてけないよ」

「私もです。…ですからこうやって身体でつなぎとめる。ふふ、今のセリフは俊葵様に言われたものです。それに何度もそう言った事を聞いてきました。優しい俊葵様…私は俊葵様の好意に甘えてばかり。ですから記憶を失った今だからこそ今までの恩をお返ししたい。とても返せるような代物では御座いませんが少しでも俊葵様が喜んで下さるのなら…どうか私の愛を受け取ってくださいませ」

「愛って…そりやまあここまでされたら信じるけどさ。本当にセックスしちゃうぞ」

「どうぞ…クロエのおまんこは俊葵様専用のおまんこ穴です。ぬくぬくキツキツのオナホまんこを存分に堪能してくださいませ」

クロエさんの洋服を脱がそうと手を掛けるがどうも脱がしにくい。童貞を殺す服ってこういうった意味だったのか。この服デザインは良いけど脱がせる事まで想定したデザインにしとけよ。

「私が脱ぎますので少々お待ちを」

クロエさんは複雑な服をいくつかのパーツに分けて器用に脱ぐ。

「こんな脱ぎにくい服をデザインしたのは何処のどいつだ」

「俊葵様でございませす。夜伽の際に俊葵様が興奮できるようにと特注の服飾品をプレゼントしていただきました」

やっぱ俺は馬鹿だ。こんなクソ脱ぎにくい服をプレゼントするなんて。…でも記憶を失った今でも趣味は一緒だという事が分かった。

クロエさんの身体はとても綺麗でシルクのような肌触り。今夜はとても素晴らしい夜になりそうだ。

…

…

正直な話をしよう。俺と読者だけの秘密の会話だ。完全な勃起を果たした俺の息子は息子なんて生易しい物じゃあなかった。筋肉ムキムキマツチョマンの変態だった。でも俺はクロエさんを最後まで犯すことができなかつた。

亀頭まで挿入した時にクロエさんは嬌声とも悲鳴とも聞こえる声を上げた。ココは地下室だし扉も壁も頑丈で音は漏れたりしない。でもクロエさんの目には涙が浮かんでいた。

気持ち良いと言ってくれたけれど痛がっている女性を犯すなんてどうかしている。でも一番どうかしているのはそんなクロエさんを犯したくなつた俺だ。

俺はどうかしている。もしかしたらみんなが俺を慕うのは刷り込みなんじゃないだろうか。DVを受けた人は再婚してもちよつとしたことでフラッシュバックして精神状態がおかしくなるという。みんなも俺にレイプされた事や暴力を受けた事がトラウ

マになっているから俺を怒らせないようにしているのかもしれない。

「おはようございます。昨晩は申し訳ありません。私が痛がつたりしなければ俊葵様は最後まで気持ち良く成れたのに……」

「正直興奮したよ。痛がるクロエさんを見て俺は興奮した。でもそれは……酷い事だ。以前の俺もみんなに酷い事をして興奮していたのか？」

「質問を質問で返すことをどうかお許しください。俊葵様がSMプレイやソフトリョナを行うときはいつも優しく苦しみなんてものは感じさせてもらえませんでした。心地の良い痛みと快樂だけ……縄を少し緩めたり、手加減して殴ったり。それで私たちも興奮していましたし感じていました。偶に失禁するほどの痛みを与えて下さりましたが無理やりでは御座いませでした。とても気持ち良くて……愛されていることを実感できました。間違つても俊葵様に恐怖しているから服従しているではありません。俊葵様は私が恐怖しているから従つてるように見えますか？」

「見えないよ……見えないけど。……覚えてないから分からないんだよ。もし覚えていたらなんでクロエさんたちが俺の事を好きか分かる。でも今は分からないんだ。大好きだ……守つてやりたいと思う。でも……でも……今の俺には何も無い」

情けなくて堪らない。クロエさんを抱き、すがりながら涙を流している。男として情けない限りだ。

「そうですね。今の俊葵様には何もありません。私たちが見捨てたら一ヶ月と待たずに死んでしまうでしょう。でも、もし俊葵様がいなくなってしまうたら：私は自殺します。東様も千冬様も、みんな自殺するでしょう。それは俊葵様のいない世界には生きる価値などないからです。俊葵様が何も持っていないのは当然です。俊葵様は私たちにすべてを捧げてくれた。残っている物と言ったら昨晚、射精し損ねた精液くらいなものです」

「いつも下ネタを言っているのか？」

「主に俊葵様が言っていました。ふふふ、記憶を亡くした俊葵様を弄ぶのは楽しいです」

「酷いオンナ…だ！」

押し倒してから抱き着く。首筋には洗剤の匂いとクロエさんの匂いが混ざってとてもいい香りがする。

「…やっぱりやめた。勢いに任せてセックスするのはとても良くない事だと思う。根性のない童貞だと笑ってくれてもいいぞ」

「では俊葵様は根性のない素人童貞です。情けないです。でも大好きです♥朝食を作りますので俊葵様は出来るまでの間に汗を流してきては如何でしょうか。湯船にはお湯が張ってあります」

「それじゃあお言葉に甘えてシャワーを浴びてくるよ。今はこれで許してくれよ」
優しくクロエさんの唇に俺の唇を重ねる。ディープなキスをする勇氣はなかったの
で軽いキスだったけれどクロエさんはとても喜んでくれた。

84話

記憶が失われたからと言って俺の仕事や生活が無くなる訳ではない。俺には俺の生活がある。いや、有ったというべきだろうな。

部活動の助っ人やよく分からない書類への署名とやる事は沢山ある。今日は朝から様々な書類にサインをしている。ほとんど外国語だったので内容は読み取れなかったがセシリアさんやシャルロットさんが丁寧に教えてくれたので不用意な契約をしなくてすんだ。

「シャルロットさん、これ英語じゃないみたいんだけどフランス語かな？」

「えつとね…あ、これうちの会社の書類だ。量産型ISの新武装を設計したんだけど俊葵にテストして欲しいってさ」

「今の俺にテストなんて出来るかな？」

「問題ないよ。ただ撃ってもらうだけで弾道、初速、射程、あと威力を調べるだけだから。一応コメントも貰うけどそれは僕が書くから良いよ」

銃を撃つだけの簡単なお仕事なら俺にだってできると思う。ISの操縦は出来ないけれど銃を撃つことくらいはできる。

「それじゃあ……ちよつとやってみようかな」

「ありがとう。あ、報酬は先払いだからコレ」

シャルロットさんは俺にスパイ映画で主人公が持つような銀色のケースを渡した。ケースはずつしりと重く中身が詰まっていることが分かる。

中を開けると札束がぎつしりと詰まっていた。これが今回の報酬なのだろうか。

「日本円で3000万円。この前の件も合わせて……って今の俊葵は覚えてないか。とにかく僕は渡したからね。返すなんて言っても受け取らないから」

先読みされてしまった。こんな大金がいきなり目の前に現れると動揺してしまう。正直なところさつさと返してしまいたい。

「銃を撃つだけでこんなにくれるのか？」

「実はこの前の臨海学校でもの凄い事件が起きたんだ。俊葵が助けってくれなかったら僕は死んでいたよ。だからお父さんがそのお礼も兼ねてって。手紙も入ってるよ」

中に入っている手紙には綺麗な文字が羅列してある。でも英語じゃないのでさっぱり分からない。英語でも分からないけど。

「ごめん、読めないわ。なんて書いてあるの？」

「えつとね『親愛なる松崎俊葵さんへ。初夏の涼しさも過ぎ去り日本では猛暑続き、辛い日々をお過ごしだとお察しいたします。もしお時間に余裕があるのなら私が所有する避暑地でシャルロットたちと一緒に夏を過ごされては如何でしょうか？ ヨーロッパで過ごす休暇はとても良い過ごし方だと思います。ところであなたの活躍は遠方の地にいる私の耳にも届いております。と申しますのも……』」

「申しますのも？」

「えつと……ちよつと恥ずかしい」

「良いから言つて。恥ずかしがるシャルロットさんも可愛いから大丈夫」

「うう……／＼／＼と申しますのも私の可愛い一人娘、シャルロットが貴方の武勇伝を聞かせるものですから耳にタコができてしまいそうです。しかし娘の話は何より信じることでできます。きつとシャルロットは貴方の事を相変わらず愛しているようですね。一人の親として娘の将来の夫が貴方のような男であることは非常に喜ばしい限りです。話は変わりますが臨海学校で娘の命を救ってくれたとか。シャルロットの怪我を不思議な力で治し、そして傷跡も消してくれた。きつと俊葵さんにとってはこんな額の報酬ははした金だと思えますが私にはお金を払う事しかできません。私は俊葵さんに何かしらのお礼をしないと私の気が収まりません。どうかお納めください。貴方の未来の父親、アレックス・デユノアより』」

「大企業の社長が直筆の手紙を寄こすような男だったのか俺は」

「それ以上の存在だよ俊葵は。僕にとつての救世主さ。もう、笑わないで！僕は本気なんだから！もう、俊葵なんて知らない！僕は先に着替えてアリーナで待つてるからすぐに来てね!!」

「あゝい」

そう言うのとシャルロットさんは行つてしまった。俺はそんな彼女の背中に間延びした返事をしてアタツシケースを閉じた。

こんな大金を貰つても何に使うかなんて想像もできない。両親や親戚がいたら旅行なんかプレゼントしたりできるのに。

「クロエさん、クロエさんはいる?」

「お呼びでしょうか」

呼んで数秒と待たずに扉からクロエさんが現れる。扉の前で待機していたとしか思えないような素早さだ。

「このお金貰つただけだけど使い道が無くてさ。これあげる」

「俊葵様の報酬を受け取ることなどできません」

「うん、まあそう言うんじゃないかかって思つてたけど。俺が持つていても使い道がないんだよ。……せめて使い道を模索する手伝いをして欲しい」

「私にそのような大役が務まるかどうか…」

「何でもいいんだよ。ネットワークとか指輪が欲しいとか」

「私のような者に俊葵様の財産が使われるべきでは御座いません」

「ええ…じゃあ…俺って車とかバイク持つてる？」

車やバイクならみんなを乗せてドライブにも行けるし持っていて損になる物でもない。宝石や貴金属の装飾品は学校生活で身に着けられる物じゃないので効率的にお金を消費するなら車が丁度良い。

貯金しろという人もいるだろうけれど俺の口座には一生かかっても使いきれないような金額の金が入っている。銀行の利息なんて気にならない程の大金だ。これ以上お金が手に入っても意味がない。

それならいつそ今まで俺がためたお金を使ってストレス解消をしよう。こんなに金があるんだ。過去の俺だって今の俺の姿を見たらちよつとくらいの出費は許してくれるだろう。

それにしても総額数百億の財産か…。例えるなら貧乏学生時代、通帳の中にお金がないつもりで残高確認したら二万円入っていた給料日前って感じ。

「いえ、俊葵様は私たちに服飾品を買い与えたり食事に連れて行ってくれたりとご自身にお金を使っているところを見た事が有りません。…銃火器の購入くらいでしょうか」

「そっか、じゃあ車が欲しい。免許を持っているかは別としてとにかく車を買いたいな。東さんにも相談しておいてくれ。俺はこれからシャルロットさんとISの武装のテストをやってくる。んじゃ」

「かしこまりました。ではお気をつけて」

「……行つてきますのキスをして良いかな？」

「勿論です!!さあ、どうぞ!!」

そう気合を入れなくても俺は逃げたりしない。ゆっくりと唇を近づけるとクロエさんは俺の首に腕をまわして口の中に舌を思い切り切り入れてきた。

「んっ!？」

「ちゅ……ちゅ、じゅ……♡んう……ちゅうちゅう♡」

「ん……ん……」

「えろ……えろん……ちゅ、ちゅぷ……♡」

「ん……ぷはあ!熱烈なキスをありがとう。凄く…情熱的で刺激的だった」

目を開けたままキスをしたのは失敗だった。クロエさんのエロい顔を見ながらの激しいキスは俺の股間をいきり立たせた。

「ああ……ま、更衣室に着くまでに何とかするよ」

……

…
「ふうくん…俊くんは車とバイクをご所望かあ。ふふ、そんなの束さんが買ってあげるのに」

「俊葵様はストレス解消も兼ねて買い物を楽しみたい様子でした。一つ提案があるのですが……」

「何かなあ〜?」

「数日後にモーターショウが行われるようです。折角の夏休みですし俊葵様を連れてデートなど如何でしょうか?記憶を無くされる前からずっと地下に籠りきりでした。少しは外の空気を吸って頂かなくては健康を害してしまうかもしれません」

意見を言うときのクロエはいつも凜としているが内心は部屋の隅でガタガタと震えてお化けを恐れる子供のようなのだ。

「クーちゃん……」

「は、はい…その…束様に対して実に安直な駄案を申し上げたと猛省しております」

束は優しくクロエを抱きしめて唇を奪い思い切り舌を吸い出す。

「ん!?!」

「クーちゃんの唾液美味しい♡」

「た、束様?」

突然のキスに凜としていたクロエも動揺を隠せない。しかし狼狽しながらも束を受け入れている辺り嫌ではないようだ。クロエからも舌を絡めて束を喜ばせようとしている。

「俊くんが最近相手してくれないからクーちゃんを襲っちゃうよん♥……嫌じゃない？」

「とても嬉しいです。私も俊葵様のお相手ができずに少々寂しい夜を過ごしていましたので。束様のお相手が私で務まるかどうかは分かりませんが精いっぱい務めさせていただきます」

「堅苦しいのは無くし〜♪」

……

…

IS学園の設備には驚かされてばかりだ。世界中の国から金をせしめて作っただけのことはある。某ヤンキー国は金を出さないと断つていたはずなのに俺が原因で今では一番の出資国だ。一体俺はどんな人間だったのかますます分からなくなる。

この身体と人望は特に驚く。部屋から更衣室まで移動する間にすれ違う女子すれ違う女子みんなに挨拶された。みんな常識的で良い子なのかとも思っただけ目の色が違う。俺の勘違いだったら恥ずかしいけれど、彼女たちの視線にはかなりの熱と圧が籠っ

ていた。

やっぱり俺はクロエさんの言うようにモテモテだ：間違いない。だって今も更衣室で着替えを半ば強制的に手伝われている。

「さあさあ俊葵様、万歳して下さ〜い」

「ズボンを脱がしますよお〜」

「ああ…なんて遅しい♥」

「着替えくらい一人でできますって」

「いえいえ、今の俊葵さんは記憶を無くされている訳ですからここで少しでもアピールをと思ひまして」

そういう彼女は…ええと…忘れちった。どうも俺は人の顔と名前を覚えるのが苦手な質らしい。記憶を無くす前もこうだったら嫌だな。

「ほらほら、私たちはファンクラブの古参メンバーですし。ま、多少はね」

彼女は雪のように白い肌が特徴だ。クロエさんやシャルロットさんも色白だけれど、それをも凌ぐ白さ。あまりに白いので健康面ちよつと心配になるが彼女の腹筋を見て安心する。何をしているのかは分からないけれどめちやくちやバツキバキに割れている。なんとなくロシア人的な雰囲気醸し出している（当社比）のでロシア人に間違いない（適当）。

「こんなに大きくされてはパンツを脱がすのも一苦勞です♥」

俺のパンツを意地でも脱がせようとすると彼女は肌の色で黒人だという事が窺える。ぶつくりとセクシーな唇がとても好みだ。それに流れるようなブロンドも素晴らしい。一応言っておくが俺は決して肌の色で差別はしたりしない（女性は）。

「俊葵様の背中……スンスン♥」

最後に俺の背中に抱き着いて放そうとしないのはなかなかの爆乳の持ち主。束さんや山田先生クラスの爆乳と比べると見劣りするが女子高生でこの大きさはとんでもない。しかしウエーブの掛かった赤毛に頬を飾るそばかすが年相応の幼さを感じさせる。そばかすをコンプレックスに感じる人は多いんだけど俺はそんな事ない。むしろ女の子の可愛さを引き立てるための要素の一つだと考える（ただし美人に限る）。

「俺ちよつと急いでいるから…後ろ見てももらえるかな」

「いえ、トシキ様の全てを凝視させていただきます」

俺の息子は見世物じやないので凝視させていただく事は無理です。

「ほんのちよつとで良いんです」

先っぽも見せるわけにはいきません。

「舐めるのもダメでしょうか？」

「ここに來て難易度を上げるのはアゲインスト。」

「そんなに俺とエッチな事がしたいなら俺の仕事が終わるまで待つていてください。そうしたらちやんとお相手をしてあげますから。……いや、ちよつと待て。俺は成人しているから未成年のみんなに手を出したら逮捕されるんじゃないか」

「大丈夫です。俊葵様は世界に二人だけの男性パイロットですからどここの国も自分の代表候補生になって欲しいと考えています」

「まして男性パイロットの子どもが自分の国の国籍を持つていると色々と好都合。男性のISパイロットは経済的にもIS研究的にも国の有利になります」

「そこんところが俺には分からねえ。どうして女性しか操れないISを動かせるだけで偉いのだろうか。べつに動かしたくて動かしている訳じゃあないのにな。」

「つまり俊葵様は私たちが拒否しない限り……いえ、たとえ拒否したとしても国から俊葵様と濃密な関係になれと命令があるだけで俊葵様は犯し放題の種を仕込み放題なのです」

「うん、君たちをエッチな事をして問題にならないことが分かった。でも君たちはそれで良いの？俺は他の女性を愛して君たちは性処理用のオナホールくらいにしか考えていないかもよっ。」

「それの何が問題なのでしょう？私たちは俊葵様に使われるだけで本望」

「それ以上のことを望むなど言語道断」

「人を愛することに理由なんていらなんでしょう?」

彼女たちの言っている事は正論だけれども何かおかしい。いや、好意を疑うんじゃない。今までの自分が好かれている実感あまりない。

「はあ…分かった。諦めてイチヤイチャするよ。他の女の子とセックスしても怒らないでね」

最後に念を押してから彼女たちと別れた。更衣室を出る時にみんなして俺の服を舐めたりしゃぶったりしていたのは幻覚だと思いたい。

「シャルロットさん、遅れてごめん。待たせちゃったね」

「何か問題でもあった?」

「うん…ちよつと俺のファンクラブの子に掴まっちゃって」

「成る程ね。だいたい察しが付くよ。それより早くISを装備して。早く初めて早く終わらせよう」

「あーい」

この数日でISの装着くらいはできるようになった。まず目を閉じてISを装着するイメージを固める。そしてカッコいいポーズをとって叫ぶ。

「蒸着!!」

瞬間的に俺の身体が発光して黒い鎧が身を包む。束さんはこのISを宇宙と呼んで

いた。俺が名付けたと言っていたが全く記憶にない。…ちよつと悲しい。

「うん、これで良いかな」

「相変わらずカッコいいね。惚れ惚れしちゃう」

「えへへ」

俺もこのI Sを見た時は超スーパードスゲエばいつて思ったもんだ。黒い装甲に紅のライン、ギラリと光る眼がかつちよいい。

「何を考えているか大体わかるよ。僕が言っているのはね…」

シャルロットさんが頭部装甲に触れると光の粒子になって消えてしまった。

「ちゅ…俊葵がカッコいいって事」

「ど、どうも／＼」

あらためて蒸着しなおして説明を受ける。

「まずはこの銃を撃つて。セーフティは解除してあるから後は引き金を引くだけ」

「的はアレだな。変な場所を撃たないようにしないと…アリーナ席に当たったら大変だ」

「それなら大丈夫。このアリーナは特殊なエネルギーシールドと複合装甲で守られているから」

「でも席の様子が見えるぞ？」

「モニターなんだってき。凄いやね」

そりゃあ驚き桃の木山椒の木。

「マジですごいな…、よし撃つぞ」

息を止めてしっかりと狙いを定める。視界の端々に色々な文字や数値が出てくるけれど何か分からないので取り敢えず無視をする。手の震えが治まったと同時に引き金を引く。爆発音と共に一発の弾丸は的の端つこを抉った。

「おお、命中した命中した」

「その調子でどんだん的を出すからどんだん撃っていつてね」

言葉通り空中に複数の的が現れる。取り敢えず近くの的を撃ってみるが避けられてしまった。

「的は動くように設定してあるから狙いにくいと思うけど俊葵なら大丈夫だよね」

おいおい、私は素人だよ？銃の撃ち方をさつき教えてもらったばかりのトーシロに一体何ができるというのだ。

「文句を言っても仕様がないか…漢は度胸だ。いつちよヤツてみますか」

セミオートからフルオートに変えて的を撃つ。避けようとするので、その動きに合わせて銃口を向ける。的は数発の弾丸で粉々になって地面に落ちた。

「なんだか楽しくなってきた」

他の的も狙い次々に撃ち落としていく。段々と慣れてきたのか命中率も心なしか高くなってきたような気がする。しかし良い調子は続いても弾薬の残弾は限りがあるよ
うで…。

カチツ！カチツ！

排夾口から薬莖が出なくなってしまった。銃の弾切れってアニメや映画よりも早
んだなど率直な感想を述べてしまいそうになる。

「IS用の銃は一般的なライフルよりも装弾数が多いんだけどフルオートであれだけ
撃つていれば弾切れも起こすよ。はい、新しいマガジン。着け方わかる？」

「お恥ずかしながら全く分かりません」

「じゃあ空のマガジンの付け根にボタンがあるでしょ」

言われた場所を探るとボタンを見つけた。俺を押したらマガジンが外れるのか。

「そうそう、落ちたマガジンは勝手に拡張領域に直されるから放っておいていいよ。次
は拡張領域からマガジンを出して同じ場所に差し込むだけ」

「簡単に言うけどまだ武器とか弾薬とかを取り出すのは難しいんだよ」

「それじゃあ僕が出すからそれを装着して撃ち続けて」

シャルロットさんから受け取ったマガジンを差し込んでコッキングレバーを引きり
ロードを完了させる。流れるような手さばきでコッキングレバーまで引いたけれど

シャルロットさんから教わった訳じゃなくて身体が勝手に動いた。なんだか身体が覚えていた感じがするし、銃もなんだか手に馴染んだ感がある。

「よし…」

今度は適当に身体の動くままに的を撃ち抜く。最初は全く当たらないけれど少しずつ当たるようになった。知識として覚えてはいないけれど身体は十分に覚えていくれた。

「良いぞ……実に馴染む。まるでこのISが俺の為にあるかの様だ。試着してほんのちよっぴりブカブカだと思っていたジーンズが洗濯を重ねるごとに肌になじむようになった感覚と似ているぞ。良いぞ………当たる！当たる！！当たる!!!」

「凄い……やっぱり俊葵は記憶が無くても才能があるみたい」

シャルロットさんが何かを言ったみたいだけど聞こえない。今の俺は目の前の的を撃つことに集中している。

………

………

………

気が付いたら二時間が経っていた。的は全て落ち墜とせし武器のテストも十二分にできただろうか。

「これで終わりかな？」

「うん、もう終わり。わざわざ手伝ってくれてありがとう」

「それじゃ俺は用事があるから」

「出かけるの？」

「うんにゃ、俺のファンクラブの娘とセックスする予定なんだ。言葉のあやで誘っちゃったわけだけど期待させておいて今更やっぱあれはなしなんて言えないだろ」

「へえ、楽しんできてね」

「嫌じゃない？」

「何が？」

「何がって…俺が他の女生徒セックスする事に関して」

「今に始まった事じゃあないし気にならないかな。俊葵が楽しんでくれたらそれで良いよ。でも埋め合わせはしてね。最後に…その質問を他の女の子にはしないようにね。みんな俊葵に疑われるのが嫌だろうから」

「あ、うん…なんだかごめん」

「謝らないでよ…もし僕がここでセックスしたら許してあげると言ったらセックスする？」

「何て魅力的な提案だろうと思ったけれどアリーナのど真ん中で観客も沢山いるなか

露出プレイをするほどの度胸は今の俺には無い。多分だけど昔の俺にならあったと思
う。

「えつと…みんな見てるし」

「今は俊葵のモノしかないよ」

「物？」

「うん、みんなは俊葵のオンナなんて恐れ多くて名乗れないから自分たちは俊葵の所持
品だつてね」

分らない。やっぱりわからないぞ。俺のどこが良いのだろう。

「みんなく〜俊葵がみんなの裸を見たいって〜」

「ちよ、シャルロットさん!?俺そんなこと言つてないよ!!皆も脱ぐなよ!こんな場所で
素っ裸になったら風邪ひくぞ!!」

みんなが羞恥心で赤くなっている間に俺が断りを入れたのは不幸中の幸いだつた。
誰一人全裸になることなく俺はアリーナを後にし、寮の自室にいた三人とセックスを果
たした。とんでもないことになっていたなんて知らずに…。

85話 俊葵、死す

朝、目が覚めると既に彼女たちの姿はなかった。辺りを見回すと昨日の残骸が転がっている。ワイン、ウイスキー、精力剤の空瓶、バイアグラの入っていた袋、チーズやパンくず、喰い終わった肉の骨など生ごみもちらほら見える。

「ああ……頭痛え……クソ……酔わないから調子乗って飲み過ぎた。それに腹減った……」

近くに転がっていた皿からピザを取って頬張る。冷えたピザの丁度良いくらいに固まったチーズと塩っ辛いサラミ、べちゃべちな生地が何とも言えない美味しさを醸し出す。

流し込むためにワインの瓶を傾けてラッパ飲みをした。きつと今の俺を見たら両親は行儀悪いって怒るだろうな。まあ、俺には両親がいないんだけど。

近くの携帯を取ってクロエさんに発信する。この惨状を片付けてもらわないと。

『おはようございます……』

相変わらずワンコールで電話に出たけど何だか機嫌が悪そうだ。声色から怒気が伝

わってくる。

「おはよう。朝から悪いね」

『いえ、俊葵様からのお電話なら何時でも大歓迎で御座います。何の御用でしょうか。』
「昨日の夜にどんちゃん騒ぎしたみたいで部屋が散らかっていて。だから掃除に来て欲しいなつて」

『畏まりました。ではすぐに参ります』

しばらくと言わないくらい待っていると直ぐにクロエさんは来てくれた。

「ごめん、忙しかったかな？」

「いえ、その…少し仕事を…」

「呼んでごめんね。片付けは自分でやるから戻っても良いよ」

「そういう訳にはまいりません。仕事というのも私たちの問題ですので俊葵様が気にする必要はございません。それに…いえ、何でもありません」

そう言うクロエさんはなんとなく歯切れが悪い。俺に言えないような内職でもしているのかな？

「俺に言えないような仕事なの？」

「言えない訳ではないのですが…」

「じゃあ教えてもらえるかな？あ、言いたくないなら良いんだけど」

俯いたクロエさんは恐る恐る口を開いた。

「実は俊葵様が昨晚お抱きになった三名が裏切りまして今しがた拷問を執り行っていたのです。それを今の俊葵様に伝えるのは酷だと思ひまして」

「裏切り？」

「はい、俊葵様とのセックスを録画しそれを雑誌社に持ち込もうとしていたのです。おそらく俊葵様の社会的地位を貶めるためだと思われます」

確かに成人した俺が未成年を犯していたことが世間にバレたらとんでもないことになる。『世界に二人しかいない男性ISパイロットが自分の立場を利用して女子高生を凌辱』なんて記事が世間を賑やかにする事になること間違いないだ。

「だからって拷問は良くないよ。話し合いとかで解決できないの？」

「裏切者は出来る限り苦しめてから始末せよと俊葵様が……いえ、申し訳ございません。私たちの独断で行動したことを深くお詫び申し上げます」

クロエさんは腰を綺麗に直角に曲げて頭を深々と下げる。首と服の隙間から覗く背中が艶つばい。

「そんな謝らなくても良いよ。だって俺のためを思つて行動したんでしょ？それなら嬉しいよ……拷問はともかく。……今から会いに行こうかな」

「俊葵様がいらつしやらなくても私たちだけで解決いたします」

「俺のせいでこうなったんだから俺が責任を取る。部屋の掃除はそれからでも遅くない」

「畏まりました。ではこちらに」

……

…

クロエさんの案内で地下施設の一室の前まで来た。この部屋は俺がいくら開けようとしてもパスイさんが『今の俊葵様にとつては刺激的な部屋なので開けるのはお勧めいたしません。どうかお引き取り下さいませ』と言つて開けてくれなかった。

重苦しい雰囲気醸し出す扉がゆっくりと開かれる。中に足を踏み入れるとなんだか錆びた鉄のような匂いが漂つてきた。薄暗い中に何人か立っていることが分かる。

「俊葵様をお連れしました」

「うえ？ 俊くんは連れてこないでつてお願いしたでしょ」

「俊葵様の命令が最優先ですので連れてまいりました。処罰は後で受けます」

「ごめん、薄暗過ぎて何も見えないや。灯り着けてくれない？」

「左目はまだ使いこなせないの？」

「左目？」

「あ、うん、良いの。何でもない。パスイ、部屋の電気をつけて」

電気がつくと周りの様子がよく分かる。束さんたちも含めた俺のハーレム（仮）メンバーが勢ぞろいで昨日の夜、俺とセックスをした三人をボコボコにしていた。

周りにある拷問台には血が滴っているのどついさつきまで拷問をやっていたことが分かる。

「この部屋は俺の趣味？」

「恐らくそうでしょう。この部屋は主にソフトリョナプレイをする際に使われました。しかし今は別の目的で使っています。このドブネズミのクソほどの価値も無いゴミの分際で俊葵様を貶めるような真似をよくも!!」

クロエさんの靴はロシア人の唇を蹴り千切った。裂けた歯茎と血に濡れた紅い歯が痛々しい。

「昔の俺ならどうした？」

「彼女たちを処分したと思われまます」

「ふくん……誰か銃とか持ってない？」

「これ……使って」

簪さんからナイフと銃を受け取って跪いている三人に向ける。

「ここに来るまでいろいろと考えたんだよ。俺の今の生活が脅かされるのは困る。テンションに任せて行動したのは俺の責任だ。だけど俺は記憶がない……それを利用して俺

を貶めようとした君たちは死ぬべきだって考えたわけだ。俺って自分勝手だろ」

まずは一人、黒人の彼女に弾をぶち込んだ。反動が強くて狙いがずれてしまったけれど脇腹に命中した。

「心が痛むよ……撃つたことに対してめちやくちや後悔している。きつと今月は酷く落ち込むと思う。でもさ、君たちの招いた結果だから責任は君たちが負うべきだ」

残りの二人にも弾丸のプレゼントをした。苦しんでのたうち回る彼女たちを見るのはなんとなく心がスツとする。

「とりあえずは……まあ、こんな感じかな。裁判を始めたいんだけど彼女を弁護したい人いる?」

10秒くらい待ったけど彼女たちのうめき声しか返って来ない。

「喋る元気もないのかな。嫌だねえ……どうして俺がこんな事を……拷問は嫌だけど二度目の裏切りはして欲しくないし。拷問が上手い人いる?」

「ラ「軍隊でそう言った訓練は積んで来た。俊葵が望むならこいつらの拷問は私がやる」

「そう……じゃあお願い」

「殺さないの?」

「命は平等に与えられるべきだと思う。だから今回は拷問だけで後は不問にしようかな

……でも二回目は絶対に殺す。俺はもう…覚悟を決めたから…ね」

「俊くんがそういうなら私たちの総意はもう決まったも同然だよ。彼女たちの治療は任せて。明日には走れるようになるから」

「それじゃあ俺はもう帰るよ」

簪にナイフと銃を返そうとしたその時。ほんのちよつぴり気が緩んで油断したその瞬間。腹部を撃ち抜かれたはずの彼女は俺から銃を奪った。まさか動けるなんて、まさかまだ逆らうなんて思っていたから完全に意識の外にいた。

「…お前は死ぬべきだ」

最後に聞こえたのは憎しみのこもった声と銃声。最後に見たのは目の前にせまる弾丸だった。

彼女がなんでそんな事を言ったのかは分からないけれどこれだけははっきりと自覚できた。

俺の人生は…ここで終了した。

86話

気が付くと雲の上に立っていた。自分が死んだことはよく分かっている。三途の川も見えなければ奪衣婆の姿も見えない。その代わり雲の床と四畳半の畳が見える。

「オラは死んじまったであ〜♪」

四畳半の上には卓袱台、テレビ、箆笥が置かれている。行く当てもないので畳の上に座り卓袱台の上のお茶を啜る。

「記憶もないのになんだか既視感がある。この後、神様が俺の目の前に現れる気がする
…」

「あらん、また来たのね」

「ほうら、神様がおいでなすつ……た？」

振り返ると真っ白なローブを身に着けた女神が立っていた。褐色の肌当真っ白な髪の毛が映える。俺が思うに神様ってやつは灰色のローブを着てひげを蓄えたおじいちゃんだと思う。でも目の前にいる神様は美しい女性。みんなとはまた違った神々し

い美しさを放つ女神さまだ。

「貴方の運の良さには流石の私も驚嘆します。まさか二度もココへ足を踏み入れる人間がいたなんて」

「あの…記憶がないから俺にとっては初めての経験です」

「記憶が…ない？」

「はい、というか神様なら下界を見下ろしていたんじゃないんですか」

「神様も忙しいのです」

神様も仕事があるんだな。初めて知った。神様つていのは下界を見下ろして隅から隅まで見尽くすのが仕事だと思っていたから。

「ではあらためて説明しますね。ココは貴方の欲望を叶える部屋です。生き返りたいというのならそれもよし、天国へ行きたいというのならそれもよし、ギフトが欲しいというのならそれもよしです」

ギフト？神様からの贈り物だろうか。

「貴方は以前、今さつきまで生きていた世界への転生とギフトを望みました。ギフトの内容は兵器の設計図と超人的な能力。もしかしたらその能力のおかげでここに居るのかも」

残念ながらさつきぱり思い出せない。身体能力が高いのもギフトのおかげだったのだ

ろう。でもそれ以外は何ともなかった。

「思い出せないのなら思い出させてあげる。でも能力の使い方だけ」

俺の額に人差し指を当ててる。すると急に頭の中へ情報があふれかえった。昨日までできなかった逆上りが今日になって出来るようになった気分だ。今の俺なら何だってできる、そんな感覚だ。

「さつき生き返らせるって言いましたよね？」

「ええ、もちろん良いわよ。ギフトは要らない？」

「欲しいけど…今の能力だけで十分だし…」

「謙虚なのね」

「昔の俺はきつと傲慢だったろうから」

「……それに関してはノーコメント。でもあなたは愛に溢れたとてもやらしい…いえ、優しい人間だったわ。怒らせると怖いけどね。現世とココの時間の流れは違う。ギフト候補はこの中から探すと良いわ。欲しいというのなら何だって与える」

「なんで俺にそこまでしてくれるんですか？」

「それなだけど分らないの。なんとなく貴方は放っておけない感じがするのよ。もしかしたら貴方の魅力の能力に中てられたのかもしれないわね」

そう言っただけ俺の目の前に大きな本棚を出した。そこには色々な漫画が入っていた。

俺の知っている漫画も有れば見た事も無いような漫画もある。

「貴方が気に入るような能力があると良いのだけれど」

取り敢えず俺はこの『ONE PIECE』という本を手を取った。

……

……

……

IS学園地下 某所

「ねえ……ちーちゃん。どうして俊くんは死んじゃったの。俊くんはこの世界を救おうとしていた。どうしようもなく腐ったこの世界をより良くしようとしていたんだよ？」

「人はいつか死ぬ。今まで切られ、焼かれ、撃たれ、穿たれ、それでも生きていた俊葵がおかしかったただけだ」

「でも今までだって……」

「記憶を失った俊葵は超能力を一度だって使ったことは無い。もしかしたら能力の使い方をおぼれていたのかも」

「そうかもね……俊くんが用意していた予備の身体も機能を停止した。まるでろうそくの火が消えるようにね」

「心にぽっかりと穴が開いたようだ。二つもな……私はクロエ・クロニクルをとでも気に

入っていた。俊葵の傍に居るといっただけでほんのちよっぴり嫉妬していた時期もあったが凄く可愛い私の生徒だった。芯が強く、決して折れる事のない女だと思っていた」

千冬は足元に転がるクロエだったモノを見下ろす。血だまりの中でうつろな目をしたクロエの手には俊葵が生前使っていたM500が握られていた。

「クーちゃんは死ぬ前に言っていたよ。『俊葵様のいないこの世界には何の意味もございません。あわよくば来世で俊葵様に会えます様に…』って。私も死にたいよ…でも、でも俊くんの仕事は私が引き継がなきゃ」

「私も同じだ…きつとみんなも同じ気持ちだろう」

「じゃあ私は研究室に戻るね」

「私も職員室へ戻る。俊葵を殺した生徒の処遇と今後の対応について話し合わなくてはいけない。それから…一夏をどうするかについてもだ」

「男性パイロットか…：…いっくんはどんな手段を使っても守らないと。男性パイロットを嫌う人は世の中にたくさんいるからね」

…

…

研究室に戻った束は灯りも付けずにソファへ腰を落ち着けていた。急に明かりがなくてもままったく気にしている様子はない。

『灯りを付けなくては目を悪くしますよ』

「頭が良いからね。身体も良いし性格も良い。目くらい悪くなっただけで差し引きゼロにはならないよ」

『しかし俊葵様が戻ってきたときに…』

「俊くんはもう戻ってこない!! パスイも分かっているでしょう!?! 保存していた俊くんの身体は機能を停止した!! 遺体だつて焼いたし!! この目で見たの!! 俊くんの瞳孔が開いていくのを!! 俊くんの体温がどんどん下がっていくのを感じた!!」

『しかし私は俊葵様がもう一度戻って来る事を信じております』

「なんで信じられるの…なんで現実を受け入れられないの?」

『私は人間らしい感情をあまり持つておりません。ですから機械的に物事を判断して俊葵様の事は諦めるのが筋でしょう。でも俊葵様の事を信じると嘯くのです…私のゴーストが』

「ゴースト?」

『攻殻機動隊というアニメで仕入れた情報です。きっと私にはゴーストが宿っている』

「確証はないでしょ」

『ふふ、そうですね。確証は全くありません。私がそう感じるだけです。でも信じるだけならタダですし機械の私は絶望をしません。いざとなれば俊葵様に関する情報を削

除すればいいだけの事』

「はあ…私も機械になれたらこんな酷い気持ちにはならないのに」

『それはあまりお勧めしません』

「なんで？」

『機械はセックスできませんから』

「ぶ、あはははは！急に笑わせないでよ。でも…元気は出た。ありがとうパスイ。私はこれから俊くんの為の新しいI Sを作るよ」

『では私もお手伝いいたします』

世界一の頭脳と世界一の頭脳が作り出したジョークの言えるAIによる初めての共同制作が始まるのだった。

……

…

「簪ちゃんはこれからどうするの？」

「分からない…」

「実家のお父さんがこれからどうするか訊いて来たわ。私は俊葵がいないのなら代表を辞めて静かに暮らしたいと言っておいた」

「私も代表候補を辞めてそうしたい」

「珍しく意見が合ったわね」

「そうだね。……俊葵に会いたいよ」

「そうね……」

……

…

「ラウラはどうする？」

「何のことだ？」

「俊葵の事だよ。少なくとも僕は俊葵と結婚するつもりだったから何がしたいのかよく分からなくなつた。お父さんは学校を卒業したら会社を手伝ってほしいって言つてきたけど……でも分からないや」

「そうか、私は変わりなく軍人を通けるだろうな。与えられた任務をこなしいつ命を落とすやもしれない」

「ラウラが羨ましいよ。僕も他に生き甲斐が有つたらなあ……」

「私は……俊葵と生きたかつた」

「僕も……」

……

…

「篤さんはこれから…」

「言うな…私の事は私が決める」

「そう…ですか。では私はこれで…またいつか会えたら…」

……

…

「布仏さんはこれからどうしますか？」

「う〜ん…とりあえず学校は卒業するまで通って、卒業してからは東さんのアシスタントとして働こうかな。まややんは？」

「私は…とりあえず現状維持です。でも生きる目的が一つ消えてしまいました」

「俊くんは自分の事を何でもない男だっって言っていたけど俊くんは凄い男だった。だって俊くんが一人いなくなっただけでこんなに影響があるんだもん」

「そうですね。俊葵君は本当に凄い男性でした。もう私は今後の人生で本気で男の人を愛することはありません」

「私も…」

……

…

「ふう…こう毎日漫画ばかり読んでいたら飽きてしまいそうだ」

さつきまで読んでいたジョジョを本棚になおして寝転がる。今まで読んだ本はワンピース、ソウルイーター、NARUTO、BLEACH、史上最強の弟子、東京グール、北斗の拳、魔獣戦記、真マジンガーZERO、ジョジョ、エトセトラ。どこかで見たことあるような漫画ばかりだったけれど記憶にないのでなんだか変な感じの連続だった。変な事を言うようだけれど既視感を連続で感じるような変な感覚。

「ギフトは決まりましたか？」

「本当にいくらでも良いんですよね？」

「勿論です。本当に何でも良いですよ」

「それじゃあ俺は……」

87話

「怪我したらいつもこの中に入って治していたよね。でも今ではもう治らない。俊くんを腐らないように保存するだけ。未燃がましく男の死体をとっておく変態だって俊くんは言うかな？それともそんなにも愛してくれてありがとうって言うかな？」

生命維持装置の中に保存されている俊葵の顔を優しく撫でる。

「まるで生きているみたい。他の身体は医療ポッドに入っていないから火葬したよ。もしも俊くんの魂が戻ってきたときに身体が腐っていたら大変でしょ。この最後の一つは絶対に守るからね」

そう言う束の顔は今までになく穏やかな表情をしていた。悲しみと苦しみを超越したんだかよく分からないものがあふれて、結果この表情になった。

「目も腕も不思議と元に戻っちゃったけど……戻ったからこそ諦められないのかも。もしかしたら俊くんの魂が今もどこかにあつてこの身体を元に戻したのかもしれないって」
俊葵の身体は全て元通りになっている。傷痕も刺青も義眼も義手も全て元の肉体に

戻っていた。俊葵が死んだのだから魔法が解けて元に戻ったと考える者もいた。でも束は違う。肉体も俊葵の能力で作られたものなのだから消えるはずだ、そう考えた。だからこうして何よりも大事に保管してある。

その隣のカプセルにはクロエの遺体を保存している。俊葵が生き返る可能性があるならクロエも生き返る可能性がある。たとえ頭を撃ち抜かれていようとも俊葵なら何とかしてくれる。根拠のない自信と絶望したくない気持ちがある今の束の原動力だ。

「みんな前を向いて生きていく決心を決めたみたい。でも私にはそれができないよ……いくら返ってくる다고信じていても心の奥では分かっているんだ。もう……俊くんが帰って来ないって事を……。機械になれたら、きつとこんな悲しみは味合わなくて済むのに」

「それは困る。機械になられたらセックスができない」

「ふふ……パスイも同じ事を言って……!?!」

「よう、ただいま。心配かけたね」

「あ……え……え?」

「驚いてないでここを空けてくれ束。息が詰まりそうだ」

驚く束を尻目になかなかあかない蓋を無理やりこじ開けて外へ出る。

「遅くなつてごめん。もっと早く帰ってくればよかつたね」

「みんな…心配したんだから」

「だろうな」

「ホントに心配したんだからね…」

「分かってるよ。東、本当に心配をかけた。その埋め合わせはいくらでもするよ」

優しく抱きしめて頭を撫でる…全裸で。

「記憶は戻ったみたいだね。さん付で呼ばなくなってる」

「完全には戻っていないよ。でもこの身体の使い方は完璧に思い出したけど皆との思い出は虫食い状態でどうしても思い出せない。それって幸運なんじゃないかって思えたんだ。だってこれからみんなとの初めてをもう一度経験できるんだから」

「もう／＼／初めてってそう言う事／＼／」

「もちろんそう言う事だよ、ちゅ♥とところでクロエは何処にいるんだ？一緒にじゃないのか？」

「クーちゃんは……」

言葉を濁しながら俺の後ろを見るので気になって振り返る。俺が眠っていた医療力プセルと同じものの中にクロエが眠っている。でも生氣はなくこめかみが抉れていた。

「自殺か…」

「分かるの？」

「俺ほどクロエの事を理解している奴はいないよ。クロエの性格なら俺が死んだら自殺することは分かってた」

「生き返るかな？」

「その為の俺だよ。俺の部屋に秘密兵器がある」

自室の金庫の中から札を一枚持つて来た。何の変哲もない和紙に見えるけど実はこの御札には鈍でもない力が込められている。

「この札の中にはクロエの魂が込められている。思い出さなかったらこんな蘇生法を思いつかなかったよ」

「それは凄いいけど今のクーちゃん的身體は壊れているし魂は入らないんじゃないか？」

「ちっちゃち、それがこうすれば入るのだ」

カプセルを開けてクロエを思い切り殴る。顔面がひしゃげてぐちゃぐちゃになり血や骨の欠片が飛び散る。

「俊くんにする事に口を挟むのは嫌だけどさすがにそれは酷いと思うな」

「よく見ろ」

「？」

飛び散った破片がクロエの死体に飛んでいく。まるでビデオの逆再生のようにクロ

工の身体は綺麗に元通りになった。

「もしかして新しい力？」

「うん、女神さまが何でも好きな能力をあげるって言うもんだからたつぷり貰って来た」

「ただでさへ強い俊くんがもつと強くなっちゃった」

「そう言う事」

身体の腐敗が始まる前に札を貼ってさつさと蘇生させる。

「ん……アレ……わた……し……」

「さつさと起きて俺のご飯を作ってくれ」

「とし……としきさま？……俊葵様!？」

「ただいま」

「あ、ああ、お、お久しぶりで御座います。俊葵様に蘇生していただき感謝感激です。何と

お礼を申したらよいか……」

「じゃあご飯を作ってくれ。お腹がすいて死にそうだ」

そう言うときクロ工は顔を真っ青にして部屋を飛び出した。きつと俺がまた死ぬと本

気で死ぬと思ったのだろう。

俺も着替えて後を追う。

……

…

クロエと俺の復活は瞬く間にみんなに知れ渡った。学園に俺とクロエの死は内密だったようでまだ何も問題にはなっていない。ただ俺の復活が後十数分遅かったら千冬さんが学園側に報告していた。

「いやあくこうしてまたみんなと逢えて嬉しいよ」

シャ「僕は信じていたよ…きつと生き返るって」

ラ「無論私もだ」

箒「みんな信じていた。俊葵はあれぐらいじゃあ死なないって」

「ま、記憶を失っていなければあのくらい簡単に避けられた。ホントみんなには迷惑を掛けたと思っているよ」

簪「迷惑だなんて…」

楯「むしろ初々しい俊葵君と色んな事が出来てとても楽しかったわ」

「俺も二度目の童貞を捧げる事が出来てなんだか良かったよ」

真「それは初耳です。記憶を失っている間は挿入しないって言っていましたよね？」

千「誰と寝た？……まさかあの三人の誰かか？」

「んにゃ、クロエだよ。東は最初にセックスしたからこの世界に来て二番目に出会ったクロエに二度目の童貞を捧げるのは筋が通っているだろ」

ク「わ、私は他の方にと進言したのですが…」

「俺の決めた事に意見するなって言ったら黙って抱かれてくれた」

セ「俊葵さんに言われたら誰も言い返せませんわ」

箒「少し強引なのが俊葵らしい」

「だろ？」

景「俊葵様が戻ってきてくれなければ私は路頭に迷うところでした」

「俺は絶対に皆をおいて死んだりしない。約束だ」

ク「それなら安心です。ところで私の身体はどうやって修復したのですか？俊葵様の回復術は死んだ細胞には発動しませんし、時間の巻き戻しをしたような疲労も見えませんでした」

「それならこいつを使っただ」

みんなにも見えるようにしてから俺の後ろにクレイジーダイヤモンドを召喚する。

「傍に現れ立つというところからこの映像（ビジョン）を名付けて幽波紋（スタンド）!!」

東「凄い…これがクーちゃんをなおしたんだ」

千「それでお前は何ができるんだ？」

「千冬さん、こいつは喋りませんよ。あくまで俺の精神力が具現化した物なので。スタンドは色や形、能力も様々でどれも使いようによっては強力です」

「ラ「他にもあるのか？」」

「あるよ〜。ちやうど皆が集まっているしちよつと紹介しようか」

……

…

取り敢えず能力の紹介を終えて自室のベッドで休んでいると束が入って来た。

「本当に戻ってきてくれてありがとう」

「それはもういいって。俺だってみんなともう一度会いたかった。何の用？」

「何でもないけど俊くんと一緒に居たくて…」

束を抱き寄せて匂いを楽しむ。記憶喪失していた時はこんな積極的じゃあなかった
ので久し振りの匂いだ。何度楽しんでもこの香りは好い。

「ん…／＼／俊くん大好き♥」

「俺も好きだよ」

「俊くんはこれからどうしたいの？スタンドつてすごい力を身に着けて、その他にも
いっぱい超能力が使えて…前は世界を正しく導くって言ってたけど今はどうなのかな
？」

「この力はみんなを守るためだよ。前の俺の計画はパスイから聞いて知っているけどあ
んな恐ろしい事をやる勇氣は今の俺には無い。でも俺の計画なんだ…パスイも計画発

動まであと5年だつて言つていたし発動はさせると思う」

「焦らなくて良いんだよ？ じっくりや鈴ちゃんのために計画を遅らせた方が良いし。それに俊くんも私たちも永遠の存在だから私は時間なんて気にしないよ」

「そうだな…まだ時間はある。もつと良い案も浮かぶかもしれないし待つか」

「焦つても良いことは無いよ。…ちゅ♥今夜はこんな気分／＼」

「奇遇だな。俺もそうだった気分だ」

束に馬乗りになつて服を脱がせる。全く抵抗しないし嫌がってもいない。頬を少し紅く染め俯く束はとても美しかった。

番外 バレンタイン

世の中の男どもはバレンタインデーに向けて無駄な心の準備を進めている頃だろう。かく言う俺も準備を進めていた。でも心の準備じゃあなくてみんなに渡すプレゼントの準備。

日本では女性が男性にチョコをあげるのがセオリーだけど海外では男性が女性に花束を贈るのがセオリーだそうだ（Wiki調べ）。俺の彼女は大半が欧州生まれなので俺はみんなから貰うのではなくみんなにプレゼントを贈ることにした。

しかし何をプレゼントすべきなのか一週間前から考えているけれど何も思いつかない。食べ物を送るのも良いけれどみんなの好物が日本で手に入るか分からないし本場のモノでもないものを送っても仕様がな。

次に装飾品を考えたけれど趣味に合わないものを送ってもかえって邪魔になる。趣味に合ったものだとしても似たような物を既に持っていたらそれこそ意味がない。

手作りのモノも良いなど考えはしたけれどちよつと重たいのですぐにやめた。とい

うかナニを手作りして贈ればよいのかすら分からない。

クロエならその辺で拾った石ころを「俺が選んだ石だから大切にして」と言えば後生大事にするだろう。もしかしたら家宝にする可能性だってある。でもそんな事は絶対にさせない。

だから俺は街に出向いてみんなへのプレゼントを探している……バレンタイン当日だというのに。

手提げバッグの中には札束がどつきり詰まっている。銀行強盗してきたわけじゃあなくて『もし』ブランド物を買う事になった時にお金が足りないということにならないダメだ。

「さて……何を買おうか」

適当に店を探していると見知った顔を見かけた。

き「俊葵様はどのような物をご所望でしょうか……出会って間もない私には難題です」
有名な時計ブランド店にいたのは清洲景子その人。いつもの割烹着ではなく黒地に金糸が映える着物が美しい。

「どうやら俺に贈る時計を探しているようだ。数ある時計の中からいくらか手に取ってみている。」

俺は時計を持っていないし買う予定もなかったから時計を贈って貰えるのは嬉しい。

時間なんてスマホで確認できるご時世だ。腕時計なんて就職まで必要ないと思っ
た。

「何かお探しでしょうか？」

き「主人に贈る時計を探していました」

「では私共に探すお手伝いをさせてくださいな。予算、ご主人の好きな色、形などを仰っ
ていただければこちらでいくらか候補を用意いたします」

き「予算はこの店で一番高い時計を買える程度、好きな色は紅で盤面の無いシンプル
なデザインと機械仕掛けの歯車が見えているデザインが好み。それから好きな材質は
ゴールドとプラチナ、宝石はあまり好みません」

「畏まりました。では店内を見て回っている間に見繕ってきます」

なんで景子さんは今の俺の好みを知っているのだろうか。もしかして俺の好みは変
わっていないとか…可能性はある。しかし過去の俺はみんなに『俺はこういった物が好
きだから贈るなら参考にしてくれ!』とか言っていたのかもしれない。もしそうなら
凶々しい事この上ないな。

景子さんが俺の好みのモノを探していることを確認してから俺は別な店へと足を運
んだ。

……

：

今日は顔見知りと出会う運命らしい。偶にあるよねこういう休日。いつも行かないスーパ―に行ったら同級生がバイトしてたり、メイトに行ったら顔だけは知っている隣のクラスのおタクが居たり、道を歩いていたら後輩とすれ違ったり。今日はその日だ。

ラ「シャルル、俊葵はどういった装飾品を好むだろうか」

シャ「僕はこれが良いと思うな」

ラ「なるほど：私はこつちが良いと思うぞ」

シャルルが手に持っているのは純プラチナ製のチェーンネックレス、ラウラは純金製の弾丸が目を引くネックレス。二つとも俺の好みど真ん中。

この店はメンズしか売っていないので俺がここで何かを買ったとしても彼女たちの贈り物にはならなさそうだしバレない内にさっさと出るか。

……

：

そのあとの店に行っても彼女たちが居て結局何も買う事が出来なかった。いや、正確には違う。帰る途中で大人の店によってS Mプレイ用の服飾品を大量に仕入れた。

みんなには申し訳ないという気持ちで心が張り裂けそうだ。心なしかI S学園の門をくぐる足も重たい。テストで酷い点を取った後の帰宅くらい足取りが重い。

夕暮れはそんな俺の横顔を照らしてくれている。暑い（風情無視）。

暑いのは嫌いなので俺は早々に地下室へ退散した。しかし退散した先で今は会いたくない人にエンカウントした。

「お帰りなさいませ俊葵様。今日はどちらに？」

「どちらも行くのもこちらに行くのもお前の許可が必要か？今日は落ち込んでるんだ…部屋で寝る。誰も中に入れるな」

「しかしお夕飯は如何いたしましょう」

「如何もおかかもねえ…もう疲れた。部屋の前にサンドイッチでも置いていてくれ。起きた時に食べる」

それに皆に顔を合わせるのも申し訳ない。

「では疲れが癒されるようマツサージでも」

「気分じゃあない…」

「で、では…」

「なんでそんなに食い下がるんだ？いつもならすぐに引き下がるだろ」

クロエの善意は今の俺には届かない。自分が嫌になる。自分の不機嫌をクロエにぶつけている自分に。

「今日はバレンタインというイベントですから俊葵様に何か贈り物ができたらと思つて

いたのですが…。何をプレゼントしたら俊葵様に喜んで頂けるか分からなくて何も用意できず仕舞い。誠に申し訳ございません」

深々と頭を下げるクロエがとても輝いて見えた。そんな事を考えていたのか。なのに俺は自分の体裁ばかり気にして…。

「ごめんな…俺もみんなに何か贈り物ができたらと思つていたんだけどさ。みんなに何を贈つたらいいか分からなくて」

「そのお気持ちだけで充分です。何も用意していない私にそのようなお言葉を掛けてくださるなんて…感無量で…本当に俊葵様に遣えることができて幸せです」

こんな幸せそうな顔をされたら何かしてやりたいって気持ちでいっぱいになる。

「こんな物しかあげれないのが残念だけどこれも記念だ。来年はちゃんとした物を贈るから今はこれで我慢してくれ」

拡張領域からチョーカーを取り出してクロエに贈る。本革製で真ん中のハートがおしゃれポイント。バレンタインにこんなもの贈る男はどうなんだろうとも考えたけどこんな物しか贈れない。

「いちおう本革製だから良いものはある」

「ありがとうございます！早速、着けてさせていただきます」

迷うことなくチョーカーを首に付けて見せつける。

「苦しくないか？少し大きめのを買ってきたんだけど」

「俊葵様の優しさに包まれているような気持ちです。苦しくありません。とても心地よい肌触りですよ」

「そりゃあ良かった」

「しかしこんなに素晴らしいものを受け取っておきながら私には俊葵様に贈るものがないりません」

「そんなこと気にするな。俺だってS Mプレイの道具を贈るなんて普通なら怒られるぞ」

「俊葵様を怒るなどあり得ません。俊葵様から頂ける物なら病気であろうと感謝いたします」

「やっぱり何でもよかったようだ。でも出来る限り良い物を贈りたいと思うのは男性性だろう。」

「一週間前に時間を巻き戻して贈り物を選びなおしたいです」

「時間を巻き戻して……か」

「はい、これからどうなるか分かっていたら俊葵様に残念な思いをさせずに済んだと思うと後悔しきれません」

時間を巻き戻してか……巻き戻し……巻き戻し!!

「それだ!!」

「へ?」

「だから巻き戻しだよ。ほら、説明したろ?俺が絶望した時に発動する巻き戻し」

「確かに説明は受けましたが今の俊葵様は絶望しているように思えません」

「違うんだって。俺のスタンドは着脱可能なんだよ。ホワイト・スネイクってスタンドでディスク状にして摘出して他の人に渡せるんだよ。よしそれだ:みんなへのバレンタインの贈り物はスタンドに決定だ」

「そうと決まったら急いで準備だ。みんなを集めてディスクを用意して、これから忙しくなるぞ。」

「クロエ、みんなを集めてくれ」

「集めるメンバーは如何様に」

「そうだな:東、千冬さんはもちろんだし。いちいち話すよりこっちの方が早いや」

クロエのおでこに手を当てて俺の考えを教える。納得したクロエは『少々お待ちください』と出て行った。

俺はみんなが来るまでにスタンドをディスクにしていく。魂まで抜けてしまうのではないかと思っただけ不滅身の俺には関係ないだろう。きつとどうにかなる。

……

…

部屋に籠って十数分、荒療治だけれどほとんどのスタンドをディスクにできた。しかしその副作用で俺はフラフラになり、部屋は白くべたつく何かまみれになった。

「俊くくん、ハッピーバレンタイン♥ってなにこの部屋？こんな量の射精したの？」

「いくら俺でもこんな量の精液は出ないよ。精液の代わりにこれを出してた」

「ディスク？」

「そう、これは俺のスタンドが入ったディスク。これをみんなにプレゼントしようと思ってる。これを身体に取り込めばスタンドが使えるようになる。欲しいスタンドを選んでくれ」

皆の前にスタンドディスクを並べるけど誰も取ろうとしない。それどころか後ずさっているようにも見える。

「要らないのか？それとも欲しい奴が誰かとかぶったりしないか不安なのか？」

セ「いえ…その…」

か「何と言うか…」

ま「俊葵君が用意してくれた贈り物が私たちのよりも凄く戸惑っているんですよ。ね、みなさん」

うんうん、と首を縦に振るみんな。別にそんなこと気にしなくても良いのと言つても聞き入れてもらえそうにない。だから俺はまずみんなからバレンタインの贈り物を受け取ることにした。

「それじゃあまずはみんなのを受け取ろうかな。そうすりゃあちよつとは気が楽だろ？」

ク「ではまずは私から……ちゅ♥その……何も用意できなかったのでも今はこのような事しかできません。また後日、素晴らしいものを贈らせていただきます」

用意してなかったつて言つてたし誰かの後は出てき辛かったのだろう。逆の立場なら俺もそうしたと思う。

シャ「くうくその手があつたか」

ラ「姉さんは策士だな」

皆の反応から察するにクロエはある意味で正解を出したようだ。物質的なプレゼントではなく精神的なプレゼントを渡したことで周りに動揺の色が窺える。

セ「では次は私が……どうぞ」

セシリアからフワツと軽い箱を手渡される。箱は綺麗にラッピングされておりポンドで着飾られているがこの大ききでこの軽さはちよつと不自然だ。

「凄く重いけどこれ何？」

「開けてのお楽しみですわ」

「それじゃあ…」

リボンを綺麗に解いてからナイフを使ってラッピングのテープを切って綺麗に剥ぐ。バリバリと破ってしまえば良いのになんだか身体が勝手に動いた。

蓋を開けるとAmazonを見習ったかと思うほど空きスペースがある過剰梱包。そして中には香水が2本入っていた。

セ「こちらの透明のピンは俊葵さんが好きだと仰っていた百合の香りの香水ですわ。そしてこちらの紅いピンは少し特別でこれと言った香りが決まっていけないのです。いえ、決めることができないと言った方がよろしいかもしれませんね」

セシリアの言っていることが分からないので取り敢えず振ってみるととても懐かしい不思議な香りがした。刺激臭とも言えないかなり独特な香りがする。それでいて一度味わってしまうと抜け出せない香りだ。

「もしかしてこれって龍涎香が入ってるの？」

セ「はい、たまたま販売している会社の抽選に選ばれて俊葵さんにプレゼントしようと思いましたが」

「抽選？それじゃあ限定生産？」

セ「はい、天然物の龍涎香を使用した世界に一つしかない香水ですから」

すげえ…龍涎香を使った香水か。きつと数十万から数百万するんだらうな。

次は箒が俺に箱を渡した。形状から察するに中身はチョコかクッキーだらう。

ほ「セシリアの後だと喜んでもらえるか分からないが受け取ってくれ。甘いもの好きの俊葵にと選んでみた」

受け取るとズシリと重い。箱の大きさはそうでもないのに結構重いぞ。甘いものでこんなに重いものは想像できない。

「それじゃあ開けさせてもらうな」

包み紙を三枚剥ぐと虎の焼き印が押された桐箱が現れた。中身が分かったところで取り敢えず確認をする。

カパツと開けるとそこには黒々とした羊羹が三本並んでいた。

ほ「その…私は料理が苦手だから市販の菓子を贈らせてもらった」

「市販つて…これ店で見た事ないぞ。もしかして…」

ほ「ああ、本店まで行って買ってきた」

「ありがとう、すごく嬉しいよ。今度一緒に食べようか」

えへへと笑う箒の隣からひよつこりと簪と楯無さんが現れた。

か「私たちはコレ…」

た「ふふ、きつと驚くわよ」

後ろを向いた二人はなにかごそごそ準備をしている。まずは簪が振り向いて俺に詰め寄る。

か「ちゅ♥」

「ん……んう!!」

甘い!?!初キツスはチョコ味だった!!

た「それじゃあ私も、ちゅ♥」

甘い!!セカンドキツスもチョコ味だった!!…つてナニコレ。

か「ど、どうかな…嬉しい?」

「夢が一つ叶った気分」

た「やったわね簪ちゃん。これで俊くんはもう私たちにメロメロよん♥」

か「うん、しばらくは出番も増えそう」

感動している俺を夢から覚ましたのはラウラ・ボーデヴィツヒその人であった。

ラ「私だつてプレゼントがあるんだ。受け取れ」

照れ隠しなのか小さな箱を投げてよこす。

シャ「僕とラウラで選んだんだ」

箱を開けるとキレイなプラチナリングが入っていた。リングの内側には金でドイツ語とフランス語で「愛している」と書かれている。

「ありがとう。早速つけさせてもらおうよ」

どの指にはめようか少し迷ってから左手の人差し指にはめた。その意味は『進むべき道を指し示す』

『では次は私ですね』と景子さんが前に出た。景子さんの贈り物もとても小さな箱だった。しかし指輪と違って重みがある。それに中からチクタクと音が聞こえるので時計で間違いなさそうだ。

箱を開けると予想通り時計だったが少し特殊な時計だった。

「懐中時計なんて良い趣味してるね」

け「俊葵さんに似合うと思います」

「中の機械が見えてる感じがたまらなく俺の男の子の部分を刺激するよ。それにこの燻銀……もうたまらん!!」

け「自分でネジをまわすタイプなのでお忘れなく」

「マジでか!?!おいおい、嬉しいねえ」

時計を持つていなかった俺に懐中時計をプレゼントするなんて。なんて出来た従者なんだ。

しかしここまでできてチョコが二人しかいないという事実。今日はバレンタインデーじゃなかったっけ?

ち「私も用意している」

ま「私たちは二人でひとつの贈り物です」

『「これです』と渡された袋を開くと中にはメイド服が入っていた。しかしサイズが大き
い、特に胸が。

「俺に女装しろってことですかい？まあ巨乳メイドくらいなら何時でも変身出来ますけ
ど」

ち「そうではない」

ま「それを着るのは私たちです。でも趣向を凝らして脱衣プレイと着衣プレイを同時
にやろうと思ひまして」

「成る程……」

今までいろんなプレイをしてきたけれど脱衣と着衣の同時プレイは経験がない。そ
れに立場上あまり触れ合えない二人だからこそこの贈り物には価値がある。

「想像しただけで勃起しちゃった」

ま「ふふ、では今夜にでも♥」

ち「わ、私はまだ心の準備が／＼／＼」

二人ともトリップしてしまったので本音に向き直ると束とニヤニヤ笑顔で俺を出迎
えた。

「あの……めちやくちや怖いんだけど」

本「だってねえ」

東「俊くんへのプレゼントだから」

本、東「張り切り過ぎちゃったあ」

この世で最も怖いのは行動力のあるバカである。しかしこの場合のバカというのは『後先考えないバカ』であり学習能力は関係ない。ようは『覚悟ある者』が怖いという訳である。

目の前の二人は後先考えはする。全てが終わった後で。そんな二人がニヤニヤ笑顔を浮かべているという事はろくなことない。間違いない。

東「私たちは俊くんに喜んで貰う為にこんなものを作りました」

本「作りましたあ」

渡されたアタツシケースを開けると二丁の拳銃が入っている。だがしかし拳銃と人にはあまりにも大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして大雑把過ぎた。それは、正に鉄塊だった。

手に持ってみるとその重さが分かる。両方とも裕に10キロを超えている。こんな重い銃は俺くらいしか扱えないだろう。

「デカいな」

東「前に俊くんが『男の銃ってのは武骨でデカくなきゃいけねえ』って言ってたから。あ、でも記憶を無くす前の事だから覚えてないか」

「いや、覚えていなくても感覚で分かる。俺はこの銃を好んでいる!」

試しに壁に向けて撃つと着弾したとたんに弾が爆裂し鉄板入りの強化装甲を抉って大きな穴を作った。もちろんそんな弾を撃つて腕が大丈夫なはずもない。それなりに力を入れて握っていたはずだったのに手から落ちそうになった。

東「銃の名前はまだ決めていないから俊くんが命名して」

「それじゃあこっちの紅い銃をマリーナヴェイ、黒い銃をノワール・ドウ・ジエイと命名した」

東「なんでロシア語とフランス語に分けたの?」

「だってどっちかに統一したらどっちかがカツコ悪くなるもん」

『へー』と流す東だがみんなはなんでロシア語を知っていたのかという疑問を抱いていると思う。

本「それじゃあ次は私」

「束との共同開発じゃあなかったのか?」

本「私は私で用意したのだあ」

ソファの後ろから俺の身長ぐらいありそうなケースを取り出す。いつの間に仕込ん

だのかは分からないけどきつと束が手引きしたのだろう。

「ロックを解除して重厚な蓋を恐る恐る開ける。しかし中には何かの部品しか入っていない。」

「もしかしてコレ組み立てなきゃいけないヤツ？」

本「えへへ〜重すぎて組み立ては出来なかつた」

仕様がねえなあと本音を甘やかす俺はダメ親になりそうだ。仕方ないので本音の指示で組み立てた。するとすんごい形のミニガンが出来上がった。どんくらいすんごいかというと神化アリスが持っているミニガンを武骨にした感じなのが出来上がった。

本「俊くんこういうの好きでしょ〜」

好きななんてもんじゃあない。早速、持ってみるけど重すぎて両手じゃないと持てない。

本「一分間に1200発の炸裂徹甲弾を撃てるんだあ〜」

「撃てるんだあ〜じゃねえだろおい。なんて化物を作りやがる」

本「でも俊くん嬉しそうだよ〜？」

「嬉しすぎるわ!!」

本「唯一の弱点は外付けの大型マガジンがないと6秒で弾切れになるって事かな。外付けマガンが有っても2分弱で打ち止めだけど」

「それでもすげえよ。ありがとう。これでみんなからプレゼントは貰ったかな。次は俺の番だね」

……

…

数分後

「みんなどのスタンドが欲しいか話し合ってくれたか？」

ク「はい、一応ですが決める事が出来ました」

一応でも決めることができたのが意外だった。『そんな素晴らしいものを受け取ることなんて出来ません』とか言われると思っていた。

「それじゃあこのリストの通りみんなにディスクを入れれば良いわけね」

88話 R—18

俺が記憶を取り戻し蘇った事はみんな祝福してくれた。まさかここまで祝福されると思っていなかったので正直なところ揺を隠せない。みんなが催してくれた俺の復活祭も盛大でエロティックだった。煽情的な衣装に身を包んで、漢の本能を刺激するためだけのダンスを踊るみんなの姿が未だ脳裏にこべりついている。

その事を思い出して今も勃起している。現在午前8時半、いつもより1時間30分も遅い起床にも拘わらず本音のフェラチオを楽しんでいた。

「ちゅ、んちゅ、ちゅ、ちゅ♥ちゅる、ちゅ、とひくんのおつひくく♪おつひすぎてくひに入りきらないよ♥」

「あ、ごめん。すぐに小さくするよ」

「お願い〜い」

本音の口にもすっぽりと納まるくらいのおおきさまで小さくする。金玉のおおきさは変えていないので竿と玉のおおきさがアンバランスだ。何とも言えない中途半端な違和感

がある。そう感じるくらい竿に対しての玉袋が大きすぎた。

「次はこつちを舐めてあげる。ペロ…ペロ、ちゅ、あくくむ♥」

「本音の口あつたけえ〜」

「俊くんのおちんちんも堅くて熱いよ。口の中火傷しちやいそう」

やっぱり亀頭だけじゃなくて根元まで啜え込まれるのはとても心地良い。強めに吸い付かれると精液が睾丸から尿道を通って鈴口から吐き出しそうになる。

「実はやってみたいことがあるんだけど良いかな?」

「ちゅ、ん…んう…ちゅぱっ♥やつへみたいこと?」

「本来はこういういった使い方はしないんだろうけど…ストーン・フリー。こうやって身体を紐状にして本音に絡みつけば…ほうらできた。亀甲縛りグレート」

「んう…ちよつと…縛られるの良いかも♥」

本音の身体を縛っている紐は俺の身体を伸ばした物なので直に体温や感触が楽しんで新しい快樂に目覚めてしまいそう。

縛ったまま本音の口とおまんこに張型状にした紐を入れる。するとまるで全身を膣内に入れたかのような感覚に陥った。堪らず俺は本音を縛り上げたまま身体を動かす。

ゆつくりと身体を擦り付けるように動く。背面座位の体勢なので本音の負担が少なく、尚且つ膣内深くまで俺のおちんちんが突き刺さった。

「スタンドつてのも便利だろ。見えているか？」

「うん…俊くんみたいな優しい顔してる」

「へへ、嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

抱きしめた指が少し沈む柔らかさの肌がとても気持ち良い。筋肉はあまりなく正に女の子の身体って感じがする。ぽっちやりしている訳じゃない、ただただとても肌触りが良い。

「ん〜この身体が俺を惑わすんだ。魅惑的な香りに惑わされた俺は獣になっちゃうぜ」

身体の縛りを強くして本音の皮膚にスタンドを食い込ませる。苦しそうなうめき声と同時に頬を染めて喘ぐ。

「こんなにおまんこを濡らしてまあ…」

スタンドが濡れると俺もそれを感じする。本音のおまんこは今まさにぐちよぬれになっている。だから俺は本音の頭を掴んで喉の奥にちんぽを突っ込んで膨らませた。

「おっつ!!ん〜!!んぐつ!!」

苦しんでいるのでゆっくりと亀頭まで抜いてやる。すると鼻で荒い息をしながら舌を器用に使って俺の亀頭を舐め回す。

「んちゅ…えろ、えろん♥」

少し楽になったのを確認してからまた喉の奥まで挿入する。今度は一回目でコツを挿んだのかそこまで苦しそうではない。

「んぐ…ん…んう…じゆる、じゆるる…」

縛られ身体の自由を奪われながらも俺の為に奉仕を続ける本音はとても美しい。ク口エに通ずるところがある。

まるでアイスキャンディーのように舐められ続けて俺は絶頂に達する。本音はわざと身体を倒して喉の奥までのみ込んだ。

「んう…ぷはあ♥えへへ全部飲んじやったあ／／」

頬を朱色に染めた本音に我慢できず俺はベッドへ投げ飛ばして、すでに準備完了しているおまんこへピンピンに膨張した怒直を突き立てた。

「あんっ！い、いきなり…激し…あっ／／」

「ごめん、我慢できない。出したばかりなのにおちんぼが小さくならないんだ」

「うん…良いよお…俊くんの好きなように犯してほしいな」

「ごめん…」

「謝らないで。俊くとセックスができて私も嬉しいの」

「自分勝手で…俺どうしようもなくて…」

「こつちを見て!!…俊くん」

「なんだ？」

「俊くん♥」

本音が言いたいことは分かる。分かるけど分からない。気持ちは分かるけど言葉では説明できない。こういった時はこの言い方が丁度良い。何だか分かんがとにかくよし!!

動けない本音を抱きしめて奥まで挿入する。温かい膣内が俺を包み込む。

「あう…気持ち良い♥おまんこが広がっているのが分かるう／＼／＼」

「もつと凄いことしようか」

おちんぼを紐に変えて子宮内に入れ込んだり膣壁を面ではなく点で刺激する。

「んああ!! たひかにひゅごいゝゝゝ♥しゅごいよおゝゝゝ♥」

「俺も最高に興奮してきた!!」

「もつともつと私で興奮してきた!!」

そんな事を言われたら本能に従っている今の俺はどうなるか。本音もワザとやっているに違いない。半分白目向いて口からよだれを撒き散らしおまんこからは愛液が流れ出ている。

そんなだらしな性格の本音を縛り上げて犯している。

「こんなとこ誰かに見られたら大変だな」

「ふえ?」

空中にカメラを浮かせて撮影をする。

「後でオナニーする時に使うから撮影していたけどハーレムメンバーみんな鑑賞会でもしようかな?」

「いやあ…／＼／＼恥ずかしいよう♥」

「おまんこは正直者だな。カメラを見てから締め付けがきつくなつたぞ」

「らつてえ…だいしゆきな俊くんとのハメ撮りを見られてえ…♥ちよつとゆーえつかーん♥」

「へへへ、俺も本音みたいなイイオンナを抱けて誰よりもゆーえつかーんつてやつだ」

しかしその優越感はいつまでも続かない。ちんぽを紐にしているので表面積はいつもの数十倍になっている。つまりそれだけ快楽を感じているという事。既に俺の紐状のチンポ、略して紐チンは限界に達していた。

どうでも良いけど紐チンつて聞くとヒモチン、つまりヒモ野郎のチンポつて意味にならないかな?

「出すっ!!」

本音の拘束を一瞬だけ解いてだいしゆきホールドをさせた後で今度は俺ごと縛つて身体を密着させる。そして本音の中に思い切り射精した。

「んう~~~~~♥れてるう~~~~おまんこもしきゆうも俊くんの精液で犯されているよう♥もつろお~~~~おつろらひれえ~~~~!!」

紐チンの表面から湧き出るように射精した。いつも以上に刺激が強いののでいつもの数倍は出たと思う。おまんこから垂れ流れてちよつとした水たまりになった精液に本音は顔を突っ込んでべろべろと舐める。まるで大好きなご主人様の顔を舐める犬のよう。

「おいひい~~~~」

「もつと旨くしてやるよ」

本音の顔面にまだ溢れる精液をぶつ掛ける。口に狙いを定めて小便のように精液を流し込む。本音はそんなドロドロで固形物が大量に混じった精液を咀嚼しながら喉を大きくならして飲み込んだ。そして…。

「げえええええつぷ!!……………／／／」

ドデカいゲツプと共に顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
ブツ!!

本音のゲツプに負けじと俺もでっかいおならをした。

「これでお相子だ。誰にも言うなよ?」

「俊くん優しい…♥だから好き。誰よりも…ね♥」

「俺は本音の事みんなと同じくらい大好き」

「もし皆より好きって言ったら怒ってた。だって私だけ愛されているなんてみんなに悪いし俊くんはハーレムの王様だから甲斐性なしじゃあないもん♪みんな幸せにしてね」
♥

「俺のオンナは人類で一番の幸せ者集団にしてやるよ」

本音は眠そうに眼を擦っているのでベッドのシーツを綺麗にして本音を優しく寝かせる。

「お休み…本音が寝るまで俺は傍に居るから」

「ありがとう…えへへ……」

本音を寝かしつけてから束のいる研究室へ足を向ける。記憶と能力を取り戻したことよって今までの計画を進めることにした。夏休みで時間と能力を持って余している俺には丁度良い。

「俺のISの調子はどうだ？問題ないか？」

「今のところは無問題（モウマンタイ）」

「今のところは？」

「新しい精神状態になった俊くんとの同調でISのコアが性質変化を起こしているの。

「これだとISの……が……と……によって……って事が起こって……」

専門用語の羅列で俺にはさっぱり分からない。頑張って頭の中に入れてくれるけど何について話しているのかも分からない。

「ごめん、要約してくれない?」

「つまり俊くんは I S の性格が変わったって事」

「よく分かんないけど分かった」

宇宙と呼ばれる I S に手を触れる。冷たい装甲が手の熱を奪う。

「傷だらけだ」

「俊くんは傷だらけで汚れた物に美的感覚を覚えていたみたいだからね。絶対防御も発

動させずに戦っていたよ」

「俺のせいでこんなに傷だらけになっちゃまって…ありがとな」

『…い……は……ませ……』

「東、今何か言ったか?」

「ううん、何も言っていないよ。テレビの音じゃない?」

「そうかな…」

確かに今この I S が喋ったと思ったんだけど。気のせい…なのか?

「もしかしてパスイか?」

『いえ、私は今メンテナンスのために宇宙の中には居りません。何か不具合でも?』

「なんでもない。俺の気にしすぎかも」

「そうだよな、起動してないISが何かを喋るなんてありえない。オカルトやファンタジーじゃあないんだから。」

「それにしても……俺のISってみんなのと随分形が違うな。みんなのは手足だけに装着する感じなのに俺のは全身に纏う感じのスーツみたい。なんでこんな構造なの？」

「それは主に俊くんがISの原動力にあるんだよ。なんとこれらのISには縮退炉という核も真つ青なトンデモエンジンが搭載されているのだ〜」

「縮退炉？」

「うん、分かりやすく説明するとブラックホールを使って物質を圧縮させてエネルギーを取り出すってエンジン」

「じゃあ俺のISは腹にブラックホールを抱えている訳だ」

「それも二つね」

「どうしてそんなトンデモエンジンを二つも搭載したのかは敢えて聞かなかつた。」

「スゲー……」

「で、俊くんはそんな話をするために来たんじゃないよね？」

「東には隠し事できなさそう。浮気してもすぐばれちゃいそう。」

「えつと……実は今後の計画についてなんだけど……」

「別に内緒でも構わないよ。だって俊くんのことだからサプライズしたかったんだろうし」

「恋人に隠し事はしたくない。だから話させて…」

東にタブレットを渡して設計図を見せる。

「パスイからこの話を聞いた時にはこんな計画は破棄したいって思ったんだけど俺も何かしらの考えがあるはずだって」

「さすが俊くん、考えが深いね」

「パスイ、例の映像を見せてくれ」

『畏まりました』

「例の映像？」

「俺にもしものことがあつた時の為に過去の俺が録画していたみたいなんだ。ほら、始めよう」

『この映像をパスイから見せてもらつてゐるって事は俺に何かしらの問題が起きて計画遂行が困難になつてゐるはずだ。一応、兵器製造は順調に進んでゐるからその辺は大丈夫だろう。しかし俺が居なくなつたことでみんなの統率が取れなくなるのはゆゆしき事態だ。だから改めてこの計画の意義を説明したい。簡潔に言う俺のためだ。人類は地球や自然にとって百害あつて一利なしの存在。だから滅ぼして俺たちだけの理想

郷を作るんだ。俺の選んだ優れた遺伝子だけを後世に残し人為的に人類を進化させる』
成る程、間違いいではない。だけど昔の俺はすごい自己中心的で独善的な人間だったんだな。嫌いじゃあないわ。

『きつと世界は俺たちの行いを悪だというだろう。でもそれは間違いだ。誰よりも優れた俺たちこそが正しいんだ。悩むことは無い。ほんのちよつぱり考えれば分かることだろう？ 優れた人間が統治する世界こそ優れているって。……でも……もし俺に起きた問題が『死亡』や『消失』で俺という存在が居なくなってしまったのならみんなは自由だ。好きなように生きてくれ……。未来の俺……一応言っておくぞ。お前のしようとしている事は私戦予備陰謀罪、外患誘致罪になる。ちなみにまだ一件しか摘発された事のない罪だ』

そんな罪があつたんだ……まあ、悪い事だし犯罪だろうけどそんな名前の罪なんだ。でも過去の俺は賢かつたんだな。

『水ダウで知つた』

バカだった。

『ああ……つとどこまで話したっけか……そうだ、お前のやろうとしている事は犯罪だ。あ、今の時点では俺がやろうとしている事か……まあそんな些末な事はいい。やりたくないなら計画を破棄するもよしだ。みんなにも言つたようにお前も好きに生きてくれ。』

過去の俺に縛られるな。……それじゃあ、この動画が再生されない事を祈っているよ」
残念ながら再生されちゃっているよ……過去の俺はこの計画に執着していなそうだったけど今の俺はどうかと言われたら結構執着しているかもしれない。今の俺がやろうとしている事を記憶を失った未来の俺が吐きしたら悲しくなる。

「過去の俺はみんなの事が好きだったんだね。まあ、今の俺の方がもつと好きだけけど」
「私も好きだよお〜〜♥計画だつていくらでもお手伝いするよ」

「そりゃあ助かる……でもパスイが記憶を失った俺の代わりに計画を進めていたらしく建造してくれたんだ。その名も超大和級試作型万能戦艦『薩摩』。こいつ一隻あれば世界征服なんて朝飯前にできる。それだけの性能の艦だ」

大和型よりもさらに大きな戦艦の左右に一回り戦艦を二つ着けたトンデモ戦艦の設定図を見せる。

「盛り上がっているとこ悪いけどこの船は物理的に動かないよ。だつて重量が大きすぎるしこの主砲だと一発撃つただけで爆発しちゃう。それにこの装甲に使われている合金は聞いたことも無いんだけど」

「ちつちつち、そんなニュートン物理学で動くのはもう時代遅れ。なんとこの船は周囲の物理法則を書き換えて進むんだ。装甲も俺が新しく錬金した新元素で作られていて物理的なエネルギーでは破壊できない。あくまで理論上の話だけけど」

「う〜ん…でもこの設計には明らかに無理が…：動力も小さすぎる。このサイズの戦艦を動かすとなるとフィジカルリアクター？つてやつ一個じゃ足りないと思うんだけど。そもそもフィジカルリアクターつてなに？」

「千メートル以下の船ならこの大きさのフィジカルリアクターでもおつりがくるんだけどね。俺は難しい説明が無理だから簡単に説明するけど…まあ…『物質を好き勝手に変質させることができる最強のエンジン』つてとこかな。必要に応じて縮退炉を作り出す。そうでなきゃ薩摩は無敵の船じゃあない。もちろん船だけじゃあなくて直掩部隊の建造もしているよ」

『それはこつち』と別なページを見せる。

「凄い…機体を複数のパーツに分けて状況に応じた機体を作り出すアーマード・コアシステム。それにこのネクストつてオーバースペック過ぎる。こんなワンオフでも良いくらいの機体を量産するの？」

「俺の計画には敵が多すぎるし遂行するためには大量殺戮兵器が必要不可欠なんだ。平和に犠牲は付き物だろ？」

「俊くんにとつての平和つて何？」

「人と人が思いやって生きていける世界。今の地球は人間、環境共に最悪だ。だから俺は全世界の人間を消し去って地球環境を元に戻したいんだ。そうすれば俺が選んだ

素晴らしい遺伝子を後世に残し人為的な人類の進化を起こすことができる。…まあここまででは記憶があった頃の俺の計画ね」

極論だけど人間がいなくなれば環境は元に戻る。俺たちは不滅の存在だ。自滅した人類の代わりに地球の管理者になって新人類の行く末を見ることがだってできる。

「私はそんな素晴らしい計画のお手伝いができるんだ」

「嬉しいか？」

「むしろこつちからお願ひしたいよ。俊くんと私の考えって一緒だったんだ。私も宇宙工学に興味を持っていてるけどその前は環境工学専攻だったんだよ？ 束さんは天才だから一週間で専攻していなかったけど」

「初耳なんだけど…って当たり前か。聴いていたとしても記憶がない」

「人に歴史ありなんだよ。昔の私はもう知ってもらったからこれからは今の私を知って欲しいな♥」

そう言っつて服をはだけさせて俺に迫る。開かれた胸元からは薄いピンク色をした可愛らしい乳首が見えている。一步一步踏み占めるたびに胸が揺れて俺の性欲をくすぐった。

「エロい」

「全部俊くんの為の身体だよ〜♥ほら、腹筋も俊くん好みに改造したんだあ〜♥」

東の腹筋は千冬さん並に割れていた。シックスパックなんて生易しい物じゃあない。東の腹筋は正にエイトパックに割れていた。フリフリの服の上からでは確認できなかったけれど太ももやふくらはぎも筋肉バッキバキになっている。

「すっげえエロい」

「喜んでくれたかな？ 肉体改造なんて東さんに掛かれば一日も有ればできるのだ」
「何をどうしたらそんな身体になれるのか俺は不思議でならないよ」

ついこの間までポツチャリ系だった東が今は筋肉質になっている。細胞レベルで高スペックは伊達じゃあない。

下着姿になった東は俺に抱き着いて甘い香りを漂わせた。一呼吸するごとに背筋がゾクゾクする。でも俺のチンコは半起ちでふにゃふにゃだ。

「昨日の夜はみんなと乱交パーティーだったしさつきまで本音とセックスしてたから全然勃起しないや。ごめん…」

「ううん、気にしないで俊くんのしたいようにすればいいよ。おちんちんを擦り付けたり握ったり、おっぱいも好きにして良いよ。だって私は俊くん専用の生オナホだから」
♥

「みんなそう言ってくれるけど何だか実感湧かないや。こうやって抱きしめて安心を得られるだけで俺は十分なんだけだな」

「ええ、それじゃあ私たちが満足できないよ」

「勿論、俺が満足する前に束たちを満足させるよ。オナニーだけじゃ得られない快樂と満足感があるしね」

束を満足させるために俺は裸になって抱きしめる。昨日まで柔らかかった身体は筋肉でパンパンに張っている。それがまた良い。

「えへへ、俊くんに愛撫されてる」

「性欲の為に束を抱くのか：それとも愛があるから束を抱くのか。どっちだと思う？」

「両方」

「大正解」

束の身体は剛と柔の両方を兼ね備えた最強の身体だ。物理的な意味でも関節的な意味でも柔らかい。筋肉も鋼のように固い：しかしそれと同時におっぱいのような柔らかさもあつた。

肌はすべすべでもつちりで良い匂いがする。ボディソープの匂いなのか束の体臭なのか分からないけれどフルーツのような甘い匂いがする。

「ん：／／くすぐりたいよう」

「あ、ごめん」

急いで手を放そうとしたら手首を掴まれてしまった。

「ダメ…手を離さないで」

「分かった。えつと…どんなプレイが良いのかな？」

「そんなの気にしなくて良いよ。俊くんに触られているだけでもうおまんこがぐちよ濡れだもん。入れて♥」

それじゃあ…と後ろから束の膣に狙いを定めて腰をゆつくりと動かす。カリ首が膣壁を押しつけて奥へ奥へと入っていく挿入感がたまらない。

「んあ…気持ち良い…ああ…／／／」

「縛っても良いかな？」

「訊かないで…俊くんの好きなようにして♥手足を腕がれても、喉元を喰い千切られても、はらわた引きずり出されても良いのお／／／」

何が彼女をそこまで狂信的にさせるのか俺には分からないけれどとても嬉しい。でも好きな女性が傷ついたり苦しんだりするところを見て興奮するほど俺は非人道的な人間じゃあない。あくまで彼女たちが望むようなことをしてあげたい。

だから俺は隠者の紫で束の身体を優しく縛る。棘が出来る限り束を傷付けないように壊れやすい鉛細工のように丁寧に扱う。

それでも棘は容赦なく肌を突き刺し、深紅の血を流させる。後ろ手に縛った手首は締め上げられて皮どころか筋肉まで切れている。でも束は恍惚とした表情で喘ぎ声をあ

げた。

「痛いけど気持ち良い〜♥おまんこを突かれながら縛られるの好きい／／」

「綺麗だ…凄く美しい。モノつてのは壊れたり傷ついたりする瞬間が一番美しいって最近気づいた。俺はなんて酷い人間だ。でも興奮を抑えられない…」

腰を打ち付けるスピードを上げる。おまんこからは愛液なのか小水なのか分からない粘液でびちゃびちゃと音を立てている。

「抑える必要はないよ。人間は理性なんてクソみたいな言葉で自分を縛り付けている愚かな生物…ん／／／どうしてライオンは感情的に食べて寝て犯して自由奔放な生活を送っているのに何で誰も咎めないのか分かる？」

「セックス中に授業か？まあ、良いけど。そりゃあ強いからだろ？」

「えへへえ〜ほんのちよつぴり正解〜♥正解は強くて捕食者で数が少ないからあ／／人間は自分たちを優等種だつて勘違いしている。でも本当の優等種は俊くん♥しかも世界中にたった一人だけの捕食者…：理性的に行動する必要なんてないんだよ」

「それじゃあ束も支配してやるよ」

「ああ〜ん♥もう支配されてるよう〜／／」

「それで良いんだ。俺に膝まづいて泥水啜りながら支配される」

もつと激しく束を縛り上げる。身体はポロポロで血まみれになっているのに俺はピ

ストンを止めない。

「凄くイイ……もう……イキそうだ」

「勿論……膣内出しい♥」

言われるまでもない。腰を思い切り打ち付けて隠者の紫で思い切り抱きしめた。そして子宮口を無理やりこじ開けて思い切り射精した。

「あ、ああ……はあん♥ああああああああ♥」

叫び声のような嬌声を挙げながら潮を噴いた。膣内の締め付けもきつくなつて俺の精液を吸い上げる。それに呼応するように俺のチンコも束の子宮へ精液を流し込み続けた。

「はあ……はあ……やつぱ束の中に出すの最高……だ」

「私も俊くんに出されるの好きい……／＼みんなと比べてどうだった？」

「それは一番かどうか聞いているのか？」

「違ううくのおく♥締め付けとか凹凸とかどううく？」

「そうだな。誰が一番かなんてクソみたいな質問するはずないよな。束のおまんこはみんなの中ではとても平均的な締め付けだ。クロ工程締め付けなければ本音程ゆるふわでもない。丁度良い締め付けだよ。入り口は横模様の凸凹があつて奥に行くとき螺旋状の肉壁が俺のちんぽを捕食しやがる。このまましばらくまんこに入れたままで良いか

？」

「もちろんおん♥眠たいの？」

「ああ…束の身体…：…良い匂いがする。この匂いを嗅いでいると眠くなるんだ…。束、俺って…」

「他の女の子を抱いても怒らないよ」

「なんで分かるんだ？」

「だって愛しているから…：ちゅ♥（本当はいつもセックスの後は必ずネガティブになるのを知っているからなんて言えないな）」

分かってるよ束。束が知っている以上に俺は束の事を知っている。…：…いつも迷惑を掛けるな。

束と向かい合ったままクーラーのガンガン効いた部屋で深い眠りに着いた。束の身体は俺の為にある。それはとても幸せかかって。

…

…

俺の隣には何故か箒が眠っていた。昨日は束とセックスをして眠った。そして朝起きたらこの有り様だ。

「おはよう、箒」

「ああ、お早う。良い朝だな」

時計の針は12時を回っていた。

「朝つつうより昼だな」

「ふふ、そうだな。実は朝食を…昼食になってしまったが届けに来たんだ。そうしたら気持ち良さそうに寝息を立てていたから…つい」

「そうか、それじゃあご飯は冷めちゃったかもな」

「あ…」

「大丈夫…」

机の上に置いてある朝食に右手を向ける。すると料理から湯気が立ち上った。

「面白い能力だろ？スタンド無しでもモノを温めることができる。こうして空気中の温度を極限まで高めて指パツチンをする…まるでライターだ。生み出した炎は好きなように操れる。蝶々にしたり…鳳凰にしたり」

「凄く綺麗だ」

「チャリオッツで切り裂いてみる。もう使いこなせる様になったか？」

「そこそこだが…やってみる。チャリオッツ!!」

三匹の鳳凰は瞬く間に切り裂かれ消化された。

「凄いな。チャリオッツも成長したんじゃないか？」

「見た目も大きく変わった。レイピア？と呼ばれる細っこい剣から大小二本の刀を装備するようになったし甲冑も和風になったな。とても私好みだ」

「やっぱり精神的に成長したって事だね。嬉しい限りだ」

「これで私も俊葵の役に立てるか？」

「そりゃあ勿論」

「でも私は……人殺しは出来ない。それが俊葵や姉さんの為だと分かっているても人の命を奪う事は出来ない。こんな強力な能力を手に入れてしまったなら尚更だ。俊葵の考え方が間違っているとは言わない。だけど人殺しはよくない事だと思う」

「それで良い。俺みたいなのがおかしいんだ。さあ、朝ご飯を食べよう。また冷めてしまおう」

「でも俊葵が望むなら私はいつでも人斬りになれる」

「無理するな……いずれだ。いつかきつと覚醒する時が来る。その時まで覚悟はお預け。愛してる人が苦しむ姿は見たくないよ……だから……ね」

「分かった……私も俊葵を……あ、あい、あい……愛してる／＼／＼うう……用事を思い出したから帰る!!」

出て行ってしまった。シャイなどころも可愛いなあ。

俺は箒に対する愛を益々深めた。そして美味しい美味しい箒お手製の朝食、もとい昼

食に舌鼓を打つのだった。

89話 夏祭り1

景子さんの鉄線が俺に迫る。糸はかなり細いがミクロン単位まで細くした鉄線を何本も撚り合わせて作られたかなり強靱な糸だ。ナイフや刀で切ろうとしても弛んで切れず、むしろ刃に巻き付けて折る事だってできる。

だから俺はバックステップで距離を取った。しかしいつの間にか糸は背後に回り込んでいたので袖からトンファーを出して完全に巻き付けられないようにガードした。

「残念ですが俊葵様は私の糸から逃げられませんよ」

「ッ!?!」

痛みを感じる前に俺の上半身は地面に突っ伏した。そして目の前にはまだ倒れていない下半身がある。

激痛を感じるより先に痛覚を自動遮断したおかげでショック死は免れたが全然分からん。

「ストーンフリー!!」

傷口を糸にして結び合わせて身体を元に戻す。避けたと思つたら回り込まれ、防いだと思つたら攻撃されていた。

「キングクリムゾンか…とんでもないスタンドをあげちゃった。今までたった一人にこんな負傷を追わされたのは初めてです。使いこなせているようですね」

「俊葵さんのお願いとは言え傷つけるのは不本意です。これ以上続けますか?」
「あともうちよつと続ける」

Uziを両手に構え乱射する。弾丸は跳弾し景子さんに襲い掛かる。

「全て見えています」

糸を編んで盾にして防ぐ。防ぎきれない弾丸は時を消し飛ばして避けているようだ。しかし一発の弾丸が景子さんのふとももに命中した。

「弾丸を避けたのは失敗でしたね。弾道は見えたかもしれませんが着弾した自分まで未来を見ないと。それから時間を飛ばせる時間、クールタイムも計算に入れないといけませんね」

透明な弾丸なら未来においても見えていない。いくら予知できても見えないものは感知できない。

「うっ…」

「景子さんと本気で戦つたのは初めてだったけどとても楽しかったです。今、傷を治し

ますね」

弾丸を取り出して傷を治す。傷痕は綺麗に消えて血の染みだけが残った。

「やれやれ、キングクリムゾンも万能ではありませんね」

「それでもないですよ。対一の戦いならほとんど無敵のスタンドです。俺みたいにスタンドの弱点を理解している相手でもない限り負けることはあり得ませんって」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。朝食はどういたしますか？クロエさんがいらっしやらないので今日は私がご用意させていただきます」

「クロエが居ないので今日だっけ？」

「はい、昨日の夜から束様と箒さんと共に二人のご実家の方へ行かれています。何か不都合な事でも」

そう言えばそうだった。神社で祭りがあつて巫女さんやつてる箒は帰るんだつた。それに束も実家を出て行ってから顔合わせてない両親に会いに行くつて。

「そんなに不都合つて訳でもないけどクロエが居ないのはなあ…」

「束様のお世話を任せると仰つたのは俊葵様ではないですか」

「寂しいから慰めて…」

割烹着を着た景子さんに抱き着いてわぎとらしく泣いたふりをした。

「まったく…束様もクロエさんも俊葵様を甘やかしすぎです。私は甘やかしませんよ。」

ええ、決して甘やかしませんとも」

「……ホント?」

「もちろん本当です。試してみますか、私は構いませんよ」

「じゃあなんで抱きしめてくれるの」

景子さんの手は俺の背中に廻っていて優しく抱きしめている。

「抱きしめて優しく撫でる事はまだ甘やかしの『あ』の字もありません。『か』の字くらいまでなら教養範囲です」

「それじゃあベッドの上で優しくおちんちんをしごいて♥」

「……まあ、それぐらいなら良いでしょう」

朝食前に朝勃ちの処理を手とおっぱいとおまんこでやってくれた景子さんはとても優しい女性だと思う。多分、こんなにも優しい女性はそんなにいないだろうな。

……

…

久しぶりに実家の土を踏んだ。何も変わっていない。神社も変わりなかったけど裏手にある実家も全く変わった様子がない。

「本当に大丈夫か、姉さん」

「だ、大丈夫…よし、入るよ」

ガラツと立て付けが少し悪い引き戸を開けて敷居を跨ぐ。むわつとした湿気と熱気が顔を包む。それはクーラーなんて便利なものはこの家には無い事を示唆していた。

「た、ただいま……」

「あら、箒。帰つて来るなら連絡を……。束？」

「う、うん……ただいま」

「えつと……おかえりなさい。部屋はそのままにしてあるわ。長旅で疲れたでしょう。こちらのお嬢さんもどうぞ中へ。お茶を用意しますね」

ここに来るまでは凄く緊張していたけど会ってしまったらそうでもない。ドキドキは止まらないけど少し気が楽になった。

「クーちゃんも上がって。折角だし私の部屋に行こうよ」

「畏まりました。それではお邪魔します」

「箒ちゃんはどうする？」

「私も部屋に戻ろうかな」

箒ちゃんと分かれて自分の部屋の扉を開ける。ベッドも机も何も変わりない。本棚には工学系の書籍ばかり置いてあるし、一世代以前の試作型ISのコアも全く動いていない。

「ここが束様のお部屋。とてもらしいお部屋ですね」

「子どもらしからぬ飾りつ気のない部屋。なんだかこの部屋にいと昔の事を思い出して嫌だな。リビングに行こうか」

「お供いたします」

リビングではお父さんと母さんが私を待っていた。いま一番会いたくない人とのご対面は精神的にくる。お父さんに対して嫌な思い出があるとか厳しくて厳格な人だったとかそういう訳じゃあないけど、なんとなくお父さんは苦手だった。

「ただいま…」

「お帰りなさい…変わりないか?」

口数はもともと少なかったし、笑顔を見た記憶もあまりない。そんな父が厳格な顔で私も前に鎮座している。

「うん、元気でやってる」

「そうか…。箒から聞いたが恋人ができたそうだな」

「うん…」

いきなり核心をついてきた。やっぱりこの人は苦手。他に会話することは無いの? なんでこの質問かな…。

「人付き合いが苦手なお前がな。とても驚いたよ。でも安心した…『私の娘はこの馬の骨とも知らん奴に渡さない』という気持ちもあった。でも『その人』はとても優しい

人なんだろう?」

「うん…凄く優しい」

「箒から全部聞いたから知っているよ。『その人』は色々な女性と関係を持つているそうだね。腹も立ったし切り捨ててやろうとも思った」

いまクーちゃんが右手をピクリと動かしたのを私は見逃さなかった。私のお父さんだから手は出さないだろうけど少し心配だな。ちよつと身を寄せて安心させる。

「だけど幸せそうなお前たちの顔を見たら『その人』に任せられるって思ったのだ。18の頃、この家を飛び出してからお前はもう一人立ちしていたんだな。束、もう私から言うことは無い。もう分かるだろう」

父さんの目の端に涙が見えた。

「父さんはお前が幸せそうに凄く嬉しいよ。良い人を見つけたな」

「うん!」

「箒も姉と同じ人を好きになって良かったと思うか?」

「勿論です。私は俊葵を愛していることを誇りに思う」

「そうか…母さん…嬉しいなあ!」

「ええ…ええ!」

良かった…父さんも母さんも俊くんを認めてくれた。ほんのちよびり不安だったの。

だって俊くと両親どっちを取ると言われたら迷ってしまうから。

「あ、そうそう。この子はクーちゃん。俊くんの恋人兼私の助手。クーちゃん、私のお父さんとお母さんにご挨拶」

「はい、初めまして。クロエ・クロニクルと申します。俊葵様の奴隷兼束様のメイドをしております」

「奴隷？メイド？」

「はい、俊葵様に私は命を救われました。その時から私は俊葵様の奴隷になると心に誓ったのです。しかしそんな私を『恋人』や『助手』として扱ってくださいる皆様には心の底から感謝感激しております」

「そ、そうなのか」

「とにかくクーちゃんは良い子なの」

「まったく…その俊葵という人はとても魅力的な人間なんだろうな」

「私も会ってみたいわ。ところで箒ちゃんは今日の神楽舞はどうするの？代演の巫女なら用意はしたけれど…」

「今夜は俊葵が来るから私が舞おうと思います」

「そう、それじゃあ準備を進めるわね」

「私もお祭りの運営で町内会の人と会議があるから出てくるよ。三人ともゆつくりとく

つろいでくれ。それから東、箒、帰ってきてくれてありがとう」

父さんも母さんも出て行ってしまった。残された私たちは箒ちゃんが着付けをしに行くまで近くの森を探検したりレトロゲームをしたり楽しんだ。

……

…

俺は和装に身を包み電車に揺られていた。普段着ないような服を着るっていうのはとても変な感じがする。しかも俺はふんどしすら締めないノーパンスタイル。和服は全裸に着るってエロ本から知識を得ていたからそれに倣っている。

ただでさへ目立つのにノーパンだとかかなり興奮する。間違っても勃起しないようにしないと。

なんで目立つかって？俺の周りには吉原の花魁も霞んで見える美人たちが囲んでい
るから。

「みんなの予定が合って良かったよ。折角の神楽舞だからみんなで見に行かないとね」
「そのカグラマイとは何ですか？」

「外国人の僕たちには馴染みの無い言葉だから教えてもらえるかな？」

「情報を求む」

「神楽舞ってのは神様に贈る踊りみたいなものかな。神様のご機嫌を取って田んぼや畑

の豊作を願うんだ。正直、箒の神楽舞を奉納される神様をぶつ殺したい気もするけどね」

「へへ、日本人って信心深いんだ」

「今の俺のセリフ聴いてなかったのか？まあ良いよ」

こうして俺たちは電車を何度か乗り継いで箒の実家の神社まで来た。神社の境内の
出店で買い物をする頃には夜になっていた。

結構大きな神社だからなのか階段下の通りまで露店が立ち並んでいる。境内も広くて人も多い。だからみんなと来たけど早速逸れてしまっていた。

耳触りの良い喧騒と祭囃子を聞きながらたこ焼きを左手に持ち、豚串を三本も右手に持ち、太ももにはかき氷を挟んでベンチに座っている。祭り特有のB級以下料理も楽しい雰囲気がかバーしてくれている。もうすでにたこ焼き4皿、串焼き15本を平らげている。

「すみません、もしかして俊葵さんですか？」

顔を上げると子連れのお父さんが話しかけてきた。

「もしかしなくても俊葵さんですよ」

「宜しければ娘と一緒に写真撮影をして欲しいんですけど」

全くもって宜しくないけれど娘が可愛い幼女なので写真撮影を承諾した。ハメ撮り

ならいざ知らず俺はあまり写真を撮られることがあまり好きではない。修学旅行でも自分では撮るけど集合写真以外ではあまり撮られたくないタイプだ。

「どんなポーズが良いですか？」

「あいえずといっしょにとりたいたい!!」

「流石にI Sは無理かなあ。悪いけど我慢してくれるかい？」

「やあだあゝやあだあゝ!! あいえずととのゝゝゝ!!」

我が儘を言う少女は可愛いと思っていたけど三次元ではそんな事ないみたいだな。メチャクチャ腹立つ。これが自分の娘なら可愛いと思えるのかもしれないけど。

「公衆の面前でI Sを装備するのは法律違反で……でもI S学園は完全治外法権なわけだし別に問題ないか。校則違反だけど……折角の夏休みに補習受けたくないし、これ以上千冬さんの仕事を増やすのも心苦しいし……やっぱダメだ」

「俊葵さんもこう言っているし我慢しなさい」

「うゝゝゝ」

納得していないような顔だけど我慢してくれたようだ。きちんと躰ける事の出来る親御さんは好感が持てる。

「ほら、抱っこしてあげるから」

少女をお姫様抱っこしてカメラに向く。少女はダブルピースしているが俺は両手が

塞がっているので何もポーズを取れない。

「はい、チーズ」

「ちーず!!」

撮影を終えて下ろそうとしたときにバランスを崩してしまつて幼女が着物の襟をつかんでしまった。地球には重力つてのがあるようで襟を強く握りしめた幼女はそのまま地に降り立つた。そして俺は上半身裸になつてしまった。

「うちの娘がどうもすみま…せ…」

傷とタトウーだらけの俺の身体を見るや否やみんな俺から二歩後ずさつた。しかし幼女は無邪気にも俺に近寄つて来た。

「どーしておにーちゃんは体に絵がかいてあるの?」

周りの民衆が息をのむ音が聞こえる。GBMが停まつた瞬間のホラー映画のワンシーンみたいに静まり返つた。

「君も紙じゃなくて壁にお絵かきしたりするだろう?」

「うん!おこられるからちよつとしかやらないけど!」

「それと一緒にだよ。お兄ちゃんは紙じゃなくて体にお絵かきするのが好きなんだ」

「じゃあなんでココはだの色がちがうの?」

「傷痕をなぞる幼女の指はとても柔らかかった。そして気持ち良い…マジで。」

「これは怪我の痕なんだ。大事な人を守るために怪我したんだよ」
「なんで？」

「女の子のキミには分からないだろうけど男は大事な物を守る為なら死んだって構わないんだ。そもそも命をかける覚悟もない奴が女性を愛すること自体が間違っているんだよ。男って言う生き物は守るべきものを守れないで生き延びても死ぬんだ。男じゃなくなっちゃうんだよ」

「じゃあまもれなかったら女の子になるの？」

「ハハハ、玉無しって意味ではそうかもな。難しいだろ？」

「うん！むずかしい！」

「今はそれで良い。大人になったらわかるさ」

「幼女の頭を撫でてその場を離れる。俺が近寄ると周りの人だかりはモーセが割った海のように道が開けた。」

「まったく…なんでこう俺ってば目立つのかな。これだから日本人は嫌いだ…」

……

…

しばらく身を潜めて騒ぎが収まってから民衆の流れに身を任す。すると逸れたセシリアに出会った。

「さつきぶり」

「あら、俊葵さん。どちらに行っておりましたの？」

「ちよつとね。セシリアは？」

「私は日本の祭りを堪能しておりました」

セシリアの手には水風船のボンボンとリンゴ飴が握られている。

「随分と楽しんでるようで」

「それでもありませんわ。どのお店でも私の事を外人さん外人さんと呼びますし、料理も冷めています」

「確かに祭りの店で買った料理は冷えてるよな。でもこれはセシリアの口にも合うと思
うぜ」

「これは？」

「ミニカステラと豚串、こういうった場所では素材の味を楽しむ料理を食べるべきだね」
受け取ったセシリアは上品に豚串を食む。

「とてもジューシーですわ」

「気に入ったのならそれやるよ。俺はもう何本も食ったから」

「では私はここで休憩していますので皆さんと楽しんできてください」

「良いのか？」

「ふふ、私の事を気遣ってくださるのですか？もちろん良いですとも。皆様にも私と同じように楽しんでほしいです」

「それじゃあ行つてきます」

……

…

日本の心は何処へ行つたのか右を見ても左を見ても髪を染めたりピアスを着けたりしている女性が必ず一定数見つかる。厳かな女性はいなくなつてしまつた。俺の隣を歩くラウラの方がよっぽど大和撫子だ。

「日本の祭りというのはとても楽しいな」

「だろ？これぞ日本の心だ」

「まったくその通りだ。しかしデビルフィッシュを料理するなんて驚いたぞ」

「たこ焼きの事か？」

「そう、たこ焼きだ。なかなか美味しいな。やはり日本人の食に対する独創性と向上心は目を見張るものがある」

日本人の事を褒められて悪い気はしない。だつて広義的には俺の事も褒められているから。褒められることは大好きだ。ラーメンと同じくらい好き。……やっぱラーメンの方が好き。

「他に食べたいものはあるか？何でも奢るぞ」

「それじゃあ射的と言う奴をやってみたいな。ドイツで鳴らした私の腕前を見せてやる」

と意気込んでいたのは五分前の事。今はお祭りの理不尽さにあえいでいる。

「何故だ!!今確かに当たったぞ!!」

「あのなあ外人の嬢ちゃん…当たればいいつてもんじゃあないんだよ。倒さなきやあいけないんだ」

「ぐぬぬ……仕方ない。バッドカンパニー」

射的屋の台の上にスタンドを並べて銃口を向ける。

「他の人に見えていないとはいえスタンドを使うのはまずいな。あの大きなぬいぐるみが欲しいなら俺が取ってやるよ。おっちゃん、俺も一回」

「一発で取れたらおまけに好きな商品を持って行って良いぞ」

「そりやあごうつくだ。よし…」

ウエザーリポートでエアーガンの圧力を挙げて発射する。実銃並みの音が鳴ってしまっただけぬいぐるみはちゃんと倒れた。

「一発で取ったからこいつも貰うぜ」

おっちゃんからぬいぐるみと高級時計を受け取った。チラッと見えたけれど高級時

計がのっかっていた場所には接着剤のカスみたいのがついていた。

「これに懲りたらまつとうな商売をするんだな」

「ありがとう。本当に貰っても良いのか？」

「その為にとったんだ」

500円で高級時計とラウラの笑顔を見られたのなら安いもんだ。

……

…

ラウラと別れた後は簪と一緒に祭りを楽しもうと思っていたのだけど簪は楯無、本音、シャルルの『四人で行動する』と行ってしまった。まあ、夏祭りは別な場所でもあろうし構わないのだけれど正直意外だった。

ここに居るはずの束とクロエが真っ先に俺に会いに来てないから他のみんなが別行動しても衝撃は受けない。ほんのちよっぴり寂しい気はするけど…。でもまあ、みんなにもプライベートな時間は必要だろう。

だったら俺はグツとこらえて一人で祭りを楽しもうじゃあないか。

と心新たに露店の列へ足を踏み出したとたんに背中に衝撃と冷気が走る。振り返るとかき氷を持った赤毛の可愛い女の子が立っていた。

「す、すみません！」

地面見たら零れたかき氷が有るのでどうやら俺の背中にぶつかってこぼしてしまつたらしい。

「俺のほうこそごめんな。君のかき氷が美味そうだったから俺の着物が喰つちまつた弁償するよ」

「いえ、そんな……俊葵様？」

「そうだけど、君は誰？」

「私は五反田蘭つて言います！中学三年生です！」

蘭ちゃん……どつかで聞いた事のある名前だな。どこで聞いたんだっけか。人の名前を覚えるのはとても苦手だ。記憶喪失後はハーレムメンバーの名前を覚える事すらままならなかつた。

「蘭ちゃんね……どこかで会つたことあるかな？なんか聞き覚えのある名前なんだよね」

「いえ、初対面のはずですが……もしかして一夏さんから私のことを聞いていたとか」

「ああく思ひ出した。友達の妹が蘭つて名前だつたつて言つてたな」

「へへ、一夏さん学校で私の事話してくれたんだ／＼あつ！それより着物です。早くしないと染みになつちやいます」

「それじゃあちよつと待つてて」

草むらに入つて全裸になり拡張領域から取り出した新しい着物に着替える。今度は

黒い下地に金糸で鳳凰が描かれた高級感あふれる物にした。

「どうかな？」

「とても似合っています！」

「そりやどうも。それじゃあ新しいかき氷を買いに行こうか」

「良いんですか？」

「あんなところでぼうつと突つ立つてた俺も悪いって。それに俺もかき氷を食べたいから買いに行く」

蘭ちゃんの手を引いて祭りの喧騒の中にもう一度身を任せた。

……

…

「へー、蘭ちゃんってIS学園受けるんだ。俺は男だから受験とか無かったから楽に入学できたらしいけど…いや、できたんだけど難しいよ。倍率は一万倍を超えるしISの適性でまず落とされるって先生が言ってた」

「IS適性なら問題ありません。このあいだ市役所で調べたらAでした」

「凄いいじゃん」

「俊葵様の適性はいくつですか？」

「俺はSS+」

「凄い…Sランクなんてあったんですね！流石は俊葵様です！」

「はは、ありがと。ところでその俊葵様ってなに？」

「いえ…その…実は俊葵様の大ファンでして…／／／」

「ファン？」

「はい、夏に入ってから急に雑誌のインタビュアーやグラビア写真集に登場したのは不思議に思いましたけど一目惚れしちゃいました」

「一目惚れねえ…俺、蘭ちゃんが思ってるほど良い人間じゃあないよ？」

「そうなんですか？私はそう思いません。インタビュアーでは『人間は皆幸せであるべきだ。その為にお金が必要なら喜んで寄付するよ』と言って100億円も寄付する人が悪い人なわけが有りません」

「パフォーマンスだよ」

「パフォーマンスでお金を手放すなんてすごいです！」

この子すごいな。俺に対して憧れと愛情しか抱いていない。

初対面の女の子に能力を使うのは気が引けたけど記録によると千冬さん似の女の子に殺された過去があるから慎重になり過ぎて悪いことは無い。

「俺はいろんな女の子に手を出す変態で最低な男だぞ？」

「経験豊富なんですね!!私にも…その…／／／」

何でそんなに前向きな考え方ができるのだろうか。ここは普通『最低です。失望しました』っていうところだと思う。

「俺より一夏の方がカッコいいと思うんだけど。あいつ真面目だし優しいし男前じゃん」

「二期は一夏さんも好きでした。でも年上のお兄さんに対する憧れだって分かったんです。こう見えて大人なんですよ?」

「俺に対する思いも憧れかもしれないよ?」

「絶対に違います。一夏さんへの想いと俊葵様への想いは全然違います」

「そっかあ…それじゃあ仕方ないね。身体だけの関係になるかもしれないよ?」

「それでも構いません」

手の握り方を恋人繋ぎに変えて肩を寄せる。蘭ちゃんからは女の子特有の良い香りがする。まさか中学生に欲情するなんて思っていなかった。いや…むしろ中学生だから欲情したのかもしれない。おそらく14歳が15歳…青い果実って美味しいじゃん。

90話 夏祭り2

「俺は蘭ちゃんが思っているほど良い人間じゃあないよ」

「良い人はみんなそう言います」

俺と蘭ちゃんは恋人のように寄り添いながら祭りを楽しんでいる。その間、蘭ちゃんについて色々教えてもらった。

まず彼女は中学三年生でI S学園への進学を希望している事。生徒会長で全校生徒から慕われており男女問わず告白されて参っている事。そして一番重要なのは俺の事を好きだつて事だ。

俺だつてこんな美少女とキャツキャウふふなお付き合いができるなら最高だ。でも俺にはみんながいるし彼女が俺を受け入れるか分からない。彼女は一般人だ。

「蘭ちゃんを境内の裏へ連れ込んでレイプするかもよ」

だからこそ俺の事は諦めてもらいたい。

「だから俺の事は諦めてくれ。金が欲しいなら一生かかっても使いきれないほどの大金

だってやれる。IS学園に入学したいなら俺が推薦したっていい。こう見えてもIS学園の偉い人とは仲が良いんだ。他にも俺にできる事なら何でもするよ。だから諦めて欲しい」

「……理由は何ですか？自分で言うのはアレですけど不細工じゃないと思います。俊葵様が……その……熟した女性が好きならどうしようもないですけど私は熟女になっても気持ちは変わりません。それに貞操は守ります」

「そういった問題じゃあないんだよ。理由も話せない」

「それじゃあ諦める代わりに理由を教えてください」

「それは……」

蘭ちゃんはとても真つ直ぐな瞳で俺の濁った眼を見つめる。きつとこの瞳が人を引き付けるんだろうな。結局、根負けした俺は口を開いた。

「単刀直入に言う俺は人殺しだ。フランスの山奥にある原子炉の爆発、中国砂漠地帯での核実験、どれも俺が関与している。実際は反社会的な組織の基地や大型兵器を破壊した。そこで俺は大量虐殺を行った。そういう人間なんだよ俺は……」

「正義の味方なんですわね!!」

「こんな話を聞いてもまだキラキラと目を光らせている。」

「俺は正義の味方じゃあない。正義そのものだと思っている。だから俺の行いは正当化

されないといけない。自己中心的なバカだろ？」

「そんなことありません。俊葵様は強いです。強さこそこの世の真理だと私は思います。財力、知力、体力、力は様々ですが今世界を支配しているのは間違いなく力です。ですから強い俊葵様は正しいと思います」

「この子…若いのに心理を突いている。本当に中三か？」

「浮気するぞ？」

「私は俊葵様の事を想えるだけで幸せです」

「この物言い、まるでどっかの誰かさんみたいだ。」

「そうかい…それじゃあ仕方ないな。でも俊葵様つてのは無し。俺の事は俊葵さんでよろしく」

「でも…」

「口答えするなら…いや、秘密を知られたし…でもこんな少女を…とにかく俊葵さんだ。それ以外なら無視する」

「分かりました、俊葵さ、さん」

俺は蘭ちゃんの手首を掴んで境内の裏に連れ込んだ。

……

…

「クーちゃん、俊くん来てるってホントおっ？」

東はレイアウトを変えた自室のベッドに寝転がりガリガリ君を食べている。

「はい、先ほど見かけました」

一方クロエはいつもの様に背筋を伸ばして直立不動。蒸し暑い部屋の中でも汗だくになりながら

「どこでえ？」

「境内の裏でセックスをしておられました」

「えっ!?!誰と!?!」

東は決して俊葵の浮気を咎めたりはしない。ましてやほんのちよっぴりの怒りも感じない。この場合は『誰としてるの?ハーレムメンバー?私も混ざらないと!!』と思っ
ている。

「存じ上げません。メンバーではないようでした。しかし赤毛でとても綺麗な方でした。おそらく近所の中学生ではないでしょうか。私が言えたことではないですがとても幼い方でした」

「ちよと見に行くよ」

元々神社の裏手にある家から俊葵たちが激しく愛し合っている現場までそう時間が掛かるものでもない。しかしなかなか見つけられないでいた。

「もう……どこ行っちゃったの？」

「結界を張っているのではないでしょうか。同じような目的でここへ来た人間に俊葵様の事情を見せるわけにはいけませんから」

「成る程おくそれなら電話しちやおう」

東たちは俊葵からの着信をワンコールで出る。その秘訣は着信を携帯ではなくI S できているから立体画面に着信がすぐに表れるからだ。しかし俊葵はそうしていない。携帯端末で着信を受けるようにしているしバイブレーションも着信音も無しにしているのでまず電話に出ない。

「出ないなあ」

三度目の正直と電話を掛けたらようやくやく出た。

「ハア……俺、今忙しいんだけどッ！ハア……クツ……何の用？」

「私も混ぜて欲しいなあ」

「ぐ……それじゃあ後一歩前に出ろ」

言われた通りに一歩前へ出たら俊葵が蘭を犯していた。どういった原理かは分からないけれどそんな事を気にしたいのが二人だ。

「俺のオンナと電話しながらオナホ処女マンコに生中出して最高……うっ！」

二人の結合部を見るとピンク色の精液がボトボトと滴っている。まるで柔めのグミ

のような精液がとても美味しそうと束は思っているだろう。

「ねえ、俊くうん」

「分かった分かった。相手してやるから……ちよつと待って」

束を抱き寄せて耳打ちする。

『神社の周りに張っていた結界が反応した。俺に敵意ある第三者が接近中』

『殺す?』

『こんなの朝飯前だよ。蘭の相手をしてやってくれ』

「ごめん蘭ちゃん、おれちよつと出てくる。束とクロエに気持良くしてもらうんだよ」

「ふあ、ふあ、いい♥」

トロンとしたアへ顔を晒しながら絶頂の余韻を楽しんでいる。あんな顔をされたらますます犯したくなるがココはいっちょ我慢して侵入者を殺しに行かなくては。

……

…

結界の反応があつた場所まで来たけれど誰もいない。おかしい、俺の結界は絶対だ。

「初めまして…」

声が見た方を見ても誰もいない。左目のセンサーにも反応が無いのはおかしい。

「ふふ…驚かれるのも無理はありません。私は超能力者で暗殺者です。この能力で沢山

の人を殺してきました。貴方にも死んで頂きます」

な、何だって!? 超能力なんてものがこの世に存在……するだろうな。

「私はこの能力を《ヴァーチナル・インサニティ》(得体の知れない狂気)と呼んでいきます。面白いでしょう?」

左目やI Sのセンサー、周りの蟲も総動員で探しているのにつからない。

「無駄ですよ。私の能力は決して看破されません。大人しくしててくださいね。でないと苦しみますよ」

「バカが…殺すときに近づくだろ。その瞬間に殺してやるよ」

「それは無理ですね。私の他にもう一人来ています」

腹が痛くなったと思ったら右腹部が血で濡れている。急いで痛覚をシャットアウトして前方をザ・ワールドで手当たり次第に攻撃するが当たらない。

「クソ…」

「俺の能力は…」

綺麗な女の声だ。一人称が俺なのはとても好感が持てる。

「もう、またなの?」

「正々堂々と戦うのが俺の主義だ。俺の能力は武器を生み出せる。正確にはカラスを武器に変化させることが出来る。カラス以上の大きさの武器は生み出せないし生きてい

るカラスじゃあないと壊れた武器になる。それが弱点。俺は《メカナイズド・メモリーズ》（機械人形の魂）と呼んでいる」

「へえ…それじゃ俺のワールドも見えているのかな？」

「見えているわよ。面白い人…殺すのが惜しいけど」

「これも仕事だ」

今度は心臓を一突きにされた。しかし何も見えない。凶器のナイフも見えなかった。それどころか彼女たちの存在すらない。さつきから周りの空間を衝撃波で攻撃しているのに全然当たっていない。

スタンドは距離が近くないと力を発揮できない。もし隠れるスタンドならこれ程の能力だ…近くに居なきゃあ割に合わない。

しかし分からない…幻覚か。それはないだろう。俺が幻覚に掛かること自体がおかしい。それに幻覚に掛かっているなら今頃死んでいる。だから幻覚ではなく俺の感覚全てに働きかけて自分の姿を消しているのか…それなら衝撃波での全方位攻撃が外れた理由が分からない。

とにかく観察だ…観察するんだ。

周りを見回しても衝撃波で傷ついた木しかない。しかも暗くてよく見えない。こんな状況で刺客二人も相手にしないといけないとは…ん？あの木、なんで傷ついていない

んだ？両隣の木は裂けているのにあの木だけが無傷だ。

無意識のうちに攻撃するのを避けていたのか？何故だ？何で攻撃を避けた？もしも彼女の能力が自分に対する攻撃とかを弾く能力なら或いは…。

試しにもう一度攻撃してみる。しかしその木に当たる直前で川の中に有る大きな岩に裂かれる水の流れのように衝撃波は外れた。

「成る程…それがお前の能力か。見えない理由は分からないけど攻撃を弾いているな。防御は完璧だが死なない相手は殺せないだろう」

「なら死ぬまで攻撃を続けるまでよ」

「こいつは心臓を撃たれて腹を裂かれているのに死なない。いったん退こう」

「もう遅い!!ウエザーリポート!!この世で最も有害な物質って何か知ってるか？それは酸素だ。酸素の濃度次第で人間は死んでしまう」

空気中の酸素濃度を一気に下げる。すると気絶した美女が二人現れる。

「はあ…はあ…この、能力は危ないな…俺まで死にそうだ」

さて…気絶した今なら痛みは感じないだろう。

俺は真空波を発生させて二人の首をはねた。身体は圧縮して潰し、超高温でチリにする。そして歴戦の武将になら首は持ち帰った。

……

…

「ほら、お土産」

三人の前に首を投げる。疲れた俺は境内の隅に座った。

「これを…俊葵さんが？」

「俺に攻撃したからな。面白かったよ」

「へえ、俊くんにそう思われるなんて羨ましいなあ」

「ええ、まったく」

「人殺しはお嫌いかな？」

生首を見てえずいている蘭ちゃんに訊ねる。

「いえ、そうではないのですが…その…」

折角なので二人について説明をしよう。

「彼女には二人の娘と別れた夫がいた。娘の一人は大学受験間近でお金が必要だった。だが俺に敵意があったから殺したよ。こっちは彼氏と二人暮らし。結婚と出産のためにお金が必要だった。でも殺しちゃった。そんな生首は…こうだ！」

両手に持った首を思い切り互いにぶつけて潰した。血や脳みそが飛び知って地面を汚す。

「俺は敵に対して情けも容赦もない。相手が妊娠してようが自意識もはつきりしない赤

ちやんだろうが俺と俺の家族に敵意を向けるのなら関係ない。全員等しくゴミだ」

血や脳漿で汚れた手をクロエに拭かせる。

「蘭ちゃん、俺の家族へようこそ」

「はい♥」

……

…

俊葵が侵入者を排除している頃、箒は神楽舞の準備をしていた。

「ふう…一人で広い風呂に入るのも懐かしい」

檜造りの昔ながらのお風呂に入りながら自分の胸を見下ろす。昔から大きな胸には困っていた。人に注目されるし男子には椰揄われる。

「男女（おとこおんな）…か。男子に舐められないように始めたはずだったんだけどな」
今ではこの胸も筋肉質な身体も磨いた剣の腕も全て自分の一部として好きだ。きつとそれは俊葵のおかげだろう。俊葵は私を私として見てくれた。それは何よりも嬉しかった。

自分が東姉さんの妹ではなく私は箒だ。

「俊葵…大好きだ／＼／」

何の気なしに口から本心が漏れてしまった。それに顔も真っ赤になっている気がする

る。きつとお湯に浸かり過ぎたせいだ。きつとそうに違いない……うん。

お風呂で身を清めてからきちんと梱包された巫女衣装を取り出して身を包む。昔から和装の箒はこの程度の着付けは何の問題もない。

「胸はきつくない？」

「母さん、いつからそこに」

「箒ちゃんがセクシーな下着を脱いだところから」

着物の下は下着の着用をしない。たとえそれが観客の前で舞を披露する時であろうと例外ではない。

「も、問題ないです／＼／＼」

「俊葵さんの趣味かしら」

「胸はきつくないので出ててください／＼／＼」

「折角だから化粧してあげるわ♪」

母さんは昔からこうだ。人の話を聞かない。勿論それは良い意味でだ。実は聞いていないようでちゃんと聞いているし考えもてる。

「ほらお母さんに任せて」

うちの化粧品はスティックリップとか今どきの物は使わない。昔ながらの化粧品を使っている。

母さんは貝殻に入った紅を小指で刺してくれた。こうして母さんに化粧されていると昔を思い出す。

昔は巫女衣装に身を包み化粧をしている母さんに『私も踊るから化粧して』と我が儘を言ったものだ。

「あらあら、にやけちゃって。どうしたの箒ちゃん？」

「ほんのちよつぱり昔を思い出した。ありがとう、母さん」

「何も出ないわよ」

そういった母さんの顔はとても綺麗だった。

……

…

神楽舞が行われる舞台の前はとても盛り上がっている。シャルロットたちがすでに俺たちの席を取っておいてくれたのでそこへ座った。

「もう、どこ行っていたの？」

「ちよつとしたゴミ掃除。ほら、始まるから黙って」

舞台の上で箒はまるで天女の様だった。煌びやかな着物に身を包んで手には女性が扱うには大きすぎる太刀と鉄線が握られていた。

『女性も強く在れ』というのがこの篠ノ之流剣術の根幹らしい。なんでも開祖は女性の

劍豪で大太刀を扱った居合の達人だったとか。歌舞伎役者の女方が開祖で舞踊から劍術に変わったとか諸説ある。

本来の件の役割は『斬る、受ける、突く』なのだが篠ノ之流では『触れる、流す、抜く』に重きを置いている。敵を翻弄し攻撃を流し腰を軸に刀を抜き相手に触れる。斬るのではなく触れるとはどういう事かと一度聞いた事がある。すると『相手を斬るのに力は必要ない。必要なのはタイミングと脱力だ』と言っていた。

その時は分からなかったし今でも分からない。でも何となく感覚で分かる気がする。
シャン…

鉄扇についている鈴が鳴る。

まるで空気を斬っているようだ。一つ一つの動作が洗礼されている。笛や太鼓の音すら邪魔に思えるくらい綺麗だ。邪魔なものなど一つもない。一つの完成された芸術がそこにあつた。

…

…

神楽舞を終えた箒は神社の傍にある自宅で休んでいた。

「ふう…」

「お疲れ様、凄く綺麗だった」

「ほ、本当か？」

「俺は嘘つきじゃあないって。本当に綺麗だった」

俺は巫女衣装を脱いで浴衣になった箒を膝枕している。そして頭を優しく撫でていた。

「実はこの後、近所で打ち上げ花火大会があるんだが…その、良い穴場があるんだ」
「穴場？」

「うちの裏手の林を抜けるとちようど花火が目の前で見えるんだ。山の上だから邪魔する建物もないし私たち以外は知らないから誰も来ない。だから…その…二人で…いやみんなで見に行かないか？」

「みんなで？別に二人きりでもいいじゃん」

「みんなに悪いし…」

「気にするなつて。そうだろ皆？」

障子の向こうで聞き耳を立てているみんなに話しかける。返事がないつて事は肯定つて事だな。

俺は箒を起こしてその場所へ向かった。

その場所は小さな広場みたいになつていて丁度二人分のスペースしかない。こうして箒と寄り添つて座るだけで埋まってしまう。

「また人を殺したのか」

「また人を殺したよ。仕方なかった。俺を攻撃する方が悪い」

「そうだな…でもその人たちにも家族がいたと思う」

「分かってくれなんて言わないよ。でも…」

分かっていて、と箒は優しく抱きしめてくれた。

「ずっと俊葵と一緒に居たから分かる。俊葵は誰よりも優しいんだ。だからきつと落ち込んでいると思う」

ズバリ今の俺の心情を言い当てる。なんだか心の奥底を見透かされている感じ。

「私はそんな事でお前を嫌いになったりしない。安心して良いんだ」

「ありがと…」

箒の胸に顔を埋めると天然物の香水の香りがする。それに張りがあるおっぱいが心地良い。

すると大きな破裂音が聞こえた。花火大会が始まったのだろう。

「すっげ…確かにここは穴場だな」

「だろう…」

ムードは満天、二人しかおらずまるで浮世から隔絶した場所にいるみたいだ。夏の夜はほんのちよっぴり肌寒いので肌を寄せ合っている。

「箒と二人で何かをするのって初めてだな。デートとかしたことないし」

「私のもっと構って欲しいな。そりゃあ姉さんと一緒に住んでいるから私と縁遠くなるのは仕方ないがほんのちよっぴり寂しいぞ」

箒の素直な気持ちは俺の心の扉を粉碎した。

「寂しい思いをさせてごめん」

「俊葵は人の痛みを分かる人間だからな。私も愛してくれ」

どうも愛してるとか大好きとか言われると心が締め付けられる。勿論ときめきとかそんな可愛い気持ちじゃなくて罪悪感で押しつぶされそうになる。

「大丈夫、愛してるよ」

「ありがとう／＼／」

「綺麗だ…」

「ああ、この場所から見る花火は綺麗だろ？俊葵にこの風景を見せてよかった」

「違う」

「え？」

「綺麗なのは花火じゃないって」

「あ…／＼／」

何かを察した箒は俺の身体に密着した。俺も身体を預けてくる箒を優しく抱き寄せ

る。

セックスしなくなつたつて心は満足する。俺と箒は花火の音が止むまでずっとこうしていた。

9 1 話 熱波戦線

夏休みも終盤に差し掛かり宿題をやっていない者は慌てだし、真面目な者は夏休み明けのテスト勉強をしている。俺は夏休みに入つてすぐ宿題を終わらせていたそうなので、特に慌てる事も無くいつものように寮の部屋で過ごしている。

そんな俺に面倒臭い知らせが届いたのは今から4時間前の事だ。

……

……

俺はいつものようにFPSをしていた。本当は実戦ができたら良いんだけど今はこれしかないしアリーナも勝手に使う訳にはいかない。記憶はないけれど勘を取り戻すためにリハビリがてらプレイしている。

昔の俺は殺気や気配を感じ取れたそうだけど今の俺はからつきしてんでダメだ。千冬さんや楯無さんと組み手をしたけれど負け越している。だから対戦ゲームで勘を取り戻そうと思ったのだけれど全然取り戻せない。むしろゲームの腕前ばかりが上達す

る。

動体視力と聴力、手先の精密動作はピカイチなので敵がどこから来ても足音で分かるしエイムも完璧なので対一なら負け知らず。ゲームシステム上不可能な死以外はほとんど回避している。

今も赤点が出た位置を警戒しながら敵の湧きポイントを荒らしている。時に罵られたりもするが気にしてはいない。寸分違わぬエイムや完璧なりコイル制御はチート扱いられているがチートツールやバグは一切使っていないのでやましい心は全くない。

きつと俺のプレイの上手さに嫉妬しているのだろう。嫉妬している人間ほど哀れなものはない。女の子が俺に嫉妬してくれるのは可愛いと思うけど。

しばらくプレイした後、目と指の休憩のために電源を落としてベッドに横たわる。

コンコン

「あ〜い、勝手に入ってください」

「俊葵、大変だ」

現れた千冬さんは慌てた様子で状況の説明を始めた。

「今から三時間前、ゴビ砂漠中央で超大型兵器が発見された。しかも稼働して中東地方へと進行を今もなお続けている」

「まさか俺にそいつを破壊しろってんじゃあないですよね」

「そのまさかだ。行つて来てくれ」

「いやね、昔の俺ならやったかもしれないよ。でも今の俺は超能力を持った只の男です。力は有つても経験がない。これって結構ヤバイですよ」

「分かっている。だがお前も分かっているだろう。私たちはお前が記憶喪失したことは知っているが世間は知らない。だからこそ今まで通りに行動する必要がある」

千冬さんの言っている事にも一理ある。俺が記憶喪失していると分かれば、それを利用して俺を想うように動かそうとかつて無駄な考えを起こす人間もいるかもしれない。

「それ…どんな兵器です？」

「話が早くて助かる。コレが衛星写真、こつちが撃退に向かった陸軍の映像だ。これからも分かるようにこいつは今までよりも格段に小さくて…いや、お前は覚えていないか。とにかくこいつの進行は陸軍では防げなかった。大型地雷で進行を少し抑えられているが意味はあまりない」

写真委はへんちくりんな形の戦車が写っている。無限軌道にスカートを着かせて削岩機に乗つけたようなデザインだ。

「これの名前は？」

「キサラート、アラビア語で削岩機という意味だ」

「見たまんまつすね。俺はこれからこいつを破壊するんすか？」

「その通りだ。これからお前はコイツを破壊して中東を救うんだ」

面倒臭いし危なそうだけれど仕様がなかったので発進の準備を始める。といっても俺は拡張領域内の武器の確認とVOBに燃料を注入しただけだ。

パイロットスーツに着替えて音楽で気を落ち着けていると千冬さんが血相を変えて飛び込んで来た。

「大変だ俊葵！中東地域の国が結託して国連にISの出動を要請した!!」

「ああ…受理されちゃったんですね。国連のISつて第二世代ですよね」

「お前のISは現状の世代よりも格段に上の性能が有る。そんなお前が満身創痍で倒してきたのが巨大兵器だ。おそらく国連のISは手も足も出ないだろう」

「ISが通常兵器で破壊できると分かってしまったら世界のバランスが崩れる。ISの存在を疎ましく思う連中は少なくない」

「了解しました…今すぐ発進します。東には俺が暴れられるようにお膳立てをお願いしてください」

「分かった…頼む」

「へーへー」

VOBの燃料注入を切り上げて対AF用IS『ガンバスター』に乗り込む。

『縮退炉内圧力上昇、VOB制御システム良好、武器システム及び防衛システム良好、セ

ンサー良好、今すぐにも発進できます」

「それじゃあ発進だ。束のISを護るぞ…」

『はい、護りましょう』

ロケット発射のようなたたましい音と水蒸気を出しながら曇り空へと飛んで行った。

……

…

研究室内で見送ったクロ工はそわそわしていた。

「行かれましたね」

「うん…」

「私たちは行かなくて良かったのですか？」

「私たちが行くと俊くんに迷惑が掛かっちゃう」

「しかし記憶喪失している俊葵様には助けが必要です。それなのに一人で行かせてしまうなんて」

「監視衛星は不慮の事故で墜落、地上部隊はAFが壊滅させた。お膳立ては済ませてある…俊くんはこの試練を一人で超える必要があるの」

「俊葵様が強くなるためですか？」

「うん、俊くんは今以上に強くなれる。俊くんもそれを望んでいる。だったら手伝うのが道理でしょ」

「それが俊葵様を傷付ける方法でも…」

納得していないと言った顔でクロエは反論をする。しかしそれが俊葵への忠誠心を物語っていた。

「申し訳ありませんが私は東様のお考えを許容しかねます」

「でもこれは俊くんの願いだよ…クーちゃん。私が苦しんでいないとでも？」

「ッ!?申し訳ございません…」

「クーちゃんは俊くんのオペレーターをやってあげて。私は周辺地域の封鎖と援護をする秘密の部隊を出撃させる」

「援護…ですか?」

「ふふ、それは楽しみだから後でね」

「では私はこれで。東様もお気をつけて」

…

…

もうすぐでAF戦闘域というところでクロエから通信が入った。

『俊葵様、不慣れながら今回は私がオペレーターを務めさせていただきます』

「おう、よろしく頼む」

『目標地域では既に戦闘が開始されています』

「ちつ：仕事が早すぎるぜ。馬鹿どもが戦力の差が分かっているのか」

『目視出来ますか？』

「数キロ先だけどはつきりと見える。ISの攻撃は効いていないみたいだな」

『AFの攻撃手段は機銃と小型ミサイルだけの様です。装甲ばかりが厚いでくの坊です。俊葵様の相手ではないようですね』

「そうだと良いけどな…」

『何か不安要素でも？』

「胸騒ぎがする。ま、今はそんなこと考えてもしょうがないか。VOB停止、ページを開始」

固定されているナットやボルトを爆破して強制的にページを実行する。大型VOBの構造上の弱点ともいえる。一度脱いってしまったら専用の機材を使わないと装着できない。しかし今回のような単なる移動だけなら問題はない。

「敵AFに攻撃を開始する。バスターミサイル発射用意。それから味方ISへ通信を開け」

『既に開いてあります』

「こちらら俊葵、これよりAFへの長距離攻撃を開始する。無差別のミサイル攻撃なので離れていてくれ。忠告はしたからな」

パ『バスターミサイル装填完了、狙いは敵AFの無限軌道』

「発射!!」

パ『発射』

大腿部からミサイル発射管が出て来てレーザーミサイルを発射する。毎秒324発の光点がAFの足元へ降り注いだ。

炸裂した光点は圧倒的な熱量で周りを吹き飛ばした。砂は溶けて固まり空間が歪んで見える。しかしAFの装甲は塗装が焦げただけでダメージは見られない。

パ『反撃に注意してください。敵AFは既にこちらへ砲口を向けております』

「バスターマント!!」

反重力マントを纏い銃弾の雨を弾く。それこそ雨の日に刺した笠のように。戦車の徹甲弾のような弾丸は一発でもあたったらノックバックで動けなくなってしまう。

パ『敵装甲にダメージは見られません。予想よりも装甲は厚いようです』

「このISは対AF用じゃあなかったっけ?」

パ『着弾地点の1キロ圏内に味方ISが居たので3割の出力で攻撃しました。味方ISはこちらの攻撃圏外で脱出したようですので10割の出力での攻撃が可能です』

「それじゃあ一発ブチかます!!」

両手を組んで思い切り振りかぶり、AFに向けて掲げる。

「ホーミングレーザー→ザー←!!」

無数の光線が敵装甲を溶かす。先ほどとか比べ物にならない火力で分厚い装甲をドロドロに溶かしていく。こちらに対する攻撃はレーザーの壁がすべて防いでくれているので防御や回避に神経を使う必要がない。

敵AFの無限軌道は装甲が溶け崩れ履帯にレーザーが命中した。履帯はレーザーにやられて大型兵器は動きを止めた。掘削用の削岩機も停止して完全に沈黙した。

「なんだ…こんなあつさり勝てちゃうんだ」

『お疲れ様です俊葵様。国連のISがこちらへ向かっておりますが如何いたしましたしよろう』

「現場検証とかそんなんだろ。ほっとけ」

『ではそのように』

パスイの操縦に切り替えて近くの岩場に降り立つ。AFの陰に入り腰を落ち着ける。すると空の彼方から星条旗カラーのド派手なISがやって来た。

「あのクソ派手なISなに」

『アメリカのISですね。通称ファンングと呼ばれる第二世代型のISです。私からすれ

ば過去の遺物ですよ』

「そのIS、話がある」

流暢な日本語で話しかけられたので俺も流暢な日本語で返す。

「仕事なら終わりましたよ」

「撃破した時の詳しい話を…おい、まだ反応があるぞ!!」

「パスイ」

『AFから多数の反応検知』

「離れていてください。俺が相手します」

邪魔になるといけないので国連のISには退避してもらった。両手にトマホークを構えてAFの前に立ちはだかる。

するとAFは。パカツと縦に割れて断面から大量の飛行物体が飛び出してきた。

「正確な数は？」

『200体います。よくもまあ、これだけの数を用意した物です』

「まったくだ。ダブルトマホーク!!スラッシャー!!」

自立兵器の群れに向かって思い切り斧を投げる。なぜブーメランと叫ばなかったかというと戻ってこないからだ。あんな形のものには空気力学的に戻って来るはずがない。理想と現実の越えられない壁だ。

斧を感じした自立兵器は腕部と思しき部位から散弾でトマホークを撃ち落とした。常↑こんな形なのにかかなりの火力を有していると思われる。

「バスター……!!ビィィィィィィムウ!!」

必殺のビーム攻撃を放つが数体が合体して楯となりビームを弾いた。7割くらいのビームだったのに弾かれるなんて予想外だ。一体一体ではただの火だけどたくさん集まって業火になっている。

「逃げちゃあダメかな…」

『世間は許さないでしょうね』

「手が震えてきた…怖い」

目の前には壁となって押し寄せる自立兵器。散弾だけじゃあなくてレーザー兵器も搭載しているのか何かをチャージしている。

「嫌だ…」

『問題ありません。想定している攻撃ではこのガンバスターは破壊されませんし絶対防衛も破られる事はありません』

目の前が真っ白になって激しい騒音と衝撃に襲われる。上下左右の間隔が無くなり身体が揺れる。ただ自分が攻撃されたことが分かった。

俊葵は恐怖していた。圧倒的な数による威圧を、性能未知数の敵の壁に押しつぶされ

る事を。デカいだけのAFは俊葵にとっては只のうすのろの木偶の坊だ。

動きがとろくて一体だけを見ていればよいAFはそれほど脅威ではない。俊葵の身体能力なら生身でだって勝てる。しかし数が多いのは恐怖だ。

考えてみて欲しい。自分は訓練を受けた歴戦の兵士で完全武装している。そして目の前には百獣の王ライオンがいる。銃を手に行っているならそれほど脅威でもない。しかし同じ条件で目の前にいるのが数百匹の毒虫だったらどうだろうか。無数の百足や蜘蛛が蠢いている。最早恐怖としか言いようがない。

数というのは本当に恐怖なのだ。

「うわああああああ!!」

無我夢中で攻撃から逃げるためにブーストを吹かす。何かにぶつかった衝撃で自分が地面に突っ込んだのだと分かった。

「こつちに来るなよおおおお!!」

ホームイングレーザーを放つが防御状態にある自立兵器には効果が薄い。それもそのはずだ今の俊葵は錯乱しているのでISとのシンクロ率は低い。それはもちろん防御力の低下につながる。

『左上腕部に被弾。装甲耐久率67%』

「嫌だ!!こんな怖い嫌だよ!!バスターミサイル!!」

直線的にしか飛ばない光点は当たらず空を切っただけだった。

「い、嫌あ……たすけて……」

光に包まれた俊葵が最後に見たのはバラバラになった自分の身体だった。

9 2 話

IS学園地下はまさに水を注いだアリの巣のように大変な騒ぎになっていた。その中で表は冷静そうにしているクロエは静かに報告を続けた。

「俊葵様の生命反応がロストしました」

「衛星写真は!？」

「リアルタイムで検索中ですがこの宙域には東様の衛星が一台ありません」

「ちつ…それじゃあパスイ、現在の俊くん状況を」

『両手足の欠損を確認。意識もないようですが流石は俊葵様です。とつさに全感覚を遮断して休眠状態に入っています』

「それじゃあ今から助けに行きましょう」

『最新式のVOBを使っても数時間は掛かります。それよりも』

「いいから行くんだよ!! 俊くんは今!! 死にそうなんだ!!」

東がガレージの扉を開けるとあり得ない光景が広がっていた。

待機状態のはずの宇宙と嵐が起動していた。宇宙はセカンドシフト状態で嵐とワーブしようとしていた。

「パスイ…操縦してるの？」

『いえ、私は彼女たちから追い出されてしまいました』

「彼女？」

『はい、自分たちこそ俊葵様を助ける番だと仰っております』

束はまさかと思いつながらにもこうなる事を予期していた。ISは只の機械ではない。操縦者とシンクロする事で癖を覚えて一体化する。だからこそ授業で使うISは必ず毎回初期化される。

「まさかこんな形でISの進化を目にするなんて思ってもいなかったなあ」

「束、今のは一体なんだ!!」

振り返ると千冬が驚いていた。それも無理はない。この束さんも驚いているんだからちーちゃんも驚くに決まってる。

「ISが進化した瞬間だよちーちゃん」

「進化…だと？」

「俊くんと出会ってからISのコアが何なのか分かって来た。最初は単なるエネルギー増幅装置だと思っていたけどそんな簡単な装置なんかじゃあない。ISのコアは人間

の意思をエネルギーに変換する究極の装置だよ。人間の意思がI Sのコアに流れ込んで命が生まれた」

「I Sは…」

「電脳生命体とでも言おうかな。肉体は機械、脳みそは回路、でも魂は確かにある。間違いない。I Sは魂を持っている」

「根拠はあるのか？」

「パイロットのいないI Sが今まさに搭乗者の危機に反応して飛び立ったよ。それ以上に理由が必要？」

誰よりも俊葵の事を考えている束たちだからこそ俊葵の為に飛び立った宇宙と嵐の事がよく分かる。二人は二機に…いや、二人に任せることができない事を悔しむと同時に新たな家族に喜びを感じていた。

…

…

彼女たちは自分が誰なのかを完璧に理解していた。この身体の使い方も知っている。守るべき人の事も知っている。それだけで十分だった。

時空に亀裂が走りその隙間から宇宙と嵐が現れる。自立兵器たちは敵の急襲にも混乱することなく機械的な冷静さで隊列を組んで応戦しようとした。

「そ、宇宙…嵐…：…いつたい、誰が…」

痛みはない。ただ身体に力が入らない。左目も見えていないし左手以外動かない。ことなくそツタレな状況の俺を助けに来てくれるなんて。束か…クロエか…誰でも良い。手を貸してくれ。

『生命反応は感知されませんでした。おそらく無人でしょう』

「じゃあなんで…動いて…る」

『私は宇宙』

『あたしは嵐』

『『貴方の I S です』』

「それは…知ってる」

『それなら十二分です』

『俊葵に仇なすこいつらを破壊する』

とても懐かしい声がある。いつも聞いていたような不思議な声だ。そうか…宇宙と嵐か…。

俺の意識はここで深い闇に落ちて行った。

『俊葵さんを傷付けたくそツタレ共!!』

『あたしらがぶつ壊す!!』

宇宙は翼を広げてチャフをばら撒く。まずは自立兵器の連携を絶った。そして防御状態にある装甲の上からカリバーンで一刀両断していく。

『私のご主人様を傷付けた罪は私を持って償え!!』

嵐はトランザムで敵が防御する前に装甲の隙間を極細のレーザーで的確に狙い撃つ。

『そんな中途半端な兵器がたてつくな!!』

『切り拓く!!』

『乱れ撃つ!!』

ミサイルと斬撃の乱舞が辺り一面を消し飛ばした。ただシールドビットに守られた俊葵を除いて。

……

…

目が覚めたらいつもの俺の部屋の天井が見えた。宇宙と嵐が助けに来てくれたところまで覚えている。しかし自分の部屋に戻った記憶は全くない。

まいった…左手しか残っていない。また生やせるだろうし大丈夫だろうけどしばらく不自由だなあ。

周りを見回すと知らない女性が二人、ベッドの傍の椅子に座って寝ている。片方は全身黒尽くめの喪服を着た未亡人みたいな美人、もう片方は身体中に傷がある緑色の髪の毛

爆乳美女。

緑髪に對して黒髪は胸がそこまで大きくなく恐らくCぐらいだろう。でも胴回りは結構ありそうだ。それと二人ともデカイ。目測で二人の身長が180を軽く超えていることが分かる。

誰でも構わないけど自分の部屋に知らない人がいるというのは落ち着かない。ベッドの脇にある棚から葉巻を取り出して吸う。手足が無くても超能力で物を持ち運びできるからこういつた時には助かる。

「ふう……」

とりあえず足から生やす。いきなり生やすこともできるけど面白そうだからタコのような触手を生やし、それを束ねた足にしてみた。

「俺の身体も面白いな」

しばらく治療に勤しんでいると二人が目を覚ました。敵か味方か分からないので枕の下から銃を取り出して二人に向ける。

「俺の部屋に無条件で入れるのは俺のオンナだけだぞ」

「おはようございます。私分かりませんか？」

「いつも一緒に居たから覚えてるだろ？」

「名前を覚えるのは苦手だけど顔を覚えるのは得意なんだ。悪いけど知らないな」

「ではこれでどうですか？」

二人は腹部に彫つてある刺青を見せる。その刺青に俺は見覚えがあった。というか俺の身体にも同じものが彫つてある。タトウーとして身体に彫つた待機状態の宇宙と嵐だ。

「宇宙？」

「ご名答です」

「あたしは嵐だ。改めてよろしく」

もう何が起きてても驚かないぞ。俺の目の前にいる美女がああゴツイISだと？

「ちよつと何を言ってるか分からない」

「説明なしにいきなり私たちはISですと言っても信じられませんか」

すると嵐（仮）は両手をIS化して見せた。いつも見ていた嵐の腕だ。

「こうした方が信じるだろ？そ・れ・と・も♥」

胸をはだけさせて俺に抱き着く。

「マスターはこっちの方が好きだろ」

真耶とタイムマン張れるくらいクソでつかい。そして柔らかい。なるほどな…これなら一発で信じられる。

俺は宇宙の腕を掴んでダブルパフパフを楽しむ。しかし右腕が無いので抱きしめら

れないのがネックだ。

「信じて頂けましたか？」

「信じるよ。匂いもぬくもりも完全に人間だけどISなんだな。う〜〜〜たまんねえ〜」

「ようやくあたしらもマスターのオンナになれたぜ。ずっとみんなが羨ましかったんだ」

「愛されることが羨ましかったわけじゃありませんよ。俊葵さんを愛せることが羨ましかったのです」

俺の事を気にしているのか俺をネガティブにしない最適な答えを出した。

「じゃあたっぷり愛させてあげるよ。ほらほらあ…もつと愛して良いんだぞ」
「ちよつと待ったあ〜〜〜〜！！」

扉が開かれ束が飛び込んでくる。読んで字の如く正に俺の元へ飛び込んで来た。二人を無理やり引っぺがして俺の胸に顔を埋める。

「心配したんだからあ…」

「そりゃああんがと」

抱きしめたいので不完全だけど右腕を形成して抱きしめる。

「もう身体は治ったの？」

「治してる途中。折角だし前みたいに作ってよ。」

「任せて!! 早速作って来るう〜〜!!」

入って来たと思っただら出て行っただ。忙しい奴だと思っただ一方で愛おしいとも思っただいる。

「俺が気絶している間に何があっただのか：教えてもらおうか」

……

：

束から受け取っただ新しい義腕と義足は完璧に俺の身体に癒着した。覚えてはいいけど依然俺が義足を作っただもらった時から研究していらした。有機的な義肢なので血液も通っただいるし体温もある。

それに俺の意思に従っただ武器の展開もできる優れ物だ。

試しに右手の指先の砲門を展開してみた。ジオングやサイコガンダムのように指先からビームを発射できる。

「面白い♪束、ちよつと相手して」

「いいよう〜〜♥」

両足の太ももからレーザーの射出口を展開して発射する。ガンバスターのバスターミサイルの技術を流用したそうなのだがまさかここまで小型化しているなんて信じら

れない。

束もアリスを展開してレーザーを吸収して防いだ。

「た〜のし〜♪」

束が楽しんでいようやうで何よりだ。俺も新しい身体が凄くて楽しい。

右手の掌にエネルギーを溜めて指先から発射する。そして鞭のようにならせたエネルギーで思い切り束を攻撃する。

「えへへ〜吸収したエネルギーは何処に行くのかなあ?」

俺の周りには既に束のシールドビットが近寄っていた。

これはまずいと義肢のバリア装置を起動して衝撃波を防ぐ。しかし超高温の熱波に俺の肌が日焼けする。

「こんな熱波でも日焼け程度で済むなんて俊くんすごおい♥」

「力があふれてくる。ああ……堪らない♥」

今の俺なら何でもできる気がする。

「宇宙も嵐も俺の相手をしろ!!」

近くで見ていた二人に襲い掛かる。もちろんいやらしい意味じゃあなくて危険な意味で。

ビームウィップで攻撃した瞬間に二人はISに完全にはならずバトルスーツのよう

なものを纏った。

「マスターはやんちゃだな」

「それも素敵です」

全身凶器ならぬ全身兵器の俺はますます興奮して三人をボコボコ寸前まで追い詰めた。進化したIS二人と細胞レベルでオーバースペックな束を相手にできたんだから俺は十二分に危険な存在なのかもしれない。

あと戦闘が終わってから三人は俺が昔の俺に近づいたと言ってくれた。確かに以前の俺は戦闘狂だったかもしれないけど今の俺は違うと思ってただけだなあ：なんだか複雑な気持ちだ。

以前の俺に近づくことによって皆に安心感を与えると同時にこんな狂った俺で良いのかっていう葛藤がある。でもそんな事は杞憂だろうな。

だってこんなに愛されているのだから。

試合後には三人とお風呂に入って汗を流してベッドの上で汗を流した。そしてもう一度お風呂で汗を流しながら汗を流した。

汗を流すゲシュタルト崩壊を起こしそうな一日だったな。明日は心配をかけた皆にあいさつでもして安心させないと。

93話

文化祭と聞いて真っ先に思い浮かべたのはたこ焼きや焼きそばなどの露店で食べられるものだった。次点でお化け屋敷や喫茶店だったので、俺の中で文化祭というのは夏祭りみたいなものなのだろう。

クラスのみんなは喧々囂々話し合いの末、メイド喫茶をすることにしたらしい。このらしいというのは話し合いの場に俺がいなかったからだ。

それでは俺がどこにいたのか：なぜソコに居たのかから説明をしなきゃあいけないだろうな。

数日前

「俊くんや、俊くんや」

「なんだい東ばあさんや」

「これを見てほしいのじゃ」

「ほいほい」

どうでもいい小芝居を挟みつつ束からタブレットを受け取る。そのには俺が兵器開発をしている島と周辺海域の航空写真が写っている。

「これがどうかしたの?」

「実はね…製造した兵器のテストをしていたら監視衛星に見つかっちゃったんだよね。それでテロリストの巣窟だろうから爆撃するって国連が決定したみたいで艦隊が今まさに向かっているの」

それは困るな。せっかく作った兵器たちが壊されるのはいただけない。でも国連の艦隊を相手にするのは面倒くさい。

抵抗したいけど抵抗した後が面倒くさい。

「それなら製造した兵器たちに島を守ってもらおうか。島ごと吹き飛ばされるよりは幾分かましでしょ」

「そうだけど良いの?せっかく作った兵器なのに」

「兵器はいくらでも作れるけど作る場所はそう簡単に確保できない。それにこれもデータを取得するためのテストかなんかだと思えば少しは気が楽だよ」

「それじゃあ私もいっしょに行こうか?」

「助かるよ。俺一人だと何したらいいのか分からないし。あ、そうだ。クロエとシャルルも一緒に連れて行こう」

「危険じゃあない?」

「クロエにも実戦の空気を知っておいてほしい。多分…クロエが一番早く俺のために戦場に出て戦ってくれるから」

携帯端末を取り出してクロエとシャルルを呼び出す。二人ともすぐに既読をつけてOKのスタンプを押してくれた。既読スルーもしないし未読もほとんどしないのは二人に限ったことじゃあない。みんな俺にストレスを溜めさせまいという心遣いがあるがたい。

数分待っていると二人はISスーツを着てやってきた。準備がよろしいことで。

「簡潔に説明すると、俺たちの愛の巣を破壊しようとする国連の艦隊をぶつ殺す」

「それは良いけど僕たちだけでできるかな」

心配するところはそこなのか…

「万が一の場合には黒鍵のコアを暴走させて艦隊を消失させてみます」

物騒だな…

「計画うんぬんは島で説明する。二つ返事で了承してくれてありがとう」

「俊葵様のご命令とあればなんなりと」

「僕も俊葵の敵は誰だろうと容赦しないよ」

「本当にありがとう。でも黒鍵とRRCⅡは素性がばれるから使えない。だから今回は

こいつを使う」

ハンガーの覆いを取っ払って新たなISを紹介する。

「まずはこいつから紹介しよう。こいつは東が乗る機体だ。名前はハニートーチカ、定点射撃を得意とする拠点防衛型ISで東専用電子戦用の装備が追加されている」

通常カラーと異なり真っピンクで細部は金色、全身装甲で頭部から排熱用のファイバーが伸びる。一見するとドレスを着た女性に見えないこともない。

「こいつの名前はハールート・マールート、シャルに乗ってもらう。全距離対応型のISで機転の利くシャルに丁度良い機体だろう」

白と黒がモザイクのように塗装されていてバックパックの四枚の翼の中には武器が格納されており、腰のスカートも含め全身に武器が仕込んである。拡張領域には遠距離武装や広範囲を焼き払うためのミサイルやクラスター爆弾が詰め込まれている。必要性の低い武器を拡張領域にしまい普段使いの武器は常に携帯しているという寸法だ。

「クロエはISじゃないけどこいつを使ってもらおう」

ハンガーの隣の培養液に漬かっている女性を中から出す。

「こいつは俺の細胞から作った、言わば俺のクローンだ。式神や分身と違って肉体が消えることはないから魂を入れ替えて一時的な兵器として利用できる。俺の持つ力のすべてを注ぎ込んで作った素晴らしい人間だ。クロエなら使いこなせるはずだが……」

「そんな、もつたいないお言葉……。しかし私のような汚らわしく卑しい奴隷が俊葵様の御体を使うなどもつての外でございませう」

やっぱりそう来たか。予想はできていた。

「俺はクロエに動かしてほしいんだ。俺のために」

「しかし……」

「考えてみる。お前の最も愛する男と一体になれるんだぞ？まあ、この場合は女だけど。肉体だけではなく魂まで一緒になれるんだ。もちろん後々みんなもしてもらおうさ。でも最初はクロエがいい」

「……でしたら謹んでその大役、お受けいたします」

クロエの面倒くささにも慣れてきた。クロエは俺の命令なら何でも聞く。なら命令すればいいのだ。俺を幸せにしろ、俺のために生きろ、俺のために死ぬ、と。

「俺は変装して超能力やスタンドで戦う。久しぶりに生身で暴れたい」

腕が鳴る。世界の兵士たちがどれほどの物かこの身をもって味わってみるとしよう。世界征服の一步としては小さい一步かもしれないがこういったことが重要なんだ。一步一步確実に歩いて行こうじゃないか。たとえば歩いた後が焦土になろうとも。

……

……

久しぶりに来た島は木々が生い茂っていた。基地の人員（式神）は全員、造船に力を注いでいたので島の管理が隅々まで行き届いていなかったのだろう。

造船ドックにはすでに完成している戦艦が四隻、決戦を今や遅しと待ち望んでいる。

「俺の理想を形にしたような戦艦だ。全高75m、全長300m、現存する戦艦の中でも特大サイズ。まさに大艦巨砲主義」

「これだけの戦艦を作るのは苦労したよ」

「束には苦労を掛けるな」

「俊君のためならなんだってするもん。こんなの苦労じゃあないよ」

「ありがとう…それじゃあ俺は準備してくる。あとは任せたよ」

「任せられたよ」

束を後に俺の持ち場へと移動した。俺の持ち場は島の南側で砂浜に面している。森を抜けると広い砂浜が現れた。

こうしてみると白い砂浜に青い海、どこまでも広がる空を独り占めできるのはとても贅沢なことだ。しかし海の上に無粋な鉄塊が何隻か見える。まだ遠くのほうにいますうだけですが島は射程に入っているだろう。

「俺も準備しないとな」

ケースの中から仮面を取り出してつける。他にも重火器で武装を施した。あれだけ

の敵を相手にするには心もとない武器だが俺にはこの体がある。武器はみんなに回したほうがいいだろうと思つて俺の分は少なくしたのだがこれは参つたな……。あんな上空に居座られたんじゃあさすがの俺も手が出しにくい。

上空を飛ぶ爆撃機がヤギの糞みたいに黒くて丸っこいものをココに落とすのが見えた。ようやく開戦の狼煙が上がつたつてわけだ。

爆撃は俺の想像を超えて激しいものだった。森は焼けて地下への入り口が露出して
いる。

「まいったねこりゃ」

海のほうに目をやると上陸艇が何隻もこちらへ向かつてきている。あの程度の敵くらいなら何の問題もない。俺のほうがこれっぽっちだからみんなのほうに敵が行つてしまったのかな。

爆撃した後だからピクニック気分であつて来てるんだろうな。でもピクニックじゃなくて地獄百景獄門ツアーの開始だよ。

……

……

「パスイ、敵の規模は？」

「二個大隊、戦車3両、別動隊は確認できません」

「なら特に問題は無い……」

対戦車ライフルを取り出して中隊の先頭に狙いを定める。引き金を引くと同時に先頭を歩いてきた人間がはじけ飛んだ。

蜘蛛の子を散らすように木々の陰に隠れてこちらの居場所をうかがっている。戦車の砲塔がこちらを向いたところから察するに俺の居場所を見つけたらしい。

「良いぞ……もつと俺を楽しませてくれ」

砲門がキラリと光り徹甲弾がこちらに放たれる。俺は徹甲弾の中心よりも少し下を撃ち弾道を上にずらした。二発目も三発目も同様にはじめて俺に当たらないようにした。

おお：今度は機関銃の掃射か。

徹甲弾が俺の身体を削り取っていく。マゾじゃないけどこの感覚は何とも言えない。

「そろそろ近接戦闘に移行しよう」

『それは 剣というにはあまりにも大きすぎた

大きく 分厚く 重く そして大雑把過ぎた

それは 正に鉄塊だった』

パスイのナレーションとともに巨大な鉄塊が姿を現した。俺自身がブツ叩いて作った最強最大の大剣。ベルセルクのドラゴンころしと違って少し細身で振りやすくなっ

ている。ドラゴンころしと段平の間を取ったような大剣は重いながらも連撃を繰り出すことができる。

激しい銃撃を受けながらも坂道を駆け下りて突撃する。身体中から血が噴き出し、肉が弾け、骨が折れても俺は止まらない。

彼らはきつと後悔するだろう。反撃する前に逃げておけば良かったと、俺に歯向かうんじゃないかなかったと。

……

…

「さて……任されたもののこの身体は……」

自分のものではない匂いがほんのちよつぱり気になる。しかし悪いおいではない……むしろ俊葵様の匂いがすると思うと興奮する。

「自分の物とは勝手が違いますね」

長い手足に大きな胸、くびれた腰、筋肉質ながらもしなやかな肢体はとても魅力的に見える。女性の私が美しいと思えるからだなのですから俊葵様の審美眼は流石です。

「俊葵様のためにも彼らには死んでいただきましょう」

眼下で散開している兵隊を見下ろしながら崖の上から見下ろす。見たところ重装備ではないので私でもどうにかなりそうだ。

崖から飛び降りて兵士たちの目の前に着地する。彼らの銃口がこちらに向く前に彼らの首を跳ねる。

「ザ・ワールド…元来、世界は俊葵様の物ですがこの瞬間だけは私が支配することをどうかお許しください」

時を止めるといふのはなんだかおもしろいです。こちらから一方的に攻撃できるといふのはとても楽しい。それに俊葵様と同じことができる…それだけでアへ顔で嬉ションしてしまいそう。大好きな歌手や人のまねをすることと同じ感覚なのだろう。

「おや？まだ来るようですね。おもしろい。この身体…弱気くらい出させてくださいよ」

両手に衝撃波を溜めて第二波に突貫した。

……

…

爆音が鳴り響く空の上で多翼の天使は破壊の限りを尽くしていた。

『第四翼展開、全多目的装甲翼展開完了。いつでもいけます』

「ありがとう、パスイ。おかげで僕はこっちに集中できた」

両手のショットガンを手放して全身の装甲を展開してエンジェルシステムを起動する。

『それでは天使の羽を羽ばたかせましょう』

展開した装甲の隙間や四対の翼から数多の光弾が放たれた。

エンジンシステム、それは俊葵と束が開発した凶悪この上ないシステムの一つである！排熱をエネルギーに変換し圧倒的破壊力を実現した、まさに地上の天使なのだ！

「悪いけど俊葵のためなんだ」

光弾は地上部隊に降り注ぎ真っ白な砂浜を真っ赤な地獄の巨釜に変貌させた。

『お見事、全弾命中です。初めてにしてはとてもお上手です』

「褒めても何も出ないからね」

『いえ、ISが三機ほどこちらに出てきたようです』

望遠カメラを作動させて沖のほうを見ると確かにISが飛んできている。あれは国連加盟国に支給されているやつだね。専用気持ちじゃあなくてよかったけど強そうだな。

『しかしあのような量産機に負ける最新機ではありません。同じ量産期でも私にも意地があります。必ず勝てるようにお手伝いいたします』

「そう来なくっちゃ」

僕はやるよ、俊葵。覚悟はできた、準備もできた。僕は剣であり、楯でもある。俊葵の邪魔をする敵を排除する剣で俊葵を守る楯なんだ。

「ハールルート・マールルート！行くよ！」

……

…

「あははははは!! 楽し〜〜♪」

明るい笑い声と反比例するかのように行われる残虐行為。兵士たちの身体は裂け、砕け、弾け、燃え、溶けた。老いも若いも、男も女も関係なく人が肉塊に変わっていく。「さすがは俊君の設計したIS。う〜〜ん、戦いやすい」

腰から地面に四本のスパイクを打ち込んで体を固定させてからバツクパツクの砲台に搭載された四門のガトリング砲が咆哮をあげる。さらに両手に持ったグレネードからは焼夷榴弾が発射され、燃えた人間の悲鳴が心地良い。

「みんな死んじゃえよ♪」

バツクパツクから本体を取り外して砲撃の渦中に飛び込む。装甲が部分的に展開して近接戦闘用に変化する。俊君の細胞が埋め込まれた装甲は熱と電気を帯びて直接触れていない人間までぐちゃぐちゃにした。

「う……………う…助けて…」

「助けてほしい？」

「お願いします…」

「否、俊君の夢の前に立ちふさがるすべての物が何十、何百、何千、何万、何億死のうと構わない。その中に私が含まれようともそれら一切合切森羅万象は滅ぼされなきやあいけない。かわいそうなんて思わないよ。君が楯突いたのが悪い、抵抗したのが悪い、反抗したのが悪い。俊君のために殺せるんだ。ああ…至福♡」

『束様、すでに死んでいます。話しかける意味はないかと』

「人がエクスタシーに浸ってるんだ。邪魔するな」

『失礼しました。しかし報告まで…』

パスイをしっかりとつけた束は右耳だけパスイの言葉に耳を傾けた。

『俊葵様からの着信です』

着信と言いつつ終わる前に急いで俊葵に折り返しの通信を入れる。

「よう、出なかった理由を一言で教えろ」

「い、忙しかった…から。ごめんなさい…別に俊君の電話を無視したとかじゃなくて」

「一言つつつたる…まあ良い。パスイをいじめてやるな。パスイも俺の大事な家族の一人なんだから…な？」

「う、うん…ごめんね」

「反省しているみたいだしパスイも許してやってな」

『私は元より皆様の所有物ですのでお気になさらず。束様のエクスタシーを邪魔したわ

たくしに責任があります』

「良い子だ…東、そっちの戦況は？」

「たつた今、最後の一人を殺した。俊君は？」

「望遠カメラで艦隊の中心にいる空母を見てみる」

俊君に言われた通り望遠モードで艦隊の様子を見る。すると空母の上で暴れている愛おしい男の姿があった。

……

…

人を殺すというのはあまり気分の良いものじゃあない。自分の指令を全うしているだけの人種は特にな。きつと彼らは善人だろう。快樂主義者の俺と違ってとても勤勉で品行方正なんだ。

だけど、だからこそ俺に向かって来る。俺はそれらを殺さなきゃいけない。殺したいから殺すのではない。仕方がないから、仕様がなから、狂いたくないから殺したいのだ。

人間は死ぬ間際に何を見るのか。俺は常に彼らの心を見る。「無」だ。結局人は死ぬ寸前になつても何も考えられない愚者なのだ。否、恐怖を忘れ、絶頂も歓喜も憤怒もすべて忘れ無になつた彼らはまるで仏だ。

「俺は解放者だ…お前たちを生の頸木から解き放つてやろう」

両手に構えたりボルバーマグナムからは人間に当てられるべきでないほどの威力を誇る鉄鋼榴弾が放たれる。一発撃つごとに二、三人は確実に肉片になっている。そして俺の両手もギシギシと嫌な音を立てているのが分かる。

「少し撃ちすぎたかな…おや？自分たちの船を捨てて何処へ行く？駄目じゃないか…これから君たちはここでみんな一人残らず死ぬんだから」

俺は体を船と融合させて周りの艦隊ごと一気に飲み込んだ。無機物も有機物も一切合切関係なくすべてを取り込んだ。

「ビッグ・ザ・ゴールド!!」

決着というのはあまりにも呆気のないものだ。俺がたった一つの能力を行使するだけでこのざまだ。この能力は危険すぎる…やはり……。

94話

国連軍は想像以上に想像以下で俺は酷く落胆した。もしかしたら俺の野望を打ち砕いてくれるのでは、万が一にでも俺を殺してくれるのでは、と期待していたのに。

「酷くつまらなかった…もつと抵抗してくれると思っていたのに」

「ビッグゴールドなんて使うからだよ。現代戦においてアレは相当な打撃だつて」

優しく耳元で囁かれたらゾクゾクする。それに服を着ていない女が隣に寝ていると尚感じてしまう。男ならだれでもそうだ。

「僕俊葵の本気を初めて見たかも」

「シャルル様、俊葵様は一切の本気を出していません。ビッグゴールドとしては分かりませんが数多の能力を持っているので全体から見れば欠片程度の力でしよう」

「俊葵すごい♡興奮してきちゃった♡」

「ちよつと待て」

携帯の着信が入ったので確認するとラウラからだった。でない理由もないので通話

する。

「どうした？」

『文化祭の出し物が決まったから連絡を入れようと思ってな。メイド喫茶に決まったぞ』

喫茶店や食べ物屋にはなると思っていたけどまさかメイド喫茶になるとは思っていなかった。

「セシリアの案か？」

『いや、私のアイディアだ』

「へえ、珍しいじゃん。ラウラがメイド喫茶ってなんだかイメージと違うな」

『みんなもそう言っていたぞ。メイド喫茶なら割高な商品でも売れるし採算がとれる。必要なものはメイド服と食品だけで用意に時間がかからない。短い時間でクオリティの高いものを用意するにはもってこいだと思っただが』

「そこまで考えているなんてさすがだな」

『そこで相談なのだが暇な時でいいから街の喫茶店に商品の取材に行かないか？』

「良いけど、文化祭で出す物の参考にするの？」

『まあ、そう言ったところだ。よろしく頼む』

「ああ、それじゃあな」

電話を切つて端末をベッドの端に放る。

「ようやく僕たちの番だね♡」

「ご褒美が欲しいのか？」

「ううん、私はただ俊君に気持ち良くなつて欲しいだけ」

クロエも束もうんうんと頷いている。きつと裸で寝ているのも良い香りの香水をつけているのも全部俺のためなんだろう。むしろ俺意外のために行動なんてしないかもしれない。

「ああ〜最高♡お前らを彼女にしてよかった」

「褒めても何も出ないんだからあ／＼／」

俺の腕に当たる束の胸の感触が強くなる。それに対抗してかシャルも強く俺の腕に抱きついた。

「クロエ、お前もこつちに来い。いつまでそこに突つ立つてる気だ？」

「この身体は俊葵様の細胞から生まれたもの。ですから俊葵様に触れては気分を害する恐れが…」

「その身体は俺好みに作つてあるから気にするな。命令だ、今すぐ俺を抱きしめろ」

畏まりました、と小さくつぶやいてから恐る恐る仰向けに寝る俺に覆いかぶさつて愛撫を始めた。

「やっぱアレだな。イイ女を好き放題できるって最高の贅沢だよな。方や世界一の天才でISの生みの親、方や欧州でもトップクラスのIS製造会社のお嬢様、そして遺伝子操作で生まれた最強にかわいい俺の奴隷」

「私などは…」

「クロエの可愛さが俺の股間をいきり起たせる。今のクロエもかわいいけど俺は銀髪のほうがいいな」

「ええ〜私は私はあ〜」

「もちろん束もシャルも可愛いよ。でも今日は一番頑張ってくれたクロエにご褒美を上げないと」

「でしたらいつものようにご奉仕させていただけるだけで私には十二分すぎるご褒美でございます」

「じゃあ俺のチンコをいやらしく、できる限り音を立てながらしゃぶれ」

そして俺はわざと股間を膨らませて腕と同じくらいの大きさにしてクロエの口に入らないようにした。

「ん、ちゅ、ちゅ、れろ…ちゅ…」

精一杯口を広げてもギリギリで龟头が入らないような大きさにしているので精一杯舌を伸ばしてカリ首や裏筋を舐め回す。そんな姿に俺の股間は更にいきり立つ。

目の端に涙を浮かべながらフェラチオをしているクロエを見ると嗜虐心が疼く。

「そんなものか？満足させるつもりがあるのか？」

「無礼をお許しください。俊葵様の逸物が太く逞しいので私の口にはとても入らないのです」

「俺が作った身体に文句か？」

「……どうか、これから私がする行為をお許しください」

そういうとクロエはおもむろに顎を外して喉の奥まで思い切りチンポを飲み込んだ。20センチオーバーのチンポがクロエの喉を抉っている様子が見える。

「じゅりゅ……ちゆる、ちゅ、ぢゅ……♡」

強化された身体を使っているので呼吸を必要としないのでいつもより長いストロークでディープスロートを楽しませてくれる。

「お前らに同じことできるか？」

左右で愛撫を続ける二人に問いかける。

「お願いされたらできる……かも。でも自分からはできないかな」

「東さんはもちろんできるよ〜」

「本当か？」

凶星を衝かれたのか東は目をそらす。俺がのぞき込むように顔を見るとさらに背け

る。

「やっぱできないかも〜」

「それで良い。だから俺はクロエが二番目に好きだ」

「一番は？」

「前世の俺の家族」

「なにそれ嫉妬〜」

「俺と家族になれば一番愛してもらえるぞ。もちろん、その時はみんな一緒にだけど。

なあ…クロエ」

クロエの頭をつかんで根元まで突っ込んで、さらにチンコを伸ばして胃袋に直接精液をぶちまけた。射精が終わってもクロエは愛撫を辞めず俺の腰に抱き着いて飲み込もうとする。俺はその要求に答え亀頭だけ口に含ませる形にして小水を垂れ流した。

「ああ〜最高。俺の意地悪に付き合わせてすまないな」

チンポを抜き取り顎を戻したクロエは精液と小便を口の中で咀嚼すると喉を鳴らしながら飲み干して恍惚の表情を浮かべた。

「くく…くく…ん…つく、ぷはあ。とても美味しゅうございました。俊葵様にご奉仕ができてクロエは果報者です。しかし私ばかりではお二人が…」

分身を二人出して束とシャルを別の部屋に連れて行かせた。二人とも俺を独り占め

できて嬉しい反面、4Pできない寂しさ半面といった様子で部屋を出て行った。

「これでよろしいでしょうか？お姫様♡」

「いけません俊葵様、私のようなものをお姫様など…」

「クロエは俺だけの姫だよ。誰にも渡したくない」

今度は俺が上になりクロエを押し倒して手を押しさえつける。

「はい、私は俊葵様以外のモノには成り得ません。常に俊葵様のモノでございます」

「二人も同じこと言ってるよ。だから俺はお前らが好きだ。我慢できないし突っ込むぞ」

『どうぞ…』とクロエは股を開いて自分でおマンコを広げる。俺もクロエに体躯に合わせたチンポにして濡れ濡れでぐちよぐちよになっていく火陰に亀頭を添わせた。

「入れてほしかったらエロくスケベなおねだりをしろ」

「畏まりました。…では」

膝立ちになり、おマンコを広げてくねくねと腰を振る。

「ちよつと待て…」

クロエを制止させて感覚を研ぎ澄ませる。研究施設内に侵入者がいる。3…いや5人は居るな。アリンコならともかく人間が5人も侵入するなんておかしい。

「お前も感じたか？」

「はい、束様やシャルロット様はまだ気づかれていない様子ですので私が対処してまいります」

「敵の勢力も装備も分からないのに一人で行くな。俺も付き添うとしよう」

ISスーツに着替えて侵入者の方へ足を進める。分厚い扉を俺たちに気づかれずにどうやって開けたのか気になる。

「マジでパスイも気付かなかったみたいだしどうやって…」

次の瞬間、俺の身体は壁にめり込んで右半身が消えた。敵の存在を感知する前に攻撃されてしまった。

「俊葵様?!」

「問題ない。半身が消えた程度だ」

半身の代わりに血液を凝固させて身体を構築した。

「お前は下がっている」

「いえ、ここは私が対処いたします」

「やれるのか?」

「やります」

「そうか、それならここは任せた」

クロエ一人を残して俺は束とシャルルの下へ急ぐ。俺と同じ体のクロエなら一人で

も大丈夫だが束とシャルルは違う。それなら俺が守ってやらなくちゃいけない。

……

…

「さて…任せてと言ったからにはあなたは生きて帰れませんよ。聞こえていたら出てきなさい」

感知しても敵の反応はない。この廊下にはいないのか。それとも何らかの方法で姿を隠しているのか。分からないが対処の仕方はいくらでもある。

「マジシャンズ・レッド!!」

まずは火炎で廊下を焼き尽くした。酸素がなければ生物は生きられない。どこかに隠れていたとしても酸素を失くしてしまえば良い。

「怖いわあ〜」

声はすれど姿は見えず。声も反響して場所が特定できない。

「それに暑い〜」

「姿を見せないさい」

「バカじゃない？ 私は隠れるのが好きなの。まあ私の能力は隠れる専門じゃあないけど」

つまり攻撃専門とステルス専門の二人がここに居るということ。

「一方的に攻撃する楽しさはお前も知っているだろ？」

違和感を覚えて左手を見るとひじから先がなくなっている。そして立っている位置が少し左にずれて壁に近づいた。

俊葵様も壁にめり込むかたちで身体が欠損していた。欠損している左手の感覚は全くない。つまり完全に消失していることになる。瞬間移動で壁にめり込ませているのなら身体全体を壁にめり込ませればそれで決着がつく。それなのにそれをしてこない……不思議だ。

「まあ……そんな事はどうでも良いです。よくも俊葵様から賜ったこの身体を……よくも……よくも!!」

身体中から触手をありつたけ出して空間の壁を壊して多次元的に広範囲攻撃を行う。複数の空間から犯人を見つけてこの次元に引きずり出した。

「逃げられる前に殺してやる!!」

時を止めてから二人をバラバラにしてからマジシャンズ・レッドで燃やして塵にする。

「ふーふー、自分の感情を抑えられなかった……それに俊葵様の身体をこんな醜くしてしまった。こんな戦い方ではだめです」

悔しくて涙が出てくる。俊葵様ならもつと優雅に戦えた。それなのに私は相手の能

力も分からないまま不確定要素が多い戦術をとってしまった。勝てたのはたまたま運が良かっただけ。こんな力任せの戦法では俊葵様の聖名と御身体を穢してしまう。

……

…

「さて…」

この辺にいる事は分かる。でも面倒だから基地内のスピーカーをONにして小さく命令を出す。

「現れろ」

目の前に二人の男が姿を現す。どこから出てきたのかはどうでもいい。

「死ね」

二人の瞳孔が開き倒れ伏せる。死骸が腐敗して臭うのは嫌なので焼却して塵も残さず消し去った。

クロエは無事だろうか。俺がこんだけ楽に終わったんだ。もっと戦えるクロエならうまく立ち回っているだろう。

侵入者も殺した、死骸も片づけた、そして新しい客人を見つけた。

「隠れていないで出てきたらどうだ？」

曲がり角の陰からマドカが姿を現した。ISスーツをしていないので戦いに来たわ

けではないだろう。

「企業の中でも腕利きの殺し屋だったのだが…お前には羽虫を殺すのと変わらないらしい」

「褒めてもお茶と菓子くらいしか出さないぞ」

「拡張領域から『お客様もてなしセット』を出してマドカに振る舞う。

「口に合うか分からないが」

「毒が…」

「入ってるわけないだろ。殺すつもりなら臨海学校の時点でお前は肉塊だよ」

悔しそうな顔をしながらもお茶を口にする。毒が入っていないのを確認してお茶菓子の羊羹も一口で食べ『味わわなかったぞ』と言いたげにもちやもちやと頬張って食べた。

そんなところがすごく可愛らしい。マドカは能力じゃあなくて純粹に好きになってほしい。

「どんな用事があったて来た？仕事の依頼か？」

「まあ…そんなところだ」

そういつて一枚のディスクを渡した。

「このディスクの中には依頼が入っている。どんな依頼かは聞いていないが重要なもの

だと言っていた」

「依頼の内容も分からないのに勝手だなあ……これだから女は嫌いだ。自分勝手に気まぐれで男を奴隷か何かとしか思っていない」

「悪かったな……だが自分より劣るものを見下すのは悪いことか？」

「いいや、悪くないさ。俺もそう思う。だから俺に対してデカい態度をとるなよ。それが許されるのは俺のオンナだけだ」

「ではそれを伝えておけば良いんだな」

恐らくスコールとオータムのことだろう。

「ああ、頼むよ。マドカ……次に会うときお前は俺のモノだ」

後ろ姿に告白したがマドカは両手の中指を立てて俺に向けながら暗闇に消えていった。

「可愛い奴……」

「それはあのイレギュラーの事ですか？」

振り返ると何時からいたのかクロエが立っていた。しかし服はボロボロで身体も少し欠損している。あの削り取る攻撃を受けたのだろう。

「マドカは嫌いか？」

「俊葵様の寵愛を受けられるというのにそれを拒む愚かな人間はすべて嫌いです」

「ふふ…ああ…最高に気分が良い。何故だか分かるか？」

「愛を感じているからではないでしょうか」

「大正解、お前も俺を楽しませるコツつてものを覚えたみたいだね」

壊れたてしまった身体を優しく撫でて修復してやる。

「さて、東とシャルに報告しとかないとな。パスイ、二人を俺の部屋へ」

『畏まりました』

…

…

「つてことがあったんだけど二人は何ともない？」

「俊くんと濃密な時間を過ごした。えへへ」

「僕も三回目の絶頂を迎えていたよ／＼」

「被害がなくてよかったよ。これの中身調べてくれない？」

東にCD-ROMを渡してウイルスが入ってないか調べてもらおう。

「おお、これはこれは、なかなか…ふふ、こんなの東さんにかかれば…オープンセサミ」

♪

「危ないファイルとか入ってた？」

「危なくはないけど面倒くさいウイルスが入ってた。独立した端末で開いて正解だった

よ」

画面を見るとファイルには手紙と書かれたPDFが一つ入っているだけだった。

「マドカの奴嘘ついたのか？」

「盗聴されていたから嘘をつくしかなかったとか？」

「なるほど、シャルル頭良い」

ファイルを開くと俺宛の手紙が書かれている。

：

お久しぶりね。オータム：いえ、黄金の夜明けのパイロットと言った方が分かるかしら。とにかくお久しぶり。こうして筆を執ったのはとても深いわけがあるの。

実は幹部連中が学園祭を襲撃しようと考えているの。でもあなたが来てから明らかにIS学園は強化されているし、何よりあなたがいる。

だから襲撃は辞めるべきだと進言しているんだけどAFが何度も破壊されて上も躍りになってみるみたいなのよ。だからその襲撃に備えるようお願いしたかったの。

虎の尾を踏む気も龍の逆鱗に触れる気もないわ。

あなたの手助けをする私は信じられない？私とあなたの目的は同じはず：『人類の滅亡』でしょ？

私にできる事なら何でもするわ。あなたの絶対的な力はもう見たしあなたに逆らっ

でも意味がないことも分かった。

だからあなたのモノになる事にした。

信じてもらう為に学園祭であなたに特別なものを渡すわ。それで私はココに居られなくなる。

私、スコール、Mの身柄を保護してもらうのが条件で私たちはあなたのモノになる。

それじゃあごきげんよう

：

手紙を読み終えた俺はニマニマと笑顔が止まない。素晴らしい人材が三人も俺のモノになるのは良いことだ。

「彼女たちが裏切る可能性もあります。私は手を組むのはよした方が良いと思います」

「僕もクロエと同じ意見。止めた方がいよいよ」

「東さんもやめた方がイイと思うなあ〜」

三人はそう言うけれど俺の気持ちは決まっている。きつともみんなも反対するだろうし苦渋を飲まされた相手だ。でも俺は一度決めたら曲げない。

「俺はあいつらを抱きたい。東や千冬よりも年上の熟した果実を食べてみたい。なにより腕が立つ」

「しかし…」

「反抗的な女も嫌いじゃあない。俺に従うだけの犬のような女も良いけど俺の言うことを聞かない猫みたいな女も面白い」

「もう…俊君つたら聞かん坊なんだ」

「嫌いか？」

「大好き♡」

「みんなも今までと変わらないエッチな生活してやるから…な？」

クロエとシヤルも無理やり納得させる。

「それじゃあもう寝ようか。明日は早く起きて学校に帰らなきや」

95話 R-18

日が暮れて夜空に星が煌めきだす頃、俺たちはIS学園に降り着いた。そんな俺たちを待っていたのは珍しく険しい顔をした山田先生と鬼の形相で殺気を垂れ流している千冬さん。俺は二人を部屋へ帰らせて二人の相手をする。

「門限守んなくてすんません」

「そんなことで怒っているんじゃない。どうして私たちを連れて行かなかった」

「先生たちには立場とか都合があると思って。シャルとクロエなら連れ出してもデートとして処理できるから」

間違ってもないし嘘も言っていない。二人は立场上学園をするにすると誰かがすぐに気付く。だから俺は普段から連れ回しているシャルとクロエを連れて行くことにした。

「先生は悲しいです。これでも学園や仕事よりも俊くんを優先する覚悟はあるんですからね」

そう言われると俺は『すみません』としか言えなくなってしまう。

「別に起こっているわけじゃあない。いや、少しは怒っていたがどうでもいい。今は私たちがお前を一番に考えていることが分かればいい」

「そうですね、うん。ありがとうございます」

怒りの感情は消えて優しく微笑みかけてくれる二人の両手を握って寮の部屋に戻った。地下へ戻らなかったのは二人に対して申し訳ないという気持ちから何かしらの埋め合わせと謝罪をしたかったのと束とクロエには既にたくさん働いてもらったので今夜は俺の相手はせず ゆっくりと休んでほしいからだ。

……

…

しばらく帰っていないかった部屋だけ掃除が行き届いているし冷蔵庫には生鮮食品とお酒が、冷凍庫にはお肉とか冷凍食品とかアイスがぎゅうぎゅうに詰められている。賞味期限が新しくなっているところを見るとクロエが定期的に入れ替えてくれたのだろうか。

「まだご飯食べてないんでピザとかチンしますけどなんか食べますか？」

「この時間に食べるのか」

「私は太ってしまうので遠慮します」

ちよつとくらい太った方が肉付きが良くて気持ち良いのに、と思っても口にはしない。ほんのちよつぴりでも『ウエストは細く、体重は少なく』が女子のモットーみたいなところがあるからな。

「それじゃあ俺だけいただきますね」

コストコで買ったペパロニのピッツアに市販のモッツアレラチーズと自家製トマトソースをこれでもかとトッピングして大型のオーブンで焼き始める。ピザに合うのはビールなので氷水の中にビンごと入れて冷やす。

焼きあがるまでに時間がかかるのでシャワーでも浴びてこようか。汗は掻いていなけれどご飯を食べる前には必ずお風呂に入りたくなる。だから俺は時間が許す限り平日でも昼食前にはシャワーを浴びている。

「ちよつと風呂入ってきます」

「背中を流そうか？」

「いえ、入ってきます。ピザが焼きあがったらオーブンから出して切つといてください」

世界広しといえど冬冬さんに雑用をさせることができるのは俺くらいなものだろう。

「そうか、ならそうしよう」

少し寂しそうな二人を横目にシャワー室へ入る。しばらく使っていなかったけどきちんと整理されているしカビ臭くない。クロエにはちゃんと札を言つとかないとな。

熱いシャワーで身体に付いた戦場の埃や砂を洗い流す。大きな湯船につきり一息ついて体の力を抜く。すごく疲れた後に入る風呂は最高に気持ち良い。身体の中に入った疲労がお湯に溶けだしているようだ。

「ああ…」

一息ついてからモニターを起動して束に連絡を取る。帰還報告はクロエがしているだろうけど帰って来てただいまも言わないうちに他のオンナとイチャイチャするのは申し訳ない。

コールが始まりすぐに出た。

「ただいま」

「おかえり。今日はちーちゃんとまやさんとエツチなんじゃないの?」

「本妻に連絡もせずに愛人を抱けるかよ」

「ぶくく!! 俊くんったら酷いんだ」

「冗談だよ。千冬さんも摩耶さんも俺の本妻だつて」

「分かれば良いのだ」

エツヘン、と電話越しでも豊満なおっぱいを張ったのが想像できる。やっぱり束も呼ぼうかと思っただけど束の言うように今日の主役は二人だ。束だつて水を差すような真似はしたくないと思っっているだろう。本心はどうか分からないが…。

「ずっと前から分かってたよ。ちゃんと分かってた…」

「そんな当たり前なことを言うためだけに東さんとお話ししたいわけじゃあないでしょ？」

東には俺の事がすべて筒抜けの様だ。重く開きたくない口をゆっくりと開く。

「今日は東の島を守り切れなくてごめん。せつかく建造した防衛兵器も駄目にしちゃった」

「俊くんのためならなんともないよ。新しいのを作ってあげるから落ち込まないで、ね？」

「ありがとう。そう言ってもらえるだけで助かるよ。今度ちゃんと東と二人でセックスしたい」

「それは嬉しいけど今日はちゃんと二人を気持ち良くするんだよ」

「分かっているって。ありがとう」

電話を切って肩まで湯船につかる。掌の上でお湯を浮かばせたり凍らせたり遊んでいると『ピザが焼きあがりました』と摩耶が教えてくれたので上がることにした。

浴室から出るとバスタオルを持った摩耶さんが待っていた。

「体を拭きますからここっちに来てください」

言われるがままなされるがまま、身体を任せる。頭から拭き始め、わきの下、腕、胸、

腹と続き股間やお尻を経由してつま先まで拭き上げてくれた。

身体の自由を相手に任せるといふのはとても気持ち良い。美容室でシャンプーされる感覚によく似ている。まして親密な間柄の人なら尚更だ。

「気持ち良い…」

不意に見えた胸の谷間に興奮して勃起してしまった。丁度、摩耶さんが跪いて太もも、特に鼠径部を拭いていたときだったのでピンツと屹立した肉茎は竿をしならせ亀頭で摩耶さんの顎を叩いた。

「きゃっ—」

「あ、ごめんなさい。摩耶さんのおっぱいが見えそうで…それにソコはもつと優しく拭いてもらわないと気持ち良くなっちゃいます…」

「ふふ、良いんですよ。もつと気持ち良くなってください。それからまだ私の事を呼び捨てにできませんか？」

「できないわけじゃないんですけどその場の勢いとか雰囲気とか必要で…。こんな風に攻めていけない時は難しいです」

「もつと身近に感じてほしいので呼び捨ての方が嬉しいです。私も俊葵さんの事は下の名前で呼んでいますし」

「摩耶さんだってさん付けじゃないですか」

「私は良いんです」

だって大人ですからと大きく膨らんだ亀頭を口に頬張った。腰に手を回して俺が逃げるのを阻止すると同時に空いている右手でアヌスと玉袋の中間辺りをタオルで優しく押し擦る。俺と夜を共にすることにみんなエッチが上手になつていく。俺の調教が功を奏しているのか、それともみんながエッチの才能を持っているのか分からないけど互いに気持ち良くなれるのならどうだって構わない。

「こうしていると偶に誰かに自慢したくなるんですよね」

「ちゅ、ん…ちゅぱっ♡それは嬉しい事です。でもそんな事はしてはいけませんよ。めっです」

口淫の手を緩めることなく、いやこの場合は口を緩めずと言った方が正しいかな。口淫の口を緩めることなく、むしろ太い陰茎を根元まで啜えて俺に対する愛情を態度と好意で示す。

激しい口淫に耐えられなくなった俺の陰茎は数分と待たずに濃厚でゼリーのような精液を摩耶の口の中へ放出した。四度の脈動と共に吐き出された大量の精液はきちんとして礼儀正しく摩耶の口の中に納まっている。

パンパンに張っている頬を優しく撫で耳を人差し指と親指で挟んで擦ってやると気持ち良さそうに目を細めた。

「口を開けろ」

「ん、んあ……え……♡」

薄いサーモンピンクのぷつくりとした唇が開かれ精液がいやらしい橋を架けた。口内は精液で埋め尽くされていてゴポゴポと呼吸に合わせて泡立っている。

摩耶は両手で胸を掬い上げて少し上向きになりトロンとした目でこちらの情欲を掻き立てた。よく調教された犬の様にいつまでも主人の『良し』の合図を待っている。

「良し、全部飲み干せ。口を開けたままな」

「ふあ♡♡」

折角こんな上等なオナナを精液便所みたいに使っていると誰にも自慢できないなんてそれはそれでつらいところがある。まるで俺だけ世界から疎外されている感覚に近い。

「ん……んく……お、んう……つく……へあ♡飲みましたあ♡」

舌を出して口の中に何も入っていないことを俺に確認させて俺のチンポを啜えて残った精液を綺麗に舐めとって綺麗にしてくれた。

しばらく会わないうちに俺の趣向を調べて勉強してくれたのだろうか、それとも束の差し金か。どちらにせよ俺のために行動したという事実は変わらない。その事実だけで俺は摩耶に対する愛情が心の底からふつつつと湧き上がってくる。

「いつまでイチヤイチヤしてる。ピザが冷めてしまったぞ」

千冬さんの一言で正気に戻ったのか急いで脱衣所から出る。摩耶は急ぎ過ぎたのか口の端に着いた精液を拭き損ねてそのまま出てしまった。

「まったく……いま温めなおしてるから少し待ってろ」

ソファに深く腰掛けて摩耶を抱き寄せる。お風呂に入っていないのか、それとも入ってから時間が経ったのか摩耶の匂いが濃い。あと俺の精液の匂いも。

キンキンに冷えたドクペの栓を開けて一気に喉へ流し込む。ビンで飲むドクペは最高にうまい。特に氷水で冷やされた飲み物は冷蔵庫で冷やしたヤツよりもおいしく感じる。

「俊葵さんは本当にドクターペッパーがお好きですね」

「世界で一番好きな飲み物ですからね。ちなみに二番はみんなの体液で三番はコーラです」

「それじゃあこういうのはどうでしょうか」

そう言うのと摩耶は俺の手からドクペのビンを取り少し口に入れてから俺にキスをした。そして舌と同時に流し込まれた摩耶の唾液とブレンドされたドクペが俺の口の中を駆け回る。しゅわしゅわとトロトロの甘い液体はまるで麻薬のような快樂をもたらしてくれた。

「ふふ、俊葵さんなら気に入ってくれると思いますよ」

「めちやくちや気に入った。今度はみんなにもしてもらおうかな」

「それでは次は私の番だな」

ゴゴゴゴゴと背後に効果音が見えそうなくらい覇気を纏った千冬さんがピザを運んできた。少し焦げた香ばしいチーズの香りと食欲をそそるペパロニの肉々しい見た目が脳髓の奥まで届く。

「はは、お手柔らかに」

「ほら、口を開けろ／＼／＼」

「あゝん、んぐ!!んぐ!!んぐ!!んぐ!!」

大きく口を開けると丸められた特大サイズのピザを押し込まれた。二度焼いたことよって水分が飛んでサクサクになったピザだが、口の中の水分を吸収するので美味しさと命の危険が同時に味わえる。

無理やり噛み砕いてドクペで流し込んだ。

「うん、美味しい。でも千冬さんが不機嫌そうなのが気になります」

「脱衣所でのことを思い出してみろ。私だけ除け者にしてあんな…」

空いた手で千冬さんを抱き寄せて二人のおっぱいで顔を挟む。どんな高級なクツシヨンよりも心地良い。そして千冬さんにはピザを、摩耶にはドクペを口へ運ばせた。

これで俺を仰ぐ奴隷がいれば完全にどこかの阿呆な国王様に見えるだろう。美女を侍らせて言う事をきかせて……ここはこの世の天国に相違ない。

「まるで可愛いあかちゃんにご飯を食わせてあげているみたいですよ」

「二人で飯も食えなくなつたのか……嘆かわしい」

「えへへ、二人に食べさせてもらつてるから美味しいですよ。千冬さんも怒らないで、ね？ ほらほら、笑つてるほうが可愛いですよお」

千冬さんの肩に回していた手を少し下におろしておっぱいを鷲掴みにする。少し反応を示したけど眉間のしわを深くしながら反撃なのか胸を押し付ける力を強めた。

「ああ……気持ちいい」

「俊葵さんに喜んでもらえて嬉しいですよ。織斑先生も嬉しいですよね？」

「私は別に……俊葵の命令ならやるだけだ」

「そんなこと言つてええ。俊葵さんが帰ってくるまで怒つて嫌われたらどうしようつてお酒を飲んでもいけないのに柄にもなく落ち込んでいたじゃないですか」

「山田君!!言つて良い事と悪い事があつてだな／＼!!」

「嫌つたりするわけじゃないじゃないですかあ。千冬さんは可愛いなあ」

「だ、黙れ／＼」

「黙りませえん。千冬ちゃんはご主人様が愛おしくて堪らなかつたんでちゆねえ」

「ツツツ~~~~／＼／＼」

ふるふると体を震えさせて怒りとも照れとも言えない感情が混ぜ合わさった特殊な感情に対応している。震える手でピザを俺の口に押し込んで照れ隠しのために抱き着いてきた。

一時的に摩耶には離れてもらって千冬さんの相手をする。おっぱいに締め付けられた顔では呼吸ができないのでどうにかこうにか顔だけ脱出させた。すると目の前には千冬さんの可愛いリップがあるではないか。これはキスしないといけない。しかし今の俺の口の中はピザが入っている。

キスの味が果物や甘いものなら歓迎だけれどピザというのは如何なものだろうか。俺は何味のキスでも喜んでキスするけどみんなは分からない。だからキスはせずに千冬さんの腰へ手をまわしておしりを撫でまわした。

千冬さんのヒップは硬くて筋肉質だった。しかしこの弾力が気持ち良い。ぷりぷりで指が沈み込むセシリアの豊満なおしりも好きだけど筋肉質で硬いおしりも気持ち良い。

つまるところ俺はどんな女性でも大好きなことだ。顔と性格はえり好みするけど。

「千冬さん、下着以外を脱いでください。ゆっくりと見せつけるように」

「私が断らないのを知って言っているのか？」

「まさか、嫌なら断つても良いですよ。その時はこのまま千冬さんの身体を優しく抱きしめますから」

「別に嫌では……／＼／」

ぶつぶつと文句を言いながらも俺の言いつけ通りにゆっくりと服を脱ぎ始めた。スーツ、シャツ、タイトスカートを脱ぎ下着姿になった。

身に着けている下着は黒のレースで乳首とクロツチの部位がシースルーになっておりピンク色の少し大きい乳首と整えられた陰毛がうつすらと見える。変に露出させるわけでもなくキツチリと隠されているわけでもない微妙なエロスを感じる。

千冬の身体はとても筋肉質で綺麗だ。割れた腹筋や力こぶを携えた腕もすべてが愛おしい。爆乳と巨乳の中間であり美乳なおっぱいは世界中の男性の憧れそのものだ。そんな魅力的な女性の全てが俺のモノだという事実は最高に興奮する。

「千冬って筋肉ムキムキでボディビルダーみたいですよね」

「よせ、コンプレックスだ／＼／」

「だからいつも着衣セックスだったんですね。それに……」

股を開かせておまんこをいじると愛液と共に大きなクリトリスが顔を出した。

「マツチヨな女性ってクリトリスがデカいのは何ですかね」

「や、やめてくれ……／＼／」

「恥ずかしがらなくつても良いですつて。俺なんて千冬のよりもでっかいのが着いてるんですよ?」

千冬に見せつける様にズボンとパンツを脱いで股間をあらわにした。半勃起状態で血管がドクドクと脈打って臨戦態勢になろうとしている。

「それに俺、千冬の全部が好きです。というか筋肉ムキムキでクリがデカいなんてエロ過ぎでしょ。滅茶苦茶好きです」

「お前の性癖が時々心配になる」

「美的センスが人よりも洗練されていると言ってく下さいよ。俺は美しいものが好きなんです」

千冬の頭を掴んで無理やり完全に勃起した陰茎の前に持つていく。へそに着きそうなくらい反り返った肉棒はドクンドクンと別の生き物みたいに脈拍に合わせて動いている。

「千冬は俺のモノなんだから何をすれば良いか分かるよな?」

勿論だ、と言葉にしなくても態度でよく分かる。千冬は俺の竿を優しく手で包んで、龟头を口の中に入れてカリ首を舌先で嘗め回す。

これだからフェラチオは大好きだ。奉仕の心を感じられるし、敏感な龟头だけを責められると気持ち良い。龟头だけをお風呂に漬けたような感じがとても良い。

「んちゅ…ちゅ、ちゅ♡えろ…えろん♡」

「美味しそう♡私も舐めたいです／／」

千冬が舐めているちんぽを愛おしそうに眺める。一人ばかりを構ってもう一人を蔑ろ俺はにするほど腐ってはいない。寧ろもう一人もきちんと愛し尽くしてしゃぶりつくすのが俺だ。

「もちろん摩耶にも舐めてもらいますよ。でもまずは服を脱いでもらわないとね」

「はい♡」

千冬とは対照的に女性的で肉感的な身体をしている。爆乳でふんわりとした感触のおっぱいは不思議と重力に逆らい、プルンと張りがあつて形が崩れていない。

大きくて陥没している乳首も可愛くて大好きだ。綺麗で日に焼けていない少し色素の薄い肌よりも、更に薄いピンクの大きな乳輪の中に大きな乳首が隠れていると思うと愛でたくなる。

「さあ、どうぞ…私の恥ずかしがり屋な乳首を可愛がってください／／」

言われるまでもなく摩耶を抱き寄せ、長い舌でおっぱいを舐め上げる。下乳に舌を這わせると乳の重さで舌が埋まった。大きく柔らかいのに垂れていない、更には適度に反発までするこのおっぱいの心理を理解する日は一生来ないのだと思う。

「あつ…すげーい…気持ち良いです」

「こつちも見ろ。ちゅ、ちゆる…ちゅば、ちゅば♡」

反抗心か根元まで啜え込んで長いストロークでチンポを舐め始めた。口に入れるたびに喉がチンポの形に膨らむ。苦しいはずなのに、唾液とカウパー氏腺液を嚥下し陰茎に緩やかな快楽を与えた。

俺が教えたわけでも、まして千冬の事だしそういったことを自ら学ぶなんてこともしていないだろう。つまり千冬が行っているこの愛撫は本能に従って行っている。人間の本性は無意識下で暴露するというが正にその通りだ。

「見ていますよ。とりあえず今日は我慢しないで二人に出すのでちゃんと啜えていてくださいね」

「ん……♡」

亀頭だけを残して抜き、口の中に精液を吐き出した。我慢せずに出したので精液の量は少ないが千冬は口を開いて俺に見せる。俺がそうすると喜ぶのを知っているようだ。

「ん…く…ん…ふぁ♡飲んだぞ♡」

「味は…」

「最高だぁ♡」

「そりゃ良かった。でも次は…」

隣に目をやるとベッドの上に移動して股を開いて仰向けに寝ている摩耶がいた。く

ばあと両手を使い愛液でドロドロになっていて綺麗なオマンコを広げている。その姿を見た途端、射精したばかりで一息ついていた俺の陰茎は元気になった。

射精すると脳内に賢者モードになる為の物質が分泌されるけど俺には関係ない。こんなエロい女が誘っているのに萎えるなんてありえない。

何の躊躇もなく摩耶に覆いかぶさり一気に挿入する。両手を繋いで勢いよくピストンをする『逃がさない』と言わんばかりに摩耶は足で俺の腰を捕まえた。そしてその上から千冬が覆いかぶさりますます摩耶のオマンコに突き刺さる勢いは増す。

「しゅ、しゅいれひゅ!!おまんこ壊れちゃう!!」

前戯も儘ならぬままのオマンコにいきなり挿入しているのに今までずっとセックスしていたかのような濡れ具合と温かさで俺を包み込んでくれる。もともと体温は高いほうじゃなかったと思うが俺のためにオナニーをして具合を良くしていたのだろうか。

摩耶の愛情を感じた俺の陰茎は膣壁をゴリゴリと削り取る勢いでセックスを続けた。

「あ、イイ♡凄く気持ちイイのお♡このオチンポじゃないとダメ!!自分の手でもディルドでも満足できない身体になってしまいましたあ♡もう俊葵さんじゃないとダメなんです!!この身体も心も俊葵さんの所有物なんです♡♡」

一回目の絶頂に合わせて伸縮した膣内に反応して俺も腰を思いきり突き出して子宮

口に鈴口を密着させて射精した。刺激が強かったのかさつきよりも大量に射精した精液が接合部から溢れ出ている。

この腔内に射精する瞬間が最も俺の支配欲を満足させてくれる。処女を奪った女の大事な箇所俺の出しうる最も濃厚な汁をぶっかけてたって事実は何よりも達成感がある。

「なあ…分かっているだろう？」

振り向くと千冬もさつきの摩耶みたいに媚びを売るように四つん這いになり尻を振って俺を誘惑してきた。俺はそれに覆いかぶさり本日四回目の射精に精を出すのだった。

96話 R-18

千冬も摩耶もまんこと尻の穴からドロドロで麵みたいな粘度の高い精液を垂れ流しながら気絶するようにベッドの上で寝ている。俺は二人にタオルケットをかけて部屋を出る。精液を掃除したりしないのは以前、掃除したとき束に『起きた時に俊くんの濃い香りに包まれていると幸せなの』と注意されたからだ。

だから二人はそのままにして部屋を出た。まだ目を跨いでいないので起きている生徒もいるだろう。俺のチンポもまだ女を犯したりないとばかりにまだまだ元気だ。

とりあえず地下には束がいるだろうけど最近束の相手ばかりしていたので別な女のところに行こう。数分考えて、最近忙しかったり互いの都合がつかなくなったりでセシリアとデートやセックスができていなかったたのでセシリアのところへ行くことにした。

しかしいきなり邪魔しても寝ている可能性があるんでLINEで起きているか確認を取ったらずぐに返信が帰ってきた。

『はい、起きています。ただ〇〇さん(同居人)も起きていますのでこちらから伺いますわ』
『そうか、ありがとう。俺の部屋はちよつと入れないから屋上に来て』

『かしこまりましたと(*・ー・)』

学生寮の屋上は鍵がかかっているが超能力で開けてセシリアを待つ。

夜風が少し肌寒いと感じ始めた頃にセシリアが現れた。髪の毛が湿気っているようなのでシャワーで汗を流してきたのが分かる。それにリンスやボディソープの香りと香水の香りが混ざって蠱惑的だ。

それに着ている服もスケスケのネグリジエでワンピースタイプだけどブラとショーツしか布として肌を隠していない。そんなセシリアの艶やかな姿に短パンの中で俺の股間がむくむくと起きだす。

「まあ、こ立派ですわ」

「さつきまで千冬と摩耶を犯してたのにセシリアを見たら元気出た」

「部屋を使えないってそういう…」

何かを察したように微笑んで『俊葵さんが楽しめたのならそれは何よりです』と本日の二番手扱いされているのに目の前にいる自分勝手な男の快楽をともに喜んでくれた。でも本心は寂しかったんじゃないか…そう思うと少し心が痛い。

「私も俊葵さんも忙しくて最近は会えていませんでしたからこうして二人で密会ができ

て嬉しいですね。それに私でここをこんなに大きく…♡」

「セシリアにはあまり見せたことなかったね。なんだかちよつと恥ずかしい／＼」

「みんなには見せているではありませんか。何か違うのですか?」

「ちよつと…ね。なんつうかドキドキする。てか誰を前にしてもセックス前はドキドキするよ。だって一時的な記憶喪失でみんなとセックスした記憶はあつても経験はないんだ。主観A Vを見てる感じかな。だからまだセックスをして日が浅い半分童貞なんだよね」

「それでは私との初めても…」

「覚えてはいるし俺がやったって事も理解しているんだけど実感がなくて…ちよつと過去の俺に嫉妬してる」

「それは嬉しいですね。俊葵さんにそれほど愛して頂けるなんて♡」

「嫉妬する男なんて見苦しいだろ、はは」

「そんなことありませんわ。寧ろ過去の俊葵さんと現在の俊葵さんの二人に愛される幸せはこの数か月でお付き合いした人の特権ですね。ですからその特権を味わわせてくださいませ」

「そんなもんかな」

「そのようなものですね。常に俊葵さんの特別でいたいと思うことはいけないことでし

て?」

「別に悪い事じゃないよ。むしろ嬉しい」

セシリアを横に座らせて肩を寄せ合う。俺が肌寒いと思っただけでセシリアはもつと寒さを感じているだろうと思いいシャツを脱いでセシリアの肩にかけてやった。

「ふふ、俊葵さんの香りに包まれているようで好きです」

「男臭くない?」

「そんなことありませんわ。すごく良い香りです。俊葵さんは寒くありませんか?」

「俺はこうするから良い」

セシリアを抱き寄せて暖を取る。セシリアの香りを強く感じてこれから起こる事柄を暗示しているようだ。肌触りの良い生地ネグリジェの下に包まれた柔肌も気持ち良い。

「そろそろ始めますか?」

「始めたいけどドキドキしてる」

「でしたらゆっくりと愛撫いたしましょう」

右手を短パンの中に滑り込ませて半分勃起している陰茎を握り優しく刺激する。皮を被った完全防御形態の龟头も皮の上からジョイスティックを操作するように親指でクリクリといじってくれた。

「セシリアは愛撫とかエッチな事の情報はどこで仕入れてるの?」

「イギリスへ帰った時にこつそりと通販で購入した本で学びました。俊葵さんの為に覚えましたのよ?」

「ありがとう」

シヨーツに手を入れて恥丘を優しくなでる。陰毛がさらさらしていて気持ち良い。細くて柔らかい陰毛はきつと生まれて一度も剃ったことがないのだろう。

「ん…／／／」

少しシヨーツをずらして見ると薄い金色の陰毛があった。産毛のように柔らかいソレの感触を掌でくしやくしやと楽しみながら割れ目に中指をあてがい表面をなぞって愛撫する。

「そういえば頼んでたアレ、やってくれた?」

「はい、きちんと一週間。少し辛かったですわ」

すねたセシリアも可愛い。

俺がセシリアに頼んでいたというのは『一週間、果物と果汁、水以外のものは口にしない』というものだ。お茶を餌に混ぜた豚は臭くないし、新鮮な葉っぱを食べさせた虫も美味しい。だから人間も果物だけ食べていたら甘く良い香りがあるのではないかと思っている。

「ちゅ…ん…んちゅ♡ふぁ…ん…じゆる、ちゅ、ちゆる♡キスだけで達しそうですわぁ
／／／」

舌を口の奥まで侵入させてセシリアの舌と絡め合わせ唾液をむさぼる。甘くて濃厚、それでいてフレッシュな果物のようなキレのいい甘みが雪崩れ込んだ。

愛撫して愛液まみれの手も舐めると似たような甘味を感じた。

「辛い思いをさせてごめん。でも今のセシリアは最高においしいよ。朝のサラダの代わりにセシリアを食べたい」

「そう言われてしまうと何も言い返せません♡さぁ、せつかくですからこちらも召し上がってくださいませ。もちろんその大きくなった男の象徴で♡」

「言われなくても…」

セシリアを俺の膝の上のせて裏筋を下腹部に擦り付ける。

「もう濡れていますので…どうぞ／／／」

「ありがとうございます」

身体を少し動かして亀頭を膣に沿わせると『にゆるん』と一気に根元まで侵入していった。少し窮屈だが愛液が潤滑油の役割をしているのでセシリアも痛そうではない。

「あぁん…深くまで入っていますわ♡」

「痛くないか？」

「いえ、丁度良い心地ですわ。こう見えて練習していますので」

いたずらっ子のようにクスクスとつながったまま笑うと身体が揺すられて敏感なところを刺激する。

「あん♡」

「どんな練習をしているんだ？」

「それは…ん♡もちろんデイルドを使つて広げていましたわ／／俊葵さんのはとても太くて大きいですから♡」

「嬉しいこと言つてくれるじゃない。お礼は何が欲しい？」

「優しくゆつくりと愛してほしいですわ」

「ゆつくりとか…それじゃあこういうのはどうかな」

頬を舐めてセシリアを中心に無重力の空間を作り出す。セシリアは俺から離されないうように足を腰に回してガツチリとホールドした。

「どうやったか分かるか？無重力マジックさ」

「ふふ、詰めが甘いですわ。見えていましたわよ。俊葵さんのジャンピン・ジャック・フラッシュが。資料で保有しているすべてのスタンド能力は暗記しています」

「優秀な人は好きだぞ」

「褒めてもらえて嬉しいですわ。お礼に…んっ／／／気持ちの良い事を♡」

「従順な奴はもつと好きだ。そして逆に人を食い物にする奴は大嫌いだ。そんな奴は死ぬべきだと考えている。セシリアはどう思う？」

「その話は今すべきことでしようか？」

ほんのちよつぴりの反抗心も持たないクロエはそんなこと言わないだろう。だからこそ自分に正直なセシリアが好きなんだ。

「それもそうだな。今は無重力セックスを楽しもう」

「ええ、それはもう」

「姿勢制御が難しいな…でもその方が燃える」

腰を擦り上げるようにゆつくりと陰茎をセシリアの秘部へ押し込む。八分くらい入ったところで子宮口と鈴口がキスをしてそれ以上は入っていかない。

「あん♡奥まで…／／素敵ですわ」

「もつと素敵なことになるぞ」

「ああ…この子宮が押される感覚♡東さんやクロエさんは普段からこの快楽を味わっていると思うと…ん／／ほんのちよつぴり嫉妬してしまいますわ」

「そりゃあ嬉しいよ。俺の事を焦がれてくれてるって事だろ」

「それはもう♡心の底から♡」

ゆつくりとピストン運動を大きくしていく。セシリアは東やクロエとは違う。とて

も繊細で壊れやすい。

「すごく心地良いですわ／＼／＼」

「この間まで中学生だった生娘を犯すのって凄く興奮する。まるで若い命をむさぼっている感じ。」

「では最後まで…このまま味わってくださいませ。私もすでに達してしまいそうです♡」

落ちて着いた声色からは想像もできないくらい膣が締まり俺に射精を促す。俺はその催促に応えることにした。

足を絡め身体を密着させてセシリアの一番奥に俺の精液を吐き出した。

「あぁんー」

大きく体をそらせて身をよじるセシリアを抱きしめて逃げられないようにする。まるで堰を切ったように吐き出される精液は子宮をいっぱいにして接合部から溢れ出た。

「俊葵さんが私の膣内に…あぁ／＼／＼すべて入ってきています♡幸せ…♡」

ぐったりするセシリアを抱え上げてもう一戦しよう。しかしその前に無重力を解かなくてはいけない。この能力で無重力になった空間は少しずつ真空になっていく。おそらくセシリアは酸欠で少し疲れたのだろう。

……

…

「ん…俊葵…：…さん？」

「起きたか。おはよう」

「…は？」

「地下にある俺の部屋。覚えてないのも無理ないか。三戦目以降は気絶してたからな」

「そう…ですの…：…ふう／＼／＼身体のほてりが治まりませんわ♡」

「そういうと思って用意はできているよ」

「身体をずらしてセシリアにベッドの上を見せる。すでにセクシーな下着姿で俺たちを待っている束とクロエがいる。」

「4Pは久しぶりだから体力がもつか分からないな」

「でしたらわたくし共にお任せください。俊葵様はここで横になってお休みください」

「そしたら私たちが気持ち良くしてあげるうゝ♡」

「明日も寝不足に悩まされそうだ」

97話 R-18

目を覚ますと隣で束が心地良さそうに寝息を立てている。俺は起こさないようにベッドから抜け出してベッドの脇のテーブルに湯気を立てながら俺に食べられるのを待っていたステーキに齧り付く。

「ああ……ねむ……」

「お早うございませう。食事と湯浴みの準備は整っております。どちらに致しますか？」
「うう……歯磨き……」

寝起きで機嫌が悪いのか、意地悪にも第三の選択肢を答える。しかしそんな回答にもクロエは快く応えてくれた。

「畏まりました」

クロエの膝に頭をのせて歯磨きをしてもらおう。口の中という不可侵領域を心の許せる人間に侵されるというのはとても気持ち良い。しかし柔らかいブラシで歯茎や口内をくすぐられると口を閉じてしまいそうになる。

「口を閉じられては磨くことができません。さあ、開けてください」
「あゝゝ」

「虫歯は無し、とても健康的な歯です。お水を」

起き上がるのも億劫なのでそのまま口を開けて催促するとクロエは何かを察したのか自分の口に水を含んで口移しをしてくれた。

「ガラガラ……ペツ」

空中に吐き出した水を炎で蒸発させる。それを繰り返して歯磨きを終えた。

「では次はお食事ですか？」

「おう、食べさせろ」

「畏まりました。……ところで炎を吐けるのなら口内は消毒できるのでは？」

「何かと理由をつけて色んなことをしたいんだよ。恥ずかしい事言わせんな」

「失礼をいたしました」

「謝らないで」

腰を抱いて抱き寄せると甘い良い香りが鼻孔をくすぐる。朝の短い時間では本番まではないが少しだけでも楽しみたい。

「早く食べさせて」

「はい……／＼では、どうぞ／＼／」

なぜか服を脱いで裸になり俺の腰に跨り対面座位で料理を口に運んでくれた。

「美味しい、やっぱ朝は学食じゃなくてクロエの作ったのがテンション上がる」

「材料が良いからです」

「学食だつて国産の最高級食材を使っているぞ。謙遜するな」

「俊葵様のお口に合うようにと研究しただけにございます」

「……………なあ、ちよつと相談なんだがな。欲しいものがあるんだ…」

「はい、何でしょうか？」

「実はダマスカス鋼で作られた銃やナイフが欲しい。今まで使っていたM500が傷だらけになったから新調したいんだ。でも折角ならカッコいい奴が欲しい。用意できるか？」

「は、それが俊葵様の望みとあらば」

「それとM500はカッコ良くて威力もあるが装弾数が少ない。今度はブローバックを使いたい」

「そのように…」

「つて事でこのM500はもう使わないからあげる。大事に使つてな」

「恭しく受け取るクロエを横目に食事を終えて湯浴みに入る。寝汗を流してスッキリとした気持ちで一日を始めるためには欠かせない。」

シャワー室から出ると制服や下着を用意していてくれた。
「ありがとう」

身体を拭いてもらってから服まで着せてもらう。身長差があるので背伸びしながらいそいそと着せてくれる。

俺の制服は長ランに改造してあるので着せるのに手間取っているが皴にならないように丁寧にやってくれている。

「今日も素晴らしくカッコ良いです」

姿見で最後の身だしなみを整えていると横から誉め言葉がかけられた。いつもの事だけど褒められて悪い気はしない。

「当たり前だ。俺はいつだってカッコいいんだから。クロエは着替えないのか?」

「はい、今日はお休みを頂くことにします」

「なんか用事?」

「ダマスカス鋼は入手が難しいので少しでも早く手に入れるために行動を起こそうかと」

「そっか、それじゃあ頑張つて。楽しみにしてるからな」

「それはもう…お任せください。それでは行ってらっしゃいませ。今日も俊葵様の一日が良いものでありますよう」

……

…

教室の扉を開けるといつも以上の喧騒に包まれていた。千冬さんと摩耶さんがいないのでうるさいだけかと思っただけと言葉の端々に「文化祭」、「模擬店」と聞こえるので文化祭の話題で盛り上がっているのだとわかる。

「おはよ。今日はいつもより早いね？もしかして今朝はエッチ抜き朝食だった？」

「まあ、そんなとこ」

「エッチ抜きなのとクロエがいなのって関係してる？」

「半分正解で半分不正解」

「そっか、もししたくなったら声を掛けてね。いつでも大歓迎だから」

席に着くなりシヤルに目の前を陣取られてゆっくりする前に会話が開始された。別に嫌というわけではない。むしろ大歓迎だ。

「そりゃあ助かる。クロエに頼みごとをしたからな。だから今日は学校を休むって」

「じゃあしばらくの間、俊葵の身の回りの世話をしちやおうかな…なんて…。あのね、今度一緒に出掛けないかな？暇な時で良いんだけどね。ほら、最近は俊葵と話す機会も少なかったしどうかなって…」

デートの誘いを断るほど俺は甲斐性なしでも唐変木でもない。二つ返事でOKする。

「もちろんOKだよ」

「なら私も同行しよう。シャルロット一人じゃあ俊葵を持って余すだろう」

何時からそこにいたのかラウラが口をはさんできた。珍しく寝癖がついているので寝坊したようだ。

「おはようラウラ。今朝は遅かったけど何かあった？」

「実は昨日の夜ラウラってば……」

「バカ、言うな」

「え〜面白いのに」

「もし言う事があるなら私は自分の口で言う」

「それじゃあ今言ってもらおうか。何か気になる」

昨日の夜は夜更かししたらしい。目の下にクマもあるのであまり睡眠をとれなかったのだろう。言いたくないとか秘密にしたいとか誰にだってあるものだ。しかし俺はあえて聞く。めつちや気になるから。

「そ、それは……実はその……俊葵とセシリアの……その……それより私もデートに連れていけ。……最近、私たちを疎かにし過ぎだぞ」

「そうかな？」

「そうだよ。二言目にはクロエさんが出てくるし……寂しいんだからね」

「山田先生といるところもよく見かけるな」

二人ともよく俺の事を見ていらつしやる。ぐうの音も出ない。

「シャルが良いってんならいいけどさ……」

「もう、僕を出しに使って。本当のことを言ったら？可愛い僕たちを侍らせたって俺絶対にお前らと結婚したら尻に敷かれるな……」

「凶星を突かれてしまった。人間正直でなきやいけない。ちゃんと口にしないと誰にも伝わらないのだ。」

「二人とデートしたいんだけど良いかな？」

「もちろん良いよ。その代わりに食事は俊葵持ちだからね」

「了解いたしました、お嬢様」

「あ~~~~!!ラウラさんとシャルルさんが俊葵様を二人占めしてる~~~~!!」

「代表候補だけずるいぞ~~~~!!」

「一般生徒にも愛の手を~~~~!!」

「一般教諭にも愛の手を~~~~!!来年はチャンスが無いのよ~~~~!!」

「ガヤのなかに他クラスの生徒や榊原先生の悲痛な叫びが含まれているのは知らないふりをしている方が良いだろう。」

榊原先生、本名は……えつと…菜月！そう、菜月だ。榊原菜月、29歳独身で未だに

恋が成就した試しがなく実家の両親からお見合いの話が毎週の様に来ていているという。しかしどれも返事はNO、『良い人そうなんだけどいまいち燃えない』と個性的な人を好んでは失敗していた。

そこへ俊葵という格好の獲物が舞い降りた。そこそこ魅力的で女性に優しくミステリーアス、そんな俊葵に一目ぼれするのは何も生徒だけではないということだ。

俺も榊原先生は好きだ。胸は小さいが全体的に細いシルエツトで華奢だがスラツと伸びた綺麗な手足、邪魔にならないようにお団子になっている髪は毛…のおかげで見えるうなじ。それに何より整った顔立ち。彼女が物好きな女性でなければ今頃は結婚できているくらい美人だ。IS学園の中では平均的な顔面偏差値だが雑誌モデルも夢じゃない。そもそもIS学園のみんなが美人過ぎるのだ。

「キヤーーーー!!俊葵様がこちらをご覧になってるわあーーーー♡」

「俊葵様ーーーー!!愛してますわーーーー!!」
「早く自分の教室に戻れ!!」

怒号と共に千冬さんの登場。蜘蛛の子散らすように一斉に各々の教室へ逃げ込んだ。

「まったく…教員までとは。呆れたものだ、これでは学園の風紀なんてあつたもんじゃあない。なあ、俊葵」

「俺の所為じゃないでしょ。彼女たちが勝手に俺に惚れて勝手にわーきゃー言ってるだ

けですよ。何割が本気か分かったもんじゃあない」

「それでもお前に惚れていることに違いはない。責任はある。あとでどうにかしろ」

「え〜〜」

「どうにかしろ」

ジロリと睨まれてしまつては何も言えない。おとなしく『はいはい』と従う他ない。ノートを取り出し、ペンを取り出し、教科書を取り出し、そして最後に早弁用の弁当を取り出して授業が開始された。

……

…

授業終了のチャイムが口内に鳴り響くと同時に俺の意識は覚醒した。寝ぼけ眼をこすりながら黒板に書かれた板書を写真に残して教科書を机の中に直して財布を取り出し、食堂へ行く準備をする。

「俊葵くん、居眠りばかりでは勉強について来られなくなりますよ?」

立ち上がろうとしたことに真耶さんがやって来た。俺の授業を受ける態度が気になつていたらしい。

「高校卒業するくらいの学力はあるからダイジョーブ」

「もう、いつもそう言つてIS以外の授業はさぼるんですから。留年しても知りません

からね」

「国が俺を留年させるとでも？あり得ませんよ。だつて世界に二人しかいない男性パイロットが留年したなんて報道は国がしたくないでしょうよ」

「それでもです。ちゃんと授業を受けてください。……もしちゃんと受けてくれたらサービスしますから（小声）」

俺にしか聞こえないように耳打ちしてくれた。吐息がかかりすぐくすぐったくて気持ち良い。

「お弁当をもって私の部屋まで来てください。今の授業の復習と御説教です。ちゃんと来るように」

俺が拒もうと口を開くと人差し指で口をふさぎ『来ないと、めっですよ』と釘を刺されてしまった。笑顔は崩していけないけれど珍しくマジな真耶さんなので行くことにした。弁当はさつき食べてしまったので財布を手に立ち上がる。

しかし丁度のタイミングでシャルルがお昼のお誘いに来た。

「俊葵、一緒にお昼ご飯食べよ？」

「わりい、俺これから山田先生のとこ行かなきゃいけないえ。また今度な」

「まっちは居眠りしてたからお説教なんだ〜♪」

間延びした声と共に俺の背中に乗つかかってくるのはのほほんさんその人。柔らか

い（確信）

「本音だつていつも眠つてるじゃん」

「だから私もまやさんからお説教なのだあ〜」

「なんだ、お前もかよ。じゃあいつしよに行こうか」

「弁当持参でれつつら〜〜〜♪」

何処に弁当を持つているのか分からないがだぼだぼの制服に隠してあるのだろう。本音の収納術を一見してみたいものだ。

「というわけでまたな」

「うん、また。今度は断らないでよお？」

上目遣いでおねだりされると断れないのを知っているくせに…と舌の根まで出かかって飲み込んだ。

「分かつてる。じゃあ行つて来る」

……

…

購買部で日替わりパンとペパロニのピッツア、のり弁、唐揚げ弁当を買った。今日の日替わりパンはカツサンドだから3個も買ってしまった。勿論、本音の分まで購入した。

真耶さんは職員室ではなくて私の部屋までと言っていたのでおそらく教員棟の部屋だろうと思ひ最初からそこへ向かっていた。

一応、扉をノックして返事が返つて来てから扉を開けた。教員棟の部屋に入るのは初めてなので少しドキドキする。

内装はとてもシンプルだけど広くて中央に長机二つ分ぐらいの大きな机があつて書類やパソコンで埋もれている。窓際に机があつて応接用のソファである。しかし肝心の真耶さんが見当たらない。

「あれ、いねえのかな」

「まややあゝゝん、来たよおゝゝ」

「ここに居ます」

声が見る方を見ると書類の束からひよっこりと頭を出した。正直びっくりしている。真耶さんはしつかり者なので部屋が汚いなんて思つてもいかなかった。

「じゃあそつち来ます」

書類を踏まないように机の向こう側まで行くと真耶さんが「そこに座ってください」とソファの上に置いてある書類を足の踏み場へと投げてスペースを作ってくれた。

「真耶さんつて掃除苦手なんですね」

「正確にはちよつと違います。嫌いなだけで苦手ではありません。どちらかという得

意な部類です」

「でも嫌いだから部屋は汚くなる一方と」

「あまり口外はできません。そうそう、本音さんにはこれを」

本音に書類の束を渡す。表紙を確認するとさっきの授業のレポート課題だった。

「難しくないのですぐに終わりますよ」

「うえ〜まやあん酷い〜」

「居眠りの罰です。来週の授業までに仕上げてきてください。話は以上です。俊葵さんと私は二人きりでお話がありますので本音さんは退室してください」

「お昼ご飯まっちーと食べたかったのにい〜」

「ほら、本音の分のカツサンド。俺の代わりにシヤルと一緒に食べてやってくれ。それにクロエに課題を手伝ってもらえばいいだろ。あいつ頭良いし」

「まっちー天才!!それじゃ〜〜〜ねえ〜〜〜」

土煙を蹴立てながらダツシユで教室へと帰還する本音の姿はそこにあった。

「これで二人きりですね♡」

「もしかして本音は最初からさつきと返すつもりでしたね」

「ふふ、バレちゃいました。ほんのちよっぴり寂しくなっちゃって誘ってしまいました。」

「…その…迷惑じゃあ…ないですか?」

「全然めいわくじやないですよ」

「では先に俊葵さんの課題を渡しておきますね。簡単な奴なのですぐに終わると思います」

そう言つて本音に渡したプリントとはまた違う書類の束をくれた。内容を確認すると俺があまり参加していない授業の要点をまとめた問題集になっていた。俺の復習用に作つてくれたようだ。

「確かに簡単ですね。これなら週明けには提出できるかも」

「ではよろしく願います。まあ本当のところやらなくても良いのですが一応、俊葵さんの体裁を保つために……ね？」

「授業はサボつて実習しかやってないのはやっぱまずいですか？」

「はい、治外法権とはいえ学習機関なので勉強はしないと。大学卒業程度の能力はあつても使わないとすぐに衰えてしまいます」

人差し指を俺の唇に当て「ちゃんと勉強しないと、めつですよ」と言われてしまった。可愛い。俺に対してめっちゃ甘でも教師なんだなと思う。

「実は他にも俊葵さんに用事があつて……その……」

もじもじしているのだから内容が理解できる。昼休みという短い時間を使つてあんな事やこんな事をしたいのだろう。勿論オレだつてそうしたい。

「なんですか？何でもして良いですよ」

「それじゃあ一つだけ質問がありまして」

「質問？」

俺の予想と大きく違ったお願いが出てきてちよつと驚いた。

「はい、とても大事な質問です。答えてくれますか？」

「まあ、質問くらい答えますけど」

「必ず答えてくれますか？」

真剣な顔で言うので俺も真剣な顔で応える。

「分かりました。可能な限り答えます」

「可能な限りではダメです。簡単な質問なので絶対に答えてください。答えは複数でも構いませんが分からないとは答えないでください」

「はい、分かりました」

『では…』と前置きをしてから神妙な面持ちで口を開いた。

「俊葵さんが一番愛している人を教えてください」

「それは…その質問は卑怯ですよ。それが俺をどれほど傷つける行為か分かっているんですか？」

息が荒くなつて心臓が握りつぶされそうになる。身体が震え寒気がする。目の前に

いる女性に何と答えたら良いかそればかりが頭の中でぐるぐるしている。

「分かっていません。でもはつきりさせたいんです。私は俊葵さんのために死ねます。俊葵さんが愛している人のためにも死ねます。だから私は誰を最優先にすればいいか知っておきたいのです。クラス対抗、臨海学校、もしかしたらこれからも襲撃があるかもしれない。そんな時に俊葵さんと俊葵さんの大事な人を真っ先に守りたいんです!!」

真耶が珍しく大きな声で主張してきた。俺はそんな真耶に対して涙を流すことしかできない。

「なんでそんな事を言うんですか：俺は誰にも嫌われたくないのに：」

「それじゃあ私にも魔法のタトウーを入れてください。そうしたら私は永遠に俊葵さんのモノです。それで良いじゃないですか。不安なら拘束して地下牢に閉じ込めて人形のようにしても良いんですよ？私は俊葵さんを愛しています。俊葵さんを愛する事ができるなら何だってできます。もう嫌なんです！私の愛が不確定なせいで俊葵さんが悲しむのは！」

「もうどうにでもなれ!!俺ができる限り穏便にみんなを愛したかったのに!!真耶の所為だ!!」

真耶の服を引き裂いて胸を露にして右手で爪が食い込んで血が出るほどオツパイを掴む。

「きゃっっー」

5つの傷から流れた血は太い蛇になり右オツパイに巻き付いてからその首を四肢に広げていった。タトウーはヒドラの様に首を分けて身体中を蝕むように噛みついて真つ赤な血で薔薇を咲かせた。身体中を蛇が縛り上げ、さらにその蛇を茨が突き刺し、巻き付き、凌辱している妖艶な刺青が出来る。

「一番強い呪いだからな…俺の事を嫌いになつたら蛇の猛毒による破壊と薔薇の蜜による回復が永久に真耶の身体を蝕むからな」

「とても美しいです。それに嬉しい…ずっとみんなが羨ましかつたんです。これが俊葵さんのモノという証なんです」

「そうだよ。良いか真耶、お前はこれから俺とクロエと束の為に死ぬ。俺が一番愛しているのはクロエと束だ！みんなと天秤にかけた時に俺は間違いなく二人を選択する。それが俺だ!!どうしようもなく俺なんだよ!!チクシヨウ!!」

怒りなのか悲しみなのかよく分からない感情に支配されて真耶を押し倒す。冷たく固い床に叩きつけて馬乗りになってスカートも破る。しかし真耶が苦しそうにうめく姿を見て冷静になった。

「…この刺青は俺とハーレムみんなにしか見えないから…だからプールとか海とか大丈夫…。えっと…勢いでこんなことしちゃったけどスゲエ愛してるから…」

口を突いて出たのは自分を擁護する言葉だった。急に怖くなってどうしたら真耶は腕を掴み静かに首を振った。

俺も何も言わず大きくなつた陰茎を摩耶の火処に挿入した。接合部からは愛液が溢れ出て来たので前戯の必要はなかったようだ。腰を押し付けて摩耶の最深部に侵入する。俺はこの瞬間が大好きで何度味わつても堪らない。チンコだけを温いタオルで包まれているような心地よさが好きだ。

「ん……あつ♡」

ゆっくりと腰を前後しているので真耶の喘ぎもおとなしくて妖艶さがある。そして感じている火陰から流れ出る愛液が陰茎をヌラヌラといやらしく光らせ滑りを良くした。

真耶も離れたくないのか足を俺の腰に回してがっしりホールドしている。それに応えるべく俺も抽挿を繰り返す。ゆっくり、大きい動きで根元まで挿入して亀頭で子宮口を押し上げてやると真耶も腰をそらせて反応してくれた。

「はう……あつ……あつ♡はあ……はあん♡」

わざと喘いでいるのか、それとも自然と喉の奥から出てくるのか。これはどう見ても後者だ。いろんな女と何度も合瀬を繰り返してきたから分かる。

「もっと強くしても……あ……良いんですよ」

「今日はゆつくり楽しみたい…でも…限界…ッ!!」

量のおっぱいを握り腰を思い切りそらしてドチュツと子宮を押しつぶして一気に鈴口から精液を吐き出した。数度の鼓動を経て出し切った俺のチンポはいまだに屹立している。

「やつぱゆつくりだとマンコの中をじつくり感じるから我慢できない…はあ…はあ…ただできる」

「ん…それでは抜かずに…あつ…この、まま…お願いします♡」

愛液と精液が混ざったドロドロの液体をローション代わりに激しいピストンを繰り返す。白く細かい泡が接合部から流れ出る。本来の子作りなら一度の射精で止めてしかるべきだろう。しかしこれは子作りのための性交ではなくて互いの欲望をぶつけ合う交尾なのだ。

「はあっくく♡奥…おまんこ…く、クリトリスも♡ああん♡」

一度出しているので次の射精まで時間はある…と思っていたのは全くの計算違い。射精直後で敏感になっている亀頭に真耶の子宮口が鳥の雛がえさをねだるように何度もちゅちゅつとキスをしているのでくすぐったくて気持ち良い。

「私の子宮が俊葵さんの精液を欲しがって降りて来たのを感じます♡おちんぼがびくびくしてますね…もう出ますか？」

「バカ野郎…そう、簡単に…：…イってたまるか…」

我慢しながら真耶を絶頂に導くためにピストンを継続する。

「我慢はツ…はあ…し、しなくても良いんです…よ？ 俊葵さんが気持ち良くなることが一番なんですからあ♡」

余裕ぶつてはいるが真耶も限界が近いのが分かる。おまんこの締め付けがさつきよりもきつくなってきた。そのせいで俺も我慢が…。

「好きです♡ 俊葵さんのおチンポセックスもっ…はあん♡ 激しい…ですう♡ もつとじゅぼじゅぼとオマンコを突き崩してっ♡ 壊してください♡」

「もうどうにでもなれ!!」

ラストスパートと言わんばかりに腰を振りバチツバチツと肌がぶつかり合う音を部屋に響かせる。胸から手を放して真耶の手を握ってやる。そうすると真耶は自分から手を広げ、俺と密着してキスをしてきた。

「んちゅ…ちゅる、ちゅ、ちゅ♡」

最初は軽く唇と触れ合わせては離してを繰り返す軽いキス。艶やかでプリッと肉厚な唇が俺の唇に触れて離れる感覚が脳みそをかき回す。腹ペコな時に軽く何かを摘まんでしまつて食欲を刺激されたときに似ている。

「んう…じゅ、じゅる、ちゅ…♡ ぷはあ♡ 俊葵さあん…はげしいですう♡ んっ!? え

ろ、れろ、ちゆる♡れえろれえろん♡んっんっ…んう、ぴちや、ぴちや♡」

無理やり舌をねじ込んで真耶の舌に絡ませる。もう真耶を気持ち良くしたいなんてどうでも良い。これは俺が気持ち良くなりたいたいからやっていることだ。否定も弁解もしない。

「ぶはあっ!だ、大丈夫だから!!俺、摩耶の事も絶対愛してるからさ!!」

「私も愛しています。誰が何と言おうと愛しています!!」

「離さねえからな。今生も、来世も、魂魄百万回生まれ変わってもずっとずっと一緒だから!!もうみんな一緒だから!!」

何故か目から涙が止め処なく溢れる。真耶だけを愛しているとさえない自分が悲しくて、悔しくて堪らない。それを察した真耶も俺の背中に手を回して思い切り爪を立てて密着する。

「私は俊葵さんが大好きです♡でも私だけを好きな俊葵さんは嫌です…みんなを好きだという俊葵さんだからあ♡はあ…はあ…優しい俊葵さんだから好きなんです♡好きな人が幸せなのが一番なんです」

「好きっ!!もう訳分かんないよ!!でもめっちゃ好き!!それだけは確かなんだあああああああ!!」

「来る♡来る♡来たあ♡膾内に出ています…ああん。あんっ、あんっ、ピストン続けてえ

♡射精しながらおかしれくらはい♡しゅごい…これは絶対にさっきのよりも濃ゆういですよ。あちゆくてドロドロとした固形物がしきゅーこーをねじ開けて卵管ごと私の全てを犯していりゆのがああああああ♡」

絶叫と共に俺は摩耶の中に射精した。真耶を引きはがし抜き取ると喉の奥に無理やり射精中のチンポを突っ込んで精液を飲ませる。真耶がごくりとのどを鳴らすたびに俺のチンポも射精する。

「んぶっ!!」

あまりの射精に真耶は咽て鼻から黄色がかったくっさいザーメンを噴出してしまった。しかし俺はがっちりと頭を掴んで喉奥に射精を続ける。

「んぐ…んぐう…んう♡じゆるるるる♡ちゅ、ちゅ、ちゅうくくえう♡」

「最後の射精だ…まだ飲むなよ…」

「ちゅぼん♡ふあい…♡」

名残惜しそうにする真耶の口からチンポを引き抜いて床に精液をまき散らす。

「もっはいらいれふう」

「もう飲んで良いぞ」

「んく…んく…おいひいれふ♡ああ…あん…ああ♡ひもひいれふう…あへえ♡」

口を開けたまま俺に見せつける様にドロドロの精液を飲み込んだ真耶はそのままア

へ顔で失禁した。俺はそんな真耶の前髪を掴んで精液で汚れている地面に顔を擦り付け足で踏みつける。

「掃除しろ。俺の精液がこぼれているだろう？舌と唇を使って綺麗に舐めとるんだ」

「ふあい♡ずぞぞぞぞぞぞ!!えろん、レロレロ♡んく:うくく♡の・う・こ・う♡」

地面に這いつくばり俺の精液を舐める真耶に興奮したのか俺の陰茎に血液が集まり大きくなる。俺は摩耶の後ろに回り腰を掴む。痛いくらいに屹立しているチンポをほぐしていないアナルに挿入しようとした瞬間、パンと扉が開かれて鬼が入って来た。

「昼休みはとつくの昔に終わったぞ!!いつまで獣の様に交尾している!!さっさと服を着て授業に出ろ!!」

反論の余地もなく俺も摩耶もフラフラと腰に力が入らないまま身体を拭いて服を着る。破いてしまった服もちゃんと復元したので次の授業を摩耶は裸でやる必要はない。

「山田君は先に行つて良し。俊葵は説教だッ!」

「いや…俺も授業に出ないと…:…なんて」

「黙つて私の部屋に行くぞ…」

ドスの効いた声に俺は反論の余地もなく千冬さんに連れられるまま隣の部屋に入った。これから説教が始まると身構えながらびくびくしていたら扉が閉まると同時に貪るようなキスと愛撫が飛んできた。

「私にも同じことをしろ♡もうこんなに濡れているんだ♡」

俺の目の前に四つん這いになりスカートをたくし上げてノーパンの股を広げてぐちよぐちよになっているオマンコを見せつけて来た。これじゃあ午後からの授業は交欠だな。公の字じゃないかって？交欠は交尾で欠席って意味だよ（直球

9 8 話

久しぶりの休日は清々しい晴れ。まさにお出かけ日和で気分も良い。気温は夏ほど暑くなく冬ほど寒くない、しかし秋と言うにはまだ夏の暑さが残る不思議な感じ。

昨日、ラウラと約束した喫茶店デートを敢行するには全くもって丁度良い日だと思う。おそらくラウラはこれを見越して今日という日を選択したのかもしれない。

「まずはどこの店に行く?」

下調べはラウラが済ませている様子でスマホの地図を頼りに喫茶店へ向かっている。休日と言うのもあつて人が多いので迷わないように手をつなぎながら。

しかしまあ…どいつもこいつも恋人と言うのは人前でよくもまああんなにデレデレできるもんだ。それに比べて俺たちは清く、優しく、心地良くの三拍子揃った最高のカップルと言えるだろう。

どうせちよつとした浮気で別れてしまうようなカップルと俺たちはわけが違う。永遠の愛を誓い合った最高にして最強のカップルだ。

「俊葵、どうかしたのか？ さっきから周りを気にして」

「いや、ちよつちね。カップルだからだけだから俺たちってどう見られているのかなって」

「それはもちろん健全な男女に見えているだろうな。年相応で背伸びをしている高校生のアベックに見えている」

アベックで…死語だぞそれ。

そう言うラウラは俺がプレゼントした服に身を包んでいる。ラウラは機能性や実践向けなものを好むと思つて動きやすくして武器を隠すためのポケットが多い七分丈のズボンとちよつと大きめのシャツをプレゼントした。可愛い（語彙力）

「俺はおっさんに見えてるかもしれないけどね」

ラウラとのデートは久しぶりなのでかなり気合を入れた格好をした結果、俺はロングコートの下はシックな服と言う「人気はそこそただけど品格があつて一定以上の指名はとれる重鎮ホスト」の様な格好になってしまった。早い話がザ・殺し屋ルックつてことだ。眼帯も手助けして、懐に手を入れたらすぐにでも銃を取り出しそんな人相をしている。まあ、銃なら身体中に隠してあるけど。

「すごく似合っているぞ、うん。大人の男の雰囲気は良く出ている」

「そうかなあゝでへへ。褒められて悪い気はしないなあゝ」

「自分の彼氏に嫌な気持ちさせせる女もいまい／＼／着いたぞ、ここだ」

照れ隠しに話を中断したかったのか、それとも本当に着いたのか一軒の喫茶店の前で止まる。俺も知っているような有名チェーン店で何度か来たことがある。

「私一人ではこういった店に入るのは苦手だからな。俊葵が付いて来てくれて本当に助かる」

「ラウラお嬢様とならどこへなりとも」

俺が付いているけれど本当に苦手なのかなかなか入ろうとしないので、俺が先に自動ドアをくぐって店内へ入った。店内にはコーヒーと焼き立てのパンの香りが充満している。

「注文はこちらでどうぞ」

受付の人に促されるままにレジへ向かう。ラウラも俺に付いてくるけど店内をきよろきよろしている。狙撃や襲撃の心配をしているわけじゃあなくて初めて来た店にワクワクしているようで可愛い。

「ご注文は」

「スウィートポテトラテのショート、キャラメルマキアートのショートでキャラメルとホイップマシマシで」

「畏まりました」

「それからBLTにトッピングでトマト大盛、あと秋限定のパンプキンケーキを一つ。

以上で」

「畏まりました。お連れ様のご注文は」

少しだけ考えるそぶりを見せてすぐに注文を始めた。下調べをしたメニューがあるのか確認したのかもしれない。

「ずんだ抹茶ラテとスウィートポテトにホイップクリームをトッピングしたものを頼む」

「畏まりました。ではこの番号札をもって席でお待ちください。商品をお持ちいたします」

席に着いた俺たちは周りからじろじろ見られている。銀髪で美人の隻眼と黒髪で火傷跡のある隻眼が揃って座っていたら注目もされるだろう。

「いけ好かないな」

「注目されるのは苦手か？」

「視線が多いとどれが敵視か分からなくなる」

「そうか？俺は敏感だからな、人の視線とかに。もともと敏感だったし強化された俺ならなおさらだよ。集中していて視界内なら敵意を感じできるよ」

「どうやるんだ？野生動物でもそんなに敏感じゃあないぞ」

「肌がピリピリするんだよね。感覚的にだけど。だから今は大丈夫。興味とか、異質な

物を見る気持ちの悪い感覚ばかりだから」

「それは私も感じていた。まったく……こいつらは自分の事しか考えていないのか」

「それに関しては何も言えないな。俺は世界一わがままな男だからな」

「違うない」

ちよつとは否定してくれても良いのに……悲しみ。

「お待たせしました。こちら、商品になります」

目の前に置かれるドリンクとケーキ、この季節感のある香りがとても好きだ。このくらしいのケーキなら自分で焼けるけどこういった店の雰囲気を楽しみながら食べるのも悪くない。

「これくらいなら自分で焼けるし仕入れなくても模擬店に出せそうだな」

「このドリンクはどうする？ さすがにこれは出せないぞ」

「これを出さなくていいだろ。あくまで参考にするだけだから抹茶ラテとか自分たちで出来る範囲でやろう」

「それもそうだな。ではいただく。美味しそうだ」

……

……

軽食を終えて店の外に出る。秋の雰囲気味わったが、外に出ると残暑が身体を包み

込んだのでまだまだ夏の気分を味わう。

「まだ暑いな……」

そう言つて上着を一枚脱ぐラウラを俺は凝視する。こうした動作の一つ一つに色気を感じる。厚着をした女性が上着を脱ぐ瞬間つて色気を感じる、感じない？

「そうじろじろ見るな」

「バレた」

「視線には敏感な方なんだ」

「視線じゃなくて邪な感情だろ」

「違うない」

押し殺したような笑い顔もまた可愛い。ラウラは自覚していないだろうけれど滅茶苦茶可愛い。凜とした佇まい、流れるような白銀の長髪、綺麗な瞳、小さな体躯だけでも鍛えられたバランスの良い筋肉、どれをとつても素晴らしい。誰が見ても美少女なラウラに隣を歩かせて腕を組むというのは男として優越感に浸れる。勿論それだけのためにはラウラを好きなわけじゃあない。

「次の店はどこ？」

「次はココだな」

「随分とまあチャラチャラした店なこと」

「ネットで調べたら今時の女子高生はタピオカが好きだと分かった。初めて聞く食べ物だから個人的にも気になっていた。それに人気な物なら模擬店に取り入れたい」

「タピオカって芋の粉を練ってゆでて作った小さな餅みたいなお菓子だよ。それを色んなドリンクに入れて飲むんだけど、俺はまあ……好きかな」

もちもちとした触感を気に入っている。ただ専用の太いストローじゃないと飲みにくいのがマイナスポイント。それを除けば嫌いな要素は見当たらない。

「そうか、それなら楽しみだ。入るぞ」

意を決して俺の手を握り店内に入る。女子高生やきゃびきゃびした女子が『可愛い、可愛い』と騒がしい。別にお前らは可愛くねえよと心の中で思いながら口には出さずここその笑顔で列に並ぶ。俺の隣でラウラは慣れない空間に格闘しつつ自分たちの番が来るのをおとなしく待っていた。

「いらつしやいませ、こちらがメニューになります」

期間限定メニューが目立つように作り直されたであろうメニューを見るとかなり数が多い。ミルクティー以外もたくさん種類がある。

「タピオカミルクティーのMサイズを一つ」

「畏まりました」

ラウラは最初からそれを注文するつもりだったのかメニューを一瞥するとすぐに注

文した。注文あるあるだと思っけどコレを頼もうとレジに行つてメニューを見たらもつと美味しそうなものがあつてしばらく悩むヤツが今発動した。

しかし店員や後ろに並んでいる奴らならいざ知らずラウラを待たせるのは宜しくない。なぜならまだ他にも行かなければいけない店があるからだ。

「ココア、キャラメルマキアート、紫芋ラテ、抹茶ラテ、ミルク、全部黒糖タピオカで」
「畏まりました。少々お待ちください。合計で3250円になります」

「カードで」

「いや、ここは私が払おう。私の都合で付き合せているんだ」

「俺の方が多く注文したし俺が払う」

「いや、譲れないな。ここは私に払わせてもらおうか」

言い合いを続けても良いけど、偶には花を持たせてやるもの彼氏の役割なのかもしれない。ラウラに気持ち良く俺とのデートをしてほしい気持ちから頑固にならずおとなしく引き下がる。

「それじゃあ頼むわ」

会計を済ませ待つこと数分、専用のスタンドに立てられたドリンクを受け取つて店を出る。一杯500円弱が高いのか安いのかよく分からない。普段買わない物の値段はどのくらいが安くて高いのとか分からん。でも全く損した気分にならないのだから

きつと安いんだろう。

数が多いので少し待たされたが一口含むと待たされたというマイナスな感情は消えた。ドリンクの味はもとよりタピオカも胆力があつて少し甘めで美味しい。

「うん、けっこう美味しいな」

「タピオカにも味がついていて美味しいと思うぞ」

「これは模擬店で出したいな」

「ああ、私も賛成だ。これは良いな……ちゅ……！ 気に入った」

数分と待たずに飲み終わったラウラは追加のミルクティーを買って店を出た。

……

…

その後はクレープやファストフードなど模擬店、もといメイド喫茶で販売したら売れそうなもの巡りをした。そして最後に訪れた店はなんとメイド喫茶。今度はメニューではなく接客を学ぶらしい。何事にもまっすぐで真面目なラウラらしい。

俺たちは意を決してメイド喫茶の扉を開いた。

「おかえりなさいませ、ご主人様♪」

俺は普段からクローエにご主人様のような扱いを受けているので別に緊張はない。しかし隣のラウラはなんと返答して良いのか分からずに硬直している。可愛い（小並感）

「こちらへどうぞ」

メイドに案内されるままに席へ着いた。入口から席に座るまでラウラはずつと俺のシャツの裾をつまんだままだった。可愛い（確信）

「ご注文がお決まりになりましたらこちらのボタンでお呼びください♪」

そういつて彼女は別なご主人様の元へ行った。

「な、なんだこの空間は…さつきまでの喫茶店とは段違いの凄さだ。なんと表現したら良いのか分からないがとにかく凄い。今までに体験したことがない空気だ」

「緊張する必要なんてないよ。普通の喫茶店やレストランと同じような物なんだから」

テーブルの端にあるメニューをとってラウラに見せる。

「ほら、早く頼んじやお」

「世界樹の雫に黄金の卵？これはいったいどういう事だ？」

「下に野菜ジュースとオムライスって書いてあるよ」

「何故こんな分かりづらい表記をする必要がある？これでは客に不親切ではないか」

「これがココの売りなんだよ。メイドとご主人様っていう非日常を演出するのがメイド喫茶なの。ほら、普段は主従関係なんてないでしょ？」

「……そうか？」

「ああ…そうだね…ラウラは軍人だし、そうでなくとも俺とオンナとの関係は主従関係

「みたいなもんだったね」

「こいつあとんだ盲点だった。俺やラウラがメイド喫茶に来たって普段とあまり変わらない。日常の延長戦になってしまっただけだ。」

「確かにそうだがコレは新鮮だと思うぞ。部下とも友達とも違う形で人と親しげに接するのは新しい経験だ」

「そういうのラウラは苦手だと思っていた」

「正直なことを言うと言苦手だ。しかし苦手だからと遠ざけてはいいつまでも苦手なままだ。虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うしこれも良い経験だろう」

「俺なんかよりもずっと大人なラウラが輝いて見える。俺もこんな風に何事にも挑戦を忘れない向上心を持つ人間になりたい。」

「そうだな、何事も経験だよな。で、ラウラはどれにするか決めたか？」

「ああ、すでに決めた。俊葵も決まったか？」

「もちろんと返し店員…ではなくメイドを呼びつけた。」

「お待たせしました。ご主…人様？」

「あれ？シャルじゃん。何でこんなところに居んの？」

「ひ、人違いです」

「嘘つけ。その右手の刺青は確かに俺が掘ったやつだ。他の人に見えていないからこゝ

でバイトできてるんだろ」

逃げ出さないように腕を掴んで無理やり俺とラウラの間に座らせる。

「シャルロット、まさかこんな趣味があったとは…同室でありながら気づかなかった」

「僕にだって女の子みたいな服を着る権利くらいあるだろう？…うう…俊葵には一番バレたくなかったのに」

なんて言ってるが普段から太もも丸出しのミニスカを履いてるじゃんとは言えない。言ったらシャルルを傷つけてしまいそうだった。

「別に良いじゃん。似合ってるし可愛いぞ」

「ふ、ふん！ほめたって何も出なから／＼／＼」

「赤くなつて言われても説得力無いんだけど」

「ツ／＼／」

結局、手を振りほどいてバックヤードに逃げてしまった。そのまま俺たちの前に姿を現すことはなかった。可愛かったのに…。

その後は数件のカフェをめぐり適当なメニューを頼んで文化祭の参考になるか食べ歩きをつづけた。

…

…

学園に戻るとラウラは本格的なメニューの選定をするために部屋にこもってしまった。俺はというと特にやる事がないので地下室へ戻ることにした。

「おかえりなさいませ俊葵様。本日は楽しめましたようで僥倖でございます」

「俺が楽しんだと言える根拠は何だ？今の俺は十分に楽しめていない」

「ではこれから私が持てる全てを使い俊葵様を楽しませたいと…」

「当たり前だ。そのために俺はお前を愛しているんだから」

『ああ…』と恍惚の表情を浮かべながら股から愛液をダラダラとだらしないクロエへお仕置きを慣行する。

「行儀の悪い股座だな」

「俊葵様に愛を囁かれたらどんな女性もこうなります」

なるわけねえだろ（呆れ

「ああ…ああ…なんと素晴らしい。俊葵様に愛を囁かれた上にお仕置きまで…ああえ」

白目をむいて倒れ込み潮を吹いてしまった。ここ数日かまってやれなかったのが響いているようだ。

「仕様がなない奴…」

あらゆる体液でべちやべちやになったクロエを抱き抱えて風呂場へ直行した。まず

はこの汚れちまった身体を洗わないことには何も始まらない。

風呂場に入ると束が先に入浴中だった。

「悪い、クロエを洗おうと思っただけで出直すよ」

「ええ〜入っていきなよう♡俊君ならいつだって大歓迎だよ♡」

クロエを湯船に投げ込んで俺は束に背中を流させた。

「こうした裸の付き合いは何日ぶりだっけ？」

「4日ぶりだよ。最近の俊君はまややんとかちーちゃんとかぼっかりと遊んでるんだもん」

「そっか…寂しい思いをさせてごめん」

「ええ〜何で謝るの？謝る必要なんてないんだよ」

「いや…でも俺の身勝手に放っておいたのは間違いないし」

「ライオンがシマウマを食べて謝る？人間が空気を吸って謝る？俊君が行う全ての行為は肯定されるべきなの。ねえ…束さんが必要じゃなくなったら捨てても良いんだよ」

「そんなことしない!!束は…束も俺にとつて必要な…す、好きな人…だから／＼」

「俊君は優しいね。私も俊君のことが好き。これまでも、これからもずっと好き。今日は…今夜だけで良いから二人きりになりたいかな。ほら、俊君はモテモテでいつも女の子に囲まれているからなかなか二人きりになれないしさ」

愛する人をこんなに孤独にするなんて俺は恋人失格だ。そもそも束だけの話じゃあない。俺はいつたいたいどれだけの女の子に寂しい思いをさせている。

「今日だけなんて言うなよ…俺は束が望むなら」

「それはだめ…だって俊君は私が独り占めできるほど小さくないもん。俊君は誰よりも大きくて誰よりも強いんだから。私ひとりじゃあ身が持たないよ…それにその黒人並みのおちんぽで貫かれたら腰が立たなくなっちゃう」

「黒人並み？」

「うん、黒人並み」

「そりゃあ…よう…俺が人類と同じ程度って事かよ」

「え？あ、違うの」

何かを察した束はあれやこれやと言葉を濁したり俺をなだめようとしてはいるが俺の耳には入ってこない。

「俺が一番嫌いなことは他者を思いやることができない奴等だ。二番目に嫌いなのはキノコで三番目が腐れ人類と同等に扱われることだ。俺は人類よりも秀でた存在だ。人類を支配すべき階級の生物だ。それなのになんで人類に例えられなきやあいけない」

「ごめん…」

「何で謝るんだ？」

「だって俊君に嫌な思いをさせたから…」

許してやっても良いけれどそれじゃあなんだかつまらない。

「痛みを伴わない謝罪は意味がない。だから今夜は激しくいくぞ」
そう言って俺は束を拷問部屋へ連れて行った。